

インフィニット・ジェネレーション

ハルン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二回モンドグロッツで誘拐された一夏の目の前で突如空間が歪み出し、気が付いたら大きな格納庫にいた。

一夏が目を覚ました世界にISは無く、その代りにMS（モビルスーツ）という機動兵器が存在する世界だった。

これは本来、交わることのない二つの物語が交わった話である。

*文章力が低い作者ですが楽しく読んでもらえると幸いです。

目次

プロローグ

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

設定

IS編

1話

2話

3話

4話

5話

6話

7話

8話

9話

10話

11話

12話

13話

1

8

16

24

32

43

51

60

71

75

79

85

92

97

104

112

120

129

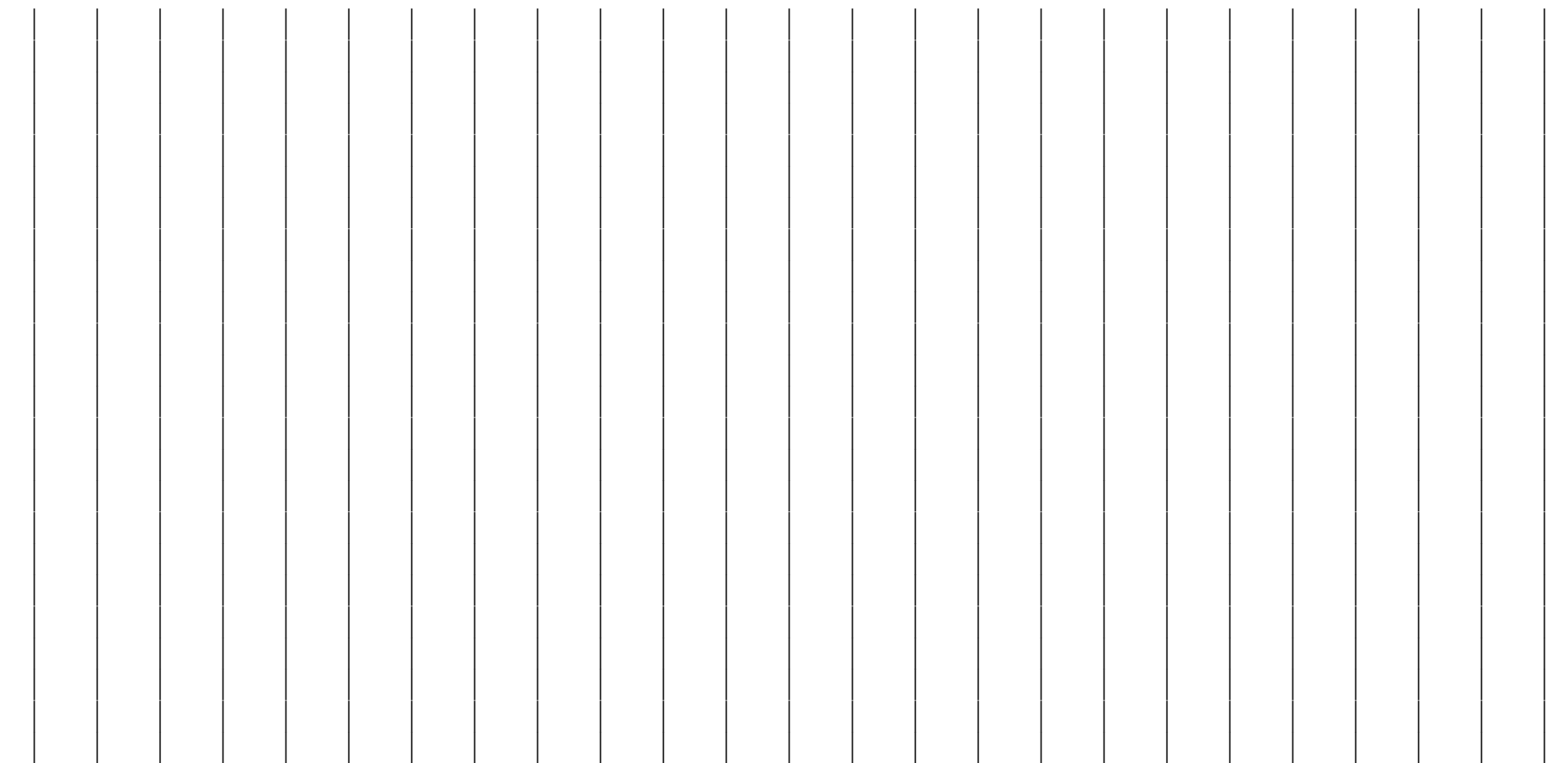
139

147

152

158

3 3 3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1
8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4
話 話



440 422 408 391 378 364 353 346 335 329 322 312 301 296 282 271 265 246 229 224 204 186 175 169 162

4
3
話

4
2
話

4
1
話

4
0
話

3
9
話

567 536 508 486 459

プロローグ

第1話

女性にしか扱えない世界最強のワードスーツ「インフィニット・ストラトス」通称IS

ISが世界に広まり劇的に世界は変わっていった。

今までの戦車や戦闘機等の兵器は一気に旧式化して男女の地位が逆転、女尊男卑が当たり前になった。

そんな世界に一人の少年がいた。その少年の名は織斑一夏。

一夏は人よりは運動が出来るが自分の姉に比べれば低いが彼は誰よりも努力をして決して何事も諦めない強い心の持ち主だった。

そして彼には自慢の姉がいた。その姉の名は織斑千冬は第一回ISによる世界大会《モンド・グロツソ》の総合優勝及び格闘部門においての優勝者である。

ブリュンヒルデと呼ばれた彼女は一夏にとって憧れだった。

そんな姉に一步でも近づいたため彼は人一倍努力してきた。だがそれは世間からは認めてもらえなかった。

テストで悪い点を取れば『なんであんな出来が悪いのかしら』『織斑千冬の恥さらし』と言われテストでいい点を取っても『織斑千冬の弟なのだから当然』と言われその努力を認めてもらえなかった。

だが彼の心は決して折れることはなかった。何故なら”自分には千冬姉がいる”、千冬姉は俺を見てくれる”、千冬姉は俺を見捨てたりなんかしない”、と少年は心に言い聞かせることで己の心を守ってきた。

第二回モンドグロツソに出場した千冬を観客席から応援し、千冬は順調に勝ち進み決勝戦まで進み後一步で優勝という所まで来ていた。

だが、決勝戦開始前に一夏は突如現れた黒服の男達によって連れ去

れていた。

連れ去られた一夏は手足を縄で拘束させられ身動きが取れないでいた。

黒服の男達は一夏の誘拐が成功したことにより、自分達の依頼である、織斑千冬の優勝阻止という、依頼はたった一人の肉親である一夏を誘拐したことにより成功したも同然だった。

男達は嬉々とした表情でお互いに成功を祝福していたが、それは一人の男によって打ち砕かれる。

「おいッ！コレを見ろよ！」

「良い所に来た！お前も来いよ！これから一杯飲みあおうぜ！」

「イイからこれを見ろ!!」

男達は言われた通り男の手にあつた小型のテレビを見る。

そこに映っていたのは決勝戦に出場し、戦っている千冬の姿だった。

「オイオイ、マジかよ...」

「おいッ！ちゃんと伝えたんだよな！」

「ああ、弟を誘拐したことは伝えてある... まさか弟より名誉を選んだのか」

「そ、そんな。千冬姉が俺を見捨てた...」

「こうなったらコイツを殺して逃g... なんだこれはッ!!」

一人の男が懐から拳銃を取り出し、構えようとした瞬間、突如目の前の空間が歪み始める。

「な、なんだ... これ」

「空間が歪むなんてあり得ねえ...」

「ここから逃げよう... 早く！早く!!」

男達は逃げることに賛同すると我先にと逃げ始める。

「待ってくれ！俺も助けてくれ!!頼む!!」

「知るかよ！逃げるなら自分の力で逃げるんだな!!」

身動きが取れない一夏は自分を誘拐した男達に救いを求めるが、男はそれを払いのけその場から去っていった。

空間の歪みは次第に大きくなり、一夏を呑み込み始める。

「う、うああああ!!」

宇宙を移動する一隻の白い戦艦ネエル・アーガマのブリッジで複数の男女が談話していた。

「それにしても最近何も起きないね」

「確かに暇だな。このままだと腕が鈍っちまいそうだ」

「だが、何も起きないという事は世界が平和だという事だ。戦いがしたいのなら傭兵にでもなればよい」

短い金髪の整った顔立ちをした少女『エリス・クロード』は言うと同調する迷彩柄のバンドナを巻いた青年『ラナロウ・シエイド』に対し傭兵になることを勧める『マーク・ギルダー』だが、艦内に警報が鳴る。

通信担当の『ラ・ミラ・ルナ』今起きたことを艦内に通信を送る。

『艦内に通達！艦内に異常なエネルギーを確認!!総員は直ちにMS格納庫に行き確認を。繰り返す——』

「え、なに?!」

「分からん！取り敢えず格納庫に向かうぞ！」

「了解！」

マーク達がMS格納庫に向かうと先に来ていた褐色肌の少女『レイチエル・ラムサス』と長い銀髪の女性『エターナ・フレイル』がおり、マーク達が来てから格納庫に艦内放送が響く。

『エネルギーが収束しています！気をつけてください!!』

「な、なによあれ…」

「私も…分からない」

「取り敢えず警戒は怠らないようにしましょ」

「急に光が…」

格納庫が歪み始めてから少しすると歪みが大きくなり、眩い光が出る始め、マーク達は余りの眩しさに直視出来ずにいたが光が次第に収まり始め、完全に収まると其処には一人の少年が横たわっていた。

「見て子供が倒れているわ」

「あんな子・・・いた？」

「疑問は後にして取り敢えず、行ってみるか」

「ああ、ここに居てはなにも始まらないからな」

マーク達は少年の元に行くと言ったと身体に異常はないか、息をしているか、心臓が動いているか確認する。

「・・・うん。心臓も動いてる、呼吸もしている。命の別状はないけど、医務室に連れて精密な検査をして貰おう」

「決まったら善は急げってな！」

確認したエリスは医務室に連れて行くことを提案するとラナロウは少年を肩で担ぐと言ったと医務室まで連れて行った。

目が覚めた一夏が目にしたのは絶え間なくな鳴る機械音と点滴と知らない天井であった。

「ミーちゃん！気が付いたよ！」

「・・・ミーちゃん言うの止めて・・・マーク達呼んでくるね」

ピンク色の髪をした少女が一夏が目覚めたことに気が付くと茶髪のサイドアップの少女が部屋から出て行くのが確認できた。

「・・・ここ、ここは・・・どこだ・・・痛ッ！」

一夏は身体を起こそうとすると身体全体からとてつもない痛みが襲い横になっていたベットに倒れる。

「無理しちゃ、駄目だよ。今、ミーちゃんがマーク達を呼んでるからジツとして」

「いや、大丈夫「怪我人は無理をするな」だ、誰！」

一夏は声が出た方を向くとそこにはマークを先頭にエリス、ラナロウ達そして先程出ていった、『シス・ミットヴィル』がいた。

「自己紹介がまだだったな。私の名はマーク・ギルダー。フェニツク

スガンダムのパイロットをしている」

「私はエリス・クロード。大体フェニックス・ゼロに搭乗するね」

「…… シス…… シス・ミットヴィル」

「駄目だよミーちゃん。ちゃんと自己紹介しなちや。私はカチユア、カチユア・リースだよー」

「俺はラナロウ・シエイド。お前、名前は？」

「…… 一夏です」

一夏は何処か分からない場所で知らない人がいる現状に警戒していた。

「そう、警戒するな。俺達はお前を取って食おうってわけじゃない。どうしてMSの格納庫に居たのか、あの空間の歪みがなんなのか知りたいだけなんだ」

激戦を潜り抜けてきた老兵をイメージさせる男『ゼノン・デーゲル』が一夏に敵意は無いと言い一夏は警戒を弱める。

「此方から質問する。答えるか答えないか警戒し、黙秘をしても構わない」

ゼノンは一夏にそういうと質問始める。

「二つ目お前は何所の出身だ？二つ目お前の名は？三つ目歳はいくつだ？四つ目何故手足を拘束されていた？五つ目あの空間の歪みはなんだ？」

他にも聞きたいことがあるが今、一夏について知る必要があるがあるのだ。

ゼノンが質問してから少しの間沈黙が続くがそれはすぐ破られる。

「俺は…… 日本出身です」

「おっ」

一夏の返答は彼らにとつては大きな進展だった。

「日本というと君は地球出身か？」

「…… ハイ。俺は日本で生まれ、…… 世界最強のIS乗りブリュンヒルデの織斑千冬の弟です」

一つ目の問に関する答えだが、マーク達は一夏の返答に疑問があった。

「ISといったな、それは新しいMSかMAの名称か？」

「もびるすーっ？もびるあーま？なんですかそれは？」

両者の間に沈黙が流れる。

「お互いに知っている情報を共有しよう。まずはそれからだ」

「わかりました」

一夏は自分が覚えている限りの事を話した。

家族の事、篠ノ之束がISを作った事、白騎士事件の事、自分が何故手足を拘束されていたのか、出来る限り話した。

同じようにマーク達は自分の知っていることを話した。

「成程、大体理解した。ISがどういう物なのか分かったし、それによって世界女尊男卑になったのも分かった。だが俺達の知っている限りそんな事は起きていない」

「私の予想が正しければ一夏君。君は異世界、パラレルワールドから来た可能性がある」

「え？」

「私達はMSは知れどISなどという物は知らない。それに君の姉織斑千冬という人物も知らない。記憶の食い違いかと思ったが恐らくそれはないだろう。そして私達は君を元居た世界に帰す術を知らない」

一夏に言いようのない絶望感が襲う。

生まれた世界では罵られ、織斑千冬の決勝辞退の為に人質され、自分の姉に見捨てられ気が付けば知らない所に居てそして帰る術が無い、抗えない絶望を感じていた一夏の目の前に一つの手が差し延ばされていた。

「こういうのもなんだけど、君はここに来てよかったと思うよ」

「え？」

「もし、君がそのままだったら死んでいたかもしれない。もし助かったとしても君に対する環境は変わらず、悪くなるかもしれない。ならここで新たな人生を始めてもいいとも思うんだ。だから私達の仲間にならない？」

手を差し伸べたエリは笑顔で微笑み、一夏の中で何かが変わった気

がした。

「そうだね。私は良いと思うよ、ミーちゃんはどうかなの？」

「… だからミーちゃん言うのやめて… 私もそれでいい」

「俺も賛成だ」

「私は構わない」

「そうだな。俺もこういう奴を見捨てておけないし、仲間にするんなら大歓迎だ」

「皆さん…」

「だがこれは君の人生であり、どうするかは君が決めるといい。私達はその意見を尊重するだけだ」

一夏は今まで感じたことない程嬉しかった。

今までは織斑千冬のオプシヨンとしか見てくれず、自分を一人の間人として見てくれ人物は手で数える位しかいなかった。

一夏はその差し伸べられた手を握ると笑顔で言った。

「ハイ。よろしくお願いします。皆さん」

第2話

一夏がGジエネの世界に来てから半年が過ぎた。

マーク達の仲間になってから一夏にとっては新しいことばかりだった。

この世界では複数の世界が存在していることだ。

例を挙げるならば初代ガンダムの世界やSEEDの世界など全く異なる歴史や文化そして技術が存在する。

これは一夏にとって斬新であり、魅力的だったが一夏はどの世界に行っても思うことが在った。

至極簡単に誰しも一度は思うであろうそれは『何故、人は争いをするのだろうか』だった。

何故、そんなにも人は互いを否定し、傷つけ、殺し合おうのか。そんなことをすればまた、新たな憎しみと悲しみを生み出すだけなの何故、そこまでして戦いたがるのか子供の一夏には理解できなかった。

けど、自分からは何もしなかった。

もし、やれたとしても子供の一夏に出来るのは精々、避難誘導とアーガマの手伝い位しかない、だから仕方ないと思っていた。

だが、そんな一夏を変える出来事が在った。

とある世界で一夏は外出中に偶然、戦闘に出くわしてしまうが何時ものように市民の避難誘導をしていたが、この時は何時もと違った。

一人の少女がその場で立ち止まり泣いていたのだ。

それほど珍しくは無い、少女の近くではMS同士の戦闘が行われている。

一夏はその危険だと判断し、少女の下に向かい助けようとした。

だが、付近で行われていたMSの戦闘で一機のMSがコクピットをやられ、制御を失ったMSはそのままビルに倒れこみ、その時に崩れたビルの破片が少女に向かって飛来する。

一夏は大声で叫ぶが戦闘による騒音のせいかそれとも泣いているからか気づきでない。

大声で叫びながら走るイチカにようやく気づいた少女だがその数

瞬後、飛来した瓦礫の下敷きになる。

助けることが出来ず、その場に跪く一夏に友達や家族の名前を叫ぶ少女の声が頭に響いた気がした。

その日一夏は何も出来なかった自分と決別するため「織斑一夏」という名捨て、「イチカ・ギルオード」と名乗るようにした。

イチカはもう二度とあんな出来事が起きないようにマーク達にM Sの操縦を教えて貰っている。

訓練は厳しく、何度か折れそうになったがああの時の出来事と自らの決意を思い出すことで過酷な訓練を耐えることが出来た。

イチカに最初に与えられた機体はZガンダムだった。

イチカはZガンダムを与えられてからは自ら、進んで戦場に出るようになった。

戦場で戦うようになってからイチカは時折、遺言のような人の声が頭に響くようになった。

イチカはこの事をマーク達に話すと少し驚いた表情をするとその現象について話してくれた。

『ニュータイプ』

それはジオン・ズム・ダイクンが提唱した概念の一つで宇宙という広大な生活圏を手に入れた人類は洞察力、認識能力が拡大し、肉体的、精神的にあらゆる物事を理解することができ、それが全人類に広がった時にかつてなしえなかった相互理解が可能となるという物で自分やエリスもまたニュータイプだという事を明かした。

子供のイチカには完全ではないがなんとなくだがその意味を捉えることが出来た。

それから時は流れ、そして世界に異変が起きる。

突如、マーク達に「アプロディア」と名乗る人物がある指定ポイントに来て欲しいという内容だった。

マーク達は半信半疑で指定されたポイントに向かっていた。

『もう少しで指定されたポイントに到着します。各パイロットMS格納庫に向かってください』

艦内放送を聞きながらMS格納庫に向かうエリスとイチカは今回の事について話していた。

「ねえ、イチカこのアプロディアっていう人…信用できると思う?」「分からない。何もなければいい。でも何だろう、凄く嫌な予感がする」

「何も無いことを祈りましょ」

「そうだな」

話している内に二人はMS格納庫に着くと各々搭乗機に乗り、目標のポイントに着くまで静かに待つ。

『目標地点に到達。各機発進準備どうぞ』

今回、出撃するのはエリス、イチカ、ラナロウの三人である。

ラナロウのセイバーガンダムとエリスの青い鳥を思わせる機体フェニックス・ゼロがカタパルトに向かう。

「エリス・クロード。フェニックス・ゼロ……行きますッ!」

「ラナロウ・シェイド。セイバーガンダム……行くぜッ!」

二機が発進するとイチカのZガンダムがカタパルトに向かう。

「イチカ・ギルオード。Zガンダム……出ますッ!」

イチカとラナロウの乗るセイバーガンダムとZガンダムは発進後、飛行形態に変形し、行動する。

『いいか、今回の目的は「アプロディア」と名乗る人物の真意の確認だ。もし何もなければ速やかに帰還し、この宙域を離脱する。いいな』

ゼノンの通信を聞くと頷く三人にアーガマから警告が出される。

『熱源接近!光学カメラがMS部隊を捉えました!!戦闘宙域突入まで0056です!!』

通信からMS部隊が接近していることを知ると三人に緊張が走る。

イチカ達が肉眼で確認したMSは緑のカラーリングにピンクのモノアイを持つザクのような機体その中に紫を基調とした機体があった。

「ネオ・ジオンかッ!」

「しかもあのシンボルマークは…袖付き!!」

「待つて！まだ来るわ！」

先に来たギラ・ズール部隊の後から赤い機体がイチカ達の目の前に現れる。

「ガンダムタイプが…複数だと!？」

「そちらから「箱」に関する信号を確認している。素直に渡してもらえるとありがたいのだが」

イチカ達は指定されたポイントに来るように言われただけで赤い機体——シナンジュに乗るフル・フロンタルの言う「箱」の意味が分からなかった。

「スペースノイドの自治独立の為に世界を変えなければならない」

フロンタルはそう言うといちカに接近するがフロンタルはアーマからの援護射撃を回避しながら撃ち落とす。

「当たらなければどうという事は無い」

全て撃ち落とした所でイチカが接近する。

「何が目的でここに来た!!」

「君は信じるか。未だ見たことのない、中身も定かではない「箱」の身を。世界を覆えるほどの力が秘められているのなら私達はその力でこの歪んだ世界を変えたいのだよ」

イチカとフロンタルはビームサーベル幾度となくぶつかり合うとイチカのZガンダムにビームサーベルを突き立てる。

「チィッ！ビーム・コンフューズ！」

イチカは後退しつつ、ビームサーベルを投げつけると先程、投げつけた回転するビームサーベルにビームライフルを連射し、ビームを拡散させる。

「ええい！…ッン！」

フロンタルは回避行動を取ると先ほどまでいた所に高出力のビームが過ぎていく。

白いユニコーンの様な機体がフロンタルの前に立ちはだかる。

「そんな…力だけで世界を変えたって何も意味が無いんだ！」

ユニコーンガンダムの各所が展開していくと赤いサイコフレームが露出し、一本角は黄色いV字アンテナになり、「ガンダム」に姿を変

える。

「そうだ！正しい戦争なんて無い！戦いが起こればまた関係の無い人が傷つき、悲しみそして沢山の命が消えていく！そんなことはあつちやいけないんだ!!」

イチカはハイパー・メガ・ランチャーをシナンジュに向け、同じようにユニコーンガンダムに乗るバナージ・リンクスもシナンジュに対してビームマグナムを構える。

「そうはいかねえんだよ！」

「ハッ！」

イチカは何かを感じ取るとシナンジュを後にし、その場から離れようとすると四方八方から赤いビームが襲う。

ガンダムとは程遠いシルエットの赤い機体は背中から絶え間なく赤い粒子が放たれ、先頭の機体を追う形で現れた、ギラ・ズールとはまた違う機体は同じように赤い粒子が放たれていた。

「疑似太陽炉……」

「アロウズか！」

エリスとイチカは新たに出て来た第三勢力に冷汗をながしていた。

イチカはエリス、ラナロウ、バナージに通信回線を開く。

「エリスとラナロウさんはギラ・ズールとアヘッドをお願いします。そこのガンダム聞こえるか」

「は、はい。聞こえます」

「あの赤い機体を頼む。手強い相手だが出来るな」

「出来ると出来ないじゃない。やって見せるんです。争いをなくすためにやらなちやいけないんです！」

バナージの回答を聞くとイチカは声だけしか聞こえなかったが確かな覚悟を感じた。

「ああ、頼んだ。俺は——コイツを叩く！」

イチカはビームライフルを残りの機体——アルケーガンダムに照準を合わせる。

「始めようじえねえか。ガンダム同士によるとんでもねえ戦争つてヤツをよお！」

アルケーガンダムのパイロットであるアリー・アル・サーシエスの言葉を聞いたイチカはサーシエスに対して激しい怒りを覚えた。

「なんでそうまでして戦争がしたいんだよ!!」

「俺はタダ、戦争が好きで好きでたまらない、人間のプレミティズムな衝動に準じて生きているだけなんだよ!!」

「なんだと...」

「それにお前だって戦争をするための兵器を振り回してるのにいい子ちゃんぶってんじゃねえぞ。ええ、ガンダムさんよお!!」

バスターソードとビームサーベルの斬り合いの中イチカはこの男だけは生かしてはいけないと確信する。

「ふざけるなア！何が楽しくて戦争なんてしようとするんだよ！そんな事をすればまた、関係の無い人が沢山死ぬんだぞ！」

「それが戦争の醍醐味だろ！それに俺は戦争屋だ。戦争屋が戦争しなくて何をするんだよ！行けよ！ファング!!」

サーシエスはGNファングで攻撃しようとするが突如、現れたZガンダムを覆うオーラの様なモノによって防がれる。

「なんなんだよ！なんなんだよあれはア!!」

「お前のような奴は屑だ！無暗に人の命を奪おうとするお前は生きてちゃいけないんだ!!」

Zガンダムを覆うオーラに危機感を持ったサーシエスは戦域を離脱しようとする。

「ここからいなくなれええええ!!」

Zガンダムが持っていたビームサーベルのビーム部分が肥大化し、過剰ともいえる出力のビームサーベルでアルケーガンダムに叩き気斬る。

アルケーガンダムが撃破され、周囲に黒煙が立ち上ると其処から一機の小型の飛行機の様なモノが飛び出る。

「この借りはいつか返すぜえ」

それはアルケーガンダムに搭載されてるコア・ファイターだった。追撃はせずに一端エリス達の元に戻る。

「エリス！ラナロウさん！大丈夫ですか!？」

「ああ、これしきどうという事無いぜ！」

「こつちも大丈夫よ。それよりもあのガンダムは大丈夫かしら？」

イチカ達はバナージの事が気になり、バナージの所をへ向かう。

「箱に関する手掛かりも分かった。ここは撤退するぞ。アンジエロ」
「了解です。大佐」

イチカがバナージの元に着いた時にはフロントルが撤退を開始し、始めた時だった。

「終わった…のか」

「ああ、これ以上の戦闘は無いはずだ」

ラナロウの言葉を聞くとユニコーンは元の一本角に戻る。

「戦闘はあったけど特に変わったことはなかったわね」

「そうだな。そのガンダム援護感謝する」

「いいえ、俺はただやるべきことをやっただけです。それと名前を聞いていいですか？今後、また一緒に戦うかもしれませんから」

「俺の名はラナロウ・シエイダーだ」

「エリス・クロードよ」

「イチカ・ギルオードだ。よろしく… ええと」

「バナージ、バナージ・リンクスです。イチカさん」

「ああ、よろしく。バナージ」

挨拶を終えたイチカ達は帰還しようとするが彼らに異変が襲う。

耳に響く鈴のような音が鳴り響く。

「な、なに！」

『ワールド・シグナルが急激な波動に変わって世界を揺らしはじめました!!』

「世界が……揺れる…」

「人類の…！この世界は…！」

だが、鳴り響いていた音が止むとワールド・シグナルが止まりだす。

「とまった…のか」

「でも…どうして急に」

地球をバックに聖母を思わせる女性が姿を現す。

「この世界は…偽りの世界。ワールド・シグナルによって欺かれた世界です…。私はアプロディア…。世界を正しき方向に導く者…。」

イチカ達はアプロディアが言う意味が理解できず、ただ静かにきくだけだった。

「警告します。ワールドシグナルを止めるのです。そして、シグナルと共に世界を駆け偽りの世界を変えていくガンダム。その名は——ハルファスガンダム。不死鳥の姿を持ち争いを生む悪魔の名を持つ黒い不死鳥」

イチカはアプロディアの言う特徴の機体と類似している機体に見覚えがあった。

色こそ違えどそれはイチカの師であるマーク・ギルダーが乗るフェニックスガンダムと同じ特徴を持っていたからだ。

「それは今、悪意のある者たちによって目覚めようとしています…。その力を悪意のある者達に委ねてはなりません。ハルファスガンダムを止めるのです。そして、この世界は…。」

突如、ガラスが碎けるような音がすると世界全体に緑色が広がっていた。

「この世界は…これからどうなるんだ…。」

これが壮絶な戦いの始まりだった。

第3話

前回のワールド・シグナルでの戦闘後、あの指定されたポイントに地球連邦軍所属、ロンド・ベルがワールドシグナルを止めようとしたが突如、現れた黒い不死鳥——ハルファスガンダムにより撃墜され、「力」を利用しようとしたシャア・アズナブルとハマーン・カーンが現れるがそこに現れたアムロ・レイ、カミーユ・ビダン、ジユドー・アーシタがシャアとハマーンを止めに入る。

この時アーガマからはマーク、エリス、ラナロウが出撃し、アムロ達の援護に向かった。

何故、イチカが出撃していないかというところ、機体の解体とあて先不明の届け物にあったGNDライヴと新たな設計図を元にイチカの新たな機体が作られており、イチカが乗れる機体が無かったため今回はお休みとなった。

結果だけ言えば成功だが、ハルファスガンダムがワールド・シグナルを放つとあの時の様に世界が変えられた。

イチカ達も独自に調査しているが新たな手掛かりを得ることは出来ずにいた。

そんなある時、ハルファスガンダムを監視していたカメラがハルファスガンダムに接近する新たな機体を確認し、現場に急行した。

その間もカメラに映る映像は途切れることなく、そこに映っていたのはハルファスガンダムを捕獲しようとしている複数の機体とその大将機体——ターンXであった。

イチカは映像を新たな機体——エクシアのコクピットから見ていた。

「なんでそうまでして「力」を求めらんだよ……」

艦内放送で目的地点に到着した事を知らせるアナウンスが流れるとイチカはカタパルトに向かう。

「イチカ・ギルオード。ガンダムエクシア……… 目標を駆逐する！」

エクシアの背部にあるGNドライヴからはアルケーガンダムとは違う淡い緑色の粒子が放たれていた。

イチカの目の前にはターンXに乗るギム・ギンガナムと格闘家を思わせる構えを取る機体ゴットガンダムがいた。

「このハルファスガンダムは主人を探してワールド・シグナルを発振させているのだ！故に物々しい輩を呼び寄せるといふ！貴様もその類か？それと幻覚か？」

「ふざけるなッ!!世界を変える「力」があろうとなかろうと……！」

「世界は変えられる!!」

「俺は必ず貴様を倒す！そして世界を救う!!キング・オブ・ハートの名に懸けて！」

ドモンが構えると背中に六枚の羽を展開するとそこから後光の様なモノが現れる。

「悪いが早々にケリをつけさせてもらう！この俺の手が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！ばあああくねつう……ゴッド……フィンガーアアアアアアッ！」

ゴッドガンダムの手が赤くなりターンXの接近するがターンXの右腕からビームサーベルが出ると迎え撃つ。

「フハハハハハハ！これがゴッドフィンガーという物かア！」

「な、なに……ウアアアア！」

パワー負けしたゴッドガンダムは押し飛ばされる。

「このターンX凄いやオ！受ければ受けるほど力が漲るウ！」

「ターゲットロックオン……… 排除開始」

天使を思わせる白き翼を身に纏ったガンダム——ウイングガンダムゼロがツインバスタライフルを放つ。

「やったか………」

「そおうだ……それでいい！このパワーこの漲る力！我が世の春が来たアアア!!」

御大将はウイングガンダムゼロに接近し、ビームサーベルで斬りつけようとするが対するヒイロもビームサーベルで立ち向かうが力負けし、ドモンが格闘戦を仕掛けるが返り討ちに合う。

イチカはGNソードをソードモードに切り替えると敵に接近し、切り裂く。

「小生の言葉が聞けんというのならここでケリをつけさせてもらう」

「チィー！」

ターンXのマニピュレーターによる攻撃をGNロングブレイドで受け止めるが、

「そんなもんでこのターンXを防げると思うなよおお！」

GNロングソードは碎けるがイチカは腰にあるGNビームサーベルを掴むと接近する。

「お前たちはそこまでしてなんで戦争をしたがる!!」

「戦争にやりすぎの文字は無い!!好きただけ暴れられるからなあ!!」

「そんな理由で戦争なんかしようとするんじやねえええ!!」

「もつとこの戦闘を楽しもうぜ!フハハハハハ！」

「楽しむならお前だけで楽しみやがれえ!!」

ここでイチカはエクシアの切り札を使う。

「TRANS—AM始動!!」

エクシア変化し始める。

TRANS—AMを使ったエクシアは蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することで機体が赤く発光し機体スペックを三倍以上に上げ、残像が生まれるほどの高速機動で移動している。

「ウオオオオオ!!」

「なんだと!?!」

御大將は予想外の出来事に声を上げるがビームライフルを手に取り狙いを定めようとするが残像が生まれる程の速さで移動しているエクシアを捉えることができずにいた。

「破壊する...」

「なに?」

「貴様の様に人の命を弄ぼうとする奴は俺が破壊する!!」

GNソードでビームライフルとターンXの胴の部分をX字に斬り、一端後退するとGNソードを突き立てるように構えるとそのまま突進する。

「ウオオオオオオオオ!!」

ズサツ、と音を立てGNソードでターンXを突き刺す。

「オノオオオレエエエエ!!」

御大将の叫び声と共にターンXは撃破される。

エクシアのTRANS—AMの活動限界が来ると元のカラーリングに戻る。

「クツ… 機体が」

TRANS—AMを使うことで機体スペックを三倍以上に引き上げることが出来るがその代償としてGN粒子が再チャージされまで機体性能が落ちる諸刃の剣なのだ。

「オイ、大丈夫か?」

「ああ、少しの間機体性能が落ちるが問題ない」

「無理をするな。作戦に支障が出る」

「支障なんか出ねえよ。それよりも早くハルファスを倒さないと」

所定の位置から動かないハルファスガンダムに視線を向けるとイチカ達の耳に鈴の様な音が鳴り響く。

「なんだこの音は…!」

「音はハルファスガンダムから出ている…」

「まさか… ワールド・シグナル…」

音が鳴りやむとイチカ達の目の前に上下逆さまでターンXに酷似した頭部を持つ機体が現れる。

「なんだあれは…」

「機体照合… 該当する機体無し」

「どんな奴でも敵なら倒すまでだ!」

「ああ、そうだな」

「任務了解… これより破壊する」

イチカ達は目の前の機体——デビルガンダムJrに向かっていく。

デビルガンダムJrの四枚の葉のようなものが射出されるとその四枚のビットが変形し二本角、腕の様なモノが生え、爪の様なモノで攻撃、そしてもう一つからはガンダムの上半身らしきもの出て、腕を

前に突き出していった。

「しまっ……うああああああ!!!」

三人は回避に専念するがイチカの方の機体に二本角のが右脚部刺さると高圧電流が流れイチカを苦しめる。

「これより救援をかいs……クツ！」

「こ、これは……師匠の」

イチカを助けようとしたヒイロだが腕から放たれるビームと爪の攻撃で救援迎えず、嘗て師匠と敬っていた人の機体が右腕を突き出し、ドモンも応戦するがここであることに気づく。

ドモンの一撃を受けたビットが修復していくのだ。

この光景にドモンは心当たりがあった。

「まさか……DG細胞?!」

デビルガンダムJrは動けないイチカの方を向くとデビルガンダムJrの胸部が赤く光り始める。

「やばい……グアアアア！」

デビルガンダムJrがイチカに止めを刺そうと瞬間。デビルガンダムJrの背部が攻撃され、後方を向くと其処にはハルファスに似た機体が向かって来ていた。

ハルファスに似た機体——フェニックスガンダムから羽根の様な放たれるとビットやデビルガンダムJrに向かっていく。

「行けーファンネル!!」

ファンネルから放たれるビームはビットやデビルガンダムJrを襲い、ビットが一度デビルガンダムJrの所の戻り、殻のように閉じ攻撃を防ぐ。

「助かったよ。マーク兄」

「もう大丈夫だ」

「援護……感謝する」

「おかげで助かった」

「気にするな。困った時はお互い様だ」

閉じこもった殻の中からデビルガンダムJrが姿を現すとマークはフェニックスを變形させデビルガンダムJrに直行する。

硝子が砕けたような音とともに周りが紫に変色していた。
「まだ…終わらないのか。この戦いは…。」

第4話

ハルファスとの戦いからイチカ達は色々な世界を回っていた。何故、そんなことが出来るのか。

それはハルファスガンダムがここ二ヶ月現れていないからだ。

ワールド・シグナルに怯えていた人々はつかぬ間の平和を満喫していた。

それはイチカ達も例外ではない。

イチカ達はC・Eコスミック・イラに来ていた。

ナチュラルナチュラル、プラントプラント、地球連邦軍、ザフト、一オーブ連合首長国と三つの勢力に分かれている。

ナチュラルとプラントの二つの勢力が戦争し、オーブは「他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない」という理念に基づき、両者との争いに関与せずにした。

それからオーブは争の火に飲まれることがあつたが立て直すことに成功し、幾度となく行われた争いは終わりを迎え、現在はナチュラル、プラント、オーブ共に争いの無い世界を作ろうとしている。

オーブの市街を歩く二人の男女。

金髪の女性はダメージーズに青いシャツその上に黒いパーカを着ており、少年は藍色のジーパンに赤のシャツにクリーム色のパーカを着ている。

「戦闘以外で来るのは久しぶりね」

「俺は初めてだな」

久しぶりの休暇に意気揚々とした表情で歩くエリスと始めてくる世界を見回すイチカ。

「そうね。結構良い所よここよ。それに久しぶりの休みなんだし楽しみましょ、ね」

「あ、ちょ、エリス引つ張るなよ！」

エリスはイチカの腕を引つ張ると走り出し、イチカは少し嫌そうな顔をするが何処か笑っているようにも見えた。

イチカ達が最初にやってきたのは雑貨を売っているとこでイチカが来てから戦闘ばかりでイチカの部屋が殺風景極まりなく、この際に模様替えしようというのがエリスの考えなのだ。

エリスはイチカの腕を引っ張りながら入店する。

「いらっしやいませ」

「じゃ、お買い物タイム始め！」

「いや、いきなり初めって言われても……」

「いいから、欲しいものが無いか見てくる見てくる」

イチカはその場から離れると生活必需品の所に行くが新しく買う物が特になく、強いて言うなら服が少し足りない位である。

「服は買うとして、後、何か必要かな？」

家事に関しては、クルーの女性人と一緒にやっており、その時に自分の料理作った事があったのだが、食った皆からは絶賛されたがエリスを含む複数の女性が涙を流していたことは言うまでもない。

「必要品はマーク兄やラナロウ兄達が買うからいいとして、何か無いかな……お！」

イチカが目にしたのは機械に関する本と料理の本であった。

前者の方はMS等と触れていくうちに興味を持ち、自作で小さいロボットを作ってみたいと思うようになり、後者はクルーの皆にもっと美味しい料理を食べて欲しいという気持ちがありこの二つの本と衣類を持ってエリスの所に向かった。

「エリスー！欲しい物選んできたけど……」

「もしプレゼントするならこっちの方が……（ブツブツ）」

イチカが見たのは目の前にある二つのネックレスを真剣な眼差しで見ているエリスだった。

「なにをみるのエリス？」

「ひゃーな、何でもないよ！っていつからそこにいたの!?!いたなら声かけてよ、びっくりしたじゃない」

「今さつき、てか声かけても気付かなかったのエリスじゃん」

「あ、あはは……ごめんね。戻ってきたって事は買う物を見つけてき

たつてことね」

「今回、買う物」

イチカは手に持っていたカゴを指さすと其処には某中東出身のイノバイターが着ていた服やベルトがやたら多い服などがあつた。

「イチカ、そのベルトが多い服と襟が大きい服はやめよう、ね」

「あ、うん。わかつた」

エリスはイチカの肩を掴むと物凄いプレッシャーを放ち、イチカはこれは危険だと判断し、エリスが言った服を買うのを辞め会計を済ました。

「そういえば、エリスは何買ったの？」

「んん、内緒」

「それって不公平じゃん」

買い物済ませのんびり歩いている二人に突如、警戒音がオーブ全体に響く。

『オノゴロ島周辺にMSを確認。速やかにシユルターに避難してください。繰り返し——』

市民や観光客が逃げる中イチカ達はネエル・アーガマに向かつていた。

「ゼノンさん！発進許可を！」

「ああ、分かつた。後の事は任せろ」

「了解！」

イチカは敬礼すると格納庫に向かいエクシアに搭乗し、発進する。

「イチカ。私も手伝うわよ。もうあの国を戦火に巻き込みたくないから」

「ああ、そうだな」

エリスとイチカは戦闘が行われているであろうオノゴロ島を目指す。

「イチカ！あそこ！」

「ああ、見つけた！」

侵攻してきたのはザフトのMS部隊だが、今ザフトは地球連邦と及びオーブと和平を結んでおり、もうあのような戦闘が起きないようにしている。

だが、それを良しとしない者が一部おり、この戦闘もおそらく、その一部の者が起こしたものと考えられる。

「クソ！なんで自分から平和を壊そうとする！」

「そうね、人は分かり合えるのになんでそんな事をしようとするんだろうね…。」

イチカはエリスの言葉にどこか悲壮感が感じれた。

「ガンダムエクシア！目標を破壊する！」

イチカはGNソードで攻撃しようとするがジンは持っていた実体剣で防ぐ。

「なんでこんなことをしようとする」

『ナチュラル等との和平だと、下らん。俺達コーディネーターに劣るナチュラルと歩む事などありえん！』

「貴様ア！」

『どうやら、お前もあの歌姫と同じ考えのようだがふざけるなア！俺は血のバレンタインの時に家族を失った！ならナチュラルにも同じ苦しみ与えねばなるまい。俺達が味わった怒り、悲しみ、苦しみをな！』

「そんな怨念返してみたいのをやって何になるんだよ！貴様のその行為によって新たな憎しみが生まれ、それは貴様とは関係の無いプラントの市民に跳ね返ってくるかもしれないんだぞ！こんな事をしても何にならないって分かれよ！」

『貴様の戯言なんぞ聞く耳持たん!!』

ぶつかり合う互いの思い、この男が味わった苦しみはそれ程、大きいのだろう。

だがイチカも引く気はなかった、イチカは実体剣を弾きジンの左腕を切り落とし、

「憎しみの連鎖は止めなければ永遠に続く。お前を倒しても止まらない

い。新しい憎しみを生むだけ。だから！」

イチカはジンの四肢を全て切り落とし、蹴りを加え、海中に落とす。「俺はお前を殺さない。きつと分かり合える。争いの方ばかりに向けるんじゃないかって、もっと視野を広げて周りを見れば違う答えが見えるはずだ」

『だが、殺された妻や娘が報われないじゃないか！』

「きつと、殺された娘さんや奥さんは復讐なんて望んでない。もし自分がその立場ならどうなんだ？俺なら復讐なんて望まない。生き残った人の幸せと平和を望むよ」

『……』

ジンのパイロットは何も言わないがきつと分かってくれろと信じ、その場を後にする。

オーブのMS部隊と共闘しているエリスの近くに行く。

「遅いわよ。イチカ」

「ゴメン。今から参戦する」

「こっちは数が多いんだから」

「よーしよーし、よく頑張ったね」

「む、何か馬鹿にされた気分」

こんな会話をしているイチカ達だが敵はちゃんと落としており、海中には落とされたMSが浮いている。

「これでラスト！」

最後にゲイツを落とし、戦闘は終了する。

『協力感謝する』

「別にいいのよ。困った時はお互い様よ」

「戦闘も終わったみたいだし撤退させてもらうよ」

イチカ達はそのまますエール・アーガマに帰還する。

イチカとエリスはオノゴロ島の浜辺にいた。

「エリスここは…」

「イチカに合わせたい人がいてね」

「会わせたい人？」

イチカは首を傾げると一人の女性の声が聞こえる。

「おーい！エリス！」

手を振って向かってってくる金髪の女性に続く形で複数の男女が向かってきた。

「皆、来たみたいだね」

「エリスさんと久しぶりにお会いになられるとお聞きして」

「ああ、ここ最近連絡してこなかったからな」

「よく、心配してたからなカガリは」

「元氣そうだな。エリス」

今の話を聞く限りエリスの友人だという事が理解できるがイチカは誰なのか知らない。

「エリス。この人たち誰？」

「始めまして。私はラクス・クラインと申します」

「私はカガリ。カガリ・ユア・アスハだ」

「俺はアスラン・ザラだ。間違ってもズラなんて言うなよ」

「俺はシン・アスカ。よろしくな」

「始めまして。僕はキラ・ヤマト」

イチカは彼らの名前を聞くと大物だという事に気づき、緊張しながら自己紹介をする。

「お、俺はイチカ・ギルオード」

「そんなに緊張しなくていいよ、イチカ君。君はゼノンさんの艦にいるのかな？」

「ハイ！雑用をしていましたが最近はMSに乗って戦っています」

「ほお、驚いたな。こんな小さい子供がパイロットをしているとは」

キラの質問に素直に答えるとアスランが少し驚き、興味を持ったイチカにシンが質問する。

「へえ、どんな、機体に乗っているんだ？」

「さっきの戦闘で粒子みたいなのを出している機体です」

「増々驚きだな。その年であれほどの腕とは将来良いパイロットになるかもしれない」

「シン何かあつという間に抜かすんじゃないか？」

「ちよ、代表！ひどいですよ！」

「イチカ君少しいいかな？」

「ハイ。なんでしようか」

キラが真面目な表情でイチカに問いかける。

「君は一体何のためにその力を振るうの？意志なき力はただの暴力でしかないって理解しているかい」

楽しい会話は一転して緊張した空間になり、イチカはキラが何を言いたいのか理解し、答える。

「はい。俺は数か月前までMSにすら乗った事なんかなかった。戦闘が起きれば避難誘導をしていました。いつも戦闘を見ながら何故、戦争を争いを辞めないのか不思議でした。でも俺にはできないと思いついて出来ることを精一杯やりました。

ですがある時、俺は一人の少女を助けること出来ず、頭の中にその少女の悲痛な叫びが聞こえました。俺はあの時、決意したんです。争いの無い世界にするために戦う。そして人が手と手を取り合い分かち合うことが出来る世の中にしたいたいと思っただけです」

「君はそれだけの覚悟があるんだね」

「はい」

「人を殺す覚悟も、報いを受ける覚悟も？」

「ハイ。報いは受けます。戦争を無くしてから」

アスラン達はこんな幼い子供が理想を覚悟が有ることに驚き言葉が出なかった。

「そう、なら僕はイチカ君の夢を応援するよ。皆も応援するよね」

「そうですわね。こんな幼い子供がこれほどの決意を持つことは素晴らしいことですわ」

「ああ、全くだ」

「こんな子供が此処まで言うとは正直驚いた」

「大したこと言うじゃないか。コノ、コノ」

「あ、ちよ、シンさん！」

アスラン達は賛同し、シンはイチカとじゃれ合っているとラクスがエリスに近づく。

「エリスさんの思い人は立派な覚悟をお持ちの様ですわね」

「どうとう、エリスにも春が来たか」

「え、ちよ何言ってるのよ!!イチカは只の後輩で弟子よ!!そんな思い人とかじゃないから!!」

「そうやって必死になってる辺り怪しいがな」

「それにイチカ君の事を見る表情が恋する乙女って感じだったよ」

「キラ、アスランまで!!」

エリスは顔を赤く染めながら否定する。

「あつ、でもイチカがまだ十三位だから、エリスはシヨタコンって事になるのか」

「シイイイン!!今すぐイチカから離れなさい!!一発お見舞いしてあげる!!」

「うわあ、エリスがキレた！」

「今日も平和ですわね」

「そうだね、ラクス」

鬼の様な表情でシンを追いかけるエリスを見ながら笑う一行だった。

第5話

ワールド・シグナルがこの世界に出てきてから五ヶ月後、新たな仲間が来た。

それはイチカと関係する人物だった。

その少女は自分の事を織斑マドカと名乗り、イチカの姉である織斑千冬のDNAから作られたクローンと答えた。

マドカは自分の出生や経歴などをすべて明かした。

本来ならありえない、残酷な出来事の数々、そしてイチカはあり疑問をマドカに聞いた。

自分が憎くないかという質問だった。

世界最強のIS乗り織斑千冬の弟である織斑一夏にISを動かすためのあるモノを埋め込む予定だったが誘拐に失敗したことにより、一回モンドグロツソ終了時から育成していたマドカは、4年の間に各国の言語や戦闘の為の英才教育、生まれて一年半で行われた殺人等々それは酷いを通り越して残酷の領域まで言っていた。

その問いにマドカはNOと答えた。

マドカは生まれてから人として過ごしたことは少ないがどんな理由であれ、生を受けたことに感謝しているとの事。

それから、世界は一つにまとまった。

ハルファスガンダムを破壊し、ワールド・シグナルを止めるために。それは今までバラバラだった人々が手を取り合い生きようとしていることを示すからだ。

イチカ達がハルファスガンダムの元に向かった時に見た光景意味不明なものだった。

「どういうことだ...」

「戦艦が攻撃しているのか」

「だがさつきまであそこに戦艦なんてなかったはずだ!!」

「ハルファスガンダムから通信を傍受しました!」

「こちら側に流してくれ!」

「了解！」

ハルファスからの通信内容は理解しがたいものだった。

〈ワープ機能インストール……完了〉

〈コピー機能インストール……完了〉

〈シーケンスチェック……OK〉

〈プログラムチェック……OK〉

ハルファスが言うワープ機能やコピー機能等驚愕の機能に驚いてる一同を追い打ちを駆ける。

〈ジェネレーション・システム〉

〈アクセス 開始〉

「ジェネレーション・システム？」

「一体何の事だ？」

「私にも分からん」

そしてハルファスの通信はイチカ達に危機感を持たせるものだった。

〈ワールド崩壊プログラムダウンロード〉

〈ワールド崩壊プログラムダウンロード〉

〈ワールド崩壊プログラムダウンロード〉

「今何って言った！コイツ」

「崩壊って……」

「この世界を滅ぼすつもりか……」

ハルファスの左右に女性の様なMSが現れる。

〈スベテノ抵抗勢力ヲ排除セヨ〉

〈スベテノ抵抗勢力ヲ排除セヨ〉

〈スベテノ抵抗勢力ヲ排除セヨ〉

イチカ達はハルファスの通信を聞き理解した。

奴は世界を滅ぼすつもりなのだ。

文明をリセットするのではなく、破壊するのだと。

「この戦いは過酷なものなると思うが準備はいいな」

その場にいる全員が頷く。

「よし、なら発信準備だ！」

イチカ達はMS格納庫に向かう。

「この戦いでハルファスを倒し、世界を救う……」

「あんまり気負いするなよ」

「ここの頃は冷静さを失ったモノが死ぬ」

「だから少しリラックスしましよ、ね」

「ああ」

次々とカタパルトからMSが発進していく。

『エクシア発進。どうぞ』

「エクシア……イチカギルオード目標へ向けて飛翔する！」

エクシアが発進すると強襲用コンテナが来る。

「イチカ、ドッキング。イチカ、ドッキング」

「了解。ドッキングを開始する」

エクシアはGNアームズとドッキングし、ハルファスの下に向かう。

ハルファスの所には女性の様な機体——レギナと先程撃破されたはずの機体と戦艦があった。

「確かにアレは倒されたはずだ」

「ハルファスの言うコピー機能という奴かもしれん」

「厄介な……」

「だが、数が少ないから楽勝だぜ！」

ラナロウはトールギスⅢのメガキャノンでジム・コマンドーを撃破するが煙の中から現れたのはジム・コマンドーではなく、ジエガンだった。

「な、どういう事だ?!」

「そこをどいて！」

エリスがメガビームキャノンを放ち、ジエガンの四肢を破壊すると、ジエガンが消えるとそこにはスターク・ジエガンがいた。

「また!？」

「くそーこつちもだ!!」

イチカはGNアームズに搭載されている大型GNソードでダカールを切り裂くが新しくウインダムが現れていた。

「このままではジリ貧だ」

「だけど、どうするのよ!!倒しても出てくるし、手の付けようがないよ!!!」

「出てくるなら叩くまでだ!!」

イチカ達は悪魔召喚の様に出てくるMSを破壊しまくり、ようやく出てこなくなるがエネルギーの消耗や機体のダメージが高かった。

「一端帰還しねえともうエネルギーが……」

「こつちも同じよ……」

ラナロウのトルギスⅢは頭部やシールドの一部が破壊されエネルギーも後、僅かという状況でフェニックス・ゼロはスラストーの一部破壊と一部の武器が破壊されまともに戦闘を出来る状況ではなかった。

「分かった。ならラナロウとエリスは一度帰還して代わりにエルフリーデと「私が行こう」なんだと」

自ら出撃しようとしたのはマド力だった。

「ここに来てから戦闘シミュレーションは受けている。それに今は猫の手も借りたい状況なのだろ?」

マークは少し考え込む。

確かに他にも戦闘員はいるが僅かであり、まだ幼いシスやカチユアがいるが戦いに参加して欲しくないのが本音だ。

「分かった。なら頼むぞマド力」

「ああ、任せろ」

通信を切るとネエル・アーガマからエクシアと同じGN粒子を放つ機体デュナメスと騎士を思わせる赤い機体ガンダムエピオンが発進していた。

「本当に大丈夫なのか？マドカ」

「ああ、シユミレーションで使っていた機体がこれだからな。問題ない」

「ならいいんだが・・・」

エピオンは大型ビームサーベルを横薙ぎにし、艦隊を一つ破壊する。

「マドカは遠距離からの狙撃を頼む」

「狙撃は私の専売特許なのだから。問題ない」

イチカは大型GNキャノンで戦艦を落とし、マドカはデュナメスのGNスナイパーライフルで戦艦の動力部とブリッチを狙い撃つ。

「あと少し・・・」

残りの戦艦を叩き、残りはハルファスとレギナのみとなるが突如、ワールド・シグナルが鳴り響く。

「な、なんだこの音は・・・！」

「ワールド・シグナル・・・発信源はハルファスガンダムからだ！」

ワールド・シグナルが鳴り止むとイチカ達の目の前に複数の機体が現れる。

「な、あれはガンダムそれにシヤア専用ザク！」

「こつちにはストライクとイージスが現れたぞ！」

「あれはエクシアとアヘッド・サキガケ・・・」

「白黒の同じ機体が現れた・・・だと。これは一体どういうことなんだ・・・」

イチカ達の驚愕していると新たに二つの機影が現れる。

現れた巨大な二つの黒い機体は変形すると全長30M以上ある黒いガンダムになった。

「サイコ・・・ガンダムだと」

「これより殲滅行動に移る。用意はいいな！」

『了解！』

「ゼロ！私を導け!!」

エルフリーデはエピオンに搭載されているゼロシステムを起動させる。

「その命貰い受けるッ！」

アヘッドに接近し、ビームサーベルで滅多切りにするがそこからマストラオが姿を現せる。

「此奴らもか！」

「だがここで負けるわけにはいかない!!」

イーリスからスキュラが放たれるがマドカそれを回避し、スキュラのチャージが再び行われる中、イーリスに狙いを定める。

「狙い撃つ！」

デユナメスから放たれた一撃はスキュラの発射口に直撃し、チャージしたエネルギーが逆流し、爆発するとそこからジャスティスが姿を現す。

「落ちろお！」

イチカはGNキャノンを連射し、ガンダムMK-2を二機破壊すると見覚えのある機体が姿を現す。

「あれは… Zガンダム…」

それは最初の頃に乗っていた機体Zガンダムとヘイズルが現れた。

Zガンダムはウェーブスライダー形態になるとエクシア目掛けて突貫する。

「あぶねッ！」

イチカは脚部クローでヘイズルを蹴りGNソードに内蔵されたGNビームガンで撃墜すると、次はヘイズル・ラーが現れるがGNソード突き刺しGNビームガンを連発し撃破する。

新たに現れないことを確認するとZガンダムに向けるが火力面では上だが、機動性や小回りなどはZガンダムの方が上であり捉えることを出来ずにいた。

「一か八かだ…」

イチカは何もせず突貫するZガンダムを来るのを待ち、Zガンダムが正面から来ると脚部クローでZガンダムの翼部分を掴みビームガ

ンを放ち離れると次はZⅡが姿を現すがすぐさまGNキャノンを放ち撃破する。

イチカは残りの敵を確認するとサイコガンダムとハルファス、レギナだけが残っていた。

サイコガンダムの各部からビームが放たれイチカはそのままサイコガンダムに接近するがサイコガンダムの巨大な腕に捕まり身動きが取れなくなると腹部の三連装拡散メガ粒子砲が光り出す。

「このまま、やられるかアアア!!」

イチカはGNアームズとのドッキングを解除し、GNロングブレイドを3連装拡散メガ粒子砲に刺して誘爆させ、GNソードを頭部に突き刺す。

サイコガンダムは連鎖的に爆発を起こし、イチカはGNアームズを放棄し離れる。

GNアームズは有人ならば再度ドッキングできたが今はハロが操縦しているためできないでいた。

GNアームズは大型GNキャノンと大型GNソードが一つずつ破壊されてるが修復すればまた使える状態だった。

「ハロ。留守番頼む」

「リョウカイ。リョウカイ」

GNロングブレイドを回収するとランチャーストライクからミサイルや超高インパルス砲アグニからの砲撃が襲う。

「これじゃ、近寄れない!」

イチカはアグニを避けつつミサイルを迎撃するが砲撃は止まず、ストライクはソードストライカーに換装し、シユベルトゲバールで攻撃して来るがGNソードで迎え撃ち、一度跳躍し、某三連星よろしく。

ストライクを踏み台にし、ストライクの背部に回るとGNビームサーベルを二本投擲し、頭部とスラスト部に命中し爆破、するとそこからフリーダムが現れるとバラエーナ・プラズマ収束ビーム砲とクスイファイアス・レール砲を放つ。

「チィー!」

エクシアのGNロングブレイドとシールドで攻撃を防ぐがシールド

ドは破壊されるがフリーダムに目の前まで接近することに成功する。
ストライクに投擲したビームサーベルを拾い、フリーダムの右腕と左足を切断し、コクピットに刺す。

フリーダムは倒したが他に機体のようにそこからストライクフリーダムが現れ、イチカはソードモードからライフルモードに変え、ストライクフリーダムに撃つが腕部に装備されているビームシールドによって防がれる。

イチカが接近しようとした時、八基のスーパードラグーンが飛び出しイチカをありとあらゆる方向から攻撃する。

「近づけな…クッ！」

イチカがスーパードラグーンの攻撃を躲しているとストライクフリーダムが接近し、ビームサーベルをコクピット目掛け突き出すがいチカは寸前の所で避けるが機体を少し掠ったため融解し、ノーマルスーツを着たイチカの姿が少し見える。

ノーマルスーツが少し焦げているがそれ以外に異常は見られない。

「TRANS—AM！」

エクシアが赤く発光するとライフルモードのまま数発撃ち、GNロングブレイドとGNビームサーベルを両手に構える。

ストライクフリーダムはビームをビームサーベルで斬るがその間に接近したエクシアに気づけず、エクシアはGNロングブレイドとGNビームサーベルで翼部を切断。

「TRANS—AM解除。オーバブースト開始！」

イチカはTRANS—AMを解除するとスラスターから粒子排出量よりも一気に増加し、スラスターからは輪を描くようにGN粒子が放出される。

GNソードをソードモードにし、突き出すように構え突撃する。

ストライクフリーダムは両腕のビームシールドで防ごうとする。

「貫けエエエエ!!」

だが、オーバブーストによって得た莫大な推進力はストライクフリーダムのビームシールドを破り、コクピットに命中する。

イチカはGNソードを引き抜きその場を離れ、マーク達の所に向か

う。

イチカがマーク達の所に向かうと其処には複数のMSの残骸があり、マドカの方もGNフルシールドに一部破損が見受けられるが特に異常は見当たらなかった。

「マーク兄。無事だったんだね」

「ああ、そう言うお前は無事なんだな」

「ええ、一部破損したけど大丈夫。マドカは？」

「フルシールドと武装が一部やられたが大丈夫だ」

イチカはそうか、と安堵の表情を取ると、ハルファスに視線を向け。

「道は俺が切り開く！」

「援護は任せろ！」

「では、ファイナルラウンド開始だ！」

イチカはレギナに接近するが扇子の形をしたビームファンを取り出し、向け撃つ。

「そこだ！」

マドカはGNミサイルを放つが機体背部にあるバインダーシールドライフルで撃ち落とされる。

「行けえ！」

マークはフェザーファンネルで攻撃するがハルファスも同じくフェザーファンネルで攻撃してくる。

「これならどうだ！」

エルフリーデはエピオンのヒートロッドレギナの脚部に絡め放り投げる。

「今だ！マドカ！」

「沈める！」

マドカはスナイパーライフルでレギナを狙い撃ち撃破する。

「助かった。感謝する」

「仲間を助けるのは騎士として当然だ」

イチカはレギナのビームファンをGNロングブレイドで応戦して

いたがレギナのもう一基のビームファンによって弾かれ宙を舞う。

「まだアアア！」

イチカはGNビームサーベルを二本投げ、それをビームファンで弾くがイチカは宙を舞うGNロングブレイブを取り、レギナの頭部に突き刺すとGNロングブレイドの柄の部分に踵落としをし、より深く差し込む。

レギナを破壊したが過度の酷使によりGNロングブレイドは刀身から上半分が折れていた。

「はやく… ハルファスを…」

イチカはエクシアをハルファスの方に向ける。

「マーク兄… 倒したのか」

宙を漂うハルファスガンダムを見ると先程まで光っていたツインアイは光っておらず武装も所々破壊されていた。

「終わったんだな…」

「そう… だな…」

安心したのも束の間ハルファスのツインアイは再び光りシグナルが少しの間鳴るとバード形態になる。

「まだ… 動けるのか…」

すると空中に聖母思わせる女性アプロディアが姿を現す。

「ハルファスガンダムは停止しワールド崩壊プログラムは強制停止しました」

この言葉に全員が安堵する。これによって世界の崩壊が止められたからだ。

「ですが… 脅威が去った訳ではありません」

「なんだと?!」

まだ世界が危機に瀕していることに驚く。

「今こそ知るのです。何故、ハルファスガンダムが… 何故、この世界が… 何も勧告もなしに突如、シグナルを発振し、私達を混沌の世界に導いたのか?」

只、静かに聞くだけ全てを知っているであろうアプロディアが言い終わるまで。

「何故、私達はワールド・シグナルに翻弄され、何も得るモノがない戦いばかり強いられているのか？誰もが平和な世界を望んでいたのに何故、拒まれたのか？」

そしてアプロディアは衝撃の事実を告げる。

「それはこの世界が創られた偽りの世界だからです。ワールド・シグナルを使い、ハルファスガンダムを使いこの世界を創り変えようとした正体……常に背後にいて新たな敵を作り上げ、世界を崩壊へもたらそうとした正体……その実体を「知る」のです。」

硝子が響割れる音が聞こえ、辺りが白くなった後に見えたのは……。

「ジェネレーションシステム。古来より世界を創り上げ、全てを統括する超密度複合型システム。これが……私達の世界の正体なのです……。」

そしてアプロディアはイチカ達こう言った。

「お願いします。歪められてしまったジェネレーションシステムの暴走を止めてください」

第6話

至る所で電子回路のよ様なモノが張り巡らされてる場所にイチカ達はいた。

そこは「ジエネレーションシステム」……それは太古以来、膨大なネットワークと大量のデータの集合体ニューロを集め、構成された超密度複合型システム……それがジエネレーションシステム。

イチカ達はアプロディアに助太刀することで意見がまとまり今、青いMSを先頭にネエル・アーガマは動いていた。

そのMSの名は「ハルファスガンダム」手にすれば大いなる力を得られる”と噂されていたMSで、現にその力を得ようとする者、利用しようとする者がハルファスガンダムを狙い、争いを起こした。

だが元々、ハルファスガンダムはアプロディアの認証コードによって動く機体であり、アプロディアがシステムから弾き出され、その時にハルファスは乗っ取られたのだ。

そしてアプロディアの正体は「ジエネレーションシステムに形成された大量のニューロをまとめる」ニューラル・ネットワーク・アプロディア”つまり彼女もシステムの一部分なのだ。

数々の戦闘の末、ハルファスの暴走を止め、アプロディアの制御下に置かれた。

彼女とハルファスガンダムが揃ってようやくジエネレーションシステムへのアクセスが可能となった。

そして「ジエネレーションシステムの暴走の原因である”何か”の正体を見つける為、アプロディアは自身の駆るハルファスガンダムとマーク達は共に中枢ゲートを守るガーダーシリーズや数十体規模の防衛用MSレギナを撃破しつつ中枢へと向かった。

「クソ！砲撃だけならまだしもコイツは……」

「あれは厳しいわね……」

ガーダーやレギナを倒している最中に一機のMSが現れた。

白い髭の目や額のパーソナルマークが赤色く紫に発光し、ガンダム

とは程遠いシユルエットの機体。

それは過去に文明を世界をリセットさせた機体。

S y s t e m | ∇ 9 9 はターンAに似ているモノその性能は段違いであり、現に空間跳躍や桁外れの火力を持った武器で苦戦を強いられていた。

「攻撃が当たらない！」

「当たってもすぐ修復するからキリがない」

フェニックスやハルファスに搭載されているナノスキン装甲よりも上位であり、まさに勝てる気がしないであった。

S y s t e m | ∇ 9 9 イチカにIフィールド・メガビームライフルをイチカの直前に現れ放つが撃つのに少し時間が掛かり、その間に避けるが完全に避けきれず、エクシアの左腕、脚そして、コクピットの一部が破壊される。

「うあああああああ!!!」

「イチカ!...クツ！」

「兄さん!...チイ！」

エリスとマドカはイチカの救援に行こうとするがガーダーがそれを阻止する。

「私の邪魔をしないで!!」

「邪魔をするな！」

エリスはメガビームキャノンでマドカを狙い撃ち次々とガーダーを落とす。

「クソツ！」

イチカは罅が入り使い物にならなくなったヘルメットを捨てる。

ヘルメットの破片が刺さったのか頭部から薄らと血を流していた。

コクピットも左側は融解しているが奇跡的にイチカの身体は頭部の怪我以外は無く、五体満足だった。

S y s t e m | ∇ 9 9 は巨大なビームサーベルでエクシアを斬ろうとするがそれは振り下ろされず、まるでイチカを観察するかのよう
にジッと見るとその場から完全に姿を消す。

「なん... だったんだ... 今のは...」

太陽炉こそ無事だが機体が悲鳴を上げており、無理をすれば爆発しかねない状況だった。

「イチカ！ 大丈夫！ イチカ！」

エリスはダーガーを撃破し、イチカの救援に来たのだ。

「なんとかな……… だがエクシアはもう動かない」

「そう、なら私が送っていくわ」

「なら、私が援護しよう」

エリスはエクシアの右肩部を掴むとネエル・アーガマに向かい、マドカはレギナを落としながら着いていく。

帰還したエクシアからイチカを取り出すと医療室に連れてかれた。

「こりゃ、修理に大分時間が掛かるね」

「そう、じゃイチカは今回の戦いはお休みね」

整備士であるケイ・ニムロッドは半壊になったエクシア見るとそう告げるとエリスは今回はイチカが戦闘に出なくていいことに心の奥そこで安心した。

「おいおい、勝手に一回休みにするなよ」

「え？」

エリスとマドカの声がハモる。

そこには医療室から戻ってきたイチカがいた。

頭部には包帯を巻いているがそれ以外は特に異常は見受けられなかった。

「でも、乗る機体がないわよイチカ」

「あるよ。最近乗ってなかった元祖愛機がさ」

イチカは格納庫の奥にあるZガンダムを指さす。

「まだコイツがある。だから俺はまだ戦える。そんなわけで俺はもう出るからな」

「えッ！ 待ちなさいイチカ」

「俺は何が何でも出るぞ。この歪みを正す為に」

その覚悟の籠った瞳を見たエリスは何も言えなかった。

「分かったわ。でも無理はしないことこれが絶対条件よ」

「ああ、分かった」

ダーカーとレギナを撃破し、中樞へのゲートを見つけたマーク達は一度帰還してきた。

マーク達に最後まで出撃する事を告げ、エリス同様無理をしないことを条件に出撃することになった。

『これが最後の戦いだ。お前ら気を占めていけよ』

「皆さん、ここがジェネレーションシステムの中樞区画です」

アプロディアの案内で中樞へと到着したマーク達ネエル・アーガマは戦艦一隻十分に動ける空間に来た。

「ここが……ジェネレーションシステムの中樞部」

「はい。世界中に張り巡らされたニューロは、ここに全ての情報を集めてい……そしてシステムは、その情報を元に新たな世界を形成していく……ここが、世界が生まれた場所です」

Ζガンダムのコクピットから見ていたイチカが言うとシステムの中樞に集められた情報を元に新たな世界を形成する場所であるとアプロディアは説明した。その言葉にゼノンやブリッジクルー、そしてMSで待機しているマーク達は言葉を失った。

イチカやマドカこそ違うがマーク達やクルーは自分達が生まれたこの世界ジェネレーションシステムによって作り出された世界だというのだから……。

ところが突然、中樞内に警報が鳴り響き始めた。

「これは……私が、システムから消去されている!?!」

アプロディアは自身が消去されていると驚きの声を上げると、中樞上部から白いMSらしき機体が舞い降りてきた。

「何だ?あのMSは……」

「あれは……バルバトス!?!」

突然現れた謎のMSにアプロディアはバルバトスと言った。驚いている一同にバルバトスはまるで翼を広げるかのような動きを見せると、今度は孔雀のような姿に変形し、一つ一つの羽から光を放ち始めた。

「イカン！緊急回避だ!!」

バルバトスの動きに長年の戦闘経験の感が危険と判断したのか、ゼノンにはネエル・アーガマをバルバトスの射線上から退避するように操舵士に告げる。

するとバルバトスの羽から放っていた十二個の光が中心部に集まり、巨大なビームとなってハルファスガンダムに向けて発射され、ネエル・アーガマ改はギリギリの所で回避に成功するが、ハルファスガンダムはバルバトスのビーム砲の直撃を受けてしまった。

「バルバトスが……何故……!?!」

バルバトスの攻撃の直撃を受けたハルファスガンダムはコクピット部分の直撃は避けられたものの、特殊機能である「ナノスキン装甲」を持つているにも拘らず、機体全体にダメージを負い爆破される。

「どうやらあの機体が全ての元凶のようだ。これより我々はシステムの異常であろうバルバトスを破壊する!!各MS部隊は順次発進せよ!!そしてこの戦いに終止符を打つぞっ!!」

『了解ッ!!』

ハルファスガンダムを排除しようとしたバルバトスが、ジェネレーションシステムが異常をきたし暴走した原因であると判断したゼノンは、マーク達にMSで発進するように指示を出した。

「マーク・ギルダ、フェニックスガンダム……出る!!」

「ラナロウ・シェイド、トールギスⅢ……行くぜえ!!」

「シエルド・フォーリー、ネティクス……行きますッ!!」

「イチカ・ギルオード、Zガンダム……飛翔する!!」

ネエル・アーガマの右カタパルトから出撃すると、続いて左カタパルトへと送り出される。

「エリス・クロード、フェニックス・ゼロ……行きますッ!!」

「エルフリーデ・シウルツ、ビギナ・ロナ… 参るッ!!」

「マリア・オーエンス、量産型レガンダム… 出撃しますッ!!」

「デュナメス、織斑マドカ… 目標を狙い撃つ!!」

ネエル・アーガマから計八機のMSが出撃する。

「各機バルバトスの迎撃に当たれ!!」

『了解ッ!』

そしてマーク達がバルバトスに向かって攻撃を仕掛けようとした時だった。バルバトスはマーク達も邪魔者と認識したのか、排除しようとして光を放つと、今度はバルバトスを中心に八つの巨大なニューロが現われ、その一つ一つが歪み出すと、マーク達の乗っている機体の姿をしたコピーMSが出現した。

「俺達のコピーか!」

「そんなもん、俺様が蹴散らしてやるぜえ!」

「油断するな、ラナロウ!! 例えコピーでも相手はジェネレーションシステムの一部… あの時のように発展機がくるやもしれん」

「うえ、それは勘弁だぜ」

自分たちの機体をコピーしてきたバルバトスにラナロウはコピー如きに自分達が倒せるかよと叫ぶが、例え複製でもシステムの中核である場所から出現したコピー機でも油断するなとマークが告げる。

「イチカとエリスは一緒にバルバトスの迎撃をラナロウ達はコピーを頼む」

マーク、イチカ、エリスの三機のガンダムがバルバトスに向かい、ラナロウ達はコピーの相手をする。

バルバトスとの決戦は熾烈を極めた。

一度目のコピーMSは撃破できたが再び八つのニューロが現れ姿を変えると二つだけ今までは違うのが現れる。

ベースこそジムだがその姿は黒い武者鎧の様な形態をしており、その手に一つ近接用ブレードとアサルトライフルがあった。

『男なんて所詮家畜同然!!』

『ISを動かせない男がいい気になるな!!』

謎の女性の声が響き渡り、特に男性陣は聞いていい気分ではなく、“男性”そのものを見下されてる気がした。

攻撃してくるのが実体であり、ビームサーベルで切り裂くことが出来るので容易に撃破できた。

そして二度目のニューロを破壊が完了した時、再び中央付近の周囲にある場所から三度目のニューロが六つ出現し、再びラグナロウ達の乗っている機体に変化した。新たにニューロが一つ現れると白い騎士の様なMSが現れさつき現れたのもそうだがラナロウ達はこのMSを知らない。

白い騎士はその大型のブレードのリング状のパーツから放電しながらラナロウを襲う。

「こいつ、今までとは違うぞ!」

「あれは…まさか…」

ラナロウ達は新たに現れた白い騎士によって合流するのに時間を要した。

ラナロウから援護に行くのに時間が掛かると報告を受けるとエリスのフェニックス・ゼロのメガビームキャノンを放って足止めをしマークのフェニックスガンダム、フェザーファンネルで隙を作り、イチカのZガンダムがウェーブスライダーに変形し特攻し、撃破。

「此処からいなくなれエェ!」

マークがバルバトス撃破の報にラナロウ達に伝えた後、エリスはイチカのZガンダムに向かう。バルバトスを撃破することで白い騎士は自爆した。

今回の戦いで一番怪我をしているのはイチカであり、先の戦いで受けた傷が悪化していないか心配だったのだ。

「イチカ、大丈夫?」

「ああ、大丈夫だ。それより早くラナロウ兄達と合流しよう!」

Zガンダムを動かしたその時、ジェネレーションシステムの中枢部が突然揺れ出し、所々で爆発が起き始めた。

「これは不味いな…:… 全機! ネエル・アーガマに戻れ!! ここか

ら脱出するぞ!!」

マーク達はネエル・アーガマに帰還し、最大戦速で離脱を試みた。

「出口まで後どのくらいだ!」

「あと少しです!」

ゼノンの声に通信担当のラ・ミラ・ルナが叫ぶ。イチカ達もMSデッキで自分の機体に乗ったまま揺れるネエル・アーガマが無事脱出できるように祈っていた。

ネエル・アーガマが飛び出すと同時に、脱出口から火柱が立ち昇り、ネエル・アーガマはギリギリの所で脱出に成功した。

無事脱出できた事に歓声を上げて喜ぶブリッジクルーとMS内で待機していたマーク達は安堵の溜息をついた。

「無事に帰ってこれた!」

「ああ、そうだな。俺達は世界を救ったんだ」

イチカはZガンダムの中から水と緑豊かな地球を見ながらそうつぶやいた。

第7話

ワールド異変から四年。イチカ達の関係に特に変化は無く。

マドカがイチカと同じギルオードと名乗り、マークが数週間前にイチカにフェニックスガンダムを託したことだ。

マーク曰く「師匠からの贈り物」らしい。

時間の合間に嘗て共に戦った、ドモン・カッシュの所に行き鍛えてもらっている。

ワールド異変以来、マドカはイチカの部屋に侵入し、物色したり、イチカが寝ているところを下着で潜り込む等を始め、イチカは対マドカ用トラップ作るはめになった。(現在の所、未遂)

少しずつだがイチカに変化が起き始め、それは訓練でMSの操縦をした時、イチカの空間認識や反応速度が大幅に上がっていたのだ。

それについてはマーク達はイチカが力が上がったと思っていた。

その劇的と言っているイチカの変化に気づいたのエリスだった。

イチカの部屋に遊びに来ていたエリスだが艦内チェックのため少しの間イチカのいた部屋が暗くなった時だった。

その時、イチカの黒かった瞳は金色に輝いていた。

エリスは自分の見間違いだと思いきそのことを言わず自分のだけの秘密にした。

そしてOOの世界でソレスタルビーイングがコロニー型外宇宙航行母艦「ソレスタルビーイング」にあるヴェーダと呼ばれるモノ奪還に参戦した。

その時、刹那・F・セイエイの乗るダブルオーライザーが使ったトランザムバーストにより放出された高濃度圧縮粒子を浴びたことによりイチカの変化は覚醒に変化した。

この戦いでは分からなかったが、後にヴェーダと一体化したティエリア・アーダーによりイチカもまた刹那同様純粹種のイノベーターであることが判明。

イチカは自分の異常性に戸惑い始め、周りからの距離を離し始めたがマークやエリス達の日々の接触やフォローによって少しずつ元の

関係に戻って行った。

ある日、姿が大きく変わったアプロディアが勧告した。
また新たな戦火に巻き込まれると。

イチカはその元凶とされたバルバドロと戦ってきたが何故か一緒に戦ってきた仲間が手の平を返したかのように攻撃してきた。

イチカ達は無力化することで彼らを正気に戻していった。

そしてバルバドロとの最終局面で今まで共に戦った仲間である、バナージ、キラ、アスラン、シン、アムロそして聖女から魔女の様な姿になったアプロディア。

イチカはこのアプロディアに不信感を抱いていた。

彼女は自分達が知っているアプロディアであってアプロディアじゃない……そんな感じがした。

だがイチカはその事を誰にも言わなかった。変な不安を抱かせたくなかったから。

地球コーティングが剥がされた状態のシステムに特攻しようとしていたバルバドロ。

「バルバドロお前の野望もこれまでだ！」

「だがそうはいかないんだなア」

「その声は！」

イチカは声のした方を見ると見覚えのある機体を筆頭に次々とMSが現れる。

「よっ。あん時の餓鬼。いや今は兄ちゃんか」

「アリー・アル・サーシエス！」

それに続く様に赤い機体とMS軍が現れる。

「愚かな者に地球を汚染し破戒する権利もない！だから私が粛清する！」

「人間の知恵はそんなものだって乗り越えられる！だから……世界に人の心の光を見せつけりやならないんだろ!!」

「自分が味わった絶望を他人に押し付けてもらってつは困る!!」

イチカ達にとって見覚えのある機体とMS軍が新たに現れる。

「さあ、この戦闘を楽しもうじゃないかア!!」

「何でそんなに戦争がしたいんだ! アンタ達はアアアア!!」

「戦争にやり過ぎの文字は無い!! だから思う存分戦える!! それだけで十分じゃないか!!」

「それがもし、歪んで与えられた誤った世界なら!!」

「僕達はその世界を否定してでも明日を手に入れる。そのために君を撃つ!!」

「君達が思っているほど世界は簡単ではない。だから大人である私達が正しき方向に導こうとしてるのだ」

「ふん。人類を抹殺してまで築いた理想郷など愚の骨頂! 人と人はお互いに手を取り合い分かり合える!!」

敵である、シャア、サーシエス、ギンガナム、フロンタルの考えを否定する。

「バルバドロは「力」の制御を失った。今こそバルバドロを倒す好機!! バルバドロが地球へ特攻する前に破壊するのだ!!」

「行くぞ!!」

イチカの掛け声を合図に各々の敵と戦う。

「さあ、あの時の続きをしようぜ!! クソ餓鬼イイイ!!」

「誰が付き合うか!!」

イチカはフェニックスのビームサーベルでサーシエスのバスターソードを迎え撃つがその周りではファングとフェザーファンネルが互いに攻撃していた。

「アムロ! 何故、地球上に残った人類が、地上の蚤だという事に気づかん!! 地球に住む者は、自分たちのことしか考えていない。だから、私シャア・アズナブルが粛清しようというのだ!!」

「エゴだよ。それは!」

ファンネルで牽制しつつ、ビームサーベルで打ち合いをする。

「もっとだア! もっとこの戦闘を楽しませろオ!!」

「何でそうまでして戦争がしたいんだよ!!」

「人は戦闘の中で自らの闘争本能を呼び覚ますウウ!」

「フザケルナアア!!」

シンの中で何かが割れた感じがした。

シンはパルマフィオキューナで攻撃しようとするがターンXのマニピュレーターにより防がれる。

「もつとだ!もつと俺に攻撃して来い!!」

「シン!」

「アスランさん!」

「トウ・ヘアー!」

シンの応援に来たアスランは脚部にビーム刃を形成し、グリフォンビームブレイドで接近戦を試みる。

「舐めるなあ!」

機体を分離させ回避するが、

「アスラン!退いて!」

キラはスーパードラグーンで攻撃しつつ、ビームサーベルで攻撃する。

「このターンX凄いやお!流石、ターンAのお兄さん!!」

「クツ!」

ユニコーンガンダムは【NT-D】を発動させ機体の至る所から赤く発行するサイコフレームが露出していた。

「なんでそうまでして戦争がしたいんだ!!そんな事をすればまた悲しみが増えるだけなのに!」

「世界を変えるには常に大きな犠牲は付き物だ。バナージ君」

「だからって...人を殺す理由にはならないでしょ!!」

「腐敗した人類が一度やり直すにはリセットが必要なのだ。それがこのバルバドロの地球衝突だ」

「そんな独善的な考えで無関係な人を巻き込むなアア!!」

ユニコーンは両腕に搭載されてるビームトンファで攻撃する。

「だが、コイツは...!」

イチカは目の前のサーシエスに疑問があった。

何故なら、奴はロックオン・ストラトス（ライル）によって倒されているからだ。

「もしかして……………」

イチカはある可能性が思いつく。

「此奴はニューロなのか……………」

ジェネレーションシステム中枢でラナロウ達が戦ったコピー機もニューロだった事を思い出す。

「もしそうなら、此奴はアリー・アル・サーシエスの人格、記憶、技術を持つていることになる！」

もしこのような敵が沢山出るのであればあの時以上に苦戦することとは間違いないだろう。

「戦闘中に考え事とは余裕だね！ガンダムさんよお！」

「チー！」

「ところがギツチョン！」

アルケーは姿勢を低くし足に付いてる隠し腕（？）からビームサーベルを出しフェニックスの装甲を削る。

「まだア!!」

右腕に持っているビームサーベルを投げすぐさまビームライフルを構え撃つ。

ビームサーベルに当たったビームは拡散し、その場にあつたファングを撃ち落とす。

「いいね！やっぱ戦いはこうじゃなきゃ!!」

「とつと地獄に落ちろ!!」

イチカはフェニックスのバーニングファイアを使いアルケーに突撃する。

「グツ……………馬鹿な……………この俺が……………！」

イチカはアルケーの完全破壊を確認すると他の奴らの状況を見る。

シナンジュは戦闘宙域を脱出し、ターンXは撃破され、サザビーの脱出用ポットはリガンダムによって捕獲されていた。

「いかん！このままではバルバドロが地球に衝突してしまう」

「皆！ありつただけの火力で奴を仕留めるぞ！」

『了解ッ!』

「行け!フィン・ファンネル!」

「行くよ!アスラン!シン!」

「ああ!」

「分かってますよ!」

「此奴だけは落とすッ!」

「行けエエエ!!」

アムロはフィンファンネルとビームライフルで攻撃し、キラは全射撃武器を使ったハイマツトフルバーストをアスランはグリフオンビームブレイドやファトウム01を使い格闘戦をシンは全武装を使った連撃をし、バナージはビームマグナムやバズーカ、ビームガトリングを使い攻撃し、イチカはフェザーファンネルとメガビームキャノンで攻撃している。

彼らの攻撃を受けたバルバドロはそのモノアイから光が消え機能停止する。

「フフフ... どうやら私の勝ちの様だ。アムロ」

「どういう事だ!!」

シヤアの言葉に思わず聞き返すアムロ。

「アレを見たまえ!!」

「何イ!!」

其処には小惑星アクシズがあった。

「どうやらバルバドロは最期の力を使いアクシズを呼び出したらしい」

「何だとツ!!」

「そんな...」

「こんなのが落ちたら地球は...!」

その場にいた全員が落胆していた時、突如、白い髭のMS——System—V99が姿を現した。

「こんな時に...!」

イチカはビームライフルを構えるがSystem—V99はイチカを一度見るとIフィールド・メガビームライフルをアクシズに向け

放ち、Iフィールド・メガビームサーベルでアクシズを両断すると姿を消す。

「アクシズは二つに分断されたがアクシズの後部は地球の引力に引かれて落ちる。あの機体の頑張り過ぎだ！」

「ふぎけるな！石ころ一つ、ガンダムで押し出してやる！」

「バカなことはやめろ！」

「やってみなければ分かん！」

「正気か!？」

「貴様ほど急ぎすぎもしなければ、人類に絶望もしちゃいない！」

「アクシズの落下は始まっているんだぞ！」

「レガンダムは伊達じゃない!!」

アムロはシャアがいるポットをアクシズに叩きつけスラストを吹かすが膨大な質量を持つアクシズを押し出すことは出来ず、孤高奮闘するアムロの近くに数機のMSが近づくとアムロと同じように押し始める。

「俺達にはまだ出来ることがある!!」

「ならそれを信じて闘うまで!!」

「こんなことで僕たちの明日を終わらせはしない!!」

「可能性という内なる神がいるなら・・・ガンダム！俺に力を貸せ！」

「そうね。私達の未来を終わらせはしない!!」

「だが・・・この数じゃ・・・」

「最後まであきらめるな!!」

「こんな所で世界を終わらせてたまるかアアア!!」

シン、アスラン、キラ、バナージ、エリス、ラナロウ、マーク、イチカがアムロに加勢するが押し切れずにいると次々とアクシズの岩壁にバルバドロ迎撃に向かっていた連邦軍のMSが張り付く。

「ロンドベルだけに良い思いはさせませんよ！」

「地球が駄目になるかならないかなんだ！やってみる価値ありまっせ！」

遂には敵対していたジオンMSまでもが参加するが一機のMSが爆発する。

「しかし…爆装している機体だつてある…」

「駄目だ！摩擦熱とオーバードで自爆するだけだぞ！」

その熱と摩擦に耐えきれず次々と爆発していくMS達。

「もおいしいんだ！みんなやめろオーーツ!!」

「結局：遅かれ早かれ、こんな悲しみだけが広がって、地球をおしつぶすのだ…ならば人類は、自分の手で自分を裁いて、自然に対し、地球に対して、贖罪しなければならん…アムロ…なんでこれが分からん！」

「違う！人は戦争や世直しをしなくても手と手を取り合い分かり合える！だから俺は、俺達は示さなければならぬ。フェニックス！人と人が分かりあう為に俺に力を貸してくれ!!」

「イチカさんの言う通り人は分かり合える!! だから…!!」

「こ、これは!?サイコフレームの共振?人の意志が集中しすぎて、オーバードしているのか?な、何も恐怖は感じない?むしろ暖かくて、安心を感じるとは…」

「何も出来ないで…ああつ！」

アクシズの落下阻止という、その目的の為に一つになっていく皆の思念。

もはや敵も味方も関係ない。その巨大なる思念エネルギーはアムロ、シヤア、バナージ、そしてイチカを中心に広がり、その思念エネルギーにはじきとばされるMS達。

「そうか…！しかしこの暖かさをもった人間が地球さえ破壊するんだ！それを分かるんだよアムロッ！」

「分かっているよ！だから、世界に人の心的光を見みせなけりやならないんだろ！」

アクシズは少しずつ地球から離れていき、落下から免れると其処には力なく宇宙を漂う、MSの中にはフェニックスやユニコーンそしてレガンダム姿があった。

「本当にアクシズを押し出すとは…」

「そこまで人類に悲観する必要はないんだよシヤア。俺達は世界の行く末を見守り、間違ったら正せばいいんだ。もしそれが俺達に無理で

も彼らがやってくれるさ」

アムロは人類の可能性を秘めた若い彼らを見つめる。

「フフフフ…… システムを狙う害虫は退治したわけだ！これで世界は変わる……！新たな秩序と新たな統治に！新たな支配によって！」

アプロディアの声が聞こえ、するとハルファス・ベーゼを中心に世界が揺れる。

「な、何が起きている!!」

「アハハハハハ!! ついに戻った！我が力……！我はコードを取り戻したッ！ハハハハハハハハハハハハハハハハ！感じるぞ……」「力」を感じる！これぞ、我がコード!!」

そしてアプロディアは…… アプロディアの姿に擬態した彼女は告げる。

「我こそアメリカス！コード・アメリカス！」

「アメリカス？」

「じゃ、アプロディアじゃないのか!?!」

両手を大きく広げ、高らかに笑いながら言う。

「これよりジェネレーションシステムは我によって支配される！この世界は！秩序は人類は！全て我によって管理されるのだ！アハハハハハハッ！」

「俺達は…… 奴の手のひらで踊らされていたのか……」

「アイツが世界の歪みか！」

第8話

コード・アメリカスに騙され、世界を彼女の手中に収められ、行方を掴めないことに落胆しているとネエル・アーガマに二つの機影が接近する。

「こんな時に敵か総員出撃「待ってくれ」どうしたイチカ？」

「今から来る機体を攻撃しないでくれ」

「何故だ？敵かもしれないぞ？」

「分からない。でも懐かしい感じがするんだ」

『懐かしい？』

イチカ言葉に疑問を浮かべるゼノン達の前に二機のガンダムがおり、その内の一機はよく知っているモノだった。

《《こちら、マスターフェニックスのパイロット——コード・フェニックス。着艦許可を貰いたい》》

「どうするんだ？イチカ」

「許可してください」

「分かった。許可しよう」

《《感謝する》》

コード・フェニックスと名乗る男を着艦させ、会議室に案内した。

不死鳥を思わせる仮面をを被った青年に対しイチカ以外は警戒し、張り詰めた状況になっていた。

「お待ちください。彼は敵ではありません」

会議室のモニターに聖女を思わせる女性が現れる。

「お久しぶりです。皆さん」

「あなた……本当にアプロディアなの？」

「私は真正銘ニューラル・ネットワーク・アプロディアです」

「もし、よかつたら何があったのか教えてくれないか」

「はい。システムから消去された私は封じられました。そこで私は唯一残された端末【アービー】を使いコード・フェニックスと接触しました」

「最初は驚いたぜ。鳥の様なモノにジェネレーションシステムを案内して欲しいって言われて行動してみればその正体がアプロディア様なんだからな」

「騙っていたことには重ねて謝罪します。そして私はバルバドロを起動させました」

「ナンダツテ!!」

アプロディアの思わぬカミングアウトに一同騒然する。

「バルバドロは本来エマージェンシー用のプログラムです。バルバドロが地球を… コアを直接攻撃させようとしたのは封じられた扉を開くため… そう、全ては私を救出するためだったんです」

「なるほど、バルバドロが地球を狙った理由は分かったが、何故、奴は此方の仲間を裏切るように仕向けたのだ？」

「それ、その目的に気づいたコード・アメリカスが放たれたバルバドロに接触。そこでバルバドロを撃破しようとしたのでしようがそこである、誤算が生まれました」

「誤算？」

「はい。彼女は自分のコードをバルバドロに奪われたのです」

「あの化け物はそんな事が出来るのか!？」

同じくコードを持つているコード・フェニックスが声を上げる。

「そして、コードを失った彼女は私アプロディアになりすまし、奪われたコードを取り戻すためバルバドロ破壊を企てたのです」

「それがあの行動か…!」

「俺達はまんまと利用されたのか!!」

「ですが、そこまで悲観することはありません。バルバドロが最後に送った信号に彼女がいる場所が記されていました」

「それは何所なの!!」

一同はアプロディアが言うのを静かに待つ。

「それは… 月の旧ジェネレーションシステムです」

「旧… ジェネレーションシステム？」

「遙か昔に作られた旧型のジェネレーションシステム。ニューラルネットワークで構成された地球とは違い。今は遺跡として眠ってい

ます」

「敵の在処は分かった。それでアプロディアはどうして欲しいんだ？」

「もう一度力を貸してください。この誤った世界を正しく導くために」

ゼノンはその場にいる全員の顔を見る。

「分かった。反対するものは居ない。俺達はアプロディアに協力するでしょう」

「ありがとうございます」

「まあ、なんか有ったらこの俺とマスターフェニックスで何とかしてやるよ」

「なら、期待させてもらうよ」

イチカとコード・フェニックスを硬く握手をする。

そして、ネエル・アーガマはアプロディアの誘導に従って行動し、イチカ達もMSに搭乗しようとしていた。

「待ってイチカ」

「どうしたんだエリス？」

「受け取って」

イチカはエリスの言う通りその手にある一つのネックレスを貰う。

「これは？」

「ハウメアの護り石。最近、危なっかしいからこれで守ってもらって」

「…ありがとう。大事にするよ…！」

イチカはハウメアの護り石を着け、エリスにお礼をすると、エリスはイチカの頬にキスをする。

「後、女神の加護。ちゃんと無事に戻ってきてね」

「え、ああ、約束する」

イチカは戸惑いながらもフェニックスガンダムに搭乗する。

「おー、おー熱いね。これが恋する乙女の行動力か？」

「いや、まだ本命のキスマで行っていない。なら私が兄さんの初キスを…」

「ラナロウ、そんなんじゃないって!!後、マドカ一体何言ってるの!」

「必死になってる辺り怪しいね」

「兄さんの初めては私のものだああ!!」

先の行動でエリスをからかいそれを顔を赤らめながら否定し、何かに対して燃えているマドカであった。

「青春だね」

それを呑気に見ていたコード・フェニックスだった。

「着きました。ここが旧ジェネレーションシステムです」

アプロディアのいう場所に着くとそこはまさに古代遺跡と言っても過言ではない場所だった。

「ここで悪意が生まれました」

アプロディアの言葉が言い終わると大量のレギナと赤い鳥の様な機体ガーディアンサーが現れる。

「あれは…ガーディアンサー!?!」

「知っているのか?」

「ああ、少しな」

「ガーディアンサーもコード・アメリカスの一部。姿を見せなさい……………コード・アメリカス!!」

二匹のガーディアンサーが一番上の壇上に行くとそこに一機のMSが現れるとガーディアンサーと一体化する。

「フハハハハハハアハハハハハハハハハハ!流石はニューラル・ネットワーク・アプロディア。よく、この場所が分かったものだ。その力……………やはり脅威であるな!」

「コード・アメリカスのコードは「裏切り」のコード。「オーバーインパクト」を起こし、ジェネレーションシステムを暴走化。それによって私は消去され……封じられた!」

「じゃ、彼奴が全ての元凶!!」

「フハハハハハハハ! その通り! 我のコードは「裏切り」光を闇に! 闇を光に変えるコードだ!! ならば見せてやろう! 我がコードの「力」をな!!」

コード・フェニックスに雷の様なモノが当たる。

「な……し、しまった……」

「コード・フェニックス!」

コード・フェニックスの乗るマスターフェニックスが消えるとアメリカス側におり、そして、イチカはコード・フェニックスから禍々しいオーラを感じた。

「さあて片っ端から片づけてやるぜ!! 邪魔する奴は俺が残さずぶつ殺す!! 徹底的になア!!」

「フフフフフフフ……。コード・フェニックスもこの様だ。「裏切り」のコード……面白からう?」

「やめなさい! コード・アメリカス! 世界は貴女だけのモノではありません!!」

「フフフ……世界は我の物になる。ゆっくり……確実に!!」

「ふざけるな!!」

「さあ、戯れはここまでだ!! お望み通り終わりにしてやろう!!」

ハルフアスやイチカの周りを囲むようにレギナが現れると六つの大きな空洞から大きな球体が現れる。

「あれは、ニューロボール!? ターゲットに接近し侵入者を粉碎する破壊のニューロ体! その爆発力は計り知れない! この様なモノまで制御できるとは……」

「そうとも、我は何だろうと操ってみせる! 忘れたのか? この世界は既に我の物だぞ?」

そして、コード・アメリカスは宣言する。

「もう、終わりだ! アプロディア。そなたの時代は終焉を迎えたのだ

！フフフフ！ハハハハハハハハハハ！

「そんな事させるかアアア！」

「この世界は貴女のもじゃない！皆の物よ！」

「そんな事もわからずに支配しようなんぞ許さねえ！」

イチカはフェザーファンネルを使い、エリスはビームライフルを放ち、ラナロウはヒート・ロッドで横薙ぎにし、レギナを破壊。

「これでも喰らえ!!」

イチカは破壊されたレギナを掴むとニューロボールに向けて投げつけるとニューロボールは凄まじい威力の爆発を起こす。

「こんなのが至近距離で爆発したら只じゃすまない!!」

「だが、奴は行動が遅い一定の距離に近づいたら誘爆させるんだ!!」

イチカ達はレギナを相手にしながらニューロボールを相手にするがレギナの数が多く、そしてニューロボールは倒せば空洞から新たなニューロボールが出てきて此方もキリがなく各々タイミングを見計らって補給しに行った。

レギナを相手にしていた時コード・フェニックスがプロディアに攻撃を仕掛ける。

「コード・フェニックスよ！正気を取り戻すのです！」

「へへへっ。覚悟しな！俺のコードが最も危ないことを教えてやるぜっ！」

クロスバインダーソードを砲身にして放つソード・メガビームキャノンを繰り出すがプロディアはそれを避け、クロス・メガビームキャノンを放つ。

「チィ！舐めた真似しやがって！」

「舐めた真似をしたのはそっちだ！」

イチカは補給から戻ると二振りのGNロングブレイドを構えながらコード・フェニックスに向かう。

「お前言ったよな！大船に乗った気分で来たって！なのになんだこの様は！お前はそんなに自らの意思を乗っ取られるほど軟な奴なのかよ!!」

「無駄だ！コード・フェニックスは私のコードによって操っている。

それを解くことなぞ、不可能！」

「なら、教えてやるよ！人の意思や覚悟の前に不可能なんてないってな！」

金属と金属がぶつかり合おう音が響く。

「オラァ！先までの威勢はどうした！」

「うるせえ！」

イチカはマスターフェニックスの剣を受け止めると薄らと笑みを浮かべる。

「今だ！フェザーファンネル！」

「何！……グアアアア！」

ロングブレイドの攻撃に集中していたコード・フェニックスは背後に現れたフェザーファンネルに気づくのが遅れ攻撃を喰らうと、

「これで目を覚ませエエエ!!！」

炎の様に燃え盛る拳をマスターフェニックスの顔面に殴りつける。

「うああああああ!!！」

マスターフェニックスは遺跡の壁に勢いよくぶつかり、盛大に土煙を上げた。

「ば……馬鹿な……」

起き上がったマスターフェニックスは所々でスパークしており、ダメージは相当なものだったのだろう。

「コード・フェニックスよ！ここで消えてはなりません！悪しき者の力で貴方が消える必要はないのです！」

「こ、これは……」

マスターフェニックスの周りに光が集まると燃え盛る不死鳥の紋章が浮かび上がる。

「お……俺は……!?!」

そこには傷一つないマスターフェニックスと正気を取り戻したコード・フェニックスがいた。

「俺は……奴のコードに惑わされたのか……！コード使いがコードに惑わされるなんてまったくこ悪い話だぜ……！」

「どうやら目が覚めたみたいだな」

「ああ、もう大丈夫だ！イチカ中々良い拳だったぜ！」

「そりや、どうも」

コード・フェニックスはアメリカスに視線を移し、

「この借りはたっぷりと返してやるぜ！覚悟しな、コード・アメリカス！」

「コード・アメリカス。貴方のコード消去させてもらいます」

「できるものならやってみるがいい！我はの力は全ての世界を制御している！」

「やつてやるぜ！」

イチカ、コード・フェニックス、アプロディアはアメリカスに対し各々の武器を構える。

「喰らえ！」

イチカはロングブレイドでクイーンアメリカスに斬りかかるが数回斬るとGNロングブレイドが刃こぼれする。

「脆いな」

「なんて硬さだ…」

「任せろイチカ！」

コード・フェニックスは二振りの剣をを一つにし、大剣の様にすると斬りかかる。

「これで！」

「何ッ!？」

コード・フェニックスが数回斬ると上空に飛び、視線を追っていたら、眼前にハルファスがバード形態になり、バーニング・フレアをしながら突撃をしていた。

「クッ！」

ハルファスがクイーンアメリカスから退けるとガーディアンドレスに傷が出来ていた。

「まさか、このガーディアンドレスに傷がつくとは…だが！」

クイーンアメリカスからガーディアンドレスが取れ、ガーディアンサが姿を現すとハルファスとマスターフェニックスに接近し、その強靱な爪で攻撃してきた。

「こ、これは！」

「しまった！」

「アプロディア！」

クイーンアメリアスはフェニックスが相手し、マスターフェニックスが相手していたガーディアンサがマスターフェニックスかハルファスにターゲットを変えガーディアンサが連携攻撃をし、ハルファスに甚大なダメージを与える。

「よそ見をする暇があるのか!!」

「うあああ！」

「イチカ！」

イチカはクイーンアメリアスのビームウィップを喰らいハルファスと同じ方向に飛ばされる。

「イテテッ!... そうだアプロディア! どうなった！」

『私... は... ここです...』

イチカは声のした方を向くとガーディアンサの攻撃を喰らい大破したハルファスが視界に映る。

「大丈夫か!!」

『どうか... ですが... しかし... ハルファス... ガンダムの... 機能の... 一部が... 停止... しよう... して... います... このまま... では... 何処かの... 端末に... 私を...』

「ならフェニックスの中に! そうすれば...」

イチカはフェニックスから数本コード抜き取るとハルファスに向かう。

「コード・フェニックス! 今からアプロディアを救出する! だから少しの間、時間を稼いでくれ！」

「分かった! ウオオオオ！」

クイーンアメリアスをコード・フェニックスに頼み、イチカはハルファスにコードを刺しアプロディアがフェニックスに移動できるようにする。

「ありがとうございます。おかげで九死に一生を得ました」

フェニックスからアプロディアの声が聞こえるとコードを抜き

フェニックスに搭乗する。

「すまない。遅れた！」

「いいってことよ。それよりアプロディアは？」

『私ならここです』

コード・フェニックスはフェニックスからアプロディアの声を聞くと安心する。

「なら、次は俺の頼みを聞いてくれ」

「どうした?.....これは...」

イチカはマスターフェニックスに視線を移すと機体の一部が欠損し、スパークしていた。

「俺のフェニックスは動くのが困難だ。だから」

コード・フェニックスは自分の武器であるクロスバインダーソードを渡す。

「代わりにアイツを倒してくれ」

「ああ」

イチカはクロスバインダーソードを受け取る。

「行くぞ！アメリカス!!」

「人間風情が小賢しい！」

イチカはクロスバインダーソードでクイーンアメリカスを攻撃する。

「行け！ファンネル！」

「見えているんだよ!!」

「何ッ！」

イチカはガーディアンサを躲し、サーヴァントファンネルだけを破壊する。

クイーンアメリカスはガーディアンサを戻しガーディアンドレスにするがクロスバインダーソードの連結を解き、二刀流でガーディドレスのある一点集中攻撃する。

それはコード・フェニックスとアプロディアによって付けられた傷を集中攻撃することでガーディアンドレスを破壊。

「これで止め!!」

「クウ！」

イチカがクイーンアメリカスに止めを刺そうとした時、警告音が鳴る。

『これは…空間が歪んでいる!? イチカ・ギルオード、すぐここから離れるのです!!』

「え?…: うああああああああ!!!」

「な!…: あああああああああ!!!」

アプロディアの警告も虚しくイチカとアメリカスは空間の歪みに飲み込まれ、世界から姿を消した。

「イチカアアアアアア！」

「兄さん!!」

「イチカ、アービー！」

仲間を呼ぶ声は虚空の彼方に消えていった。

設定

マーク・ギルダール

ネエル・アーガマのクルーの一人。

年齢 ワールド時18 オーバー時22

イチカにMSやMAの操縦の仕方を教えた一人。

操縦テクニクは艦内ではトップクラスで高い空間認識能力とニュータイプを有し、戦況の判断能力も高い。

イチカの憧れの人であり、兄として慕っている。

イチカが一人前の戦士として成長した時に愛機であるフェニックスガンダムを託す。

エースの一人。

搭乗機 フェニックスガンダム↓レガンダム又はデステイニーガンダム

エリス・クロード

ネエル・アーガマのクルーの一人。

年齢 ワールド時18 オーバー時22

マーク同様イチカに操縦の仕方を教えた人の一人。

平和のために戦うという心優しい人物であり、かつ努力家。

マーク同様ニュータイプであるため、操縦技術は高いがマークよりは少し劣っているためその差を埋めるための努力は今もしている模様。

イチカが好意持った女性。

イチカに対して密かに好意を抱いている。

エースの一人。

搭乗機 フェニックス・ゼロ

ラナロウ・シエイド

ネエル・アーガマのクルーの一人。

年齢 ワールド時18 オーバー時22

マーク同様一夏に操縦の仕方を教えた人の一人。
頭に迷彩柄のバンダナを巻いている。

オールドタイプでありながらもその腕は高く、大抵のMSなら乗りこなす程である。

イチカの頼りがいのある兄である。

搭乗機 トールギスⅢ、ガーベラ・テトラ改

エルフリーデ・シユルツ

年齢 ワールド時19 オーバー時23

騎士道を誇る男装の麗人、兄譲りの剣術を修めている。

格闘に特化しており、接近戦はトップクラスであり、マークと同等であるが遠距離戦は苦手の部類に入る。

イチカに剣術などの接近戦を教えた張本人。

主な搭乗機 エピオン ビギナ・ロナ

イチカ・ギルオード

元 織斑一夏

年齢 ワールド時14歳 オーバー時18歳

第二回モンドグロツソで誘拐された時に空間の歪みによりガンダムの世界に飛ばされてしまう。

最初はマーク達を警戒していたがマークの話を知り自分が元いた世界とは違う世界に来たことを知る。

名前を変えたのは以前の自分と決別するために改名。

マークやエリス達によってMSの操縦の仕方を教えてもらう。

基本誰かの部隊に所属せず一人で戦うことが多い。
数多くの戦闘経験と色々な世界での出来事によりに精神的に成長する。

高い空間認識能力を持ちニュータイプとして目覚める。
最高のニュータイプと称されたカミーユと同等の能力を有している。

ある事件をきっかけに純粹種のイノベーターとして目覚めるが自分の異常性を気にしていた所をマーク達のフォローによって立ち直ることが出来る。

マークに一人前の戦士として認めてもらった時に愛機であるフェニックスガンダムを託される。

イチカは一度ドモンに鍛えてもおらつたことがある為、生身でも強い。

エリスに好意を持たれていることに気が付いていない。流石はキング・オブ・朴念人

搭乗機 Zガンダム、エクシア、フェニックスガンダム

マドカ・ギルオード

元 織斑マドカ

年齢ワールド時4 オーバー時8

イチカがGジェネの世界に来てから半月が経った頃にイチカ同様空間の歪みから来た存在。

極秘裏に織斑千冬からDNAを採取し、それを元に作られた謂わばクローンであり、作られてからは各国の言葉や戦闘に対する英才教育を受けている。

イチカに対しての憎しみや敵意、殺意などは持っていないが最初の頃はギクシャクしていたが共に過ごすうちにお互いに分かり合う事

に成功し、仲の良い家族になる。

空間認識能力や射撃の腕は高く、戦闘時は遠距離や援護主体の機体で出撃する。

本人は気づいていないが重度のブラコンである。

外見は千冬より幼いため小さく、背は鈴音より少し大きく髪は肩にかかる位伸びている。

搭乗機 デユナメス、ケルディム、

I S 編

1 話

『I S』正式名称『インフイニット・ストラトス』それが発表されてから早十年が経ち、世界は男女平等から女尊男卑の世界へと移り変わってしまった。

そして、日本から少し離れた島にとある学園が存在していた。それは『I S 学園』と呼ばれ、世界各国からI S 乗りが勉強する学園である。

その学園の職員室にて二人の女性が話していた。

「それにしても、立ち直ってくれて嬉しいです」

緑色の髪をし、身長は小さいとも言わず大きいとも言わない、女性が隣に座る女性に尋ねた。

「いつまでもくよくよしていたら弟に笑われそうだな… いや寧ろ心配しそうだな」

黒髪で稟とした女性が答えた。

「弟さんはまだ見つかってないんですね？」

「ああ、血痕一つ無く、犯人を問い詰めても意味不明なことばかり言っ
てあてにならない」

「確か、空間が歪んだとか言っていたんですよね？」

「だが、現実では起きえない現象だ。だから私は一夏がどこかで無事に
生きていることを信じているんですよ。山田先生」

「生きていると良いですね。織斑先生」

山田先生はそう言うのと、前に積まれた書類のタワーの片付けに入っ
た。

「では私も残りn 『ズガアアアン!!』何が起きた!」

「わ、分かりません! 近くのアリーナに何かが衝突したようです
が…」

同僚の先生は千冬に伝える。

「何処のアリーナd『緊急事態発生! 繰り返す、緊急事態発生! 第

三アリーナにて未確認の機影が落下しました。現在動ける先生方は至急第三アリーナまでIS装着し向かって下さい!』第三アリーナか! 行くぞ、山田先生!」

千冬は山田先生にそう言うのと格納庫まで走って行く。

「待って下さい! 織斑先生!」

山田先生もそう言いながらも千冬の後が続くように走る。

そして、第三アリーナには沢山の女性達が集結しており、その中には千冬や山田先生もいたが、そこから誰も動こうとはしなかった。否、出来なかったのだ。土煙こそ完全に消えていないが其処にいる全身装甲の髭のある不気味なISがいたからだ。

「機体名と所属、国家を言え! 貴様h!」

千冬はそれ以上言えなかった。白鬚の全身装甲の赤いツインアイが光り、その場にいた教職員が各々武器を構え、戦闘態勢に入るが全身装甲のISは予想外の行動を取る。

千冬に一步近づくとその腕に抱えていた少年を千冬に渡したのだ。

黒髪の肩より少し長く、年齢は10代後半といったところである。

少年渡すと首を一回転し悠然とその場から消える。

「き、消えた!」

「ど、どうします……織斑先生?」

山田先生は千冬に尋ねる。何故、千冬に尋ねたかと言うと、千冬はこの学園内で緊急時の最高指揮権を持っているためである。もう一つ、指揮権を持っているところがある。

「取り敢えず、医務室に運んでください。事情を聴くのは彼が目覚めてからにしましょう。それにしても……」

千冬は医務室に運ばれる少年を見る。似ているのだ行方不明になった弟に。

「お、織斑先生!? これって……」

一人の先生がある物一つ持つてくる。

「……山田先生、これを至急調べてください。なるべく急いで」

千冬は山田先生にそう指示を出す。山田先生は千冬の指示に従い、ある場所に持つて行った。

「後は彼が目を覚ますのを待つだけだ」

「ん……ここは何処だ？」

イチカは周りを見渡す、医療器具や薬品がある事から医療室だと思われる。

「俺は……何を……！」

イチカは今まで何をしていたのか思い出す、「裏切り」のコード、ジエネレーションシステム、コード・アメリカス、そしてアプロディアと大切な家族同然の仲間の事。

「そうだーアメリカスはジエネレーションシステムは！皆は！」

イチカは周りを見渡す。だが見つからず、託された愛機であるフェニックスを探すが見当たらない事に焦り始める。

10M以上あるフェニックスが外に見当たらず、もし、ここが知らない基地であればフェニックスやジエネレーションシステムなど漏えいしてはいけないデータが流れ、悪用されないからだ。

イチカが完全に焦り始めていると扉が開く音が鳴るとイチカは警戒しつつ、音がした方を見ると開いたドアには二人の女性が立っておりその中の一人は自分がよく知っている人物だった。

「目覚めたようだな」

一人の女性がイチカに言った。

「そう、警戒するな。私は織斑千冬だ。此処で教師をしている。そして、こちらが山田真耶先生だ」

イチカの殺気の籠った視線に涙目になっている女性の事を紹介した。

「イチカ、イチカ・ギルオードだ」

「イチカと言うのだな。『フェニックスガンダム』この名に聞き覚えはあるか？」

フエニツクスの名を聞くとイチカの殺気は更に膨れ上がり、それは世界最強のブリュンヒルデですら後ずさりしたくなる程だった。

「知っている。だが、話さない。それはお前たちの様な世界を歪める奴が触れていいものじゃない。それを早く返してくれ」

イチカは手を伸ばし返すよう要求する。

「返しても構わんがそれは明日になってからだ。今は安静にしている」

千冬はそう言うのと真耶と共に保健室から出て行った。

イチカと対面した後、自室に戻った千冬は人知れず泣いていた。

知り合いに頼んで自分の弟である織斑一夏とイチカ・ギルオードのDNA鑑定をした所結果は『同一人物』それはイチカが自分の弟であることを示していた。

「良かった… 見つかって本当に… よかった」

行方不明の自分の弟と再会できたが当の本人は自分の事を忘れていたようだが時間は沢山あるのだ、ゆつくりとでいいから思い出し昔の様に暮らせばいい。

イチカが行方不明になった後、千冬は何故、弟が誘拐された事を知らせないのか日本政府に問いたただいた結果「試合に集中して貰うため」結果的に言えば二連覇することができただがその代償として大切な弟を失い、情報提供してくれたドイツで一年の指導は悲しいという感情を抑えこなしたが日本戻ってもいつもの迎えが来ず、教師としての仕事は上手くいかずその悲しみを薄れるため酒に溺れた時期があったが一年ほど前から立ち直る事に成功した。

ただ、先程出したイチカの殺気は一般人が到底出すことが出来ない、ましてや戦いに身を落とし、死戦を潜り抜けた兵士そのものだった。

千冬はただ自分が知らずの間に変わってしまった弟のことが心配だった。

2話

IS学園の地下に極秘に設置されている部屋がある。そこはIS職員だけでも知っているのは教師部隊の総部隊長である織斑千冬と副隊長の山田真耶。そして、学園長である柏木五十六である。

そして、その部屋では千冬と真耶がそこにいた。そして二人はイチカから見つかったISの解析をしていたのであった。

「な、何なんですか！ このスペックの数々は!?!」

「性能だけなら世界最強と言っても過言ではない...」

モニターを見ながら、山田先生は驚きの声を上げ、千冬も山田先生の後ろからモニターを見ながら言った。

「まあ、何をしても明日になれば判る筈ですから、まあ気長に待ちましょう」

千冬はそう言うと、地下施設から出て行った。

翌日、イチカは千冬と山田先生に連れられてある場所へと向かった。

「俺を何処に連れて行く気だ?」

「説明をしていなかったな。今からお前達にはアリーナでISを機動してもらおう」

「男には動かせない筈だが」

「昨日、お前が持っていたアクセサリ類を調べた結果。ISであること判明した。なので一応、機動テストをしてもらおう」

「人の所持品を勝手に解析するとは些か常識が欠けてるんじゃないか?」

「ヒッ!」

千冬の言葉を聞くとイチカは殺気を放ち始め、山田先生はイチカの殺気に小さな悲鳴を上げる。

「っ、着きました。こ、此処がIS学園が誇る第一アリーナです」

パネルを弄りあるボタンを押した。すると、何も映っていないモニ

ターに第一アリーナの全貌が映った。

「さて、移動するぞ」

千冬はそう言うのと部屋を出て行き、イチカは千冬の後を付いて行った。

「さて、ではISの機動テストを行う」

第一アリーナのカタパルトデッキで千冬とイチカがいた。山田先生は管制室で管制を担当するため、此処にはいない。

「では、始めるとしよう」

千冬ははそう言うのとアタッシュケースを取り出し蓋を開けた。其処には赤い石に燃え盛る不死鳥が施されたブレスレットがあった。

それをイチカは持ち上げる。すると、頭に自分の愛機の情報と一人の意思が流れて来る。

「確かに、これはフェニックスガンダムだ」

イチカがそう呟くとイチカの身体が光りに包まれた。そして、光りが消えるとそこにはイチカの愛機である『GGF-001 フェニックスガンダム』が展開された。

「全身装甲なんて!?!」

山田先生は管制室からそう叫んだ。

「では、イチカ。カタパルトに移動、その後山田先生からの指示に従え」

「…了解」

イチカは千冬の指示に従い、カタパルトまで歩いて行く。

『そんな!! 初めてISに触ったのにこんな上手く操縦は出来ませんよ!』

山田先生はまた管制室から叫んだ。

「一々叫ばないで下さい、山田先生。それに物は試しってよく言うでしよ」

「カタパルトに接続完了」

千冬と山田先生が話している間にイチカはフェニックスをカタパルトに接続完了していた。

『あつ、すみません。機体の射出をイチカさんに譲渡します』

山田先生は管制室でコンソールを叩きながらイチカに伝える。

「イチカ・ギルオード、フェニックスガンダム… 飛翔するッ！」

イチカはフェニックスを出撃させるとアリーナの中央上空で停止する。

『では、イチカ君。今からターゲットを出しますのでそれを殲滅して下さい』

山田先生はそう言うと、アリーナ内、一杯にターゲットが出された。

イチカはフェニックスのビームライフルとメガビームキャノンを斉射し、煙が晴れると其処には凸凹になったアリーナだけしか残っておらず、これを見た山田先生と千冬は黙るしかなかった。

「もう、戻っていいか？」

イチカは通信で山田先生に尋ねた。

『あつ、はい。お疲れ様でした』

山田先生はなんとか気を取り戻し、イチカに労いの言葉を掛け、イチカはそれを聞くと、カタパルトまで飛んで戻って行く。

「さて、テストは終わった。次に評価だが、合格だ。このIS学園に入学してもらおう」

織斑先生はイチカに言った。

「一応、聞くが拒否権はあるのか？」

「あるがもし、拒否すれば世界各国から狙われることになるだろうな。なにせ『世界初の男性操縦者』が現れたんだからな」

「情報規制で何とか出来ないのか？」

「残念ながら今回の件はIS委員会に報告せねばならない」

「イチカ君を守るためにも此方としては入学してもらいたいです」

イチカは少し考える。

「分かりました。其方の言う通りIS学園に入学しましょう」

「では、すぐzy「ですが」な、何かあるんですか？」

山田先生はイチカがIS学園に入学することに胸を撫で下ろし、入学の準備をしようとするがイチカが待ったを掛ける。

「其方の言う通りIS学園に入学する代わり此方からも条件がある。一つ目、有事の際、俺に自由に行動させる。二つ目、俺の言う事を詮

索をしない。フェニックスガンダムを解析したならそのデータの完全消去、そして二度と触れないで欲しい。以上が俺の出す条件だ」

一つ目はコード・アメリカスがこの世界に居るのであれば対処できるのは現段階では自分だけであり、他の人では対処できないと考えたから、二つ目は自分と関わることで起きるであろう被害を最小限にするため、三つ目はフェニックスガンダムそして恐らく在るであろうジェネレーションシステムのデータの悪用を防ぐための物だった。

「別に構わないがそのフェニックスガンダムを此方が解析して分かったのは機体名と武器の名称そしてその威力だけだが……其方が望むのであれば消去しよう」

千冬という事がイマイチ信用していないイチカだが、確認は彼女に任せればいい。

イチカが今考えることはアメリカスの対処と此方側の戦力の確保である。

「貴女方を一応、信用しますが……もし嘘をだった場合ここにある機器をすべて破壊しても消させてもらいますよ」

「やれるものならやってみろ。さて明日から一週間は自由だが、その前にこれを渡しておく」

千冬はイチカにカード類を渡した。

「これは？」

「今からお前が一週間住む部屋のルームキーと銀行のカード類が入っている。発見当時はそのISと首にあるネックレス以外なかったからな」

千冬はそう説明した。

「衣類なり好きな物を買おうといい。さてこれが参考書類だ。読んでおけよ」

千冬はそう言うと、ナンバーの書いた鍵を渡した後、部屋から出て行った。

イチカは割り当てられた部屋に行くといチカは盗聴機器が無いか調べた所、見つからなかったが今後、あるかもしれないので警戒を怠らないようにする。

イチカは端末にフェニックスガンダムを繋ぐと其処には聖母を思わせる女性が出てくる。

「やはりここにいたか。アプロディア」

「はい。お元気そうですね。イチカ・ギルオード」

二人は軽く挨拶をすると本題に入る。

「早速だが、アプロディア。フェニックスガンダムは何故、ISSになっている？」

「分かりません。恐らく、フェニックスガンダムは世界の修正力により、この世界に適した姿になったと思われる。そして私はフェニックスガンダムのコア人格という扱いになっています」

「じゃ、ジェネレーションシステムは？」

「分かりません。ですが旧ジェネレーションシステムはコード・アメリカスがあの場合にしなければ再起動しません。コード・アメリカスが戻るまで一時的に停止していると思われます」

そして、イチカは一番気になることを聞いた。

「皆はどうなったんだ？」

「コード・アメリカスが世界から消えたことにより、一時的に停止し、ジェネレーションシステムは待機状態となり世界に悪影響を与えることは無いでしょう。それにより呼び出されたレギナ達も活動を停止しているはず。私が万が一の為に「アービー」に残したバックアップが入っています。それにより現状を説明しているはず」

「そう、ならよかった」

イチカは憶測であるがマーク達が無事であると聞き安心する。

「ですが、あの空間の歪みに飲み込まれたのはイチカ・ギルオード。貴方だけではありません」

「ああ、ここにはコード・アメリカスが恐らく... いや確実にいる」

「彼女は邪魔者である貴方を抹殺しにかかるでしょう」

「その時は...」

拳を強く握り、
「俺が倒す！この命に引き換えてもだ!!」

(耳塞いだのに…響く…！)

両手で耳を塞ぎ超音波攻撃を防いだつもりだったが効果は無く、イチカにダイレクトダメージを与えた。

「千冬様、本物の千冬様よ!!」

「ずつとファンでした!!」

「私、お姉様にこの学園に来たんです!北九州から!!」

「…よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。関心させられる。それとも何か?私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

千冬の熱狂的なファンからのアプローチに当の本人は頭を抱えている様子だ。

その後、クラス全員が自己紹介した所でHRは終わり休み時間にイチカに接触する人物は特におらず、女子達はお互いに譲り合いをして現在に至り、アメリカスがいつ来てもいいように武装面は充実させた。いいイチカは自分が居た世界で武装が作れるか聞く。

『アプローチ。フェニックスの武装って増やせそう?この世界の武器は論外ね』

『私が持っているデータを元にすれば作ることは可能でしょう』

「少しいいか?」

この世界の武装は貧弱な為アメリカスのあの硬い装甲を削るのは不可能と考えたイチカなのだ。

『クイーンアメリカスのあの装甲は脅威だからな。サテライトキャノンとかツインバスターライフルとか使えば行けるか?』

『試してみなければ分かりませんが、恐らく少し傷をつけるのが背一杯かと。それにエネルギーを多く消費しますので、長期戦を視野に入れるのであれば止めておいた方がいいと思われます』

「お、おい!聞いているのか!一夏!」

サテライトキャノンやツインバスターライフルは火力面では優れているがエネルギー面を考えるのであればやめた方がいいとアプローチは打診する。

『後はシステム面か。質量を持った残像やゼロシステムみたいなシステムを使うか？だが。質量を持った残像はまだしも他のシステムはデメリットがな…』

『はい。実際にTRANS-AMは機体性能が落ち、ゼロシステムは精神力が弱ければ最悪、死に至ってしまいます』

「グスン…。モツピー知ってるよ。こういうの…。虐めっていうんだよ」

先程から声を掛けていた少女はシカトし続けた結果、薄らと涙を浮かべ始める。

『些か手遅れな気がしますが。其方の女性を構わなくてよろしいのですか？』

『出来れば、このまま無視したかった』

「で、俺に何の用？」

イチカは泣き始めた少女に声を掛けると涙顔から一瞬で笑顔になり、キリツとした表情になる。

この一連の動きは顔芸と言っても過言ではない。

「うむ！少し話がある『キーンコーンカーンコーン』クツ！また後で来る!!」

「もう二度と来なくていいからー」

『イチカ・ギルオード。最初っからこれを狙ってたのですか？』

「フツ。計画通り」

この時、イチカの顔が某新世界の神の様な顔をしていたとか。

「ではここままで質問のある人？」

一通り授業が済んだところで、山田先生がわからない人がいないかを確認するために聞いてきた。

イチカは一週間前に渡された電話帳と見間違える程の厚さ参考書を三日で覚えた。

向うの世界では世界によってMSの操縦が異なり、機体によっては癖が強いのもあり、それらを把握することに比べれば此方の方が楽で

ある。

そして、山田先生の質問に対し、誰一人上げることが無かった。

「イチカ君もちゃんと覚えて来たんですね」

「はい、やれと言われたことはちゃんとやる主義なので」

「ちゃんと覚えてきて先生は嬉しいです。次は12Pを開いてください」

山田先生は嬉しそうに頷くと授業を再開する。

そして、再び休み時間が訪れ、イチカは今後、何らかの戦闘の時を
考えていた。

（フェニックスを使うにもアレはこの世界じゃ、オーバーテクノロジー
ジーだよな）

フェニックスに搭載されているナノスキン装甲は勿論バーニング
ファイアは翼から出す特殊な金属によつて繰り出すがこの世界にそ
んなものは存在しない。

もし、これらの情報が世界に漏れた場合、フェニックスを狙う者は
更に増え、イチカ自身に危険が及ぶ。

（フェニックスの能力を封印状態にするか… 出来ればそんなことし
たくないんだがな…）

イチカがそんな事を考えていると一人の人物が接近する。

「少し、よろしくくて？」

「何？」

イチカは声のした方を向くとくと縦ロールのある長い金髪に透き
通った碧眼を持つ如何にもお嬢様という女子がいた。

「まあ？ なんですのそのお返事。わたくしに話しかけられるだけで
も光栄ですのだから、それ相応の態度というものがあるのではないか
しら？」

そして、イチカはこの女子からある事を感じる、それはこの世界に
充満しているモノだった。

(コイツも女尊男卑という世界の歪みに囚われた人物か)

さも、自分は有名人ですよ、というがここ最近まで異世界にいたイチカにとっては知らないも同然である。

『彼女の名はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生です』

『ふうん、代表候補ね。威張るなら国家代表になってから威張れよ。てかなんでそんな事知ってるんだ?』

『今後の為にこの世界の情報を集めていた時、彼女の情報を見つけた』

それってハッキングじゃ、と言いたかったがここでは言わず、まずはアプロディアの情報を使いこの場を収める。

『ハイハイ。イギリスの代表候補生のセシリア・オルコットが何用で?』

『その通り、私はイギリスの代表候補生。つまり、エリート中のエリートですわ!!』

(うわあ… コイツ… メンドクサイ部類だ)

「わたくしは優秀ですからあなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ。わからないことがあればまあ、泣いて頼めば教えて差し上げてよろしくてよ。なにせわたくしは入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから!!」

「倒したねえ…。一応、俺も倒したんだがな」

「なっ!」

イチカは弾との再開後、自室に戻ると次の日、詳しいデータを取るため、学園内で実力のある教師と戦わされたがフェザーファンネルとビームサーベルの連撃ですぐ沈めた。

「… わたくしだけと聞きましたか!?!」

「女子だけの話ってオチだろ? まあ、落ち着け」

「これが落ち着いていられ————『キーンコーンカーンコーン』…… 話の続きはあらためて、よろしいですわね!!」

そう言ってセシリア・オルコットは去って言った

「それでは実践に向けての授業を始めたいと思います」

山田先生は授業の内容を説明し始める。

と、授業を始める前に千冬が教壇に立つ。

「授業を始める前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。自薦他薦は問わない」

この時、イチカは嫌な予感した。

「じゃ、ギルオード君を推薦します」

「私もイチカ君を推薦します」

「イギーでいいと思うよー」

「デスヨネー」

一人がイチカを推薦すると次々とイチカを推薦し始める。

イチカはアメリカスの事もあり、無駄な時間を過ごしたくないので拒否しようとする一人の女子が待ったを掛ける。

「納得できませんわ!!」

イチカは突如、叫び出したセシリアに意識を向けるが話が長くなりそうなので静かに聞く。

「このような選出は認められません!! 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって耐えがたい苦痛で「ふざけるなよ」なんですって!!」

「お前の様な、自己中心的で身勝手な奴がどれだけ世界に歪ませているのか分かっているのか」

「身勝手? 一体何をおっしゃってますの。今の社会を作ってきたのは女性ですわ!! 所詮、男性なんて子孫を残すことにしか能がない存在ですわ」

「セシリアさん。それは言いすぎじゃ...」

「オルコットさん。不用意な発言はやめてください!!」

セシリアの発言は威厳も尊厳も人権もない家畜同然の扱いに流石のクラスの女子や教師が止めに入る。

「何をおっしゃいますか。私は事実を述べたまでですわ」

「自分の考えを改めるつもりは無いのか」

「ええ、勿論ですわ。そして私はイチカ・ギルオードに決闘を申し込めますわ。男性がISに乗ろうが何も変わらない事を証明してあげますわ」

「ああ、その決闘受けて立つ。俺は貴様のその歪みを破壊する」

イチカがそう言うのと、織斑先生は手をパンと叩き。

「さてと、話は纏まったな。それでは勝負は1週間後の月曜、放課後第3アリーナで行う、ギルオードとオルコットの各々は準備をしておけ。それでは授業を始める」

(アメリカスとの決着と…この世界の歪みを正す必要がある…)

4話

授業が終わり、イチカは食堂に来ていた。

食堂はイチカ見たさに満席状態でそして廊下は入れなかつた人で溢れかえっていた。

「一夏よ。オルコットとの決闘だが何か勝算はあるのか？」

「勝算も何も戦闘のせの字も知らん奴に負けるわけがない」

「しかし相手は代表候補生だぞ」

「問題ない」

イチカとしては問題事を起こす可能性が高い幼馴染みとの交流はしたくない、イチカは一人で昼ご飯を食べようとした所、何も言わずにイチカの前に座りご飯を食べ始め、現在に至るが今は其れより優先することがある。

優先事項の事を考えてると1人の生徒が自分の席の前で立ち止まっていることに気がついた。リボンの色からして上級生だろう。

「ねえ、ちよつといいかな？」

「… なんですか？」

「君、イギリスの代表候補生と決闘すんだってね」

「そうですが」

「君ってISの稼働時間ってどのくらい？」

「二回ですね。稼働時間は30分にも満たないですね」

「それじゃ候補生には勝てないよ。候補生はどの国でも最低3桁は乗っているはずだから」

イチカとて異世界では激戦を潜り抜けた歴戦の戦士であり、訓練と死戦で生まれる経験の差は歴然であり、そして何よりも覚悟が違う。

意志や覚悟のない力は只の暴力であり、それはこの世界そのものにも言える。

「なんなら、私がISについて教えてあげようか？」

「結構です。私が教えることになっていきますから」

「でも、あなたも1年生でしょ？そしたら上級生の私が教えたほうが「私は！篠ノ之束の妹ですから」っ!？」

篠ノ之束の名が出た瞬間、上級生は驚いた顔をしていた。ISの生みの親の妹が入学しているとは知らなかったのだろう。分が悪いと判断したのか上級生は去っていった。

「さて、早速放課後「必要ない」なに！」

「俺はお前のが思うほど怠けてなどいないければ、お前から学ぶことは無い」

「そんなの当然だ！なら、私がどれ程上達したのか見定めてやる」

「勝手にしろ」

「なら、今日の放課後、模擬試合を行う。もし、負けたなら私が鍛えなおしてやる！」

箒の言葉にイチカは了承する。

一日目の授業は終わり、教室で時間を過ごしていた時に山田先生から連絡があり、部屋の変更なしとのことだった。

その後、イチカは約束通り剣道場に来ていた。外には噂を聞きつけた生徒が押し寄せていた。

イチカが来たことがわかると、生徒たちは揃ってイチカに道を譲った。その先には剣道着の上から防具を纏った箒がいた。

「来たな、一夏」

「ああ」

イチカは荷物を置き、防具を付けると竹刀置きにあった小太刀サイズの一つと一般的な大きさの竹刀をとる。

「先に言っておくが俺がやるのは剣道でもなければ剣術でもない我流だ」

「何が言いたい？」

「型の様な動きをすと思うなよ」

「行くぞ!!」

イチカは一見隙だらけに見えるが実際は隙が殆どなく、現に箒の攻

撃を全て躲すか避けている。

「はあああ!!」

「なっ!!」

イチカは箒が上段から振り下るすがイチカは小太刀で受け止め受け流し、そのまま流れる様に移動し、箒の面に一撃入れる。

「これで終わりだ」

「強くなっただな…。どうしてそこまで強くなれたんだ?」

「逆に聞くがお前にとって強さってなんだ。目に見える強さか? 権力や財力か?」

「それは…」

「もし、小手先の強さに囚われているのなら強さという意味を考えればいい」

イチカは置いていた荷物を担ぐとその場を後にしようとするが箒が声を掛ける。

「なら、イチカは強さの意味を理解しているのか!!」

「強さの定義は人によって違うが俺は俺なりの強さの定義を持っている」

あの、何も出来なかった日を境に出来た自分の覚悟…。それは二度とあのような悲劇を起こさないとという覚悟であり、それは「護る力」と言ってもいいかもしれない。

『答えは己の中にある』俺が言えるのはこれだけだ」

イチカが居なくなった道場には深く考え込む箒だけが残っていた。

自室に戻ったイチカはフェニックスについて考えていた。

「フェニックスに能力制限付けずに戦うにはどうしたらいいかな」

『イチカ・ギルオード。フェニックスガンダムについて話があります』

「何? フェニックスに異常でもあったの?」

『確かに異常ですがこれは今の貴方にとっては朗報かもしれません』

イチカはアプロディアの言う意味の真意が分からず、首を傾げる。

『今のフェニックスガンダムには複数の形態があります』

「それはバード形態の事か？」

『いいえ、違います。フェニックスガンダムには本来の姿と異なる機体の姿があります』

アプロディアは部屋にあつたディスプレイにフェニックスガンダムの機体データが現れるとその隣には別の機体のデータにイチカは見覚えがあつた。

「Zガンダムにエクシア…だと…。どういふことだ…。」

『フェニックスガンダムはこの二つの機体にその姿を変えることが可能です』

「昔マーク兄に聞いた発見当時の能力制限時のフェニックスにしようかと思つたが… そっちの方が戦力を下げずに済むな」

これにより戦力面では多少改善され、イチカはここで気になった事をアプロディアに聞く。

「Zやエクシア以外にも変えることは可能なのか？」

『それについては分かりませんが、私が持っている機体のデータを使えば可能かもしれません』

「試してみる価値はありか… アプロディア、今度行われる試合の時はZガンダムで頼む。太陽炉やフェニックスの様に機密情報が少ないからな」

『分かりました。それとフェニックスガンダムにあるものが見つかりました』

「あるもの？」

『そうです。フェニックスガンダムからサイコフレームが見つかりました』

「えっ!？」

イチカはこの事実に驚く、まさかフェニックスからサイコフレームが見つかるとは思っていなかったからだ。

本来、フェニックスにはサイコフレームは搭載されておらず、それは前搭乗者のマークや整備班からもサイコフレームは無いと言われたからだ。

では、何故今まで気づかなかったのかというところフェニックスに搭載されているナノスキンは外部だけではなく、内部の方も自己修復するため機体修復の際は殆ど触れず、精密検査などはしていない。

「でも、なんで今更、サイコフレームがフェニックスに見つかったんだ？」

『推測が正しければこのサイコフレームは出来てから日が浅く、原因はフェニックスガンダムのブラックボックス未解明の部分だと思われます』
事実、フェニックスにはいまだ解明されてない部分が多く、例としてはナノスキン装甲が挙げられる。

過去にフェニックスの完全生産を試みたものの、解明出来ない所があり、フェニックスの特殊技術は再現できず、それでも簡易量産されたのがフェニックス・ゼロであり、マーク達が発見したのは能力に限が掛かった状態のフェニックスと中破状態のフェニックス・ゼロであった。

フェニックスとこの事実を見つけたのは人も動物もない滅びた世界であったマークは言った。

「ジェネレーションシステムにはフェニックスについて何か情報はないのか？」

『残念ながらジェネレーションシステムにはフェニックスガンダムに関する情報はありません。その機体はどの世界にも属さな未知の機体なのです』

「ジェネレーションシステムでも分からないとは…。」

『ジェネレーションシステムも万全ではありません。膨大なネットワークとデータを持ってしても解明できないことはあります。例としてターンタイプ等が挙げられます』

「フェニックスに関しては分かりますか…。」

フェニックスに関する謎は解けるどころか寧ろ深まるばかりである。

イチカは授業の用意と今後、必要になるであろう武器や強化パーツ等のピックアップするのだった。

5話

IS学園入学から数日が経ち、イチカはここ数日整備室に通っていた。

「イギー。最近、整備室に行ってるけど何してるの?」

「イギーって俺の事?」

イチカは呼ばれた事の無い名で呼ばれると恐らく、自分の事を呼んだ袖が余りに余った制服を着た如何にもほほんとした少女に聞く。

「そうだよ。で、イギーは何してたの?」

「専用機の新しい武器だけ」

代表決定戦までに一つだけ武器を作っておきたかったからだ。

イチカの言葉にクラスがざわめきだす。

「専用機!?!一年のこの時期に!?!」

「それって政府からの支給品?」

「いいなく。私も欲しい」

何故、クラスの女子がそこまで専用機を欲しがるのか、それはISの数に限りがあるからだ。

ISにはその中心であるコアが必要だ。このISのコアは開発者である篠ノ之束にしか製造することはできず、完全なブラックボックスとなっている。

しかも、博士はコアを現在世界中にある467機以外作ることを拒絶、行方不明となっているので、各国家、企業、組織、機関ではそれぞれ割り当てられたコアを研究している。

ISは世界最強の兵器だが大量生産できないのが弱点と言えるだろう。

その貴重なISを個人の専用機として与えられるのは一握りの、国の代表の様な立場になるような人間しかないのだ。

だが、イチカの専用機である、フェニックスは元は15M以上の大きさを誇る機械であり、普通のISとは根本的に違う。

イチカが専用機持ちである事を知り、騒がしくなる。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていませんでした」

でしょうけれど、勝負はフェアじゃあ「ゴオン！」な、なんなんです!?!」

専用機の話聞き、セシリアが何か言っていると教室に現れた、赤い金属の球体がぶつかる。

球体はそのまま跳ね、イチカの机の上に着く。

「あれ?なんでここにハロが来たんだ?」

「デキタ。デキタ」

ハロは羽を上下させて口?を開けると其処には一つのメモリーがあつた。

「サンキュー、ハロ」

「ねえ、イチカ君。それ何?」

イチカがハロに礼を言うとハロは機械の眼を点滅させるとそのまま転がり、イチカの膝の上に乗つると一人の女子がハロについて聞く。

「此奴の名前はハロ。俺が一から作ったロボットだ」

「へえ。イギー凄いなえ」

「イチカ君、私に触らせて!!」

「次、私に触るの!!」

「いや、私よ!!」

「ウワアアアアア!」

ハロに興味を持った女子がハロを手に取り触り始めると我先にとハロと触れ合おうとする女子による、ハロ争奪戦が起き、その被害者であるハロは声を上げる。

「ねえ、イギー。ハロって何が出来るの?」

「ん。プログラムによって変わるけど、基本人間と触れ合おうペツトロボットで身の回りのお世話とか出来るな」

「イギー。私とかんちゃんの二つ分作って」

「かんちゃんって誰?」

「かんちゃんは私の幼馴染なんだよ」

「材料が無いから2つが限度かな」

イチカは現在三つの武器と装備を作っており、そのためハロを作る

数も制限されているのだ。

「ええ。私も作ってもらおうと思ったのに」

『うんうん』

どうやら、クラスの半分以上がハ口の事を気に入り、自分用に作って欲しいと思っていたらしい。

「ええっと……のほほんさんが先に言ったからのほほんさんは作るけど皆の分は作れない。けど、週に何回かハ口を連れてくるから、それで勘弁してくれないかな……」

女子は顔を見合わせると頷き。

『分かった。その約束忘れないでね!!』

「お、おう」

女子が一斉に言い、イチカは少し気圧されているとチャイムが鳴り席に戻っていった。

なお、授業中ハ口はイチカの膝の上で静かにしていた。

クラス代表決定戦当日 第3アリーナ・Aピット。

其処にはイチカ、千冬、山田先生、何故か箒がいた。

「ギルオード、準備しろ」

「了解」

イチカはフェニックスとは違う姿——Zガンダムを纏っている。

「むっ……前回の時とは姿が違うな」

「フェニックスには複数の姿がある」

「成程、形態移行か」

「これが……一夏の専用機」

疑問に思っていた事を簡易的に説明し、イチカはカタパルトに向かう。

「機体の射出をイチカ・ギルオードに譲渡します」

「イチカ・ギルオード、Zガンダム……飛翔する!!」

機体が外に押し出され、ウエイブライダー W R 形態にはならず、そのまま直進する。

「ふ、フルスキン全身装甲タイプですって!? なんなんですかの!? そのISは!!」
既にアリーナに出ていた青い機体、イギリスの第三代型IS、ブルーティアーズに乗るセシリアが、見た事も無いフルスキン全身装甲に驚いている。

だが、すぐに気を取り直して、ブルーティアーズの主砲であるライフル、スターライトmkⅢをイチカに向ける。

「まさか逃げ出したのではと思いましたが、安心しましたわ!」

「俺は逃げも隠れもしない!」

「これが最後ですわ! この決闘、既に私の勝利は絶対そのもの!

素直に泣いて謝るというのでしたら、まあ許して差し上げないこともございませぬことよ?」

「随分と自分の力を過信しているが... それは何時か自分を滅ぼす要因になるぞ!」

「この私、セシリア・オルコットにそのような事は起きませぬわ!!... :
そして、お別れです!!」

スターライトmkⅢの銃口から一直線にZガンダムにビームが放たれると同時に試合開始の合図が鳴り、観客は皆、この一撃が確実に命中すると思った。

だが、異世界で多くの戦いに身を投じたイチカにとって、教科書通りの真っ直ぐなレーザーなど、脅威にならない。

余裕を持ってレーザーを躲したイチカはビームライフルを構える。

「は、速い!? い、いえ... : たとえ速くても、それだけですわ!

踊りなさい! 私とブルーティアーズが奏でるワルツ円舞曲を!!」

どうやら、セシリアは全身装甲II遅いという考えがあったらしく、Zガンダムの機動力に驚く。

「くっ、ちょこまかと... :」

「そんな攻撃じゃ、俺に当てることは出来ないぞ!」

セシリアの攻撃は機動力の高いZガンダムに当てることはできず、スターライトmkⅢだけでは不利だと思い、誘導兵器ブルーティア―

ズ4基を射出してZガンダムを追わせるが。

「動きが甘い！ ビームコンフューズ!!」

「なッー」

イチカは腰部スカートアーマーの左右のホルダーに収納されているビームサーベルを取り出し、セシリアに向けて投げつけ、ビームライフルを数発撃ちこみ、拡散させると4基のブルーティアーズを全て落とし、セシリアに急接近する。

「掛かりましたわね！ ブルーティアーズは6基ありましてよ!!」

「それがどうした!!」

セシリアの腰にあるミサイル型のブルーティアーズをWR形態に変形し上空に向かい、目標を失ったブルーティアーズはそのまま地面に着弾する。

「そんな、ISが変形するなんて…クツ！」

イチカはWR形態のまま、ビームガンとビームライフルを放つとセシリアは数発被弾する。

「まだアアー」

「なっ！…この私が…キヤアア！」

イチカはWR形態からMS形態に変形するとイチカはビームライフルの銃口からビーム刃を形成し、セシリアに向けて投げつけ、自分の武器を投げるイチカに驚きながらも避けたセシリアだが、投げつけると同時にセシリアに向かっていたイチカはビームサーベルでセシリアを往復ビンタの様に斬りつけると回し蹴りを繰り出し、避けきれなかったセシリアはそのまま地面に叩きつけられる。

イチカの攻撃を喰らい過ぎてシールドエネルギーが残り100を切った。装甲もボロボロで、スラストーにも異常が出始めてた。

「クツ…この私が…男性如きに…」

「その独善的な考えは自らの視野を狭くし、可能性を殺す。だから、その考えを辞めてもっと広い視野で周りを見るんだ!!」

イチカはここ最近まで作っていた武器ハイパー・メガ・ランチャーをセシリアに向けて放つ。

「きゃああああああああつ!!?!」

その一撃によりブルーティアーズの全身の装甲と、スターライト mkⅢが破壊され、シールドエネルギーも0になってしまった。

「ブルーティアーズ、シールドエネルギーエンプティー、勝者イチカ・ギルオード」

ピットに戻ったイチカを待っていたのは千冬と箒だけで山田先生は仕事が残っているためここにはいない。

「あの機体はなんだ。ISが変形していたがどういう仕組みだ」

フェニックスガンダム

「本来の姿は機密情報が多いので代わりに機体を用意させてもらった。人体に関する影響なら皆無だ。用が無いなら部屋に戻らせてもらおう」

実際に人体に影響はなく、変形時に少し体に違和感があったくらいである。

「あの時、複数と言ったがあれ以外にもあるのか？」

「あるが、情報開示は出来ない」

「待て一夏！何故、千冬さんとそこまで中が悪い。それにお前はそんな名ではなく、織斑「違う!!」い、一夏!?!」

「俺はギルオード…イチカ・ギルオードだ！俺の前でその名を呼ぶな!!」

イチカ嘗ての名で呼ばれるのを嫌う。

それはイチカがまだ織斑一夏だった時に助けられなかった、一人の少女の事を思いだし、その少女の無残な姿を見て泣き崩れる家族の姿が今も記憶に焼き付いている。

イチカはその時、何も出来ずに起こしてしまった、一つ惨劇を思い出し、自分自身に対し悲しみと憎しみが生まれる。

その、惨劇を目の当たりにしたからこそ戦う事を決意し、より平和な世界を望むようになり、何も出来なかった自分自身と決別するため

に改名したのだから。

「叫んで悪い……。だが、俺をその名で呼ばないでくれ」

イチカはピットが出る。

「一夏……一体、お前に何があったんだ……」

「千冬さん……」

二人は変わり果ててしまったイチカに困惑することしかできなかった。

6話

セシリアとのクラス代表決定戦から翌日、朝のSHRで教壇に立った山田先生がイチカが代表になった事を伝え、イチカの周りは騒いでいるが当の本人は項垂れていた。

一時間目の授業が終わった後、セシリアから謝罪の言葉と自分の態度を改める事をイチカに言ってきた。

この時、イチカはセシリアがいい方向に変わった事が嬉しかった。小さな変化だがそれは歪んだ世界を変える大きな一歩でもあるのだから。

その後、イチカ達はグラウンドにて千冬の授業を受けていた。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。ギルオード、オルコットの両名はISを展開。試しに飛んで見せろ」

千冬の言葉にイチカとセシリアは即座にISを展開した。

「何を呆けている。授業に集中しろ」

『は、はい！』

イチカの展開した全身装甲のISという物珍しさにクラスの大半が見惚れていたが千冬の叱咤により、即座に切り替える。

「よし、では飛べ」

その言葉に二つの閃光が空を舞い、上空で制止する。

「先日もそうですが、ISを数回起動させた初心者と思えませんわ。なにか、心構えやコツの様なモノがございましたか？」

「慣れとしか言いようがないな。まあ、そこは深く言及しないでくれ」

イチカの言葉にセシリアは少し不満そうな顔をする。

「一夏っ！いつまでそんな所にいる！早く降りてこい！」

いきなり通信回線に箒の怒声が響き、下を見ると箒が山田先生からインカムを奪い取り、後ろで山田先生がオロオロしていた。

千冬が箒を出席簿で頭を叩き、インカムを取り返すと、

「丁度いい。その位置から急降下をし、目標から地表から十センチだ」

「では、お先に失礼します。イチカさん」

千冬の指示を聞いたセシリアは降下し、指示通り十センチで止まっている。

「さて、行きますか」

イチカはZをWRに変形し、そのまま地表に急降下を開始し、地表二十センチの所でMS形態の変形を開始し、十センチでMS形態で停止する。

「そこまでの事を求めていなかったのだが……まあ、よくやったと言っておこう」

その後、イチカはセシリアの横に並ぶと武装の展開を開始する。

「では、ギルオード武装を展開しろ」

「はい」

そう返事をした後、イチカはビームサーベルを展開する。

「出すのに0.3秒……上出来だな」

イチカの出来に千冬は褒めるとセシリアの方を向く。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

そうしてセシリアは左手を肩の高さまで上げ、横に突き出すとその手にスターライトmkⅢが握られていた。

「流石は代表候補生と言ったところか。だが、そのポーズは止めろ。横に向かって展開させて一体誰を撃つ気だ。正面に展開するようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしがイメージをまとめる為に必要な――」

「なら、左を見てみるといい」

「え?」

セシリアは左側を見てみると殺気を含んだ鋭い目つきでビームサーベルをセシリアに突き立てるイチカが目に入った。

「……あ、悪い。銃口を向けられたから反射的に構えてしまった」

「言いたいことは分かったな。仲間にやられたくなかったら直せ。いいいな」

「……分かりました」

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「え？あ、は、はい」

千冬に言われセシリアは直ぐに武装を展開しようとしたが、スターライトmkⅢの様に直ぐには展開できず光りの粒子が彼女の手の中で漂っていた。

「クツ」

「まだか？」

「も、もう直ぐです… ああ、もう！『インターセプター！』」

千冬の催促にセシリアは武器の名前をやけくそ気味に叫ぶとその手にショートブレードが現れた。

「… 何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いには入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「巧妙な手段であったにしてもいとも容易く懐に入れ、負けたのはどこの誰だ？」

「そ、それ…」

セシリアはごによごによとまごついた後、イチカの方をキツ、と睨みつけた。

「オルコットは今回上げられた難点の克服に専念しろ。では、今日の授業はここまでだ」

夕食後の食堂には一年一組のクラスメイトがいた。

「それでは、ギルオード君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう〜！」

パン、パパン！

一人のクラスメイトの音頭であらかじめ配られていたクラッカーが一斉に鳴らされた。

しかし、クラスが盛り上がってる中一人だけテンションが低い奴が

いた。そう、今回のパーティーの主役のイチカであった。

「はあく、何でこんな事になったんだろうな」

イチカは並んでいた料理を少し取ると外に向かう。

「あれ、ギルオード君どこに行くの？」

「少し、外の空気を吸いに」

そう言うといチカは外に行き、雲一つない星空を眺める。

「綺麗な星空だ……。こんな綺麗な空の下で今も戦いは起きている。それに関してどう思いますか？織斑先生」

「ほお、いつから気づいていた」

「最初っからだ」

イチカは壁に背を付け、手を組んでいる千冬に聞く。

「私自身戦争という物を体験したことがないのだからどうと言われても困る」

「戦争は多くの命を奪い多くの悲しみと悲劇を生む。そしてその悲しみや悲劇は憎しみに変わり、新たな戦争の火種になる」

「まるで見て来たという物言いだ、それは自身が体験した話ではないだろう」

「確かに自分の家族自身がそうだった事はない。だが、自分に力が無いばかりにその悲劇を起こしたことならあるんだよ。織斑先生……。いや、千冬姉」

「!？」

イチカが自分の事を小さい頃から言っていた呼び名で呼んだことに驚く。

「……。い、一夏……。私のことが……。分かるのか……」

「ああ、元気そうだな」

千冬はイチカに抱き付こうとするがイチカはそれを手を伸ばし止め、自分が何をしようとしたのか自覚すると羞恥で少し顔を赤くし少し下がる。

「心配を掛けたことは謝る。だけど、俺はもうアンタと一緒に居れない」

「もし、あの時の事が原因だと言うのなら、アレは日本政府のせいなん

だ！」

千冬はあの時、イチカを助けずに決勝に出たのは大会二連覇という偉業を成し遂げようとした千冬に『気を使って言わなかった』日本政府により、誘拐の事を知らされぬまま表彰式まで行き、そこで束とドイツ軍により、イチカが誘拐された事をしり優勝トロフィーを投げすて現場に向かったが其処には血痕一つなく、捜査は難攻し、打ち切りとなった。

「別にそのことに関して何も思っていない。… といえは嘘になるが今となつてはどうでもいい」

「なら、何故一緒に暮らせないなんて言った！」

「俺はこの手を直接では無いとはいえ、この手を血に染めた。そんな俺と一緒に居たくないだろ。それに歪んだ世界を良しとし、平然と暮らすアンタらが俺には理解できない」

「さて、一夏。私が知らない間に何があつたんだ!!」

女尊男卑という歪んだ世界が当然のように振る舞い、男性を奴隷、家畜の様に扱い人としての尊厳そのものを否定していると言つていい。

だが、これは人が本来やってはいけない事だとイチカは理解しているからこそ、現在の社会に何の違和感もなく過ごしている事事態が理解できなかつた。

「それは言えない。これは俺の問題であり、アンタじゃ、どうにも出来ない問題だ」

「そんな事はない！ 私や束がお前の力になれるかもしれないのだぞ!!」

「今は束さんを信用することは出来ない。それに例え世界最強と呼ばれたアンタでもきつと無理だし、最悪… 命を落とすかもしれない」
「お前を守る為ならこの命など惜しくない!!」

千冬の言葉にイチカの目つきが一瞬、鋭くなる。

「俺達が起こした戦いに無関係な奴を巻き込みたくないんだ!! 例え、それが元家族でもな!!」

「今、お前は『達』と言つた。それは敵、もしくはお前に仲間がいると

いうことだ。もし後者なら、他の奴に任せてお前は戻ればいい。お前を戦いに巻き込む様な奴と関わらなくていい!!だから・・・！」

「違う！ あの人達は俺に戦うよう強制したことなんて一度もない！ 誰の意思でもない、俺個人の意志で戦いに参加している。もう、二度と・・・あの惨劇を・・・悲しみを生まないために俺は戦う事を決意したんだ!!」

「一夏ア！」

千冬の眼にはいつの間にか涙を流し、その光景にイチカは心が痛むがイチカは引かなかつた。

「頼むよ千冬姉・・・俺は世界でたった一人の姉であるアンタを失いたくないんだ。これは・・・イチカ・ギルオードとしてではなく、アンタのたった一人の弟『織斑一夏』として、最後の願いなんだよ」

「一夏・・・」

イチカは笑顔で言うがそれは何所か悲しみを感じる笑みだった。心の中にはまだ、彼女を家族と思う気持ちが残っているのかもしれない。

「ギルオード君。さつき、叫び声みたいなの聞こえたけど大丈夫？」

「ああ、大丈夫。少し、脚を捻っただけだから。今、行くよ」

イチカは自分呼んだクラスメイトの元に向かう途中、千冬に周りには聞こえない小さな声で言う。

「だから、俺にはもう関わらないでくれ」

千冬はイチカが何処か遠く、自分の手が届かない所にいる様に感じた。

イチカはバルコニーから出ると自分を呼んだ女子と合流する。

「アレ、織斑先生は？」

「星が綺麗だから、少し見てから戻って」

「そうなんだ。そういえば、新聞部の人があ、いたいた！」あの人だよ」

クラスメイトが離していると2年生の女子が割り込んできた。手にはカメラとメモ用紙、それからペンが握られていて、見るからに新聞部辺りの人間だというのが解る。

「私は新聞部の薫 薫子、今話題の男性IS操縦者であるイチカ・ギルオード君を取材しに来ました〜!」

「インタビュ―?」

「そそ、君がイチカ君よね。取材してもいいかな?」

インタビュ―くらいなら構わないと、了承の意を示すと、何処から取り出したのか薫子はマイクをイチカに向ける。

「じゃあ先ず、代表候補生であるオルコットさんを倒してクラス代表に就任したわけだけど、その意気込みなんかを聞かせて頂戴」

「戦いになる以上全力で相手する。そして、相手が女尊男卑だろうと屈したりはしない」

「無難だけど全力で相手する。いいね、いいね。それに今の社会に対するその発言最高だね!」

その後も質問は来るが自分の経歴やフェニックスに関しては答えず、他はすべて答えた。

「それじゃ最後に専用機持ち全員で写真を撮りたいから、イチカ君とオルコットさん集まってくれる?」

言われた通りに集まり、薫子がカメラを構えた。

セシリアとイチカが手を握るように指示するとシャツターが押されるのを待つ。

「じゃあ、いくよー! 49+56÷6×4は?」

「86.333」

「おお、正解!」

暗算しろとでも言うのだろうか。

普通なら即座に答えれない四則計算を答えたイチカに内心、感心しながら一同は薫子がシャッターを切った瞬間、イチカとセシリアの後ろにクラスメイト全員が集まって写真に収まった。

何気に箒もイチカの後ろに立っているので、これでクラスの集合写真と化したのは言うまでもない。

「あゝ、まあ良いか」
これはこれで記念になると、強引に納得する事にした薫子であった。

7話

パーティー終了後、イチカ現在作っているモノの進捗具合を確かめていた。

「Zガンダムの追加武器はあらかた終了したし、エクシアの追加装備のGNアーマーは75%... 両方ともそう時間は掛からないな」

現在の所、Zだけでも十分行けるが今後、来るであろう敵に対抗できるように装備を整える必要がある。

アプロディアはデータを使えば新たな機体を使う事が出来るかも知れないと推測し、試しにやってみたが結果だけ言うなら失敗である。そのため装備の追加を優先しつつ新たな武装なども考えているのだ。

「それに何とか布のほんさん本音達のハロは作れたし、明日渡すかな」

イチカは新しく作った二つのハロに視線を移す。

「さて、明日も学校だし、そろそろ寝るか」

イチカは部屋の電気を消し、ベッドに横になり、夢の世界に旅立つ。

イチカのクラス代表就任パーティーの翌日。教室に入ってみるとクラスは新しく来る、転校生の話題で盛り上がっていた。

「イギーは新しく来る転校生どんな人だと思う〜?」

「さあ、それは俺には分からないがいい奴が来ることを願うよ。後、コレ」

「わあー!ハロだ。チャンとかんちゃんの分もある」

「約束はちゃんと守るさ」

イチカはのほんさんに黄色と水色のハロを渡す。

自分のハロはというとクラスの女子に玩具にされ、偶にイチカを呼ぶ声が聞こえる。

「その転入生なんだけど、中国の代表候補生らしいんだって」

「ふーん... (中国か、アイツは元気に過ごしてるのかな?)」

イチカは内心で、昔、弾達と一緒に遊んだ人物の姿を思い浮かべる。

「フリーパスの為に頑張ってるね?」

「そうだよ、ギルオード君が勝ったらこのクラスは嬉しいからね」
「それに、一年の中で専用機を所持してるのは四組と一組だけだから絶対勝てるよ！」

「——その情報、古いよ」

すると、教室の入り口に一人の少女が扉に背を持たれ掛けながら言う。

「お前、鈴か……」

「久しぶりねイチカ。それから、宣誓布告にきたわ、覚悟しなさい」

鈴音はそう言うのと、一夏に指を刺しながら言う。

「なに、格好つけてるんだ？ 似合わないぞ？」

「な、なんですってっ!!」

鈴音はイチカに言われた事が癪に障ったのか、イチカの元に行こうとしたが、

バシンツ!!

「ツ!? 何よ、だ…れよ」

鈴音は頭を叩かれたので、叩いた本人を見ようと後ろを振り向くとそこには般若がいた。

「予鈴は既に鳴っているぞ。さっさと自分の教室に帰れ」

「ち、千冬さん」

「ここでは織斑先生だ。それから聞こえなかったのか？ 私は教室に帰れと言ったが？」

「は、はいっ!!」

千冬による怒号で鈴は脱兎の如く、自分の教室に戻っていくのだった。

昼休み 食堂

「誰だあの小さい奴は！ えらく親しげだっだな!」

「誰ですのあの小さな方は！ 随分親しいようでしたが!」

「二人とも落ち着け」

「そんなことはどうでもいいっ!!」

「そんなことはどうだっていいですわっ!!」

「デコピンお見舞いするぞ」

「(シーン)」

周りの生徒の視線を気にもせず、二人に詰め寄っていたがイチカのデコピンという言葉を聞くと静かになる。

二人は一度だけイチカを怒らせた事があり、その際にデコピンをしたのだが、その威力は千冬の出席簿アタックと同等であり、その一撃を喰らいたくない二人は静かにするのだった。

「アイツは昔の知り合いでどうやら色々あつたらしい」

「こそ、色々あつてね」

「っ!!」

突然聞こえてきた声に、箒たちは振り返る。そこに立っていたのは、ラーメンをお盆に載せた鈴音であった。

イチカは最初っから気づいていたため気にせずジュースを飲んでいた。

「初対面みたいだし、ちゃんと自己紹介したらどうだ？」

「確かに、初対面の相手に挨拶も何もしないというのは礼儀知らずだからな。篠ノ之箒だ。よろしく頼む」

「へえ、アンタが…… よろしくね、篠ノ之箒さん」

——ゴゴゴゴゴゴ——

何故だろうか、ふたりはにこやかに握手をしているはずなのに形容しがたいプレッシャーが辺りを支配している事にイチカは気づく。

(何なんだ……このプレッシャーは……)

イチカは戦場で感じたことのないプレッシャーに少し困惑する。

「コホン、そしてこの私が」

「イチカってさクラス代表なんですよ？ 来月が楽しみね」

「は、話を聞きなさい！ 私はイギリス代表候補生、セシリア・オルコ

——」

「ゴメン、全く興味ないから」

「んなっ!?! こ、このおチビさんはっ……!!」

鈴の言葉にセシリアはさつきよりも顔を赤くし、血管を額に浮かびあがる。

鈴のこの態度には全く悪意は無い。すべて素で言っているのだ。もつとも、悪意が無い分夕チが悪いのだが。

「ふ、ふふふ…… そう余裕ぶつていられるのも今のうちですわ。すぐにでも私の実力を思い知らせて差し上げます！」

「あっそ、まあでもやめといた方がいいわよ。あたしが勝つし」「な、なんですって……!!？」

「弱い奴ほどよく吼えるって言うし、何よりあたし、強いからね」「ふっふっふ……」

「…… ふふふふふふ……」

——ドドドドドド——

(新たなプレッシャーだ!?)

またしても、辺り一帯に押し掛かるようなプレッシャーが漂い始めた。

鈴とセシリアは、お互い笑ってはいるが目だけは明らかに笑っていない。

完全に、宣戦布告している。

殺伐とした空気の中イチカは席を立ち、そのまま出口へと向かって再び歩き始めた。

「ん?もう、行くのか一夏?」

「俺にはやる事があるのでね」

箒の問いかけに一度は足を止めるが、イチカはそれだけ言うと出口に向かう。

「ねえ、イチカはいつもあんな感じなの?」

「そうだな。時間があればすぐ何処かに行ってしまう」

「イチカさんは勉強の方は特に問題ありませんし、恐らくISの整備をしていると思いますわ。それに……よく考えてみましたら私達イチカさんの事知らないことが多い気がしますわ……」

「……」

「イチカは必要最低限の事しか喋らない。

誰かに質問されれば答えるがイチカが今まで何をしていたのか聞くと一瞬だが目つきが鋭くなり、殺気が出る。

教師陣にイチカの事を聞こうとしても何も答えず、イチカ本人も答えない事から学園内ではイチカの過去を聞いてはならないという暗黙の了解が出来つつあった。

「…まあ、向こうが話さないなら訊かなくてもいいでしょ」

「そうですね。人には聞かれない事がありますから…」

セシリアと鈴はイチカが出て行った出口を向きながらそう言った。セシリアはイチカの事は何も知らない。故にイチカについて知ろうという気持ちはあるがそれが不味い事ならお互い気分が悪くなる。

鈴はイチカが誘拐された以降の事は知らないが名前を変えた事を含め何か事情があるのだと思っている。

二人は深く言及するつもりは無く、いつかイチカ本人が話してくれると信じている。

「…やはり気になるな…今度、一夏を問いただすとしよう」

「……………」

一名を除いて、

「あのですね、その用事と言う物がイチカさんにとって大事な事なら聞くのは些か無粋ですよ」

「だが…気になるもんは気になるだろ？」

「少しは常識持ちなさいよ。アンタだって聞かれたくないことの一つや二つあるでしょう。イチカが答えたくないってことはそう言う事よ」

「人のプライベートを知りたがる、と言うのは感心しませんわよ」

向こうの用事と言う物が把握できない以上、迂闊に訊いてしまうのはイチカに申し訳ない。

それが常識、と言う物だ。

その後、イチカは作っていた物は完成出来たため、放課後に試射しようとしてアリーナに向かうと何かの音が聞こえてきた。

その音が気になり、音のした方に向かう。

音がした方に向かい移動するとアリーナに着き、そこには一人の少女が打鉄を纏って訓練をしていた。

『彼女は一年四組の更識 簪。この学園の生徒会長である更識 楯無の妹であり、日本の対暗部用暗部である更識家の次女。日本の代表候補生です』

『よく知ってるな。もう、個人情報もくそもないよ』

個人情報保護という言葉は無いのかと思ったがイチカはアプロディアが世界中の情報を統括する存在であったことを思い出し、その中には個人のプライベートな部分のデータも統括しているのだとしたら彼女にとっては日常的な行動なのかもしれない。

その顔からは疲労と焦りが色濃く出ていた。明らかにオーバーワークであったが、本人は訓練に集中していて気付かないのだろう。

簪は自分の限界も忘れて無我夢中に訓練を続けていく。

「えっ？」

だが、肉体に限界が来たのか機体の制御を誤り落下し始める。

彼女の反応を見る限り、自分の意思に身体が付いてきていなかったのだろう。

「危ない!!」

イチカはZガンダムを展開し、WR形態になり、簪の近くまで行く。MS形態になり、簪を受け止めた。

簪はいきなりすることに理解が追いつかないのか、一夏の腕の中でポカンとしていた。

「訓練に集中するのはいいけど、自分の限界を把握出来ていない訓練は只の毒だぞ」

淡々と話すイチカの言葉を聞いて、簪はやっと自分がどのような状態なのかを理解する。

「キヤッ!? ん、ごめんなさい」

急いでイチカの腕から離れると、ぺこぺこ頭を下げイチカに謝り

始めた。その様子は、普通に見れば可愛らしいものだろう。

イチカは簪が無事なのを確認すると、Zガンダムを解除する。

解除した姿を見て、簪は自分を助けたのが『あの』イチカ・ギルオードであることを気付いた。

「あ、一年一組の…イチカ・ギルオード…」

イチカの知名度は高く、IS学園では知らない生徒はいないだろう。

何せ、『世界初の男性操縦者』であり、数回しかISを起動してないのにイギリスの代表候補生であるセシリアを倒したほどの実力者。

イチカの過去を知る者はいなく、そのせいで学園の一部の人から『裏に関係する人物』『戦争に参加していた』『あの殺気は人を殺したことがある人のモノ』等と言われていた。

過去を話さないイチカから出た憶測でしかない噂は彼女の耳にも入っていた。

「怪我は無いみたいだな。無理して訓練しても何にもならないから今日はそこまでにしておけ」

だが、簪は目の前にいるイチカからはそれを肯定するようなモノは感じず、寧ろ暖かく、優しいと感じた。

「IS作りから離れて起動訓練するのもいいけど両方とも程々にな」

「!? な、なんでISを作っていると思ったの？」

「ここ一週間、俺の事チラチラ見ていたのお前だろ。それにあそこにあるISは恐らく、お前ので未完成だからここに通り完成させようとしている。違う？」

「…う、うん。正解…」

簪はイチカの言った通り過ぎて内心恐怖した。

「まあ、一人で頑張るのもいいけど、誰かを頼るのも時には大事だよ…自分一人で出来る事なんて限られてるからさ。1年4組の更識簪さん」

そう簪に告げると、イチカはアリーナから去って行った。

簪はイチカが告げた言葉の意味を少しして理解した。

(もしかして…私を気遣ってくれた…のかな…)

そう理解した途端に受け止められたときのことを思い出した。
自分が危険になったときに颯爽と現れ、自分を助け気遣ってくれた。

自分を助けてくれたイチカの姿は正義の味方の様に見えた。

そして簪は無意識に呟いていた。

「…格好いい…」

それを自覚した瞬間、自分の中で何かが熱くなった気がした。

8話

簪を助けた次の日、授業は無事終わりイチカは特に行く当てもなく、外を歩いているがイチカは入学してから常に誰かに見られており、それは監視と言っても過言ではない。

ニュータイプである、イチカは相手の『気配』を察知する事が出来る。

「いい加減、俺をつけるのは辞めてもらえますか？」

イチカはZガンダムを部分展開し、ビームライフルを木陰に向けて構える。

「あら、物騒な物を乙女に向けるものじゃないわよ？ イチカ・ギルオード君」

木陰から出て来たのは水色の髪の少女、その手には扇子を持っており、開かれたそこには『無断使用禁止』の文字が書かれている。

「それで？ 何でつけ回してた」

「あら、私は生徒会長よ？ なら今注目の男子生徒について確りと把握する義務があるのは当然よ」

「生徒会長？」

「ええ、生徒会長の更識楯無、学園最強を名乗らせてもらってるわ（こいつが…）」

一度閉じられた扇子を再度開いた楯無、そこには先ほどの『無断使用禁止』ではなく『最強♪』の文字があった。

「最強、ね… それって教員も含めてってことか？」

「え？」

「学園最強を名乗るってことはブリュンヒルデの織斑先生より強いって事だろ？」

「い、いや… 織斑先生規格外に勝てるほど強くはないかな…」

この世界ではISに乗れば最強で生身も規格外の千冬だが、イチカは生身でそれよりも規格外な人物を知っている… 彼らがISに乗ったら「ISは拘束具」とか言いそうである。

「成程、自称最強（笑）か」

「な、なによ！ その自称最強（笑）は!!」

「いや、織斑先生にも勝てず、俺にも気配を感じずかれた貴女にぴったしだなと」

「ぐぬぬぬ」

一部を除けば最強だが、生憎ここにはその例外が二人存在するので実際はNO. 3つと言ったところだろう。

「まあ、何故俺を付け回す本当の理由も大方、分かっているんで別にどうこう言うつもりはありませんよ。——対暗部用暗部の「更識家」の当主さん」

「!?」

楯無は自分の素性がこうも簡単にばれた事に驚きを隠せずにした。

「… 何処でその情報を手に入れたのかしら。出来ればお姉さんに教えて欲しいな」

「色々詳しい人がいるのでね。別に護衛だろうと好きにして構いませんが… 気配や殺気くらいは消してくださいね」

「あら、何でかしら?」

「外敵と間違えて撃墜なんてされたくないでしょ」

「外敵って…」

と言ってもニュータイプであるイチカは感じてしまうのであんまり意味はないが殺意や悪意を感じられない分、敵か味方の判別はしやすくなる。

「ええ、次からそうするわ」

「一々、殺気を放つのも面倒なのでそうしてください」

イチカはそう言うて行く当てもなく歩き始めるのだった。

あれから時間は過ぎ、クラス対抗リーグ戦初日、第一試合は一夏が代表を務める1組と、鈴音が代表を務める2組の試合となった。

既にアリーナに出ていたイチカはZガンダムを纏い、ビームライフルを構え、中国第三世代型IS 甲シエンロン龍を纏った鈴音が青竜刀型武装、

双天牙月を構えて向かい合っている。

「いくわよ一夏、あんたがいない間に付けた力を見せてあげるわ！」

「その力を誤った方向に使わないことを願うよ」

試合開始の合図と共に鈴音が動いた。

双天牙月を振り上げ、一気にイチカへと突っ込んできて渾身の力を持ってして肉厚で巨大な刃を振り下ろす。

しかし、大振りの攻撃などイチカにとってみれば見慣れたもの、多くの戦いに身を投じたイチカからすれば、大量の誘導兵器やどこぞの黒歴史を相手にするよりは何百倍も楽である。

紙一重で避けて見せたイチカは回し蹴りをし、ビームライフルを放つ。

「クッー！」

鈴音はすぐ態勢を立て直すですがすぐそこまで迫っていたビームを避けきれずに何発か当たる。

「これならどう！」

「ッ!!」

「嘘!？」

鈴音はまだ、隠しておこうと思っていた切り札を切らざるを得ないと判断し、使ってみたがイチカはそれを難なく躲す。

「何で避けれるの!？」【龍砲】の弾丸は見えないハズなのに!!」

その後も鈴音は見えない弾丸——龍砲を連射するがイチカに掠ることすらできずにいた。

イチカは自分の直感や相手の目線等で見えない弾丸の着弾地点を予測し躲す。

「!？」

イチカは鈴音に接近しようとした時、二人の間に一筋のレーザーが振り、何かがシールドをぶち破ってアリーナに落下してきた。

落下物はアリーナの地面に激突して大きく土煙を昇らせ、その姿を隠してしまうが、Zガンダムと甲龍は未確認の反応を捕らえていた。

「侵入者か？」

「煙が晴れるわよー！」

土煙が晴れて、姿を現したのはISだった。

イチカのISと同じく全身装甲で大きな腕が特徴的な機械兵士という言葉が似合いそうな姿だ。

「何者よアンター！　どこの所属!?!」

所属不明ISからの応答は無い。代わりに腕を上げて掌をイチカ達に向けたかと思うと、そこからレーザーを放ってきた。

イチカは鈴音の前に出るとビームサーベルでレーザーを斬る。

「イ、イチカ。　アンタ今!?!」

「こんなもん誰でも出来るぞ」

「出来るわけないでしょ!!」

身の回りの人物の大半はビームを斬るといふ事が出来たがそんな事が出来る人物はそうはいない。

もし、この世界で出来るとしたらイチカと千冬、そしてコード・アメリアスだろう。

『ギルオードさん！　鳳さん！　今すぐ避難してください!』

山田先生から通信が入ったが、正直避難は難しそうだ。

既に所属不明機は動き出し、レーザーを連射してきていて、イチカは余裕だが鈴音は避けるのに精一杯といった感じだ。

未だ避難が終わって居ない観客席を見れば、自分達で避難誘導が終わるまでの時間を稼がなければ危険だという事を理解している。

そして、イチカはこの後、何かが来るという確信があった。それはニュータイプ故かそれとも長年戦って培ってきた勘か分からないが事態がこれで終息するとは思えなかった。

「山田先生！　避難誘導が終わるまで俺達は逃げられませんよ。此奴の相手は俺がする!」

イチカはビームライフルを所属不明機に向けて構える。

『なっ!?!　駄目ですよ!?!　もう直ぐ先生方が到着しますから、生徒のお二人に危険な事をさせる訳には...』

「今、そんな悠長な事を言える状態じゃないでしょ！　入学時の条件忘れたのか!!」

イチカは山田先生からの通信を強制的に切る。

「さて、恐らく来るであろう、増援が来る前に片を付けるか」

「片を付けるってどうするのよ」

「どうする? こうするんだよ!」

イチカはビームライフルの銃口にビーム刃を展開するとそのまま投げると同時に移動する。

不明機はビームライフルを撃ち落とすが同時に行動したイチカに反応できず、接近を許す。

「ソコォー!」

イチカはビームサーベルで不明機の両腕を切断し、至近距離からハイパー・メガ・ランチャー を放ち不明機を撃破する。

「ちよつと! イチカ何やってるのよ!!」

「何って敵を倒したただけだが」

「倒したって... 何も腕とか切り落とさなくてもいいじゃない!!」

「鈴... コイツは無人機だ」

「え?」

鈴音はイチカの言った意味が分からず、不明機の方を見ると其処には切断された所から銅線が見え、オイルが流れ、所々スパークしていた。

「でも... ISは人が乗らないと動かないはず...」

「自分の持つ情報が必ず正解という事はないんだ。鈴... それと今すぐここから退避しろ」

「ど、どういう事よ! 所属不明機は倒したんだし、事件は解決したはずよ!!」

「いや... 如何やら本番これからの様だ」

イチカが警戒を高めると何も無い所から複数のISが現れる。

全身が黄色く大型・重装甲が特徴の機体とそれに続く形で猛禽類の翼を思わせる鶏冠状のブレード・アンテナと巨大なモノアイを持つ頭部を持つ機体が何の前兆もなく現れ、イチカはこの機体に見覚えがあった。

ネエル・アーガマの過去の資料に該当する機体があった事を思い出し、記憶の中から該当するデータを思い出す。

「バーザムに…ジ・Oか…」

一年戦争後に地球連邦軍の中にジオン残党狩りを目的とした精鋭特殊部隊が設立された。

これが「ティターンズ」である。

そのティターンズはその後、多くのMS開発し、その中にはこの二機がある。

「バーザムは何とかなるが…問題はジ・Oか」

「あのISに心当りでもあるのイチカ？」

「ああ、ある。だから俺一人でやる。お前は早く撤退しろ」

「アンタを置いて行けるわけじゃないじゃない。それにあつちは私も標的にしてるみたいだしね。私も手伝うわ」

イチカは少し考え込み、決断する。

「分かった。どうせ何を言っても退かないんだろうし、そつちの猛禽類みたいなのをやれ。数は俺が減らしておく」

そういうとイチカはバーザムを三機をビームサーベルで斬り、ビームライフルを連発し、ハイパー・メガ・ランチャーを放ち倒すと残り二機になる。

「ジ・Oは俺が倒す」

イチカはジ・Oに向けてビームライフルを放つがその外見とは裏腹に高い機動性を有しており、イチカのビームライフルを躲す。

「チー！」

ビームライフルからビーム刃を展開するとそのまま斬りかかるがジ・Oに搭載されている隠し腕から出たビームサーベルを交差させ、受け止めるとイチカにビームライフルを向けると放つ。

「クッ！」

イチカはその場から離れることで回避し、前腕部に搭載されてる二連装グレネードランチャーとビームライフルを放つ。

ジ・Oはビームライフルでグレネードランチャーを撃ち落とすがビームは完全に避けることが出来ず、数発当たる。

それを確認した、イチカは再びジ・Oに接近し、ビームサーベルで斬りかかろうとするが先ほどと同じく隠し腕によって防がれる。

「今だッ！」

イチカは残った二連装グレネードランチャーを隠し腕に向けて放つと防ぐモノを無い状態の隠し腕は直撃し、破壊する。

隠し腕を破壊した時、アリーナ内一杯に放送を使った声が響き渡った。

『一夏あああああああ！』

「ほ、箒!? あのバカ！」

『一夏！ 男なら、男ならその程度の障害を乗り越えずしてどうする!!』

「何してんだ「キヤアアアアアアアア!!」鈴!!」

イチカは声のした方を見るとバーザムに追い詰められた鈴音の姿があつた。

如何やら、先程の箒の行動に意識が向いた瞬間、バーザムの集中攻撃を喰らったようだ。

鈴音のISである甲龍は装甲と片方のスラスターが破壊され、所々スパークしている。

一機のバーザムが鈴音に対してビームサーベルを振り下ろそうとした。

今、鈴音にビームサーベルが直撃した場合、ただでは済まない事は明らかだ。

消えない傷、何かしらの後遺症が残る可能性や最悪、命を落としかねない。

「辞めろオオオオ!!」

イチカの咆哮と共に乙ガンダムがオーラの様なモノを纏うと肥大化したビームサーベルを横薙ぎにし、その場にいたバーザムを二機撃破する。

「い、イチカ...?」

鈴音は最初、乙ガンダムが纏うオーラの様なモノが単一仕様能力だと思つたが本能的にアレはそんな生易しい物ではないと理解する。

イチカはWR形態になるとそのままジ・Oに向かって突撃する。

「ここから居なくなれええ!!」

それに対しジ・Oはビームライフルで応戦するがオーラによって弾かれ、これでは、埒が明かないと判断したジ・Oはビームサーベルを構え攻撃する。

イチカはジ・Oのビームサーベルを避けるが完全には避けきれず、フライングアーマーの一部を溶断されてしまうがイチカはそのまま突撃し、コクピット部に直撃し、ジ・Oは活動を停止した。

その後、イチカ達は生徒指導室へと呼び出された。

イチカは入学する際の交渉で特に罰は無いが鈴音は教師の指示を無視した為、期限付きで反省文を書くことになった。

千冬はイチカ達の隣にいた生徒に鋭い視線を送る。その生徒とは、

「篠ノ之」

「は、はい……」

「お前には反省文提出と、一週間の自室謹慎を言い渡す。異論はないな」

「っ！……はい」

箒だ。

はつきり言ってあの状況でアリーナにISも纏わずに入り込むなんて自殺行為に等しい。

そして、あの場には箒によって気絶させられた生徒もいたのだ。

一歩間違えていれば、命を落としていてもおかしくは無かった。

むしろ生き残っていたことが奇跡と言えるだろう。

それだけ危険な行為を犯したのだ。

「箒……一つ言いたいことがある」

「なんだ一夏？」

「歯ア食いしばれ!!」

「グッフ！」

イチカは箒の目の前に行くと振りかぶった拳で箒の顔を殴る。

「?!?!」

「箒は何故、殴られたのか理解出来ずにいた。」

「何故、私を殴った。一夏!」

「殴られた理由が分からないのか!　じゃ、聞くが何であんな行動をした」

「私は只、一夏の応援を…」

「それだ!　その応援が理由だ!　その身勝手な行動の為に気絶させられた生徒は危険に晒され、命を落とすかもしれないんだぞ!　もう少し後先考えて行動しろ。その身勝手な行動が無駄な犠牲を増やし、それによって多くの悲しみが生まれそれは憎しみに変わり、お前やその家族に襲い掛かってくるんだぞ!!」

「……」

「少しでも他人を思う気持ちがあるのなら二度とあんな行動をするな」

「そこまで言うといチカはイスから立ち上がり入口へと足を運ぶ。」

「アイツの言ったことは正しい。篠ノ之、お前の行動によってどの様な事態が起きるか、考えて行動しろ」

「千冬箒に一言、言う指図書から出ていき山田先生、鈴音も続く形で出ていく。」

「…私の一体…何処に間違いが…あつたの言うのだ…」

「箒の呟きを答える者はその場に誰もいない。」

9話

件の所属不明機は現在学園地下にある解析室に運ばれて、解析が行われている。

現状、解析を進めて判った事は所属不明機が無人機である事と、そのコアが467個あるどのコアとも一致しない未登録ナンバー：つまり、468個目のコアである事だ。

「こちらの無人機から未登録のコアが見つかりましたが：：こちらの無人機からはコアは見つかりませんでした」

「何だと！」

山田先生の報告に千冬が驚くの可笑しくない。

何故ならジ・OやバーザムからISの心臓と言っても過言ではない部分が見つからなかったのだ。

「まさか：：だが、もう片方は誰が：：」

「織斑先生は心当たりがあるんですか？」

「いや、まだ：：な」

二人の後ろにあるディスプレイに聖母を思わせる女性が真剣な眼差しで二人の会話を聞いていた。

クラス対抗戦が終わった翌週の中頃、箒も独房から出されて授業に復帰した。

今まで通りにHRが行われて授業になるはずだったが、この日だけは違った。何故なら教室に山田先生と千冬の後ろから、更に二人の少女が一緒に入ってきたのだから。

片方は小柄な銀髪の少女。眼帯をしていて、片方の目しか見えないものの、その目付きの鋭さが印象的な少女だ。

そして、もう片方は明らかに異色と言える。金色の長い髪を一つに束ねた中性的：：：よりやや女性的な顔の少年。

「え、今日は皆さんに転校生を紹介します」

山田先生の言葉の後で一步前に出たのは少年の方だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、どうぞよろしく願いますね」

「お、男、のこ？」

「はい、同じ境遇の方が此処に居るとい事なので、僕も転校して来ることになりました」

(…… あ、ヤバイ……)

シャルルが男だという事に、教室が割れるほどの歓声が湧いたのは、言うまでも無い。

その歓声(物理)により、数名が被害に合うがイチカはどこぞの狩りゲーに出て来るような耳栓を付ける事で難を凌いだ。

それから、もう一人。銀髪のドイツ人少女の自己紹介がまだだ。

「自己紹介くらいしろ、ボーデヴィツヒ」

「はい、教官」

「私はもう教官ではない。ここでは織斑先生と呼べ」

ボーデヴィツヒと呼ばれた少女が千冬を教官と呼んだ。イチカは自分が居なくなつてからの千冬の事を思い出した。

千冬はイチカの情報提供したドイツに恩返しという形で教官生活をしていたことがあるとのことで、恐らく彼女はその時の千冬の教え子なのだろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

名前だけの簡素な自己紹介にクラス中が困惑するが、当のラウラは一度、クラスを見渡すとイチカと目が合おうとイチカの前まで歩み寄ってきた。

「貴様がイチカ・ギルオードか」

「ああ、そうだが」

ラウラの間にイチカを肯定するとラウラは一度睨むと教室の一番後ろにある席に向かい、その席に座った。

だが、この時イチカはラウラに対してある疑問があった。

(ラウラからマドカと似た感じがする……)

ラウラと自分の妹であるマドカと似た感じがするが一体何が似て

いるのかイチカには分からなかった。

ラウラの雰囲気なのかそれともラウラを構成する十二かが似ているのか分からないが今後、調べて明らかにするつもりだ。

シャルルもその隣の席に座った事で漸く落ち着いたのか、千冬が教卓の前に立ち、残りのHRを進める。

「それでは、1時限目は2組と合同でISの実習だ。着替えてグラウンドに集合しろ」

これにてHRは終わり、生徒達は急ぎ更衣室まで行かなければならない。IS実習は千冬が担当する授業、遅れれば待っているのは鉄拳制裁だ。

「ギルオード、デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だからな」

千冬の指示を受けるまでもなく、イチカはそのつもりだった。

この学園で今までイチカ一人男性という肩身狭い思いしてきたのだが、イチカはある疑問があった。

(コイツ… 本当に男か?)

シャルルを見て思った感想だが、それはいつでも確認出来るので置いておく。

「君がギルオード君? よろしくね、僕は…」

「ハイハイ。自己紹介は後、後。織斑先生の授業なら遅刻はマズイから急いで更衣室に行くぞ」

シャルルを連れて教室を出ると更衣室に向かって急ぐ。

イチカだけならある程度ゆっくり出来るのだがシャルルも一緒となると少し早く行動した方がいいのだ。

「あ! ギルオード君みつけ!」

「噂の転校生男子も一緒よ!」

イチカ達が廊下を歩いていると女子生徒の群れが廊下を塞ぐ。

「はあ… メンドイ」

「え、え? 一体何を、おおおおお!? ちよ、きゃああああああああああ!!!?」

イチカはすぐ近くの窓を開けるとイチカはシャルルをお姫様抱っこすると窓の枠に足を掛けて、そのまま外に飛び出す。

因みに、現在一夏達が居るのは2階であり、窓から外に飛び出れば待っているのは落下という結果なのだが、世界一恥ずかしい告白をした男に鍛えられたイチカは木から木へと飛び移りながら更衣室を指す。

「… 無茶苦茶だよお」

「ああ、でもしないと撒けないからなあ」

前後を挟まれたのだから、出来るのは窓からの脱出しか無かった… というか基本的に窓から飛び降りることが多い。理由は先程の出来事が起きるからである。

漸く更衣室に着いた頃には授業開始5分前になっており、着替えも急がねばならないので、イチカはシャルルに好きなロッカーを使うよう指示する。

「俺は着替え終わったから先行くぜ」

「え!? もう、着替え終えたの!」

「ああ」

「ちよ、待ってよ!」

戦闘に出遅れた結果、救える命を助けることが出来なかった等という結果にしたいくないイチカは全ての作業において早めの行動を心がけている。

ISスーツ越しでも分る無駄のない肉体、細身なのに引き締まった身体は芸術と言っても過言ではなく、女性であれば見惚れてしまうだろう。

シャルルはイチカの身体に見惚れていたが視線を逸らし着替えを再会し、イチカの後を追う。

その後、鈴音とセシリアが山田先生と模擬戦をしたが2人のコンビネーションは最悪と言っても過言では無いほど酷く、それに対し山田先生は2人の行動に適切な対応をし、2人同時に倒した。

「まあ、今の奴らではこんなものか。諸君もこれで教員の實力は理解出来ただろう。以後は敬意を持って接するように」

模擬戦が終わった後は実際に訓練機を用いての歩行訓練に移る。

各専用機持ちがリーダーとなって一般生徒の訓練を見るという形になり、イチカ、セシリア、鈴音、シャルル、ラウラの五人が用意された打鉄2機とラファール・リヴァイヴ3機から機選んで担当する生徒達に順番で搭乗、歩行まで行ってもらうのだ。

「という事で、各自自由に専用機持ちの所へ行けと言ったがな……：ちやんと均等に分かれんか貴様等!!」

自由に、と千冬が言ったのも原因だろう。

イチカ、シャルルの周囲に殆どの生徒が集まってしまったので、千冬の渴が入り、今度はちやんと均等に分かれて訓練が始まった。

「んじゃ、やるか……：えっと、じゃあ相川さんから出席番号順にやるから」

「は〜い」

イチカの所では打鉄を使つての訓練となり、生徒達が出席番号順に並んで順番に打鉄への搭乗、歩行を行っている。

順調に訓練が進み、次は箒の番になった。

「次は箒か、じゃあ乗ってくれ」

「ああ……：だが、どうやって乗れば良い？」

「へ？ あ……：」

「あ、ごめんねギルオード君！ 打鉄、前屈みにさせておくの忘れた」

どうやら降りる際に次の人が乗り易いよう前屈みの状態にさせるのを忘れていたため、このままでは乗る事が出来ない状態になっているようだ。

イチカは打鉄に飛び移って打鉄を前屈みにしてから降りて箒に搭

乗するよう促す。

「皆も降りるときは必ず次の人が乗り易いように前屈みにしておくのを忘れないでくれ」

皆が頷くのを確認すると、イチカは引き続き訓練を見ていく。

他の班でも特に問題が起きる事無く訓練が進み（他の生徒を無視しているラウラの班は進みが若干遅かったが）、授業を無事終えた。

授業が終わると直ぐにイチカは訓練機を片付ける作業に入り、他の生徒達は着替えて教室に戻って行った。

教室に戻るとイチカは箒と一緒に昼飯を食べないかと言われ、断る理由が無いので一緒に食う事になった。

「… どういうことだ？」

「いやっ、どういうことっていわれてもな〜？」

そして、屋上にはイチカ、箒、シャルル、セシリア、鈴がいる。

イチカが屋上に行くとその処には箒があり、イチカはまだIS学園に来て間もないシャルルの学園案内とい理由で連れてきた事に対し箒は許したが… 少し、時間が経つと鈴音とセシリアが来た為、5人で一緒に食べる事になると思われたのだが、

「かんちゃくん、屋上で食べよ」

「本音… もう、屋上に着いてる…」

屋上に新たに二人の人物が向かってきた。

「あれ、のほほんさんに簪じゃん」

「あ！ イギーだ！」

「… ギルオード君…」

「のほほんさんも屋上で食べるなら一緒に食べようぜ。大勢で食べた方が美味しいだろうし」

「うん！」

「… おじやます…。」

更に二人増え、両手に花どころか全身に花である。もし、世界中の男子がこの光景を見たら、世界中の嫉妬という膨大なプレッシャーがイチカを襲うだろう。

「何故… こんな事に…。」

「アンタだけに良い思いさせないわよ」

「抜け駆け許しませんこと」

三人はお互いを見て火花を散らす。

「えくつと本当に僕も同席してよかったのかな？」

「別に問題ないだろ。それより飯食べようぜ」

「そうだね。でも、これだけ人がいるんならお互いの料理を交換するってどうかな？」

「… それ… ナイスアイディア」

シャルルの提案に簪が同意し、箒達も特に意を唱えることなく、シャルルの提案は通った。

各々、持っていたおかずを並べると其処には酢豚、から揚げ、肉じやが、サンドイッチ、パンケーキが出て来た。

「ほら、イチカも出しなさいよ」

「ほおーい」

イチカは少し大きめの弁当箱を取り出し、蓋を開けると其処にはこんがり狐色のエビフライとコロツケがあった。

「じゃ、皆の料理も出たし食べようぜ」

『いただきまーす』

各々が作った料理を取り、食べる。

「この肉じやが、美味しいわね」

「酢豚も中々ですわ」

「… このから揚げ… 美味しい」

「日本食もいいがこういう甘い料理もいいものだな」

「イギーのエビフライ衣がサクサクして美味しいー」

「へえー、私もそのエビフライもらうわ」

「では、私はこのコロツケを」

食べた料理の感想を言う中、本音の感想を聞いた鈴音達はイチカの料理を食べた瞬間、その場に両手を地面に付ける。

「… な、何よ… この美味さ…」

「… この衣とエビの食感が… 絶妙なハーモニーを奏でてますわ…」

「… こんな… 勝てるはずがない…」

「な、なんだ？ 不味かったか？」

イチカは自分の料理が不味かったのでは、と思い不安になる。

「不味くはないよ。寧ろ美味しいよ」

「… でも… その美味しさは… 女性として悔しい…」

「??」

イチカはシャルル達と言った意味を理解できず、首を傾げる。

「そ、そうですね！ イチカさん、是非、私の料理を食べてください」

「じゃ、遠慮なく」

イチカはまだ一度も食べてないセシリアの料理を食べることにし、鈴音達もまだ、食べてないのでイチカの感想を聞いてから食べようとした。

「いただきm——」

イチカはセシリアの作ったサンドイッチを口に運ぼうとした瞬間、ニュータイプ故かそれとも本能か、イチカはセシリアの料理を『食べてはいけない』と感づき食べるのを辞めようとするがセシリアの期待の眼差しを見てしまい、一口だけ食べる。

「ひゅ?!」

『?』

イチカはセシリアの料理を一口食べた瞬間、変な声を上げた事に周りは首を傾げるがイチカは理解する。

この料理は決して人が食べれるものではないと、

「え? い、イチカさん!」

この料理を食べさせてはいけないと思い、イチカはセシリアの料理の料理が入ったバスケットを手の届きやすい所に運ぶと、

「イチカ・ギルオード…逝きますッ！」

イチカはセシリアの料理？を物凄い勢いで食べるが残り一つを残してその場に倒れる。

「え!?イチカ大丈夫!!」

「しつかりしろ一夏! 一夏!」

「ああ、刻が見える…」

「誰か!保険医、保険医を呼んで!!」

イチカが倒れたことにより、周りは混乱し始める。

「ちよつとセシリア!アンタ、料理に何入れたのよ!!」

「レシピに少し違う物を入れただけです…」

「それが原因よ! 何変なアレンジしてるのよ! イチカしつかりしなさい!」

鈴音はセシリアに原因を聞きだし、簪やシャルルがイチカの身体を揺すってる。

「… ううん」

「… 意識が戻った…?」

「イギー、大丈夫?」

「ああ、大丈夫だ——あの、戦艦に乗ればいいんだろ?」

『大丈夫じゃなかった!』

イチカが意識を取り戻した事に安心するがイチカの発言により、重症であることが判明する。

「色々、ツツコミたいけど… 渡っちゃだめよイチカ!」

「何?戦艦を攻撃する奴がいるから倒してくれ? 報酬として只で乗せるだ… その依頼受けよう」

「その、依頼受けちゃだめだよ!!」

「迷惑野郎はお前か。お前の機体は見飽き… ハッ!」

シャルルや簪、本音がイチカの体を揺らし続けるとイチカの意識が完全に戻る。

「よかったな一夏。あと少しで黄泉の国に行くところだったぞ」

「アレが三途の川?あれは海だろ広さ的に… まあ、三途の川なら彼奴がいても可笑しくはないな」

イチカは一人でウンウンと首を縦に振りながら納得しているとあ
る事に気づく。

「アレ？ セシリアと鈴は？」

「ああ、セツシーなら鬼みたいな顔をしたリンリンに連れてかれた
よー」

「そう…：なら残り食べようぜ。セシリア以外の」

イチカ達が昼飯を再開してから数分が経つと鈴音とセシリアが
戻って来るとセシリアが「次回からレシピ通り作る」と約束した。

10話

箒達と昼飯を食べ終え、午後の授業も無事終わり、イチカは整備室に向かい最後の武装を完成させていた。

武装の最終調整を済ませ、寮に戻る途中、山田先生と遭遇する。

「イチカ君。少しいいですか?」

「別に構わないですけど」

何か用なのかと聞くと、驚くべきことを口にする。

「実はイチカ君の部屋に新しく一人加わることになりました..」

「え?」

「デュノア君が転校してきたので部屋の都合上と同じ男性という事で同室になって貰おう事になりました。女性と相部屋になって問題が起きては遅いので」

「.. 分かりました。ですが、五分ほど時間を貰いますよ」

そんな話をしていると自室に到着する。

「分かりました。では、終わったら教えてください」

山田先生は外で待機し、イチカは部屋に入ると外に聞こえないように小声で喋る。

「アプロディア。部屋にある端末のデータをハ口に移して、念のためにフェニックスへのアクセスは俺以外拒否してくれ」

『分かりました』

作業が終わり、部屋の外にいる山田先生に教えてから少し経つと部屋に入ってくる者が居た。

今回、新しくイチカと同室になる転校生、シャルル・デュノアだ。

シャルルは部屋に入ってくるなりベッドの上で複数のコードをハ口に繋ぎ、端末を弄るイチカを見つけると、その隣まで来て挨拶をする。

「今日から同室だね。よろしく」

「おう、よろしく」

「うん!..... ところで、何してるの?」

「うん?これか..... ちよいとな」

シャルルが端末の画面に目を向けると、何やら難しいプログラムが

組まれている途中だった。

「ハロに新しい機能を追加しようとしてな。あ、ハロって言うのはこの赤い球体のロボットの事な」

「へえー、でもこんなロボット見たことないよ」

「そりゃ、そうだ。このハロは俺が一人で作ったんだからな」

「ええ!？」

ISに関わっている以上こういういった内部の構造についても少なからず知っている。

プログラムは一つの構文のミスで連鎖的に問題が起きれば、内容によつては処理速度の向上も出来る。

イチカはある世界で見つけたハロを元に自作のハロを作るようになり、その創作意欲は次第にMSの方に引き、MSの整備や手伝いをするようになった。

その為こういった作業はお手の物である。

経緯を知らないにしろ、シャルルは一人で一つのロボットを作るイチカが凄いと思った。

「ねえ、僕にも教えてくれるかな?」

「良いけど、これを理解しないとキツイぞ」

イチカは二冊の分厚い本を渡す。

「プログラム言語はいけるけど……電気工学理論とか絶対読んでも僕じゃ理解出来なさそう」

試しに本を手にとつて開いてみたのだが、思った通り1ページ読んだだけで降参してしまった。

「そうか?」

「無理無理。僕には到底理解出来ない内容だよ。イチカはこれを理解しているの?」

「じゃなきゃ、こんなの出来ないよ」

イチカはMSの整備をしていた為、一切苦を感じず、世界によつてはプログラムのコードやプログラムに使う言語が違う事があり、それを理解するよりは楽である。

「イチカはIS学園を卒業したらIS操縦者になるの?」

「俺はそんな事に興味はないよ」

「でも、世界初の男性IS操縦者なんだから、絶対周りが許してくれないんじゃないかな？」

イチカは作業を一端辞めるとシャルルの方を見る。

「逆に聞くけど、IS操縦者になって戦つてなにになるんだ？ 確かにモンドグロツソで優勝すれば名誉だろうし、国の貢献できる。一つ聞くけど、モンドグロツソで優勝して嬉しいのは誰だ？」

「だ、誰って… それは国全体が嬉しいんじゃないの…」

「確かに自分の国の代表が優勝すればそりゃ、確かに嬉しいさ。でもな、それで本当に美味しい思いをしているのは極一部の人間だけだ。俺は国の様な団体の為ではなく、尊い命を守るために戦う。それに俺の人生を誰かにとやかく言われる筋合いはない。周りの思惑なんか知らない、俺の人生は俺が決める」

その世界によって戦いの原因が違う。

人種差別や能力的格差、中には私利私欲の為に戦う者もいる。

その身勝手な理由で戦いに巻き込まれ、多くの命が消えていくのを経験している。

そんな理不尽な理由で消えていい命はない。命の灯を消さない為に戦うそれがイチカの戦う理由の一つだ。

確固たる意思を感じて、シャルルは何も言えなくなった。

確かに、イチカの人生を決めて良いのはイチカ本人だけだろう。他の誰かが強要して良いものではない。

「… そうだね。 あ、明日僕と模擬戦してくれないかな？」

「別に構わないが…」

「じゃ、明日の放課後に第三アリーナに集合だよ」

翌日、授業は終わり放課後にイチカは第三アリーナに来ていた。シャルルとの模擬戦をする為である。

アリーナには鈴音とセシリアがおり、二人はイチカとシャルルの模擬戦を観戦していた。

繰り広げられるビームと実弾の嵐。

ビームライフルを主体に攻撃するイチカだが時折、放つビームコンフューズと変形に苦戦していた。

「とどめえー！」

「しまった…！」

イチカはビームライフルを数発放ち、回避に専念していたシャルルは急接近していたイチカに気づくのが遅れ、ビームサーベルの連撃を喰らい、模擬戦はイチカの勝利で終わった。

「イチカ強いね…。手も足も出なかったよ…。」

「いや、シャルルの射撃能力が高くてヒヤヒヤしたぞ」

「その割には…。僕の銃弾を斬ったり、撃ち落としたり、回避して全然当たって無かったよね…。」

イチカとシャルルは鈴音の所に行くとき先の模擬戦について話しているとイチカは悪意を感じるとした方を見るとそこには黒いISを装着したラウラが立っていた。

「あれっ、あのISってまだテスト段階じゃなかったの？」

「完成したからそのテストの意味も含めてここに来たのかしら？」

そんな疑問をラウラはよそにイチカに声をかける

「おい、貴様も専用機持ちなら私と戦え」

「俺にはお前と戦う理由がない。それに俺は無益な戦いはしたくないんだ」

「世界初の男性操縦者の力…。私が見定めてやる！」

「それはお前の理由だろ、俺がお前の相手をする理由にはならないんだが」

「そうか、ならば嫌でも戦わせてやる!!」

そうすると彼女は突然、レールカノンをイチカに狙いをつけると、そのままイチカ目掛けて射出しようとするが、

「うわああー！」

ラウラのレールカノンが突如、爆発したのだ。

ラウラは原因を探ると足元に一つの金属棒があり、視線をイチカの方を向けるとそこには振りかぶったイチカの姿があった。

イチカはラウラがレールカノンを放つ前にビームサーベルを投擲し、そのままビームサーベルはレールカノンに入り、装填された弾丸と接触し、内部爆発を起こしたのだ。

そうしてイチカとラウラは一触即発の雰囲気になるが鈴とセシリアはイチカをシャルルはラウラを止める。

「このバカ!!少し落ち着きなさいよ、ここで騒ぎを起こしてあんたまで謹慎食らいたいわけ」

「そうですね、イチカさん気持ちは分かりますが落ち着いてくださいまし」

「ボーデヴィツヒさんも、自国に泥を塗るつもりなの？」

そんな騒ぎに発展するとアリーナのスピーカーから

「そこのお前たち、これはいったい何事だ!!」

その声で彼女は興がそがれたのかISを解除してアリーナから出て行き、それを確認したイチカもISを解除する。さすがにこのまま特訓を続けても意味がないと全員が思い、今日はそのまま解散となった。

解散後、イチカは少し寄り道をしながら部屋に戻ると先に戻っていたシャルルがシャワー室に入っていたのか水の音が聞こえる。

「あ、そういえば… ボディーツープが切れそうだったな」

イチカは替えのボディーツープを持ちシャワー室に向かう。

『イチカ・ギルオード。今、ある事が分かりました』

『え、何が分かったの?』

『ハイ。シャルル・デュノアは——』

アプロディアが言っている最中にイチカはシャワー室のドアに手を掛ける。

「あー！」

『女性であることが分かりました』

そこには金髪ロングのスタイル抜群の女性がいた。

そして、少し遅くアプロディアの言葉の意味を理解するイチカだった。

「／／／！！」

「あく。ボディソープ切れていたから、持ってきたんだが……」

「え!? あ、うん。ありがとう」

シャルルは、ガラス戸を閉め、イチカは、シャワー室を出る。

それから数分後。

「あ、上がったよ」

「おう」

背中越しに掛けられた声に頷き、イチカはゆっくりと振り返ると其処には紛れもない女性がいた。

「あんまり驚かないんだね……」

「始めて見た時に本当に男性か? って疑問があったからな。まあ……さっきので確信に変わったんだけどな」

「アハハハ…… 最初からバレていたんだね」

イチカはシャルルが男性だという事に対して半信半疑であり、身近に似たような人がいる為、確信が持てずにいた。

「どうして性別を偽ってここに入学した? まあ、予想はつくけど出来ればシャルルの口から言っただけだ」

「…… うん」

シャルルはイチカの言う通り入学までの経緯を話した。

デュノア社の社長との間に出来た愛人の子供であり、母親の死後引き取られ、適性が高いという事でそのままテストパイロットをするこ

とになった事。

デユノア社は第3世代型のISを開発していたが、データも時間も不足しており、次のトライアルで選ばれなかったらISの開発許可を剥奪するという事になった事。

IS開発許可の剥奪を阻止するための策としてイチカのISデータを入手するよう命令された事。

シャルルは包み隠さず話し、それに対してイチカはシャルルが諦めている事に気づく。

「それで、お前はこれからどうするつもりだ？」

「… もう男装の事がばれちゃったから、データを盗むのは失敗、たぶん僕は本国へ呼び戻されて牢屋行きになると思う…。… なんだか話したらすつきりしたよ。今まで嘘をついていてごめんね」

この時イチカはシャルルがマーク達と出会う前の自分と重なって見えた。

自分を自分として見てくれず、只のオプション、道具としか見ない自分と重なったのだ。

それが、イチカの心を動かした。

「お前は諦めるのか？」

「えっ？」

「お前はここで諦めるのか、と聞いているんだ。抵抗せずに運命を受け入れるのか？」

「… 仕方ないよ、僕にはもう誰も手を差し伸べて——」

くれない、と言う前にイチカが彼女の前にスツ、と手を刺し延ばした。

「差し伸ばしてくれる手が誰もいないのなら俺がお前に救いの手を差し伸べてやる」

「で、でもどうやって…」

「お前が救われる方法は複数ある」

そう言うイチカは人差し指を立てる。

「二つ目、俺のデータを渡す…。これは今やろうとしている事と変わらない。二つ目はIS学園に通う三年間は本人の同意なく外部から

の介入が無い為、その間に自分の行く末を決める。三つ目は知り合いアプロディアに頼んでデュノア社の汚点を世間にばらす事で自由を手に入れることが出来るが何かしらのペナルティがあると思う。そして最後は――

最後の一つを言うとするがイチカはその先が出ない。

それは無関係なシャルルを戦いに巻き込み最悪、この世界の土を二度と踏むことが出来ないからだ。

「……もうひとつはあんまりお勧めしないが……俺達と一緒に行動する。具体的にどういう内容は今は話せないがこの選択肢の中で一番自由を得ることが出来ると同時に危険という事をだけ頭に入れてくれ」

「でも……」

「諦めが人を殺す。だが、最後まで諦めずに一つの光を掴むために努力した時……無限の力を秘めた可能性という内なる神が宿る」

彼女が驚きのあまりに目を見開いた。

自分と同じ年の筈の彼が此処まで言えるのは自分とは比べ物にならない様な体験をし、それは自分よりつらい体験だと容易に想像できた。

しかし彼を見る限りそれをまるで苦痛にも思っていない。

「希望や平和などと言ったモノは誰かに与えてもらうのではなく自分の力で掴み取らなと意味が無いんだ。俺はお前に希望を見せた。その希望を掴み自由を手に入れるのかそれとも払い除けるのかはお前次第だ」

その一言、彼の言った一言がシャルルにとって救いの言葉となった。

「そうだね……。僕は明日を掴むためにもう少し頑張ってみるよ。だけど少しだけ考える時間を頂戴」

「時間はある。後悔をしないように考えればいい」

イチカはあの時、自分に手を差し伸べた彼女の様にイチカもまた、手を差し伸べるのだった。

11話

イチカがクラスに行くとは何やら騒がしく上手く聞き取れなかったが優勝すると何かが起きるらしい。

話に興味がなかったイチカは通常通りに過ごし、武器や機体のメンテナンスの為に整備室に向かった。

「… あ、ギルオード君」

「あら、簪さんじゃないですか」

整備室に着くと其処には未完成のISの前で端末を操作する簪の姿があった。

「頑張って専用機作っているね。進捗状況はどうなのよ」

「… マルチロックシステム以外は完成している」

本来、簪は人見知りするタイプであるが以前にイチカに助けて貰った事が切欠となり、イチカに対し少しづつであるが心を開き、イチカは簪の手伝いをするようになった。

「ふうーん、マルチロックのプログラム見せて」

「… 分かった」

イチカは表示されたプログラムコードを見ながら改善点を見つける。

「この部分を直せば上手く動くはずだ。にしてもよくここまで一人で出来たものだな」

「… ギルオード君が教えてくれなかったらここまで進まなかった」

「俺は何もしてないさ。簪さんが「簪」え？」

「簪… これからは私の事は簪って呼んで…」

「分かった。俺の事はイチカでいいぜ」

「簪の発言にイチカは少し嬉しかった。

簪は何所か他人を避けている傾向があり、イチカは他人と触れ合う喜びと温かさを知って貰いたいと思っていたが簪が呼び捨てにするという事は上手くいった様だ。

「まだ、お姉さんと仲直りできないのか」

「うん」

イチカが簪を気に掛けているのには理由があった。

それは優秀な姉に対する強いコンプレックスであり、それは嘗て『織斑一夏』として生きていた時に味わったモノと同じなのだ。

何をしても自分の姉と比べられどんなにいい成績を残しても真つ当な評価は貰えず、逆に失敗すれば面汚し、出来損ないと呼ばれたあの時の体験を簪がしてきた事を知った。

イチカはこのままでは自分と同じように姉と決別すると思い、自分と同じようになって欲しくないイチカは簪とその姉である楯無との関係を直したいのだ。

「誰にでも弱点はある。例えどんなに優れた人物でもね」

「でも、あの人は…」

「確かに簪のお姉さんは優秀だけど、それでも…ね!!」

イチカは持っていた工具を先程から感じていた気配のする通路の天井に向けて投げるとそのまま貫通する。

『え?… あ、あわあわ!? きゃあ!!』

小さな悲鳴から少し遅れて水色の髪をした人物が顔面から落ちてくると鼻を抑えながらその場から逃げていく。

「なんだろう… 今まで対抗していた自分が馬鹿っぽく感じてきた…」

「完璧な人間なんていない。どんな人にも弱点はあるんだよ」

そんな話をしているとイチカのハロが飛び跳ねながらイチカの方に向かってきた。

「どうしたんだよ。ハロ」

「タイヘン。タイヘン」

「何が?」

「ジケンハツセイ。ジケンハツセイ」

「案内してくれ。ハロ… 悪い簪、手伝いはまた、今度な」

ハロの言葉を聞いたイチカは嫌な予感が全身を駆け巡り、急いで現場に急行するのだった。

ハロの案内で辿り着いた第一アリーナのピットから見た光景は、ロボロになった甲龍を纏った鈴音が気絶しているのか、アリーナの隅に横たわっている姿と、傷一つ無いシユヴァルツェア・レーゲンを纏ったラウラが甲龍同様ロボロになったブルーティアーズを纏うセシリアがラウラの近くに倒れていた。

「如何やら来たようだな。私と戦え！こいつらの様に潰してやる!!」
「うううっ……」

「イチカさん……」
「やめろ……」

この光景を見たイチカはセシリア達を自分勝手な理由で傷つけた事に対する怒りは噴火寸前の活火山のような状態だ。

「ただ、喚くだけか……。来ないのならこいつらを……!」

近くに倒れていたセシリアを掴むとレールカノンを向ける。

この時、イチカは我慢の限界を超えた。

「やめろっていつてるだろうがああああああああああああ!!!」

イチカの怒号と同時に今までに感じた事の無いプレツシャーをセシリア、その場に来たシャルルは驚き、冷や汗を掻いたがそのプレツシャーを向けられているラウラは違った。

ラウラの顔は、得体のしれない恐怖に怯えていた。

現にイチカの身体から出たオーラの様なモノは形こそハッキリしないが荒ぶる不死鳥の様なモノがラウラを睨み、その場にいた全員にその姿は見えていた。

「いいか、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「ビクッ!」

「俺はな、俺に対して何されようが大抵の事は笑って見過ごしてやる」

この時、その場にいた全員が理解した。

イチカはキレているのだと。

「だがな！どんな理由があろうと、自分勝手な理由で他人を傷つける奴は許せねえんだよ!!」

「ヒイ！」

イチカが放つプレッシャーによって闘技場の時間が停止したように、その場にいた全員が固まったように動かない。そして、誰も喋ろうとしない。だが、その静寂を打ち破った者がいた。

「お前達、そこまでだ」

千冬だった。彼女は、右手にIS用のブレードを装備していたが明らかに、乱入し止めようとした所イチカのプレッシャーによって出て来れなかったのは明白である。

千冬の登場と同時にイチカから出ていた不死鳥は姿を消していた。

「これ以上の戦闘した場合は、私が相手になる！」

「!!」

「だが、生憎私は学園から、私怨による戦闘は禁止されている。だから、今度行われる対抗戦で決着をつけてもらう」

彼女の提案にその場にいた全員が納得し、解散した。解散後のアリーナに残った千冬はイチカを気にしていた。

(イチカの放ったプレッシャーは一体何なんだ?)

先の騒動後、鈴音達が保健室に運ばれ、お見舞いにイチカとシャルルが来ていた。

「命に別状はないし、後遺症が残る程の怪我でもない。よかったな」

「別に助けて何て言っただけじゃないし！」

「あのまま続けていれば勝ってましたわ！」

「よくもまあ、… 呆れて何も言えやしねえよ」

「!？」

イチカはセシリアと鈴音の肩を小突くとビクツ、と体が震えた。

「まあ、二人が無事だという事も確認したし、自室に戻るわ」

イチカが保健室を出ると自室に戻り、シャルルの正体がバレないよ
うにクラス対抗タックマツチ戦はイチカと組む事になった。

その日の夜、シャルルが完全に寝静まったのを確認したイチカはア
プロディアにある事を話す。

「アプロディア、頼みがあるんだけど」

『はい。なんでしょう？』

「実は——」

イチカはアプロディアにある頼みごとをした。

12話

クラス対抗タックマツチ戦当日。

イチカとシャルルは待機場所で自分たちの初戦の相手を見ており、その初戦の相手が誰なのか確認していた。

「まさか初戦でラウラ・ボーデヴィツヒと当たることになるとは」

「うん、でも油断しないでね。彼女は1年の中じゃトップクラスだからね」

初戦の相手はラウラ・箒ペアだという事を確認したイチカとシャルルは開始時間までに今回の作戦の再確認をしていた。

そして、イチカ達は試合開始の時刻が近づいてきたのでシャルルとともにアリーナに出るとそこにはシュヴァルツェア・レーゲンを装着したラウラと打鉄を装着した箒が立っていた。

「まさか初戦で当たるとはな、余計な手間が省けたというものだ」

「確かにこれ以上余計な人が出る前に当たってよかつたよ」

イチカとラウラが一言づつ言うのとアリーナのスピーカーから試合開始の声があげられるのと同時にイチカとラウラは格闘武器で戦い、シャルルと箒は各々武器を構え戦闘に持ち込んだ。

そうしてその試合の様子をアリーナの管制室では千冬や山田先生がその様子を見ていた。

「イチカ君の姿また変わりましたね」

「ああ、今までののが高機動型Zガンダムだったの対し今回は格闘型で出て来たな」
「そうですね。にしてもイチカ君とデュノア君、コンビネーション抜群ですね」

「ふん、だがギルオードは時折、決定打を与えるチャンスを与えている。まだ未熟な証拠だ。そう見えるのは単にデュノアが合わせているだけだ」

「それでもあそこまで戦えるのは凄いですよ」

確かに試合はシャルルがイチカに合わせて戦っているだけなのだが、それだけお互いを信用していると言う事なのだ。ペアを組む場合

で重要なのは個人の強さではなく、お互いの連携であると山田先生は考えているし、千冬は個人でどれだけ対応できるかを見ているので評価が違うのだ。

本来はイチカがシャルルに合わせるのだが、イチカはエクシアをこの世界に来て始めて使用している為、まだ不慣れであり、慣れるのに時間が掛かっているのである。

「感覚も癖も大方把握した。少しギアを上げるぞ！」

「クツ!!」

イチカはGNソードをライフルモード変え、射撃で攻撃するのに対しラウラは回避行動をするが躲しきれなかったビームはワイヤーブレードで弾いている。

「うおおお!!」

「チー！」

「しまった…」

イチカはGNソードをソードモードに変え、突き出すように構える
と直進するがラウラがイチカの動きを アクティブ・イナーシャル・キャンセラ A I C、慣性停止
結界によって止める。

「これで!!」

「油断大敵だ！」

「ナニイ!!」

ラウラはプラズマ手刀で身動きが取れないイチカを攻撃しようとしたが突如、腹部の当たりに衝撃が起きたことよって意識が逸れるとイチカを拘束していたA I Cを解除してしまう。

ここでイチカはある事に気づく。

「そうか、お前のA I Cは停止させるのに多大な集中力が必要なんだ。対象に意識を集中しなければいけないけど何か予想外な出来事が起き、意識が逸れるとその拘束は上手く発動できないんだ」

「!?」

現に先程、イチカはA I Cに身動きを取れなくなり、ラウラがプラズマ手刀で攻撃しようとした時にイチカは外側前腕部に1門ずつ固

定装備されたGNバルカンで応戦した結果、解けた事が何よりの証拠だ。

イチカはチラッとシャルルの方を見ると其処にはシールドエネルギーが切れ、膝をついた筈があり、イチカの視線に気づいたシャルルはイチカのいる方に向かう。

「イチカ大丈夫？」

「問題ない」

イチカはGNロングブレイドを二つ構えるとラウラに向かって直進するのに対し、ラウラはイチカが近づいた瞬間、AICで止めようとしていた。

「ふん、なら正面から叩き潰してやる!!」

「セイツ!!」

イチカはGNロングブレイドを二本とも投擲するとラウラはワイヤーブレードで弾くがGNビームサーベルを二本持ち、接近したイチカはワイヤーブレードを溶断しながらラウラの目の前まで接近する。

ラウラがAICを発動するより早くGNソードで突き出された右手を攻撃する。

「なっ!? 馬鹿なっ!?」

完全に右腕を破壊され、AICを発動出来なくなったラウラは慌ててイチカに一撃入れようと左手のプラズマ手刀を展開し、叩き込もうとしたが

「オリヤー」

イチカは右腕を破壊した途端、すぐさま跳躍しラウラの攻撃を躲すとそのままラウラのシュヴァルツエア・レーゲンを踏み台にする。

「わ、私を踏み台にした!?!」

お決まりの発言をするラウラに対し、イチカは持っていたGNビームサーベルを投擲すると二つの非固定装備アンロックユニットに刺さる。

「クッ!... この程度!...!!」

ラウラは背後にいるイチカにの方向を向くと其処にはGNソードを大きく振りかぶったイチカが目映った。

「これで終わりだ!!」

攻撃を喰らい、吹き飛ばされて地面に叩きつけられる。もはやシユバルツエア・レーゲンのシールドエネルギーは極僅か。しかもダメー
ジレベルはDという状態である。

この状態から逆転する術は無い。ラウラに待っているのは敗北
しかないのだ。

イチカはこれ以上の戦闘は出来ないと判断し、降伏するよう呼びか
けようとした瞬間、突然ラウラが悲鳴を上げる。

「があああああうあああああああああああああ!!!」

「な、なんだ!?!」

「一夏、いったん下がって様子がおかしい」

そう彼女が悲鳴を上げた後、彼女を黒い泥のようなものが包み込
み、そして一人の人物を形作っていく。

「織斑千冬……だと……」

ラウラを包み込んだ泥は千冬の形になると、イチカめがけて雪片で
攻撃する。

「遅い斬撃だな」

イチカは難なくそれを回避するとシャルルと共に箒をつれ安全な
距離まで離れる、どうやらあれはある一定の距離内にある対象を無差
別に攻撃するのだとイチカ達は認識する。

イチカはラウラのISが姿を変えたのは隠された能力では?と考
えたがその考えはすぐ消えた。

何故なら、イチカはラウラでは無い別の『何か』に囚われていると
感じたからだ。

『アレはValkyrie Trailer System通称VTシス
テムと呼ばれるものです。過去のモンド・グロツソの優勝選手のデー
タをそのまま再現するシステムですが搭乗者に対して危険性がある
ことが判明し、開発が禁止されたモノです』

アプロディアの話聞いたイチカはVTシステムの所に向かい始
める。

「何をするつもりだ。一夏!!」

「何って... ラウラ・ボーデヴィツヒを助けに行くんだよ」

イチカはそう言うとVTシステムの近くに行く。

イチカを認識し、すぐに剣撃を繰り出してくるがイチカはそれをGNシールドで受け止め、弾くと後退し距離をとる。

(たすけて)

突如、頭の中にラウラの声が響く。

(この声は... ラウラか...)

イチカは今起きた現象に驚くが以前に似た体験をした事を思い出し、それと似た現象だと考える。

(どうしてお前は強いんだ)

(俺は強くない。たった一人の少女すら助けることが出来なかった俺が強いはずがない)

VTシステムは突き出した両腕から何十本にも及ぶそれぞれが触手の様に伸びイチカを襲う。

イチカはGNロングブレイドとGNビームサーベルで切り裂く。

(たすけて!)

再びラウラの声が脳内に響く。

エクシアの装甲が徐々に赤くなっていく。

(私は誰だ)

(お前はお前だ)

(私は教官みたいにはなれないのか?)

(なれるわけないだろう)

(怖い、嫌だ!ならば私はだれなんだ!誰になればいい!?)

エクシアの装甲が完全に真紅に染まるとVTシステムの目の前に一瞬で移動する。

「お前はお前だ!織斑千冬でもない、ましてや他の誰でもない。お前自身だ! なら誰かを真似るんじゃなく、一人の人間として自分らしく生きろ!!」

イチカが叫ぶとGNソードで中央の部分を切り裂くと切り裂かれた所から眼帯がとれ、片目が金色の瞳のラウラが出てくるとイチカは

それを受け止める。

エクシアは既に真紅の光から元の色に戻っており、イチカは駆けつけた教員にラウラを引き渡した。

V Tシステムは活動を停止し、黒い織斑千冬は再び泥状になり、元のシュヴァルツエア・レーゲンへと戻って行った。

そして学年別トーナメントは公式にはラウラの機体の暴走と発表され、さらにはトーナメントは中止で参加者のデータを集めるため1回戦のみ行うという事になった。

13話

ラウラが目を覚ました時、時刻はあの戦いから数時間が経ち、太陽は地平線へとその姿を沈めようとしていた。

痛む体を強引に起こし周囲を確認する。部屋を仕切るカーテンと何台かのベッド、壁際の戸棚に収納されている薬品の入った瓶からここが医務室だというのが分かる。

「こ、ここは……うッ……！」

ラウラはイチカと戦っていた途中までの記憶はあるがそれ以降の記憶はあやふやで思い出そうとする頭痛が襲う。

「漸く気がついたか」

「っ！ 教官！ ……っ！」

その言葉でラウラは、自分に割り当てられたベッドの脇に座る人間の存在に気づき、そしてそれが自分の恩師であることに酷く驚く。慌てて姿勢を正そうとするラウラだが、その身体を鈍い痛みが走る。無理をするな、と千冬はラウラを寝かせつかせる。

「筋肉疲労で暫くは動けん。大人しく寝ている」

「… 一体何があったのですか？」

「説明してやるから、大人しくしている」

千冬は持っていたファイルから一枚のプリントを取り出した。

「一応重要案件である上に、機密事項なのだがな。VTシステムは知っているな？」

「ヴァルキリー・トレース・システム…… 過去の世界大会の部門受賞者の動きをトレースするシステム……」

搭乗者を触媒にし、プログラムされたISの動きをするシステムなのだがこれには欠点がある。

使用者に多大な負担を掛け最悪、死に至る代物であり、媒体となる人間は唯の消耗品と言っても過言ではない。

「そうだ、現在はIS条約で禁止されている代物だ。それがお前のISに搭載されていた。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志…… いや、願望か。それらが揃うと発動す

るようになっていたらしい」

「私が望んだから、ですね……強さを求めたから……」

「そう言う事だ。ラウラ・ボーデヴィツヒお前は誰だ？」

「……」

答えないラウラに対して千冬が言う。

「3年間と言う時間の中でそれを見つけろ、お前にきちんと教えることの出来なかった私にも責任はある。もし見つからないのなら私の所に来い、協力してやる。いいな？」

そうして千冬は医務室から出て行き、保健室にはラウラ一人だけが残されていたが千冬が出てから数分後、医務室に一人の人物が入ってくる。

「き、貴様は!!」

「やあ。怪我はどうだ？」

入ってきたのはイチカであり、その手にフルーツの詰め合わせがあった。

イチカが医務室に入ってから静寂が支配している中、イチカは持ってきたフルーツの中から林檎を取ると果物ナイフでウサギ型に切ると皿に並べていた。

先に静寂を破ったのはラウラだった。

「何しに来た。ただ、お見舞いに来ただけというわけではないだろう」

「お見舞いの為に来たんだがな……。まあ、そう警戒するな」

ラウラは一夏が剥いた林檎を口に運び、シャキシャキとした食感と噛めば噛む程口の中に酸味と甘みが満たされる。

「何故、貴様は強い。どうしたら、そこまで強くなれる」

「逆に聞くが何故、そこまで強さを……力を望む」

力を求める理由は人それぞれだが、イチカは何故、ラウラが力を求める理由が分からない。

力を求める理由は大きく分けて二つあり、一つは私利私欲の為、もう一つは何かを護る為である。

私利私欲の為に力を求める者は大抵、世界の歪みと言ってもいい存在になり、何かを護る為に力を求める者は世界を正し、導く事が多い。

イチカが護る為に力を求めたの対し、ラウラは護るという訳でもなく、私利私欲にしては少し違うとイチカは思っている。

「力を求める理由か… 私は嘗て、軍の中で最強と呼ばれる程の力を身に付けたがIS適合性を高める為に埋め込まれた、ナノマシンに適合しきれなかった私は出来損ないの【烙印】を押された」

「そんな、お前に織斑千冬は手を差し伸ばした」

「そうだ。出来損ないの私を教官は私を一年で部隊最強まで育ててくれた」

この時ラウラは力があれば認められる、力があれば存在できると力こそが全てなのだと思解した。

「だが、力を求めた結果がこれだ…。教官は自分を見つけろと言うが… 私には… 力以外ないんだ!! 力以外の存在意義が見つからないんだ!!」

力こそが全てだと思っていたがそれは目の前の少年によって打ち碎かれ、それ以外知らない、分からないから他の道を見つけられない。それ故の苦しみ。

「確かに自分を見つけることは難しいだろうな。だが、お前は一人じゃない」

「…え?」

「悔しい時、悲しい時、心が折れそうな時… お前を支え続けた人がいるはずだ。違うか」

「… ああ… そうだ。彼女達はいつも私の事を気遣ってくれた、励ましてくれた…。大切な仲間だ」

イチカの言葉を聞き、力に囚われてもいつも自分の為に一生懸命に頑張ってくれた部隊の姿を思い出した。

「人は決して一人では生きていけない、誰かに支えて貰って生きていく。なら、その支えてくれた人の為に生きる、守るといふ事もいいん

じゃないか」

「フフフ… 確かに悪くないな…」

「それが全てじゃない。他にもあるだろう。お前の人生はお前のだ。お前が自由に決め、自由に生きろ」

そういうとイチカは医務室を出て行き、ラウラだけが残るが千冬が出て行った時よりも表情は明るく、吹っ切れた感じだった。

保健室から出たイチカとバツタリであった山田先生により、大浴場が解禁された事を知り、シャルルを先に大浴場に行かせ、交代で大浴場を満喫した。

次の日、シャルルは自らが男性ではなく女性であることと本当の名前はシャルルではなくシャルロット・デュノアであることを告げた。一組のメンバーはいつも通りに彼女を受け入れた。

そして、ラウラの『嫁宣言』により、一部の女子が問題を起こしたが一人の教師によって鎮圧された。

14話

「海だー！ー！」

「待ちに待った時が来たのだ。多くの英霊^{生徒}達が無駄死にはなかつた事の証明の為に。再び私達の青春を謳歌させるために！海よ、私は帰ってきたっ！」

バスの中にソロモンの悪夢がいたのは気のせいだろう。

バスが旅館の近くに止まり、生徒はそれぞれ荷物をバスから降ろし、もちろんイチカも荷物を降ろし、自分の部屋に向かう。

部屋は一人部屋であり、イチカは荷物を置くと水着と複数のタオルを持ち、更衣室に向かう。

そして海に着くと、それぞれ更衣室に向かい水着に着替え、他の生徒が居る場所に向かうとすでにみんなそれぞれ自由に過ごしていた。特にやることのないイチカは釣りでもしようかと考える。

近くに釣竿と餌を有料だが提供してくれるところがあり、そこへ行こうとすると

「イチカーカー！」

大声でイチカを呼ぶ声が聞こえるとイチカは頭の中で何かが閃くと体一つ分右へずれると小さい影が物凄い勢いで海へ飛び込んだ。

「ちよつとイチカ！何避けてるのよ！」

「いや、なんか嫌な気配がしたから避けた」

小さい影——鈴音は頭に海藻を乗つけた状態で海から出てくる。

鈴音はギャーギャー騒いでいたがセシリアにオイルを塗ってもらおうよう頼むと鈴音は引き受ける。

その後、色々悪ふざけをした鈴音がセシリアに怒られたとか

「一体なんの用だ？」

イチカは釣竿と餌を借り、釣りをしてると背後から誰かが近づてくるのを感じた。

「何でわかったの？」

「別に気配でだな。で？ 何の用だ簪？」

イチカは近づいてきた簪に尋ねる。

「少し、話があつて」

「話？」

「うん」

簪はちよこんとイチカの隣に座る。

「イチカのおかげで二式は完成した。ありがとう」

「そうか。なら今度はお姉さんとの仲直りだな」

「うん。イチカのおかげで自分に少しだけど、自信が持てるようになってきた」

「そう。もし、辛くなったら教えてくれ。俺が何時でも助けてやる」

「その時はお願い」

ウキが何回か沈みだし、タイミングを合わせ竿を引く。

「ギターー！」

「おめでとう」

イチカが釣つたのは30cmのクロダイで簪が来る前に釣れたカサゴが4匹とセイゴが3匹を釣っており、イチカはクーラーボックスに入れると竿に餌を付けると投げ入れる。

「簪も何かしてくると良いぜ。それにほら」

イチカがある一点を指差すと其処にはキツネの着ぐるみ？姿の本音がおり、イチカ達に向けて手を振っていた。

「のほほんさん達と遊んでくるといい。俺も後から合流するから」
「分かった。絶対来てね」

そう言うと言は立ち上がり、本音の所に向かって歩き出した。

その後、イチカは簪達と合流するとビーチバレーをすることになった。

途中から千冬が参戦し、イチカと千冬の人外アタックが飛び交い、それを見た生徒たちの感想は一つだった。

『アレは規格外の規格外による、規格外の戦いだっただ』

夕方には風呂に入つてのんびりとして、夜の夕食では大宴会場に集まつて豪華な食事が振舞われている。

目の前には豪華に並べられた刺身と味噌汁がある。

「ねえ、イチカ。この緑色の山みたいなの何？」

「ああ、本わさだな。まあ食うか食わないかは人それぞれだな」

「へえー」

シャルロットはワサビの塊を口の中に運ぶ。

「つ~~~~~~~~!!?」

「だ、大丈夫か!?!」

「ら。。。らいひようふ。ふ、風味があつへおいひいね。。。」

「無理するなよ。ホレ、水」

「ありがとう」

イチカはシャルロットに水を上げる。

「所でセシリア。顔真つ青だけど。。。どうした？」

「だ。。。い。。。ようぶ。。。です。。。わ。。。」

顔色が優れない向かいに座っているセシリアに声をかける。

「無理するなよ」

「はい…。」

かすれた声での返答だが、これはただ晩御飯を食べてるだけなのであしからず。

夕食後、箸、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪が千冬の自室に呼ばれていた。

「どうした。いつもの馬鹿騒ぎはどうした？」

六人は正坐して怒られているような錯覚に陥っている。

「なんというか、織斑先生とこうして話すのは初めてなもので」

シャルロットが先程覚えた愛想笑いでごまかす。千冬はそれを見なが缶ビールを飲み乾した。

「くうくう!!それで?お前らアイツのどこがいいんだ?」

その言葉に全員が固まった。

「アイツと言って分からんお前らではあるまい」

千冬の言う通り、彼女たちにとってアイツとは一人しかいない——イチカだ。

「わ、わたしはただ腐れ縁なだけだし…。」

「私はクラス代表として相応しい様に…。」

「ふむ、そうか。では次だ」

「「ちよつと——!」」

セシリアの話の聞き終るとシャルルを指差し言う。

「僕は… 優しい所、です」

「そうか。だが奴は誰にでも優しいぞ」

「そこは少し悔しいかな… アハハ」

照れ笑いをしながら熱くなった頬を煽ぐシャルロット。

「次、更識妹」

「わ、私はまだこの気持ちが好きなのか分かりません。ただ、イチカといると凄く温かくて安心できるんです」

この気持ちだが親友としてなのかそれとも異性としてなのか今は分らないでいた。

「所で教官。一つ聞いて宜しいでしょうか？」

「なんだ、ラウラ？」

「イチカ・ギルオードは教官の実の弟——織斑一夏ではないんでしょうか」

一部を除くその場に者がラウラの発言に驚く。

「ラウラさん。それはどういうことですか!!」

「ふむ、私の部隊に頼んで嫁の髪の毛や指紋等を秘密裏に採取し、鑑定に出したのだ」

「…なんでそんな事を？」

簪は何故、ラウラがその様な事をしたのか理解できずにいた。

「入学前に嫁について調べたのだが、戸籍はおろか、家族構成、その経歴全てが分からなかった。一度、嫁のプレッシャーを感じたことがある奴ならわかると思うがあれは一般人が出せるものではない。軍属の私だから言えるがアレは戦いに身を置いていた者が発するものだ」
その場に居た、セシリア、シャルロット、千冬はどれ程のモノか理解している。

その場に居なかった箒と簪、気絶していた鈴音は何を言っているか分からなかった。

「あの時のイチカさんには恐怖しましたわ」

「そうだね。イチカの背後にフェニックスの様なモノが見えたしね…」

「教えてください。教官！」

千冬は持っていたビール缶を飲み干すと

「ラウラ。お前言う通り、イチカ・ギルオードは私の弟…織斑一夏だ」

肯定する千冬。

「じゃ、イチカがあそこまで強いのは…」

「いや、昔の一夏はあそこまで強くはなかった」

「一夏に一体何があったんですか！千冬さん!!」

「分からない。只、アイツは自分のせいで悲劇を起こし、自分の手を血に染めたと言っていた……。自分達が起こした戦いに巻き込まれたくないと言い私では力になれないと言った。一夏が戦う元凶も何のためか、私には分からない……。一夏かあそこまで変わってしまったのか、私には分からないんだ!!」

千冬は分からないのだ一夏が劇的と言っていいほど変わってしまった理由が、自分の知っている一夏はいない。

あの頃の一夏を思い出すと自然と涙が出てくる。

両手で顔を覆い時折、聞こえる悲しみの声。

普段見せることの無い千冬の姿にその場に居た全員はどうすればいいのか分からないでいた。

イチカ達が泊まった旅館から離れた所に位置する無人島に一人の少女がいた。

「奴から何も連絡は無い」

少女は持っていた通信機を砂浜に置くと一つの雑誌を取り出すとある一面を見る。

「この世界にはあの人がある。なら、恐らくアイツがいるはずだ」

少女が見ていた一面には「世界初の男性操縦者現る！」と大きく書かれていた。

「まずは辺りを隈なく探そう。あの人とアイツを探さなければいけないし、帰る手段も探さなければいけないいな」

そう言う少女は光に包まれると機械的な姿になり、その姿は深緑の狙撃手と言う表現が合う姿だった。

少女はイチカが乗るエクシアと同じ淡い緑色の粒子を放出しながらその場から立ち去るのだった。

15話

臨海学校二日目、この日は各種装備の実習訓練と専用機持ち達は本国より送られてきたパッケージのテストが行われる事になっている。だが、その場に居た専用機持ちはある疑問があつた。皆が抱いていた疑問を鈴音が代表して言う。

「織斑先生、どうして箒がここにいるんですか？」

そう聞くと千冬は

「それは…」

彼女が言葉を続けようとした途端

「ちーちーちやーちやーん」

そう言いながら千冬のもとにウサギの耳飾りを頭に着けた女性、I Sの開発者である篠ノ之東が千冬のもとに走りながらやって来て千冬に抱きつこうとするが千冬はアイアンクローでそれを止める。

「いたたた、痛いよちーちゃん」

「東…… 自己紹介くらいしろ」

「えーメンドイ…… って、言いたいけど東さんも子供じゃないからちやーんと自己紹介するさ！ 私が天才！ 篠ノ之東さんだよーん！ よろー」

『なっ!?』

この時、古くから東の事を知っている人物であるなら驚かずにはいられない。“あの”東が何の文句も言わずに自己紹介をしたのだから。

自己紹介を終えると東はある人物の方を向く。

「…… 久しぶりだね。いっくん」

「ええ、随分と変わりましたね」

「そうだね……。いっくんが居なくなってから東さん変わったよ。

でも、本当によかったよ！ 世界中の監視カメラや衛星を使っても見つからないんだもん!!」

サラツとトンデモ発言をする束だがここ最近、似たようなことをしている人物が身近にいる為、特に可笑しいと思えなくなっていたイチカである。

「やあやあ箒ちゃん、久しぶりだね、元気そうだね」

「……どうも」

「もう！ クールなのは箒ちゃんの魅力だけど、お姉ちゃんにまでクールじゃなくて良いのにく。気を取り直して。さあ、大空をご覧あれ！」

束が天を指すと空から菱形の何かが降ってきた。

「これが箒ちゃんの専用機こと紅椿！ 全性能が現行のISを上回る束さんお手製だよ!!」

紅いISが中から表れた。

紅椿の性能説明の後、箒のフィッティングをしている最中、他の専用機持ちはそのカタログスペックに唾然としていた。

現在、世界各国は漸く第三世代の開発に乗り出したのに対し、束は一人で第四世代を作ったのだから。

そしてフィッティングをしている束の指のスピード。この速さは専用機持ちの中で一番タイピングに自信のある簪ですら霞んで見えるほどだった。

ものの数分で紅椿のフィッティングが完了してしまった。

「ほい完了。じゃあ箒ちゃん、武装のチェックをするから飛んでみて」「は、はい……」

紅椿が空に飛び立つとそのスピードは速さにその場に居た殆どの専用機持ちが追いつける気がしなかった。

そうこうしている間に箒の武装のチェックが進む中、イチカはある事を見逃さなかった。

箒の顔が緩み、まるで新しいおもちゃを貰って喜んでいる子供のようであり、それはイチカを不安にさせるには十分だった。

「お、織斑先生!! 大変です!!」

山田先生が血相を変えて走り、普段とはまるで違う真面目な表情で千冬に手話で何かを伝える。

「先程、ハワイ沖で試験運用をしていたアメリカ・イスラエルによる共同開発第三世代軍用IS、シルバリオ・ゴスペル。通称銀の福音が原因不明の暴走、制御を受け付けずに日本に急速接近中との情報が入った。これに対しIS委員会はIS学園に対処を要請。日本政府及び学園上層部がこれを承諾した」

アメリカ・イスラエルの両国は無論追跡し、止めようとしたそうなのだがことごとく返り討ちに遭い、IS学園に救援を求めた。

自分では手が負えなくなり、他者に救援を求めるのは可笑しな話ではない。

だが、IS学園は兵士養成所と言っても過言ではないがここに通うのは素人ばかりであり、例えば、代表候補生が居るとは言え、訓練と実戦は違う。

例えば、急を要するからと言え、実戦経験が皆無な彼女たちにこの様な重要な任務を与えた事にイチカは呆れていた。

「さて、今回の件に対処する為の作戦会議を行う。何か意見のあるものは挙手をしろ」

千冬の言葉に、セシリアがスツと手を挙げる。

「はい、目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「分かった。ただし、この機体の情報は重要機密だ。決して口外するな。情報が少しでも漏洩した場合、諸君等には査問委員会による裁判と最低二年の監視がつく」

そうやって銀の福音のスペックデータを起こし、表示する。そして全員がそれを目に通しながら相談を始める。

銀の福音——シルバリオ・ゴスペルは広域殲滅を目的とした特殊射撃型。しかもオールレンジ攻撃を可能とし、機動力もある故に移動しながら広範囲に攻撃することを得意としている。

「偵察が出来ず、アプローチはたったの一回……か」

イチカは顎に手を当て考える。

（広域殲滅と言うとデストロイガンダムと似たようなモノか……。エクシアで戦闘を行うにしてもリーチ的にキツイし、火力的な面でも少し、物足りないな。だが、GNアームズの火力と機動力なら問題ない）

これ以外にも止める方法イチカは持っているがリスクが高い。

（TRANS—AMを使えば行けるが使用後は性能が著しく落ちるし、この状態でアイツと戦闘になった場合……）

イチカは考えるのを辞める。これ以上考えると本当に起きそうで仕方なかった。

「イチカの機体が赤くなるアレが一番有効だと思うわ」

鈴音の言う赤くなるとはTRANS—AMの事だろう。

「確かにアレは機体性能を三倍以上に引き上げることが出来るが限界時間になると機体性能が著しく落ちる諸刃の剣だ。前提で戦うのなら目標まで運ぶ足が必要だ。そこで織斑先生に一つ提案がある」

「なんだ。ギルオード」

「エクシアの支援機である、GNアームズを使った作戦を要求する」

イチカはその場に居る全員にGNアームズの機体データが見える様に表示する。

「確かにこれなら火力、機動力共に申し分ないな」

「……強襲用高機動パッケージを使ったブルーティアーズより、早いですわね」

機動力で言えばブルーティアーズや打鉄二式も申し分ないがブルーティアーズの場合、強襲用高機動パッケージを量子変換していない為、時間が掛かり、打鉄二式も高速戦闘を視野に入れて設計されている為、高速戦闘は可能だが超音速下の飛行はまだしたことがない上に、高軌道パッケージがないからだ。

「その作戦ちよつと待った!!」

と、いきなり天井の板が吹き飛び、穴から束が入ってきた。

「ちーちゃん。私の頭の中にもつと良い作戦がナウ・プリーティング!!」

「出て行け。束」

千冬に詰め寄る束の襟首を掴み、扉の外に放り投げようとするが

「ここは断然紅椿の出番なんだよ!」

「なに?」

その言葉に動きが止まった。

これを見よと言わんばかりに束が指を鳴らすとモニターが紅椿のデータに変わった。

「紅椿は高機動パッケージ無しでも超音速飛行が可能なんだよ!それはさつき見たでしょ!」

「……」

「でもって、展開装甲を調整すれば、すぐにも出撃は可能だよ!!」

「……それはどれくらいかかる?」

「ざつと七分!!」

「よし、ではギルオードと篠ノ之の両名の出撃にする。何かあるか」

その言葉に真つ先に挙手したのはイチカだった。

「異議あり。実戦経験……ましてやここ最近、動かした素人を連れて行くのはリスクが高すぎる。もし、箒も作戦に参加するのであれば箒は何もせずに待機、俺一人だけでやらせてくれ。その方が作戦の成功率は高い。俺一人だけで作戦を決行することに異を唱えるなら作戦空域の近くに代表候補生を配置して欲しい」

「待て一夏! 私では不服だというのか!!」

イチカの発言に真つ先の意を唱えたのは箒だった。

「ああ、そうだ。今のお前は新しい玩具を貰った子供の様に胸が高まり、早く新しい玩具を試したいと気持ちが高ぶってる。その証拠にお前笑ってるぞ……。そんな奴に俺の背中を任せることはできない」

「一夏! いくらお前でも容赦はせんぞ!!」

「静かにしろ、篠ノ之。ギルオードの言っている事は事実だ。だが作

戦自体を変えるつもりは無いが万が一の為にギルオードの進言したように空域に時間の都合上により高速移動の出来る更識妹を配置する。これでいいな?」

「感謝する」

「ち、千冬さん!?!」

一人で騒ぐ筈を無視し、千冬が命令する。

「よし、では本作戦はギルオード・篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。そしてバックアップで更識妹。残りは旅館に待機。作戦開始は10分後。各員、直ちに準備にかかれ!!」

16話

作戦開始まで僅かとなり、イチカ、箒、簪が海岸で待機していた。

「…そろそろ、時間だな」

「ああ！」

箒は紅椿を纏うとイチカ達も展開する。

エクシアを纏ったイチカはGNアームズと合体しており、いつでも出撃できる状態だ。

「簪。もしもの時は頼む」

「わかった」

「任せろ。私と一夏だ。例えどんな相手でも負けはしない」

自信に満ち溢れた表情をする箒だがその自信は一体何処からきているのだろうか。

イチカ自身ここまで頼りにならない自信に内心不安しかなかった。

「初の実戦だ… 無理はするな。危険だと感じたらずぐ撤退しろ」

「私と紅椿の前に敵は無い！ それに私の仕事は一夏を状況に応じて援護するだけだ。なに、問題ない！ 大船に乗ったつもりでいろ」

状況に応じて援護すると簡単に言うが実際は難しく、一つのミスで自分自身や仲間へ危険が及ぶ重大なポジションなのに対し、安易な考えに自分の役割の重大さを理解していない辺り浮かれている証拠だろう。

箒に不安を感じていると千冬から通信が入る。

「篠ノ之はどうやら浮かれているな… 何か仕損じるやもしれん… そのときはお前達がカバーしてやれ」

「了解」

通信を切り、三人は大空を飛び、各々の役割を果たす為に行動する。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了!!10秒後に接触する!!」
箒の言葉を聞いてイチカは更に加速し、大型GNサーベルを振るう。

だが、イチカが振るった大型GNサーベルは福音の装甲を掠めるだけで撃墜とまでは行かなかった。

「チィー！掠っただけか」

イチカはすぐさま軌道を修正し、福音に大型GNキャノンを放つ。福音は対抗するかのように圧縮されたエネルギー弾を放つ。

福音のエネルギー弾により、GNキャノンは相殺され、相殺から免れたエネルギー弾がイチカを襲う。

「クッ！思ってたより威力が高い……」

イチカはGNフィールドを展開し、攻撃を凌ぐがその威力と量に押しされる。

「箒は左側面から攻撃しろ。挟み撃ちにする！」
「分かった」

二人は左右に展開すると接近を試みるがエネルギー弾の弾幕により、接近型の二人は接近できずにいた。

箒の空裂と雨月による遠距離攻撃も打ち消されるか、避けられるかで決定打を与えることが出来ないでいた。

「ハアアアー！」

イチカは箒の遠距離攻撃を避けている福音の背後に周り、回し蹴りをする。

回し蹴りを喰らった福音は5層程飛ばされると態勢を立て直し、攻撃に移行するがミサイルにより、中断される。

「イチカ!!」

先の攻撃をしたのは追いついた簪だ。

福音が攻撃した時イチカは回避しようとするがイチカはある光景が目に入ると回避せず、GNフィールドで耐える。

「何故、避けなかった。一夏!」

「俺の背後を見てみる...」

「密漁船...」

二人はイチカが言う方向を見てみると其処には国籍不明の密漁船がいる事に気づく。

「そんな犯罪者など見捨てればいいものを...!!」

「勝つためなら無関係な人間も巻き込むのか!」

「勝つための犠牲だ...。仕方あるまい」

「何が勝つための犠牲だ! そんな犠牲を伴って得た勝利なんぞ何も意味がないんだ! 例え犯罪者でもアイツらは生きているんだ...。力を得た途端、お前は生きている人間を... 関係ない人間を見捨てるのか!!」

「ち、違う! 私は!!」

イチカはGNフィールドで耐えながら簪に通信を送る。

「簪は箒のアシストをしてくれ... 嫌な予感がする」

簪は箒の所に行くといチカは福音に攻撃を再開する。

イチカが福音に接近した時、福音とイチカの間には赤いビームが横切る。

「増援...」

「福音だけではなかったのか!?!」

「アレは...」

イチカ達は砲撃がした方を向くと其処には金色の機体があり、その機体後部にはエクシアと同じ太陽炉を七基搭載し、金色の粒子を放つ機体が居た。

「アルヴアトール... だと...」

「…あの機体を知っているの?」

「ああ、福音より厄介な機体だ。お前らは福音を頼む。アイツは俺が相手をする」

「なら私も共に戦うぞ!!私と紅椿なら出来る!」

「ウダウダ言わず話を聞け!!この馬鹿者が!!本来の目的を忘れるな!!」

「クッ!」

箒はしぶしぶ福音の方に向かう。

アルヴアトーレの搭載する疑似太陽炉はイチカが使うオリジナルの太陽炉と異なるところがある。

一つはオリジナルの太陽炉は半永久機関なのに対し、疑似太陽炉は電力をGN粒子に変換する為、活動時間が制限される。

二つ目は武装のエネルギー用に高濃度圧縮されると有害性を秘めており、細胞障害や生物に多大な影響を引き起こす毒性を持つ事。

アルヴアトーレは後部から大型GNファングを展開すると箒達に四基とイチカに二基向かわせる。

「奴の攻撃を喰らうな! あの粒子には細胞障害を起こす毒性がある!!」

『なっ!?』

イチカの言葉を聞くと箒達は福音よりも回避に専念するがこれを好機と見た福音はその場から離脱する。

「福音が!」

「でもこの攻撃じゃ…」

回避に専念する二人だが徐々に追い込まれ始め、回避も危なくなっかしくなる。

「チィ!」

イチカは簪と箒の所に行くくとGNビームガンとライフルモードのGNソードで破壊する。

「二人は一度空域から離脱しろ」

「待て一夏! なら私も」

「相手との実力差も分からない奴がふざけた事を言うな! 今お前が

ここに居ても足手纏いになるだけだ!!」

そう言うといチカはアルヴアトローレの方に向かう。

イチカはGNキャノンを連射し、接近するがアルヴアトローレは残りのGNファンングとGNビーム砲により、接近できずにいた。

機首部に1門内蔵された大型GNキャノンがイチカに向けて放たれるがイチカは回避し、GNキャノンとGNビームガンを連射しつつもう一度接近を試みる。

「ウオオオオ!!」

接近するイチカにGNビーム砲やGNビームライフルを放ち、右大型GNキャノンに命中し、爆発するがイチカは気に留めず接近し、大型GNソードをアルヴアトローレに突き刺すとそのまま切り裂き、イチカを捉えようとしたクローアームを一基破壊する。

だが、もう片方のクローアームに捉えられ、大型GNキャノンをエクスピア本体に向ける。

「こんな所でやられるか!!」

イチカはGNアームズから離脱し、GNソードでアルヴアトローレを切り裂く。

連撃を受けたアルヴアトローレは所々から煙を出すと中から一機の金色の機体アルヴアアロンが姿を表すと両手に持っていたGNビームライフルを連射する。

「ええいー!」

イチカはGNビームライフルを避けつつライフルモードのGNソードを連射するがアルヴアアロンを覆うGNフィールドによって無力化される。

「やはり搭載されていたか…。だが、その対抗策は持ってるんだよ!」

イチカはGNロングブレードを両手に持ち接近しようとするがアルヴアアロンはGNビームライフルを放つがそれはイチカに向けて放たれず、イチカは銃口の先を見てみると其処には今となっては使い物にならないアルヴアトローレに向けており、そして自分がアルヴアトローレの近くにいる事に気づく。

「何を… まさか！」

イチカはすぐさまアルヴアトールから離れようとするがそれよりも早くアルヴアアロンはGNビームライフルを放つとアルヴアトールに命中し、命中したアルヴアトールはスパークし、次第に激しくなり大爆発を起こす。

誰もがイチカの撃墜したと思っていたが大爆発を起こした所から赤い影が出てくる。

「一夏！」

「…無事だったんだ」

煙から出て来たエクシアに目立った損傷は見られないがエクシアの装甲が赤く染まっていた。

TRANS—AMを発動したエクシアは残像が残る程の高速移動し、アルヴアアロンの攻撃が頭部に命中するがそれ以外は躲し、接近すると持っていたGNロングブレイドを肩部に刺す。

「破壊する…！」

次に両肩に一本ずつマウントされているGNビームサーベルを胸部に刺す。

コード・アメリカス
「世 界の歪みから生まれたお前を」

腰部にマウントされたGNビームダガーを脚部に刺す。

「俺が… 破壊するッ！」

振り上げたGNソードを振り下ろし、切り裂くとアルヴアアロンはスパークし、赤いGN粒子を撒き散らし、爆発する。

「敵は倒した。だが、福音は…」

「作戦は失敗だ。一度、帰還して作戦を…!？」

イチカはGNソードを構えるとクラス対抗戦の時の様に何の無い所から二機の機体が現れる。

一機は全身が青一色でイチカのエクシアからV字アンテナを無くしたような機体に刺々しい赤い両肩を除けば蒼で統一されたモノアイの機体。

イチカはこの機体を見ると先程とは比べ物にならないほどの緊張が走る。

「簪！ 簪！ 今すぐここから離脱しろ!!」

「な、何を」

「いいから早く離脱しろ!! 決して殺気を放つな。いいな!!」

「い、イチカはどうするの?」

「お前たちが撤退するまでの足止めをする...!」

そういうとイチカは現在、エクシアに搭載されている唯一の武装であるGNソードをソードモードにし、先程現れた敵に向かう。

簪はイチカと正体不明の二機との戦いを見るとイチカの劣勢は明らかであり、簪はイチカの言葉を見無視し、援護に向かおうと思ったが今、自分が行っても邪魔になるだけであり、何よりイチカの意味や覚悟を踏みにじる行為だと理解する。

「... イチカが相手の気を引きつけている内に撤退をしないと」

「待て! お前は一夏を見捨てるのか!!」

「私だってイチカを見捨てたくない!! でも今、イチカの所に行っても今の私達じゃ、足手纏いになるだけ... 少しでもイチカの事を考えるのならイチカの行為を無駄にしないで...」

「クッ!」

簪は苦虫を噛み潰したような表情で撤退を開始するのだった。

簪達が撤退を開始したのを確認するとイチカはGNソードを構え直す。

イチカはこの二つの機体を知っている。

地球連邦軍に亡命した元フラナガン機関所属の研究者、クルスト・モーゼスが開発したニュータイプ殲滅システムで「ニュータイプがやがて旧人類の天敵となり得る」という妄執に取り憑かれ開発したシステムであり、ニュータイプの戦闘技術をオールドタイプパイロットでも再現された。

EXAMシステムはニュータイプの脳波を検知した場合、システムはニュータイプ殲滅を優先としパイロットの制御を離れた行動を行い、また戦場にEXAMシステムを搭載した機体が複数存在した場合にはお互いをニュータイプと認識して同士討ちに加えて、多数の人間の死と殺気を感じた場合でも同様の反応が起こり無差別な殺戮を開始してしまう。

だが、イチカにはある疑問があった。

戦場にEXAMシステムを搭載した機体が複数存在した場合、同士討ちを始めるのだがどういう訳か同士討ちをしないでいた。

『EXAMシステム…スタンバイ』

イチカが思考の渦に囚われている時に聞こえた言葉はイチカを戦慄させるには十分なモノだった。

「クソッ！」

イチカはまだGN粒子のチャージを終わていないが機体を動かし、接近戦に持ち込む。

「ハアアアアア!!」

イチカはGNソードで両肩が赤い機体イフリート改に接近し、攻撃するが二つのヒートサーベルによって防ぐと脚部に装備していたミサイルポッドで反撃する。

「クウ…ガッアアア!!」

完全に躲すことが出来ず、脚部の装甲の一部が破壊され、後退しようとする^{ブルーデイスティニー}とB D 一号機（以降はBDと表記）は腹部からミサイルランチャーを放ち、格闘戦を仕掛けてくる。

ミサイルランチャーと格闘の衝撃で態勢を崩し、立ち直ると目の前に接近した、BDがエクシアの頭部を鷲掴みするとそのまま投げつ

け、マシンガンを連発する。

「：：ハア：：ハア：：ハア。ここで負けるわけにはいかない：：！」

イチカはイフリート改に接近するがBDのマシンガンと頭部と胸部にあるバルカンとミサイルの連撃を喰らい、エクシアの装甲は破壊され、左腕はミサイルランチャーが直撃し、最早、満身創痍の状態だがイチカはGNソード突き出しイフリート改の頭部に直撃する。

だが、イフリート改も只ではやられず、GNソードを抜いた瞬間、ヒートサーベルを使った最後の連撃を繰り出し、GNソードの刀身は叩き折るとその場で爆発する。

「クソツタレ：：！」

イフリート改の爆炎から現れたBDのビームサーベルを喰らい、エクシアとイチカに限界が来たのかツインアイから光が消え、重力に従い海に沈んでいく。

「そんな：：！」

簪達は撤退行動しつつ、イチカの状態を確認していたが先程までイチカが表示されていた所には『LOST』と表示されていた。

イチカが落とされた事にショックを受けていると自分達に近づいてくる一機の反応が現れる。

接近する反応には『UNKNOWN』と表示されており、ハイパーセンサで確認できる程接近するとその機体に驚くと同時に怒りが露わになる。

何故ならそれは先程、イチカを落とした機体そのものだからだ。

「貴様が一夏オオオオ!!」

平常心を無くし、獣の様な叫び声を上げながら空裂と雨月をコールし、襲うが直線的な攻撃は当たる素振りを見せず、BDは箒の腕を掴

むと開いた腕で箒を殴り続ける。

「その手を離せ！」

箒は背中に搭載された2門の連射型荷電粒子砲——春雷を放つがBDはその手に持っていた楯箒で防ぐとそのまま箒に向けて投げ捨てる。

「…!?… 大丈夫？」

「ああ、すまない…」

箒は箒をキャッチするが投げると同時に移動していたBDは箒のすぐ近くまで接近していた。

BDはビームサーベルを大きく振りかぶり、箒達は目を瞑るがいつまで経っても攻撃が来ないことに不思議と思つた箒達はゆっくりと目を開ける。

箒達が見たのは自分達を護るよう配置された緑色の板とその上空にイチカと同じ淡い緑色の粒子を放つ、深緑の機体が居た。

「貴様は一体何者だ！」

箒は雨月を深緑の機体に向ける。

「私はお前達の味方だ。信じるか信じないかはお前たちの自由だがな」

「私達の味方…」

「ああ、その証拠として貴様達の撤退の援護をしてやる」

そう言う肩に装備してある一つの折り畳み式のスナイパーライフルを取り出す。

「早く行け！あの人の行為を無駄にするな!!」

今ここで敵味方の議論しても何にもならない事は二人は理解している。

「… すまない」

箒は箒に掴まり、紅椿の今出せる最大のスピードでその場から離脱する。

深緑の機体否、深緑の狙撃手は二人が戦域を離脱したのを確認する。

「さて、兄さんを落とした仇を取らせてもらう… と言いたい所だが

今回の目的は貴様の撃破ではないのでな。…ここは離脱させてもらうぞ」

深緑の狙撃手——マドカはBDに向けてGNミサイルを放つがBDに当たる前に爆破し、そこから煙幕が発生し、BDの周辺を覆う。

この煙幕にはセンサー類に対し、妨害電波を発生させ、無力化させることが出来る代物である。

マドカは速やかに撤退し、煙幕がはれBDは周りを索敵するが反応は無く、その場から撤退した。

17話

作戦は正体不明の機体の乱入により、失敗し、正体不明の機体を落とした後に現れた二つの機体により、イチカは撃墜された。

イチカが落とされた事がショックなのかそれとも力になれなかったことに対するショックか、箒は自室に閉じこもってしまった。

旅館の庭では鈴音、セシリア、ラウラ、シャルロット、簪の5人がひそかに話し合っていた。

「さて、どうするべきかしらね」

「どうすると言われましても、まずは福音はあの後どこに行つたかですわ。もう日本の領域から出られていては私達にはどうすることもできませんわ…」

鈴音とセシリアがそう話しているとラウラが二人にある事実を言う。

「福音の居場所ならばわかるぞ」

「えっ、どういう事？」

「我がドイツ軍の衛星が、福音がここから少し離れた小島の陰に潜んで居る所を捉えたんだ」

「そう言う事でしたか」

ラウラの言葉にその場に居た全員が納得する。

ラウラは自分の部下に衛星の使用許可を求めた際、自分の部下の尽力により、衛星の使用許可があり、ラウラは常に自分の為に頑張ってくれる部下たちに心から感謝した。

「で、作戦はどうするの？この中で高機動戦闘ができるのはセシリアと簪だよね？」

「そうですね」

「でも、私達だけだと少しキツイ…」

「いや、イチカと同じ粒子を放つ機体が共に戦ってくれるかもしれない。私の推測が正しければ、あの機体はイチカのエクシアと同じ技術

で作られた姉妹機だと思われる。そしてあの口ぶりからするにイチカと何らかの深い関わりを持ち、かなり友好的な関係と考えられる。恐らく、奴も私達と同じ事を考えていると思う。だが、これは不確定要素が強すぎる」

ラウラは自分の考えを言うのと今まで黙っていた鈴音が口を開ける「もう一人いるじゃない。高機動戦闘可能な機体を持った人」

そう鈴音が最後に上げたのは今現在、戦意喪失中の箒であることをその場に居た全員がすぐに理解した。

「だけど…誰が説得するの?」

「もちろん私が行くわよ。ついでに言いたいことが山ほどあるしね」「そうですか」

「まあ、その間にあんたたちは準備をしてるといいわ。私はその間に説得してくるから」

鈴音が箒の居る部屋の扉を開けると其処には項垂れた箒が居た。

「アンタ、いつまでそうしてるつもり?」

「……」

「そうやって黙り込んで、私は今、落ち込んでますよってポーズ?…いい加減にしなさい!!」

鈴音は右手で思いっきり箒の頬を叩く。

「人は落ち込んだり、失敗した時、二通りのパターンがあるわ。いつまで失敗を引きづり込んでじめじめと腐っていくタイプとその失敗を糧に新たな一步を踏み出すタイプがあるわ。まさか、このまま何もしないで塞ぎこんだまま、何もしないなんて言わないわよね」

「……」

「アンタ、一体何のために専用機を手に入れた訳、クラスメイト達を見下したかったから? イチカと同じように専用機が欲しくなったから? 自分よりイチカと多く話している私たち専用機持ち達が羨ましくなって自分も専用機を持てばイチカと昔みたいに話せると思ったか

ら？」

「私は…ただ、一夏と共に戦える力が…一夏を護る力が欲しかっただけなのだ…」

「へえー…アンタの場合欲しかったのは誰かを犠牲にしても自分を知らしめるための力の間違いじゃないの？」

「そんな事…」

「ないとは言わせないわよ、クラス対抗戦の時と言い今回と言いあんた自分の力でどれだけの人を傷つければ気が済む訳!？」

「だから、私はもうISには…」

「クッ!!」

箒の言葉を聞いた鈴音は先程と違い、叩くのではなく、殴りつけた。箒はその衝撃で地面に倒れるが鈴音は気にせず言葉をつづける。

「そうやって自分のした失敗から逃げ続ける訳!?力を手に入れたは良いけどいざ失敗したら現実逃避、そんな事が許されると思ってるの!!逃げ続けることに意味なんてない。戦い続けることに意味があるのよ!!それとも恐れをなした訳」

「私だってアイツを倒したい!だが、肝心の居場所がわからないではないか」

「居場所なら、ラウラがドイツ軍の衛星を使って見つけたわよ、私以外のメンバーはもう準備してる」

「こ、こは…」

その頃、イチカは不思議な場所にいた。何処までも暗く自分以外何も見えない分からない場所。

「イチカ」

イチカは当てもなく歩いていると何者かがイチカを呼ぶ。

「お前は…」

イチカは声が出た方を向くとそこにいた人物に驚く。

何故ならその人物は自分と同じ存在であり、この世界に本来いるはずの無い、人物だからだ。

「初弾命中を確認、続けて砲撃を行う」

ラウラはそう言いながら砲撃を始めていくが2発目以降は福音に回避されてしまうがその回避先には高機動戦闘専用パッケージであるストライク・ガンナーを装着しているセシリアと簪が待ち構えていた。

彼女は福音に対し正確な攻撃と弾幕を叩き込んでいく、そしてその隙に紅椿を装着した箒が近接戦に持ち込み確実にダメージを与えていく、そして福音が二人を振り切ったとしても、衝撃砲の威力増幅パッケージ崩山を装着した鈴音が福音に攻撃を当てる。そしてシャルロットは防御パッケージであるガーデン・カーテンを装着し、この中では唯一防御力が低い鈴音をかばいながら福音の弾幕を防いでいく。

「流石軍用機と言った所かしら、火力もスピードも桁違いね」

「でもこのまま行けば、倒せますわ」

セシリアの言う通り彼女たちの攻撃によつて福音は徐々にではあるが動きが鈍くなり、なおかつ弾幕を張らずに防御や回避に専念し続けていることから福音のエネルギーがもう少しでなくなるとこの場にいる誰もが思っていたのだが、ここでありえないことが起きる。

それは福音の周りを突然謎の球体が包み込み、福音がその中で悲鳴にも似た何かを上げると、機体の形が徐々に変わり始める。

「ちよつと...これってまさか!？」

「セカンド・シフト第二形態移行...そんな暴走中の機体がどうして!？」

「油断するな来るぞ!!」

ラウラのその掛け声と同時に福音は強大なレーザー攻撃を放つ、そして付近には大きな爆発が起こった。

福音が第二形態移行をした際に放った攻撃は今までのISの兵器の威力を大きく上回っていた。だが、彼女たちの機体には目立った傷は見当たらなかった。

何故なら彼女達を護るように緑色の板がそこにあつたからだ。

「近くで戦闘してると思ったら貴様達か」

「お前は...」

「あの時、私達を助けてくれた人…」

簪達の目の前にはケルデイルを纏ったマドカがGNスナイパー
イフルⅡを構えていた。

「何故こんな所に居る？ 作戦は失敗に終わり、待機命令が出ている
はずだが」

「僕達は福音を倒し、そしてイチカの仇を取りに来ました」

「敵討ちか… 目の前の奴を倒せたとしても貴様らではアイツは倒せ
んぞ」

「そんな事はやってみなければ分かん。だが、より確実にアイツを
倒すためお前の力が必要だ。故に私達に協力して欲しい」

「アイツと戦うという事は今よりも激戦になるという事は理解してい
るのか？」

「承知の上だ」

本来ならラウラ達の考えを一蹴する所だが、彼女達には揺るぎない
覚悟を感じ取ると

「フツ… 貴様らの提案に乗ってやる。だが、私の邪魔はするなよ」

そういうとマドカはGNスナイパーライフルⅡを福音に向けて放
つがその精度はセシリアの比ではなく、確実に急所を狙い撃つ。

「あそこまでの精密射撃が出来るとは只者ではないな」

「しかもビットとライフルを同時に使えるなんて…。この戦いが終
わりましたらご教授してもらいたいですわ」

「… そんな事言っている暇があったら援護した方がいいと思う」

簪の言う通り、先程から全員が福音とマドカの戦いを傍観してい
る。

「そうだけど…。もう終わりそうだよ」

シャルロットの言う通りマドカの精密射撃を回避できずに当たり
続け、福音の装甲はボロボロの状態である。

「もう終わるのか…」

「いや、まだだ」

簪がこれで一つの戦いが終わると思ったがマドカが待ったを掛け
る。

「… 複数の機体が接近」

「増援か!？」

接近してきた機体が目視で確認できるところまで近づく。

「あ、あれは…。」

「あの時の敵!」

「しかも相手の戦力が増えているね…。」

BDを先頭に似た様な機体が大軍で攻めてきたのだ。

「パツと見で見た感じ、同じ機体が30つて所かな」

「この後、やることがあるのでね。早々にケリをつけさせてもらおうぞ!」

マドカの言葉を聞くと各々が武器を構える。

場所は変わってイチカは目の前にいる男に驚いていた。

「何故お前がここに居る。刹那」

そう、イチカの目の前に居るのは自分と同じ純粋種のイノベーターであり、イチカがイノベーターに覚醒する切欠となった人物。

だが、刹那達ソレスタルビーイングはアロウズ解体後は、ソレスタルビーイングに留まって紛争の抑止力となつて生き続ける役目を自分達に課し、政府などの手の届いていない組織や施設の無力化と告発をしている。

「イチカ。お前はここで終わるのか」

「終わる…。俺が?」

「お前は何も出来ずに、何も守れずに、何も変えることも出来ずに終わるのか」

「ふざけるな…! 俺にはやりたい事がある! やらなければいけない事がある! 俺は約束したんだ。必ずみんなの所に帰るって…約束したんだ!!」

イチカにはまだやらなければいけない事が残っている。

「なら、お前はここに居るべきじゃない」

「ああ」

「行け、イチカ。未来を明日を切り開く為に」

刹那がそう言うのと暗かった空間が次第に明るくなっていく。

「クソ！ 敵が多すぎる!!」

「ああ、もう！ どんだけ倒せばいいのよ!!」

ラウラと鈴音は敵の多さに愚痴を漏らす。

海には多くの残骸が浮かんでいる。

「ですが、私達ではこの敵を相手にするのが背一杯ですわ」

「そうだね。 僕たちじゃ、あの敵には敵わない」

シャルル達は一度だけBDと交戦したがその人を人と思わず、力でねじ伏せていくその姿は「蒼い死神」と言っても過言ではない。

「シールドビット、アサルトモード！」

BDと交戦していたマドカはシールドビットを4基を格子状に配置し、それを二つ作るとそこから強力なビームを放つ

「…このままだとエネルギーが持たない」

簪は夢現でジムを切り裂く。

「簪！ 後ろだ!!」

「え？」

簪が後ろ振り向くと其処には二機のジムが海面から浮上し、ビームサーベルを振りかぶっていた。

ジムはビームサーベルを振りかざそうとした時、二機の内一機が腕を斬られ、もう一機が縦に二つに割れ、爆発を起きる。

爆炎が晴れると其処には撃墜されたエクシアがいた。

『一夏／イチカ（さん）!!』

イチカは箒達を見るとここにいるはずの無い人物を見つける。

「無事だったんだね… 兄さん!!」

「マドカ…」

マドカは戦闘中にも関わらずイチカに抱き付く。

それも仕方のない話なのだ。彼女にとってイチカはこの世で一人の家族なのだから。

「何故、ここに居るのか聞きたい所だが今は戦闘に専念しよ」

「うん。私も兄さんと話したいことが沢山あるから。…その機体で戦うつもりなの？」

マドカが指摘したのはエクシアの状態だ。

今のエクシアは至る所の装甲が欠けており、頭部のツインアイの内右目が損傷しており、その部分には別系統のカメラが使用され、左腕は布を被せ、アルヴァアロンとの決戦で失ったGNビームサーベルなどの武装が補給されておらず、先端の欠けたGNソードが唯一の装備である。

「大丈夫だ。俺はまだ戦える！」

イチカはGNソードをライフルモードにし、ジムを次々と落としていく。

イチカの出現により、戦況は変わると思っていたがイチカの登場と共に反応する機体の一つだけあった。

対ニュータイプ用に作られたBDはこの戦場で唯一のニュータイプである、イチカにターゲットを絞るとイチカに向けて猛攻を始める。

「ハアアアアア!!」

イチカは目の前のBDにGNソードで攻撃するが決定打となる攻撃は出来ずにいた。

この時イチカは目の前の敵に集中していた為、自分の背後に敵が潜んでいたことに気づいていなかった。

「グウアー！」

イチカの背後を取った福音はエネルギー弾を射出し、BDに気を取られていたイチカはその攻撃を受けてしまう。

『GNドライブに被弾。出力73%まで低下』

「クソオ…」

イチカはGNソードをライフルモードにし、福音に向けて撃つが全て避けられる。

「一夏！ 前だ!!」

「ハッ！ しまった…」

イチカは正面を向き直した途端、頭部をBDに鷲掴みにされるとその手に持っていたマシンガンを押し付けるとそのまま連射する。

「グアアアアア!!」

BDはマシンガンで攻撃し終わるとビームサーベルを取り出し攻撃すると海に叩きつけるとそのまま沈んでいく。

海の中を沈んでいくイチカ。

(俺は…：こんな所で…：終わるのか?)

否、まだ自分にはやることがある。だが機体や身体が言う事を聞かない。

(何も守れずに、何も出来ずに皆との約束を守れずに…：ここで朽ち果てるのか)

沈んでいくイチカは右腕を伸ばす。

(まだだ…：俺はまだ死んでない。俺はまだ戦える！ 俺にはやるべき事がある!!何度やられようと俺は諦めない!!)

イチカの諦めないその心に反応したのかエクシアが光に包まれていく。

「貴様！ 一度ならず二度までも一夏をオオオ!!」

「よくも兄さんを!!」

箒は空裂のエネルギー刃を放出し、マドカはGNスナイパーライフルIIで攻撃するが近くのジムの残骸を拾うとそれを盾の代わりにする。

BDは盾として使用したジムをマドカ達に投げつける。

BDは投げつけたジムを回避するとジムは海面にぶつかり爆発を

するがBDそんな事は気にせず、ビームサーベルを構えると箒を攻撃する。

「クツ……。なんとというパワーだ……」

BDは開いていた足で箒を蹴り、出来た隙を見逃さず、がら空きの箒の腹部を殴打するとBDは頭上からビームサーベルを突き刺そうとする。

「こんな所で……」

BDは何かを感じたのか箒への攻撃を中断し、その場から離れるとさきほどBDがいた場所を何かが通り過ぎる。

箒は通り過ぎた影を視線で追うと其処には青と白を基調とした機体があり、バインダーの様な物に二つの突起物、そこからエクシアと同じ淡い緑色の粒子が放出されている。

「イチカ……」

「姿が変わっている……第二形態移行したの?」

「無事だったんですね。イチカさん」

箒達は姿は変われどアレがイチカであるという確信があった。

「イチカ・ギルオード、ダブルオーライザー……目標を駆逐する!」

イチカの新たな剣——ダブルオーライザーはGNソードⅡを構えるとBDのビームサーベルと幾度となく交差し、鏝迫り合いが起きる。

「俺にはやるべきことがある。だから……!」

イチカはBDの攻撃を右腕に持つGNソードⅡで防ぐともう片方のGNソードⅡをライフルモードにし、BDに放つ。

BDはイチカの攻撃を避けるがイチカの攻撃はまだ終わっていないかった。

イチカは退避しようとしているBDに対し、GNソードⅡで左肩を切り落とし、それに対し、BDは持っていたマシンガンで攻撃するがイチカはそれを難なく回避する。

「なんとという機動性だ…」

「あの機動性は紅椿と同等かそれ以上だぞ」

ダブルオーライザーの機動性に一人を除き驚いていると攻めの一
手を取る。

「ここで貴様を破壊するッ!!」

イチカはBDに背後を取るとGNソードⅡで横一文字に切り裂く。

BDを倒したイチカは福音に標的を絞るとGNソードⅡで攻撃す
るが福音は腕を交差させ防ぐ。

福音と交戦していたイチカは気が付くと先程、刹那と会った空間と
は別の空間にいた。

『()は…』

『…助けて』

イチカは声のした方を向くと其処には一人の少年が何も無い空間
から現れた鎖によつて磔にされていた。

『君は誰?』

『俺はイチカ・ギルオードだ。お前は?』

『僕は銀シルバリオ・ゴスベルの福音』

『お前が…』

イチカは目の前の少年が自らを福音と名乗った事に驚くが授業で
ISにはコア人格と呼ばれるモノが存在する事を思い出し、目の前の
少年がそれに該当すると考えた。

『僕はただ、ナターシャと一緒にあの無限に広がる大空を飛びたかつ
ただけ…。こんな誰かを傷つけるような真似はしたくないんだ!!
ナターシャをこんな事に巻き込みたくなかった!! だけど操られた
僕にはどうすることも…。』

イチカは福音の嘘、偽りの無い気持ち、そして自分の大切な人を護
る為に戦っていたのだと理解する。

『俺がお前とお前の搭乗者を助けてやる』

『本当?』

『ああ。だが、その前に一つだ聞きたいことがある』

『僕に話せることなら聞いて』

『お前を操り、望まない戦いを強要させたのは誰だ』

イチカは今回の犯人と疑わしき人物が二人浮上していた。

一人はISの生みの親であり、世界を変えた元凶とも呼べる存在。

もう一人は自分と一緒にこの世界に來たであろう、歪みの元凶だ。

『分からない。ただ、東博士がやっていないという事は確かだけど…

あんまり力になれなくてごめんね』

『いや、十分だ』

『ナターシヤをお願い。不死鳥のお兄さん』

福音の言葉と同時にイチカの意識は現実世界に戻ってきた。

イチカは何も言わず、福音から少し距離を取る。

「空域にいる友軍に告げる。福音、並びに正体不明機から直ちに離れろ」

「イチカ。一体何をするつもり?」

「この戦いを終わらせる」

そう言うイチカは両肩のバインダーとGNソードⅡ二基を機体前方に向ける。

「福音。お前との約束を今、果たす」

徐々に機体が赤く染まっていく。

「トランザム…ライザアア!!」

ダブルオーライザーから放たれた一筋の光はジム目掛けて一直線に進み、横薙ぎにしながらか周囲にいたジムを巻き込み、福音は待っていたと言わんばかりにその攻撃を受ける。

光が消えると其処から一人の金髪の女性が落ちてくるが近くにいた簪によってキャッチされ、安否を確認する。

「大丈夫。気絶してるだけ」

「そうか…よかった」

イチカが安心してしていると

『粒子残量：： 後、僅か。5秒後に機体制御を失います』

アプロディアの言葉にイチカは何かを言う暇もなく、ダブルオーライザーはそのまま垂直に落下していくが海と接触する500m程前で謎の浮遊感が起こる。

「やはり、粒子消費量が桁違いに多いアレを使ったせいで機体制御を失ったか」

「マドカ：：」

イチカの落下を防いだのはマドカであり、マドカはイチカを引き上げると自分の肩にイチカの腕を乗せる。

福音と正体不明機を倒したイチカ達は帰還するのだった。

福音を倒した後、旅館まで戻ってきたのだが彼らは今、イチカとマドカ以外が整列させられていた。その理由としては無断出撃をしたからである。

「さて、作戦終了と言いたいところだが、ギルオード以外は無断出撃をした。よって夏休みの最初の二週間の間罰として特別トレーニングを課す。いいな」

命令違反を起こしたのだから当然の結果と言えるだろう。

本来ならここで終わりだが、問題が一つだけ残っている。

「ギルオードと同じ粒子を放つ貴様は何者だ。そろそろ、素顔を見せてたれようだ」

「顔も分からぬ者に敵ではないと言っても信用はしないだろうしな」

マドカはそう言うケルデイルを解除するとその場に居た全員の開いた口が塞がらなかつた。何故なら、マドカの顔は目の前にいる、千冬と瓜二つなのだから。

「私の名はマドカ・ギルオード。そこにいる、イチカ・ギルオードの妹

だ」

「イチカの妹だと…！」

「つて事は織斑先生の…」

「待て！私は一夏に妹がいたなどと言う事実は知らないぞ!!」

少なからず、イチカの正体を知っている為、マドカの発言により、少なからず動揺していた。

「待て、それはどういう事だ」

「マドカには色々複雑な事情がある。そして、マドカの言った事は嘘じゃない」

イチカはマドカを庇うように前に出る。事実、マドカは千冬のクローンであり、年齢的に言えばイチカの妹と言っても可笑しくは無く、少し出生が特別な血を分けた妹だけである。

「怪我人もいるので一日はゆっくり疲れを癒してくださいね。織斑先生もそれでいいですよね?」

「ああ、構わん。本日はこれにて解散する」

イチカ達は解散した後、マドカはイチカの部屋にいた。

何故、イチカの部屋に居るのかというとマドカの部屋を用意することが出来ず、身内であるイチカと一緒になら問題は無いと判断したからである。

「久し振りだな。マドカ」

「そうだね、兄さん。約半年ぶりになるね」

イチカはこの世界に戻ってまだ三か月しか経っていないが向うの世界では半年が過ぎていた。国と国の間に少なからず時間差があるように世界と世界にも時間差が起きているのだ。

「マドカ。俺が居ない間に向うの世界に何があったのか説明して欲しい」

「兄さんとコード・アメリカスが居なくなつて旧ジェネレーションシステムは活動を一時的に停止し、マークさん達は目の前で仲間を失つた事に対し後悔と悲しみ、何も出来なかつた自分に対しての怒りを私

は感じた。そして、皆は僅かな望みを掛け、兄さんの捜索を開始。その中にはコード・フェニックスもいた。一つのグループで探すのは効率が悪いため、少数の編成のグループを編成、メンバーはマークさん、ラナロウ、エリスの一班と私、コード・フェニックスの二班、エルフリーデ、エターナの三班の三つで私とコード・フェニックスが宙域を捜索していたらあの時の様に空間の歪みに飲み込まれた。この世界に来たのは二週間ほど前になるな」

「成程、大体理解したが何故、コード・フェニックスと一緒に行動しなかった？」

「この世界ならもし、戦闘が起きても一人で対処できるからな。戦力的に効率的に二手に分かれて捜索することが最適だと判断したから」
マドカの話聞き、新たな情報が手に入ったのは嬉しいがそれと同時にマーク達に心配を掛けたことに対しての罪悪感が生まれる。

「そうか……。別行動をしているコード・フェニックスが何か有益な情報を手に入れてくることを願おう。この世界に何か手がかりがあるはずだ」

イチカはこの世界に帰るための手段があると考えている。自分達を異世界に連れてきた歪みがこう何度も起きるとは考えにくい、何かしらの要因があるとイチカは考えている。

イチカ自身が調べに行きたいが今はIS学園の生徒であり、世界初の男性操縦者という事もあるため迂闊に動けない、故に今、自由に動けるコード・フェニックスに頼るしかないのだ。

「俺はもう、寝るよ。 さつきから疲労がひどいからな」

「仕方ないよ。 兄さんは連戦続きで疲れてるんだよ」

「そうかもな」

イチカは布団をかぶり寝ようとする。

「では、私も兄さんと一緒に熱い夜を過ごすでしょう」

そう言うとマドカはイチカ目掛けてルパンダイブをする。

「この阿呆がああ!!」

この後、一人の女性の叫び声が聞こえたとか

島のはずれで束がモニターを見ながら座っているそして

「うーん、紅椿の稼働率が予想よりも上がらないなあ…。まあこれからゆっくりと時間をかけて育てていけばいいか♪それよりも問題は…」

束はそう言うときまた別のモニターを表示する。そこにはイチカとBDとイフリート改の戦いが映っていた。

「やつぱり、現れたか。でもこの前見た時とは違う機体だねー」

束がそう一人で言っていると後ろから千冬がやってくる。

「やあ、ちーちゃん。奇遇だね」

「そうだな。それよりも今回の事件だがお前はと思う?」

「ちーちゃんはと思うの?」

「ある一人の科学者がお手製のISの性能を世界に知らしめるために行った。かつての白騎士事件のようにな」

「うーん。半分正解で半分不正解かな。確かに世界に紅椿の性能を知らしめることはできたけど別にそれは違う方法でも出来るよね。

例えば無人機で攻撃するとかね」

「では、あの時現れた無人機は全てお前のお手製という訳か」

そう、クラス対抗戦の時に現れた無人機は束の差し金だと考えている。

「確かに最初に現れた無人機は束さんのだよ。でも後、から現れた無人機は知らないよ」

「アレはお前がやったのではないのか?」

「残念ながら束さんは最初の一回しかやってません。それに今回の事件は束さんは無関係だよ」

「なんだと」

千冬は前回の件といい今回も束が犯人だと考えていたのだがその考えは本人によって打ち砕かれた。

「大体、なんで箒ちゃんをあそこまで痛めつけなちゃいけないのさー。いくら束さんでもあそこまではしないよ」

「じゃ、誰がやったというのだ」

「束さんの勘だとちーちゃんでも無理かな。今回の黒幕に対処できるのは今の所、いつくん位だね」

そう言うのと束は表示されていたモニターに別の映像を映す。

逆L字に折り畳まれた大型リフレクターが特徴の機体とよくテレビとかに出てくる魔法少女の様な白い服装をした束が手に持っている杖から極大のピンク色のビームを片手で撃っている光景が流れている。

「前にね束さんを襲ってきた連中がいてね。まあ、この天災の束さんがギツタギタンにしたんだけど。その連中が使っていたIS?を分解したら、束さんの知らない技術やISコアが無いとかいつくんのちよつとした過去と分かったんだよね」

そして束は一つの音声ファイルを見せる。

「分解していたら一つのデータがあつてね。それを見ようにも破損がひどくてね、音声しか復元できなかったんだ。この中に私達の知らない間にいつくんに何があつたのか分かるよ」

そして、束は音声ファイルを再生する。

『始めようじえねえか。ガンダム同士によるとんでもねえ戦争ってヤツをよお!』

『なんでそうまでして戦争がしたいんだよ!!』

『俺はタダ、戦争が好きで好きでたまらない、人間のプレミティズムな衝動に準じて生きてるだけなんだよ!!』

『なんだと...』

『それにお前だつて戦争をするための兵器を振り回してるのにいい子ちゃんぶってんじゃねえぞ。ええ、ガンダムさんよお!!』

『ふざけるなア!何が楽しくて戦争なんてしようとするんだよ!そんな事をすればまた、関係の無い人が沢山死ぬんだぞ!』

『それが戦争の醍醐味だろ!それに俺は戦争屋だ。戦争屋が戦争しないで何をするんだよ!行けよ!ファンク!!』

『お前のような奴は屑だ!無暗に人の命を奪おうとするお前は生きてちやいけないんだ!!』

音声はここで終わるが千冬はイチカの過去の一端を知る事が出来たが口から言葉が出ない。

「いっくんは誰かを護る為に戦っていたんだと思うよ。以前の私なら、なんでこんなことするのか理解できなかったけど今なら少しだけわかる気がする。今まで、ちーちゃんや箒ちゃん、いっくんから当たり前の様に感じてたモノがいっくんが居なくなっって心に小さな穴が開いた感じになってね。失って初めて人の温かさってモノ理解したよ。そして、少しづつでいいから人とちゃんと向き合おうと思うようになったんだ」

「束…」

二人がそう話していると突然束が

「ねえ、ちーちゃん」

「どうした」

「この世界は楽しい?」

「そこそこにな」

千冬がそう言うのと突然突風が吹き、気が付くと束はいなくなっていた。

そして、臨海学校が終わり、教室に一人の人物がいた。

「私の名はマドカ・ギルオード。イチカ・ギルオードの妹だ」

「という訳でこのクラスに新しクラスメイトが増えました」

この後、一混乱起きたの言うまでもない。

18話

福音を倒し、イチカ達に日常が戻っていた。
授業を終え、イチカとマドカは自室に戻る。

何故、マドカも一緒の部屋に向かっているのかというと山田先生の計らいにより、「知らない人より、知っている家族と一緒に方がいい」と言い同室になったのだ。

「今日の授業も退屈だったな」

「いや、ちゃんと授業を受けた方がいいと思うが」

「あんなの、MSやMAの種類にその対抗策、世界によって異なる技術を覚えるより楽なんだよ。兄さん」

「分からなくもないがキチンと受けた方がいいぞ。マドカ」

通路を歩いていた二人はその場に止まる。

「そろそろ、出てきたらどうですか。更識楯無さん」

「以前よりは上手く消したつもりなんだけどな」

そう言うとう通路の影から一人の女性が出てくる。

水色の髪をし、簪のとは違い癖毛は外側を向いている。

そしてその手に広げられた扇子には『天晴』と書いてある。

「知らない人もいるみたいだし、もう一度自己紹介しておくわ。私は更識楯無。このIS学園の生徒会長よ」

「楯無… 対暗部用暗部、更識家の当主か」

「一体何の用です？ 機体の詳細スペックは教えませんよ」

「確かに貴方達の機体のスペックも気になるけど、今日はお礼に来たのよ」

そしてまた扇子を広げる。

そこには『感謝』と書いてある。

「俺は貴女に何かした記憶はありませんよ」

「ううん、私の事じゃなくて簪ちゃんのことよ」

「簪のこと？」

「そう、貴方のお陰で友達も増えたみたいだし、それにこの前、簪ちゃんから仲直りしよって言ってきたのよ。簪ちゃんは貴方と出会って

いい方向に変わり始めてるわ。その切欠を作ってくれた貴方に感謝してるわ」

「俺はほんの少し、アドバイスしただけで変わったのは簪自身の力だ」
「なら、そう言う事にしておくれ。お姉さんこの後、用事があるから。それじゃあね〜」

そう言うのと楯無は颯爽とその場から立ち去るのだった。

自室に戻ったイチカはアプロディアの許可を貰い、ジェネレーションシステムに記録されている機体のデータを見ていた。

「兄さん。そんなに一生懸命機体データを見てどうしたんだ？」

「今後、来るであろう敵に対しての対抗策を考えたいんだ」

「へえー」

「今、考えるべき策としてIS学園の防衛力の増強が一番だろう。IS学園は他からしてみれば高い方だがここは実戦経験が少ないのとISの数は多い方だが武器が弱く、量産型ならある程度は行けるがそこから先はきついだろう。後、絶対防御は完全とっている辺りが難点だな。テストメントの様な量子コンピュータウイルスに浸食された場合発動するか怪しい。何かの要因で発動できなくなるかもしれない。世界に絶対なんてありえない」

更にISは人が乗らなければ起動できないが無人機は人が乗らずとも起動できる。

人は一度、命を失うと二度と動くことはできないが無人機は例えいくらか破損しようとその部分を修復することで早い段階で復帰を果たすことが出来る。

人は睡眠、食事など生きていく上で必要不可欠な行為と集中力や気力などは自身に影響を与えるのに対し、無人機はそう言った行動や影響を受けない為、戦力が落ちる事は無い。

「確かに無人機には人には無い利点がある。決められた事しかできず、信念も覚悟もない、力は只の暴力でしかない」

「そうだな」

「だけど今は猫の手も借りたい状況だ。不本意だが数機だけ無人機を製作、俺達の新たな武装の開発、場合によってはここにあるISを改造するかもしれない」

「最初の二つは分かったが最後の改造は具体的にどうするつもりなんだ？」

マドカがそう言うといチカは端末に複数の機体を映し出す。

「まず、IS学園の防衛としてビルゴを製作。箒達の訓練としてヴァイエイトとメリクリウスを使用。IS学園の戦力強化としてハイペリオンを採用する予定だがモノがモノだけに資材が無いのとハイペリオンに関しては学園の許可が下りるかどうかだ」

「資材に関しては当てがある」

「それは本当か」

「ああ、私がこの世界に戻ってから何度か襲撃を受けている。恐らく、コードフェニックスも同じはずだ。なら、そこを利用すればいいだけだ」

「成程。そういう事か」

材料が足りないのなら、余所から貰えばいいというけど。

「なら、コード・フェニックスにその意図を伝えてくれ」

「ああ、分かった」

場所は変わって中東諸国上空に一機の機体が一つの大剣を肩で担いでいた。

「たつく、どんだけ湧いて出てくるんだよ。少しは休ませて欲しいもんだぜ」

イチカが乗るフェニックスガンダムに近い容姿を持つ機体であり、同じ不死鳥の名を関する機体の名はマスターフェニックス。

愚痴を漏らすマスターフェニックスのパイロット——コード・フェニックスに一つの通信が入る。

『コード・フェニックス、聞こえるか』

「コチラ、コード・フェニックス。一体どうした？ イチカと合流できたのか？」

『兄さんと合流することはできたが数日前に襲撃を受けてな、今後、来るであろう襲撃に向け、兄さんと一緒に武装の強化と今、居るIS学園の戦力強化をしようと思っただけ』

「なるほど。俺はお前たちと合流すればいいのか？」

『いや、コード・フェニックスは単独行動を続けて欲しい。今、自由に動ける奴を失いたくないのでな。今後、襲撃を受けたのなら完全に破壊しないで欲しい。こちら側で再利用したい』

マドカの話聞き、コード・フェニックスは自分の下に転がっているモノを一度見る。

「話は分かった。ここ最近、よく襲撃を受けていたのと見えそうなモノは売却して行動資金にしていたから余りモノも少し、あるぜ」

『頼んだぞ。一度、こちらに持っているモノを教えてください。その後はこちらが欲しいモノを伝える』

「了解だ」

『それと兄さんから伝言だ。「あんまり無理をするなよ。お前は俺達の大切な仲間なんだから」との事だ。兄さんの言った事に関しては私も同意見だ』

マドカから伝えられた「仲間」という言葉と自分の事を心配してくれる二人にコード・フェニックスは嬉しかった。

「分かった。……それとお客さんが来たようだから一度、切るぞ」
『了解。健闘を祈る』

マドカとの通信を切るとコード・フェニックスの所に向かってくる機体を捉えると肩に担いでいたクロスバインダーソードを構える。

「来るなら着やがれ。いくらでも相手してやるぜ！」

夏休みまで後、数日まで迫り、生徒たちが意気揚々と夏休みの計画を話している中職員室の扉が開くと其処からイチカが出て来た。

イチカはIS学園の防衛用に数機のISの改良案を申し出たが対して内容を見ずに却下された。

「どうだった。兄さん」

「案の定、駄目だったよ」

「理由は？」

「前回の無人機襲撃以降、ISの武装やパッケージなどを増やし、アリーナ等の強度も上げたと言い、碌に話も書類に目を通さずにアイツらは子供の戯言としか捉えてない」

「そう言うといチカは手を強く握る。」

「アイツらは分かかってないんだ。今度、来る敵は襲撃してきた無人機や福音よりも強敵だという事にアイツの出す被害は前回の比なんてものじゃない。下手したら死人が出るかもしれないんだぞ」

「でも、悪い話だけではないんですよ。兄さん」

「ああ、夏休みの最初の一週間整備室を貸切にしてもらった」

「その一週間で何をするつもりだ兄さん。新たに機体を作るにもコード・フェニックスがここに来るのは夏休み中盤だぞ」

「マドカの言う通り、コード・フェニックスが資材を送る日にちとイチカが言う整備室の貸切に出来る日にちが合わないのだ。」

「さつき、言った一週間は俺達の武装の開発の為に使う。武器の資材は余りで何とかなる」

「だとして、コード・フェニックスが来るまで時間が空いているがどうするつもりなんだ？」

「確かに最初の一週間は武装の製作に使い、コード・フェニックスが来るまで数日程、時間があるから山籠もりをして鍛えるつもりだ」

「それってもしかして……」

「ああ、ドモンに鍛えてもらった時に最低限の衣服だけ持って野獣が住む森の中でサバイバル生活したアレだ」

イチカはドモンに弟子入りという形で鍛えてもらっていたが只では教えてくれず、二週間野獣が住む森の中で生き延びるというモノでしかも渡されたのは衣服やタオルなどの最低限のモノだけで武器は己の拳という状態で放り込まれたのだ。

最初の一週間は常に空腹で食べれる山菜などは必要最低限しか知らない為、毒草なのかそうじゃないのか分からなかった。

そんな中、弱っていたイチカに一匹の猪が突進してきた。

精神的にも肉体的に限界が来ていたイチカだがここである事を思い出す。

ドモンが言っていた「科学以外にも目に見えない力がある。目や耳だけに頼らず、自然や地球の息吹を感じるんだ」と言っていた事を思い出した。

その力の名は『氣』と言い、全ての生物や自然が持つ力だ。

生死の境目でイチカは『氣』を理解し、手に持っていたタオルに気を纏わせ横に振り払い猪を倒すことに成功し、一週間が過ぎ、ドモンが迎えに来た時に『氣』を理解することに成功したことを教えると本格的な指導が始まり、その中で幾つかの業を生み出した。

「兄さん……。それは止めておいた方がいいと思う」

「こういうのは定期的にやる方がいいんだよ」

「いや、煮詰めすぎて大切な時に問題が起きても困るし、それに身体を休めるのも修行の内ってよく言うでしょ。オーバーワークして体を壊す分けにはいかないだよ。兄さん」

「分かったよ。今回は少し休ませてもらうよ」

そして、夏休みが始まり、イチカとマドカは整備室に七日間籠り、予

定通り終わらせた。

生徒達が国や実家に帰ったり、旅行等に行っている最中イチカはダブルオーライザーとケルデイムの新しい武装を作り終え、完成したモノ見ていた。

ケルデイムに追加されたのは二つ。

一つはGNピストルを二挺追加し、もう一つはGNライフルビットである。

GNライフルビットはGNシールドビットより、大型の誘導兵器であり、肩に2基、太陽炉に4基の計6基を装備し、一基でスナイパーライフルと同等の威力と射的距離を持ち、右肩の2基は固定砲塔としても機能する。シールドビットと同様に、盾としても使用できる優れモノである。

そして、ダブルオーライザーの最大の問題である『ライザーシステム』はトランザム状態で発動させるため貯蔵粒子を完全に使い果たしてしまうことや、発動中は一切の回避・防御行動が行えないという欠点があり、その解消策を考えた結果、GNソードⅢを開発することでこの問題を解決することにした。

「GNソードⅢも完成したし、今作れるものは出来たかな」

「そうだな。にしても懐かしいな。この機ダブルオーライザー体GNソードⅢにこの武装とかヴェーダ奪還の時を思い出す」

「確かに私が乗っている。ケルデイムもGNHW/Rだったな。あの時、兄さんはフェニックスに乗っていたんだよな」

「ああ、ネエル・アーガマに大量のガガの特攻から守っていた。数えきれないほど倒し、戦意が下がり始めた時、俺はあの光を見た」

「刹那・F・セイエイが乗るダブルオーライザーが放った七色の輝きを放つ膨大なGN粒子『トランザムバースト』によって兄さんは革新を遂げた」

マドカの話聞いていたイチカの黒い瞳は金色に変わり、それはイノベーターやイノベイドが持つ瞳であり、イチカがイノベーターである証拠だ。

「やることも終わった事だし、買い物に行きたいな。私の生活に必要な

な物は最低限しかないからな」

「そうだな。どこで買い物するんだ」

「レゾナンスという所でするつもりだ。クラスの本音が買い物するならそこがいいと言っていた」

「あそこなら、色んなものがあるからな。じゃ、さっさと買いに行きま
すか」

マドカとレゾナンスで買い物がある程度済ませると近くのレスト
ランで昼食を取ろうとした。

「見知った顔がいるなど思ったらお前たちか」

「い、イチカ!? なんでここに!!」

「マドカの買い物に付き合っていたんだよ」

ほらっと持っていた買い物袋を見せるイチカ。

「所で、嫁よ。私達が特別トレーニングを受けている間何をしていた
のだ?」

「ああ、ダブルオーの問題点の解決とマドカのケルデイムの武装、製作
&追加だな」

「え? もしかて一週間ずっとそれを作ってたの?」

「そうだ。中々、良い一週間だったぞ。兄さんとずっと一緒に居れた
んだからな」

イチカの腕に抱き付きドヤ顔をするマドカ。

「ぐぬぬぬぬぬぬ」

「マドカ、腕に抱き付くな。所でシャルロットはさつきから何をチ
ラチラ見ているんだ?」

シャルの視線は隣の席に座っている女性を向いていた。

何かに困っているらしく折角頼んだペロンチーノもすっかり冷
めていた。

「ねえ… みんな…」

「『おせっかいは程々にね』」

「みんな… 僕の事理解してくれてるんだね…」

「まあ、兄さんも人の事は言えないけどな」

「どういう意味だよそれ」

イチカはマドカを横目で睨むがマドカは何事も無かったように目の前の料理を食べる。

「取り敢えず話だけでも聞いてみようかなって…」

「自分の思うように行動すればいい」

「うん！」

そう言っ隣のテーブルに向かって走っていくシャルロット。

食事を終えたイチカ達はシャルロットの後を追う。

「はあ… どうすればいいのよ… まったく…」

「あの… どうかされましたか？」

「え？——！？」

イチカ達を見た女性は勢いよく立ち上がるとシャルロットの手を握る。

「あなた達!!」

「はい？」

「バイトしない？」

「『え？』」

「まあそんなこんなで突然4人も辞めちゃったのよ。実際二組のカツプルが駆け落ちした訳なんだけどね… あはは…」

「はあ」

「へー」

「ほお」

「か、駆け落ち… / / /」

「でもね、今日は超重要な日なのよ!! 本社から視察が来るのよ!! お願い!! あなた達にバイトして欲しいの!!」

要するに人手が足りないので手伝って欲しいとのことだ。

「構いませんが… 僕はなんで執事服なんでしようか？」

「だってほら!!そこいらの男なんかよりずっときれいでカッコいいもの!!」

「なんで俺は付け髪をしなちゃいけないんだ」

「素のままでもいいけど、その方がカッコいいもの!!私専属の執事にしたいくらいよ!!」

やや興奮気味女性、イチカは後ろ髪で長髪を束ねているがこれは付け髪で本来は肩に掛かる程度なのだが、その姿は似合っていた。

「そ、そう言えばこのお店の名前ってなんて言うんですか？」

雰囲気を変えるためにシャルロットが店長に向かって質問する。

すると店長はスカートの裾をつまみあげかわいらしいお辞儀をする。

「お客様、@クルーズにようこそ」

「お待ちせしました。アップルパイと紅茶でございます」

「あ、ありがとうございます!!」

イチカは過去にネエル・アーガマで執事を（強制的に）やったことがあるのだ。

「ミルクとお砂糖がございますが、いかがなさいますか。お嬢様」

「ミルクと砂糖、貴方の愛も全部お願いします!!」

「かしこまりました」

イチカ自身、この仕事を苦と思つてないが偶に訳の分からない事を言う客がいるのが少々嫌な所である。

「では、優雅な時間をじっくりお過ごしくださいませ。お嬢様」

イチカはテーブルを後にする。

「流石は兄さん。昔、罰ゲームで執事をやらされて、しごかれた経験が

生きたようだな」

「まあ、一週間、機械の相手しかしていなかったから、こつちも息抜きになるんだがな。それとその話するな。あんまり思い出したくないんだ」

バン！

「全員動くんじゃねえ!!」

突然、勢いよく店のドアが開き目だし帽をかぶった3人組が店内になだれ込んでくる。

その直後店内に銃声が響き渡る。

「きゃああ!!」

銃声に驚き客の一人が悲鳴を上げる。

「う、うるせえ!!静かにしてろ!!」

「はあ、不幸だ...」

「ど、どうするの?イチカ」

「メンドイ。俺が片づける」

イチカはそう言うと言と強盗犯三人組に近づこうとする。

「ちよ、イチカ!!今は相手の観察と機会を窺って...」

「俺がこの程度でやられるかよ」

「まあ、兄さん一人で如何とでもなるな」

「じゃ、行ってくる」

イチカはそう言うと言と強盗3人組と向きあう。

「なんだ、この餓鬼。まさか、俺達に生身で挑もうと思ってるじゃないんだろうな」

「ふん。銃が無ければ何も出来ないような小さい奴が何を言おうと聞く耳持たんな」

「舐めてんじやねえぞクソガキ!!今すぐ蜂の巣にしてやるよ!!」

強盗3人組のうちサブマシンガンをもった男がこちらに発砲する。

イチカは回避せずに留まる。

客の一人が悲鳴を上げるがここである疑問が浮かぶ。

弾がイチカの身体を貫いた場合、鮮血が飛び散るはずなのだが一切飛び散らず、執事服も血に染まっていなかった。

イチカはいつの間にか突き出し、握られていた腕から何かが落ちる。

それは先程、強盗犯が撃ったサブマシンガンの弾だ。

イチカは目にも止まらぬ、スピードで放たれた弾を掴み取ったのだ。

「ば、化け物……」

「その発言は俺でも少々傷つくな」

「兄さん。これを」

マドカはイチカに向けて一つの布を投げる。

「そんなもんで一体何が出来るっていうんだよ!!」

「甘く見るなよ」

イチカは布を横薙ぎにすると強盗犯の左腹部直撃し、数メートル飛び、壁に強く頭を打ち付けたのち、糸が切れた人形のように力なくなだれる。

「お前！一体何を」

「布槍術の一種さ。ただ、使っているのが布だから！」

イチカはハンドガンを持っていた男に布を絡めるとそのまま自分のいる所に引きつけると鳩尾に一撃入れる。

「ガハッ！」

「相手の行動を封じること可能なんだよ」

イチカは倒れた男に目もくれずにリーダー格と思わしき男に接近する。

「少し……頭冷やして来い!!」

そう言うイチカはリーダー格の男の顔を殴る。

吹き飛び尻を突き出した状態で気絶するがマドカはそんな事気にせず、接近する。

「すぐ、目を覚まして『サツに捕まるのは嫌だから道ずれにして死んでやる』とか言ってきたさうだからな」

「そんな古い方法なんて……ありそうだな」

「それが起きないように麻酔針でも刺しておこうかなと思ってな」

「ん、別にいいんじゃないかな」

イチカの了承？を得るとマドカはメイド服に隠していた麻酔針を額に刺す。

「これで一時間は目覚めないはずだ」

「終わったのか…？」

「た、助かったの？」

客達は状況をイマイチ飲み込めていないのか少々怯えながら動き出す。

「すげえ!!俺達助かったんだな!!」

「ありがとう。黒髪の執事さんと黒髪のメイドさん」

「人に感謝されるのはいいものだね。兄さん」

「そうだな」

事態の終息を確認した店長はすぐに警察に連絡を入れる。

「ねえ… イチカって生身でもあんなに強いのか？」

「ああ、兄さんを鍛えた相手が相手だけにバカげてる強さを手に入れたな」

「私も嫁の師匠に鍛えてもらえば強くなれるのか」

「ラウラは今のままでいい。お願い」

「？シャルロットが言うのなら」

「外が騒がしくなってきたから俺達はここから出ていくから。行くぞ、マドカ」

イチカはシャルロット達の声を聞かずに裏口から出ていき、マドカは無言で後を追うのだった。

そして、数日後、コード・フェニックスが訪れ、頼んでいた資材が届けられた。

その後、MSの知識があるコード・フェニックスに手伝ってもらった。

夏休みも終わり、二学期が始まっていた。

生徒達は各自、夏休みの思い出を語っている。

では、イチカの夏休みがどんなものだったのかというところ、ヴァイエイト、メリクリウスの製作と新たな武装の製作だ。

武装と時間の関係上、3機のビルゴに関しては作り終えたが、ヴァイエイトとメリクリウスに関しては9割程終わっている。

ビルゴの制御はアプロディアに任せることになっている。

今、学園祭の準備についての全校集会が行われた。

「それでは、生徒会長から説明させていただきます」

生徒会役員が会長を呼ぶ。すると楯無が席を立ち、壇上に登った。「どうも、はじめまして。いろいろなことがあつて挨拶が遅れてしまいました。この中の何人かは名前を知っていると思うけど、私の名前は更識楯無。君たちの生徒の長よ。それでは今月の一大イベントである学園祭のことについて説明するわね。例年、出し物に関しては各部活動ごとの催しごとを出して、それに対して投票を行い、上位組には部費に特別助成金が出る仕組みでした。ですがそれでは面白くないので、今年は――」

この時、イチカの脳裏に電流が走る。

「二位の所にギルオードを入部させます」

キラツという効果音が聞こえそうなポーズをする楯無。

「な、なんだってー!!」

そうして学園全体での男性操縦者を賞品とする争奪戦がここに勃発した。

「イチカ・ギルオードのホストクラブ！」

「イチカ・ギルオードとツイスター！」

「イチカ・ギルオードとポツキーゲーム！」

上がってくる意見は全てイチカ関連の事柄であるため、なかなか話が進まない。無論、やられている本人からすると溜まったものではない。当然の如く、当の本人は反発した。

「却下だ」

イチカの反発にブーイングが上がる。

「ええええええ!?」

「俺を犠牲にしてまで楽しみたいのか!!」

「百を救うために」イチカを切りすてる。当然の事じゃない」

「訳が分からないよ…」

イチカはマドカに助けを求めると。

「ま、マドカは反対だよな」

「私は兄さんとホストクラブに両者お触りOKでいいと思う」

「なんか追加してるううう!?」

最近、手遅れというより、前から手遅れだったマドカに頭を抱える。

「そんな、破廉恥な行為はいけませ！」

「山田先生…」

何時もは頼りない山田先生だがこの時は頼もしく思えた。

「なので、ツイスターがいいと思います」

時期がイチカにもあった。

「メイド喫茶はどうだ」

ラウラの一言にクラス的全員が固まる。いつもと同じ口調であったものの、普段とのギャップに全員が驚く。

「客受けはいいだろう?それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるはずだから、休憩場としても需要も見込めるはずだ」

「み、みんなはどう思う?」

「成程。なら、イチカにはフロア担当してもらおう」

シャルロットも賛成の意見を出す。どうやらほぼメイド喫茶で確定したようだ。

「だが、メイド服はどうするつもりだ」

「メイド服ならツテがある。イチカの執事服も用意できるだろう」

「クラス全員のメイド服なんか用意できるのか？」

「我が部隊に任せれば問題ないだろう。少々、高い買い物になるがな」

こうして『メイド喫茶』改め『ご奉仕喫茶』が開かれることになった。

因みにラウラの言う高い買い物とは部隊内で絶大な人気を誇るイチカの秘蔵の写真の焼増しとイチカの私物である。

そして、イチカはクラスの出し物が決まった事を千冬に教え、職員室を出る。

「やあ」

「なんの様ですか。更識楯無さん」

「ちよつと、お話したいから・・・ちよつと生徒会室までいいかな？」

「構いません」

イチカはそのまま導かれるように生徒会室に入っていった。

イチカと楯無とイチカは生徒会室に入る。

「ただいま」

「お帰りなさい、会長」

「わー…………イギーだあ…………」

「ほら、しっかりしなさい。お客様の前よ」

「お邪魔します」

イチカが最初に見たのは生徒会室の机でうつぶしている本音とそれによく似た姉(?)の姿であった。

「のほほんさん。睡眠不足かい？」

「最近、忙しくて…」

「あら、あだ名で呼び合うなんて相当仲がいいのね？」

お茶の準備を3年生に任せて、2年生でありながら会長の座に収まっている楯無。

「どうですかね。クラスメイトとしては良好と言っておきましょう」

ティーカップを持ってきた3年生(?)が口を挟む。

「本音の為にハ口を作ってくれて、感謝します」

「別に資材さえあればいくらでも作れるので。それにああいう作業は慣れているから」

「イギーの作ったハ口は生徒会室でも人気なんだよ。ねえ、お姉ちゃん」

「お姉ちゃん？」

「ええ。私の名前は布仏虚。本音は妹です」

そんな話をしていると黄色のハ口が本音の腕に飛び込んでくるのが見えた。

「さて、話したいんだけど、大丈夫？」

「ええ」

「ありがとう。じゃあ、まずイチカ君に聞きたいことがあるんだけど？」

「はい、なんででしょうか？」

楯無は虚が渡してきたプリントを確認しながら、イチカに話しかける。

「貴方は一体何者なのかしら」

「それはどういう事ですか？」

イチカは楯無の言っている意味を理解している。

「貴方が入学した時に勝手ながら調べさせてもらったわ。結果だけ言うなら貴方の事は分からなかった。この地球にイチカ・ギルオードという人物が『存在』してないかの様に」

「存在していない…。なら、ここに居る俺はなんなんですか？」

「私達はそれが知りたいのよ。イチカ・ギルオードいえ——」

織斑

「夏君」

「成程、そこまで調べがついてるんですね」

イチカは今までと変わらない態度で話す。

「ええ、織斑家長男として生まれ物心つく前に両親と離れ離れになり、織斑千冬によつて育てられ、第二回モンドグロツソで行方不明になる。簡単に言うところな感じかしら」

「確かに俺は親の顔も知らない。千冬姉に育てられてきた…。貴方が知りたいのは第二回モンドグロツソ以降の経歴が知りたいのでしょうか」

「そうよ。更識家の情報網を使つても分からなかったわ。貴方の使っている力ほどの国もまだ開発されてない…。未知のテクノロジーなのよ。空白の期間でここまでの物は作れない。ましてや貴方の持つ雰囲気は戦場駆け巡ってきたモノと同じなの」

「そうだろうな。俺はいままで多くの戦場に赴いた…。貴方達は俺の空白の期間…。俺の力について知りたがっていたが教えることはできない」

「あら、何故かしら？貴方の持つその技術を使えば世界はより豊かに発展していくんじゃないのかしら？」

「それは物事を軽く見ている証拠だ。歪んだ世界に新たな技術は毒でしかない。物事を見極める事が出来ない、今の社会にそんな事をしたってなんも意味はない。その上っ面しか見ない。現にISがそうだ。ISは本来、宇宙開発の為のモノだった。だが、世間はISの性能しか目もくれず、戦争の道具…。兵器としか捉えてない。現状でそんな事をして同じことを繰り返す」

「でも、アラスカ条約によつて規制されているわ」

「そう、ISは『アラスカ条約』により、軍事転用が可能になったISの取引などを規制しているが、イチカはそんなモノ当てにはしていない。

「ISが兵器として運用されていないとでも思っているんですか。

「じゃ、聞きますが…。何故、『亡国企業』はISを使つて施設の破壊、ISの強奪をしている。そんなもん破ろうと思えば破れる」

「っ!？」

思わぬ言葉に楯無は座っていた席から飛び上がった。

「一体… 何処でその言葉を聞いたのかお姉さんに教えて欲しいな」

「… 俺の身近に元・亡国企業の奴がいてな、色々、教えてくれたよ。俺はそれが誰だかは言わない。そいつは俺の大切な人なんだからな」

「そう…。そのことについては深く言及しないであげる」

「用が無いのなら帰らせてもらいますよ。後、俺の事が知りたいのならば待てとだけ言っておきましょう」

イチカはそう言うのと生徒会室を出ていった。

場所は変わって、とある遺跡にコード・フェニックスがいた。

遺跡を探索していたコード・フェニックスは驚きを隠せずにした。

「おいおい…。これは一体どういうことだ？」

コード・フェニックスは遺跡にある壁画に描かれてるものが異質なものであるからだ。

「なんで… この壁画にSystem-99 ▼ガンダムが描かれてる…」

コード・フェニックスの目の前には建造物らしきモノの上空に赤いツインアイに白い髭の機体が色鮮やかな蝶の様な翼を出しな飛んでいる。

そしてもう一つの絵はそのSystem-99 ▼ガンダムらしき機体について行くかの様に後ろについて行く人々と見送るかの様に佇んでいる人々。

コード・フェニックスは自分の頭をフル回転させ、解を導き出そう

とする。

「あああああ!! 全然、分からねえ...」

科学者でも無い、コード・フェニックスが分かるはずもなく、二つの壁画を記録に残し、探索を終了し、外に出るとマスターフェニックスが接近する熱源反応を捉える。

「敵か...!」

コード・フェニックスはマスターフェニックスを纏うと接近する熱源体の姿を捉えるとそこに映っていたのはボロボロのバーニアに頭部には王冠を思わせるモノがついている。

ここでコード・フェニックスはある事に気づく。

接近する機体から生体反応がある事に気づくと接近していた機体は突然、制御を失い落下し始める。

「おいおい、マジかよ!!」

コード・フェニックスは所属不明機を受け止めると大地に足を付ける。

所属不明機を地面に横にさせると機体が一瞬、眩い光を放つと其処には先程の機体は無く、其処には全身怪我だらけの頭部に迷彩柄のバンドナを付けた青年がおり、コード・フェニックスはその人物に見覚えがあった。

「お前は... ラナロウ・シエイド...。何でここに」

「...こ、コード...。フェニックス...。このままだとイチカが...危険なんだ...。はやく伝えないと...」

「無理をするな。お前は怪我人だから少し、安静にしている」

「そんな... 事している... 暇はないんだ。このままだと... 取... しの... つか... い... ない」

「おい! 大丈夫か!? しっかりしろ!!」

ラナロウは何かを伝えようとしたが伝える前に気絶した。

19話

学園祭当日。生徒たちのボルテージは最高潮に達していた。

「うそ!?一組でギルオード君の接待を受けられるの!？」

「それに開催されているゲームに勝ったら写真を撮ってくれるんだって!!」

「(イチカと仲良くなれる)この時を! この瞬間を待っていたんだー!!」

学園祭という事もあり、いつも以上に活気だがその中で特に活気あふれていたのは1年一組の『ご奉仕喫茶』であった。

イチカ達は朝から大忙しであった。がしかし、実際のところはイチカがメインで動いており、ほかのクラスメイトはそれを楽しそうに眺める構図になっている。

「いらっしやいませ、こちらへどうぞお嬢様♪」

そう言いながらシャルロットも人を中へと案内していく。

接客は彼女以外にもセシリア、箒、ラウラ、イチカ他、クラス生徒複数である。

イチカの格好は燕尾服(付け髪はついてない)であり彼は念のために服の中に布と麻酔針を仕込んでいる。

イチカが接客をし、客を相手にしているのだがその客は妙に頬を赤めており、その光景に不機嫌になる人物が複数いる中、厨房では…。

イチカに料理を教えてもらったマドカは厨房で発注された料理を作り続けているのだが周りの生徒はその光景が怖かった。

何故、ならマドカが濁った眼でイチカを見ながら呪詛の様なモノを呟きながら食材を切っているのだ。

「あ、あのマドカさん」

「何だ」

「ヒイ!？」

キラーン、と手に持っていた包丁が太陽の光に反射し、(鶏肉の)血が着いたが包丁が光る。

そこにいた生徒は厨房に居たはずなのに何故か殺人現場に居合わせた様な気分だった。

「せ、せ、生徒会の出し物に参加するんですか？」

思わず、敬語で話してしまった生徒A。

「勿論だ。何せ、報酬がな……。誰にも渡さない……。ナニをしてでも守ってみせる。ウフフフ」

この時、調理場の生徒の心は一つだった。

『早くここから逃げたい』だった。

自由時間になったイチカはある人物との集合場所に向かっていた。

イチカはこの学園祭に友人である弾を呼んでいたのだがもう、マドカが誘う人がいななどの事で一人呼んでいる。

「おう、イチカ元気か」

「お久しぶりです。イチカさん」

「久し振りだな。弾それに蘭も」

弾とはこの世界に戻った時に再開し、それ以来、よく連絡を取っている。

「なあ、イチカ。さつき校門にいた女の人って知らない？めつちや美人だったんだけど」

「特徴は？」

「眼鏡をかけてたなあ後は……。なんというかすごいしつかりとした雰囲気の人だったぞ」

イチカは誰なのか考えるとつい先日にあった生徒会会計の布仏虚が思い浮かんだ。

「二人心当りあるけど……。どうした一目ぼれでもしたのか？」

「一目ぼれっか……。言われればそうかもなあ……。」

彼らはそんなやり取りをしながら学園の敷地内を歩いていく。途中で蘭が『お兄にも春が来たか』と言っていたがイチカは言っている意味が分からずにいた。

そうしていると彼らはたまたま近くにあった美術部のクラスに入る。ここでの出し物は爆弾解体ゲームだ。とはいえこの爆弾は作り物である。するとそれを見た弾は

「IS学園ってこんなこともやるの？」

「希望者を集めての特別授業だな。ちなみに専用機持ちは強制受講だ」

「へえ、大変なんだなあ」

「そう言う事、おつ、次でラストか」

彼は話している間にも器用に解体を進めていくといよいよ最後の段階までたどり着く。内容はよくある『青を切るか赤を切るか』と言うものだ。専門の道具があればいけるのだが体験の為、そんなモノは無い為自力で解体している。

「どうするかな…。二人ともどつちがいいと思う？気楽に考えていぞ」

「そこで俺に振るのかよ!?青か赤か…」

「い、イチカさんに任せます」

弾は必死に考えているようだがイチカはふとある質問をする。

「なあ、彗星と巨星どつちが好きだ？」

「なんだ、その質問？俺は巨星かな」

「私は彗星ですね。すごく綺麗ですから」

「そうか、なら青だな」

そう言いイチカは青い配線を切るするとブザーが鳴る。どうやら失敗したようだ

結果、彼らは参加賞である飴玉を貰う。

「残念、失敗だ」

「ああ、なんかゴメン…」

「何故、謝る？別に本物と違って人が死ぬわけじゃないんだからさ。そうだ、せっかくだし鈴のクラスにでも行くか」

「ああ、そうだなアイツに会うのも久しぶりだな」

「後、飴玉だけどあげる」

「いえ、ありがとうございます」

そう言うといチカは蘭に飴玉を渡すとイチカの携帯が鳴る。相手はシャルロットであった。

『もしもしイチカ、イチカはどこだってクレームがすごいからすぐに戻って来て』

「分かった。今戻る。悪い弾、急用が出来た。後は二人で回ってくれ。時間が出来たら一緒に回ろうぜ」

「ああ、頑張れよ」

「頑張ってください。イチカさん」

彼女の声にはかなり焦りの色が含まれていた為、イチカはいそいで教室に戻るのだった。

IS学園から離れた上空に二機の機体が待機していた。

「にしても私達に与えられた。任務があの小娘の援護とは」

「不満かい？兄さん」

「そう言う訳ではない。奴らには助けて貰った恩がある。その分の仕事はするさ」

「そうだね。だけど、あいつ等の下に付くつもりは無いんでしょ」

「勿論だとも」

モノアイの蟹の様な巨大な二つのハサミが特徴の機体の上に赤い悪魔を思わせる機体がIS学園を捉えていた。

「前の世界じゃ、アイツらのせいで僕達の野望は叶わなかった」

「だが、どういう因果か私達はこうして生きている。なら、もう一度私達の手で世界を掴もうではないか——オルバよ」

「そうだね。兄さん」

IS学園付近に二人の男女がいた。

「本当にここにアイツがいるのか？」

「ハイ……。ここに彼がいます」

「だけどよ……。さつき入ろうとしたら追い出されちゃったぜ」

「ですが、私達には彼の協力が必要です」

はあ、と溜め息をつく少年。

「ここは俺様の力で入るとしますか。どこか安全な所で待っていてくれ」

「いいえ、私も行きます。ガロードだけに無理はさせません。それに何かあってもガロードが護ってくれる」

「勿論だって、この炎のMS乗りガロード様に任せなっ」

「行きましょう。イチカの元に」

「そうだな。アイツなら今、俺達に起きている事も知っているかもしれないしな」

そういうとガロードと呼ばれた少年は少女の手を取り行動を開始した。

20話

イチカは教室に戻り、接客をしていると楯無が現れる。

「さて、イチカ君、ちよつと手伝ってもらっていいかしら」

「別に構いませんが…変なこと考えてないでしょうね」

イチカの言葉に目を逸らす楯無。

イチカはNT故に相手の感情が分かるのだが、楯無からは表面的には面白そうという感情が占めているがその奥に『何か』に対する『警戒心』を感じた。

「はあ…それで、何を手伝えればいいんですか？」

「生徒会の出し物に出て貰うだけよ」

「出し物…何やるんですか？」

「演劇よ…観客参加型演劇」

イチカは楯無に何をやるのか聞いた後更衣室に行き着替えている。そこにあつた衣装は絵本とかに出てきそうな王様の衣装であつた。

(何かあつた時の為に布を持っていくか)

衣装に布を仕込むと、ちよつどいいタイミングで外から楯無の声を
する。

「イチカ君、着替え終わったー？」

「終わりましたよー」

彼がそう言うとき彼女は室内に入ってくる。すると彼女は王冠をイチカにかぶせる。

「うん、イチカ君似合ってるじゃない。王子様って感じよ」

「そりやどうも、そう言えば俺台本なんて見てないんですけど大丈夫ですか？」

「大丈夫よ、基本はこつちで進めるからイチカ君はそれに従ってくれればいいわ」

そう言うとき彼女は一夏をつれ第4アリーナへと向かう。そこはす

でに特設ステージとなっておりセットなどもかなり本格的に作られている。ちなみに観客席は満員であり、中には一組のクラスメイトもいた。どうやら話を聞きつけ一組に限らずかなりのクラスが出し物を中断しこの演劇を見に来たらしい。

そしてブザーが鳴りいよいよ幕開けとなる。

「むかしむかし、あるところにシンデレラと言う少女が居ました。しかし、そのシンデレラと言うのは本当の名前ではない、舞踏会と言う名の戦場を潜り抜けし最強の戦士たち。彼女たちにふさわしい称号。それがシンデレラ！今宵もまた血に飢えた彼女たちが現れる。王の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い舞踏会と言う名の戦場が幕を開ける!!」

「つて、それ可笑しいだろ。それ!!」

イチカのツッコミと同時にシンデレラとは言い難い演劇が幕を開けた。

『私の記録によればシンデレラとはメルヘンチックな御話だと思うのですが』

『その認識で間違いありませんよ』

アプロディアとそんな会話していると目の前にはドレスを来た鈴音が現れる。

「さて……と。その王冠をいただくわよ。アイツなんかには獲られるくらいなら私が貰うわ、覚悟しなさい!!」

そう言う彼女は飛刀を構えイチカに突撃してくる。

イチカは右、左、時にはしゃがんで避ける。

「なんで、当たらないのよ!!」

「当たれと言つて当たる馬鹿はいないだろが」

チラッと先程から自分を狙撃しようとしているセシリアを見る。

イチカは衣装に仕込んでいた布を構える。

「そんな、布で一体何をしようつて言うのよ。イチカ!!」

「似たような事が前にもあった気がする」

『恐らく、@クルーズの時だと思えます』

アプロディアの言葉を聞きながら布を鈴音を拘束する。

「何よこれ！ 離しなさいよ!!」

「行くぞ!!」

「え?ちよ... キャアアアア!!」

イチカは布を両手で持つとそのまま回転し、その回転速度は徐々に上がっていく。

このまま、放り投げると大怪我しかねないので回転の勢いを弱め、放り投げる。

『イチカ・ギルオード。その王冠を無理に外そうとすると電流が流れる仕組みになっています』

『はあ!?!』

『電流が流れないように解除しておきました』

アプロディアから電流が流れるという事実を聞くとイチカは飛来する物体を掴み取る。

「え?嘘?!?銃弾を生身で掴み取るってどんな神経しているのよ!!」

ナレーシヨン役の楯無もイチカの驚きの行動にナレーシヨンの事をすっかり忘れてしまっていた。

「本当ならイチカの助っ人みたいな感じで登場しようと思ったのにな」

「シャルロットよ。嫁のあの身体能力を前に助っ人など不要だろ」

「... ここは共同戦線で行く。王冠は早い者勝ち」

「だが、一夏の王冠は私が貰い受ける!!」

新たに現れ、シャルロットは拳銃を持ちラウラは二刀流のタクティカル・ナイフを持ち簪は薙刀を箒は日本刀を携えていた。

「そうまでしてこの王冠が欲しいのか。貴様」

「そうだ。価値の分からぬ嫁の代わりに私が有効活用させてもらう」

「ラウラ。残念だけど今回だけは譲れないよ。何せイチカと...」

「王冠は誰にも譲らない...」

「ええい! あの王冠は私のだ!!」

何故か、バトルを始める四人だがイチカは先程から狙撃が無いことに気づきセシリアの『気配』のする方を見てみると

「残念ながら、兄さんの王冠は誰にも渡さん。兄さんの敵だというの

なら私が排除する。兄さんとの愛の巣を奪わせはしない!!」

「…む、無念ですわ」

二挺拳銃のマドカがセシリアを倒しているのが見えた。どうやら、マドカはイチカの味方ようだ。

ステージ全体に地響きが起き、それは次第に大きくなっていく。

「さあ、ただいまからフリーエントリー組の参加です！王子様の王冠目指して頑張って行ってね！」

「オイオイ、マジかよ」

地響きの正体である、ドレスに身を包んだ大量の生徒が押し寄せてきた。

イチカは布を使い一網打尽にしようと考えたが怪我をされても困るし、かと言ってラウラの時の様にプレッシャーで黙らせるわけにもいかずステージを駆け巡っていると誰かがイチカの腕を掴む。

「こちらへ」

「ん？」

イチカは手を引つ張られるままにステージから離れていく。

「着きましたよ」

「ここは…」

着いた場所はイチカが衣装に着替えた場所だった。

「さて、目障りな小娘共も居なくなつたし…さつさとその機体を寄越しな!!」

「お前何者だ…。お前から感じる気配は一般人にしては禍々しい」

イチカが目の中の女性から感じたのは嘗て戦った戦争屋と似たものを感じた。

「中々、面白い」と言うな。冥土の土産に教えてやるよ。亡国企業の一人、オータム様だ!!」

イチカに向けて拳を振るうがイチカはそれを左腕で制止、右腕で制止させた腕を掴むと背負い投げをする。

「へえ、生温い環境でぬくぬく育った餓鬼にしてはやるじゃねえか!!」
オータムと名乗った女性の背中に8つ脚の様なモノが現れると其処から砲撃が放たれる。

「チー！」

イチカは砲撃を躲し、躲しきれないものは気を纏った布を使い防いでいる。

「中々、やるじゃないか!!」

オータムは部分展開ではなく、自らのISの全貌を明かした。

その姿は一言で言えば異様であり、蜘蛛を模した異様な容姿をしている。

「この学園で問題起こされても困るのよね。事務処理が大変なんだから」

声のした方には自らのISを身に纏った楯無がいた。

「てめえ、何者だ!!」

「更識楯無、このIS学園の生徒会長をしているわ。出会って早々何だけど。ここ熱くないかしら？」

楯無の言葉にイチカは気づく、この部屋の湿度が上がっていることに。

「!？」

部屋を漂う霧はオータムに纏わりつくかの様に異様に濃い霧が発生していた。

パチン、と楯無が指を鳴らすとオータムを中心に爆発が起きる。

「…なるほど、水蒸気爆発か」

「あら、よくわかったわね」

「俺の考えが正しいのなら、その左右に浮いているパーツから発生したナノマシンが何かで水を作り、それを霧状にして攻撃対象物へ散布し、発熱させることで水を瞬時に気化させ水蒸気爆発を起こすと言っ

たところでしょうかね」

「… 一目見ただけでここまで分かるなんて… 大した観察力と洞察力ね」

「… ツー」

楯無は驚いた素振りを見せる中、イチカはダブルオーライザーを纏うと楯無の前に出るとオータムがイチカの目の前に現れる。

「チィ。ここまでか」

オータムはISから離れると圧縮空気が抜けるような音が聞こえ、オータムがアラクネから離れると数瞬後、アラクネは大爆発を起す。

煙が晴れると其処にはGNシールドを展開した、イチカがおり、楯無はイチカが展開したGNフィールドによって守られていた。

「ケホ、コホッ。ありがとうイチカ君、助かったわ」

「いや、まだ助かったという訳ではないみたいですよ」

「え？」

楯無はイチカの視線に合わせて其処には更衣室の奥で腕を組んでるオータムがいた。

「今ので仕留められなかったか」

「貴女にはもうISは無いわ。大人しく降伏したら」

「降伏?… フッフ… フハッハハハハ！そんなもんする必要はない。まだコイツがあるからな」

オータムは腕についている赤いブレスレット見せるとオータムの身体は光に包まれ、そこにいたのは…。

「なによ… あのIS…」

「アルケーガンダム… だと…」

オータムが纏ったISは先程の蜘蛛の様なISと違いイチカの乗るガンダムとは程遠いシルエットを持ち、背部からは赤い粒子が放たれていた。

「お前はその機体を何処で手に入れた。いや、誰から貰った!!」

「つい先日、黒い全身装甲のISの女から貰ったのさ!!」

「コード・アメリカスか…!!」

「アイツの事知っているのか？まあ、こつちとしてはどうでもいいけどなッ!!」

オータムはGNバスターソードを振りかぶるとイチカは新しい武装のGNソードⅢで防ぐ。

「お前たちは一体何の為にその力を振るうんだ!!」

「はあ？何言ってるやがるんだ。そんなもん力があるならその力を使わないで如何するってんだよ!!」

「何も思いも覚悟も無しにその力を振るうのか!!」

「そんなもん無いね。壊したいから壊す、殺したいから殺す。ただそれだけだ!!」

「フザケルナアアア!!」

「アハハハ！もつと私を楽しませろよ!!」

GNバスターソードとGNソードⅢが何度も鏝迫り合いを起こす。

「今助けるわ。イチカ君」

「小娘は引っ込んでな。行け！ファング!!」

「クッ！」

オータムはアルケーの両腰のバインダーにあるGNファングを四基出すと楯無を攻撃する。

「オラッ！足元がお留守だぜ!!」

「チィ！」

オータムは姿勢を低くし、両脚爪先に固定装備されているGNビームサーベルで攻撃する。

「楯無さん。少し、ここ破壊させてもらいますよ」

「ちよ、それってどういう——」

楯無が言い終わる前にイチカは両翼バインダー側面に格納されているGNマイクロミサイルを天井に向けて放ち、天井に開いた穴を使えば外へと出るとオータムもイチカを追う。

イチカがオータムと交戦している最中、箒達はIS学園に攻撃している敵に苦戦していた。

「クソ！数が多い！！どれ程の戦力が攻めてきているんだ！！」

「分かんないよ！！いきなり、現れたんだから」

IS学園の至る所から煙が上がり、銃撃の音と金属がぶつかる音が聞こえ、時折、何かが爆発する音が聞こえる。

箒とシャルロットの目の前には数十機のアツガイ、ジュアツグ、ズゴックがいた。

一機を倒そうにも各機がミサイルやビーム等が弾幕の様に襲いかけてくる為、近寄れないでいた。

「なら、これはどうです!!」

セシリアはブルーティアーズを使い攻撃するがアツガイ達の並ならぬ砲撃により、上手く操作できずにいた。

箒達は上空から攻撃しているが接近できずに居ると箒達に二つのビームが横切り、咄嗟にそこから離れるとそこには戦闘機のような姿をし、スラストーと思わしき所に内蔵された二つのビームライフルがあり、それは次第に人の様な形をした姿になった。

「変形だ?!」

「…まるでイチカのZガンダムみたい」

「驚いている暇あったら攻撃しなさいよ!!」

鈴音は地上に降り、龍砲と双天牙月を使い攻撃しているが一向に数が減らない。

「…これで!!」

箒は2門の連射型荷電粒子砲の春雷と山嵐のミサイルで応戦するがミサイルに関しては撃ち落とされている。

各自、残弾数もシールドエネルギーも心許ない状態になってくる。すると、一つのビームがアツガイを沈める。

「なんだ!!」

ラウラが攻撃をしてきた方を見ると其処には蒼く塗装された二つ

のバーニアと中世の騎士を思わせる機体だったが所々、傷がある状態だった。

『此方、ラナロウ・シェイド。お前たちの援護に来た』

「援護だと？ 味方の振りをして何か企んでいるのではないか」

『俺はイチカ・ギルオード並びにマドカ・ギルオードの仲間だ。信用しないならそれで構わないがこの戦いが終わったらイチカ達に会わせて』

もらいたい。重要な話がある。もし、信用できないんなら監視をしていても構わない』

そう言いながらラナロウは次々と敵を落としていく。

「どうするの？」

「…今は共闘して敵を倒すべきだと思う」

「そうだな、一時奴と共闘して敵を殲滅するぞ。奴は監視をしても構わないと言った。もし不審な行動をしたら落とせばいいだけの事だ」

そう言うトラウラ達は攻撃を再開した。

「これは…」

外に出たイチカが見たのはIS学園の至る所から煙が上がり、教員と専用機持ちが向うの世界の機体と戦っている姿だった。

「よそ見するとは余裕だな!!」

「クソツ…」

イチカは今すぐにも増援に向かおうとしたがオータムと再び交戦に入る。

『アプロディア。ビルゴを三機出撃させてくれ。このままだと被害がデカくなるばかりだ』

『現在、ビルゴを出撃させ敵と交戦しています』

『ナイスだ』

イチカはアプロディアがビルゴを出撃させたことにより、被害はある程度は抑えられる事が出来ると考え、目の前の敵に集中する。

「ウオオオオ!!」

「もつとだ！ もつと楽しませろ!!」

「自分の快樂の為に戦いを起こすな!!」

「いいね。いいね。最近の奴は態度ばかりデカくて、戦ってみれば怯えて腰を抜かしてつまらないっつらありやしね。それに比べてお前は怯えもせず、戦いを挑んでくる。いいね、いいね。最高だね!!」

「お前に褒められても嬉しくない!!」

お互いに攻撃しているとオータムの身体に衝撃が襲い、衝撃のした方を向くと其処には。

「お姉さんを見視しないで欲しいわね」

楯無は水を螺旋状に纏ったランスをオータムに向け、ランスに内蔵されている四門のガトリングガンでオータムを攻撃したのだ。

「小娘が邪魔すんじゃね!!」

オータムは視線を低くしたまま、楯無に接近し、懐に潜り込むと爪先からビーム刃を発生させ、攻撃する。

「隙だらけだぞ!」

「この程度!!」

「無駄無駄!」

「キヤアアアア!!」

楯無は水のヴェールで防ぎ、ランスで攻撃するがオータムはクルリと上に向けて回転しながら移動することで避けるとGNバスターソードを叩きつけるように振り下ろし、楯無は咄嗟に水のヴェールで防ぐがGNバスターソードを完全に防ぐことはできず、そのまま水のヴェールとごと一緒に叩き斬る。

「弱いくせに前に出てきやがって... 目障りなんだよ!!」

GNバスターソードに斬られ、地面に叩きつけられたことにより、ミステリアス・レイディは中破し、水を発生させるアクア・クリスタル

は先程の攻撃により片方が破壊され、シールドエネルギーは三分の一を下回っている。

オータムはGNバスタソードを突きつける様に構えるとそのまま突撃する。

「やらせるかああ!!」

イチカは楯無を護る為にダブルオーライザーのバーニアを吹かせる。

IS学園のとある非難区画にS学園に侵入したガロード達が出た。

「今、彼はここに居る人を護る為に戦っています」

「クソツ。。イチカの奴は戦っているのに俺はここでジツとするこ
としかできないのかよ!!」

「ガロード。。。」

ガロードはイチカ達が戦っているのに対し、自分だけ何も出来ずに指を銜えて待つことしかできない。

戦う力があれば、ガロードはすぐさまイチカ達の援護に行くのだが、今のガロードにはその力がない為、ジツと待つことしかできない自分が歯がゆかった。

「ガロード。もし、力を与えられたらどうしますか」

「どうするって。。。戦うに決まってるだろ。小さな戦いでもそのまま放置したら大きな戦争になっちゃうかもしれない。それだけは食
い止めないとダメなんだ。戦いの歴史は繰り返しちゃいけないんだ」

ガロードの言葉を聞いたティファはガロードの手を取ると

「ガロード。ついてきてください」

「お、オイ。ティファ!!」

「その貴方、危険だから戻ってきなさい!!」

ガロードはティファに手を引っ張られ、外に出ようとするが一人の眼鏡を掛けた生徒が呼び止めるがティファは聞く耳持たず、そのままガロードをあるところまで連れて行く。

ガロードが連れてこられたのはつい先週までイチカが籠っていた整備室だった。

「ティファ。俺をここに連れて来てどうするつもりなんだ?」

ガロードの声を無視し、ティファはそのままある一か所に向けて進む。

「これを」

「こ、これは…」

ティファが導いた場所には一つの機体があった。

黄色い特徴的なアンテナに赤、青、白のトリコロールの機体があった。

「GX!? 俺にこれを動かさせてことか」

「はい」

「よっしゃ! 一丁やってみますか!!」

「ガロード、貴方に力を」

ガロードが目の前の機体——ガンダムXに触れると眩い光を放ち、その光が収束すると其処にはガロードの姿は無く、先程までであったGXとティファだけが残った。

「で、どうなったんだ俺?… ってなんじゃこりゃ!」

ガロードは自分がどうなったのか気になり見てみると其処には人の肉体は無く、代わりに鋼鉄の身体が其処にはあった。

「なんだか分からないけど、これで俺も戦えるんだな」

「はい」

「じゃ、ティファは安全な場所に退避してくれ。ちよつくら敵さんを追い返してくるから」

「頑張っつて、ガロード」

ガロードは近くにあった大型のシールドと二連装ビームマシンガンを持つと戦場に赴く。

場所は戻って、オータムはGNバスターソードを楯無に突き刺そうとし、先の戦闘でミステリアス・レイディの各部に異常が起き、回避できずにいた。

楯無は迫りくる攻撃に思わず、目を瞑るがいつになってもその攻撃は来ず、恐る恐る、目を開けると

「ほお」

「い、イチカ君!?!」

オータムが持つGNバスターソードによって突き刺さった真紅のダブルオーライザーが映り、腹部を貫通していることから明らかに致命傷だ。

だが、二人はある事に気づく。

貫通されたダブルオーライザーから本来なら搭乗者であるイチカの血液が流れ、地面を赤く染めるのだが地面は一切、血に染まらず不思議に思った二人を余所にダブルオーライザーが赤い粒子になりその場から消えた。

「一体、どういう事?」

「な!?! あの野郎何処に行きやがった!!」

混乱する二人を余所に赤い粒子はオータムの背後に集まると其処には先程、串刺しになったイチカがいた。

イチカはGNソードⅢを上に向けるとそこから巨大なビームサーベルが出来上がる。

「ライザーソードで切り裂く!!」

「クッ!」

本来ならトランザムを起動し、オーライザーの「ライザーシステム」を起動させることで使用可能になるのだが、貯蔵粒子を完全に使い果たしてしまうことや、使用中は無防備になってしまうことなどの欠点

もあつた。現在装備されているGNソードⅢでは発動形態が不要となつたほか、粒子消費量の調整も可能となり、運用面での欠点はほぼ解消されている。

イチカはライザーソードでオータムを攻撃するがオータムは寸前の所で避けるが完全には避けきれず、左腕に被弾する。

イチカはそのままライザーソードでオータムを追撃しようとした瞬間、イチカは何かを感じ取るとその場から後退する。

すると、先程までイチカのいた所に複数のビーム通り過ぎ、イチカはビームが放たれた場所を向くとそこには

「何…あの機体…」

「ヴァサーゴに…アシユタロン…」

「久しいな。イチカ・ギルオード」

「また、会えてうれしいよ」

ヴァサーゴとアシユタロンから聞こえた声に楯無は勿論、イチカは驚く。

「シャギア・フロストにオルバ・フロスト…」

「そんな、イチカ君以外の男性でISを動かせるなんて…」

「物事には例外というモノが存在する」

「君の常識が全てじゃない。その彼も僕達と同じ例外の一人だろ」

楯無はイチカ以外に動かせることに驚くがイチカはそんな会話なぞ、気にせず、GNソードⅢの鋒先をシャギア達に向ける。

「お前たちが何故この世界に居るのかなんでどうでもいい。お前たちはこの世界で一体何を企んでいる!!」

「君に答える必要は無いね」

「話はここまでだ」

そう言うヴァサーゴの腕部がイチカに向けて伸びる。

「チー！」

「やらせると思ふのかい」

イチカはヴァサーゴの伸びや腕部を避けるとGNソードⅢで切ろうとするがオルバが乗る、アシユタロンのアトミックシザーズに内側に内蔵された二つのビーム砲で攻撃し、イチカは攻撃を断念し、回避

行動に移る。

二体一の戦いが続く中、フリー状態のオータムが見動けの取れない楯無の方を向かう。

「野郎と戦えないのが残念だが……その代りにたつぷりいたぶってから殺してやるよ!!」

「楯無さん!!」

「僕達と戦っている最中によそ見とは余裕だね!」

「クソツ……!」

イチカは楯無を助けようとするがアシユタロンのアトミックシザースがイチカを拘束し、それを阻む。

オータムがGNバスターソードで攻撃しようと瞬間、大型のビーム刃がオータムを襲い、ビームがフロスト兄弟に向けてマシンガンのように放たれ、ビームマシンガンがアシユタロンに当たり、その際に拘束が緩み、イチカはその隙を逃さず、その場から離れる。

最初こそ、当たったがフロスト兄弟はそれを回避し、イチカはその隙を見て楯無の所に向かい、オータムをフロスト兄弟のいる所に目掛けて回し蹴りを繰り返す。

皆が攻撃した方を向くと其処には黄色い特徴的なアンテナに赤、青、白のトリコロールに大型のシールドと二連装ビームマシンガンを装備した機体があった。

「あれは……GX……一体誰が……」

「アイツが私の邪魔をしたのか」

突如現れた、ガンダムエックス（以後はGXと表記）はイチカの近くに向かう。

「何か、面倒事に巻き込まれてるみたいだな。イチカ」

「その声……ガロードか!」

「おうよ。アイツらを倒すんだろ。なら、俺も手伝うぜ」

「新しい、男性操縦者……」

思わぬ人物の登場にイチカは驚くが驚いていたのはイチカだけではなかった。

「その声は……ガロード・ランか……」

「まさか、君までこの世界に来ていたなんて驚いたよ」

「それはこっちの台詞だ。あの戦いでお前達を倒したはずだ…」

「だが、私達はこうして生きている」

「君達がこの世界に来てくれたおかげで戦う理由が一つ増えた。僕達は同じ失敗はしない…。だから、ここで消えてもらおうよ！」

前腕に装備された鉤爪ユニット——ストライククローをアリーナの間隙から砲口を露出するとヴァサーゴの腹部が上下に展開・分割し、その隙間から砲口を露出するとイチカ達は回避行動を取ろうとする。

「いいのかい？君たちがそこを離れると後ろの彼女はタダではすまないよ」

「しまった…！」

「では、さらばだ」

ヴァサーゴの腹部からメガソニック砲が放たれる。

「終わったね。兄さん」

「そのようだn——オルバ!!」

シャギアの声にオルバは咄嗟にそこから離れると七つのビームが放たれ、回避することに遅れたオータムは直撃を喰らう。

シャギア達は先程まで、イチカ達がいた所を見ると今だ晴れぬ、土煙の中に複数の機影を見つけ、土煙が完全に晴れると其処にはGNフィールドを展開したイチカとその後ろに楯無がおり、その横にはデイバイダーをシャギア達の居る方に向けたガロードがいた。

イチカは咄嗟にGNフィールドを展開し、動けぬ楯無を護るとガロードがデイバイダーで攻撃したのだ。

「チイ。まさかここまでやられるとは…」

「仕方ない。ここは一端撤退するぞ」

「分かったよ。兄さん」

「…了解」

「また会おう。イチカ・ギルオード、ガロード・ラン」

このままでは戦況は不利になると判断したシャギアは撤退を呼びかけ、オータムは何所か納得のいかない態度をしつつも撤退を開始する。

イチカ達はシャギア達を追撃はせず、その場に待機する。

「やつと撤退したか」

「一事はどうなるかと思っただぜ」

「楯無さんは今のうちにここから撤退してください。また、敵の襲撃が来た時に庇いながら戦うのには限界がありますから」

「そうね……。これ以上、貴方達の足手纏いにならないように今のうちに撤退するわ」

そう言う楯無は撤退を開始する。

「さて、すまないがもう少しの間手伝ってもらおうぞ」

「最初、からそのつもりだ」

「なら、とつとこの戦闘をおわら——ガロード！　今すぐ、ここから離れる!!」

イチカ達が次の場所に向かおうとした瞬間、イチカの頭に何かが閃くとガロードにその場から離れる様に伝えたと二人はその場から離れると上空から波状の光線が先程までいた所に直撃し、その光線は軌道を変え、イチカ達を襲うがイチカ達は左右に散開し、回避する。

イチカ達は攻撃が来た上空を見ると其処には……。

「なんだありや……」

「黒い……。ユニコーン……」

21話

IS学園での一つの戦闘が終わり、イチカはガロードと一緒にこの戦いを終わらせようとした時、上空から一機の黒いユニコーンガンダムが現れた。

「なんだあの機体？」

「恐らく、ユニコーンガンダムだ」

「ユニコーンガンダム？あれもガンダムなのか」

「ああ、俺の知り合いに似た機体に乗る奴が居る…。恐らく、姉妹機だと思う…。だが…」

イチカは目の前の機体にある違和感があった。

「あのユニコーンからは懐かしい感じがする…」

「どういう意味だ？」

「分からない…。だが、懐かしい感じがする…。来るぞ!!」

黒いユニコーンの右腕に装備された二枚のフィンがイチカの方を向くとそこから波状のビームが放たれる。

放たれたビームを避けたイチカだがその背後にあったアリーナの観客席を破壊し、その威力に驚く。

「なんて威力だ…」

「あんな攻撃喰らったら一溜りもないぜ…」

「にしてもあの機体は何だ…」

『アレはユニコーンガンダム二号機バンシイです』

「バンシイ？」

イチカは聞きなれない機体名に首を傾げるが二号機という事から姉妹機だという事が分かる。

『ハイ。そして、先程使った武装はアームド・アーマーBSといい、その威力はビームマグナム程の威力はありませんが高い部類に入ります。そして、バンシイから生体反応を感知しました』

「やはり、此奴は無人機じゃないのか」

『イチカ・ギルオード。貴方はあの搭乗者が誰なのか気づいているのではありませんか』

「…」

アプロディアの調査報告から今まで、襲ってきた向うの機体にISコアは無く、ニューロがISコアの代わりとして使われている事が分かった。

ISコアが使われていない以上、二次形態の様な事は起きないがISコアが使われず、ニューロを使う事によって理論上男女区別もなく、人が乗らなくても使用できるとアプロディアは推察した。

そしてイチカはバンシイの搭乗者が誰なのか薄々気づいているのだがそれを認めたくない、否定したいと思っっているのだ。

そんな事を考えているとバンシイは腰部からビームマグナムを取り出す。

「ガロード!!その攻撃を躲せ!! さっきの攻撃より、威力が高いんだ!!」

「チィ…」

バンシイはガロードに照準を合わせ放つとビームが通った軌道に紫電が散るがガロードは上空に回避するが第二、第三のビームがガロードに向けて放たれる。

ガロードはビームマグナムを回避しつつ、2連装ビームマシンガンの砲門を交互に放ち、応戦する。

「当たらなきゃどうという事は無いぜ」

「油断するなガロード。恐らく、あの機体は本気を出していない」

バンシイがユニコーンガンダムと同じ技術で作られているのであれば、アレがある。それを使っていないという事は本気を出していない証拠だろう。

『新たな機影が複数接近します。マドカ・ギルオードと国家代表候補と一緒に所属不明機がいます。機体照合完了。トールギスⅢです』

「待たせたな。兄さん」

「たった一人の相手に苦戦してるのよ」

「所で… あそこに居る白いイチカの機体に似たのが居るけど仲間ではないのかな?」

「ああ、そうだ」

次々とイチカの下に集まるマドカ達に少し遅れて来た機体から発せられた声はイチカにとって関わりの深い人物の声だった。

「久しぶりだな。イチカ」

「ラナロウ兄…」

「イチカ。知り合い？」

「ああ、俺の家族だ」

マドカがこの世界に来た以上、ラナロウ達も来るのでは？という考えは少なからずイチカの頭にあっただがこうして早い段階で再開できるとは思っていなかったのだ。

イチカがラナロウとの再会を喜んでいるとダブルオーライザーの警告が鳴り、それはマドカ達とは別方向から接近していた。

『これは… 接近する機体は投入したビルゴが次々と破壊しながら接近しています』

「新たな機影が来るぞ！」

イチカの声と同時にアリーナのシールドを破り、一機の機体が現れた。

その機体は嘗て敵であるジオン公国に恐れられた人物アムロ・レイが乗っていた機体、コード・アメリカスの野望が明かされた時に見たのと同じ、淡い青と白を基調としたカラーリングと、左右対称に三つの板状のモノが配置されている。

「… 増援」

「ルガンダム…」

「バンシイと同じだ…。ルガンダムから懐かしい気配がする…でも、そうだとしたら…」

先の戦いで疲弊している中での増援に狼狽している最中、イチカは違う意味で狼狽していた。

現れたHi—ルガンダムの六つの板状のモノが外れ、コの字になるとイチカ達の周りを駆け巡り攻撃する。

「あれは…カリスのビットと同じモノか…！」

「ですが、アレがブルーティアーズと同じなら!!」

「待て！ 浅はかな考えで行動するな!!」

セシリアはもし、自分と同じような操作方法だったなら、ビットの操作中は動けまいと考え、ブルーティアーズの一点集中砲火を加える。

だが、セシリアの考えを読み取ったマドカは危険だと止めようとするが手遅れだった。

ℓガンダムはセシリアの攻撃を容易に躲すとフィン・ファンネルはセシリアとは、比べ物にならず、精度はℓガンダムの方が上であり、どちらかの操作に集中しなければセシリアに対し、フィン・ファンネルを操作しつつ、自由に行動できるℓガンダムにとって動けないセシリアは敵に当たててくださいと言っているようなものである。

セシリアの弱点に気づいた、ℓガンダムは三基のフィン・ファンネルをセシリアに向けて攻撃し、セシリアはそうはさせまいとブルーティアーズで攻撃するがℓガンダムはビームライフルで確実にブルーティアーズを落としていく。

自らを守るようにブルーティアーズを呼び戻したが、その過程で数基落とされた。

ℓガンダムは右のファンネルラックに各1基ずつを装備されているビームサーベルを取り出すとセシリアに接近する。

「危ないセシリア…!!」

「待つてなさい。今、援護するから!!」

シャルロットと鈴音はセシリアの援護をしようとするが敵はそう易々援護さてくれるはずもなく、ℓガンダムはフィン・ファンネルを二基をシャルロット達に向け、足止めをする。

バンシィへの攻撃を躊躇うイチカを援護するマドカ、ガロードに四基のフィン・ファンネルの攻撃に踊らされる国家代表候補組と機体も肉体もまだ完全な状態ではないラナロウは国家代表候補組の援護に徹し、助けることが出来ない中、セシリアの手の届くところまで接近したℓガンダムはその手に持ったビームサーベルを振りかざさそ

うとする。

「くっ、インターセプター！」

セシリアは唯一の近接戦闘用武器を呼び出し、迎え撃つが射撃系の攻撃に秀でているセシリアだが、その反面格闘系の攻撃は訓練をしている為、それなりに出来るが射撃に比べれば数段劣る。

それを表すかのようにビームサーベルの攻撃に付いていけず、態勢を崩された事によって出来た、隙を見逃さず追撃をしようとしたッガンダムだが、その二人の間に一人の女性が入り込み、ッガンダムの攻撃を阻む。

「何とか間に合ったか」

「織斑先生・・・」

そこにいたのはイチカの姉であり、IS学園の一教師でありながら世界最強のIS乗りでブリュンヒルデの名を持つ織斑千冬であった。

千冬はISに乗っているがそれは打鉄やラファール・リヴァイヴの量産機とは異なるものだった。

その機体の名は『白式』といい、倉持技研が開発を進めていたが開発が頓挫して欠陥機として凍結されていたものを束がもらい受け完成させた機体であり、紅椿と同じく展開装甲の試験機として開発がされており、千冬に渡す際に千冬にあったスタイルに合わせ再調整が行われ、唯一の武器は雪片式型という刀だけだが千冬が現役時代に使っていた暮桜の雪片の後継であり、暮桜と同じ単一仕様能力である零落白夜がある。

ッガンダムと白式を纏った千冬はッガンダムを攻撃するが当たる事は無く、ビームライフルで牽制しながら後退する。

千冬は後退するッガンダムを追撃しようとするがバンシイと交戦していたイチカが千冬の前に出る。

「何のつもりだ」

「俺には確かめたいことがある。もしかしたら俺がやろうとしている事でこの戦闘が終わるかもしれない」

「どういう事だ」

千冬は勿論、その場に居た殆どがイチカのやろうとしている事が分

からなかったがマドカとラナロウは違った。

「まさか、対話をするのか」

「ああ」

「…分かったよ兄さん」

「一体何をするといいのだ？ 一気に殲滅するつもりか」

「そんな野蛮な事はしない」

イチカのやろうとしている事が掴めない一同。

「各機攻撃を中止！ 撤退しろ。 トランザムバーストで高濃度GN粒子の意識共有領域を作る」

「GN粒子ってダブルオーから放たれているのだよね…」

「そうだ。今は兄さんの言う通りに行動しろ」

イチカの命令に後退する一同を確認するとイチカはアリーナの中に移動するとイチカの目の前に『TRANS—AM BURST』の文字が浮かび上がるとダブルオーライザーが赤く染まっていく。

それを見たバンシィとレガンダムはイチカに接近し、攻撃を仕掛けようとする。

だが、トランザムバーストを発動させたダブルオーライザーから放たれた七色の輝きを放つ膨大なGN粒子がアリーナを覆い、イチカに接近していた二機の動きが止まる。

「…見て敵の動きが」

「何なんだあの光は… あの中で一体何が起きている」

「綺麗…」

「簡単に言うなら戦わずにして分かり合う事ができるとい認識を持つていればいい」

「戦わずにして分かり合うだと… そんなオカルト染みたモノが存在するはずがない!!」

「その独断と偏見はあまり好ましくないな。世の中には自分の知らない事が沢山ある。 その事を忘れるな」

イチカは福音の時と同じ空間にいた。

イチカの目の前には二人の男女が座り込んでいた。

そして、イチカは目の前の二人を見て、懐かしいと感じた理由が明らかになった。

『マーク兄： エリス：』

何故、この二人がここに居るのかそれはバンシイとリガンダムの搭乗者であり、イチカは二人の気配を感じ、懐かしいと思ったのだ。

『マーク兄、エリス： 何故、この世界に？ ラナロウ兄と一緒に来たのか？』

イチカの声に二人は顔を上げるがイチカは二人の顔を見た瞬間、驚いた。

二人の瞳からはハイライトが消えており、特にエリスは光を感じさせない程、闇の様に深く、希望の欠片もなく、この世すべてに絶望したかのような感じだった。

『お前は誰だ？』

『俺はイチカ、イチカ・ギルオード。帰ろう、皆の所に』

『帰る？ 何処に？ あの人がいない場所は帰るところじゃない。』

私の帰るべき場所はもうどこにもない。』

『一体何を言っているんだ？』

『奪われた： 私の大切な人はいない： イチカは： もう：』

『エリス：』

イチカはエリスから滲み出る様な思いが自分が居なくなつた事が原因なんだと理解すると同時にエリスとマークから黒い靄の様なモノが現れるとやがて人の形になるとイチカはその人物に見覚えがあった。

『コード・アメリカス：』

そして、イチカは理解した。 何故、エリス達が自分達を襲つたのか、その黒幕が何なんか。

コード・アメリカスから黒い光が溢れるとイチカを襲う。

『う、うわあああああ!!!』
まるでイチカという存在を拒絶するかのよう
にイチカはエリス達から離れていくの
だった。

アリーナを覆う七色の輝きを放つGN粒子
の中で動きを見せない三機の中で最初
に動いたのはバンシイだった。

バンシイはイチカに接近すると左腕に装
備されるナツクル状の格闘兵器で殴る。

無防備だったイチカはそれを避けるこ
とが出来ず、そのままアリーナの壁に衝
突する。

「大丈夫、イチカ!!」

「ああ、大丈夫だ...」

シャルロットが近づき、イチカの安否
を確認すると煙の中からダブルオー
ライザーが出てくるが、防御も何もし
なかつたせいでダブルオーライザーの
ダメージは大きく、装甲の一部が歪ん
でいる。

「兄さん。何か分かったのか?」

「ああ、今まで感じていたモノの正体
もそしてあの機体に乗っている奴もな」

「本当か! 一体誰が乗っているんだ!」

「... 黒いユニコーンにはエリスが
リガンダムにはマーク兄が乗っている」

『なんだと!』

二人の事を知っているマドカとガ
ロードは驚きを隠せずにいた。

「だけど、なんであの二人がこんな
仲間割れみたいなことをするんだ
よ」

「操られているんだ二人は...」

「それは一体どういう事だ。一夏」

操られているという事がイマイチ理
解できていないのがあるがマ

ドカとラナロウ、アプロディアは似た事例を知っている。

それはあの世界で起きた事件であり、仲間割れを引き起こすという点が自分達が倒すべき存在が使う手とそっくりなのだ。

「まさか、『裏切りのコード』…」

『なら、この事件の黒幕は…』

「裏切りのコード？なんだそれは？」

「一種の洗脳だと思えばいい。そろそろ出てきたらどうだ！　コード・アメリカス!!」

上空から一つの機体がバンシィとレガンダムの前に舞い降りた。

「ほお、私の気配に気づくとは流石、我が野望を阻んだだけの事はある」

「何者だ。貴様!!」

「我が名はコード・アメリカス。世界を統治し、我がモノとする者だ」

「世界征服でもしようというのか…!!」

「そのふざけた事を考えるその根性を私が叩き直してやる」

「貴様の様な雑種と戯れるつもりは無い。この人形と遊ぶがいい」

コード・アメリカスが乗る、ハルファス・ベーゼの周りに似た機体——ハルファスガンダムが二機、現れる。

二機の内、一機から鳥の羽根の様なのが放出されると、ソレは箒の周りを自由に駆け巡りながらビームで攻撃し、危険と判断した箒はその場から逃げるが箒が逃げた先にもう一機が翼の先端に二門ずつ装備された、四つある翼を前方に向けてクロス・メガビームキャノンを放つ。

「うわあああああ!!」

「大丈夫か？　箒」

「ああ、何とか」

ハルファスの連携攻撃を喰らい、墜落する箒の腕を掴むラウラ

「コード・アメリカス、貴様はエリス達に『裏切りのコード』以外に何かしただろう」

「そこまで気づいていたのか。確かに小娘の方には少々、記憶に細工

をさせてもらった」

そう言うとコード・アメリカスはエリスの方を向くと

「どうした。目の前に貴様の大切な人とやらを奪った張本人がいるぞ。さあ、どうする?」

「奪った? 私から大切な... あの人を...!!」

コード・アメリカスが言った言葉がキーワードだったのかバンシイの腕部、脚部、胸部。継ぎ目が割れ、先ほどまで少ししか見えなかった金色の光が露出する。

全身から金色の光。続いて胸部、フロントアーマーも展開し、バンシイの身体が一周り大きくなる。

ビームサーベルのグリップが背中から肩へ、そして頭部が特徴的な変化を始めた

頭部に屹立していた一本の角。瞳を覆うかのようなバイザー。それが変化を始めたのだ。

バイザーは収納され二つの瞳に。角が割れてV状に完全に開き金色のライオンの鬣が現れる。

「貴様がアアア!!」

イチカ達はこれが何を意味するのかを知っている。そう、ユニコーンガンダムと同じ様にバンシイも『NT-D』を発動させたのだ。

デストロイモードになったバンシイは先程までナツクル状だったモノが獣の爪のような形状に変形し、イチカを襲う。

殺人的な加速でイチカに接近し、その速度はISに搭載されているハイパーセンサーする追いつかないほどの速さで動き、アームド・アーマーVNをダブルオーライザーを捉えると、そのまま地面を引きずり反対側のアリーナの壁に叩きつける。

イチカを助けようとするがマークが乗るレガンダムとハルファスガンダムが行く手を阻む。

イチカの頭の中で光が弾けるような感覚が起これるとイチカはその場から離れる。

先程までいた所に振動するアームド・アーマーVNが横切り、イチカは微かだが頭部を掠める。

ダブルオーライザーのバイザーに罅が入ると次第に大きくなり、右のツインアイが砕けるとそこから金色の瞳が現れ、バンシイを睨む。

イチカはバンシイを攻撃しようとGNソードⅢを横薙ぎに振ろうとした瞬間、動きが止まる。

その隙をエリスは逃さず、アームド・アーマーVNを右から左へ、左から右へと振るいダブルオーライザーを引き裂く。

一瞬の戸惑いだがその代償は大きくダブルオーライザーの装甲はボロボロになり、満身創痕となっていた。

「良いザマだな。イチカ・ギルオード。冥土の土産に記憶を改竄した内容を話してやろう。我に向けられていた憎しみを貴様に向ける様に仕向けたのだ。今、あの小娘には貴様は大切な存在を奪った憎悪の対象でしかない。仲間を引き裂かれて朽ちるがいい。フッフ、フツハハハハハハ!!」

「そんな、酷い…。」

「この屑野郎!!」

エリスは振動するアームド・アーマーVNを満身創痕のダブルオーライザーに振り下ろそうとする。今のダブルオーライザーが喰らえば只では済まさず、搭乗者であるイチカに危険が及ぶのは明らかだった。

アームド・アーマーVNを振り下ろす瞬間、バンシイに二つの巨大なビームが放たれるがそれを後退することで回避する。

イチカ達は攻撃のした方に視線を向けると其処に居たのはクロスバインダーソードを二つに分けその剣先をバンシイに向けているマスターフェニックスがいた。

「コード・フェニックス…。」

「イチカ、お前は大切な人を護る為に力を振るうだろ。なら何故、躊躇う必要がある。お前は何も出来ない臆病者か? 違うだろ。大切な仲間を救う為に力を使うんだったら、今使わないでいつ使うんだ!!」

「好き放題言いやがる…。心のどこかでもし、エリス達を傷つけてしまったらってビビッていたのかもしれない。多少、エリス達を傷つ

けることになっても助けて見せる！ あの時の様に笑って過ごすために俺は戦う!!」

イチカが自らの決意を言うとダブルオーライザーが炎に包まれる。「ダブルオーライザーが燃えている…。」

「な、なんだ!? 一体何が起きているのだ」

突然の事態に驚く箒達を余所にダブルオーライザーを包む炎が大きくになると其処から一機の機体が舞い上がる。

マスターフェニックスやハルファスガンダムに似た形状の機体であり、不死鳥の名を冠する機体——フェニックスガンダム。

だが、フェニックスの細部が以前と異なっていた。

フェニックスの背中にはマスターフェニックスと同じクロスバインダーソードが二つに割れた状態で変形の邪魔にならないようにバインダーに収められ、機体の各所からグレーのラインが見える。

「フェニックス、俺は大切な仲間を護りたい、救いたい…。だから、俺に力を貸してくれ!!」

フェニックスのツインアイが輝くとハルファス同様に赤と白の羽根の様なモノが放出される。

「行け、フェザーファンネル!!」

フェザーファンネルはハルファスとバンシイの二手に分かれて攻撃し、ハルファスのフェザーファンネルを破壊していく。

『イチカ・ギルオード。可能であればハルファスガンダムを一機確保して欲しいのです』

「何故?」

『新たな戦力として使います』

「最善を尽くす」

『感謝します』

そう言うとイチカはハルファスに近づくとフェニックスの右手が燃え上がる。

それは自らの師匠であるドモン・カッシュの代名詞とも言うては過言ではない技を自分なりに編み出したモノ。

「バァアニングッ!… フィンガァァア!!」

イチカはハルフアスのコクピット部を掴むと徐々に潰れ始めるとそのままコクピットを握りつぶす。

「ハアアアア!!」

「チィ…」

エリスはアームド・アーマーVNで攻撃しようとするがイチカはクロスバインダーソードを取り出し、交差させることで防ぐ。

「止めてくれ、エリス!!俺とお前がこうして戦う必要は無いだ!!」

「お前は私の敵だツ!! 私から光を奪ったお前がフザケタ事を言うなアアア!!」

「お願いだもうやめてくれ!! エリス!!」

「グウ… お前の声が頭に… 心に響く…!!」

アームド・アーマーVNをクロスバインダーソードで防ぎ時折、カウンターで攻撃しているとエリスは頭を抑えながら苦しみ始める。

「アアアア!! 頭が… 痛い…!! 助… け… て… イチカ…」

「エリス… お前…」

苦しみだしたエリスの口から出た助けてというイチカに向けて言った言葉。

イチカはエリスがまだ完全にコード・アメリカスに支配されていないのか自力で解き始めたのか分からないがエリスの意識が出てきているという事はこのまま呼びかければ元に戻る可能性があるという事だ。

「待っているエリス。 今、助ける!!」

「まさか… 自力で我がコードを破ろうとしているのか…。 イチカ・ギルオードの力なのかあの小娘の力なのか分からぬが不快だな」

コード・アメリカスがそう言うときエリスの周りに赤い鳥の様な機体が二つ現れるとエリスを左右から挟むとそのまま移動し始める。

「エリスを離せ!!」

「折角、始まった舞台を終わらせるわけにはいかないのな…。 ここは退かせてさせてもらおうぞ」

「舞台とか知らないエリスを今すぐ返してもらおうぞ!!」

「ここで終わらせるわけにはいかないと云ったはずだ。私の代わりにこやつ等の相手でもするといい」

コード・アメリカスからエリスを奪還しようとするイチカの前にガンダムとハルファスが立ち塞がる。

「其処を退いてくれマーク兄!!」

「ターゲットを確認…。排除開始」

「やるしか…。ないのか…。!」

イチカがクロスバインダーソードを構えるとマークは接近し、ビームサーベルで攻撃するがイチカはクロスバインダーソードで受け止める。

「一夏! 援護するぞ!!」

「待つてなさいイチカ!! 今、そいつをギツタギタにしてやるから!!」

「待て! 今、無暗に兄さんに近づいたら寧ろ足手纏いになるだけだ」

「だけど、イチカ一人だとキツイと思うけど…。」

「相手は一人じゃない。あの黒い機体は今、ここに居るイチカ以外の俺達全員で相手しなちゃいけない敵なんだよ。あつちはイチカに任せて俺達は残りの方をやる。いいな、お嬢ちゃんたち」

ラナロウ、マドカ、コード・フェニックスはハルファスの性能を知っている。

だが、ハルファスの性能を知らない専用気持ちは何故、一機の無人機に集中しなければいけないのか分からなかった。

「何故、イチカの援護をせずに無人機に人を集中させなければいけない」

「そうよ。あんなへんてこな機体なんか私達で十分よ」

「鈴の言っている事は置いておいて、何である機体に多勢で攻めないといけないのか教えて欲しいな」

シャルロットは何故、ハルファスに人を集中させなければいけないのかラナロウに聞くとラナロウはトールギスⅢの右肩アタッチメントに懸架される大型ビーム砲であるメガキャノンでハルファスの頭部に向けて放つ。

ハルファスはラナロウの攻撃に防御もせず立ち止まっていると

ハルファスの右頭部に被弾するがここで驚愕の光景が目に入る。

「なっ!？」

「そ、そんな…。破壊された頭部が直ってる…。」

「どういう事だよ…。」

「これがハルファスを兄さん以外の全員で倒す理由だ。ハルファスにはナノスキン装甲という自己修復能力がある」

マドカは目の前で起きた現象について簡単に説明する。

マドカ達がハルファスに人を集中させた理由の一つなのだ。

実戦不足やイチカへの配慮など多くの事を考えた結果の判断である。

「近距離はコード・フェニックスが務め、中距離はガロードと俺、遠距離からの援護はマドカでいいか？」

「おう！ 任せておけ」

「了解」

「問題ない」

「ちよつと待ちなさいよ!!何で私達が蚊帳の外みたいになっているのよ!!」

各々役割を確認し、行動を開始しようとした時、鈴音が不満を露わにする。

「実戦と訓練は違う。死闘を命のやり取りを知らないお前たちが来ても足手纏いにしかならん。命を刈り取る覚悟のない者が戦いに出ようという事自体が腹立たしい」

「命を刈り取るって…。ISには絶対防衛がありますのよ。ISに乗っている限り人が死ぬなんてことは起きませんわ」

「絶対防衛があるから大丈夫、死なないと過信、依存している時点で問題外だ。命のやり取りをしている時点で絶対なんて事はあり得ない。それにお前たちのSシールドエネルギー Eの大半を使い切っている、疲弊しているのも明らかだ。そんな奴が前線に出ても邪魔なだけだ」

「奴さんが動き始めたぞ」

マドカ達はハルファスからフェザーファンネルが放出されるのを確認すると各々の役割をこなす為に行動を確認する。

マドカ達がハルフアスと本格的に交戦し始めている中、アリーナ上空ではイチカとマークはビームサーベル同士により鏖迫り合いをし、大剣の状態になっているクロスバインダーソードが地面に突き刺さっている。

「もうやめてくれ！ 消えたと思った仲間^{イチカ}は目の前で生きている。もう戦う必要は無いんだ！」

「私は多くの仲間を失った…。そして、また…。私の前から…。」
「マーク兄…。」

エリスの心がイチカを失った事に悲しんでいるようにマークの心も同様に悲しんでいるのだ。

「マーク兄…。俺はもう、貴方達の前から消えない。だから…。！」
フェニックスのグレーのラインが緑色に輝き始める。

『これは…。サイコフレームの共振…。』
「いつものマーク兄に戻ってくれ!!」

暗い闇に囚われていたマークに温かく優しい光が霞んで何も見えない世界を照らすのを感じていると同時にイチカの頭にフェニックスに乗り戦い、目の前で仲間が死んでいき、その死んだ仲間の遺品を手にしむ姿、二度と大切な仲間を失わないように努力するマークの姿が流れ込んできた。

マドカ達の戦闘許可が下りず、SEも心許ない専用機持ちは観戦することしかできず、マドカ達の戦闘を見ながら隙あらば一つ文句を言いなから参戦しようと考えていたがそれは出来ずにいた。

だが、マドカ達にその隙は無く、各々自分のポジションと役割をこなし、ハルファスが変形し、全身から炎の様なエネルギー体を纏い突撃したがその威力を知っているマドカ達は回避し、自分達とは比べ物にならないほど強いと実感した。

マドカ達はハルファスのナノスキン装甲を利用し完全には破壊せず部分的に破壊することで深刻な資材不足を補おうと考え地面には切断、撃ち落とされたハルファスの部品が転がっている。

「そろそろ、止めと行くか」

「ガロードの意見に賛成だ」

「分かった。なら一気に攻めるとするか!!」

ガロードの意見に賛同したマドカ達。

「ハモニカブレード!!」

「行け! ライフルビット!!」

マドカがライフルビットを使いハルファスを誘導し、ガロードが誘導した先にハモニカブレードを射出し脚部を溶断する。

「まだまだ!!」

ラナロウはシールドに搭載されているヒートロッドでハルファスの右腕を捉えるとそのまま、上空に放り投げるとメガキャノンで頭部を破壊する。

「これでラストオオ!!」

コード・フェニックスが深紅の炎を纏ったクロスバインダーソードで一気にコクピットを斬り裂く。

マドカ達はハルファスのツインアイが消え、活動を停止したのを確認する。

「終わったな...」

「後はイチカだけだな」

マドカ達はイチカの居る方を向くと其処には先程までグレーのラ

インだった部分が緑色に光っていた。

「おい、あれはなんだ!!」

「あれはサイコフレイムの輝き…」

「サイコフレイム?」

「兄さんのフェニックスや今、兄さんと交戦していた機体に搭載されている物だ。サイコフレイムは兄さんの能力を最大限に引き出すことができる」

「あれもN^{ニュータイプ}Tの力なのか…」

「…なんだろう。あの光が温かく感じる」

フェニックスから放たれるサイコフレイムの輝きから簷は温かく感じると言うがそれは体感としてではなく内面的なモノ——心が温かいと感じたのだ。

「ゴメンマーク兄。マーク兄がどれだけ俺の事を思い、悲しんだのか今、分かった…。だから俺はもう、そんな思いをしないでいい様にする。だから…!!」

イチカはビームサーベルを払いのけるとバード形態に変形し、一気にアリーナのシールドが張られているギリギリまで飛びあがるとそのままマーク目掛けて急降下する。

傍から見れば相討ち覚悟の特攻だが実際は違った。

フェニックスから赤いオーラ状のエネルギーを纏い、その姿は不死鳥を沸騰させる姿になるとそのままマークに突撃する。

「バアアニングッファイヤアア!!」

フェニックスと由来する技であり、フェニックスの最大奥義。

フェニックスのバーニングファイアはレガンダムのコクピットに当たるが本来なら貫通するまで攻撃するのだがマークにも危害を加えることになる。

イチカは軌道を少し変えると翼部がレガンダムに当たりつつ、その

ままッガンダムの後方に出る。

フェニックスは通常のMS形態に戻るとッガンダムに視線を移すと機体がスパークし、小規模な爆発が起きるとッガンダムが解除され、マークが空中に放り投げられ、そのまま垂直落下し始める。

「マーク兄ィィィ!!」

イチカはフェニックスの出せる最大速度でマークに接近し、腕を掴むと自分の元に引き寄せ、抱き抱えると地面に着陸する。

イチカの腕に抱き抱えられているマークの表情は先程までの暗いモノではなく、何処か微笑んでいるように見えた。

22話

学園祭における襲撃も収束を向かえ、此度の襲撃により、学園祭は中止となり、来場した人々は帰宅し始めていた。

その帰宅する人々の中には弾と蘭の姿があった。

「悪いな、弾。学園祭を楽しみにしていたのにこんな事になって」

「別に良いってことよ。俺はお前が無事なら、それだけで充分だ」

「ゴメンよ、蘭。怖い思いをさせちゃって」

「い、いいえ。イチカさんが無事ならそれで。じゃ、私達は帰りますね。お父さんも心配してると思いますし」

そう言うと蘭は帰宅するべく、歩き始めると弾も後を追い掛けようとした時、イチカが弾を呼び止める。

「オイ、弾。これを持っていけ」

「なんだこれは？」

イチカはズボンのポケットから鞆の付いたネットクレスを渡す。

「弾。ソイツを肌身離さず持っている。そして、何かあった時、強く願え。自分が一体何をしたいのか」

「?言っている意味は分らんが、まあ、心の奥に留めておくわ」

『お兄!! 早くしないとおいで行くわよ!!』

「蘭も呼んでるし、そろそろ行くわ」

「ああ、気をつけろよ」

イチカは弾達を見送るとI S学園の中に消えていった。

イチカが最初に行ったのは医務室だった。

そして、イチカの目の前には一人の男性がベッドの上で横になっていた。

医師の診断から命に関わるような事は勿論、多少の擦り傷などの怪

我はあるが大事に至るような傷ではないとの事で数日すれば目が覚めると言っていた。

「哀しい思いをさせてゴメン。マーク兄を助けることが出来ても、エリスを助けることが出来なかった」

マークから邪気のようなモノはもう感じない。恐らく、裏切りのコードも解けている。

「皆で俺の事を必死に探して、戦って……。今は休んでてくれ。後は俺がやるから」

イチカはそう言うと医務室から出て行くのだった。

「よお、イチカ。用事はもう済んだのか」

「ああ。ガロードがこの世界に来た時は驚いたぞ」

イチカは整備室に向かうと其処にはマドカ、ガロード、ラナロウ、コード・フェニックスが各々、機体の整備をし、ティファはガロードの傍に立っていた。

「これが前に言っていたイチカの生まれた世界か」

「今、俺の使っているGXもISって奴なんだよな」

「そして、そのISによって女尊男卑という差別が行われるようになった」

「俺もここが俺の生まれた世界だって自信を持って言えない。女尊男卑はスペースノイドとアースノイドの対立よりも酷い物だ」

異世界組は各々、この世界に来ての感想を言うがどれも称賛といふべきものは無く、イチカ自身この世界で生まれたと誇れないでいた。

「なあ、イチカ。なんで俺はGXを動かすことが出来たんだ？ 後、GXにサテライトキャノンがついてないんだ」

「GXにはISコアの代わりにニューロと呼ばれるモノを使用することで男女関係なく、有人で無くても動かせると仮説した俺とアプロディアは試作機として二機製作した。その内の一機がガロードのG

又だ。だから、女性じゃないガロードも動かせたんだよ。まあ、元は俺の予備機として運用する予定だったんだがな」

「マジかよ。ならイチカに返した方がいいか」

「いや、GXはガロードが乗った方がその性能を發揮するだろうし、ティファを護る為の力が必要だろ。後、サテライトキャノンが無い理由はこの世界には月のマイクロウエーブ送信施設が無いのとGXの大半のエネルギーを使えば撃てなくもないが代償として身動きが取れなくなる。使った後に攻められたら堪ったもんじゃないからな。そう考えた結果ダイバイダーの方がいいと判断したんだ」

「イチカ……。分かった。GXはあり難く使わせてもらうぜ」

イチカがガロードの疑問に答えていると複数の足音が近づいて来る。

整備室の扉が開くと千冬を先頭に専用機持ちが整備室に入ってくる。

「ギルオード。今回の事について説明願おうか」

「断固拒否させてもらおう。これはお前たちが首を突っ込む様なモノじゃない」

「今回の事件でIS学園に相当な被害が出ている。こちら側も無視できない状況になった」

「だから、今回の事について詳しいイチカ君に教えてもらいたいのよ」
情報開示を求める楯無と千冬だが、イチカは素直にハイとは言わなかった。

「人が親切に進言しても払い除けた奴が一体何を言ってるんだ……。まあ、しても構わんが……。こちらの要求に応えてくれるのなら今回出て来た敵の情報を渡そう」

「待て一夏！ 何故、素直に千冬さんに渡さないんだ!!」

「逆に聞くが何故、貴重な敵の情報をましてや機密レベルのモノを渡すのに、何も対価を支払わないのは可笑しな話だと思っただが」

「千冬さんに情報を渡せば事件は解決するはずだ!!」

「今回の襲撃を踏まえてもそのことが言えるのか。人の話を聞かず、『設備強化したからもう大丈夫だ、織斑千冬が居るから大丈夫』と

慢心した結果がこれだ。もう一度聞くがこの事を踏まえた上で言っているんだろうな。箒」

「そ、それは…」

「…その対価とはなんだ？」

「今回、撃破した機体の中にあるハルファスガンダムの譲渡、自由に動ける部隊の編成、こちらがやることに一切口出ししない並びに行動規制を掛けるような真似はしない、マーク・ギルダールの身柄をこちらに渡してもらう」

イチカの出す条件に千冬は不満そうな表情をする。

「その条件ではそっちが有利になっていと思うのだが」

「何か勘違いしているようだが今から渡すデータは全て現存する全てのISを上回る物ばかりだ。寧ろ、こちら側が譲歩しているんだが」
イチカはポツケからメモリーカードを取り出すと千冬に渡そうとするが渡す寸前でイチカの腕が止まる。

「忠告しておくがさつき言った条件の侵害と渡したデータの悪用をした場合、俺はIS学園から姿を消す」

「そんな事したら全世界から狙われることになるわよ」

「例え全てのIS軍が俺の敵になったとしても大した障害じゃない。俺は世界を敵に回してでもやり遂げなければいけない事がある」

「貴様の戯言はさておき、ギルオードの出した条件は護るとしよう」

千冬はイチカからメモリーカードを受け取ると早速、整備室にある端末に繋げると千冬の表情が変わる。

「なんだ…この性能は…」

そこに映っていた機体のデータは既存のISを大きく上回り、それは第四世代の紅椿すら、超えていた。

この様なデータは開示すべきモノではないがイチカは『この世界の技術力では到底再現することはできない』と判断したからだ。

保険として監視用ニューロと呼ばれるモノで開示したデータを監視し、先程の条件を破った場合、データや接続した端末内のデータを全て消去するようになっている。

「分かったか。今、お前たちが相手にしようとしているのはお前達の

常識を超える強さと性能の持ち主なんだ。新米兵士にも劣る貴様らが束で掛かっても到底倒すことが出来ない」

「貴様らは奴を倒すことが出来るというのか!!」

「俺達はそういった敵と何度も戦ってきた」

「それ出来るか出来ないかじゃなく、やるんだ。俺達の手でアイツを倒す」

千冬はメモリーカードを端末から取り外し、整備室を出ようとした時、何かを思い出したのか一度立ち止まり、ガロード達に顔を向ける。「一つ忘れていたがその三人がISを動かした事により、三人を保護する為にIS学園に在籍してもらった事になった。其処の二人は入学という形になる」

「「ふあ!?!」」

「オイオイ、マジかよ...」

いつの間にか在籍することになった三人は驚きの声を上げ、イチカは何処か呆れた様子だった。

「はあ!?!何で俺が入学することになってんだよ!!」

「確かにここなら衣食住付いてくるし、設備もある程度整ってるから拠点としては問題ないだろうけど...。てか、コード・フェニックスはどうするんだよ!!コイツ仮面被ってるし、服装もこの中で一番奇抜だし、色々、アウトだろ」

「聞いていたら好き放題言いやがって!! 俺のこの服装は俺のいた所だと正装なんだよ!!」

「変態仮面は用務員としてIS学園で働いてもらう事になっている」

「なんで俺だけ学生じゃないんだよ!! てか俺は変態仮面じゃねえ!!」

「貴様達の部屋のカギは此処に置いておくぞ」

ギヤーギヤー騒ぐ、コード・フェニックスだが言いたいことを言った千冬はその場をから立ち去る。

「まずはGXに慣れてもらうのが先決かな。まあ、順応力の高いガロードなら問題ないだろう」

「こんなの朝飯前だぜ!」

「後、部隊編成だけど今の所——俺、マドカ、ラナロウ、ガロード、コード・フェニックスだな」

「何故、私達がその部隊に入っていない!! そのポツと出てきた奴が入って私達が入らないのは可笑しいだろ!!」

「それはお前たちが弱いのとガロード達の方が上手く連携できるからだ。ガロードは実戦経験が豊富で感覚を掴んだらお前たちより、強くなるだろう」

イチカの発言が癪に障ったのか箒の身体が震えるとガロードを指さす。

「そこまで言うのなら私達と勝負だ!!」

「何か面倒な事になったな…」

こうしてガロード達と箒達の勝負が幕を開けるのだった。

23話

箒がガロード達に果たし状を叩きつけてから数日が経ち、イチカのクラスにガロード、ティファ、ラナロウが入り、嘗て共に戦ったガロードや家族同然であるラナロウがいる事によりイチカの心に少し、余裕が出来た。

用務員として働いているコード・フェニックスは『ふしかわ いちもんじ不死川 一文字』という名で働いている。

「本当、授業が眠い」

「なら、ティファにキスでもして貰え。そうすれば目が覚めるだろ」

「が、ガロードが良ければ…」

「本当か!？」

「ハイ、そこ。時間を考えようか」

「なら、兄さん。私にも熱い目覚めのキスを」

「マドカ…。お前、本当に歪みねえな」

現在、屋上で昼飯を食べているイチカ一行。

「にしてもよ。なんでここに来て早々、面倒事に巻き込まれるんだ」

「仕方ない。俺も入学して数日で面倒事に巻き込まれた」

「確か、模擬戦は明後日だよな」

「ええ。今日、明日で機体の最終チェックをする予定でラナロウ兄のツールギスⅢの損傷が酷いというか無理な修繕したせいで悪化しますよ」

「マジか」

「なので、コード・フェニックスの隠れ家にあつた機体を使うことになりますね」

イチカが言う通り、ツールギスⅢの状態は好ましくなく、イチカとアプロディア曰く『一歩間違えれば電気系統がやられ、自爆しても可笑しくない状態』という事で今回の模擬戦で使えないくなり、コード・フェニックスが鹵獲した機体を使うことになった。

「詳しいことは当日と言う事で」

「あつ。そうだイチカちょっと頼みがあるんだが」

「ラナロウ兄の頼みなら」
「ちよつと試したいことが――」

そして模擬戦当日。

第2アリーナBピットには箒を初めとする、専用機持ちがおり、そこには千冬の姿もあった。

「いいか、皆の者!! 今日、この試合で一夏にあんな連中よりも強いという事を証明しようではないか!!」

「そうよ!! 最近、私達の事を足手纏いでしかないってふざけないでよね!!」

「そうですね。私達、専用機持ちが弱いというレッテルを剥がして差上げますわ!!」

そんな三人から少し、離れた所にいる簪は気持ちが沈んでいた。

「どうしたの、簪ちゃん? そんな落ち込んだみたいな顔して」

「うん。今回の模擬戦はあんまりしたくない。どう足掻いてもイチカ達に勝てる光景が見えない」

「確かにイチカ君の強さはこの中の誰よりも強いわ。でも、何も出来ないで終わるといふ事は無いと思うんだけど」

「それはどうかな。 嫁の強さは幾度となく血で血を洗う様な戦いを経験したモノと同じ覇気の様なモノを感じる。 恐らく、私達は無残に敗北するだろうな」

楯無は少なからず傷を負わせることは出来ると思っているが簪とラウラは何も出来ないで終わると予想している。

「シャルロットちゃんどう思ってるのかしら?」

「僕は一概にどちらが勝つとも言えませんね。戦いがどう傾くか分か

らないけどイチカが有利なのは確かだと思う」

「そう。私達が勝つことはできなくても織斑先生なら勝てるんじゃないかしら」

「確かに教官は強いが嫁に比べたら弱い。嫁と教官では立っている領域が違う」

「そうかもしれないけど……一勝したら私達の勝ちと言うのもいくらなんでもやり過ぎだと思うけどな」

そう、イチカが今回の模擬戦を開始する前に箒達に『其方が一勝でもしたら入隊を認めてやる』と言ったのだ。

「だが、それは嫁には負けない自信もしくは確証があるという事だ」

「そろそろ、時間ね。最初は誰が行くのかしら？」

「私が行くわ!!」

「まあ、ダメだと思うけど少しでも勝率を上げるために僕も行くよ」

「じゃ、鈴ちゃんとシャルロットちゃんにお願いね」

「任せなさい!!一勝なんて舐めた真似をしたイチカを後悔させてやるわ!!」

そう言うのと鈴音は甲龍を展開するとシャルロットはため息を漏らしながら自身の専用機を展開する。

場所は変わって第2アリーナAピットにはイチカ達がいた。

「どうやら彼方は鈴とシャルロットが出て来たようだな」

「誰が行く?」

「なら、俺が行くぜ」

「じゃ、ガロードが行くとして、もう一人はコード・フェニックスでいいか?」

「ああ、構わないぜ」

「敵のデータは必要か」

「いや、そんな事したら実戦の意味がない。だから不要だ」

ガロードとコード・フェニックスのタッグが決まるとイチカは敵の

詳細データを確認するか聞くとコード・フェニックスは拒否する。

ガロードも不要らしく、GXを展開するとコード・フェニックスも展開する。

「じゃ、行ってくる」

「ガロード。頑張つて」

「おう、ティファの応援があれば元気百倍だぜ!!」

ガロードとコード・フェニックスの二人はカタパルトに向かう。

「GX、行くぜ!!」

「マスターフェニックス、行くぞ!」

二人はカタパルトから飛び出すと指定の位置まで飛ぶ。

「やっと、来たわね。アンタ達を倒してイチカに私達の強さを見せて
けてやるわ!!」

「はあ、好戦的と言うかなんと言うか」

「ゴメンね。鈴つたらさっきからこの調子なんだ」

「お前も苦労しているんだな」

お互いに一言つつ言っていると試合開始のブザーが鳴る。

ブザーが鳴ると同時に散開したガロードとコード・フェニックスは
各々、遠距離から攻撃を仕掛ける。

シャルロットもガラムを取り出し、鈴音は自慢の龍砲を放ち、仕留
めようとすする。

コード・フェニックスとガロードは二人の攻撃を避け、二手に分か
れるとガロードはシャルロットとコード・フェニックスは鈴音の前に
立ちはだかる。

「君はイチカと知り合いなんだよね」

「ああ、俺とイチカは海で出会った。なんでそんな事知りたがる」

「僕は... いや、僕達はイチカの事を知らない。僕はイチカの事が
知りたいんだ。でも、イチカは自分の事を話してくれない」

「だろうな。アイツは昔の事を話したがらないからな。話さないのはお前たちの事を思つての事だと思ふけどな」

シャルロットは両手のガラムで攻撃しているがガロードはデイバライダーをバックパックに接続することで高機動・長時間巡航が可能なホバーリングモードに切り替えることでシャルロットの弾幕を回避する。

「イチカ達もそうだけど何でいとも容易く回避できるの!?!」

「そんな攻撃喰らつたらこっちがやられちまうからに決まつてんだろ!!」

「それにしても異常だよ!!」

「俺達からしたら出来て当然なんだよ!!」

ガロード達のいた世界では実弾やミサイル、ビームが雨の如く襲ってくるのだ。そんな事が多々ある彼らにとって攻撃が当たる＝死と言つても過言ではない。

そんな世界で生きていく上で必要な事であり、止まつて攻撃するなど正気の沙汰ではない。

シャルロットは両腕に高威力十連装ミサイルを放つ。

「コナクソオ!!」

ガロードは二連装ビームマシンガンを連発し、ミサイルを撃ち落とす。

全てのミサイルを落とすが中にはかく乱用の煙幕弾も混ざつていたのかガロードの周辺が煙で覆われ、視界が遮られる。

「クソオ... 視界が... グワアア!!」

煙幕に閉じ込められ、煙幕の中にはセンサー類を妨害する効果があったのかセンサーが意味をなさず、ガロードは動かない事には何も始まらないと考え移動しようとした瞬間、背後から衝撃が襲つた。

煙幕の外に居るシャルロットは赤外線センサーと熱源探知により、ガロードの居場所を把握し、ミサイルや銃弾で攻撃している。

「こつなつたら、一か八か...」

ガロードは上空へと飛び出すと煙幕から抜け出すが抜け出すと同時にシャルロットは瞬時加速で接近し、シールドの裏に装備されてい

る69口径のパイルバンカーグレー・スケール灰色の鱗殻で攻撃するがガロードは手に持っていたデイバイダーの両端に装備されたスラスターを使い緊急回避する。

回避に成功したガロードはシャルロットの背後を取るとデイバイダーを構える。

「零距离ならどうだ!!ハモニカブレード!!」

「ウアアアアア!!」

ガロードはシャルロットの背後からデイバイダーの全砲門を使い、ビームを収束させて形成した、ハモニカブレードを放ち、一気にSEを削る。

「これでラストオー!」

ガロードはデイバイダーのスラスターを吹かしながら、数回叩きつけるとバックパックから二基のビームサーベルを取り出し、X字に斬りつけ最後に跳び蹴りをする。シャルロットはアリーナの壁に叩きつけられる。

「おーい、大丈夫か」

「な、なんとか。でもさっきの攻撃でSEが切れたから僕の負けだね」
「今回の模擬戦で感覚は掴めたし、もう大丈夫だな。後はコード・フェニックスだけで十分だろう」

「ガロードの方はもう、終わったみたいだな」

「…ハア…ハア…ハア…」

鈴音が肩で息をしているのに対し、コード・フェニックスは至って余裕そのものだ。

先程からコード・フェニックスは回避行動に専念し、相手の出方を窺い、様子を見ていた。

コード・フェニックスにとって鈴音を倒すのは赤子の手を捻るようなものだ。

「なんでアンタそんなに余裕なのよ!!」

「いや、お前弱いもん」

「私が弱いつて事、撤回しなさいよ!!」

鈴音は龍砲で攻撃するがコード・フェニックスはそれを全て避ける。

「イチカもそうだけど、なんで見えない龍砲の弾丸を避けることが出来るのよ!!」

「対人戦の場合、相手の視線や腕等を注意しておけば一体何処を狙い、何時攻撃するか大方の予想がつく」

そう言うときコード・フェニックスは背部バインダーに装着されたクロスバインダーソードを双剣の様に構えるとそのまま鈴音に接近する。

クロスバインダーは実体剣として使えるが刀身部分にビーム刃を形成することでビームソードとしても使用できるのだ。

実体剣とビームソードの乱舞により、確実にSEを削る。

「こ、こんな所で…」

「悪いが半端な覚悟で俺達の領域戦争に首を突っ込まないでもらおうか。大して力も覚悟も無い奴が戦場をうろつかれると目障りなんだよ」

コード・フェニックスはクロスバインダーソードに内蔵されたビームキャノン、ソード・メガビームキャノンを鈴音に放つ。

SEも残り少ない甲龍のSEエネルギーはゼロになり、甲龍は解除され、ISスーツ姿の鈴音が地面に倒れこむ。

コード・フェニックスはAピットに戻ろうとした時、鈴音が呼び止める。

「待ちなさいよ!!アンタにその覚悟が有るとして、イチカにその覚悟が有るって言うの!!」

「ああ、当の昔にアイツは出来てるだろうぜ。戦う決心をした時にな…。お前達とイチカの違いがあるしたら、相手を殺す覚悟を持って引き金を引けるかどうかだ」

そう言うときコード・フェニックスは飛び出し、ガロードと一緒にAピットに帰還する。

「お疲れ、ガロード、コード・フェニックス」

「いやー、シャルロットの煙幕に冷汗をかいたぜ」

「ガロード、お疲れ。これを」

「ありがとう。ティファ」

ピットに戻ったガロードはシャルロットとの戦いについての感想を言うとティファからキンキンに冷えたスポーツドリンクを渡す。

「あれ？ 俺には何にもないの？」

「お前は唾でも飲んでろ」

「ヒデエ!？」

「嘘だ。ホレ」

「な、なんだ。あるんじゃないか」

マドカはコード・フェニックスをからかうとガロードと同じようにスポーツドリンクを渡す。

「二人に聞くけど、あの二人はどうだった？ 思った事を言ってるん」

「ん。正直、俺はまだ動かして間もないからどうって言われても困るけど……。強いて言うなら、武器の切り替えの早さが良かったかな」

「あれは駄目だな。心技体どれを取っても低いな。自分がどれ程の実力なのか理解してない」

「そうか」

イチカは二人の感想を聞くとアリーナの方に視線を向けると三つの機影が飛び出すのが見えた。

「どうやらあつちはまだ決まったみたいだな」

「じゃ、次は俺が出る」

「分かった。でもラナロウ兄はまだ怪我が完治していないから二機のサポート機と出てもらいます。勿論、向こうの許可を取っている」

「分かった」

ラナロウはイチカに必要なと言おうと思つたがイチカが自分の身体を心配しての事だと感じ取ると一度頷き、今回、使う機体を展開する。

展開したラナロウの姿は一言で言うならば、武者であり、三日月の様な装飾のついた兜に左眼は眼帯をし、蒼と黒を基調とした鎧を身に纏い、左右の腰には三本づつ刀が帯刀してある。

「さあ、一丁派手にいきますか!」

イチカが用意した黒い馬の様な機体に何故かバイクのハンドルとマフラーの様なモノがついている馬に跨ると腕を組みながら出撃し、後を追うように同じくイチカが用意したメリクリウスとヴァイエイトがピットを出る。

アリーナには打鉄式を纏う簪と修復を終えたミステリアス・レイデイを纏う楯無とシユヴァルツエア・レーゲンを身に纏うラウラがいた。

「で、アンタらも自分には力があると言い、俺達の戦いに乱入しようつてか」

「確かに嫁の力になりたいが、あの馬鹿どもの様に自意識過剰ではない。自分の力がどの程度なのか自覚している。それでも私達は嫁の力になりたいんだ!!」

「へえー、見極めが出来ている奴もいるんだな。じゃ、お前らがどれ程の強さを持っているか確かめてやる。 さあ、Let's Party!! 派手にやろうぜ!!」

ラナロウは刀を抜刀するとラウラが先制攻撃として大口徑レールカノンを放つ。

「ハッ! しゃらくせえ!!」

「嘘オ!」

ラナロウはラウラが放った砲弾を両断し、それを見た楯無は驚きの声を上げ、ラナロウはそんな事を気にせずにラウラに向かって馬を走らせる。

「正面から突っ込んでくるとは愚かな!!」

ラウラは直進するラナロウをA I Cを使い止めようとするがラナロウはA I Cが発動する前に馬から飛び降り、頭上から刀を振るう。

「クッ!」

「この程度でやられるよう奴じゃないという事か」

「私達の事も忘れもらっちゃ困るわ」

「別に忘れちゃいけないぜ」

そう言うラナロウはラウラを斬りつけると楯無に向かって刀を一振りすると其処から雷撃が放たれる。

「ちよ!?!」

「悪いが俺も怪我人でね。そう長く戦えないって言うか、イチカが心配するからなとつと終わらせるぞ」

そう言うラナロウは六本の刀を指と指の間に挟み、三本の刀を挟んだその姿はまるで竜の爪を沸騰させる。

「さあ、本気で来るんだな。相手は竜だぜ!」

「グウ!」

ラナロウは六爪をX字に振りぬき、真空の刃を発生させて楯無を吹き飛ばす。

楯無は水のヴェールで防ごうとしたが真空の刃が水を切り裂き、楯無にダメージを与えたのだ。

「お姉ちゃん!!」

「そんな攻撃じゃ通用しないぜ」

ラナロウは連射型荷電粒子砲を切り裂きながら簪に接近するとそのまま、六爪の連続で攻撃し、切り裂く。

ラナロウはラウラに視線を向けるとヴァイエイト&メリクリウスの連携に苦戦を強いられるのを見ると楯無姉妹に視線を移すと刃を向ける。

「この程度で俺達の戦いに乱入しようなんぞ。片腹痛いねえ」

「じゃ、貴方は何で戦うの」

「俺は仲間の為に戦う。…ただそれだけだ」

「私達も仲間イチカの為に戦いたい」

「思いだけじゃ、何も出来ない。覚悟が必要だ。力なんざ、後から勝手に身に付いてくる」

簪の表情は真剣そのものであり、先程、鈴音のとは違う、確固たる意志を感じ取るとラナロウの腕から蒼い稲光が迸る。

「お前たちの覚悟は理解した。恐らく、あの眼帯の嬢ちゃんも同じなんだろう。だが、これはお前たち日常に住む奴が関わることじゃない。さて、このPartyも終わらせるとするか」

ラナロウの腕から蒼い稲光が刀全体に行き届くと両腕を前に向けた。

「これでthe endだッ!!」

簪はラナロウが今からやろうとしている事に気付き、ミサイルを全弾発射するが、ラナロウの腕から巨大な竜の形をした電撃砲が放たれ、簪が放ったミサイルを爆発させ、楯無と簪を雷の竜が飲み込む。

雷竜が簪たちを通り過ぎると其処には機体の装甲が黒こげになり、その場に倒れる。

「残りはつと…中々、やるじゃねえか」

ラナロウが見たのは満身創痍でありながらヴァイエイトを撃破したラウラだった。

「ハア…ハア…」

「無人機とはいえ、ヴァイエイトを破壊するとはたまげたもんだぜ」

「これで少しは見直したか」

「まあ、それなりに評価は上がったがまだ弱い」

そう言うラナロウは満身創痍のラウラに接近すると六振りの刀を片手で持ち、右に払ってから、飛び上がり一気に振り下ろす。

ラウラはラナロウの攻撃を喰らい、刀を振り下ろした際には衝撃波が爪の様に疾走し、それを真面に喰らったラウラのSEはゼロになり、ラナロウの勝利になった。

「まだまだ、未熟だが…中々、面白かったぜ」

そういうラナロウは刀を納めると馬に乗騎し、腕を組みながらイチ力達のいるピットに戻っていった。

24話

ラナロウの豹変？に困惑する中、イチカ達の前にラナロウが帰還してきた。

「あつ、ラナロウ兄。怪我、大丈夫？」

「Don't worry、俺は元気だぜ」

「な、ならいいんだけど」

イチカは何で英語口調なのか気になって仕方ないが、それより、ラナロウの負った傷が開いてないか気になっていた。

「にしても、雷の竜が出てきた時は驚いたな。キッドが見たら興奮するぜ」

「アレは確か両腕にあるプラズマを生成する小型の装置を付けた事で……なんだっけ？」

「プラズマを生成する小型の装置を付けることでラナロウ兄の「雷と撃てるようにしたい」と言う願いを聞き取り付けたんだ。実戦でも使える様にしてあるけど、今回は模擬戦だからリミッターを付けた状態なんだ。生成したプラズマを刀に流し込むことでさっきみたいなことが出来るんだ。一応、搭乗者にはプラズマの影響を受けないように設計されてるけど、余りにも高い出力を出そうとすると搭乗者に負担が掛かるから、気をつけてくださいよ」

「マジか。因みにどれ位なんだ？」

「度合いにもよりけど……身体が少し焦げて煙が出ますね」

イチカの解説を聞いたラナロウは絶対過剰出力は出さないようにしようと心に誓った。

「で、次は誰が行く？相手はセシリアだけど」

「私が行く」

「次はマドカだな」

「あの高飛車女が兄さんに毒物を食べさせて……。どうやら、死にたいらしいな……。クケケケケ」

「オーイ、ちよつとー」

何故、マドカがイチカがセシリアの料^{ポイズンクッキング}理を食べたことを知って

いるのかと言うと仲のいい本音、簪、シャルロットから聞いたのだ。その話を聞いた時のマドカの顔を見た三人曰く、「そこには般若がいた」「多分、セシリアに明日は無いと思う」「セツシーの事は忘れな
いよー」との事だ。

「さて… どう、料理してやろうか…。じっくり痛めつけながら恐怖を味あわせ、絶望の淵に追い込むのがいいかな…。」

「オイ、イチカ。マドカが暗黒面に堕ち始めてるぞ」

「分かってるけど… なんだろう、あんまり関わりたくない。マドカ、あんまりやり過ぎるなよ」

「… 分かったよ、兄さん」

「了解を言うまでに出て来た間が気になるが… まあ、ガンバレ」

マドカは良い笑みを浮かべ、サムズアップするとケルディムを展開し、飛び出していく。

「マドカさん、貴女は私よりもBT兵器の操作や射撃などが優れていますわ。ですが、上である、貴女を倒してイチカさんに私の実力を教えて差し上げますわ!!」

「ウダウダ言わずにさっさと構えろ。私はお前を倒したくてウズウズしているんだ」

セシリアがスターライトmkⅢを構えると試合開始の合図が鳴り、マドカの頭部を狙うがマドカはシールドビットを展開し、防ぐ。

「貴様、兄さんに暗黒物質ボイスンクツキングを食わせたらしいな」

「いえ、あれは… その…。」

「レシピを見ながら変なモノを入れて、兄さんに臨死体験をさせたらしいじゃないか」

「えっと… あの… 若気の至りと言うか… 何と言うか…。」

「さあ、お前の罪を数えろ!!」

マドカは某ハーフボイルドの探偵の様な事を言いだすとGNスナ

イパーライフルⅡを構えると頭部、肩、胸、膝を正確に射抜く。

「相変わらずの射撃精度ですわ……。 ティアーズ!!」

「同時に操れない貴様がビツト兵器で私に対抗するなど……。 浅はかなり。 ライフルビツト!!」

セシリアがブルーティアーズを四基を射出し、マドカに向けるがマドカはライフルビツトを同じく四基射出し、ブルーティアーズの迎撃に向かわせる。

セシリアとマドカでは操作技術が桁違いであり、セシリアのブルーティアーズは半分撃ち落とされると一度自分の所に戻す。

「やはり……。 私では力不足だということですか……」

「機体の意味も理解できない者がその機体の全てを出しきる事など不可能だ」

マドカは腰部フロントアーマーに内蔵されているミサイルポッドからGNミサイルを四発放つとセシリアは残りの弾道型のブルーティアーズを二発放つが四発の内、二発は相殺することに成功するが残りの二発がセシリアを襲う。

GNミサイルの爆炎の中から落下するセシリアはマドカが言った『機体の意味を理解していない』という言葉について考えると心の中に青い雫が水面に落ち、波紋を広げた。

（ああ、そうでしたの。 ブルーティアーズとは、つまり――）

落下から姿勢を立て直したセシリアはブルーティアーズを放つがマドカはそれを難なく避け、セシリアに視線を移すとセシリアが人差し指と親指を立てピストルの形にするとマドカに向ける。

「バーン」

マドカはセシリアの行動の意味を理解できずにいると背後から二発のビームが左肩に命中する。

マドカは何が起きたのか分からず背後を振り向くが其処には何もなく、マドカは先程、放ったビームがレグナントの様に曲がったのだと推測し、それがどういうモノなのかマドカは心当たりがあった。

「偏向射撃をこの土壇場で取得したのか……。 だが……!!」

「なッ!?!」

セシリアは偏向射撃と通常のビームを混ぜて、攻撃するがマドカはそれを全て避ける。

「な、なぜ当たりませんか!?!」

「これより高出力のビームを曲げる機体と交戦したことがあるからな……。 どうとでもなる。 だが、中々面白い物を見せてもらった。

どれ、少し本気を出してやろう」

そう言うとマドカはTRANS—AMを発動させ、赤く染まるとセシリアに接近する。

「!?!」

「よく、勘違いされるが、私は遠距離射撃も得意だがそれよりも近接射撃の方が得意なんだよ」

マドカはTRANS—AMを解除するとGNピストルIIを二挺取り出すとブルーティーズに押し付ける。

「兄さんの苦しみ…。 受け取れエ!!」

「グツ…。 !?! キャアアアアアア!!」

マドカはGNピストルIIを連射し、装甲を破壊しつつ、SEを削っていく。

マドカはGNピストルIIのグリップを可動させ、ハンドアックスの様に形になるとセシリアの左腹部に叩きつけるとそのまま、腹部に飛び蹴りをする。

「グツ!」

「GAME OVERだ!!」

マドカはもう一度、TRANS—AMを発動させると開閉式の頭部ガンカメラが開き、照準用フォロスクリーンが頭部前面に展開される。

照準用フォロスクリーンには膨大な情報を高速演算処理し敵機の動きを予測することで、驚異的な命中精度を発揮すると言う射撃性能をさらに強化する機能がある。

シールドビットを四基を格子状に配置し、ライフルビットをセシリアの周りに配置し、全方位からのビーム攻撃をお見舞いする。

ブルーティーズから爆炎が立ち上る中、爆炎から一つのビームが

ケルデイムの黄色いV字アンテナの一部を破壊する。

「二矢報いえましたわ…。」

試合終了の合図が鳴ると爆炎の中から落下する、セシリアはどんなに訓練しても会得できなかった偏向射撃を会得できた事と、鉄壁と言っても過言ではないマドカのシールドビットを抜け、ケルデイムに傷を負わせた事に嬉しかったのかセシリアは負けた筈なのに笑みを浮かべていた。

落下するセシリアの腕をマドカは掴む。

「最後の最後でやってくれたものだな」

「あら、褒めてくださいますの？」

「偏向射撃を取得したことで貴様は強くなった。だが、同時行動が出来ない限り、貴様はまだ、未熟だ。そして、その弱点を克服することが出来ない限り、貴様は兄さんと共に戦う事は不可能だ」

「上げて落とすのが得意ですわね…。」

「悔しかったら、精進することだな」

マドカはセシリアを迎えに来た、シャルロットにセシリアを渡すとA.ピットに戻る。

「兄さーん!! 勝ったよー!!」

「聖術・鳳凰結界」

「あゝ? グハア!?!」

何が起きたのか説明しよう。

マドカがA.ピットに戻る際にケルデイムを加速させ、ケルデイムを解除し、イチカに抱き付こうとするがイチカの頭の中で光が弾けると近くにいたコード・フェニックスを楯にし、マドカの体当たりを防ぐ。

マドカはもう一度、イチカに抱き付こうとするがイチカのアイアンクローによって阻止される。

「何の真似だ。マドカ」

「いや、兄さんに勝利の激励として熱いハグをして貰おうと。ついでに既成事実でも作ろうと思つて」

「少し… 頭冷やすか？」

「グギャアアア!!」

マドカの発言に熱くなっていた頭が急に冷め、無表情、無機質、無感情な何も感じさせない顔になるとマドカを掴んでいた腕に更に力を入れた。

「悪魔も顔真つ青だな」

「魔王だ…。魔王が居るぞ」

「… ハイ。今のイチカからは怒りも悲しみも、憎しみすら感じません。正しく無そのものです」

「マドカの行動にとうとう、キレたか…。」

この光景を見た四人はイチカだけはキレさせてじゃいけないと心から誓った。

「じゃ、最後は俺が行くわ」

「お、おう…。 頑張れよ」

「行こう。フェニックス」

イチカはフェニックスを展開するとアリーナへ、飛び出していく。

イチカがAピットを出てから間もなく、紅椿を纏う箒と白式を纏う千冬が現れた。

「あの時言つたはずだ。これ以上、口出しするなと関わるなと警告したのに…。 何故だ」

「私はお前を護りたいのだ!!」

「私はただ、昔のお前に戻って欲しい…。 ただそれだけだ」

「それは無理な話だよ… 千冬姉」

イチカの呟きと同時に試合開始の合図が鳴るとイチカはビームラ

イフルを千冬に向けて放つが千冬はビームを避けると、イチカはフェザーファンネルを展開し、攻撃するが千冬はギリギリで避ける。

「昔の貴方なら、もう少し、余裕を持って回避できたろうに」

「ハアアアアア!!」

「奇襲をするなら、声を出さない事だな。 敵に気づかれるぞ」

セシリアのブルーティアーズの様に操作に意識を集中する必要があると考えた筈はフェザーファンネルが千冬に向けられ、攻撃している隙に背後からの奇襲により、ダメージを与え、千冬を救援しようと考えていたが、イチカがクロスバインダーソードを取り出し、罅迫り合いが起こる。

「少なからず、フェザーファンネルに意識が集中すると考えての行動なんだろうが、悪いが認識能力は高い方だね。 俺はセシリアの様にはならない。 それに相手の『気配』を認識するのが得意だね」

「クッ！ 読みが外れたか…。 だが、その発言はまるで自分が特別な存在だと言っているみたいだな」

「…俺は人間だ。 何処まで行っても俺は人間だ。 人間で十分だ」

イチカは両手に持っているクロスバインダーソードが罅迫り合いにより、塞がれている。

好機と思った筈は脚部の展開装甲を起動させ、右脚をエネルギーソードに切り替えると回し蹴りの要領でイチカの腹部を斬り込む。

紅椿の展開装甲は両の腕肩脚部と背部に装備され、その一つ一つが自動支援プログラムによるエネルギーソード、エネルギーシールド、スラストアーへの切り替えが可能なのだ。

「そんな攻撃…。 効くかよ!!」

「グワアア!!」

イチカはクロスバインダーソードから手を離すと蹴ろうとした右脚を掴み、そのまま地面に叩きつける。

「篠ノ之!!」

「フェザーファンネルの攻撃から抜け出せたか…」

千冬は雪片式型を上段から振り下ろすがイチカは右腕から布状のビームが現れるとその先端を持ち、そのまま両手を広げ、防ぐ。

「これならばどうだ。 零落白夜!!」

千冬は白式の単一仕様能力である、零落白夜を発動させ、斬りこもうとするがフェニックスの右手が燃え上がり、零落白夜を起動させた雪片式型を掴もうとする。

先程まで燃え上がっていたフェニックスの右手が雪片式型に触れた途端、消滅したのだ。

「お前の武器の大半はビーム兵器で構成されている。 なら、この白式は貴様にとって相性最悪だ。 何故だか分かるか？」

「零落白夜か…」

零落白夜とは対象のエネルギーをすべてを消滅させる白式の単一仕様能力である。

千冬が述べた通り、フェニックスの主武装はビーム兵器が殆どであり、バーニングファイアも機体全体をエネルギー体で覆う技であり、フェニックスの武器の大半は効かない事になるがイチカにとって些細な問題でしかない。

「ハア！」

「グウ!」

フェニックスの武装の大半を封じたと思った千冬は一度距離を置き、もう一度、斬りこもうとするが寸前でイチカの拳が鳩尾にめり込み、余りの衝撃に腹部を抑える千冬。

「来いよ、世界最強。 お前らに力の差を教えてやる」

イチカはフェザーファンネルを回収し、武闘家の様な構えを取る。

「行くぞ!!」

「クウ！」

イチカはステップを踏みながら接近すると残像が見える程の速さで千冬を殴り始める。

「千冬さん!!」

「セイヤア!!」

「ガハツ!」

「十二王方牌大車併!!」

イチカは千冬を蹴り飛ばすとイチカは掌を前面に突き出し、大きく

円を描くように動かしながら梵字を出現させると、そこから小型のフェニックスが多数、現れると箒を攻撃し始める。

「何だ、この小さいのは?!」

「俺の師匠ドモンのそのまた師匠東方不敗が使っていた技だ。俺はその人の技を少し、身に付けている」

ドモンとの修業以外でも自主的に鍛えており、その中でドモンの師匠である、東方不敗について調べ、編み出した技の幾つかを取得している。

十二王方牌大車併とは気で使用者の小型の分身を多数作り出し、対象に攻撃を仕掛けるもので攻撃後、分身を帰還させる「帰山笑紅塵きざんしょうこうじん」を使用する事で、気の消費を抑えることができる。

分身を帰還させ、気の消費を最小限に抑えると右腕から布状のビームで箒の腕を絡めるとそのまま引き寄せると、バーニングフィンガーと同じ状態にし、気を練りりその気を引き寄せた箒に放つ。

バーニングショット——東方不敗やドモンが似たような技を使っている、自分の射撃武器が無くなった時、使えたら便利という、考えから編み出した技。

フェニックスのバーニングファイアを掌部限定で発動させたバーニングフィンガーのエネルギーを練った気に纏わせ放つのがこのバーニングショットなのだ。

箒の腕を掴むとイチカに攻撃態勢で接近していた千冬に向け、投げつけると千冬は攻撃態勢を解き、箒を受け止める。

「大丈夫か、篠ノ之」

「は、はい。SEが少し、削られました、行けます」

千冬は箒の状態を確認するとイチカに視線を向けると其処には荒ぶる鷹の様なポーズをしたイチカが眼に映った。

「超級霸王電影弾ッ！」

頭部以外の全身を気弾で渦巻き状に包み、箒達に接近する。

「回避しろ、篠ノ之!!」

「クッ!!」

左右二手に分かれた千冬と箒だが、気弾の渦を纏ったイチカは箒に

向け突撃し、箒は気の渦に巻き込まれ、アリーナの壁に弾き飛ばされる。

「ハアアアアア!!」

「グツ…クツ…!」

千冬は雪片式型でイチカの拳を防ぐが、残像を残すほどの速さで打ち込んでくる、イチカの拳を完全に防ぐことは出来ず、零落白夜を使用していることにより、SEは加速的に減っていた。

何故、SEが加速的に減っているのか。それは零落白夜が自らのSEを消費して発動する為、白式のSEは発動中、常に減っていることになる。

雪片式型に亀裂が生じ、SEが底を尽き始めたのか、零落白夜が解除された。

「まだ、続けるつもりか。頼みの綱はもう、消えた」

「まだまだ、まだ私の戦意は消えてはいない!!」

イチカはバーニングフィンガーで止めを刺そうとした時、イチカの頭の中で光が弾けるとその場から飛び出すと一つのエネルギー刃が先程までイチカがいた所を通り過ぎる。

「千冬さん。受け取ってください」

「こ、これは…」

展開装甲から黄金色の粒子を放出し、金色に輝く箒が白式に触れると千冬は目の前で起きている事に眼を見開く。

何故なら、白式のSEがフル状態まで回復したのだから。

絢爛舞踏——エネルギーを増幅することができる紅椿の単一仕様能力。

エネルギーを増幅して一気にフル状態にしたり、従来は事前準備が必要でコア同士のシンクロなど非常な困難が伴う他のISとのエネルギー交換を、機体に接触するだけで即時実行出来る。

「行きましょう。千冬さん」

「ああ、行くぞ。篠ノ之」

「なんで…。なんで、自分から戦火に身を投じようとするんだ!!」

「そう言うお前こそ、日こち常ら側に戻ってこい!!」

「もう、戻れないよ…。俺は争いによって、何が起きるのか、視た、聞いた、体験し、感じた。だから、俺は戻れない」

イチカは四年間で多くの事を多くの事を覚え、理解した。そして、世界の醜さをその眼に焼き付けてきた。

「一夏ア！ お前が戦う必要なんてない!!」

「俺は多くの戦友を失い、命を奪った…。俺は多くの戦士達の命を吸って生きている…。」

「なら、忘れればいい!! アイツらとの縁を切り、争いなどと言う愚行はやりたい奴だけにやらせればいい!! お前が助けようとしている女の事も全部、忘れて平穏な日常に戻ればいい!!」

「なん…。だと…。」

イチカは箒の発言に唾然とした。

自分の事を助け、家族同然に接してくれたネエルアーガマクルーの皆を、あの時、助けることが出来なかった少女を、少女の死によって悲しむ遺族や友人の事も、散って逝った戦士達の事を、自分が姿を消してしまった事により、深い闇に追い込んでしまった、大切な家族エリスの事を忘れる事など不可能だ。

「フザケルナアアア!!」

「ビクッ」

空間そのものが揺れていると思う程の叫び、そして、イチカの身体からオーラが滲み出るとやがて、不死鳥の様な形になるとその鋭い眼光で箒達を射抜く。

「い、一夏…。」

「忘れろだと…。そんな事、出来るはずがないだろ!! 俺はお前たちの知らない間に多くの事を体験した。俺は何度も命のやり取りをした。戦った奴には何かしらの信念を持って戦っている奴だっている。逝った奴らにだって明日の予定や来週の予定…。大切な人と過ごす予定だってあったのかもしれない…。俺はそいつらから明日を奪ったんだよ!! そんな俺が、そいつらの事を忘れてノウノウと平穏な日常を過ごすのはアイツらを…。消えていった命を否定しているようなものだ!!」

箒達はイチカが一体、何を視て、何を体験したのか分からない。だが、想像を絶することなのだという事は理解出来た。

「そんな俺でも、至福と言うモノを味わえると言うのなら…」

イチカの頭に笑顔で笑い合っているネエルアーガマの皆の姿が思い浮かぶ。

「皆の笑顔を護りたい…。皆の笑顔が俺にとっての幸せだから…」

一人も欠けずに笑う為に俺は…!!」

そして、イチカは心を鎮める。ドモンに言われた「荒んだ心では無く、清らかな心を持って」と言う言葉に従い、箒の発言によって生まれた荒んだ心を清らかにする。

「ハアアアアア……」

すると、イチカの身体から出ていたフェニックスの姿が消え、変わりにフェニックスが金色の輝きを放ち始める。

明鏡止水——怒りに囚われていたドモンがシュバルツのアドバイスによって、会得し、真のスーパーモードを発動させ、ドモンは窮地を脱した。

「なんだ…。先程までの荒々しさを感ぜない…」

「千冬さん!!」

「行くぞ!!」

「な、グアアア!!」

怒りの念を越えた武道家としての最高の境地。今、この場でイチカは明鏡止水の境地に達したのだ。

明鏡止水を発動させたイチカの拳は先程までとは威力もその覚悟の重さも段違いだった。

「師匠…。アンタの技使わせてもらおうぞ!!」

そう言うイチカは両手にエネルギーを送り込むと其処から赤い巨大な剣が姿を現す。

「バアアアアニング…。フィンガアアアアソオオドツ!!」

「機体が金色に変わったからどうした!!」

明鏡止水を知らない箒達からすれば機体のカラーリングが変わっただけに見えるかもしれないが、実際は違う。

箒はエネルギー刃やレーザーを放出するが接近するイチカは全て、切り払い、箒の目の前まで接近すると剣を振り上げる。

「メン！メエエン！メエエエンツ！」

イチカは箒に面を三回打ち込むと巨大な剣を消し、先の攻撃で態勢を崩した箒の首筋に手刀を叩きこみ、意識を刈り取る。

「昔のお前はもつと、優しかった。一体、お前に何があつた!!」

「世界と視てきたからこそ、俺は変わった!! 俺はもう、目の前に命を見捨てたりはしない!! 二度とあんな、悲しみを味あわせたくないから俺は戦う!!」

「一夏ツ!!」

「俺には護りたいモノがあるんだアアア!!」

互いの事を思う二人の道は一体、どこで二人の道はすれ違ったのだろう。それは誰にも分からない。

「私も同じだ!! お前に一体何が起きたのか分からない…。どれ程お前が悲惨な思いをしたのか、私は知らない。だからこそ、私はお前に戻ってきて欲しんだ!! これ以上、お前がそんな思いをしない為に!!」

「…。お前らも俺が護りたい人の一人なんだよ!! 俺はお前らに戦争なんて体験して欲しくない…。千冬姉達の笑顔は俺達が護るツ!

だから、平穏な日常で幸せに生きてくれ! それが俺の思いだツ!!」

互いの事を思う思いが込められた拳と剣がぶつかり合う。

「アツ…。!」

「これで!!」

イチカの思いが勝つたのか、雪片式型は刀身から碎け散り、千冬はその光景に目を見開く。

「しゃああくねつう…。バアアアアニングツ…。フィンガアアアア!!」

「グウー!」

イチカは千冬の腹部を掴むと、更に力を入れる。

「ヒートツ…。エンドオ!!」

頼みの綱である、雪片式型を折られ、相方である、箒は戦闘不能になり、白式のSEもゼロになり、イチカ達の勝利によって幕を閉じた

25話

専用機持ちとの勝負を終えたイチカ達は整備室で機体の損傷具合を確かめていた。

「GXは特に問題ないな」

「No, problem. こつちも問題ないぜ」

「右に同じく」

「私もだ。兄さんは?」

ガロード、ラナロウ、コード・フェニックス、マドカは機体に目立つた損傷が無い事を確認し、マドカは入念にフェニックスを調べるイチカにフェニックスの状態を聞く。

「…いや、特に問題ない」

「特に問題ないなら、何故、入念にフェニックスを調べている?」

イチカは特に問題ないと言うがコード・フェニックスの言う通り、イチカの周りには複数の投影型ディスプレイを表示させ、それを交互に見ながら難しそうな表情をしている。

「フェニックス自体に問題は無いんだが、先の戦闘を振り返ってみるとフェニックスの反応が少し、遅れている気がするな。それで過去のデータと現在のデータを照らし合わせていたんだ」

「それはイチカが単に強くなって、フェニックスの反応が遅れているという事じゃないのか?」

「それか、フェニックス自体に原因があるって事だが、照らし合わせても特に問題点は見つからなかったんだろ。どのタイミングで遅れると思った?」

「フェニックスの反応が遅れていると感じたのは明鏡止水を発動させた時だな」

イチカ達が原因について考えていると、ガロードがある疑問を言う。

「なあ、その明鏡止水ってなんだ?」

「簡単に言うとフェニックスが金色になった時の状態だな。澄み切った落ち着いた心。邪念や迷いが無い事で俺の師匠ドモンやそのまた

東方不敗
師匠がこの境地達している。何故、金色の輝くのかは分からん」

イチカの説明になるほど、と頷くガロード。

「恐らく、明鏡止水を発動させた兄さんにフェニックスが着いて来れなくなっただと思う」

「だが、反応速度の差が生死に関わることもあるからな。アプロデア、なんとかならないか？」

『フェニックスに付いて調べてみたいことがありますので、その時にイチカ・ギルオードの悩みを解決できるように最善を尽くしましょう』

「じゃ、さっそk』ですが、その間フェニックスは使用できません。恐らく、キャノンボール・ファストが終わるまでかかります』マジか」
それはイチカにとって耐え難い言葉だった。

一難去ってまた一難、フェニックスの問題が解決すると思いや、その間、フェニックスが使用できないと言う問題が発生した。

「キャノンボール・ファストってなんだ？」

「高速バトルレース」

「へえー。中々、面白そうだな。けどよ、イチカはフェニックス使えないんだろ。どうするんだ？」

「別の機体を用意するしかあるまい」

口では簡単に言うが新たに機体を作るにしても時間が掛かり、調整等にも時間が掛かる為、到底間に合わないがイチカの頭にある考えが思いつく。

「そうだ。コード・フェニックス一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「この世界に来てお前が倒した機体で五体満足ですぐ使えそうな機体は無いか？」

「んな都合の良い様にあるわけ……いや、あるな。二機」

「本当か!!」

「しかも、その内、一機はお前にぴったしなのがな」

イチカはガッツポーズを取る。これで、キャノンボール・ファーストは欠場せずに済み、何か起きても対処できる。

「そうだ、俺からも頼みたい事があるんだけどよ」

「なんだ?」

「コイツ○○○○を作って欲しんだ」

「確かにそれがあると今後、楽になるな。よし、作ろう。という訳でコード・フェニックス頼んだ」

「じゃ、今日の夜に抜け出して取りに行くか」

色んな事が決まっていく中、ラナロウがある事を言いだす。

「俺達は今後、一緒の部隊だしよ。部隊名決めないか?」

「確かに名無しの部隊は嫌だしな」

「じゃ、何にする?」

その場にいた、全員が考え始める。

「新撰組」

「いや、確かに警察活動みたいな感じですけど…」

「マヨラー31」

「黙れ、マヨラー。マヨネーズでも飲んでろ」

「なんだ、食うか?」

「食べるか!!」

ラナロウのボケ?につっこむイチカだが、ラナロウの手にはいつの間にか、ご飯が見えなくなるくらいマヨネーズがたっぷり掛かった通称マヨネーズ丼があった。

ラナロウはネエルアーガマでも、マヨネーズをたっぷり掛けており、その光景を始めてみたイチカはドン引きし、現にガロード、ティファ、コード・フェニックスが現在進行系で引いている。

「美味しいのにな」

「ぜってえ身体に悪いだろ」

「ほはになにかふああるのか? (訳 他に何かあるのか?)」

「食うか喋るかどっちかにしてくれ」

「じゃ、ガンダムチームでどうだ？」

「なんか、捻りが無いよな」

イチカ達が悩みこむ中、ラナロウはマヨネーズ丼を静かに食べる。

「そうだ！ ガンダムジェネレーション。。。略して、Gジェネか？」

「ガンダムジェネレーション。。。略して、Gジェネか・・・」

「なんか響きもいいし、それに決定でよくな」

「よし、部隊名はGジェネで決定だ」

「部隊名も決まったし、何か食べに行こうぜ。腹減っちゃったよ」

「そういえば、食堂の定食が半額だったな」

「マヨネーズ定食ねえかな」

「んなもんあるか!!」

和気藹々とした雰囲気食堂に向かう、ガロード、ラナロウ、マドカ、コード・フェニックスの後をイチカが追うとした時、ティファアが呼び止められる。

「どうした？ ティファア」

「貴方は今、悩んでいますね」

「俺が何にだ？ 確かに俺はエリスをどう助けるか悩んでいるが、別に大したことじゃないだろ」

「いいえ、それ以外にも貴方は悩んでいます。貴方はエリスのあの、感情が何処から来ているのか考えてませんか」

「!?」

ティファアの言っている事は事実であり、イチカはエリスのあの、どす黒い感情が何処から来ているのか気になっていた。

幾度となく、戦場で感じたモノで人間なら一度は抱いたことがあるだろう感情で終わりなき、連鎖——復讐だ。

戦場で一番充満しているモノで連鎖的に起こり、それは新たな戦火の灯になるモノ。

復讐心を抱く要因は様々だが、イチカはエリスが復讐する要因は自分である事は理解出来たが、何故、あそこまで、黒より濃い漆黒の復讐心まで増大したのか分からない。

確かに戦場で、戦友、家族、友人、恋人を失い、復讐に囚われた人

はいた。

イチカはエリスが復讐に囚われたのは家族を失った事だと推測しているが、家族を失った人たちに比べて感じた強い憎しみは家族以上のナニかを失ったからこそあそこまで強い憎しみを抱けたのだと考えている。

だが、イチカはそのナニかが分からないのだ。

それが分かれば、エリスを救う手掛かりになると思い考えていた。

「…ティファ。…お前はエリスが抱いている思いを…理解しているのか…」

「はい。私はエリスが抱いている思いを理解しています」

「教えてくれ!! エリスが抱いている思いを…。それが分かれば、きつと…!」

エリスが抱いた闇の根源を突き止めれば助ける手掛かりになるとイチカは考えている。

「それは貴方自身が気づかなければ意味がありません。エリスは貴方を家族以上の特別な人として見えます。私が言えるのはここまです」

そう言うとティファはガロード達の後を追う。

「エリスにとって俺は特別な人…」

イチカはティファの言ったヒントからある回答が浮かび上がるが
ありえない、と払い除け、イチカはガロード達の後を追う。

——エリスが自分に恋心を抱いてる訳が無いと自分に言い聞かせるのだった。

26話

食堂に来たイチカ達は各々、食べたい物を頼み食事をしている。

因みにガロードは焼肉定食、コード・フェニックスは豚肉生姜焼き定食、マドカはラーメン定食、ティファはガロードと同じ焼肉定食を食べている。

「ガロード…。あ、アーン」

「あ、アーン」

「おお、甘い甘い。ガロードの周りから甘い物を感じるぜ」

「俺、いつの間にミルクコーヒー飲んだんだ？ 確かブラックを飲んでたはずなんだけどな」

ガロード達の周りから甘い雰囲気が出され、それは味覚にまで作用したのか、口にしたモノが甘く感じたイチカ達だった。

「所で兄さん。それは何だ？」

「何って食い物だよ」

「そんな、真っ赤な麻婆豆腐があるか!!」

「食うか？」

「食わん!!」

イチカが頼んだ泰山特製の激辛麻婆豆腐は赤く煮えたぎった真っ赤な液体の中で浮き彫り見える白い豆腐は人骨を連想させ、この世の料理とは思えない程、グロテスクだった。

「なあ、イチカ…。」

「どうした？ラナロウ兄」

「マヨネーズが足りねえんだけえどオオオオ!!」

「知るかアアア!!」

ラナロウは天ぷら定食を頼んだのだが、ラナロウの頼んだ料理にはマヨネーズがふんだんに掛けられているのだが、ご飯にマヨネーズが全体的に掛かっていない事が不満らしい。

「知れねえよ!!食堂に行って貰って来いよ」

「食堂のおばちゃんにマヨネーズ丸々一本くれって頼んだら引きつった顔で無いって言われたんだよ!!」

「当たり前だ!!てか、ラナロウ兄は高カロリーすぎなんだよ!!今は良くても将来、重い病気になったりするからやめろよ!!」

「俺からマヨネーズを取るとか、死ねって言っているようなものだぞ!!」

「ドンだけ、マヨネーズが好きなんだよ!! そんな、イカれた味覚…。修正してやる!!」

「お前が言うな!! 外道麻婆がアア!!」

ラナロウが殴り、イチカが麻婆を食べながら避ける中、二人の喧嘩にオドオドするティファとコード・フェニックスに対し、マドカは二人の喧嘩を無視し、ラーメンを食べている。ちよつとしたカオスである。

「なあ、マドカ。あの二人を止めなくていいのか?」

「あの喧嘩の中に入れてど? ラナロウはまだ何とかなるが、兄さんはどうにもならん。生身でも規格外だからな、兄さん」

「そこまでなのか?」

「素手で放たれた銃弾を掴むくらい、朝飯前だからな」

「マジかよ…。」

イチカの規格外さを聞いたガロードはイチカ達の喧嘩に目を向けるとイチカの手には外道麻婆があった。

「隙あり!!」

「イ、エアアアア!!」

イチカは外道麻婆をラナロウの口の中に流し込むとラナロウは奇妙な悲鳴をあげながら仰向けのまま飛び上がった…。ように見えた。

「どうだ? 昇天するほど美味いだろ」

「いや、別の意味で昇天しただろ」

この料理はイチカが偶然寄った世界にあった紅洲宴歳館と言う、中華料理店で元神父の店主におすすめの料理を聞いた時に出た料理がこの泰山特製の激辛麻婆豆腐だ。

その余りの辛さに感激したイチカは時間があつた時に立ち寄り、いつしか常連客となり、店主から特別にレシピを教えてもらい、以降は自分でも作るようになり、この世界に戻ってからは食堂の人に頼み

作って貰っている。

この料理の存在を知っているのはごく一部であり、興味本位で食べた人は病院送りになっている。その中には世界最強のIS乗りも含まれているとか。

「因みに味は食べれば食べる程、味覚や痛覚を破壊する辛さでその店主の味は一口で五感が破壊されるらしい」

「それもう料理じゃね。料理の皮を被ったなんかだよ……」

「アレを食って、あの美味しい料理が作れるとか……。世の中可笑しな事だらけだ」

「喜べ、ラナロウ兄。君の願いはようやく叶う」

外道麻婆を食いながら不敵な笑みを浮かべるイチカの横では白目を剥き、気絶しているラナロウの姿があった。

外道麻婆を食べたラナロウは二時間後に目覚め、気絶している間に『死んだ、お袋と親父に会った』らしく軽く臨死体験していた。あと少し、目覚めるのが遅かったら手遅れになっていたかもしれない。

「まさか、先客がいたとは思わなかったな」

「ここに来たら、イチカに会えると思って」

腹ごしらえもし、キャノンボール・ファストに向けて、作業をしようと思いい、整備室に向かうとそこには簪とシャルロットがいた。

如何やら、二人もキャノンボール・ファストに向けて、自身の専用機の整備と調整をしていたようだ。

「まあ、居るからこつちが不利になるってことは無いしな。マドカ、そこにある工具箱持ってきて」

「ハイよ、兄さん」

「所で、GXのサテライトキャノンは何処にあるんだ？」

「奥の資材置き場の中に入って右側にある」

イチカ達はガロードのGXの調整とガロードが追加で頼んだGファルコンの製作をしている。

GXは背中のバックパックを外された状態で宙吊りにされている。

「イチカ達は何をしているの?」

「ガロードのGXの調整」

「ねえ、僕達じゃ、イチカ達の戦いに参加しちやダメ? 僕はそれなりに覚悟はできているつもりだよ。引き金を引いて奪う覚悟もある。それだけじゃ、足りない?」

「俺達が一体何をしようとしているのか分かってるのか? あの馬鹿四人衆よりは理解しているつもりだろうけど」

「...分かってるよ。戦争をするんでしょ...」

戦争という言葉が周りの空気を重くする。

「ああ、そうだ。血で血を洗い、死と隣り合わせの戦争だ。ゲームや遊びじゃない...。友達、家族、恋人、もしかしたら、自分の命を失うかもしれない。失ったモノは二度と戻ってこない。特に命はな...」

「じゃ、私達はイチカ達が命をかけて戦ってるのを知りながら、何も出れないなんて...。そんなの耐えれない...!」

「お前たちは表の^{日常}世界で生きろ。裏の^戦世界で生きる俺達の事なんか気にするな」

「そういえば、イチカ。お前の誕生日って何時なんだ?」

重い話題から別の話題へ切り替え、重い雰囲気をもとかしようとするガロード。

この時、シャルロットと簪の眼が一瞬、鋭くなったのは気のせいだろう。

「9月27日生まれのとんびん座」

「えええ!! そう言う、大切な事はもっと早めに言ってよ」

「聞かれなかったし、別に言う必要性を感じなかったからな」

イチカは聞かれる、必要性が無い限り言わないのがイチカである。

「その日、何か予定あるの？」

「友人の家で誕生日パーティーがあるからそれに出るくらいかな」

「なあ、それに俺も参加していいか？」

「俺はいいけど、弾に聞いてからだな。まあ、特に断る理由もないから了承してくれると思うよ」

「ねえ、僕も参加したいんだけど。ラウラとか誘っていいかな？」

「チョイ待ち。弾に聞くから」

イチカはポツケからスマホを取り出すと連絡先から弾の名前を見つけ出し、タッチする。

『もしもし？』

「よお、弾。ちよつと誕生日パーティーで相談があるんだけどよ」

『まさか、行けなくなつたとか言わないよな』

「いや、行くけど。パーティーに参加したいって人が増えてき。大丈夫か気になってよ」

『ああ、別に良いぜ。親父に頼んで貸切にしてもらうから。蘭の為って言ったら即OK出すぜ』

イチカは弾からOKサインを貰うとガロード達にサムズアップする。

『お前の頼み聞いたんだから、俺の頼みも聞いてくれねえか？』

「別に良いけど」

『学園祭の時に言った人を連れて来てくれねえか？ 知ってるみたいなこと言ってたし』

「眼鏡をかけた、三つ編み、ヘアバンドに少し堅い雰囲気の人だよな？」

『そうそう。そんな感じ』

簪は誰の事か分かったのか手を叩くと誰かと連絡を取り始める。

「多分、行けると思うぞ」

『例え、来れなくても仕方ないしな。その人だって用事はあるだろうし』

「そうか。じゃ、楽しみにしてるから」

『おうよ。すっぱかしたりするんじゃないぞ』

イチカは弾との電話を切る。

「言うまでもないがその日開けておけよ」

「勿論!!」

「誕生日パーティーか…。なんかワクワクするな」

「そうですね」

簪とシャルロットはイチカの誕生日パーティーの事を知らせる為に整備室から出ていく。

「にしてもよイチカ。お前って素直じゃないよな」

「何がだ？」

「何って、ちゃんとアイツらに用意しているんだろ？アイツらが戦うための力を」

「…何か勘違いしてる様だが、俺はアイツらに戦争をする為の力は与えるつもりは無い。だが、護る為の力なら、与えるつもりだ。今のISじゃ、太刀打ちできない。自分の命を護れるのは結局、自分なんだからな」

「まったく、素直じゃないぜ」

イチカの不器用さに肩を竦めるガロード。

「GXにサテライトキャノンを取り付けたら、今日の作業は終わりだ」
「はやく終わらせて、シャワーを浴びたいぜ」

GXの換装作業が終わったのは約二時間後だった。

場所は変わって、とある無人島。

無人島にある一つの洞窟の中に巨大な基地があった。

その基地を眺める二人の男性の姿があった。

「始めるとするか、オルバよ」

「そうだね。兄さん」

オルバは手に持っていたスイッチを押すと洞窟の中にあつた基地から連続的に爆発が起き、爆発によって生まれた紅蓮の炎は瞬く間に基地全体を飲み込んだ。

「そろそろだね」

「ああ、そうだな」

燃え盛る基地から悲鳴が聞こえる中、複数のISと機体が飛び出してくる。

「貴方達一体何が起きたの？ まさか、敵襲!？」

「ああ、そうだよ。スコール・ミューゼル」

「敵は一体何処に居るの!!」

スコールと呼ばれた金髪の女性は黄金の装甲に巨大な尾を持つIS黄金の夜明けゴルデン・ドーンを纏い、その周囲にはラファール・リヴァイヴ、打鉄そしてアルケーガンダムの姿があつた。

「君たちのすぐ近くにいますよ。。。すぐ目の前にね」

「誤魔化さずにとつと言え!!」

「目の前？ まさか!?!」

「その。。。まさかだ」

シャギアはヴァサーゴを展開するとヴァサーゴの腹部が上下に展開し、砲門が露出すると光が収束し始める。

「!? 皆、避けなさい!!」

「もう、遅い」

「え?」

スコール、オータム、他数名のIS乗りの内、スコールとオータムを除く、IS乗りが跡形もなく消し飛ばされる。

「なんて威力なの。。。ISの絶対防御を破って、搭乗者を消し飛ばす

なんて…。」

「デメエエエ!!何の真似だ!!」

「私達は君たちの下から離れる。私達の力を必要とする輩が居るのでね。そちら側に付くことにした」

「私達から離反して、用済みになった私達を消そうという事かしら？」

恩を仇で返すってこういう事を言うのでしょうね」

「そう捉えてもらって構わないよ」

オルバもアシユタロンを展開し、戦闘態勢に入る。

「君も全力で着た方がいいよ。 なぶり殺しにされるのは趣味じゃないだろ」

「そうね。 貴方達を相手にするならこの子じゃ役不足ね。 なら、私も本気で行かせてもらおうわ」

スコールが持っていた金色の獅子のネックレスが光り輝くとスコールを包み込む。

スコールを包む光が消えると其処にはゴールデン・ドーンの姿はなく、ゴールデン・ドーンと同じく金色の機体。

違う点があるとしたら、全身装甲に変わり、ガンダムのような顔を持つている事だろう。

今、スコールが展開している機体の名はアカツキ。

元オーブの代表ウズミ・ナラ・アスハが愛娘のカガリ・ユラ・アスハに遺した機体。

オーブのフラッグシップ機としてその理念を反映し、防御力を重点に置いた機体として完成され、大気圏内用のストライカーパックである、大気圏内航空戦闘装 “オオワシ” を装着している。

「我らが次のステージに上がる為の舞台を始めるとしよう」

「貴方達を作った舞台上で貴方達を倒すわ。散って逝った同胞たちの為に!!」

「閻魔様と対面する覚悟は出来たか!!」

「それは君たちの方さ!!」

スコールはビームライフルをシャギアに向けて放ち、オータムはライフルモードのGNバスターライフルをオルバに向けて放つ。

「何でこんな事をした!!」

「最初は同じ思いを持っていた」

「貴方達は私達の『世界を変えた根源である、ISを全て破壊もしくは管理し、世界を正しき姿に戻す』に賛同したんじゃないの!!」

「最初はそう思ったさ。前に大罪を犯した私達がせめてもの償いとして世界を変えようとした」

「なら!!」

ヴァアサーゴとアカツキのビームサーベルが交差し、鋼鉄の仮面が触れるのではないかと言うほどに肉薄する。

「スコールウウ!!」

「残念だけど、君たちは此処で沈んでもらうよ」

「グウ…！ 離しやがれ!!」

オータムはGNソードを大きく振りかぶり、鏝迫り合いが起きているスコールを助けようとするがスコールとオータムの間に割り込み、アトミックシザースで腕を挟まれ身動きが取れ無くなる。

「騒がしい女は嫌いだねツ!!」

「グフツ！」

「オータムツ!!」

オルバは身動きの取れないオータムの腹に何度も殴りかかり、それを見かねたスコールは「オオワシ」の両脇に合計2機装備されたビーム砲を放つ。

「グッ！」

「た、助かった…ぜ…」

「しつかりして、まだ戦闘は終わってないわ!!」「いや、もう終わりだ!?!」

放たれたビームはアシユタロンに命中し、拘束が緩み、落下するオータムの腕を掴み、肩を貸すと意識が危うい、オータムに声を掛けるスコールにシャギアのストライククローに叩きつけられ、基地の壁に激突する。

「では、ヤッぱだ」

「させない!!」

ストライクシューターと呼ばれる二挺の3連装ビーム砲とクロアの複合兵装を連結させるとスコール達に向けて、放つがスコールがオータムを庇うように前に出る。

「な!?!」

すると放たれた計6連装のビームはアカツキに触れると反射し、ストライクシューターを破壊する。

「どう、驚いたかしら? このアカツキの前ではビーム兵器は無意味よ!!」

「なら、こうするまでだ!!」

「グッ!?!」

ストライククローを射出し、スコールの左腕を捉えると射出されたストライククローごとスコールを引き寄せる。

「落ちろ!!」

「グアアア!?!」

スコールを目の前まで接近するとビームサーベルで左腕ごと切り裂く。

アカツキの最大の特徴である黄金に輝く装甲であるが、これは「ヤタノカガミ」と呼ばれるビームを屈折・反射する特殊な装甲によるものだが、この装甲は強力な反面、実弾やビームサーベルは無力化出来ないという欠点があり、現にシャギアのビームサーベルで切り落とされ、切断面からアカツキとはまた別の機械の部分が露出し、破損した左腕から時折スパークしている。

「やはり、その身体…サイボーグ機械義肢だったか」

「いつから、気づいていたのかしら?」

「君の動きには何処か機械染みたモノがあったからね。会った時から疑問を抱いてたさ」

「では、さくらばだ」

そう言うトシャギアはメガソニック砲を拡散モードで洞窟の天井に放ち、亀裂が生じると洞窟が崩壊し始める。

「僕達が会った上司の中で一番仲間思いの良い上司だったよ。僕達は僕達のやり方で世界を変えるよ」

「生きていたら、また会おう」

フロスト兄弟は落下する岩を潜り抜けながら洞窟から脱出する。

「このままだと、私もオータムも……」

スコールは切断された左腕を抑えながら落下する岩を破壊しながら気絶しているオータムの近くまで移動する。

「オータム…… 貴方は生きて私の——」

—— 大切な人

スコールは落下する岩石からオータムを護るように覆い被さりながら呟くのだった。

27話

「だりやああ!!」

「ハアアアア!!」

アリーナでは、イチカとガロードの模擬戦が行われている。

今回の模擬戦にはガロードの実戦慣れと修復した機体の試験運用の二つの目的で行われている。

「行け！フェザーファンネル!!」

「ビット兵器かッ！」

千冬から譲り受けたハルファスを修復したイチカはガロードに今回の模擬戦の意図を話し、ガロードは快く了承した。

イチカはフェザーファンネルを射出するとフェザーファンネルは不規則にガロードの周りを飛び回り、攻撃する。

「グウー・カリスのビットより動きが複雑だ……。 だけど、動いてるの物理的な物体だ!!」

ガロードは二連装ビームマシンガンを数発放つと、周囲を自由自在に飛び交うフェザーファンネルに被弾し、小規模な爆発が起きる。

「まだまだ!!」

「フェザーファンネルにもう、反応出来る様になったか……。 流石だな」

「へへえ、こんなもん慣れちまえばどうってことないぜ!!」

「だが、油断大敵だ!!」

次々とフェザーファンネルを落とすガロードにイチカは接近すると蒼く燃え盛る右手を突き出す。

「その展開は予測済みだ!! ハモニカブレード!!」

「チー！」

ガロードはディバイダーをイチカの居る方に翳すとディバイダーからビーム刃が形成し、射出されるがイチカは射出される寸前で上体をずらすと頭部に掠り、少し熔解するが数瞬後、熔解した部分が修復され、模擬戦を開始する前と同じ状態になる。

「オラッ！」

「うお!？」

イチカは姿勢を低くし、ガロードの足を蹴るとガロードは姿勢を崩す。

「バアアアアニング… フィンガアアア!!」

「グアアアアア!!」

姿勢を崩したガロードの背後に周り、後頭部を抑えながら地面に叩きつける。

ガロードがクッションの役割を果たした為、イチカにさほど衝撃は無く、ガロードを叩きつけた際に生じた土煙が晴れると其処には犬神家状態のGXがあった。

「やべっ、やり過ぎた。今、助ける」

「し、死ぬかと思っただぜ…」

イチカはガロードの足を引っ張り、地面から抜く。

『御二方ともご苦労様です。データは取りえました。ハルファス、GX共に問題ありません』

「ふうー、中々、ハードな模擬戦だったな」

「動かした側として特に気になる点は無いな。サンキュー、ガロード」
「この程度、お安い御用だぜ」

イチカは座り込んだガロードに手を貸すとアリーナを後にする。

「なあ、イチカ。ちよつと頼みがあるんだけどさ」

「何だ？ ガロード」

「買い物に付き合ってくれないか？」

「別に構わんが…なんでテイファと行こうとしないんだ？」

「俺まだ、この辺りの地理に詳しくねえからよ。何処に何かがあるか教えて欲しいんだ」

ガロードがこの世界に来てからまだ一カ月も経っていない。全寮制のIS学園に通っている為、外出するには外出届を提出しなければ

ばいけないのだが、ここ最近、事件や問題事が畳みかけるように起きた為、外出する暇が無かったのだ。

「そういう事なら、仕方ないな」

「じゃ、今度の週末にお願いするわ」

「OK。ティファもお前とデートしたいだろうし、お前もしたいんだろう?」

「ちよ!? いや... うん、まあ、そうだけだよ」

そんな他愛無い話をしているとイチカの自室の前に到着する。

「じゃ、また明日。日曜日楽しみにしてな」

「おう、またなイチカ」

ガロードと別れたイチカは自室のドアを開ける。

「お邪魔してるわよ」

「はあ...」

部屋に入ると其処にはベッドの上で脚をバタバタさせながら、ファッション雑誌を読み楯無。

「マドカ」

「何だい。兄さん?」

「い、いつのまに!?!」

楯無がイチカの部屋に不法侵入するのはこれが初犯ではない。

過去に数回、同じことをしているのだが、大抵マドカの手によって地獄を見ることになる。

そして、イチカの呼びかけにいつの間にかイチカの背後に居るマドカ。

マドカはイチカが呼びかけるとゲルマン忍法でも使っているのではないかと思う程、神出鬼没で本人曰く「兄さんへの思いが可能にする」らしい。

「これより雌犬の始末に入る」

手がぶれて見える程の速さで何かを投げると楯無の頬から数瞬遅れて血が流れ始め、楯無は何が起きたのか目で確認すると床に一つのカッターが刺さっていた。

「並べく傷は残さないようにした方がいいか? いや、再生用のナノ

マシンもあるから問題ないか」

「え？ ええ!？」

「さあ、戦争をしよう」

マドカは服に仕込んでいた文房具をこれでもかという程、大量に取り出す。

「ちよ、ちよつと待って!! 何処にそれだけ文房具を隠し持っていたの!？」

「仕方ない、口ホチキスで勘弁してやろう。なに、見えないように裏側においてやる」

「全然、安心できない!？」

暗殺スキルを極めたマドカにとって、例え文房具であろうと凶器になりえるのだ。

マドカが一步近づくと楯無は一步下がりが、最終的に壁際まで追い込まれる。

「待って、は、話し合いました。誤解だから、マドカちゃんが思っているようなことは起きないからね。ね」

「私の故郷で、その言葉をこの状況で言った人は皆、帰らぬ人になったよ」

「ヒイ」

マドカが肉薄するまで近づき、涙目になりながら、小さい悲鳴を上げる楯無。

危機的状況に陥った楯無に一筋に光が差し込む。

『イチカ。 いる?』

「いる、居るわよ! イチカ君は居るからそこにいて!! 今、開けるから!!」

「チイ、来客か…。 運のいい奴め」

これで助かる、と思った嬉しさと底知れぬ恐怖から逃れたことにより、涙を流しながら駆け足で扉に向かいマドカは舌打ちをしながら手に持っていた文房具を仕舞う。

「あれ? なんで楯無さんがここに居るんですか? もしかして、イチカと…。!!」

「本当にいいタイミングで来てくれたわ。後、もう少しで私の大切なものが失う所だったわ。私、生徒会の仕事があるから、ごゆっくり」シャルロットに礼を言うのと楯無は光速と思う程の速さで廊下を駆け巡っていく。

「あ、そつちには『楯無、廊下を走るな』『お、織斑先生!』『私の目の前で校則違反…。しかも生徒会長である、貴様が破るとはな…。どうだ？ 久しぶりに一戦交えないか?』『た、助けて!! 殺される?!?!』もう、遅いね」

一難去つてまた一難、恐怖から逃げきつたと思いきや目の前の新たな恐怖に捕まり、その恐怖の手によつて新たな恐怖を味あう羽目になった楯無は哀れである。

「必殺仕事人に裁かれたか」

「刀でバツサリとやられたと思うよ。兄さん」

「南無阿弥陀仏」

「いや、死んでないからね!」

ツツコミを入れるシャルロットの後ろで今は無き、生徒会長の悲鳴が学園に響いた。

「そんなところに突っ立てないで座れよ。お茶出すからさ」

「え、えと、お邪魔します」

シャルロットはイチカに言われた通り、イチカの正面に座る。本音を言えば好意を抱いているイチカの隣に座りたいが彼女は見たのだ。敵意と殺意の籠った濁った眼で自分を見つめる阿修羅をすら凌駕する存在を。

「楯無さん今にも泣きそうな顔だったけど…。大切なモノが奪われかけたって…。イチカ、一体何したの?」

「何故、俺が犯人みたいになってるんだよ。　後ろで敵意と殺意を撒き散らしているマドカが楯無の命を奪いかけたけどさ。　マドカの逆鱗に触れたら楯無と同じ目に合うから気をつけろよ」

「ええっ!? マドカのせいで楯無さん、泣いてたの。　てつきり、イチカが楯無さんを…ゴニョゴニョ」

事の真相を聞いたシャルロットは驚き、先程、自分が想像したこと
を思い出し、赤面しながら口ごもる。

「そ、そういえば、イチカってあんまりオシャレとかしないよね」

「オシャレとかに感心があんまりないんだよな。　動きやすい服装ならいいしな」

「じゃ、ブレスレットとかは？」

「殴る時に邪魔だし、それにフェニックスの待機状態がブレスレットだからな」

イチカは制服の袖を捲ると其処には赤い石に不死鳥が施された待機状態のフェニックスがあった。

「じゃ、時計はどうか？　カツコイイ男子になりたいなら必須だよ」

「時計か…。　前はあったけど今は持ってないな」

「へえー、それってどんなの？　誰かの贈り物？」

「やたら話に食い込むな。　誕生日に貰った懐中時計だ」

イチカマーク達と行動してから三回目の誕生日にエリスから貰った懐中時計だが、イチカは気づいていないが背面には小さく、イチカとエリスの名が記されており、イチカはネエルアーガマの自室に大切に保管している。

因みにエリスはイチカとお揃いの懐中時計を持っていたりする。

「今は持ってないってことは無くしたって事でしょ。　それって挙げた人に失礼じゃない？」

「いや、無くしてないから。　大切に保管しているから問題ない」

「ならいいけど。　じゃ、今度の週末に見に行こうよ。　服とか見にいきたいし」

「え？　今度の週末はガロードと一緒に街の案内する予定だからな」

「ここでイチカは考える。　もし、シャルロットと一緒に買い物に出か

けた場合、女性が好む店や欲しい物などが分かり、ガロードがティファとデートする時に役に立つ事が多いと予測する。

「マドカお前は どうする?」

「やりたいことがあるから、私はパスだ」

「マドカにしては珍しい。ガロードと一緒にいいか? あいつ、この辺りに何かがあるか分からないから、教えてやりたいからよ」

「大丈夫だよ。イチカと二人つきりで出かけたかったのにな(ボソツ)」

「? まあ、今度の週末だな。ガロードにも言っておくから」

溜め息をつくシャルロットに対し、首を傾げるイチカ。

「えへへ。イチカと買い物楽しだなあ」

「気が早いな」

「じゃ、今度の週末楽しみにしててね♪」

シャルロットはステップを踏みながら部屋を出ていくシャルロット。

「そうだ、兄さん」

「なんだ?」

「兄さんが前に使っていたGNアームズ使っている?」

「基本、フェニックスで戦闘するだろうし、ダブルオーライザーにGNアームズは使用できないから、使いたかったら使っているぞ」

GNアームズの使用許可与えてから数分、笑い声とも悲鳴とも取れる声が学園中に響いた。

とあるラボに夢の国のアリスを沸騰させる格好をした女性——篠ノ之束は目にも止まらぬ、投影型キーボードにスピードで打ち込んでいる。

「しまったあああ!!」

「どうしました? 束様」

黒の眼球に金の瞳、流れるような銀髪を持つ少女の名はクロエ・クロニクルは束の声叫び声に何事かと思い束の下に訪れる。

「もうすぐ、いつくんの誕生日なんだけど、束さんとしたことが何にも用意してないんだよね。 いやー、困った困った」

「では、可愛いモノや髪飾りなどいかがでしょう?」

「それはいつくんが女の子だったら行けたけど、いつくんは男の子だから駄目かな。 まあ、この束さんが作った性別転換薬『シンデレラタイム』があれば問題なだけだね。 じゃ、この薬とクーちゃんが言っていた物を挙げようかな」

「冗談でいったつもりなのですが…」

冗談交じりで言ったつもりが束特製トンデモ薬のせいで実行可能になりかけていることに冷汗を流す。

「じゃ、何あげればいいのさ。今のいつくんには束さんお手製のISを作っても、今のいつくんにはいらなだらうしさ」

「では、この前、見つけた機体から情報を見つけ出し、プレゼントするのはどうでしょう? 今のイチカ様には少しでも奥の手は多い方がよろしいでしょうから」

クロエがそう言うのと二人の背後に証明が付くと其処には大破した15M以上あるであろう、人型と思わしきロボットが転がっていた。

「海中に落っこちてたのだね。 確か『GX-9900 NT-002』だっけ? あれ、凄いやね、一撃でコロニーっていう巨大な物体を破壊しちゃうんだからね」

「はい。ですが、一歩間違えれば世界を壊滅させる事が可能です。現にあの映像では…」

「うんうん。クーちゃんの言いたいことは分かるよ」

二人はとある深海で見つけた機体に残ってた映像を見ている為、これが遭ったであろう所の結末を知っている。

「これを見る限り、こことは別の世界があるってことだよね」

「はい。大破したこの機体が証拠です」

「それにいつくんの友達かなあの子達？ 名前はいつて言ったけ？」

「腰の辺りまである髪を首の辺りで纏めている少女がティファ・アデール、不死鳥の様な仮面をした変態がコード・フェニックス、バランダを巻いた少年がラナロウ・シェイド、そして、この機体と同じ機体に乗る人がガロード・ランです」

「後はちーちゃんそっくりな子がマドカ・ギルオードだよ。じゃ、

ティーちゃんにコーくん、ラーくんそれにガーくんだね。 束さん

と仲良くなつてくれるかな？」

「昔の束様でしたら無理でしょうけど、今の束様でした可能です」

束が何故、直接見た事の無いガロード達の事を知っているのかというところ、IS学園のサーバーに登録されている個人情報を見た為である。天災の前ではIS学園のセキュリティは紙同然の様だ。

嘗ては認められた人間以外は名前は愚か、顔すら判別できず、『そこら辺に転がっている石と同じ』という認識をしていた束とは信じ難い変化である。

「ガーくんが乗っている機体もアレと同じだから、きつとあれも搭載されてるよね」

「恐らく、搭載されていると思われませんが使用条件が限られていますので取り外され、違う装備にされていると思われます」

「でもお、この映像を見る限り、また取り付けてるね。いつくんの事だから使える条件が整ったから取り付けてるのかな？」

「恐らく、あの機体に残されていたデータにあった、Gファルコンを使うと思われます」

「確かにアレなら、使えるけどお。破壊されたら終わりだから…。」

「そうか!!」

何か思いついたのか、束は手をポン、と叩く。

「頑張るいつくんに束さんからプレゼントだ！ まあ、今から作るの

はいつくんに直接は関係ないけど、間接的にはいつくんに助かるから
よしとしますか!!」

「お決まりになられたんですね。束様」

「これでいつくんも大助かりだよ。やっぱ束さんは天才だね」

束は大破した機体から得たデータを基にイチカへの誕生日プレゼントを作るのだった。

28話

週末にガロードの案内&シャルロットの買い物で外出する事になったイチカはガロードと一緒にシャルロットが指定した場所に向かっていった。

「何か悪いな、折角の休日だつていうのに俺の為に時間潰してさ」

「別にいいさ。時間があつたら修行修行か機体の整備しからないから」

「前から気になっていたんだけよ。イチカの言う、修行つてどんなんだ？ やっぱ滝行とか取っ組み合いとかするのさ？」

「ん、自主練なら腹筋、背筋、腕立て伏せ1000回を3セットは確実にするな」

「じゃ、師匠さんとの修行の時は？」

師匠ドモンとの修行について、興味津々に聞いてくるガロードに対し、イチカの顔色が徐々に悪くなっていく。

「あ、ああアレは只の修行なんかじゃね。キツイだとか厳しいだとかそんな次元の話じゃない。俺は修行中に何度も死にかけ、黄泉の国に足を運んだ。あの時、俺は戦場の恐怖とはまた違う恐怖を味わったぜ」

「わ、分かった。これ以上は聞かないから。な」

「ああ、そうしてくれるとありがたい」

普段、自分の事をあんまり、話さないイチカからの話に興味津々だったが、如何やら、過酷な修行時代はトラウマそのものになっているらしく、自分の興味本位でトラウマを抉る様な真似はやめようと思つたガロードだった。

「お、シャルロットだ……。どういう事だ？」

「ん？ 一体何があつた？」

イチカ達は待ち合わせの場所に付くと其処には総合接近格（トータル・アタック）と呼ばれる方法でチャラ男Aを汚物を見るよな目で腕をねじ曲げているシャルロットがいた。

「触らないでくれますか？ そのキツイ香水の匂いが移ると困るので。」

後、そのキモイ視線で見ないでくれますか?」

「て、てめえ、女性だからって良い気になるなよ!!」

混乱とシャルロットの罵言に腹が立ったチャラ男Bは多少、手荒な真似をしてを構わないと判断し、行動に移ろうとした時、首筋に鈍い衝撃が加わると視界がブラックアウトする。

「グヘエ」

「目の前の敵に集中し過ぎだな」

「イチカっ!」

チャラ男Bの首筋に手刀を叩きこみ、気絶させたイチカの姿は魔の手から救ってくれた王子様の様にシャルロットには見えた。

ぼーっとイチカに見惚れていたシャルロットはまだ掴んだままだったチャラ男Aの肩を更に捻じる。

「うっぎやあああああああ!!」

チャラ男Aの肩から聞こえてはいけけない音が聞こえると男の叫びが朝の駅前に木霊した。

「女性に対する強引な勧誘は条例違反なのよねえ。はーい、こっちに来てね。じゃ、おつかれちゃん」

異様に渋い声と鋭さを合わせ持つ中年巡査は二人のチャラ男を派出所に連れて行く。

「やたら特徴的な声のおっさんだったな」

「そうだな。どっかの世界で英雄に強い憧れとか持っていていそうだな」

「後、どこかの国の皇帝陛下とかやっついていそうだね」

「仕舞いには人造人間とかやっついていそうだ」

イチカ達は先程の巡査の声から好き勝手な妄想を繰り広げる。

『愚かな者には罰を与えねばならんな』

『な、なにを!?』

『我らは神の代理人、神罰の地上代行者

我らが使命は我が神に逆らう愚者を

その肉の最後の一片までも絶滅すること

———エイイイイイメン!!』

イチカ達は派出所から悲鳴を無視し、買い物始めるのだった。

「今回はガロードの案内とシャルロットの買い物が目的なんだが、ガロードに案内するって言ってもレゾナンスで大抵のものは買えるから案内する必要性って無いんだよね」

「なら、ここの事を言っておけば余計な時間過ぎさなくてよかつたんじゃないか?」

「確かにそうだが俺も欲しい物があるから、この機会に買っておこうと思つてな」

「因みにイチカは何を買うの?」

ガロードの言った通り、レゾナンスの事を言い自由に過ごすことも出来るが何時、戦闘が起きるか分からない故に整備室に籠り機体を弄るか修行に時間を費やすかの二択しかなく、偶にはガス抜きをする事も必要だと考えたのだ。

「医療系の本と漫画とライトノベルと服かな」

「医療つて…」

「へえー、今度、俺にも漫画とか貸してくれよ」

「いいぜ。今、俺のオススメはHELLS〇〇〇と名探偵〇ナンがいぞ。個人的には空の〇界がオススメだ」

「へえー、イチカにそういう趣味があつたんだ」

マドカから「教養を深める事で新たな発見と発想が出来る」と言われ、イチカもその考えに同意し、その話を偶然聞いていた簪からオススメの漫画、アニメ、小説等を借りている。

「最初に何を見るんだ？」

「じゃ、あそこ見ようよ」

「え？」

イチカ達はシャルロットが指を指した方向を見ると其処は女性用の下着売り場があり、イチカ達はどう反応すればいいのか分からず、只、困惑するのであった。

「流石にあそこを一緒に見る勇氣はないわー」

「悪いが見るなら一人で見てくれ。俺達は此処で待つから」

「ご、ごめん！ 間違い！ 違うの！ 違うから！」

「お、おう……」

頷く二人だが、イチカは先程、シャルロットが指を指した方をもう一度見るとそこに見知った顔がある事に気づく。

「あれは……？ おーい、蘭！」

真剣な顔で何かに悩んでいた蘭はイチカの声が聞こえるとビクンツと背筋を伸ばす。

「え?! い、イチカさん!？」

蘭は手に持っていた下着を棚に戻す。

イチカの誕生日パーティが自分の家で行われる事になった時、何も言わなかった兄に正拳突きを一発お見舞いし、イチカの誕生日プレゼントを見るついでに勝負下着を購入しようと思っていた時にイチカと遭遇したのだ。

下着を選んでいるところを見られたのでは？と思うと羞恥で顔が赤くなるが、羞恥心を頭の中から薙ぎ払い、蘭はイチカのもとに向かう。

「学園祭ぶりですね。イチカさん」

「そうだな。今日は一人？」

「あつ、はい。ちよつと買い物に」

「ああ、蘭に二人の事を紹介しないとな」

イチカは蘭との会話を一端打ち切り、ガロードとシャルロットの紹介し、始める。

「こつちがシャルロット。クラスメイトで、フランスの代表候補生。

あつちがガロード。同じくクラスメイトで機械に強い奴だ」

「シャルロット・デユノアです。よろしく」

「俺はガロード・ラン。よろしくな」

「ご、五反田蘭です。よ、よろしくお願いします」

お互いに挨拶をする三人。

「この前の蘭の兄の弾と一緒に学園祭に来てただけど、あのゴタゴタで紹介できなかったんだよな」

「へえー、そうなんだ」

「そうだ！蘭も一緒に買い物に行かないか？」

「ええ!? いいんですか!!」

歓喜の声を上げる蘭。

「さつき一人の女性がナンパされてキレた女性は腕をねじ曲げて撃退していたんだよ。蘭はそこまで強くないからもし、何かあったら困るから一緒に行こうぜ」

「ああ、確かに一般人が大の男を倒す事なんかできないよな」

「そうなんですか。じゃ、お願いします」

つい先ほどの光景を思い出しながら言う二人にシャルロットはソツと目を背けるのだった。

イチカ達は買い物始めてから色々な店に行き買い物を楽しんでいた。

そしてイチカ達は時計店でイチカに合う時計を見ていた。

「気に入ったのあった？」

「んー、時計と違って基本、エリスに選んでもらっていたからな。自分に合うのがどんなのか分からないんだよな」

「イチカ。そのエリスって誰なの？」

「ラナロウ兄と同じ俺の家族でな知り合いと似た声をしているから暫し、ネタにされるな」

「へえー、そうなんだ」

オードリーと声と同じことでよくネタにされるがイチカもバナージと声が似ていることで弄られ、色々な意味でバナージ達と似たような存在というのが周りの認識である。

「そういえば、ガロードさんとどういった感じで出会ったんですか？」
「どんな感じって言われてもな。(A・Wの)海を漂っていたら、密漁グループと一悶着起きていてな、その時、俺がガロードを助けたのが始まりだよな」

「そうだな。海を渡ってる時にイルカの密漁グループの話聞いてな、その話を聞いたらいってもたつてもいらなくてな、ちよつとやり合ってた時に出会ったな」

「中々、刺激的な出会いだね…。」

苦笑いするシャルロットに対し、イチカは時計の品定めをしていた。

「あんまり、高いの付けるの嫌だから、お手頃なこの時計にするかな。すいませーん」

イチカは店員を呼び出すと一つの時計を指差す。

「この時計をください」

「ありがとうございます」

イチカはユニコーンの絵柄が彫られた白を基調とした腕時計を購入する。

その後、イチカ達は昼飯を食べると蘭と別れ、イチカ達はIS学園に戻るのだった。

帰還後、簪と遭遇したイチカ達だが、簪はイチカが持っていた本を見るとやや興奮意味に語り出し、自室に戻るまでに一時間以上要した。

そんな、事が起きている中整備室では作業着姿のマドカが工具を片手に作業していた。

「ふう、外装は大方出来たな」

マドカは顔に付いたオイルを拭う。

其処にはイチカから譲り受けたGNアーマーがあるのだがその外観はイチカが使用していた時とは異なる部分があった。

一つ目に格闘仕様だったモノが射撃仕様に変わり、二つ目に外付けの大型コンテナが取り付けられている。

「後はコード・フェニックスが弾薬を持ってくれば完成だ。にしても疲れたなー。今日は兄さんに頑張った褒美が欲しいな特に兄さんとの子供が……。ニュータイプの子さんは何で他の事は感じる事が出来て、恋愛関係は駄目なんだ？」

イチカのニュータイプ性に疑惑を持つマドカ。

「まあ、そんな事どうでもいいか。そうだ！褒美として、今日は兄さんと床を共にしよう。それがいい、そうしよう」

そしてその日の夜、実行に移したマドカの叫び声がIS学園に轟き、後に出来たIS学園七不思議『夜中に聞こえる女性の叫び声』がマドカの事を示すのかは不明である。

29話

「せーのっ」

『イチカ、誕生日おめでとう！』

シャルロットの合図にはあんぱあん、とクラッカーの音が鳴り響く。

「おう。皆、ありがとう」

時刻は夕方五時を過ぎ、予定通り、五反田食堂でイチカの誕生日パーティーが行われたのだが、大きな誤算が一つあった。

「予定を大幅に超える人数が来たな……」

今回の誕生日パーティーに参加したメンバーを整理しよう。

箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪の代表候補生チーム。

弾、蘭の五反田兄妹。

楯無、本音、虚、黛の生徒会メンバー＋α。

ラナロウ、ガロード、ティファ、コード・フェニックス、マドカのガンダムチーム。

以上のメンバーが参加しているのだが、この大人数の為、五反田食堂は貸し切りにしてパーティーが行われている。

「あ、あのイチカさん！ ケーキ焼いてきましたから！」

「サンキュ」

ココアベースのスポンジにチョコとクリームでデコレーションされたケーキを一口、口に運ぶ。

「美味しいな。蘭一人で作ったのか？」

「は、はい！ 皆さんの分ありますから」

『じゃ、いただきます』

蘭は人数分のケーキを取り出し、配るとケーキを一口サイズにし、口の中に運ぶ。

「おお、美味しいな」

「このチョコの風味がいいな」

「ガロードはチョコケーキが好きなんですか？」

「そうだけど？」

「ガロードはチョコケーキが好き…。メモメモ」

「うつますぎるう!!」

食べた人から称賛が送られ、作った本人である蘭も美味しいと言われ嬉しいのだろう、蘭から笑みがこぼれる。

「イチカ、ラーメンが出来たわよ」

「お、おう。甘い物食った後に脂っこいのはな…」

「大丈夫。さっぱりして美味しいから、温かいうちに食べなさいよ」

「じゃ、遠慮なく」

鈴音のラーメンはスープが麺に絡み、海鮮メインのだし汁でさっぱりとしていた。

「イチカさん！お、お誕生日おめでとうございます。それで、こちらを」

「何だこの箱」

「ぶ、プレゼントですわ」

「へえ」

しっかりと梱包された紙袋を取り除き、フタを開ける。

「おお、ティーセットだ」

「これはイギリス王室御用達のメーカー『エインズレイ』の高級セットです。それと、私の普段愛飲している一等級茶葉もお付けしますわ」

「サンキュ。大切に使うわ」

「そ、それと今度お時間があ——」

「イチカくん、ちゃんと食べてる？」

背後から現れた楯無はイチカに抱き付こうとする。

「あぁー、手が滑ったー（棒）」

「!？」

「おっと、あぶね」

殺意の籠った棒読みと共に一つのフォークが飛来し、楯無は寸前で後退し、避けるがイチカは人差し指と中指に挟み止める。

「ゴメン、兄さん。蠅楯無が周りにいたから撃退しようとしたんだ」

「確かにフォークに蠅が刺さっているが……もう少し、穏便に出来なかつたのか？」

「今度からそうしよう」

ちよつとした超人的な光景に周りの人は開いた口が塞がらなかつた。

フォークに蠅が刺さることも然り、フォークを一切見ずに止めたイチカの超人ぷつりに一同唾然とした（一部を除く）。

「あ、そういえば、ラウラが後で外に来てほしいだって」

「じゃ、今から行くわ」

最初に我に返ったシャルロットはラウラからの伝言を思い出し、イチカに伝える。

外に向かつたイチカを仁王立ちしたラウラが迎え入れた。

「ようやく、来たか」

「待たして悪かつたな」

「い、い、イチカ！」

「うわあっ！」

ラウラの声と同時に一つのナイフがイチカの首元に当たりそうになるが、イチカは体を半回転させ、避ける。

よく見るとナイフは先程までイチカの首があつた所の直前で止まっていた。

「こ、このナイフをやろう！」

「はっ！」

「誕生日プレゼントだ！私が実践で使っていた物だ。切断力に長け、耐久性も高い。受け取れ！」

「お、おう」

ナイフと付属の鞘を渡されるイチカだが、どんな渡し方だよ、と一

歩間違えれば警察沙汰になっていたかもしれない先のラウラの行動にツツコミを入れる。

「ありがとうな、ラウラ」

「!!」

ラウラは耳まだでカーツと赤くなるとフンつと鼻を鳴らし、その場から立ち去りイチカも食堂に戻ろうとした時、弾と虚が連絡先を交換しているのが目に入った。

食堂に戻るとイチカは箒から、着物を貰い、簪からはアニメのDV Dや原作などを貰った。

「お、よかった。まだ売り切れてない」

五反田食堂から最寄りの自動販売機で足りなくなった飲み物を補給するために20本程買っていた。

イチカは飲みそうな物を買い、数が数なのでビニール袋に入れ、戻ろうとした時、背後に突如、現れた気配に振り向くと其処には見知った顔があった。

「久しぶりだな、イチカ・ギルオード」

「コード・アメリカス…！」

イチカは目の前に現れた宿敵といっても過言ではない存在に警戒心を最大限まで高め、左腕を部分展開し、左腕にあった白いシールドに内蔵されている二挺のビームマシンガンを向ける。

「何の用だ…。」

「今日は貴様に用事があつてな。我、自ら赴いたわけだ」

「俺の誕生日に参加しに来たわけでも、エリスを返しに来たわけでもないだろ」

「半分正解、半分不正解と言った所だな。我は貴様にある事を伝えに来たのだよ」

「なんだと・・・」

イチカはコード・アメリカスの発言に眉を顰める。

「余興として本日未明に大量の敵をそちらに送ることにした。場所は太平洋南部だ」

「俺達を惑わせる作戦か、弾薬や体力を消費させる作戦か・・・どちらにせよ、何故、敵である俺に教える」

「余興と言っただろう。平和などに浸かりきって我との戦いの時に腑抜けた貴様を倒しても意味がなからう。信じるかどうかは貴様達次第だ」

そう言うコード・アメリカスは悠然とその場から消えていった。

「アプロディア、今の話の皆に伝えてくれ」

『その必要はありません。先程の会話はジェネレーション部隊のみリアルタイムで流していました』

「真偽を確かめるために本日未明に日本海南部に行くぞ。何もなければいいんだがな・・・」

コード・アメリカスの会話を思い出しながら、イチカは五反田食堂に戻り、先程の会話の事を一端忘れ、一時の平和を満喫するのだった。

誕生日パーティーは終わり、イチカ達はコード・アメリカスの真偽を確かめるために沿岸部に居た。

「何かあつてからじや、遅いからな早く確かめに行こうぜ」

「ああ、そうだな」

「イチカ。その機体を使った実戦は初めてだ。無理をするなよ」

「問題ないよ、ラナロウ兄。そっちこそツールギス治ったからって無理しないでよね」

「兄さんだけは私が絶対護る!!」

「俺以外も護つて欲しいんですがね・・・」

イチカは一端話を切り上げる。

「行くぞ！皆!!」

『おう!!』

イチカ達は各々の愛機を掲げる。

「マドカ・ギルオード、ケルデイル：：： 目標狙い撃つ！」

「ラナロウ・シェイド、ツールギスⅢ：：： 行くぜえ！」

「ガロード・ラン、GX：：： 行くぜ！」

「コード・フェニックス、マスターフェニックス：：： 行くぞ！」

「イチカ・ギルオード、ユニコーンガンダム：：： 飛翔する!!」

愛機を身に纏ったイチカ達は五つの軌跡を描き、空彼方へと飛び立って行った。

30話

イチカ達はコード・アメリアスの真偽を確かめる為、指定されたポイントで待機していた。

「ここが指定されたポイントだな」

「今の所、問題は無いな」

「だが、まだ指定した時間を過ぎてない。気を引き締めておけよ」

「指定時間まで後、5... 4... 3... 2... 1... 0...」

指定された時間になり、警戒するイチカ達に接近する機影が確認された。

『接近する機影のデータ照合確認、南西よりガディール、バリエント南東からジェガン、リゼルを確認。敵総数100機！』

「ダニイ!？」

「マジかよ...」

「各機、敵の殲滅行動に入れ！敵の増援があるかもしれん。注意を怠るな！」

『了解！』

「開幕早々だが、デカいのをぶっ放してやるぜ！」

コード・フェニックスはクロスバインダーソードを砲身し、ソード・メガビームキャノンを放つと射線上で小さな爆発が立て続けに起こる。

『ジェガン2、リゼル3機撃破。リゼルから高エネルギーを確認』

二機のリゼルがイチカに向け、高出力ビーム兵器である、メガ・ビーム・ランチャーを放つがユニコーンに装備されているシールドによって防がれる。

このシールドにはサイコフレームとIフィールド発生用ジェネレーターが内蔵され、ビームには高い耐性があり、イチカはIフィールドを発生させ、先のリゼルの攻撃を防いだのだ。

「ビーム・ガトリングで薙ぎ払う！」

イチカはシールドを前方に向けてるとシールド裏にあるビーム・ガトリングガンバリエントに向けて連射するとそのまま左腕を移動さ

せ、周囲の機体を撃破する。

生き残った機体は素早く陣形を組み直し、ビームライフル、バズーカ、ミサイルを放ち始める。

「行け！ライフルビット、シールドビット」

「しゃんなるうー！」

マドカはシールドビットで味方を護りながら、ライフルビットで敵を撃ち落とし、ビームライフルで撃ち落としていく。

「落ちろお!!」

「オラオラオラッ！」

ラナロウトールギスⅢの殺人的な加速を活かし、敵を翻弄しながらメガキャノンで撃ち落としていき、コード・フェニックスはクロスバインダーソードで敵を切り裂いている。

流星は歴戦の戦士というべきか、モノの数分で100機いた敵の大半を倒していた。

「数の割には大したことないな」

「気をつける……。嫌な予感がする」

『敵増援確認。先程と同じくガディール、ジエガンを確認。その後方に大型の機影複数確認。アグリツサ、パトゥーリアです』

「フラグ建てんなよ！ガロード」

「俺のせいだよ!?!」

「何！グッ」

ビーム・マグナムでガディールとジエガンを撃ち落としているとアグリツサがユニコーンに衝突し、そのまま近くの無人島に不時着するとアグリツサは折りたたまれていた6本の脚を展開し、ユニコーンを覆うように着陸すると脚部から発生したプラズマフィールドがイチカを襲う。

「ウアアアアアッア!!」

「兄さん！チイ」

「イチカ！クソツ」

『後方より、さらに機影接近。量産型レガンダム5機こちらに接近しています』

ガロードとマドカはイチカの救出に向かおうとするが、ディール、ジェガンが行く手を阻み、新たな増援に苦戦し始めるガロード達。

「このままじゃ…アアアアツ!!!」

「吹き飛びやがれ！」

コード・フェニックスはクロスバインダーソードをブーメランの様に投げ、アグリツサに突き刺さり、AEUイナクトカスタムがアグリツサから離脱する。

「俺にまだ…。やらなちやいけない事が…。あるんだああああ!!」

隙だらけのイチカに向け、パトウーリアは夥しい数の有線ビーム砲を放つ。

しかし、それは全て外れた。ユニコーンを中心とする同心円を描くかのように全てのビームが屈折したのだった

「だから…。俺に力を貸せ！ガンダム」

腕部、脚部、胸部。継ぎ目が割れ、先ほどまで少ししか見えなかった赤い色の光が露出する。

全身から赤い光。続いて胸部、フロントアーマーも展開し、ユニコーンの身体が一周り大きくなる。

ビームサーベルのグリップが背中から肩へ、そして頭部が特徴的な変化を始めた

頭部に屹立していた一本の角。瞳を覆うかのようなバイザー。それが変化を始めたのだ。

バイザーは収納され二つの瞳に。角が割れてV状に完全に開きV字アンテナへと変わりマスクも変形し、バイザーだったカメラから二つの緑色の目を持ったツインアイへと変わった。

「見ろ。ユニコーンの姿が変わったぞ」

「バンシイと瓜二つだな…」

「ウオオオオオ！」

ユニコーンの両腕のサーベルをホルダーごと、展開するとで、ビーム・トンファアとして使用し、AEUイナクトカスタムのコクピット部を突き刺すとそのままジエガンの居る方に投げつける。

量産型レガンダムはオポジションとしてフィン・ファンネルとNT以外でも使えるインコムのもどちらかを選択することが出来、現れた量産型レガンダムは5機の内3機はフィン・ファンネルを装備していた。量産型レガンダムはイチカを危険と判断したのか、フィン・ファンネルを射出し、攻撃する。

「やれるか… いや、やってみせる！」

ユニコーンから何が発せられるとフィン・ファンネルは動きを止めると方向を変え、量産型レガンダムを含め複数の敵を襲う。

「どういう事だ…。あのビットは自分の機体を攻撃してるんだ？」

「恐らく、サイコミュ・ジャックだと思う…」

「サイコミュ・ジャック？」

聞きなれない言葉に首を傾げるガロード。

「サイコミュ・ジャックとは、敵のファンネルやビットなどサイコミュ兵装を支配し、制御下に置くといものだ」

「なんだよそれ… チートだろ…。」

「確かに、だが、NT-Dの発動自体危険なものだ」

「どういうことだ？」

NT-Dに詳しくないガロードにマドカはNT-Dについて教える。

「NT-Dとは、ニュータイプ・デストロイヤーシステムの略称だ。名前だけでどういうモノか分かるはずだ」

「まさか… 対NT用だったのか…。」

「そうだ。NT-D発動時に一角獣からガンダムに変形することでその真価を発揮する。ユニコーンにはインテンション・オートマッチクという思考のみで機体制御可能としてる」

「なんだよそれ… 化け物じゃないか…。」

「ユニコーンガンダムのパイロット、バナージ・リンクスも最初はユニ

コーンに弄ばれていたが人として、NTとして成長する事でアイツはユニコーンを乗りこなしていくようになった」

「機体説明も大事だが、そろそろ戦線に復帰してくれねえかな？」

「あ、ごめん」

マドカ達は止めてた腕を動かし、敵を撃破し始める。

「ガロード」

一人、IS学園の自室で帰りを待つティファ。

「ガロード、皆。無事に帰って来て…」

彼女に戦う力は無い、大切な人達が無事に帰ってくることを祈る事しか彼女にはない。

祈っていた彼女の前に一つの光球が降りてくる。

『やあ、久しぶりだね。ティファ』

「D・O・M・E…」

『ガロードとは仲良くしているかい？』

「はい。ですが彼らは皆を護る為に戦いに行っています」

『哀しいことだね。人は幾度となく戦いを経験し、それがどれだけ無意味で愚かな事か理解していない。いや、彼らはそれを理解している。ただ、戦いを止めるために力を使う。本来なら、その様な手を使わずに止めたいだろうに』

ティファはここにD・O・M・Eがいる事に驚いたが、ティファはD・O・M・Eに問う。

「教えてくださいD・O・M・E。私には戦う力はありません。ですが、ガロードの力になりたいんです！」

『…。その方法が君の願いでもある、普通の少女として生きるを辞めなければいけなくなってもかい？』

「私はガロードと共に居たい。ガロードを…皆を失いたくないんです!!その為なら、もう一度この力を使う覚悟は出来ています」

『強い子になったねティファ。なら、君がガロードの為に最初にその力を使った時と同じ事をすればいい』

『ですが、アレはこの世界に存在しないはずです…』

D・O・M・Eの真意を理解したティファだがその欠点ともいえる事に気づいている。存在しないのだ、この世界にあの施設は。

『本来ならこの世界に存在しない。だけど、必然かそれとも偶然か一人の人物が作ってしまったんだ。だから、アレはこの世界にあるんだよティファ』

「分かりました。その前に一ついいですか？なぜ貴方はここに居るのですか？」

『今の僕は謂わば意識体。何処にでもいて何処にもいない、と言っても今回は度重なる空間に対する負荷とあの施設という触媒があったからこそここに來ることが出来たんだ』

「空間の負荷？」

『月の光を帯びた蝶が違う世界に來たことで生まれた歪みだよ。これによって多くの人が世界を彷徨った。イチカやマドカもその被害者だ』

光球——D・O・M・Eは少しづつ、ティファの手から離れていく。

『この戦いが終わることによって君達に幸福な未来が訪れる事を願っている』

「D・O・M・E、私達は私達の意思で歩んでいきます」

『その心の強さと優しさを忘れなければ未来を変えることが出来る。僕はいつも君たちを見守っているよ』

D・O・M・Eはそのまま窓をすり抜け大空へと消えていった。

「皆、私の声を聞いてツ!!」

「なんだ？今は」

「声が聞こえた……」

「ティファだ……。ティファの声だ」

イチカ達の頭に突如、ティファの声が響く。

「ガロードを援護しろだと……」

「だが、アレは……マイクロウエーブ送信施設はこの世界に存在しないぞー！」

「分かった……。俺、ティファを信じるよ」

ガロードは戦線から少し距離を置くとその場に停滞すると 背中に装備された四枚のリフレクターが開きX字になり、そして砲身が出てきて、両手でそれを構える。

「全機ガロードの援護しろ！ガロードに指一本近づけさせな!!」

イチカはガディールの頭部を潰しながらマド力達に呼びかける。

『了解！』

場所は変わって暗い一室で一人の女性がいた。

「ふいー、やっと完成したよ」

「お疲れ様です。束様」

「いやあー、思ったより完成するのに時間が掛かったなー」

「仕方ありません。束様でも知らない単語に悪戦苦闘して、完成させたのですから」

「うんうん、やっぱ束さん凄いやねー！だって、このマイクロウエーブ送信施設を作ったんだからさ！使いやすい様に小型化したら束さん

のラボが施設そのものになっちゃったよ！でも束さんでも理解できないことがあるんだよねー」

流石は天災というべきか、モノの数日であの施設作った挙句、小型化したのだからその内MSとかも作りそうな勢いである。

だが、そんな束でも理解できていない事があった。

「にしても、このNTニュータイプってなんだろう？解読しようとしても出来ないし、そのせいでいつくんの誕生日に間に合わないし、最悪だよ！！束さんは激おこなのだ！！気になって夜も寝れないよ！いつくんかガークン辺りに聞けばわかるのかな？」

「知っていたとしても、教えてくれるとは思えませんね」

「んー、無理にいつくんに聞くのもなんだしなー。お？およよ!?ど、どういことなの?!?!」

「どうしました束様？」

急にどよめき始める束。

「システムが！マイクロウェーブ送信施設が勝手に動き出した!?しかも、気になっていたNTによって動かされてるよ!!しかも、登録してる機体がガークンのだし!!」

「とりあえず、システムの停止を！」

「うわああ、束さんのコマンドを受け付けないよおー！止まらない、止まらないよー!!誰か助けてー!!」

「マイクロウェーブ送信施設が無いのにティファの奴どういうつもりだ？」

「分からない。だが、ティファもガロードを危険な目に合わせるような真似はしないでだろう。何か確信があつての行動だと思う」

「…… マイクロウェーブ、来るっ!!」

「全機ガロードから離れる！マイクロウェーブの衝撃に巻き込まれる

ぞ!!」

月から照準用ガイドレーザーを胸で受けるとすぐにスーパーマイク로우エーブが照射され、リフレクターが輝き始め、エネルギーが溜まっていく。

「サテライトキャノン!! 行けエエエエエエエツ!!」
「うお! 眩し...」

コロニーを一基破壊する威力だけあり、先程まで居た敵の反応が次々と消えていく。

「まだまだッ!!」

ガロードはそのまま砲身をずらし、周りの敵を消滅させる。

サテライトキャノンのエネルギーが尽き、残りの敵はパトゥーリアと数機のみとなった。

「狙い撃つ!」

「ゼエアアア!!」

マドカは正確に敵を狙い撃ち、ラナロウが高速移動で敵を翻弄しながら、メガキャノンで倒していく。

パトゥーリアは夥しい数の有線ビーム砲を放つがイチカはシールドで防ぐとパトゥーリアの頭上に出ると背中 of ビームサーベルを回転させて投擲するとビーム砲を切り裂き、戻ってきたビームサーベルとビームトンファアを構え接近する。

「悲しみを生む権化なんか要らない!」

ビームサーベルとビームトンファアで切り裂き、ビームサーベルをパトゥーリアに刺し、ビームトンファアで切り上げる。

「過去の亡霊は暗黒の世界に帰れ!」

巨大化したビームトンファアで両断し、その場から離れるとパトゥーリアから小さい爆発が立て続けに起きると大きな爆発に飲み込まれ、部品や破片が海に起きる。

「これで終わりか...」

『敵反応全て消失。接近する敵影もありません。先程の部隊で最後の様です』

「終わった...」

イチカが安堵に包まれていると展開していたユニコーンの各部が収納され、割れていたV字アンテナは一本角に変わりり、緑色のツインカメラはバインザーに覆われ、元の大きさに戻る。

「ふうー、これで一安心だな」

「そうだな。あそこまでの機体を落としたのは久しぶりだ」

「兄さんはよく初めての機体であそこまで戦えると正直、思っていなかった」

「バナージの戦闘を近くで何度か見ていたし、シミレーションも何度やったからな」

「取り敢えず、帰ってシャワー浴びて、一眠りしたいぜ。夜戦は苦手なんでね」

「そうだな。取り敢えず、帰るか」

帰還しようとしていた時、ふっとイチカが振り返る。

「どうした、イチカ？」

「いや、誰かに見られている気がしたんだが……如何やら気のせいみたいだ」

「私は感じなかったが……兄さんに何か特別な思い入れの激しい奴か？」

「現状、俺に対してそう言う風に考えてるのはコード・アメリカスとエリス、後はお前だよ、マドカ」

「レーダーにも映ってないし、帰ろうぜ」

「そうだな」

イチカ達は機体のスラクターを吹かし、帰還するのだった。

イチカ達の全貌を目撃していた赤と紫の機体。

「いいのかい、兄さん？彼らと交戦しなくて」

「今はその時ではない。それに私達の目的は別にある」

「そうだったね。で、この映像はどうする？」

「一応、奴に渡しておくさ。こちらの信用を崩したくないのでね」

「そうだね。それも今のだけだね」

「では、私達も戻るとしよう」

赤い悪魔を思わせる翼を持った機体は蟹とヤドカリを合わせたような機体に腕を伸ばし、水上スキーの様な感じで移動した。

31話

コード・アメリアスの襲撃から帰還したイチカ達は明日行われるキャノンボール・ファストの最終チェックをしていた。

「Gファルコンは問題なしっ」と

「ガロードは問題なさそうだな。問題はラナロウ兄とコード・フェニックスの追加装備か」

「なんで俺まで参加するはめになっただ…。」

「知らん。データが欲しいって言ったIS委員会に言え」

本来なら、学生ではないコード・フェニックスは参加しなくていいのだが、コード・フェニックスの機体に興味を持ったIS委員会がコード・フェニックスの参加を要求し、IS学園はそれを了承したため、参加することになったのだ。

「トールギスⅢは外付けの追加バーニアと別のエネルギーを積んで、マスターフェニックスはクロスバインダーソードを二つにして、片方をエネルギー供給に回して、配置場所は片方は今まで道理でもう片方はバーニアに接続する形にするか」

「俺達の事を勧めてくれるのはあり難いがよ。イチカの方が疎かになっただらどうしようもねえだろ」

「フツ。俺のはもうすでに終わっているのさ」

「へえ。どんな感じになっただ？」

「まさか、ドダイだけってオチじゃないだろうな」

「まあ、これを見てから言えよ」

一夏はユニコーンを展開すると周りは驚愕する。

何故なら、その姿は今回の大会と場違いだからだ。

「おい待て。なんだそのフル装備」

「コード・フェニックスが持ってきた武器を詰めるだけ積んだらこうなった」

「お前は何処に戦争しに行く気だ？」

フルアーメント

『F A ユニコーンガンダムですね』

ユニコーンの両腕と背部の計3箇所のにシールドを増設し、ビー

ム・ガトリングガンを二基ワンセットで接続し、計6門装備。加えて背中に背負ったハイパー・バズーカ二基をプラットフォームに三連装ミサイルランチャーとグレネードランチャー、ハンドグレネードさらに増加した機体重量を取り回すため、94式ベースジャバーから流用したブースター・ロケットを増設している。

「なにそれえ怖い」

「お前のサテライトキャノンに比べたらまだマシだ」

「どつつちもどつつちだ。てかマドカは？」

「そう言えば見てないな。どk「兄さーん！」来たみたいだ」

ガロードはイチカのFAユニコーンを見て怖がるが、一夏もGXのサテライトキャノンと比べ、お互い様だと言うラナロウ。

そんな会話をしているとマドカが整備室に入ってくる。

「兄さん。私のも見てくれ」

「分かった。展開してみ」

マドカはイチカに言われた通り、展開すると先程と同じ様な表情をする一同。

「どうだ？私専用のGNアームズは」

「一言、言うんなら何処のデンドロビウムですか」

「左アームに大型GNミサイルポッドを二つに増設し、大型GNキャノン周りには大型コンテナが四つ取り付け、GNツインライフルを一つの砲身にする事で超遠距離攻撃も可能で、その火力はGNツインライフルの二倍以上だ。さしずめ、GNバスターライフルと言ったところだ。名づけてGNアームズTYPE—Mだ！」

『Mはマドカの頭文字からですね』

「何処に戦闘しに行くつもりだよ」

「お前が言うな」

マドカは自分一人でここまで改造したことを誇らしげに言うといチカは先程ラナロウが言った事と同じ事を言うコード・フェニックスがそれを咎める。

「まあ、妨害もありって書いてあったし、問題ないだろう」

「いや、確実にトラウマ植えつけるだろ。二人の装備は」

「え？」

「流石兄妹。考える事とやっていることが同じだぜ」

「まあ、特に問題なさそうだし、ラナロウ兄とコード・フェニックスの作業に取り掛かるか。張り切っていくぜ!!」

『オー!!』

「兄妹はやる事が同じだと、実感したガロード達はイチカの掛け声に答え、作業に取り掛かるのだった。

そして、キャノンボール・ファスト当日。

会場は超満員になり、空ではキャノンボール・ファスト開催の合図である、火花が鳴っている。

キャノンボール・ファストのプログラムは最初に二年、次に一年の専用機持ち、そして最後に一年の訓練機の順で行われ、最後に三年のエキシビジョン・レースが行われる。

そして、イチカは今回も五反田兄妹を招待している。

『みなさーん！準備は良いですかー？』

山田先生の若干のんびりとした声が響く。

全員、マーカーの誘導に従ってスタートラインに移動する。

参加者の専用機持ちの中で全身装甲の機体が注目を浴びているがその中でも約二機の姿はその視線は濃かった。

何故なら、妨害以上の過剰火力を積んでいるからである。

その二機というのはGNアームズ—TYPE Mとドッキングしたケルデイル。

フル装備にロケットエンジンの様なモノを積んでいるユニコーン。

専用機持ちの中で異質な存在になっていた。

『これより、一年生の専用機持ちのレースを開始します!!』

3..... 2..... 1..... バンツ!!

「行くぜー!」

「このレース私が一位だ！」

「負けられないぜ！」

ガンダムチームは開始と同時にスタートするが各自の機動性に専用機持ちは先頭に並ぶガンダムチームとの距離が広がっていく。

「ちよっ!!アンタ達どんだけの速度出してるのよ!?そんな速度出して何で空中分解しないのよ!!」

この程度の速度で空中分解するようであれば、戦闘関係なしに宇宙の藻屑と化しているだろう。

先頭はマドカ、ガロード、ラナロウ、コード・フェニックス、イチカの順でその後ろをセシリアと簪が僅差で争っていた。

「ええい、武器を詰め込み過ぎて機動性が…」

「このままだと追いつかれそうだな…GNツインライフル!!」

「!!うげえ!!」

マドカはクルリと旋回するとGNツインライフルを乱射する。

ガロード、ラナロウ、コード・フェニックスはその場で回避し、イチカはシールドに搭載されてるIフィールドで防ぎながら進むが、その後ろで悲鳴が聞こえるが、イチカは無視し、ビーム・ガトリングを連射する。

攻撃が激化し先頭が戦場と化していると

「容赦はせんぞ！」

先程のマドカの攻撃を潜り抜けたラウラが前に出て来るとシャルロットも後ろに並んで来るとそして、ラウラがレールカノンを放とうとした瞬間。

上空から降り注いだ閃光が、ラウラとシャルロットに直撃した。

上からの攻撃に、バランスを崩したラウラ達が落ちていくのを見つ、速度を緩めたイチカ達は襲撃者を見ると其処には左肩に百の文字がある金色に輝く機体——百式とそれに続く形で20機のネモとジムⅢが迫って来ていた。

『レースは中断。非戦闘員はシულターに非難せよ!所属不明機が接近、至急シულターに非難せよ!』

非常事態を知らせるアラームが会場に鳴り響いた。

「こうも連戦になるとは…。」

「もしかしたらそれが目的だった可能性もあるぜ」

「行けば阻止、行かなければ被害が出る。どちらを選ぶかは決まっているがな」

「じゃ、とつと終わらせようぜ」

「各機ラナロウ兄は非難してしている人の援護、マドカとコード・フェニックスは周囲に敵がいらないか探索、ガロードは箒達の援護、俺は此処で敵を殲滅する。アイツらなら何をやらかすか分からんからな」

場馴れした人の行動は早く、イチカ達は各自の役割が決まるとすぐさま行動を開始する。

「一夏！お前はどうするつもりだ」

「ここであの敵を殲滅する」

「なら、私も残るぞ一人より二人の方がいい」

「お前たちは非難し遅れた人がいないか、負傷者がいないか見回ってこい！これ位の敵どうという事は無い」

イチカはミサイルポットとビーム・マグナム放ち敵を撃破しながら言う。

「…これ以上イチカを困らせないで。イチカ、無事に帰ってきた…」

「俺は不可能を可能にする男だ。こんな所でやられるかよ」

イチカは空になったミサイルポッドを外し、ネモに向けて蹴ると頭部バルカンで怯んだネモを撃破していく。

イチカは簪たちが戦闘空域から離れるのを確認するとビーム・ジャベリンで迫りくるジムⅢを撃破して行く。

「ネモとかはどうにもなるが…!!」

頭の中で光が弾けるとイチカはその場から離れると巨大なビームが先程までイチカが居た所を通り過ぎる。

「あれはメガ・バズーカ・ランチャー…。あんなもん連射されたら、俺ならまだしも他の奴なら一溜りもないぞ」

イチカはメガ・バズーカ・ランチャーの破壊に取りかかろうとするが、ドダイ改に乗ったリック・ディアスに似た委託を持つブルーとグ

リーンの機体——ディジェが行く手を阻む。

「こんな所で足止めを喰らってる暇はないんだ！そこをどけえ!!」

イチカはビーム・マグナムとビームサーベルを構えながら、二機に立ち向かう。

マドカは効率を考え、二手に分けれ手行動し、別のアリーナに行くところにも複数のゲルググMを一掃し、ガーベラ・テトラと交戦している楯無が居た。

生き残った二機のゲルググMは左右から楯無を攻撃しようとするが、マドカはGNツインライフルで一機撃破するとそのままGNツインライフルをもう一機のゲルググMに叩きつけるとアリーナの壁に衝突し、爆発する。

「どうやら、苦戦しているようだな」

「あら、今のなら私だけでも如何にかなったわ」

「強がり言う。先の行動に焦っていた奴が何を言うか」

「あ、焦ってないわよ!!」

マドカの言葉に動揺する楯無にガーベラ・テトラはビームサーベルを二つ構えると突進してくる。

「しまったー！」

「油断大敵だ!」

マドカはGNキャノンを一つの砲身にするとその砲身をガーベラ・テトラのコクピット部に突きつけたまま上昇する。

「シィィィズメエツ!!」

上昇したま身動きが取れないガーベラ・テトラにGNバスターライフルを発射し、コクピット部を融解させ、上半身と下半身に真っ二つにした。

その光景に乾いた笑みを浮かべ、敵で無かったことを心から喜んだ楯無と複数のIS操縦者がそこにいた。

32話

イチカは百式とディージェを相手にしている。イチカは百式が使うメガ・バズーカ・ランチャーを破壊しようとするが増設された武装による、機動性の低下と相手がアムロ・レイとクワトロ・バジーナのコピーニューロという事もあり、苦戦を強いられていた。

「ここでコピーニューロが出てくるとは…。」

『ジェネレーションシステムを掌握した彼女であればこの程度、造作もないと思われます』

イチカはビーム・マシンガンを連射しながら攻撃と回避をしているが突破の糸口が見えないでいた。

「二か八か… やつてみるか…。」

イチカはユニコーンに増設されたブースターを切り離し、二機目掛けて射出すると頭部バルカンを使いブースターの燃料に引火させ、爆発を起こす。

ディージェが煙の中から現れるとハイパー・バズーカを放ち、撃墜する。

生き残った百式がメガ・バズーカ・ランチャーを放つのを確認するとイチカは両腕のシールドからIフィールドを発生させ、ブースターを吹かすと百式に突撃し、ビーム・マグナムをコクピット部に放ち沈める。

「ハア… ハア…。これが対人戦じゃないだけマシか…。」

『付近のシユルターに敵が集中しています。ポイントはE-15です』

「… 了解」

イチカは残ったブースターを吹かし、目標地点に向かう。

イチカの向かおうとしているシユルターには多くの人がおり、その中には五反田兄妹の姿もあった。

「こ、怖いよ…。」

「大丈夫だ。ここには沢山のIS乗りとイチカがいるんだぜ？　すぐこの戦闘も終わるさ…」

泣きじやくる蘭を慰めていると何かがかくつ付く音が聞こえると数瞬後、連鎖的に爆発が起きるとシュルターの壁が融解し、一機の機体——ケンププファーがシュルターの中を見つめる。

目の前に武器を構え、こちらを見つめる姿にシュルターの中にいた人が小さな悲鳴を上げるとその場から少しでも離れようと後ずさりするが蘭は腰を抜かしたのかその場から動こうとしなかった。

「蘭！何をしてるんだ！？早くこっちに来るんだ！！」

「あ、脚に力が…。た、助けてお兄…！！」

弾は蘭を助けようとするが今、不審な行動をしたら蘭に危害が及ぶのではと考えてしまい、その場から動く事が出来ずにいた。

どうしようか悩んでいると白い円柱の様なモノがケンププファーに当たるとそのまま突き飛ばされていき赤い光線と爆発音が聞こえた後に白い一角獣を思わせる機体——ユニコーンが姿を表す。

「そのシュルターは危険だ。隣のシュルターならまだ余裕がある。そこに逃げるんだ」

「い、イチカさん…」

「た、助かったぜイチカ…。あのまま蘭がやられるかと思ったぜ…」

「蘭、それに弾も…。ここは危険だ。今すぐここから離れるんだ」

「だが、蘭の奴が腰を抜かしたみたいで動けないんだ…」

「なら、弾が運んでくれ。俺はお前たちを死守する」

イチカの言葉を聞くとシュルターの中に居た人が一斉に動き出し、イチカは両腕のビーム・ガトリングを全域にばら撒き敵をけん制する。

イチカは弾達の後について行くように行動する中、一機のガザCが弾達に接近しようとする。

「させるかあ!!」

イチカはガザCを蹴りそのまま地面に押し付けると脚部にあるミサイルポッドからミサイルを放ち、撃破する。

「い、イチカ右から敵が！」

「コイツらは守り通す!!」

イチカは弾達に近づく機体にミサイルを放ち、空になったポッドを敵に叩きつける。

「み、見えた!」

「あともう少し...」

イチカはミサイルを使い果たし、残る武器はハイパー・バズーカと背部と両腕のシールドのみとなった。

「無駄玉を使いすぎたか...」

イチカはビーム・マシンガンとビーム・マグナムを連射しながら弾達を護衛し、弾達がシェルターに入るのを確認する。

イチカはビーム・マグナムの弾をリロードしようとした時、弾が無いことに気づく。

「ビーム・マグナムの弾が...。ぐう?!」

イチカは弾切れを気にしていると機体に衝撃が加わり何事かと思い、周りを探してみると青と白の両肩にキャノンが搭載された機体が見つかった。

「確かあれは...。ガンダム6号機マドロック...。実物を見るのは初めてだな...」

イチカはマドロックの機体データに目を通したことはあるが動く実物を見たのはこれが初めてである。

マドロックはホバリングしながらイチカに接近、ビームライフルと大口径キャノン砲を屈指しイチカを襲う。

「ビームライフルはフィールドで何とかなるが...。そこ!」

イチカはビーム攻撃はフィールドで防ぎ、実弾系の攻撃はビームサーベルで斬り伏せ、前腕部ホルダーにあるビームサーベルをブーメランの様にしてマドロックに投げつけ、キャノン砲を破壊するとイチカは戻ってきたビームサーベルを掴み、X字に斬りつける。

「斬りこみが浅い...!? だけど、甘い!!」

マドロックのグレネードランチャーを放つがイチカはそれ躲すとマドロックの両足を切り落とし、マドロックを掴み巴投げをする。

巴投げをされたマドロックはその後、ユニコーンのバルカンによつ

てハチの巢にされ、撃墜される。

とある、病室に一人の男性がベッドの上で眠っていた。

「ん……。ここは……」

ベッドの上で眠っていた男性——マーク・ギルダーは眼を覚ますと身体にのしかかる重力に違和感を覚える。

「重力？いつ地上に降りた？私は……作戦行動中行方不明宇宙でMIAになったイチカの捜索をして……」

マークはおぼろげな記憶を呼び覚まし、何が起きたのか整理する。

イチカがMIAになり、イチカが生存しているというわずかな可能性に縋り捜索をしている最中、空間の歪みに一緒に行動していたエリスと一緒に飲み込まれ気が付けば、地上に降りており、乗っていたMSはパワードスーツの様に変わっており、訳が分かるぬまま目の前に現れた謎のガンダムと思わしき機体と交戦したところまでの記憶はあるがそれ以降の記憶は欠落が激しく何があったのか思い出せずにいた。

「どうやら、困っているみたいだね。マーク・ギルダー——」

「!? 貴様は……」

「君達との戦闘は望んでいない。ただ、何があったのか説明しに来ただけだ」

「私に貴様達を信用しろとでもいうのか……」

マークは目の前にいる二人をよく知っている。故に警戒は怠らずにいた。

「君が僕達に警戒するのは理解しているさ。でも、今回は協力する為にここに来たんだから、そう怖い顔をしないでよね」

「協力だと……」

「信用していないのならそれで構わないが私の話には耳を傾けて欲し

い。君に何が起きたのか簡潔に説明する。恐らく、イチカ・ギルオード達と同じく、空間の歪みに飲み込まれその直後、君たちはある人物と交戦した……。違うかね」

「ああ、そうだ。だが、誰と交戦したのか覚えていない」

「誰と交戦したのか。それは君達の敵である、コード・アメリカスと戦闘し、君たちは負け。『裏切りのコード』と呼ばれるモノ使われ奴の操り人形になった」

「そして君は彼等と交戦し、撃墜された君はこの病院に送られた。どうだい？少しは思い出したかい」

マークは二人の話を聞くと先程まで霞が掛かったかのように思い出せなかった記憶が蘇り始めた。

「ああ、全部思い出したぞ。なら、私のやることは決まっているな」

マークはベッドから降りるとそのまま病室から出ようとするが二人が声を掛ける。

「一体何処に行く気だい？」

「決まっている。イチカ達の所にだ。仲間同士の戦いが起きる可能性がある……。いや、確実に起きる。それを止めに行く。これ以上、仲間が傷つかない為に」

「その覚悟はいいが乗る機体はあるのか？」

「この世界に来た時に乗っていた「君が乗っていた機体はあの時の戦闘で大破、スクラップ状態だよ」クツ……「だけど、使える機体があるとしたら」どういう事だ……」

マークは思わぬ返答に聞き返す。

「使える機体が一機あるのさ。彼が整備した君の嘗ての搭乗機と似た機体がね」

「私達はその機体が何処にあるのか知っている」

「私に何をさせようというのだ……」

「何簡単だ。私達に君たちのやろうとしている事に協力させてほしい。只、それだけだ」

「何故、そんな事を」

「嘗ての罪滅ぼし。これじゃ納得しないかい」

マークは考え込む。この二人を信用して良いのかどうか。

「分かった。信用する事にしよう」

「交渉成立だ。私達に付いてきたまえ」

マークは二人の言う通り、ついに行った。

ある程度武装が軽くなったユニコーンは周辺の敵の索敵及び殲滅をしていた。

「どれだけの敵がここに攻め込んでいるんだ!? 確実に俺達だけで一個中隊分は破壊したぞ!!」

イチカは愚痴を言いながらも前線で戦っているとイチカの実在に気づいたマドカがイチカにプライベート通信を送る。

元がMSであるイチカ達の機体にISの様な通信は無く。この通信はISの通信を真似て作った物であり、その名の通りこの通信が使えるガンダムチーム以外解読も盗聴することも出来ない様になっている。

『兄さん！一度補給に戻ってくれ。この戦闘は長期戦になるのは間違いない。ここは私達で抑えるから』
「まだ行ける!!」

イチカは接近するリゼルを殴り、ビーム・トンファアードでコクピットを潰すと持っていたビーム・ライフルを拝借すると照射時間を延長しなぎ払うように撃ち出す高出力射撃モード通称『ギロチン・バースト』を使い敵をなぎ払う。

『なら、これを受け取ってくれ。兄さん』

GNアームズから筒状のものが射出されると、途中で分解し、中から飛び出た二つをキャッチする。

「これは・・・ビーム・マグナムのEエネルギーパックか」

『このTYPE-Mは後方支援だけではなく、前線での補給を可能にしたのだから。これで補給に掛かる時間の短縮が出来るわけだ』

「確かに……。そこまで考えているとは……」

『兄さんをアシストするのもいいが私は兄さんにせmへプツツ』

何やら不穏な事を言いだしそうなマドカの通信を切り、戦いに専念する。

ガザCやバウがミサイルやビームで攻撃するがイチカはビーム・ガトリングでミサイルを撃ち落とし、迫りくるビームを避け、ギロチン・バーストで敵を撃破する。

『一機こちらに接近。攻撃来ます』

「!?」

イチカはアプロディアの警告を聞き、回避行動を取るが青色に光る弾丸はイチカを追尾し、ビーム・ライフルに着弾すると同時にイチカの頭で光が弾けるとビーム・ライフルを放り投げると着弾した弾は閃光を放ち、爆発する。

「見つけたぞ!!」

「この感じ……エリス!!」

「今日こそ、貴様を倒す!!」

「チィ……」

白と黒の二つの可能性の獣が今、衝突する。

「敵が多いイ!?!」

「泣き言を言うなら撤退してもかまわない……ぜえ!!」

高官や企業のお偉いさんが非難したシユルターにガロードと箒達がいいた。

ガロードは箒達の護衛と監視をしていると箒達に対し、通信が入りその内容は『高官や企業のお偉いがいるシユルターの護衛及び死守』だった。

箒達は最初、この任務を拒否したがIS委員会直々の命であり、拒

んだ場合、箒は専用機の政府への譲渡並びに監視、セシリア達国家代表候補生の専用機の返還と国家代表候補生の権利及び待遇の白紙という脅迫付である。

それにより、箒達は半ば強制的にシユルターの護衛に当たっている。

「にしても補給位受けたいな…。」

「この程度で泣き言？これだから男s——」

女尊男卑に染まったラファール・リヴァイブに乗っていた女性がガロードの愚痴を聞きとり、侮辱しようしようとしていた時、一つの極光が女性を呑み込み、骨の一つも残さずに消滅させた。

「！！！！」

「なんて威力だ…。」

箒達は先の光景に言葉が出ず、身体中を恐怖が支配する。それは原始的で誰もが恐れているモノ『死』そのものだ。

「う、うああああああ！！！」

「ばか!?今、逃げたら死ぬぞ!!」

もう一人のラファール・リヴァイブに乗っていた女性が余りの恐怖に逃げだそうとした瞬間、先程と同じ極光が女性を飲み込んだ。

「そ、そんな…。ISの絶対防御を貫通した…。それも一度までもならず二度までも…。」

「あんな火力…。にどう立ち向かえって言うのよ…。」

「逃げるんだ…。ここから早く、逃げるんだ…。あんな攻撃に…勝てるはずがない…。」

「だが、ここで逃げたらここだけではなく市街にも被害が出るのだぞ!!」

「でも、どうやって立ち向かうの!!」

「何とかするしかない…。けど、どうしたら…。」

怖気始める箒、鈴音、セシリアに対し、戦意を削がれていないラウラは立ち向かうよう言うがシャルロットと簪はどうするばいいのかわからずにいた。敵の形状は大きな球体にモノアイの頬に当たる部分にパイプの様なモノが左右に付き機体中央に当たる部分には巨大

な砲門があった。

「やるしかないか…。」

「何をやる気だ？」

「あの敵をぶっ倒す」

「だけど、どうするの？ 作戦は？ 武器は？ 何も考えが無いわけじゃないよね…。」

「GXの切り札を使う」

そう言うとガロードはGXのサテライトシステムを起動させると背中に装備された四枚のリフレクターが開きX字になり、そして砲身が出てきて、両手でそれを構える。

「お前らは此処から離れる。マイクロウエーブの被害を受けるぞ！」

「そんな事はどうでもいい!!そこで立ち止まっていたら狙い撃ちにされるぞ！」

「どつちにしろ、あいつを倒さないと同じだろ」

「…ガロード」

イチカ達の調べによつて分かった事なのだが、このマイクロウエーブ送信施設は月ではなく別の場所にあるらしく、成層圏の近くで停滞しているとの事だ。

よつて、サテライトキャノンに必要なマイクロウエーブは月が出ている時限定ではなくても撃てるのだ。

「…マイクロウエーブ、来るっ!!」

「うおお!?!」

照準用ガイドレーザーを胸で受けるとすぐにスーパーマイクロウエーブが照射され、リフレクターが輝き始め、エネルギーが溜まっていき、照射された時の衝撃波でガロードの付近にいた筈達数名が後方に少し、飛ばされる。

「サテライトキャノン!! 行けエエエエエエエツ!!」

余りの眩しさに直視することが出来ずにいると敵もメガ粒子砲を放ち、相殺し合おうがガロードのサテライトキャノンの方が押し返し始める。

「ウオオオオオオ!!」

サテライトキャノンのエネルギーが尽きるまで撃ち続け撃破すると二機ガロード達に接近する機影を確認した。

弾薬もエネルギーも残り僅かのGファルコンをパージし、ビーム・ライフルを構える。

「増援か…。」

「ガロード！大丈夫か!!」

「マドカ！それにラナロウか！ふう… 吃驚させやがるぜ…。そっちの首尾はどうだ？」

「敵の増援は確認できなかったのな、その小娘共が気になってきたのだが…。如何やら、現実を実感したようだな」

接近してきたのはマドカとラナロウだが、ラナロウ達とは逆方向から三機接近してくる。

接近してくる機体にマドカ達は見覚えがあった。二機は嘗ての強敵でもう一機はフェニックスと似た委託を持つ機体だからだ。

「やっと合流できた…。」

「如何やら、まだ誰も欠けていないみたいだね」

「その様だな」

「マーク… 目を覚ましたのは嬉しいが… それは一体どうゆう事だ…？」

ラナロウもマドカもマークの目覚めたことは嬉しいが後続の二機と同行していたのが疑問だった。

「久しぶりだね。学園祭の時以来かな」

「シャギアそれにオルバ…。 テメエら…。 何しに来やがった…!!」

「敵意は理解出来るが、今回は貴様との戦闘目的で来たわけではない」「ど、どういうことだ…。」

「僕達が君達に協力してあげようって言ってるんだよ」

「なん… だと…。」

ガロードは信じられずにいた。フロスト兄弟とは多くの死線を繰り広げた敵であり、彼らによって仲間たちに多くの被害が出たのは今でも覚えている。

「待て、彼らは私に護るハルファースガンダムの力とお前達がいるここまで案内してくれ

たんだ。それに今回彼らから、悪意や敵意は感じられない」

「だがよ…」

「僕達の事が気に食わない、不審な行動をしたのなら後ろから撃てばいいさ」

「だが、そんな事をしている暇はないの难道？それに今は猫の手も借りたい状況だと把握しているが」

マドカ達は考え、お互いを見て頷く。

「分かったよ。今回は信用してやる、けどな…」

「一つでも不審な行動を試してみろ後ろからGNバスターライフルを撃ち込んでやる」

マドカは何時でも撃てるという意味表示の為、GNバスターライフルをシャギア達に向ける。

「それでいい。私達は君達に対してそれだけの事をしたのだからな」

「それに僕達だってタダで君達と共同戦線を張ろうなんて考えてないよ」

「それなりの情報を持ってきている」

「その情報とは…？」

「コード・アメリカスの新しい機体の情報だよ。今君たちの所にへピー、ピー」…情報は後で渡すよ」

オルバがコード・アメリカスの情報を渡そうとした時、それを遮るかのように敵が現れる。

「一つだけ聞きたい。その機体について奴はなんて言ってた」

「”極限”の機体って言ってたよ。詳しく話はこの敵を殲滅してからだね」

「まさか、お前たちと一緒に戦う事になるとはな…」

「それは私達も同じだよ。ガロード・ラン」

「ティファや仲間に出してみるよ。只じや済まさねえぞ」

「折角の共闘を帳消しにするような野暮な真似はしないさ」

「そうだとあり難いね」

思わぬ共闘に思い思いの事を言うと各自戦闘を開始するのだった。

33話

ガロード達がシャギア達と共同戦線を張っている中、イチカはエリスと交戦していた。

「止めるんだエリス！お前は無暗に戦闘を望んでないはずだ!!」

「その無暗に戦闘をさせてるのは貴様だろうがア!!」

イチカはハイパーバズーカを円を描きながら撃つがバンシイが持つユニコーンと少し違うビーム・マグナムは銃身下部に追加装着された所からポップミサイルが放たれ、相殺し、爆発が起きる。

「バンシイ自体に追加装備がされている…。武装もそうだが機動性も上がっている…!?!」

イチカは接近戦を仕掛けようとするがバンシイのビーム・マグナムに追加された武装リボルビング・ランチャーが回転するとそこから小型の大量の球体の様なモノが放たれるとイチカは後退し、頭部バルカンで小型の球体を撃つと一つが爆発すると連鎖的に爆発を起こし始める。

「あんなの間近で喰らったら一溜りもないぞ!!」

「貴様さえ…。貴様さえ、居なければアア!!」

「グウ…。」

エリスはバンシイの背後に装着されていたアームド・アーマーDEを取り出し、イチカの方に向けるとアームド・アーマーDEに内蔵されていたメガ・キャノンを放つとイチカはIフィールドを発生させ防御に回る。

「その機体から降りるんだ！そのガンダムはお前の憎しみを増幅させる!!」

「私にその憎しみを抱かさせたのは貴様だ！貴様を倒すためなら悪魔にでも死神にでも魂を売ってやる!!」

バンシイの背後から蠶状に展開・変形すると続く様にバンシイも展開し、『ガンダム』に変わるとそれに触発されてかユニコーンから赤い光が漏れ始める。

「バンシイに引つ張られている!? だめだ…。これ以上は抑えきれな

い!!」

「手加減しているの?どこまで私を…惨めにしたら気が済むんだ…!」

ユニコーンは『NT-D』の発動に抗うかのように身体を攀じるがエリスの強い感應波に引かれ『NT-D』を発動させてしまう。

エリスはビーム・トンファアで斬りつけようとするがIフィールドによってビームは掻き消されるがそれでも押し付けようとする。

イチカはバンシイをシールドで押しのと回し蹴りをし、ビーム・マグナム放つが先程、イチカがやったようにアームド・アーマーDEによって防がれる。

イチカはビーム・マシンガンで応戦していると突如、現れたザクがイチカの背後からヒートホークで斬りつけようとする。エリスがアームド・アーマーDEでザクのコクピットを突くとそのまま突き飛ばす。

「此奴は私の敵だ!邪魔をするな!!」

「クソツ!」

イチカは接近戦を仕掛けるとリボルビング・ランチャーに装着されている近接防御用のビーム・ジュツテで防がれてしまう。

「エリス!皆お前を心配している!!こんな戦いを辞めて戻ってこい!!」

「戻るわけないでしょ…。イチカの居ない場所に私の居場所なんてない!!それに…。こんな復讐に囚われた私が戻るわけないだろうがアアア!!」

「そんな…。自分で自分を否定する様な事…。自分を見失うな!エリス!!」

「お前さえ居なかったらこんな事には成らなかったんだ…。オリーブアアア!!」

バンシイのビームサーベルと鏢迫り合いになる。

「お前の声は…。私の心を惑わす…」

「それは本当のお前が抵抗している証拠だ!お前なら聞こえるはずだ!!みんなの声が!!」

「皆の…声…。グッ…アアア!!」

イチカの声に一瞬、反応を示すと頭を抱え苦しみ始める。

二人は気づいていないが、この会話は周囲の人達の頭に直接流れ込むように聞こえていた。

「黙れ… 黙れ黙れ黙れッ!!これ以上私を惑わさせるな?!」

「邪念が強すぎる!」

一端、後退したイチカは持っていたシールドを投擲し、エリスが腕で弾くと両腕のビームサーベルを取り出し、攻撃に移るとバンシイも応戦する為、両腕のビーム・トンファアを起動させ、一進一退の攻防を繰り返す。

「なんでなの…」

「… エリス?」

「なんで貴様とイチカが重なって見えるのよ!? 貴様はイチカじゃない… 貴様はイチカなんかじゃない!!」

「グアアアアア!!」

アームド・アーマーDEをイチカに突きつけ、腕をクロスさせ防がその衝撃で持っていたビームサーベルを手放してしまう。

「…クウ… お前が俺とイチカが重なって見えるのは… お前の心が同じ存在だってことに気づいてるからなんだ」

「違う… 違う違う!!」

イチカはアームド・アーマーDEに触ると赤い光がアームド・アーマーDEを伝わり、バンシイのサイコフレームと共鳴し始め、バンシイのサイコフレームがより金色に輝き始める。

「何この光… 温かくて、懐かしい感じ…」

「… エリス」

「だけど… 貴様の声は私の中を掻き乱す…。そのイチカと同じ、光を使う貴様が… 不愉快なんだよ!!」

先程とは比べ物にならないほどの連撃に苦戦するイチカ。

(どうすればエリスを正気に戻せる…)

イチカはビーム・トンファアによる連撃を防ぎながら考える。

自分の呼びかけに答えてくれない以上、他に方法が無いか模索す

る。

すると、イチカの頭に声が響く。それは死に間際の遺言の様なモノでなく、別のモノだった。

「皆の… エリスを助けたいという思いが…。サイコフレームを通して伝わってくる…」

イチカは心を落ち着かせるとまるで頭の中にあつた邪念という霧が晴れていき感覚が研ぎ澄まさせるとユニコーンの赤いサイコフレームの輝きは淡い緑色に変わる。

その輝きはアクシズを押し出した時と同じ輝きだった。

「何なのよ… その輝きは!?」

エリスはサイコフレームの輝きに怯えだすとビーム・マグナムを乱射するがユニコーンからパージされたシールドがまるでファンネルの様に動き出し、シールドに装備されたビーム・ガトリングがバンシィに攻撃し、エリスはその攻撃を避けながらビーム・マグナムやメガ・キャノン撃つがユニコーンの前にシールドが来ると攻撃を防ぎ、エリスは後退しながら撃つが全て防がれ、壁際まで追い詰められるとイチカは腕を伸ばし、優しくそれこそ撫でるような感じでバンシィに触れる。

「熱… とても暖かくて優しい光…」

エリスは自分の中で何かが浄化されるのを感じるとバンシィのサイコフレームの色がグレーに変わると元のユニコーンモードに戻り、バンシィを解除しながら黒をベースにし、金色のラインが入ったISSスーツを着たエリスが倒れ込むとイチカは抱きしめるように受け止めるとエリスの安否を確かめる。

「おい、エリス大丈夫か！返事をしてくれ!!」

「…… んう、イ… チ… カ…」

「よかった… 無事で…」

イチカが嬉しそうにエリスを抱きしめっていると複数の機体が接近する。それはどれも友軍ののだが、二機だけ違った。

「「「イチカ／兄さん!!」」」

「皆、無事だったんだな… マーク兄も目を覚ましたようだね」

「ああ、心配を掛けた。如何やら、エリスを助けることが出来たようだな」

「彼女の洗脳を解くとは……。これもNTの力の一つなのか」

「それとも、人が持つ可能性の一つなのか……。僕達には分からないね」

「シャギア……。それにオルバ……」

「待ってくれ、彼らは今は仲間だ。私にこの機体とお前たちの居場所を教えてくれたのは彼らだ」

イチカはビーム・マグナムを構えるがマークが二人の前に行き、イチカに仲間であると説明するイチカはビーム・マグナムを降ろすとサイコフレームはグレーに変わり、ユニコーンが一回り小さくなる。

「君はすんなり、聞き入れるんだね。今までの様に裏切るかもしれないのに」

「そうかもしれない。だが、お前たちからは今まで感じていた悪意を感じられない。もし何かあった時はその時と止めればいいさ」

「フツ。心が広いのか……。それとも単に馬鹿なだけか。だが、その温かさや優しさを持った者が本当のNTなのかもしれない」

「劇は終幕を迎えようとしている」

突如、聞こえた第三者の声がした方を向くイチカ達。

そこには見たことの無いガンダムと聞き覚えのあり過ぎる声の持ち主だった。

「……コード・アメリカス」

「久しいな。イチカ」

イチカ達はコード・アメリカスに対して警戒心を高める。

「まさか、その二人に裏切られとはな」

「僕達の目的は最初から君の情報と戦力を確かめることさ」

「潜伏中に多くに情報を得た。無論、その機体の情報もある」

「あの機体がお前たちが言っていた……」

「ああ、極限のガンダム——エクストリームガンダムだ」

「何が極限かしらぬがとつと終わらさせてもらおう!!」

ガロード達と一緒に来た筈は二本の刀を構え突撃するが、エクストリームガンダム周りに光が集まった次の瞬間
バキンッ!!

「なっ!?」

「このエクストリームガンダムを舐めてもらっては困るな」

エクストリームガンダムの姿は変わり、黒いマントの様なモノと大きさは二倍ほどに変わり、まるで日本に伝わる侍を沸騰させる姿になり、巨大な剣を振り降ろした姿からその巨大な剣で紅椿の武器を破壊した事は明らかだった。

「これが極限の格闘形態タキオン・フェイズだ。さあ、掛かってくるがよい」

「チツ… 野郎!!」

「未来は既に決まっている。貴様等の抵抗も無意味なのだ!!」

「そんなモノ!!」

コード・フェニックスはクロスバインダーソードで斬りかかり、ラナロウは遠距離からメガキャノンで攻撃する。

「その様な攻撃… 無意味!」

「グウ!?」

「クツ… !!」

エクストリームガンダムは巨大な剣から巨大な衝撃波を作りだし、ラナロウを攻撃し、接近しようとしていたコード・フェニックスの周りに大量の剣が襲い掛かる。

「大丈夫か!」

「グウ… 装甲を少し削られたが… 問題ない」

「メガキャノンが真つ二つになりやがった…」

「紅椿の活動限界が…」

「なら、これならどうかね?」

シャギアはストライククローで固定するとヴァサーゴの腹部が上下に展開・分割し、その隙間から砲口を露出すると光が収束し、タキオンに向けて放つ。

土煙が上がり、その煙が晴れると其処にはマントのような装甲によつて先程の砲撃を防いだタキオンの姿があった。

「その程度でこの機体に傷をつけることはできんよ」

「これ程の強度とは…」

「次は私のターンだな」

タキオンが光に包まれると次に現れたのは大きさはあまり変わらず、青と紫を基調とし、後ろに二つの砲台の様なモノがぶら下つてゐる。

「そして、これが極限の射撃形態——カルネージ・フェイズだ」

「やらせるか!!」

カルネージは大型ビームライフルから明らかにビーム・マグナムより威力のあるビームを放つと三つのシールドファンネルを風車の様な形にし、Iフィールドを発動させ防ぐ。

「今の攻撃を防ぐか…。ならば、受けてみよ!!」

「クソッ！」

背部のコンテナから上空に向けて弾を発射し、しばらくした後上空からばら撒かれる。

イチカはファンネルミサイルのビーム・ガトリングとシールド本体の突き、バルカンで落とし、落としきれなかったモノはマーク達の協力によつて全て撃ち落とされる。

「てめえ…」

「これが貴様達の光か…」

カルネージは上空、それこそ姿が見えなくなるまで高く飛び上がる。

「何よアイツ。自分の攻撃が通じないからって逃げていったわけ」

「なんだ…この胸騒ぎは…」

『コード・アメリカスの位置の特定完了。超高エネルギー収束を確認…。成層圏にて超遠距離攻撃を仕掛けてくる模様です』

「なにイ…」

「どうしたイチカ？」

「コード・アメリカスが成層圏から超遠距離攻撃を仕掛けてくる…」

「ど、どうするんだよ!？」

「止めるしかないだろ……。だが、方法が……」

イチカ達はアプロディアの情報を聞き、どう防ぐか模索し始める中、状況が読み込めない箒達は訳が分からず頭を傾げている。

「何アタフタしてるのよ。もう敵はいないんだからもうこの戦いは終わりでしょ?。」

「終わってない……。奴は超遠距離から攻撃を仕掛けてくるつもりだ」
イチカはアプロディアが衛星をジャックし、そこから得た映像を見せる。

其処には背部のコンテナを肩にマウントし、これでもかとエネルギーを収束しているカルネージの姿があった。

「ど、どうするのよ!?!?てか、何処から攻撃してくつもりよ!!」

「成層圏……。高度は40kmだ……」

「クソツ……。30km位なら経験あるが……。そこまでの距離はやったことないな……」

「なら、ここから逃げれば……」

「あそこまでの距離に居るってことはそこから狙撃する自信があるってことだ」

「誰かがあそこまで行って防げば……」

「あそこまで行く分のエネルギーはあるのか?防ぐ方法は?」

「そ、それは……」

全員が悩んでる中、一人の人物が立ち上がる。

「俺があそこまで行って防ぐ」

「方法はあるのか?」

「俺が成層圏まで上昇し、サイコフィールドを形成して防ぐ」

「だが、それだとお前は……」

『サイコフィールドは未知の塊。何が起きるか分かりません。無謀な行為はやめてください』

「大丈夫……。俺なら大丈夫だ」

ユニコーンの装甲が徐々に展開し、一回り大きくなり『ガンダム』に変形する。

「待つて…。行かないで！イチカ!!」

「… エリス」

飛び立とうとしたイチカをエリスが呼び止める。

「大丈夫。今度はちゃんとお前たちに所に帰るから」

イチカはユニコーンのフェイス部分だけ解除し、満面の笑みで笑う。

その笑顔は今から死に行くような人間が出来る笑みではなく、恐怖を感じない何処か安らぎのある笑顔だった。

「… じゃ、行つてくる」

「行かないで…。イチカ！イチカ!!」

エリスの悲痛な叫び声を聞きながらイチカは赤と緑の軌道を描きながら飛び出した。

「如何やら、一人で立ち向かうつもりの様だな」

「ああ、この戦いを終わらせる為にな」

「そうか…。ならばその希望を抱きながら絶望の光に吞まれるがいい!!」

チャージを終えたカルネージは極光の砲撃を放つと同時にイチカの頭で光が弾け、前面でシールドファンネルが風車の様な形になり、そこから虹色の巨大な円形のサイコ・フィールドを作るとユニコーンからもそれと同じ位の赤いサイコ・フィールドが形成される。

「又ウウウ!?!」

極光がシールドに当たり、すり抜けるとその大きさは小さくなるがイチカの後ろから少しずつ、光が漏れ始める。

「グヌウウウツツ!! ……!?!」

このままではいけないとイチカは全ての力を使い踏ん張ろうとするとイチカの頭にネエル・アーガマの皆や千冬達と笑い合ったビジョ

ンが見えた。

するとユニコーンのサイコフレームは緑色に変わり、サイコ・フィールドの色も虹色へと変わる。

だが、完全に防いでいるわけではなく、ユニコーンの装甲が少しずつ、破壊されてゆく。

イチカの中でこれ以上は危険だという警告音が鳴り響く。このまま行けば人でなくなると訴えているが、イチカはそんな事は気にせず、続ける。今やらなければ絶対後悔するという確信があったから。

イチカの強い感応波を受けて過剰に膨張したサイコフレームが砕けつつある機体の装甲を押しつけてその姿を異質な形へと変貌させた。

極光が消え、其処には辺り一面に虹色に輝き、その中心でまるで何かを掴むかのように腕を伸ばし、膨張した緑色のサイコフレームから光の結晶体が発生し、輝いている物言わぬユニコーンがいた。

「今の一撃を防ぐとは……。だが、奴から意識を感じないというのに……。何だ……。この胸騒ぎは……」

自分の計画の中で一番の障害は倒したはずなのだが、コード・アメリアスは嫌な予感しかしなかった。

「念には念を入れておくか……」

カルネージの指を鳴らすとそこから数機のジェガンやトールラスが現れると持っていたビームライフルでユニコーンを撃つ。

先程まで動きが無かったユニコーンから虹色のオーラの様なモノが放出され、サイコ・フィールドを形成し、その攻撃を防ぐ。

「やはり動けたのか……ん？」

コード・アメリアスはある事に気づく、ユニコーンからは確かに意志を感じるがそれは今まで感じてきたイチカのととは違う似て非なるモノだった。

「すげえ……。イチカの奴、本当に止めやがった……」

「流石はNT。僕達に出来ない事を平然とやってのける」

イチカの決死の行動により、窮地を脱したガロード達はイチカに対して称賛を送る。

「そんな… イチカ…」

「どうしたというのだエリス？」

「イチカが… イチカが!!」

エリスの様子を不思議になったマドカはエリスに何があつたのか聞こうとすると口元を手で抑え、うつすらと涙を流すエリスにマークがエリスの代わりに代弁する。

「エリスも気づいたんだ…。イチカに起きた異常に…」

「兄さんに起きた異常？」

マークは空の一部に輝く緑色の空間を見据えながら言う。

「アレは… あのユニコーンを動かしているのはイチカではない」

「どういう事だ？現にユニコーンは動いているぞ。兄さんが動かしていないと言うなら、誰が動かしているのだ」

「まさか、マシーンに魂が宿ったとでもいうのかい？」

「確かに新たな命という点で言えば合っている。だが… その命が現れる為の代償が必要だった…」

「それはどういう事…」

今まで黙っていた簪がマークの言っている意図を理解できずにいるとマークの言っている意味を真つ先に理解したのはマドカだった。

「まさか… 兄さんの命を代償に生まれたんじゃ…」

「遠からず近からずだ。あれはイチカの本質を取り込んで誕生した新たな生命体《ユニコーンガンダム》だ…」

「そんな…」

衝撃の事実膝から崩れ落ちるマドカ。

「嫌…。嫌嫌嫌だ！このままじゃイチカが何処かに行っちゃう…。そんなの嫌よ…」

エリスはバンシィを再起動させて、その場から飛び出して行く。

「やっつと、全員そろったんだ…。認められるか…。こんな結果…。必ず連れ戻す!!」

「一体何をやる気だ!?戻ってこい、エリス！マーク！」

マークも後を追うとするとラナロウが呼び止めようとするがマークは無視し、エリスの後を追うのだった。

イチカは精神を取り込んで誕生した新たな生命体《ユニコーンガンダム》は手を振りかざし、数え切れないミサイル群を撃ち落とし迫り来る敵部隊を無力化していた。

「ええい！これでもNTの力だというのか!?!」

大型ビームライフルや火炎弾を使い攻撃するもユニコーンが形成するサイコ・フィールドによつと全て無力化され、出した部隊も振りかざしただけで無力化させられてしまい二人の周囲には活動を停止した無数の機体が浮遊していた。

コンテナを肩にマウントし、チャージするとユニコーンの光の結晶体が更に強く光ると掌をカルネージに向ける。

「今度は何をするつもりだ!!」

次の瞬間、カルネージの両手、背部のコンテナ、大型ビームライフルが爆発し、周囲の機体も爆発する。

「二体何が起きている!?!」

コード・アメリカスはカルネージをパージし、シールドを構えるとシールドも爆発する。

「グウ……。まさか、武器だけを破壊しているのか……。なら……」

エクストリームのビームサーベルをパージするとパージしたビームサーベルが爆発した。

「やはりそうか……。だが、このままでは形勢は不利……。一度撤退するのが吉だな」

コード・アメリカスがそう言うとその場から離れると入れ違うように地球からユニコーンに接近する機体が現れる。

「イチカ!!」

イチカを呼ぶ声にユニコーンは耳を貸さずにその場から地球とは

違う何処かに行こうとする。

「皆、お前を心配してる……。一緒ネエル・アーガマに帰ろう」

「一人にしないって言ったのに……。また私の前から消えちゃうのイチカ!!」

二人は思い思いの事を言い始める。

「お前がそんな風になる事……。誰も望んではない！私もお前もまだやるべきことがあるだろう!!」

「そんなんで……。貴方はみんなの前で胸を張って笑えるの！そんなんじや、誰も笑ってくれない!!悲しむだけよ!!」

「私達は只、可能性を示せばいい……。託されたモノを明日に繋げばいいんだ!!」

「私達の明日に貴方が必要なのよ。NTだとかイノベーターとか関係ない！私達の隣に貴方がいてくれればいいのよ。バンシィイ!!」

バンシィを『ガンダム』の姿にし、ハルファスと共に今出せる最大限の速さで追いかけるが全身から虹色の光を放つ、ユニコーンとの距離は離れていくばかりである。

どれ位の時間が経ったのか分からないまま、イチカは何処までも続く道を進んでいた。

あえて言うのであれば虹——辺り一面に広がる虹色に輝く空間。「ここでは時間さえ輝いて見える。どんな絶望の中にも希望は生まれる」

イチカの前にいる一人の女性にイチカは何処か懐かしさを感じた。「貴方は光よ。悲しみを糧に道を照らせる。いつか人が肉体を持ったままこの虹の彼方に来る時が来るのかもしれない」

イチカは前へ、女性が居る場所へ行こうとすると女性は首を横に振る。

「だけど、貴方はまだここに来るべきではないわ。戻りなさい。貴方を呼んでいる者達の所に」

イチカは女性が指を指した方に身体を向かせ、進む。

「忘れないで、貴方は一人じゃないわ。だから、恐れずに前に進んで」
イチカが最後に耳にしたのはそんな言葉だった。

「…みん…な…」

「イチカ！」

執念の呼びかけが効いたのか《ユニコーンガンダム》という生命体からイチカが戻ってきた事に喜ぶ二人。

結晶体が消え、至る所に損傷が見えるが元のユニコーンガンダムに戻る。

元に戻ったイチカは地球へ進路を変え、進むと二人も後を追う。

今起きようとしていた仲間が欠けるといふ事態が回避され、喜ぶマークとエリス。

喜んだ矢先、後方から緑色の光がイチカに接触すると意識を失ったのかイチカは態勢を崩し、螺旋を描きながら急降下し始める。

「イチカアア!!」

二人の悲痛な叫び声が響いた。

34話

一つの病室に一人の男性が横たわっていた。

身体に至る所に包帯が巻かれ、人工呼吸器を付けられ、その周りでは医療機器が絶え間なく動いている。

今ここで横たわっているのはイチカ・ギルオード。

多くの人を助けるために人の域を超え、人が定義する神に近い存在なり、仲間の呼び声により、人に戻り、仲間の所に戻ろうとした時に背後からの攻撃により、意識を失うと同時に機体制御が取れなくなり、地球へ真つ逆さまに急降下し、途中で機体が解除され、空に放り投げられたイチカはマークとエリスの二人に助けられるが、その際に全身に火傷を負い、先の戦闘で負ったのか致命傷では無いが、切り傷や打撲などの怪我也見つかつた。

マーク達の救援後、病院に運ばれ今に至る。

プシユーと気が抜けるような音が聞こえると自動ドアが開き、複数の人物が入ってくる。

「如何やら、今日も目覚めてないみたいだね」

「その様な。目が覚めぬその姿はまるで眠り姫の様だ」

「身体の傷はもう殆どが治つてるのにもう、半月は経つて言うのにもまだ、目が覚めないのか…。」

「肉体に異常がないとなると精神に異常があるという事になるが…。私達でもそこまでは分らん。君達NTなら、何か分かるのではないのか」

シャギアは一緒に来たマーク達に視線を移す。

「こればかりは私も分からない。それにNTは万能ではない。心当りがあるとしたら、イチカのあの超常的なあの力としか言いようがない」

「あんな異常な力を使って、只で済むはずがない…。その代償がこれという訳か…。」

「サイコフレイムにあそこまでの力があるとは思えない…。いや、サイコフレイム自体完全に解明されていない部分が多い…。それとN

Tの持つ可能性がああ現象を引き起こしたのかも知れん」

「イチカの思いが起こしたと仮定して、腕を振りかざすだけで敵を倒したアレは一体何なんだい？」

「それは兄さんの護りたいという思いが反映されたものだろう」

ドアが開閉する音がすると其処には壁によし掛かっているマドカがいた。

「マドカ……。もういいのか？」

「いつまでも泣いていられるほど情勢は良くないんでね」

「さっきの話の続きだけど、護りたいじゃなくて倒すの間違いじゃないのかい？」

「もし、倒すのであれば、武器だけじゃなく機体そのものを破壊すればいいはずだ。だが、あのユニコーンは武器だけを破壊した。つまりは倒す事を目的としていないということだ。それに兄さんがあの場面で護ること以外考えられんからな」

「もし、護る為だとして、如何してあのような力が起きたかだよ」

「これは仮説だが、サイコフレームが人の思いに答えるのなら、あの時兄さんの『仲間を護る』という思いを兄さんの精神を取り込んだあの《ユニコーンガンダム》が『仲間を傷つけるモノを無くしたい』と解釈したら辻褄が合おう」

「確かに道理はかなっているけど……。そうなるとNTは本当に未恐ろしい存在だね」

「イチカの目覚めに関しては私達では、どうにもならない。もう一つの問題を解決させるべきだろう」

イチカの問題ともう一つ彼らの抱えている問題がある。

「塞ぎこんだエリスか……」

「俺達の呼びかけに返事しないし、会っても謝ってばっかだ……。俺達は別に謝罪して欲しいわけじゃないのにな……」

「エリスに対しての対策は私にやらせて欲しい。いくらか策はある」

「なら、エリスはマドカに任せよう。後は……」

「五月蠅いIS委員会だね」

オルバの声に頷くマーク。

イチカが深い眠りについてから、世界中で全身装甲の所属不明機が各国を襲撃し始めたのだ。

フランス、イギリス、アメリカ、ドイツなど数国が襲撃を受け、世界最強のISですぐ鎮圧できると各国のお偉いさん方は思っていたが、モニター越しに映った光景は彼らの想像を遥かに超える事態が起きた。

最強の兵器ISが効かず、かぎ爪の様な武器で操縦者の命を刈り取る金色の機体、超高火力のビームライフルでISごと塵にする鳥の様な翼を持った機体、顎がやたら長く大剣の様な武器でISと操縦者ごと真つ二つにする機体、仲間の死と自分達が信じていたモノが崩さり、怯え、泣き叫び撤退する彼女達を背後からの攻撃で問答無用で命を散らすその姿はまさに阿鼻叫喚。

何か打開策は無いのか考えた時、先の戦いで超常的な力で敵を撃退させた一人の人物に目を付けた。

そう、イチカだ。

彼らはイチカとユニコーンガンダムを解明すればあの超常的な力を使える様になり、勝てると思ったのだ。

マーク達にイチカの身柄を寄越すよう要求したがマーク達は頑なに拒否し、渡せばイチカはモルモット同然、下手をすれば命の保証はないからだ。

イチカの力は異世界で身に付けたものであり、実戦を積み手に入るがNTやイノベーターと言った力は偶然手に入れたのであって望んで手に入れた物ではない。

更に言えばユニコーンに使われている技術は時間を掛ければ出来なくも無いだろうが格段に劣化し、サイコフレームは素材も製造方法は何一つわからないままだろう。この世界の技術はその領域まで達していないのだから。

そういつた事を知っているマーク達からすると企画倒れ、実現不可能であり、そんな馬鹿げた事の為にイチカというこの世でたった一つの命を消すような真似をさせたくないのだ。

「イチカが命貼って助けたって言うのに何なんだよ!? アイツラアア

!!

「落ち着けラナロウ。私だって同じ気持ちだ。世界がイチカを見放し、敵になるというのなら私達がイチカを仲間として、家族として見守り続ければいい」

彼らの対応を思い出したラナロウは病室の壁を思いつきり殴り、それを宥めるマーク。

「じゃ、委員会の方は僕達が対処しておくよ。適当にあしらって、それでも来るようならそれなりの対処をする。それで構わないかい？」

「ああ、イチカを護る為だ。致し方ない」

『イチカへの面会は認めただけ通すという形でこのセキュリティを組みます。認証は私の方でしますので何かあったら呼んでください。私はイチカに異常事態が起きた時に対処しやすい様にごでイチカの様子を監視します』

「ああ、頼んだ。私達はコード・アメリカスの対策として各武装の強化及びチエックをしてくるとしよう」

「なら、私はエリスを叩き起こしてくるとしよう」

「手荒な真似は避けてくれよ。彼女も被害者の一人なんだ…」

「…善処しよう」

ガロード達が病室から出ていく中、マークはフェニックスの待機状態である燃え盛る不死鳥が施されたブレスレットを付けさせる。

フェニックスの完全解明は出来なかったが封印されていたシステムが解けたいたのだが、そのシステムの内容を明らかにすることが出来なかった。

何故、出来なかったのか。それはパイロットであるイチカ以外のアクセスを拒否してしまうのでそこから先を調べることが出来なかったのだ。

「フェニックスは今まで、私達を護って来てくれた。こうすれば、イチカを護ってくれる…そんな気がする」

『NTの勘というモノですか？』

「さあな。只の気休めさでも無いよりはマシだろ。イチカ、お前と一緒にまた笑顔で笑い合う時が来るのを待っているぞ」

そう言うとマークも病室から出ていくと機械音が鳴り響く。

この時、マークの言葉に反応するかのようにイチカの腕がほんの一瞬動いたのを誰も気づいていない。

一つの薄暗い部屋に少し、口を付けたご飯とベットの上で一人の少女が塞ぎこんでいた。

塞ぎこんでいるのはエリス・クロード。

先の戦いでコード・アメリカスの洗脳もイチカによって解除され正気に戻った。

だが、戦いが終わり、自分が洗脳されていたとはいえ、思い人である、イチカを傷つけた事、目の前でイチカが落とされ何も出来なかった自分、様々な要因が彼女を塞ぎこませる原因になっていた。

今の彼女は自分に対して、怒り、悲しみ、憎しみ、そして絶望という感情が渦巻いていた。

自分がコード・アメリカスに洗脳されなければ、あの時イチカへの攻撃を防ぐことが出来れば、イチカに好意さえ持たなければこんな事にはならなかった。

様々な考えが彼女の中を巡るがどれも後の祭り。そして、そんなことしか考えれず、前に踏み出せない自分に嫌気がさしていた。

そんな時、電子音が鳴り響くとドアが開き、マドカが中に入ってくる。

「調子はどうだ？ 満身創痍だな。折角、皆の所に戻ってきたのに…」
「マドカ…。私はこれから拷問にでも掛けられるの？」

「私はお前に顔を見に来たというのもあるが、今回はお前を表に引きづり出すのが目的だ。マーク達が心配しているぞ」

「そうやって私を笑いに来たんでしょ。好きなだけ笑えばいいわ。何も出来なかった私を…」

「何故、そうまでマイナス思考になる。少しは笑ってマーク達に心配かけまいと出来ないのか」

「私が… 笑う… ? 何も出来なかった私に笑う資格なんてないのよ…」

「そうか…。なら、歯ア食いしばれエ!!」

「グハツ!!」

堪忍袋の緒が切れたマドカはエリスに対し、右ストレートを放つとまるで吸い込まれるかの様にエリスの左頬に直撃する。

「な、何をするのよ!!」

「その体たらくを晒している貴様に一発かましたただけだ。何が笑う資格がない? 何も出来なかっただ。こんな事しかできない奴を一生懸命助けようとした兄さんが馬鹿馬鹿しいよ」

「マドカ! 貴女、イチカを馬鹿にするつもりなの!!」

「私が馬鹿にしている? ああ、そうさ。たった一人の女一人碌に救えない兄さんを馬鹿にしているさ。だがな、それ以上に馬鹿にしているのは貴様だ! エリスウ!!」

「!?」

マドカはエリスの胸ぐらを掴むと先程の続きを言う。

「兄さんはお前に笑って欲しい、もう一度みんなで誰一人欠けることなく笑いたいからあそこまで、それこそ人を辞めるような行為してまで護ろうとしたのに…。それ何どうだ? いぎ、助ければ兄さんを傷つけ、何も出来なかったと悔やみ、後悔し、塞ぎこんでるじゃないか。兄さんはお前にそんな思いをして貰うために助けたんじゃない!! 決してだ!!」

「そ、それは…」

「それとも何か? そうしていれば、兄さんが王子様の様に助けてくれると思っているのか—— 甘ったれるな!! 兄さんがどれだけ辛い思いをしているのか分かっていいるのか!? 兄さんは困っている人がいれどどんな人でも助けようとするお人好しだ。例え、火の中水の中激戦地だろうと兄さんは駆けつけ助けようとするだろう。そうやって助けたことも沢山もあった。だが、それ以上に助けられなかったことが多

かった……。その度に兄さんは悔やみ悲しみ泣いていたんだ……。顔も名前も知らない人の死に兄さんの心は泣いていたんだぞ!!それを知らないお前じゃないだろ!!」

マドカは掴んでいたエリスの胸ぐらを離すとエリスに背中を向け歩き始め、ドアの前に行くと一度立ち止まる。

「兄さんはお前にそんな悲しい顔をさせるために助けたんじゃない。その事を忘れるな。次に来るまでにその考えを前に踏み出すことが出来ないんなら、お望み通り、拷問にでも何でもかけてやる」

マドカが部屋を出るとエリスは布団で身体を覆う。

「イチカ……。私、どうしたらいいの……」

そんな呟きと同時に眠りについた。

眠りについてからどれ位立ったのだろうか。

エリスは自分を呼ぶ声に思い瞼を開け、声のした方を向くと其処には居た人物にエリスは先程までであった眠気など吹き飛んでしまった。

「……イチ……カ」

其処にいたのは紛れも無くイチカであり、先程まで居た部屋ではなく広大な空間に星々が輝いていた。

「エリス」

「イチカ……」

「そんな悲しい顔をしないでくれ。俺は只、俺のやりたい事を自分の成すべき事をやったまでだ」

「それは……。私のせいで……!」

イチカはクスツと微笑む。

「それこそ誤解だよエリス。俺はあの時、皆を護る為に力を望んだ。その結果、俺は人を辞める事になった。けどなエリス、俺が人に戻れたのも皆のおかげなんだよ」

「え?」

「確かに俺は人を一時的とはいえ、辞めた。けど、俺は人に戻る事が出来たのは皆が呼びかけたから戻る事が出来た。逆を言えばあの時、

皆が居なければ俺はあのまま《ユニコーンガンダム》としてあの広大な宇宙の果てに行っていたと思う。だから俺は皆に感謝してるんだ。こうして今、俺が俺で居られることに」

「でも、私はイチカを皆を傷つけた…。それは変わらない事実なのよ…。」

先程まで微笑んでいたイチカは何処か哀しげな表情をする。

「俺はエリスが傷つけられた事を気にしていない。逆に助けるべき人がいる、守らなちやって思った。マークやマド力達も同じ事を考えていたんだと思う。それになエリス。例え過去をやり直す事が出来たとしても何も変わらない。変わるのは自分の心だけだ…。」

「でもー!」

「エリス。大人になるんだ。人は後ろを…。過去に向かって歩んでいくじゃない。過去に起きた過ちすら糧にして人は前を…。未来に向いて歩いて行くんだ。だからエリス過去に囚われず前に進んでほしい」

するとイチカはエリスから離れていく。

「待ってイチカ!イチカ!!」

離れていくイチカをエリスは一生懸命追い掛けるがその距離は縮まらず、遠のくばかりである。

「行かないでいイチカ!イチカ!!」

「エリスが人の心を忘れずに歩きつづけければ、また会える」

「いつ、またっていつ会えるの!」

「俺がやったようにやりたい事を自分の成すべき事を成せばいい。何をやればいいのかはお前の心が知っているはずだ」

「待って!お願い!行かないで!!イチカ!イチカ!」

エリスはイチカを何度も呼ぶと周りが明るくなっていく。

「…。私を…。一人にしないで…。イチカ」

気が付けばエリスは先程まで居た部屋に戻り、ベッドの上で右腕を伸ばし、涙を流していた。

「私の…。やるべき事…。」

自分の胸に手を当て、小さく呟いた。

「昼食を持ってきたぞ。さて、少しは考えは変わったか？ エリス」

「マドカ…」

「ほお」

マドカはエリスの変化に思わず声を漏らした。

先程あった時より、明らかに顔つきやその目つきから窺える覚悟が違ったのだ。

「良い表情になったじゃないか。だが、この短時間でここまでの変化… 一体何があった」

「イチカにあつたの…」

「馬鹿な…。兄さんは今身動きが取れない…。ましてや目覚めてすらいないのに…」

「多分、イチカの精神体みたいなものだと思う…」

「兄さんの精神体と会って論されたか…。フツ、自分の事よりも他人か…。兄さんらしいな」

「ねえ、マドカ。イチカと会うことはできる？」

マドカは少し考える素振りを見せる。

「別に問題は無いが、それ相応の覚悟を持っておけ」

「それはどういう事…」

「見れば分かる」

エリスはマドカの後を追い、部屋を出る。背後から二人の様子を窺っている人物と一緒に。

エリスはマドカについて行くと薬品の匂いが充満し、規則正しい電子音が鳴っている部屋に連れてこられる。

「ここは… 病室…」

「こつちだ」

エリスはここが病室だと分かると嫌な予感が全身を巡り、マドカは

一つだけカーテンが閉まった所のカーテンを開ける。

「イチカ！」

エリスは思わず叫んでしまった。

彼女の目の前には身体の至る所に包帯が巻かれ、人工呼吸器を付けられ、その周りでは医療機器が稼働しており、明らかに重症だ。

そして、そこにいたのがイチカであり、手で口元を抑えた。

「これが今の兄さんだ」

「そんな……。どれくらい眠っているの……」

「イチカが目覚めないまま半月は経過している」

エリスは後方から声がし、後ろを向くと其処にはマーク達一行が居た。

「如何やら、表に出る事は出来たようだな。エリス」

「イチカは、イチカは大丈夫なの!!」

「身体の傷は全て癒えているんだ……」

「恐らく、精神の方に異常があるのかも知れない」

「このまま眠り続ける可能性もある。精神に関してはここにいる全員、詳しくないのでね。分からないままなのさ」

「そんな……。あの時また会えるって言ったのに……」

「大丈夫さ！俺達が信じればイチカの奴もすぐ目を覚ますさ！」

ガロードの励ましの言葉に頷くエリス。

「なら、今後の対策を……と言いたい所だが、盗み聞きされている状況で話すわけにはいかないな」

マークがそう言うのと自動ドアが開き、そこから人が雪崩の様に倒れながら入ってくる。

「イタタ、さつきまで開かなかったのにいきなり開いたぞ」

「君達は……確かIS学園の生徒だったか。如何せん、対して脅威では無かったので覚えていない」

「覚えてるとしたスコールが言ってた、更識楯無位かな。後、織斑千冬」

「そうだな。オルバよ」

一部を除き、覚えていないシャギア達。

「で、お前らは何しに来たんだ？ I S 委員会の差し金か」

「違うよ、ガロード。私と簪はイチカの容態が気になって、マドカの後を追っていたら簪達が付いてきちゃって…」

「… 半月もイチカが出てこないから心配になって」

「貴様ら！ 一夏に何かしたのか!!」

「何で俺らが容疑者扱いされるんだよ…」

何しに来たのか不思議に思うのと警戒交じりで聞くガロードにシャルロットは自分達は害は無いと主張し、それに同意する簪それに対し突拍子の無いことを言う簪に呆れるラナロウ。

「私達はイチカに対して危害を加えるなどありえない。イチカの安全の為に私達以外立ち入り禁止していたが」

「何でそこまでする必要があるのかしら？ お姉さんに教えてくれないかしら」

「ふむ、コード・アメリカス 私達の敵と I S 委員会から護る為と言っておこう」

「何故、前者はともかく I S 委員会が出てくる？」

「 I S 委員会はイチカの身柄とユニコーンの引き渡しを要求した。それが何の目的か知っているからこそこうしている」

「 I S 委員会だと」

何故、会えないようにしたのか聞く楯無にマークは答え、その原因の一つに I S 委員会がある事に疑問に思う一同。

「何故、そんな事を要求したのか…。簡単に言えば、イチカを研究の為のモルモットにする為だ」

「… それはどういう事ですの」

恐る恐る聞くセシリア。

「一夏を解剖して男性が動かせる理由を突き止める為か」

「いや違う。イチカが起こした超常現象を自らのモノにする為だ。アレは素質と環境によって開花させることが出来るが、お前達はその段階まで行っていない。それにユニコーンに使われているモサイコフレームノはブラックボックスだからな。 I S を解明出来ないようじゃ無理な話だ」

「まるで自分達は全てを知っているような話し方だな」

「ああ、知っているさ。イチカの事はよく知っているよ」

「…所でイチカの様子は？」

千冬とマークが口論していると簪が口を挟みイチカの容態を聞く。

「身体の傷は全て治っているがここ半月は眠りっぱなしだ」

「そこまで重症なんだ…」

「ねえ、イチカの手を握っていいかな？」

「？別に構わないが」

「そう…。あの時身を挺して私達を護ってくれてありがとう…!？」

簪はイチカの手を握りお礼の言葉を言うと簪の頭に映像が流れ込んできた。

「どうしたの簪ちゃん？」

「今…頭の中に映像が…多分宇宙だと思うけどそれが流れてきた」

「何だそれは？」

「じゃ、私も握ってみるわ」

簪の言葉を聞き、次々と手を握るが簪以外誰も見る事が出来なかった。

そんな中、マークとエリスは意味深な表情をしている。

「ねえ、マーク…」

「ああ、多分彼女は素質があるんだ…。私達と同じ素養が…」

マークはここで考える。今、説明した方が後々の為に良いのかもしれないと。

「お前たちに説明したいことがある」

「一体何の事だ」

「私達について…そしてイチカについてだ」

『!？』

箒達は目を見開いた。それは自分達が一番欲しい情報なのだから。説明する前に場所を移そう。ここは説明が出来ない」

マークが場所を変えようと移動しようとした時、病室にアラームが鳴り響く。

「な、何事だ!？」

『敵襲です。場所はポイントT-100。東京です』

「説明するのは後だ！まずは敵を殲滅するぞ」

「奴は……本格的に攻めてきたか」

「行くぜ！これ以上犠牲者を出さない為にな!!」

マーク達は病室から飛び出していく。

マーク達が居なくなった病室で待機状態のフェニックスが赤く輝き、何かに反応するかのようその色を赤より赤い真紅へと変えていった。

35話

敵が出現した事を知らせるアラームが鳴り響き、マーク達は駆け足で移動していた。

「ねえ、マーク。私が使ええる機体…：バンシイはあるの」

「エリスが乗っていたバンシイだが…：。調べた結果、気になるモノが見つかった」

「気になるモノ？」

「ナイトロという言葉に聞き覚えは無いか」

「強化人間製造システム…：」

ナイトロシステムとは一種のサイコミュシステムなのだが、他のサイコミュシステム中でも群を抜いて危険なものである。

試作可変型MSガンダムデルタカイに搭載されたシステムで特筆すべき点はNT的素養のない者にもNT能力が付与される、ということである。このシステムの恩恵によりOールドタイプTの一般兵でも、ガンダムデルタカイに搭載されたフィン・ファンネルを操る事ができるほどの能力を獲得できる。

これだけ見れば何の問題もない良作のシステムと言えるが、実際にはパイロットをシステムに最適化された強化人間へと改造されているためであり、システムが機能する毎に搭乗者の脳内を強制的に書き換えている。

そのため、パイロットの性格は非常に攻撃的で不安定なものへと変化していく危険極まりないシステムなのだ。

「あのバンシイ、正確にはアームド・アーモラーXCに搭載されている。先のエリスの豹変はこのナイトロが関連している可能性がある。危険なシステムを使わせるわけにいかないのな、解除しようとしたのだが…：。如何せん時間が無いのと人員が足りなくてまだ終わってないんだ」

「じゃ、私が乗る機体が無いって事？」

「いや、乗る機体ならある。まずは格納庫に移動するのが先決だ」

格納庫に移動したマーク達は各々、展開すると武器を取り出し、カタパルトに移動する。

「あの…私の機体は？」

「エリスの機体はアリオスだ」

「GN電池…」

「アリオスの悪口が聞こえたような気がしたが…。今は数機しか無い。あつてもまだロールアウトできる段階ではないのだ」

「せめて、火力のある機体を…」

「なら、ヘビーアームズだな」

「今度は移動式弾薬庫…」

「文句を言うな。今使えるのは後はステイメンしかないぞ」

「ならそれで」

ようやく納得したエリスは頷くとステイメンに触れ、展開している。

「あれ？」

「どうしたエリス？」

「ステイメンって言ったからってつきり巨大アームドベース「オーキス」があるものだと」

「オーキスを作る予定だったが、時間の関係上実装できなかつたが、その代りオーキスの簡易版「ウェポンシステム」は作ることが出来た。ステイメンの性能を殺さずに十分戦う事が出来る」

「なるほど」

現在のステイメンの姿はコンテナやビームサーベル等がオミットされ、ステイメンが背中にあるフレームに各武装を取り付けた形になっている。

「シャギア、オルバは先に発進している。私達も急ぐぞ」

『おう（ええ）』

マーク、ガロード、ラナロウ、コード・フェニックス、マドカ、エリスがカタパルトに移動する。

『システムオールグリーン、発進どうぞ』

「マーク・ギルダール、ハルファス……出るぞ！」

「ガロード・ラン、GX……行くぜ！」

「ラナロウ・シェイド、トールギスⅢ……行くぞ！」

「コード・フェニックス、マスターフェニックス……出るぜ！」

「マドカ・ギルオード、ケルデイル……目標を狙い撃つ！」

「イチカ……私を護って……。エリス・クロード、ステイメン……出るわ！」

戦闘地域に移動していたマーク達の後を追う機影を確認したマーク達は一端止まり、後方から来た連中を睨む。

「貴様達は何しに来た」

「何って、勿論人命救助よ」

「ここから先はお前達にとって過酷なものだぞ」

「それに一夏の秘密を話す前にくたばってもらっては困る」

「それにイチカさんを傷つけた人を信用できませんわ！貴女がどういう人なのかこの眼で確かめる必要があります!!」

「はあ、と溜め息を漏らすマーク達とセシリアの言葉に当然よね、と少し哀しい気持ちになったエリス。

「そっちのお前達もアイツらと同じなのか」

「お姉さんは更識家本家が戦闘地域にあるから気になってね。様子を見に行くつもりよ」

「……私もお姉ちゃんと同じ……。家族を心配するのは当然」

「僕はあるの三人のストッパー兼見張りかな」

「私もシャルロットと同じだ。あの三人のやっている事は軍法会議モノだ。私の部隊である黒ウサギ一隊^{シュヴァールツェ}《ハーゼ》ならあんな愚かな真似はしないぞ」

マーク達はシャルロット達が相当苦勞しているなと思いつつ、楯無達の思いも分からないわけではなく、寧ろ共感できるものだった。

「そうか……。なら、三組に分けた方が良さそうだな。コード・フェ

ニックスとラナロウは楯無達の護衛、ガロードとマドカはあの三人の見張り、私とエリスはシャギア達と合流後殲滅に当たろう」

「うげえ、アイツらの御守かよ……。疲れるんだよな」

「そう喚くな。私だって同じだ」

「ちよつと！何よその反応!!」

戦闘をする前から全身装甲なので表情見えないが何処か疲れたような雰囲気を出すガロード達。

「ガロード達も災難だな」

「こつちはある程度気楽にいけるか。まあ、任されたからにはちゃんとやるがな」

「・・・じゃ、お願い」

「お姉さんの後ろは任せたわよ」

ガロード達を少し、憐れみの眼で見る二人。この時、二人はマドカがああ三人にキレて何かやらかすのではないかと密かに思った。

「これ以上被害が出ないうちに行動しよう」

「そうね。イチカが言ったように私は私に出来る事をやるまでよ」

マーク達は三組に分かれて行動を始めた。

分かれて行動を開始したマーク達は言われた通りの役割を果たすため行動を開始した。

楯無と簪の護衛を担当するコード・フェニックスとラナロウに一本の通信が入る。

『ラナロウ、コードフェニックス聞こえるか』

「ああ、聞こえるぜ」

「一体どうした？」

『二人に頼みたいことがある』

「頼みごとがあるなら言えよ。俺達の仲だろ」

マークの頼み事快く受けようとするラナロウとラナロウと同じ気持ちのコード・フェニックスは頷く。

『更識簪のフォローを頼む。私の予想が正しければ、彼女は私達と同じだ』

「同じって…まさか」

『ああ、だからフォローを頼みたいのだ。恐らく、今回の戦いで覚醒するだろう。そうなった場合、初めての現象に困惑するはずだ』

「成程な…分かった。俺達も出来る限りの事をしよう」

『頼んだぞ』

マークの言葉を最後に通信が切れるとラナロウは先頭を飛ぶ、簪を見る。

「まさか、あんな嬢ちゃんがね」

「アイツもこんな状況で嘘を言うような真似はしないだろう。なら、俺達は起きた事象を解決するまでだ」

「見えてきたわ。あそこに見える一際大きい家が更識家の本家よ」

少し、考え事をしているとハイパーセンサーを使い遠くを見ていた楯無が実家がすぐそこである事を知らせるとラナロウ達も楯無と同じ方向を見る。

其処には更識家本家から黒煙が、上がっているのが見えた。

「そ、そんな…」

「一足遅かったか…」

「諦めるな！まだ可能性はある！」

「急がないと皆が…！」

速度を上げ、本家に急行する。

「これは…」

「此奴はひでえ…」

「うっ、頭が…」

「大丈夫？。簪ちゃん」

本家に到着した四人が見たのは広大な敷地内に見えたのは壁や地面にぶちまけられた赤い液体、凹凸の出来た地面、所々に見える金属片、本来は立派な屋敷だったモノが半壊していた。

その光景を見たラナロウとコード・フェニックスは戦闘が起きたのは間違いないと思ひ確信し、簪はこの惨状を見た途端、頭の中を何かの音が聞こえ、胸が抉るように痛くなった。

「痛い……。胸が……。張り裂ける様に痛い……」

「本当に大丈夫？無理しなくていいのよ」

「大丈夫、お姉ちゃん……!?!」

簪は楯無を心配させまいとしようとした瞬間、簪の中で何か騒めき、このままでいけない、嫌な予感がした簪は超振動薙刀である夢現を楯無に向けて投げる。

「え？ちよ?!」

楯無は咄嗟に上空に飛び出し、躲す。

「簪ちゃんいきなり何するのよ!!」

「まあ、待て楯無。さっきまで自分が居た所をよく見ろ」

「え?」

簪の突然の行動に叱咤するとラナロウが入り、ラナロウが何を言っているのか分からないまま先程まで自分が居た所を見る。

すると、先程まで自分が居た後方に夢現があるのだが、少し、可笑しな所があった。

何故なら、地面に刺さるはずの夢現が何も無い空中に止まっているのだから。

不思議に思った楯無だが、夢現が刺さっている所から、稲妻が迸ると刺さった所を中心に夢現が刺さった空中に刺さった原因が現れる。

其処には黒を基調とし、右腕以外の機体の各部に金色のフレームが使用され、右肩アーマーの上部には赤いライン、イチカ達のガンダムフェイスに額の当たりにモノアイがあり、禍々しい雰囲気を出しているが、背中の先鋭的な翼が禍々しさを更に上げている。

夢現がコクピットの少し、上の当たりに刺さったガンダムタイプがいた。

「すぐ後ろに敵がいたなんて……。簪ちゃんは何で分かったの?」

「私にも分かんない。ただ、ああしなかったらお姉ちゃんが危険だっ
て思ったの……」

「簪に聞きたいんだが、何か直感の様な… そうだな何か騒めきというか閃きみたいなのがなかったか」

「… うん。胸が騒めくと頭の中で何かが弾けるような感覚があった」

簪の言葉を聞いたラナロウ達はどこか納得がいったような表情をすると確信した彼女もまたイチカ達と同じ存在ニュータイプなのだ。

「ねえ、簪ちゃんに何が起きてるのか知ってるの？」

「簪に何が起きたのかは後でイチカの過去話の時に話す。まずは生き残った人がいないか探るのが先決だ。それと例え、何か聞こえても気をしっかり持て、もし無理ならここから少し離れた所で待っている」

「… 大丈夫。今はあの声みたいなのは聞えていないからやれる」

「よし、なら手分けして搜索を開始しよう」

「なら、俺と楯無、ラナロウと簪の二組に分かれよう。その方が効率もいいし、戦力も均等になってる」

コード・フェニックスの提案に異論がない二人は一度頷く。

「じゃ、俺達は敷地内を探すとするか」

「案内は私に任せて頂戴」

「俺達は外側を調べるとするか」

「… うん」

二手に分かれ行動を開始し、順調に事が進んでいるラナロウ達であった。

救助活動をしていたマドカ達と代表候補組。

いざ、救護活動を開始してみると箒達は現場の悲惨さに目を背けなくなった。

「いざ、来てみたはいいけど…」

「実際の現場と私達が思っていたのとは何もかもが違いすぎます

わ…」

「政府は… IS部隊は一体何をしているのだ!!」

テレビや映画などで見たのと違い実際の現場の雰囲気に分達の認識が甘かったことに気づく。

「三人の反応は予想道理だが、お前たちは二人の反応は少し、予想外だな」

「我が部隊も幾度無く戦場に出ている。中には救助活動もあつたからな…。ある程度、場馴れしている」

「僕はそういう経験無いけど、やつぱ… 悲惨だね…。どんなに文明が進化しても、こういうのは変わらないのかな…。今も昔も… これからも…」

「シャルロット…」

こういう事態を経験したことあるラウラは平気な表情をしているが、僅かながら怒りと悲しみを感じる。

「其処の三人はよく見ておくんだな。世界は美しくない…。ただ、醜く、残酷なだけで、これがその一部だ」

三人は沈黙したまま、俯いている。

「今後、私達や兄さんと行動するという事はこういう場面… いや、これよりも酷いモノだという事は覚えておけ。それと私は少し持ち場を離れる」

三人は覚束ないまま救護活動を開始し、マドカは何処かへ飛んでいくとガロード達も作業を開始した。

破壊された街を走る二人の男女が居た。

五反田弾とその妹の五反田蘭だ。

二人は最寄りの避難所に向かって所属不明の機体から目を盗んで逃げていた。

見つければどんな目に合うのか分からないからだ。

走り続けた弾達の顔には疲労の色が見える。

「…ハアハア…。ここで、少し…休もう…」

「…う、うん」

弾達は物陰に隠れ、休息を取る。

「何で…なんでこんな事になったの…」

「そんな事知るかよ…。少し前までいつも通りの日常だったのに…」

ほんの少し前まではいつも通りの日常がそこにあったが、一機の機体による襲撃と同時に事態は一変し、平和な日常は一瞬にして、阿鼻叫喚の地獄と化した。

何でこんな事になったのか、考えている二人に一つの足音が弾達に接近してるのに気が付く。

「音を立てずにどこか行くのを待とう」

「うん」

二人は音を立てず静かにし、物陰から近づく敵をチラッと見る。

そこにいたのはイチカ達が乗るガンダムタイプからV字アンテナを無くし、X状のスラスターが特徴の機体——プリントが一機弾達の近くを歩いて行く。

弾達は息を潜め、見つからないように神に祈る。

祈りが通じたのかプリントは弾達から遠ざかっていく。

「よし、今の内にここから離れよう。また来るかもしれないし、今の様に上手く隠れ切れるとは限らないからな」

「うん、そうだね」

弾は最初は忍び足でその場所から離れると徐々にスピードを付けその場から離れて行く。

弾について行く蘭だが、不意に少し大きな瓦礫に引っ掛かりこけて

しまう。

「いたっ！」

「何やってんだ！」

弾は小声で怒鳴ると弾に視線に何か粉末の様な何かが落ちてくるのが見えた。

弾は嫌な予感がし、上を見ると其処には罅が入り、今にも崩れ落ちそうなビルがあった。

「蘭！そこは危険だ！早く逃げるんだ！！」

「さっきこけた時に足を挫いたみたい……」

最悪だ、と弾が思った瞬間、ビキイという音とがした数瞬後、何か崩れる音が聞こえ、まさかと思いきや先程見たビルを見てみるとビルの一部が無くなり、その無くなった一部が蘭に向かって落下しているのが見えた。

落下している事に気づいた蘭は涙を浮かべ、弾に助けを求め、腕を伸ばした。

弾はこのままでは蘭が死んでしまうと思い、蘭の下に助けようと走り出す。

「ラァァァアンツ！！」

ただ、妹を助けたいという曇りなき思いに従い走り出すとふっと体が軽くなるのを感じるが気にせず蘭の所に向かう。

蘭は思わず目を閉じるがいつまで経っても押し潰される感触が来ない事に不審に思った蘭は少しずつ、閉じた瞼を上げていく。

其処に映ったのは落下してきた瓦礫を先程見たプリントと似ている機体が自分を庇い、瓦礫を支えている光景だった。

「だ、大丈夫か。蘭」

「その声……本当にお兄なの？」

「どういう状況か分からないが、とりあえずそこから離れてくれ」
「あ、うん」

蘭はその場から離れると瓦礫を投げる。

弾は地面に出来た水溜りで自分の身体を確認する。

「俺が……ISを……動かしたのか」

其処に映ったのは白と黒を基調とし、背部にはフリントと同じX状のスラスタに胸部や額に髑髏マークがあり、マントで身体を覆っていた。

今弾が展開している機体はクロスボーン・ガンダムX1改 と呼ばれる機体だ。

クロスボーン・ガンダムはサナリイが木星における実戦データを収集するために秘密裏に宇宙海賊クロスボーン・バンガードに供与され、主にキンケドゥ・ナウが使用した機体である。

本機はイチカのサブ機としての運用を目的に作られた機体であり、接近戦を好むイチカにあった機体として選ばれたのがこのクロスボーン・ガンダムX1改である（以後はX1改と表記）。

イチカのサブ機として使われる予定だったが、万が一自分が助けに行けない時の為に親友である弾に託し、今その役目を全うしようとしていた。

「クロスボーン・ガンダムX1改……。これがこの機体の名前か。少しの間、俺に力を貸せ！クロスボーンツ!!」

古式拳銃を思わせるバスターガンを左手に構え、先程、自分の叫び声に反応して来たフリントに向けて光弾を放つ。

フリントはブランド・マーカールと呼ばれるビーム発振器を使いビームシールドを作り、防ぐとブランド・マーカールを拳の前に回し、四角錐状の光刃を形成するとX1改に向けて殴りつける。

「グウー」

弾は咄嗟にビームザンバーを抜き出し光刃を形成し、防ぐ。

「このお二！」

弾はビームザンバーでフリントを押し出し、ドリル状の先端を高速回転させる事で貫通能力を高めた鞭である、スクリュー・ウエツブを横薙ぎにするとそのまま相手を弾き飛ばすとリーダーに新たな敵影を確認する。

「敵!?まだ来るのかー」

ジムともザクとも似つかない形状をしたMS二機接近していた。

データベースに無い機体の為、モニターには【UNKNOWN】と

表記されている。

正体不明の敵は両掌から光弾放つがX1改が纏っているマントによって無力化されている。

「ビームを防いだ？ だけどいつまで持つか分からない…。 どうする？」

弾はビルなどを使い、避けながら攻撃する機会を窺う。

「このままだとジリ貧だ…。 やるしかない！」

弾はビルから飛び出るとそのまま正体不明の敵に近づくとビームザンバーで切り裂くともう一機の方に切り替えた瞬間、右掌から放たれた光弾が二発マントに接触するとマントが破けた。

「ABCマントが!？」

弾がABCマントがやられた事に驚いていると両掌から光刃を形成し、斬りかかっているのに気づき、左肩部からビームサーベルを抜き取り、光刃を形成させ、防ぐ。

光刃同士ぶつかり合いをしているとレーダーが後方から接近する機影を確認すると先程倒し筈のフロントがビームザンバーを構え接近しているの気づく。

機体の至る所に凹凸の跡が見えるが撃破までには至らなかつたようだ。

「クツ、こんな時に」

現在、両手が塞がっている弾に後方から接近するフロントに成す術も無く、弾は背後から串刺しにされる光景が浮かんた。

「クソッ…このままじゃ…」

諦めかけたその時、フロントの軌道上に一発のミサイルが横切り、フロントは一度急停止し、ミサイルが来た方を見る。

其処にはウエポンシステムを搭載したステイメンとハルファスが駆け付けた。

「あれはクロスボーンか…」

「あれも敵って訳じゃないわよね。 敵なら仲間割れみたいな事しないはず」

ハルファスか羽根の形をしたサイコミュ兵器フェザーファンネル

が弾の横を通り過ぎると正体不明機を蜂の巣していく。

エリスはフォールディング・アームを使い、ビームライフルとフォールディング・バズーカを取り出し構えるとフリントに向けて放つ。

フリントは光弾を放つが、ウエポンシステムに搭載されたIフィールドジェネレーターを起動させ防ぐとそのまま直進し、フリントをメガ粒子砲で撃墜させる。

「其処に君大丈夫か？」

「え？ハイ、大丈夫です。助けてくれてありがとう」

「所でその機体をどこで手に入れの？」

「親友からです。あ、親友って言うのはISを動かしたイチカの事です」

マーク達はイチカによって贈られたモノだと知ると、少なくとも敵ではないと認識する。

「そうか、イチカがお世話になったな」

「イチカの事知っているんですか？」

「ええ、私達の家族よ。詳しい事はここを乗り切ったら話すわ」

三人がそんな会話をしていると多数の敵影が接近している中、一つの通信が入る。

『話すのは構わないが、出来れば手を動かして欲しいモノだ。それとそこから離れた方が身のためだ』

「ちよ!？」

「回避イイイ!!」

「え、何？うわあ!？」

シャギアの最後の言葉の真意に気づいたマークは弾を庇う様な形でその場から離れ、エリスもその場から離れるも後方から来た巨光が巨体故にウエポンシステムの一部に当たり融解する。

極太の巨光はそのまま直進し、接近する敵軍の中心に当たると立て続けに爆発が起き、敵軍の中心に大きな穴を開ける。

「危ないじゃのいの!？」

『君達なら避けられると確信していたからね。何、信頼の表れだよ』

「そんな、信頼はお断りだ」

『如何やらこつちも敵が来たみたいだから通信はこれで終わるよ』

シャギアとオルバの通信を聞いたエリスはこの戦闘が終わったら、一発ぶん殴ってやると心の中で思った。

「にしても、あの機体は何？見たことないわよ」

『恐らく、私が把握していないジェネレーションシステムのデータベースから引き出したデータを元に作られた機体だと思われます』
「取り敢えず、倒せばいいんでしょ！ミサイルコンテナ!!」

ウエポンシステムからコンテナミサイルが射出されるとそこから夥しい数のミサイルが放たれる。

大量のミサイルは正体不明機——ガフラン、ドラドに命中し、一気に殲滅する。

「シィィィズメエエ!!」

爆発の煙の中、一機のガーベラ・テトラが接近するが、メガ粒子砲を叩きつけられそのまま上昇し、メガ粒子砲から極光が放たれ、即撃破された。

「見事な出落ちだな」

『敵第二陣来ます』

「敵を一掃するわ!!」

「え、えーと俺はどうすれば?」

「自分に接近する敵を倒せばいい。他は私達に任せたまえ」

そんな会話をしている間にエリスはミサイルコンテナやフォールディング・バズーカを使い敵を殲滅していく。

「ミサイルコンテナが切れた!?!」

「無駄玉を撃ち過ぎだ!!」

『あー、こちらマドカ。エリスの事だから無駄玉を使っていると思うので、近くのポイントに補給物資を置いておく。詳しい座標は後で送る』

「ありがとうマドカ!」

『やはり無駄玉を使ったか。この愚か者め』

マドカのエリスに対する罵声を最後に通信が切れると三人の戦闘

を再開した。

そして、この戦闘が終わったのは戦闘開始から3時間後の事だった。

戦闘終了後、巨大モニターがある広い一室の中にマーク、エリス、ラナロウ、ガロード、ティファ、シャギア、オルバ、コード・フェニックスのGジェネチーム。

千冬、箒、鈴音、セシリア、シャルロット、ラウラ、簪、楯無、弾のISチーム+αの17人が集まっていた。

「ラナロウ、そっちの戦果はどうだった？」

「生存者はいたが、判明してるだけで軽症者が25名、重傷者が8名で・・・死者が3名だ」

「そうか・・・。次、マドカ頼む」

「ああ、特に死者という死者は居なかったが、市街のダメージが酷いIS委員会も特に動いていない。奴さんは相当混乱しているらしい。私だけやるしかないのが今の現状だ」

「そうか。最後に私達だが、未確認の敵と遭遇した。アプロディアの報告によると彼女も知らない機体だという事だ。詳しい事は報告書にまとめてあるから後で目を通してくれ」

各々、報告する中で妙に苛立った鈴音が前に出る。

「アンタ達の報告なんてどうでもいいのよ！早く、イチカについて話なさいよ!!」

「定時報告は私達にとって情報の共有を図る機会だ。少しくらい待てないのか君は」

「なら、それは後にしてイチカについて話してくれ！それと何でここに部外者が混じっているんだ!!」

箒は弾を指さす。

「俺もなんで呼ばれたのか、さっぱり…。」

「彼も今回の事件の当事者であり、今後私達に関わっていく人物の一人だからだ。それに親友として、イチカの空白の時間に何があったのか気になっているのだから。奴の変化に」

マークの言葉に一瞬、肩を震わせ、頷く弾。

「今からそのことについて話してやる。だが、それなりの覚悟を持って見て欲しい。生半可な覚悟で見たくはない…!?!」

マークは何か気づいたのかハルファスを部分展開し、フェザーファンネルを二つ射出すると一ヶ所の天井を撃ち抜く。

「うにゃああ!?!」

短い悲鳴が聞こえるとドタドタと騒がしい音がすると天井が抜け落ち、そこから一人の女性が落ちてくる。

不思議の国のアリスに出てくる様な服装をした女性、ISの産みの親であり、今の社会を作った張本人とも言える存在。

「何しに来た。束」

そう、篠ノ之束である。

「うー、いつくんの過去が分かるから飛び出してきたんだよー!!それにいきなり、人を撃つなんて、しかもマー君の攻撃は束さんのキューティクルな髪に当たったんだよー!」

束は髪の一部を見せると黒く焦げており、その部分から異臭がしている。

「何者か分からなかったの、それなりの実力行使をさせてもらった。反省もしていなければ後悔もしていない」

キリツとした表情で言うマークに束は両手上げ、如何にも怒ってますよっという素振りを見せる。

「予想外な事が起きたが、これから見せるのはイチカの過去であり、理解出来なところもあるだろう」

イチカが作ったハ口と部屋にある巨大モニターに接続する。

「これから見せるのは非現実的であり得ないことだらけだ。人の過去を見るという事はその人が何を視て、何を聞き、何を思っただけ行動したのか理解しなければならぬ。そしてこれは君達にも起こりえる事

だという事を分かってくれ」

コンソールを操作し、映像を流す。

こうして、彼女達はイチカがどんな風に思い、どんな気持ちで今を過すごしているのか、その全てを知る事になる。

36話

イチカの過去を説明するという事で多くの関係者が集まっていた。「これは第三者が見た場合を想定してイチカが作った物だ。イチカ自身いつかは説明する時が来ると思っていたんだろ？」

そして、映像が流れ始めた。

最初に流れたのはイチカが誘拐された時の映像だった。

手足を縄で拘束させられ身動きが取れない状態のイチカと誘拐の実行犯である黒服の男達はイチカの誘拐が成功した事により、依頼である、織斑千冬の決勝辞退は完遂したも同然だった。

祝杯を上げている中、一人の男によつて打ち砕かれた。

『おいッ！コレを見ろよ』

『良い所にきた！お前も来いよ！これから一杯飲みあおうぜ！』

『イイからこれを見ろ!!』

男達は言われた通り男の手にあつた小型のテレビを見る。

そこに映っていたのは決勝戦に出場し、戦っている千冬の姿だった。

「アンター！実の弟が誘拐されてる中、何決勝に出てるのよ!!そんなに名誉が大事!!」

「違う！私は知らせていなかったんだ。イチカが誘拐されたいるな
どと思ひもしなかったんだ!!日本政府アイツらは『氣を使って言わなかった』
と言つた。そのせいで私はイチカを..」

この映像を見れば名誉を優先した風に見えるが当の本人しか知らない裏の事情を暴露した。

千冬の胸ぐらを掴んでいた鈴音は手を離すが当の本人は何処か納得していなかった。

映像は進み、千冬が決勝戦に出た事によつて混乱し、証拠隠滅の為に一人の男が銃口をイチカに向けた所で一度映像が止まった。

「何で映像を止めるのかな？」

「ここから先を流す上である事を言っておかなければ、混乱すると判断したからだ」

「ある事?」

マークの言葉に全員が首を傾げる。

「私達はこの世界の人間ではない。異世界の人間だという事だ」

「ハッ!いきなり何を言うかと思えば。そんな出鱈目聞く耳持たん」

「私の言った事は嫌でもわかる。映像を再開するぞ」

突如、目の前の空間が歪み始め、男達はイチカを見捨て逃げていき、イチカはその歪みの中に飲み込まれていった。

次に移ったのは15M以上はあるであろうロボットが並ぶ格納庫が映った。

「巨大ロボキター!!」

「簪ちゃん少し、落ち着いて」

倒れているイチカの下にマーク達は駆けつけ、生きているのか確認している。

その後、イチカはラナロウに担がれ、医務室に運ばれ、そこでお互いの事を話した。

そして、マークが二人の回答から導き出した回答から「パラレルワールド」ではないかと言われ、しかも帰れないときた。

その事実を受け止めたイチカは絶望した表情をしている。

絶望を感じていたイチカの目の前に一つの手が差し延ばされていた。

エリスだ。エリスの誘いの声に誰一人として拒否する人はなかった。

イチカは差し伸べられた手を取ると笑顔で笑いその誘いを受けた。

「まるで心から笑ってるみたい」

「さっきのアレは何だ?」

「イチカが現れたのは私達が乗るネエルアーガマの格納庫。その周りにはあるのはMSだ」

「MS?ネエルアーガマ?」

「MSは君達で言うISを15M以上に大きくし、全身装甲にしたモノだと思えばいい。ネエルアーガマはその巨大なMSを格納でき、且つ人が住める母艦だ」

場所が変わり、映った場所はMS同士の戦闘が起きた市街地だった。

その中には逃げ回る人たちが映っていた。

「あれイチカじゃない？」

「あ、本当だ」

「この映像って・・・」

「恐らく、あの映像だ。ティファ、済まないが全員分の飲み物を買ってきてくれ」

「・・・分かりました」

マークはティファにお金を渡すとガロードも付いて行こうとするがそれを止める。

「ガロード、今から映る映像はティファにとって負担が大きい。だから、わざとこの場から離れるようにしたんだ」

「それ程までなのかい？」

「私達は見慣れているが、その光景は彼女にとっては酷な映像だ」

オルバの疑問はマークの言葉によってその意味を理解した。

「イチカは何をしているの？」

「この時のイチカは近くで戦闘が起きた場合、避難誘導をしたりしていたな。この時のイチカはまだ戦う決意をしていない時だ。それとここから映る映像は刺激が強すぎる。そういうのが苦手だったら目を塞げ」

イチカは避難誘導する中、ある事に気づいた。MS同士の戦闘の近くに一人の少女がその場に立ち止り、泣いていたのだ。

イチカは叫びながら少女の駆け寄ると少女はイチカに手を伸ばした。

誰もがその手を取り、助けると思った。だが、実際は違った。

イチカがその手を取った瞬間、近くでコクピットをやられ制御を失ったMSがビルに倒れ込み、その時に出来たビルの瓦礫が少女を押し潰し、イチカの身体に少女の返り血が飛び散り、イチカは何が起きたのか分からないでいた。

その光景に思わず、眼を背ける者、手で口を抑え、嘔吐に耐える者

がいた。

そして、映像のイチカは涙を浮かべ、顔を横に振り、戦場にイチカの叫び声が響いた。

そして場面が変わり、狭い空間の中心に宇宙服を着た一人の人物とその周りにはモニターが全面に張られ、グリップを握っていた。

『これはお前の初の実戦だ。私からの命令は只、一つだ。生きて帰ってこい』

モニターの映像が変わり、そこに映っていたのは何処までも続く広大な空間だった。

「ねえ、ここって…」

「宇宙だ。私達の世界では人類は宇宙に進出し、そこに居住施設コロニーを作っている」

「そ、そこまで技術が進歩しているのか」

映っている人物から登場しているMSが映る。

細身の身体に青、赤、白のトリコロール、機体より一回り小さい長い銃、赤と黒の細い盾。

「!？」

そのMSを見た全員が目を見開いた。

そのMSは自分達が知っている人物が乗っていた機体そのものだったから。

『イチカ・ギルオード、Zガンダム…行きます！』

紛れも無いイチカの声だった。

ZガンダムはMS形態からウェイブライダーに変わり飛行している。

気が張っているイチカに一つの凸顔の機体——ネモが接近し、Zガンダムに触れる。

イチカに語りかけた連邦軍の兵士はその場から離れ、MS形態になったZガンダムはデブリの中を進んでいくとレーダーに反応が見つかる。

イチカは訓練通り、目標を捉えるとトリガーを引こうとするが、撃つ寸前に銃口をズラしコクピットではなく、モノアイの緑色の機体――ザクIの左腕を撃つ。

左腕を撃たれたザクIはそのまま直進し、Zガンダムを蹴り飛ばす。

ザクIはヒートホークを構えるとイチカはZガンダムのシールドで防ぐとZガンダムとザクIの間に一つの光弾が通り過ぎるとザクIは距離を置き、視線をずらすと先程、イチカに語り掛けたネモのパイロットが助けに来た。

Zガンダムとネモはビームライフルを構えるとザクIはデブリを上手く利用し、隠れながら行動する。

イチカがビームライフルを放つが当たらず、焦りながら辺りを見渡していると背後からザクIが接近し、背後から奇襲しようとした。

間に合わないと持った瞬間、ネモがZガンダムを押し出し、間一髪免れるが、その変わりネモの腹部にヒートホークが突き刺さる。

ネモの周りに電気が出たり消えたりすると連鎖的な爆発を起こし、爆発した。

IS陣はあの爆発の中、あのパイロットが生きている確率は絶望的だと思った。

イチカの中を怒りが支配し、ZガンダムはザクIの肩を掴むと頭部を何度も殴り、蹴りを放つとザクIはデブリにぶつかるイチカはビームライフルの銃口から光刃を発生させ、投げるとそのままコクピットに刺さり、爆発を起こす。

「これがイチカの初めての出撃であり、初めての仲間の死であり、初めての人殺しだ」

人殺しという言葉が箆達に深く突き刺さる。今、あの瞬間にイチカは初めて人を殺したのだと。

「そして、イチカはこの時を境に不可思議な出来事が起き始めた」
「不可思議な事？」

「戦場で戦うようになってからイチカは時折、遺言のような人の声が頭に響くようになったと言った」

「遺言…。まるであの時みたい」

「恐らく、簪は経験あるだろう」

「うん」

「それはNTが持つ、一つの特性だ。詳しい事は後で説明する」

それから時は流れ、突如、マーク達に「アプロディア」と名乗る人物がある指定ポイントに来て欲しいという内容だった。

マーク達は半信半疑で指定されたポイントに向かっていた。

イチカは白いパイロットスーツを身に纏い、壁にあるレバーの様なモノを掴みながら進んでいく。その後を追うようにエリスが付いてきていた。

「あのレバーの様なモノはなんだ？」

「ネエルアーガマは基本宇宙空間での活動が多く、宇宙で活動する場合、ネエルアーガマの中は無重力になる。壁とかを蹴る事で進むことも出来るが、基本はあのレバーに掴まって行動する」

「なるほど」

格納庫に着くとZガンダムの中に乗りこんでいき、そのまま発進する。

Zガンダムの中に通信が送られるとネエルアーガマから警告が送られた。

イチカ達が肉眼で確認したMSは緑のカラリングにピンクのモノアイを持つザクの様な機体その中に紫を基調とした機体があった。

その前には赤を基調とした機体があった。

「箱ってなに？」

「それに関しては私達も分からん」

ラプラスの箱をめぐる戦いは確かにあるがマーク達はその中心にある、ラプラスの箱がどういうモノなのか分からないでいた。

シナンジュとZガンダムのビームサーベルが、幾度となく交わるとシナンジュはビームサーベル突き立てるが、イチカは後退しながら

ビームサーベルを投げるとビームライフルを連射し、ビームを拡散させる。

フロントルは回避行動を取ると先ほどまでいた所に高出力の光弾が飛んでいく。

イチカの前にユニコーンガンダムが立ちはだかる。

『そんな… 力だけで世界を変えたって何も意味が無いんだ!』

ユニコーンガンダムの各所が展開していくと赤いサイコフレームが露出し、一本角は黄色いV字アンテナになり、「ガンダム」に姿を変える。

『そうだ!正しい戦争なんて無い!戦いが起こればまた関係の無い人が傷つき、悲しみそして沢山の命が消えていく!そんなことはあつちやいけないんだ!!』

戦いを戦争を体験したモノの言葉の重みは違った。

互いに武器を構えた時、一人の男の声が聞こえた。

『そうはいかねえんだよ!』

何かに気づいたイチカは四方八方から襲いかかる赤い光線を避ける。

その動きはまるでどのタイミングで何処に撃つのかわかってるようであった。

ガンダムとは程遠いシルエットの赤い機体は背中から絶え間なく赤い粒子が放たれていた。

イチカは各自に指示を与えると目の前のアルケーガンダムと交戦した。

アルケーガンダムのパイロットである、アリー・アル・サーシエスの発言にその場に居たほとんどのモノが不愉快になった。

「なに言ってるのよ。戦争が好き?そんなの余所でやりなさいよ!」

「吐き気がするね。戦争の為に戦うなんて」

「私も同じ気持ちだ。自らの欲望の為に命を弄ぶ行為は褒められたものではない」

命のやり取りをしてきた彼ら命の大切さを理解しているからこそ、アリー・アル・サーシエスのような行為が許せないのだ。それは映像

に映っているイチカも同じだった。

Zガンダムから現れた赤いオーラが機体を覆い、フアングの攻撃を無力化していき、その光景に危機感を持ったアラー・アル・サーシエスは宙域から撤退しようとするが、肥大化したビームサーベルがアーカーを切り裂き、アラー・アル・サーシエスが乗った一機の小型機が飛び出し、宙域から離脱した。

その光景に見覚えのある人物が居た。

「あれって……、クラス対抗戦の時に見たのと同じ……」

「これはZガンダムに搭載されているバイオセンサーと呼ばれるシステムが完全に起動した時に起きる現象だ。あの現象を説明するには、まずは関連用語から説明する必要がある。簡単に言うとなイコミュと呼ばれる人の思惟を機器の制御に反映させる装置がある。それを限定的に機体の操作に特化したのが、バイオセンサーだ。だが、開発のプロットとは全く異なる現象を引き出すことが可能で、例を挙げるのであればZガンダムを覆ったバリアーやビームサーベルだ。あれは高められたパイロットの意志とイコミュの持つ、特定の間人が出す感応波の増幅機能の副次的なモノだろう」

「あの現象が副産物だ?!」

「ああ、そうだ。このサイコミュは色々なヴァリエーションがあり、武器として使われる事もある。身近なもので言えばセシリアのブルー・ティアーズが近いな。サイコミュ関連で言えば後はサイコフレームがよく関わってくるが今は単語だけを覚えておけばいい」

そして、Zガンダムからエクシアに乗り変えたイチカが御大将との戦いが始まった。

「イチカの機体がZガンダムから、エクシアに変わっているけど、MSってそんなすぐ、手に入るモノなの?」

「量産機でも性能によってピンからキリだ。量産機で億設定なら、エクシアの様なワンオフ機はその百倍以上とも思えばいい」

「な!?!」

「アンタ達そんな機体沢山持つてるわけ!?!どんだけお金持ちなのよ」

「お金持ちという分けでもない。確かに依頼をこなせば金は手に入るが、破損した機体を修復したり、修復した機体を売りさばいたり、依頼先の前払い、仲間から寄付など色々だ。あのエクシアに関してはエクシアとデユナメスの設計図と資材、そして二機分の太陽炉が送られ、設計図を基に作ったんだ。誰が送ったのかは私達は知らない」

「それは私が送りました」

「だ、誰だ!」

「ま、まさか... お化け!?!」

突如、聞こえた第三者の声に警戒する筈と姿が見えない声の主をお化けと予想する弾。

ハロのツインアイから光が放たれるとやがて、人の形になっていく。

「私の名はアプロディア。今はイチカ達の協力者です」

「人と同じ、考えが出来るAIだと思えばいい」

マークがアプロディアについて簡単に説明する。

「あれ?何かあの暑苦しい人の戦い方イチカに似てる」

「ああ、確かに拳で戦う所とか特に」

「奴の名はドモン・カツシュ。後のイチカの武術における師だ。ドモンは一子相伝の流派である、流派東方不敗の後継者だ。前にドモンが私に『イチカを俺の後継者にしようと思う。アイツは精神的にも肉体的にも成長した。アイツなら、流派東方不敗を、キング・オブ・ハートを名乗るのに十分、値する男だ』と言っていたな」

「剣道で、私に勝てなかった一夏が一つの流派を継承するだど...」

「イチカは剣道における才能は低いのもしれん。だが、奴はそれを補う為の努力を決して、怠らず、諦めない。例え才が乏しくても、日々努力する奴は才がある人と同等かそれ以上の実力を身に付ける。これは私の経験則だが、過去の勝利や栄光に縋っている者はいつか、足を掬われる。私はそう言った人を何度も見てきた」

イチカが使うバーニングフィンガーとドモンが使う、ゴッドフィンガーが類似している事や以前、戦った時のイチカとドモンの戦闘スタイルが似ている事に気づいたIS組。

それもそのはず、イチカに武術を叩きこんだのは紛れもなく、その映像に映っている男——ドモン・カッシュが師事したのだから、イチカの格闘戦における戦闘スタイルが似ているのは当然といえるだろう。

ゴッドガンダムがパワー負けし、押し飛ばされると天使を思わせる機体が、ツインバスターライフルを放つが、ターンXはそれを回避し、両者格闘戦に入るがドモンもヒイロも押され気味である。

「やったか？つてあれフラグだよな」

「それな」

イチカも参戦するが、戦場を自由気ままに駆け巡る、ターンXに当てる事が出来ず、ターンXは一回転すると色鮮やかな蝶の羽を広げた。

「なんだあの羽の様なモノは？」

「綺麗・・・」

「確かに綺麗だが、アレは恐ろしい兵器でもある」

「どういう事だ？」

「あの蝶の様な羽は月光蝶と呼ばれる、ナノマシンを地上に撒き、全ての物質を砂状に分解する機能を持った無数のナノマシンです。これと同じシステムを持った機体が文明を滅ぼしています」

『なっ!?!』

マーク達よりもターンXに詳しい、アプロディアが説明していると、アプロディアは意味深な事を言う。

「無人機を使い、この世界の土壌を採取し、調べてもらった結果。月光蝶が使うナノマシンと同質のナノマシンが検出されました」

「待て、それはどういう事だ？この世界に黒歴史が存在したとでもいうのか」

「可能性は無くは無いです。現在、この世界の科学レベルでは到底、作る事は不可能です。それにナノマシンが検出されたのはかなり深い地層から検出されました。これらを考慮した上で考えるのであれば、大昔にこの世界に黒歴史が存在し、何かしらの理由で月光蝶を使い、文明を滅ぼした。検出されたナノマシンはその時に地上に撒か

れたもので、深い地層から検出たのは後に火山活動等によって地表が変化したからと推察できます」

「俺もアプロディアの考えは間違ってるんじゃないと思う。それを肯定するモノを俺は知っている」

コード・フェニックスは皆に見える様に移すと其処には建造物らしきモノの上空に赤いツインアイに白い髭の機体が色鮮やかな蝶の様な羽らしきモノを出し、飛んでいる所と、先程と同じ機体について行くかの様に後ろについて行く人々と見送るかの様に佇んでいる人々が描かれた壁画を見せた。

「間違いなく、あの機体だ」

「何かの見間違いじゃないの？」

「見間違はずがないわ。私達はそこに描かれている機体と瓜二つの機体と戦っているわ」

「アプロディアが唱えた説が濃厚になったな……」

思わぬ発見と出来事に考え込むマーク達とそれについていけないIS組。

それに気づいたマークは一度咳払いし、イチカの過去を説明する。

イチカは格闘戦を仕掛けるが、GNロングブレイドが破壊されるが、ビームサーベルを取り出し、攻撃を再開する。

ギンガナムとイチカが激しい言い争いするとイチカが『TRANS—AM』と叫ぶとエクシアが赤く染まり、残像が生まれるほどの高速機動で移動し、ギンガナムを翻弄するとGNソードでGNビームサーベルとターンXの胴の部分をX字に斬り、一端後退するとGNソードを突き立てるように構えるとそのまま、ターンXに突き刺した。

ギンガナムの叫び声と共にターンXの爆発に飲まれ消えた。

エクシアのTRANS—AMの活動限界が来ると元のカラーリングに戻るのと正体不明の敵の増援に苦戦し、敵のビット兵器が右脚部に刺さるとイチカが苦しそうに叫ぶ。

「何故、イチカは今の攻撃を避けられなかった？」

「それはTRANS—AMを使用したからだ。TRANS—AMは機体性能を三倍以上に引き上げることが出来るが、その代償としてGN

粒子が再チャージされまで機体性能が落ちる、謂わば諸刃の剣だ。あの状況ではまだGN粒子のチャージが終わってない状態での戦いだ」
「TRANS-AMの説明は福音の時にイチカが説明しています」
「赤くなるのがTRANS-AMって言うのか」

その後、学園祭で使ったフェニックスの最大奥義である、バーニングファイアーを使い、撃破すると全員がハルファスに視線を移すと各自攻撃準備をする。

ドモンが集中する機体は金色に輝き、ウイングガンダムゼロは二つに分割された、ツインバスターライフルを一つに結合させるとエネルギーをチャージさせ、フェニックスは翼部を前面に向け、イチカは残りの武装を全て取り出す。

ドモンは流派東方不敗の全てを極めた者が使える最終奥義である、石破天驚拳を放ち、コロニーを一撃で破棄できるツインバスターライフルの最大出力で攻撃し、フェニックスは翼部から放たれるメガビームキャノンで攻撃し、エクシアの残りの全武装を投擲し、ライフルモードで攻撃し、如何にも過剰といえる攻撃をすると其処に残ったのは一緒に現れたフェニックス・ゼロの残骸だけが残った。

「イチカの乗ってる機体が変わっていたが、MSというのそう易々と手に入るものなのか？」

「いや、そこまで安くない。機体によって、ピンからキリだ。量産機であれば、数千万以上、私達が乗っている機体であれば、数億ぐらいはするだろう。MSを運用する以上、維持費にもコストが掛かるのだから、そう易々と新たな機体は購入せん。それにエクシアに関しては匿名の誰かによって設計図と機材そして、二基の太陽炉が送られた。私達はそれを組み立てただけだ」

「エクシアとデュナメスに関するモノは私が送りました」

マーク達が長い間、疑問だった、匿名の送り手はアプロディアだった事に少し驚くと納得した。

だが、ここで新たな疑問が生まれる。

「先程、エクシアの設計図を送ったと言ったが、何故私達に送ったの

だ」

「システムから離された私ではハルファスガンダムを止める事はできませんでした。そこで、私は暴走するハルファスガンダムとジェネレーションシステムを止めてくれる人を探しました」

「その時に見つけたのが私達か」

「はい。多くの人を指定ポイントに集めて、そこで、システムの存在を知っても、悪用しない人を…。歪められたシステムを正す為に戦ってくれる協力者を探しました。私が求めていた協力者となりうる人達に白羽の矢を立て、出来る限りのサポートをしました」

「システム？暴走？一体どういうことだ」

「ハルファスの暴走は何者かによって起こされたものだ。超密度複合型システム——ジェネレーションシステムによって作られたモノなんだ」

「私はニューラル・ネットワーク・アプロディア。膨大なネットワークと大量のデータの集合体ニューロをまとめるシステムの一部という事になります」

アプロディアの制御下に戻ったハルファス共にジェネレーションシステムを進んでいくマーク達。

システムの中核に向けて、進んでいくと辺り一面にある固定砲台カーと女性のような機体レギナが待ち受けていた。

イチカ達は各自殲滅していると、突然、赤いツインアイに白い髭の機体System-99 ヴガンダム——通称黒歴史が姿を表す。

「あの機体って、さつきコード・フェニックスが見せたのとそっくり…」

「アレは…、あの時の…」

「ん？黒歴史を知っているのか？」

「ああ、第三アリーナに未確認の機体が、接近していると警告を受けた私達は第三アリーナに向かった。その時に貴様達が言う黒歴史がいたんだ。奴は抱き抱えてたイチカを私に渡すと奴はその場から、文字通り姿を消した」

「どういう事だ…。奴に意志があるとでも…」

混乱するマークだが、その事は後でも考えれると結論付けると、説明に戻る。

この時、黒歴史が自分達と…この世界やGジエネの世界に関わる存在だと、まだ知らなかった。

37話

幾多の戦場を潜り抜けたイチカ達にとって、ガーダーシリーズやレギナの攻撃を避け、殲滅する事にそう時間は掛からないだろう。

だが、イチカ達に予想だにしない敵の増援よって、困難を極めていた。

イチカ達の目の前に現れた、黒歴史は空間跳躍や桁外れの火力を持った武器で攻撃し、攻撃しようにも空間跳躍によつて逃げられ、同じ方法で近くに現れ攻撃する。

予測可能回避困難な攻撃とフェニックスを上回るナノマシンによつて、例えばダメージを与えたとしてもすぐ修復してしまい、無傷の状態に戻ってしまう。

「なによアレ……。チートじゃない」

「確かにチート性能だ。今まで、戦った敵の中で一番の強敵と言えるだろう」

マーク達は画面を見ると其処にはエクシアの目の前に現れた黒歴史がビームライフルを射出し、イチカは寸前で避けるが左半身とコックピットの一部を破壊され、機体制御を失ったエクシアは地面に不時着する。

「イチカは！・イチカは無事なのか!？」

「落ち着け織斑千冬。ここでイチカに何かあれば、それは今のイチカにも表れている。それが無いという事はイチカは無事という事だ」

「ああ、そうだな。私としたことがつい、感情的になつてしまった」

イチカが撃墜された事に気づいた数名のパイロットがイチカを救援に向かい始め、その中にエリスとマドカの姿もあった。

ガーダーに行く手を阻まれ、思うように行動できないエリス達、左半身とコックピットの一部分が融解し、融解した部分から白いパイロットスーツを着たイチカの姿が見えた。

イチカは罅が入り使い物にならなくなったヘルメットを投げ捨てるとヘルメットの破片が刺さったのか頭部から薄らと血を流していた。

黒歴史は巨大なビームサーベルで、エクシアに止めを刺そうとするが、寸前で攻撃を止めるとまるでイチカを観察するかのようじつと見るとその場から完全に姿を消した。

何が起きたのか分からないイチカは取り敢えず、この場から離れようと操縦桿を弄るがまるで壊れたブリキの様な音を立て、動けないでいた。

そんなイチカの前にエリスとマドカが行く手を阻んでいたガーダー蹴散らし、イチカの下に辿り着くとフェニックス・ゼロがエクシアの右肩を掴み飛行するとデュナメスが後衛に付き、イチカをネエル・アーガマに帰還した。

帰還後、エクシアを整備士であるケイ・ニムロッドが診断すると修理すれば今まで通り使えるが短時間での修理は不可能だと結論を出した。

イチカは頭部の怪我以外にも何処か怪我していないか診察するために医務室に運ばれた。

医務室から戻ってきたイチカは頭部に包帯を撒いた状態で、エリス達の所に行くと「もう一度出る」と言い、そこでエリスと口論になった。

イチカの搭乗機である、エクシアは半壊で、使える状態ではなく、MSに乗る事で傷が開き、悪化する事を恐れたエリスはイチカに出撃させまいと一生懸命説得するがイチカの覚悟の籠った瞳を見た瞬間、何も言えなくなり、エリスが折れる形になったが「無理はしない」という条件付きで出撃する許可を得たイチカ。

ガーダーとレギナを殲滅したマーク達が中枢へのゲートを見つけ、事件は最終局面に向かった。

アプロディアの案内でシステムの中枢に到着したマーク達は一見すれば遺跡、だがその中身はどの世界の技術でも再現不可能な代物だ。

アプロディアは「ここに集まった情報を元に新しい世界が創られる」と説明すると誰もが騒然となった。

それもそのはず、自分達がいる世界が一つのシステムによって作られたものだとなれば誰が想像できようか。

騒然とする一同に警報が鳴り響き始め、何事かと慌ただしくなるとアプロディアの身体に異変が起きた。

アプロディアは自身が消去されていると驚きの声を上げると、中枢上部から白いMSらしき機体が舞い降りてきた。

バルバトスと呼ばれる新たな機体は翼を広げると孔雀のような姿に変形し、一つ一つの羽から光を放ち始めた。

何が起きるか理解した艦長は退避命令を出すとバルバトスの羽から放っていた十二個の光が中心部に集まり、巨大なビームとなってハルファスガンダムに向けて発射され、ネエル・アーガマ改はギリギリの所で回避に成功するが、ハルファスガンダムはバルバトスのビーム砲の直撃を受ける。

バルバトスの攻撃の直撃を受けたハルファスガンダムはコクピット部分の直撃は避けられたものの、特殊機能である「ナノスキン装甲」を持っているにも拘らず、機体全体にダメージを負い爆破される。

事の元凶がバルバトスだと判断した艦長は総員に戦闘準備だと伝え、ネエル・アーガマのカタパルトからMSが次々と発進した。

バルバトスはイチカ達を敵と認識すると自身を中心に八つの巨大なニューロが現われ、その一つ一つが歪み出すと、マーク達の乗っている機体の姿をしたコピーMSが出現した。

コピーMSを相手にする部隊とバルバトスを倒す部隊の二手に分かれる事にした。

マーク、エリス、イチカのエース陣がバルバトスへ向かい、残りのラナロウ達がコピーMSの撃破し、合流すると言い行動を開始した。バルバトスとの戦いは熾烈を極めた。

後で合流すると言ったラナロウ達も敵の増援にてこずり、合流できないと分かり、合流するまで耐えられるかという弾薬や燃料などの問題がある為、三人で倒す事にした。

フェニックス・ゼロとフェニックスのフェザーファンネルでバルバトスを足止めするとガンダムがウェーブスライダーに変形し、バルバトスのコクピットと思われる部分に突撃する。

バルバトスのツインアイから光が消えると活動を停止、マークはラナロウにバルバトスの撃破を伝える最中、エリスは今回の戦いで一番怪我をしているイチカが先の戦いで受けた傷が悪化していないか心配の為、Zガンダムの近くまで駆け寄った。

一夏は問題ないと言い、Zガンダムを動かすとジエネレーションシステムの中枢部が突然揺れ出し、所々で爆発が起き始めた。

マーク達は母艦である、ネエル・アーガマに帰還し、最大戦速で離脱を試みた。

ジエネレーションシステムからネエル・アーガマが飛び出すと同時に、脱出口から火柱が立ち昇り、ネエル・アーガマはギリギリの所で脱出に成功した。

無事脱出できた事に歓声を上げて喜ぶブリッツクルーとMS内で待機していたマーク達は安堵の溜息をついた。

「ジエネレーションシステム暴走から四年が経ち、人類は今だ戦争を忘れる事が出来なかった」

「待て。一夏は四年もお前達の世界で過ごしたというのか？此方では二年程しかたっていないぞ」

「恐らく、こちらの世界との間に時間差があるようだな。私達は四年程イチカと共に過ごした。これは紛れもない事実だ」

「じゃ、イチカは私達より年上って事？」

「因みに言えば私やエリス、ラナロウは22と同年だ」

今まで同年代だと思っていたイチカが実は自分達よりも二つ年上だという事に驚き、更にマーク達の年齢が思ってたよりも上だった事

にさらに驚く。

驚いた一同は視線を画面に戻すとイチカのパラ乗機がZガンダムやエクシアではなく、フェニックスに変わっていた。

一人前のMS乗りとして認められたマークが自分の愛機であるフェニックスをイチカに譲ったのだ。

この頃マークはプラント最高評議会でもかなり力のある、ラクスから完成してもパイロットがいない状況が続く、一度も実戦に出ることなく終戦を迎えた為、長らく倉庫で眠っていたオレンジ色のデステイニーを譲り受け、オレンジ色の部分を赤く、コックピット周りは赤から黒に変えられている。

他にも色々、カラーリングなどが変更されている。

これを見たイチカは「なんか、弓兵みたいな感じになっている」と言っている。

そして、この時からイチカに変化が起き始めた。

それは訓練でMSの操縦をした時、イチカの空間認識や反応速度が大幅に上がっていたのだ。

「この時はイチカの実力が上がったモノだと思っていたのだが実際は違った」

「それはどういう事なの？」

「イチカはNTとは別の進化を遂げようとしていた。私達はあの後、多くの世界に行き、平和へのヒントを探していた。その時に私達は西暦世界に行った」

「西暦世界？」

「多くの世界が存在する私達の世界でのそれぞれの世界の呼称だと思えばいい。その西暦世界では枯渇した化石燃料に代わるエネルギー源として宇宙太陽光発電システムと軌道エレベーターを実用化、莫大な建造費が必要なこれらのシステムを所有しその恩恵が得られるのはユニオン、AEU、人類革新連盟の世界三大国家群のみで超大国間には全面的な対決こそ無いものの熾烈な軍備開発競争による冷戦状態が続いた。そんな中、ある組織が世界に声明を出した」

世界に向けて1つの声明が発表される。4機のMS「ガンダム」を

所有する私設武装組織「ソレスタルビーイング（以下CBと表記）」は戦争・内乱など世界中のあらゆる武力紛争に同じ武力をもって介入し、戦争根絶を目指す集団であるという。それは「平和のための武力行使」という矛盾を抱える行為であった。

圧倒的な力を持つCBが武力介入を続け、戦争を根絶を目指す中、各国は圧倒的な性能を持つガンダムを手に入れようと鹵獲作戦を開始。

結果は失敗に終わったが新たに現れた三機のガンダム、「トリニティ」を名乗る新たなガンダムマイスター達が出現した。

彼らの行き過ぎた武力介入は市民から憎悪がCBに向けられ、そして世界は一つに纏まったCB壊滅という皮肉な形で。

擬似太陽炉搭載機を手に入れた各国家群は、国連軍を組織し、ガンダム殲滅作戦を執行する。CBの初期計画は破綻し、仲間を次々と失いながらも、戦いの果てに平和があると信じ、刹那達は最終決戦へと挑む。死闘の末にアレハンドロは倒されるが、CBも壊滅的な打撃を受けメンバーも離散することとなる。

各国家群は地球連邦として統一を果たし、世界は一つになりつつあった。しかしその裏では独立治安維持部隊「アロウズ」によって、反連邦主義や思想への弾圧や虐殺が行なわれており、世界は未だに歪んだままであった。

その歪んだ再生を破壊するために嘗て世界に戦争を仕掛けたCBが動き出した。

刹那達と遭遇し、刹那達と協力関係を築いたイチカ達は彼らと共に行動し、独立治安維持部隊「アロウズ」影で操っていたイノベーター」を自称するイオリアの真の計画を進めるために生み出された人工生命体「イノベイド」達であることを突き止め、彼らを倒すために動き出したイチカ達だがその矢先に起きたメメントモリによって中東の一国を滅ぼした。

イチカ達はその大量殺戮兵器を見逃すはずもなく、破壊を計画し、実行した。メメントモリ破壊から数日後、連邦内でクーデターが

起こり、市民6万人が人質にとられアフリカの軌道エレベーターが占拠された。

「無関係な民間人を巻き込んでクーデターとは軍人として無過ごせんな」

「確かにそうだ。だが、情報統制された社会にアロウズの実態を知るモノはいない。それを伝えるための行動……、人質は曲がりなりにも人間の集まりであるアロウズも手を出せないと考えてだろう。だが、その考えは浅はかだったと彼らは実感した」

しかしアロウズは真実が露見する前に、密かに建造していたもう1基のメモントモリで、人質ごと軌道エレベーターを破壊し隠滅を図る。

イチカ達はメモントモリの破壊に向かうが、メモントモリの攻撃によつて軌道エレベーターは崩壊し、地表には無数の破片が降り注ぐ大惨事へと発展した。

「クーデター起こした人物も自分達の行為で民間人を死なせるつもりは無かつたのだろう、人質を逃がしたのだが……」

マークはそこから先の言葉が出なかつた。

そこで千冬達は人質の結末を悟つた——彼らは死んだのだと。

成層圏より上のピラーは大気圏の摩擦熱で燃え尽きるが、それより下のピラーは地上に降り注ぐ。

交戦中のイチカ達にスメラギは落ちてくるピラーを破壊するよう空域にいる敵味方関係なく全員に頼んだ。

真つ先に動き出したのはイチカだった。

『何が独立治安部隊だ……。何が恒久和平だ……。例え全ての罪を背負うつもりだろうと目の前の命を見捨てる奴が本当の平和を作る事が出来るかアア!!』

イチカは目の前のジnkスを蹴り飛ばすと上昇し、フェザーファンネルを全て射出し、ビームライフルと同時に乱れ撃ちピラーを破壊していく。

イチカに続く様にCBピラーの破壊を開始するがピラーの数が多く、裁ききれていない。

裁ききれなかった破片が都市部に落ち掛けた時、連邦正規軍・アロウズ・カタロン・反乱軍が協力して破片の都市部への直撃は避けられた。

後に「ブレイク・ピラー」と呼ばれるこの事件は反連邦勢力の仕業として公表され、アロウズは強硬な姿勢を強めていくが、その一方で皮肉にも人々の意思は1つとなっていた。

「ブレイク・ピラー」事件から4か月。CBは2基目のメモントモリの破壊を成功させ、アロウズ・イノベーター勢力の打倒とヴェーダ奪還のために動き出す。

イノベーターの本拠地を特定し、最終決戦に向けて準備をするイチカ達。

刹那達が新武装を追加されたようにイチカ達の機体も強化してもらった。

マーク達の機体を強化する中でイチカの機体だけ強化されなかった。

それはフェニックスのブラックボックスを解明することが出来ず、解明できないまま機体を弄って使えなくなってしまう可能性もある為、フェニックスはビームライフルに小型の粒子貯蔵タンクを着ける事で火力向上を図った。

マドカのデユナメスはエクシアが使っていたGNアームズを修復し、TYPE-EからTYPE-Dに改修し、火力向上などもされている。

アロウズ、そしてイノベーターとの決戦ともあり、いつになく緊張の色が見えた。

そして各機発進し、アロウズとの戦闘に入り、粒子かく乱と数の差に不利になるが駆け付けたカタロン、更に様々な事件を機に決起した連邦正規軍も加わり、アロウズ・イノベーター勢力との最終決戦が行われる。

敵の数が減り始めた時、NTであるイチカ達と刹那が全軍に警告を出す。巨大ビーム砲がアロウズ艦隊の大半とカタロン艦隊の一部を消滅させた。

そして、光学迷彩を解除して現れた小惑星を改造して建造された、全長15 kmにも及ぶ超大型艦コロニー型外宇宙航行母艦「ソレスタルビーイング」が姿を表した。

ソレスタルビーイング号にあるヴェーダの奪還、イチカ達はそのアシストをした。

ソレスタルビーイング号の多数のビーム砲を破壊し、進路を確保しようとする一同に無数の同型機ガガが体当たりによる特攻を仕掛けた。

イチカ達はガガの迎撃に当たるが数が多く裁ききれずにいた。

GNフィールドを持たないネエルアーガマがあの特攻を受け続けた場合、撃沈するのは確実である為、ネエルアーガマ所属の機体は母艦の死守に専念していた。

『コイツらから、死に対する恐怖も後悔も何も感じない……。それどころか……。自我というモノを感じれない!?!』

『この敵に自我など無い。只、命令をこなす人間の皮を被ったマシンだ!!』

ガガのパイロットに疑問を感じるイチカにマークは同じように感じたことを言った。

苦戦を強いる中、カタロンと正規軍が援軍として駆けつけ、ソレスタルビーイング号の入り口を見つけ、プロトレマイオスが不時着し、作戦通り刹那達は各自母艦への侵入を試みる。

イチカはプロトレマイオスとネエル・アーガマに敵が取りつかれないようにフェザーファンネルを半分ずつに分け、敵を落としている。

不意を突かれたエリスにガガ特攻を仕掛け、被弾した。

イチカは被弾したエリスに呼び掛けると応答があるが何処か苦しそうな声を上げるが気絶しているようだ。

無数のガガが動けないエリスに攻撃を仕掛けようとする。

このままではエリスを守ることが出来ないと考えたイチカはフェニックスを変形させるとフェザーファンネル展開すると赤いオーラ状のエネルギーを纏いガガの大群に特攻する。

バーニングファイアとフェザーファンネルの同時使用により、次々と敵の数が減っていく。

『クソッ！エネルギーが…。機体修復に回しているナノマシン全面カット。全部攻撃とエネルギーに回せ！』

奮闘するイチカだが変わらない戦況と残りエネルギーの低下などが積み重なり、イチカ達の戦意が低下している時だった。

イチカ達の周辺に七色の輝きを放つ膨大なGN粒子が当たりを覆う。

『温かくも激しい…。刹那の思いの籠った命の輝き…。』

このGN粒子によってガガ達の動きが一気に鈍る中、イチカは七色の輝きを放つ膨大なGN粒子を放っているであろう機体がある場所に手を伸ばすと、それを掴むような動作をすると強く握りしめる。この時、イチカの黒い瞳は金色に変わっていた。

先程まで諦めかけていた眼ではなく覚悟の籠った眼付になる。

イチカはフェザーファンネルをフェニックスの周りに配置するとビームライフル、メガビームキャノンを一斉発射するとすかさず、バーニングファイアで敵を倒していくと急にガガの動きが止まりだす。

それは刹那達がヴェーダ奪還した合図でもあった。

ガガが行動不能となった為、これ以上留まる必要は無く、マークはイチカに刹那達の援護に行くように言うといちカはその場で頷き、離れた。

刹那の援護に向かったイチカの目に入ったのは脚部を破壊されたダブルオーライザーの姿だった。

フェザーファンネルを展開しながら、目の前の悪人顔したガンダムにビームサーベルで斬り合いながらパワー負けし、弾かれる。

其処にガデッサとガラッゾが乱入し、連携攻撃に苦戦しているとアリオスといっ撃墜されてもおかしくないケルデームが援軍として来た。

ガラッゾにはアリオス、ガデッサにはケルデームが相手をする形となり、イチカは刹那と一緒にリボンズとの戦闘を開始するとももの数分でアリオスが敵を撃破し、応援に駆け付けるがリボンズガンダムのGNファンングにより撃破されされる。

イチカにもGNファンングが襲い掛かるがイチカは辛うじて避けているとリボーンズガンダムが死角からビームサーベルで攻撃し、左腕と右脚部を切り落とされるとGNファンングが追い打ちを掛ける。

辛うじて避けてたが頭部と胸部に被弾、コックピット直撃は免れたが被弾した場所が爆発し、それはコックピットまで起きると小さな破片が刺さり口から血を流していた。

『悪い… 刹那…。後は… た… んだ…』

ここでイチカは気を失い、映像が切り替わりプロトレマイオスのブリッジが映った。

其処には私服のイチカが居たが所々に包帯が見える。

そして、ヴェーダとリンクしたテイエリアがCBの真の目的と刹那とイチカの身に起きたことを説明した。

「ねえ、純粹種のイノベーターって何？」

「CBの創設者イオリアが予見していた、進化した人類を指す言葉で該当する人物は刹那とイチカだ。イノベーターや超兵、イノベイドは脳量子波と呼ばれるモノが使い、脳量子波を用いて他者と表層意識を共有し、驚異的な反射神経と細胞の活性化によって常人の倍近い寿命を持つために老化速度も遅く、50年なら25才年を取るといような違いがある」

「何でイチカはイノベーターになったの？」

「刹那が乗るダブルオーライザーから放たれたトランザムバーストによって放たれた虹色のGN粒子を浴びたことがイノベーター化を促したというれている。この二つの力によってイチカは私達から少しずつ距離を置き始めた」

「何故その様な事をする？寧ろ誇るものではないのか。特別な力があるというのは」

「その考えは危険だ。人は強大な力があるとその力を私利私欲の為に使い、それは争いの火種になる事がある。NTという存在が戦場にいると言うだけで兵士に対する心理的な負担は大きい。そのNTの力を人工的に引き出そうと取り組みがされたのだが…。それは非人道的と言っても過言ではない」

マークは昔に出会った強化人間の少年の事を思い出した。

「強化人間は被験者に対し、薬物投与や強迫観念を植え付ける等のマインドコントロールといった、人体にとっては過酷な過程が必要な事もあり、対象となった人間は精神的な障害や情緒不安定な状態を引き起こすことがある。これはNTの発現要因の一つとされている強いストレスが原因だろう。そして強化人間達は悲惨な運命をたどっていった…」

「強いストレス？」

「そうだ。私達NTは何かしらの強いストレスを受けている。目の前で友人や家族を失った者、目の前で人を助けることが出来なかった者、自分という存在を認められなかった者、皆強いストレスを抱えている。力があればそれを我が物にしようとするのは人間の傲慢さの表れだ」

「酷い話ね…。でも、それがイチカ君が距離を置く理由にならないんじゃないかしら」

「スマン、少し話がそれた。イチカが距離を置いた理由はNTとイノベイターという二つの周りとは違う力による、周りに態度の変化とイチカ自身の自分の特異さに受け入れる事が出来なかった。怖かったんだアイツは…。自分の周りから皆が離れていくんじゃないか、とアイツの心は怯えていたよ」

「だから、私達はNTでもイノベイターじゃない。一人の人間として接し続けたわ。イチカは周りの変わらない態度と心に少しずつ、距離を縮めたわ。元の状態に戻って少し経った時に事件が起きたの」

アプロディアがダークサイドに堕ちた様な姿のアプロディアが新たな敵であるバルバドロによって世界は戦火に飲まれると言いイチカ達はアプロディアと共に戦った。

だが、その戦いの最中不可思議な事が起きた。

一緒に戦った仲間が急に手の平を返し襲ってきたのだ。

イチカ達は共に戦場を駆け巡った仲間を撃つ事が出来ず、無力化する事で彼らを正気に戻していった。

アプロディアの言う事を真に受ける仲間たちだが、イチカは何処か

疑いの眼でアプロディア見ていた。

地球コーティングが剥がされた状態のシステムに特攻しようとしていたバルバドロに各世界から仲間が駆け付けた。

キラ、アスラン、シン、バナージ、アムロと言った豪華な面子で最終決戦に臨んだ。

各々、敵の大将と交戦している中、イチカはサーシエスと戦っていた。

バスターソードとビームサーベルの斬り合いの最中、周りではフェザーファンネルとファンングがお互いを攻撃している。

戦いの最中、イチカはサーシエスが本人では無いことに気づく。

本物のサーシエスはロックオン・ストラトス（ライル）によって殺されているのここに居るのは余りにも不可解だからだ。

辿り着いた答えはアリー・アル・サーシエスの全てをコピーしたニューロだとイチカは気づいた。

そうなるかとシン達と戦っている御大将もコピーニューロという事になる。

生身の人間ではないと分かったイチカはフェニックスのバーニングファイアを使いアルケーに突撃し、撃破する。

地球に衝突しようとするバルバドロに全員がありったけの火力で攻撃するとモノアイから光が消え機能停止する。

だが、戦い終わっておらず、最後の力を使い小惑星アクシズを地球に落とそうとした。

「あんなものが落ちたら地球は只ではすまんぞ?!」

「どうなるかは容易に想像できた。だが、あそこまでの質量を持った惑星を短時間で壊すのは無理に近い」

その場にいた全員が落胆していた時、黒歴史が現れるとIフィールド・メガビームライフルをアクシズに向け放ち、Iフィールド・メガビームサーベルでアクシズを両断すると姿を消す。

二つに分断されたアクシズだが、その後部は地球の引力に引かれて落ちる事が分かるとアムロはアクシズに接近するとなんと、押し出そうとしたのだ。

「馬鹿な。一機ではどうにもならんぞ」

「一人では限界がある。だが、奴は一人ではない」

アムロに続き、数機のMSが近づくとアムロと同じように押し始める。

それはイチカ達だった。

アクシズが落ちる様子を見逃す事が出来なかったイチカ達はアムロと一緒にアクシズを押し出そうとしたのだ。

イチカ達がアムロに加勢するが押し切れずにいると次々とアクシズの岩壁にバルバドロ迎撃に向かっていた連邦軍のMSが張り付く。

遂には敵対していたジオンMSまでもが参加するが一機のMSが爆発する。

「皮肉なモノだな。つい先程まで敵として戦っていた者が同じ目的で共闘するとは」

「そうだな。だが、私はこれは人が分かり合えるという証明だと思っている。お互いに殺意を出し合っていた者同士が手を取り合い分かり合えると」

『違う！人は戦争や世直しをしなくても手と手を取り合い分かり合える！だから俺は、俺達は示さなければならぬ。フェニックス！人と人が分かりあう為に俺に力を貸してくれ!!』

『イチカさんの言う通り人は分かり合える!! だから……!!』

イチカ達を中心に現れた虹色のオーラアクシズを覆い始める。

すると、アクシズは少しずつ地球から離れていき、落下から免れると其処には力なく宇宙を漂う、MSの中にはフェニックスやユニコーンそしてレガンダム姿があった。

「あれはあの時と同じ光……」

「私達も正確には分からないがあれはサイコフレームと人々の思いが起こす現象だと思う」

「それもNTの勘かい？」

「近場で体験して感じた感想だ」

一難去ってまた一難とはこの事を言うのであろう。

イチカ達の前にアプロディアと名乗り、イチカ達を騙していた女

性、コード・アメリカスが本性を現した。

「私達はその後、コード・フェニックスと本物のアプロディアと合流し、コード・アメリカスを倒すために動いた」

「アプロディアは今までどうしてたの？」

「システムから消去された私は封じられました。そこで私は唯一残された端末「アービー」を使いコード・フェニックスと接触し、バルバドロを起動させ、私自身を助け出そうとしました。その事に気づいたコード・アメリカスはバルバドロの破壊を企てますが自分のコードをバルバドロに奪われ、奪われたコードを取り戻すためバルバドロ破壊を企てたのです」

「コード・アメリカスの居場所を特定した私達は月の旧ジェネレーションシステムに向かった。そこでコード・アメリカスと熾烈な戦いの中、コード・フェニックスがコード・アメリカスの「裏切りのコード」によつて彼女の手駒となるがイチカ呼びかけによつて正気を取り戻し、後はコード・アプロディアを倒すのみという時だった」

「イチカとコード・アメリカスの前に空間の歪みに飲み込まれ、私達の前から姿を消したわ。私はイチカが居なくなつた事で塞ぎこんだけど、イチカが生きているという信じてMIAになつたイチカを探したら私達も同じように歪みに飲み込まれて、近くにいたコード・アメリカスと戦闘……。負けた私達はコード・フェニックスと同じように彼女の操り人形になつたわ」

「後は君達の知つての通りだ。何か気になつた事があれば答えられる限り、答えよう」

イチカの過去を一通り説明すると質問タイムに移る。

「イチカは私と同じように頭に遺言が聞こえるアレは……」
「確かNTとかいってたね」

「NTとは宇宙空間で生活するようになった人類が、それに対応するために進化していったものであるとされている。元々はジオン・ズム・ダイクンが提唱した概念の一つであり、宇宙という広大な生活圏

を手に入れた人類は洞察力、認識能力が拡大し、肉体的、精神的にあらゆる物事を理解することができ、それが全人類に広がった時にかつてなしえなかった相互理解が可能となるというモノだ。並外れた動物的直感や空間認識能力を持ち、サイコウエーブサイコウエーブと呼ばれる独特の脳波を発し、離れていても他者やその状況を正確に認識し、意思疎通をする。後に開発されたサイコミュと呼ばれる脳波と兵器を連動させる機器を扱う能力があり、敵を視認することなく「気配」で探知し、さらにその機動を先読みして攻撃、一方では敵の攻撃を察知して回避など出来る。先程も言ったようにNTは強いストレスに素質だが、素質に関しては誰にでもある」

「その条件をクリアすれば私達もNTになれるのか？」
「いや、なれる可能性があるだけだ。必ずしも、なれるという訳では無い」

「じゃ、NTと一緒に出て来たサイコフレームって何？ 束さん興味津々なんだよー」

「サイコミュの基礎機能を持つコンピューター・チップを、金属粒子レベルで鋳込んだMS用の構造部材だ。チップ単体では実効的な効果を持たないが、コアとなる高出力のメイン・プロセッサを配置することで、非常に高効率かつ高密度なサイコミュ・システムとして機能する。サイコフレームが共鳴する事で智を超えた数々の不思議な現象を引き起こす発光現象のオーロラ状に広がる光が観測されているが詳細なメカニズムは不明だ」

サイコミュ関連の事はイチカ達もアプロディアも分かっていないのだ。

「ガロード達はいつ頃、イチカと出会ったの？」

「んー、俺達の世界でもよ、戦争があつてよ。そのせいで人類の殆どが死滅、悲惨なもんだぜ。俺はMS売りさばいたり、ジャンク屋として生計を立ててよ。まあ、色々あつてティファ達がいるフリーデンって所で生活するようになって、ある場所を探してた時にエリスの機体が接触不良を起こして、イチカが出した救難信号を見つけたのがきつかけだな」

その後、イチカはガロードと一緒に行動し、DX強奪や月のサテライトシステム、D・O・M・E.との出会いまで共に行動した。

「僕達はガロード達の敵として戦ったね」

「そうだな。DXのツインサテライトキャノンを喰らった私達は死んだと思っていたが……。どういう訳かこの世界に辿り着き、亡国企業のスコール達に拾われ、私達なりに前の世界の罪滅ぼしをしようとして行動し、彼女達を裏切り、ここに居る」

「!? そう……。今、亡国企業はどうなってるのか教えてくれるかしら？」

「潰したよ。僕達の情報が漏れないように徹底的に潰しておいたよ。スコール達と交戦したけど、運が良かったら助かってると思うよ」

シャギア達の発言に不信感を持つ千冬達にシャギア達は肩を竦める。

マークが他に質問が無いか周りを見渡すと特に質問は無かった。

するとラウラに一つの通信が入ると深刻そうな顔をする。

「我がドイツに未確認のISが攻め込んできた。我が祖国から帰還命令が下った」

「なら、私達も同行しよう。援軍はあった方がいいだろう」

「スマン。恩に着る」

「困った時はお互い様よ。確か人数分のベースジャバーが在ったはず」

「で？全員で行くのかい？それは無いと思うけど」

マークは少し考え込むと

「IS学園は私達の拠点と言っても過言じゃない。拠点防衛とドイツに向く部隊に分けよう。マドカ、ガロード、エリス、私がドイツ」

「分かった」

「任せておけて」

「了解」

「防衛はフロスト兄弟、ラナロウ、コード・フェニックスだ。弾君は自宅に帰って家族の所に行って護るといい。イチカもその為にその力を与えたはずだ。IS組は好きにしたまえ。何が起きても私達は保

証はできんからな」

「問題ない」

「了解したよ」

「任せな」

「合点招致！」

「はい！」

箒達の行動を止める方法は無いと結論を出したマーク。

恐らく、自分達と一緒に来る考えた通り同行すると言いだした。

時間が惜しいマークは深く言及はせず、アリーナ整備室にあるベイスジャバーに乗り行動を開始するのだった。

38話

ベースジャバーに搭乗しながら、ドイツに向かうマーク達。
今回、エリスはバンシイ・ノルンに搭乗している。

バンシイに搭載されていたアームド・アーマーX CのON・OFF
が可能になった事により、バンシイに乗る事が出来る様になったの
だ。

他にも試験的に作ったNT用の武器を簪の専用機に搭載している。

「ねえ、エリス達は戦うのが怖くないの？」

震えた声で聴いてくる簪。

「確かに最初の頃は怖かったわよ。でも、戦う内に戦うことに対する
恐怖は無くなったわ」

「何故だ？戦えば死ぬかもしれないのだぞ」

「確かに戦えば最悪、死ぬ。だが、私達は戦いの中で各々、護りたいモ
ノが出来た。それこそ、自分の命を代償にしてもだ。それはイチカも
持っているが、何かは分からね。おおよその見当はつくがな」

「一夏が護りたいモノ..」

「私達は殺し合いをする為に戦うのではない。大切なモノを護る為に
戦うのだ。君達も何の為に戦うのかも一度、見直すといい」

『間もなくドイツに着きます。警戒態勢に入ってください』

マーク達が戦う意味を自分達なりに説いているとアプロディアが
目的地であるドイツに着こうとしていた。

「祖国が..」

「こ、これは..」

「酷い..」

雲を抜け見えたのは荒れ果てたドイツの首都ベルリンだった。

「一時間だ..。通信が入って、たった一時間だ！一体、ドイツ軍は一
体何をしていたんだ!!」

「ラウラ..」

「これだけの被害を出すには相当な数が攻めてきたか、それとも..」

自分が帰還するまでに起きた惨状にラウラは怒りを露わにし、マー

クはどんな敵が攻めてきたのか考えていると簪に異変が起きる。

「簪ちゃん。さつきから震えてるけど、寒い?」

「違うよ... お姉ちゃん...。なんだか、怖い...」

「怖い?」

簪の怖いの意味が分からず、首を傾げると簪は自分で自分を抱きしめる。

「怖い...。何かが、来る...!」

「!? 総員、退避!!」

怯える簪を安心させようとエリスが近づいた時、エリスの中で光が弾けると全員に退避行動を取らせると、先程いた所に高エネルギーのビームが通り過ぎた。

エリス達の視線の先には一見すれば、ビッグ・ザムに似ているがカラーリングや武装が異なり、黒やグレーを基調とした大型の機体があるにいた。

「なんだあのバカデカイのは!?!」

「アレは...」

「デストロイ...ガンダム...」

困惑する一同だが、その中で交戦経験のあるエリスとマークはその破壊神の名を呟いた。

「先手必勝ですわ!」

セシリアがデストロイを狙撃するが、陽電子リフレクターにより、無効化された。

「やはり、搭載済みか! 奴は接近戦に弱い! 高機動かつ、接近戦に強い機体が相手をする必要がある」

「なら、私が「隙アライ!!」キャアアア!!」

エリスがバンシイのビームサーベルを構え、接近しようとした瞬間、物陰から現れた一機の機体が蹴りを連打し、蹴られた衝撃でエリスは近くの建物に衝突する。

「貴様! 何者だ!!」

『私ノ名ハ、シユバルツ・ブルーダー。サア、拳デ語り合オウゾ!』

何処か機械染みた男性の声が目の前のガンダムから、発せられた。

「まさか……。シユバルツのコピーニューロか！」

「コピーニューロ？」

「簡単にいえば、オリジナルと同等のコピーだ。奴は神出鬼没の危険な敵だ。注意しろ」

『ソリヤアア!!』

シユピーゲルはクナイを投げると全員回避行動に移るが、クナイが途中で爆発し、周りの建物を破壊していく。

「シユピーゲルは私が相手をする！お前たちはデストロイを倒せ!!」

「敵接近を確認。体照合完了。M1アストレイ、バクウ、シグー、ウインダム、カオスガンダム」

「ええい……！」

『ヨソ見ヲスル暇ガアルノカ!』

「グツ……」

シユピーゲルは自分に任せ、デストロイを倒せと命令するマークにシユピーゲルがシユピーゲルブレードを使い、接近戦を仕掛けてくるがビームサーベルで応戦する。

ガンダムファイターとの交戦は少なく、シユバルツの戦闘も映像で見ただけなので、コピーとはいえ、実際に戦うのはこれが初めてである。

「イチカのように拳で戦う事は出来ないが……。私なりの戦い方でやらせてもらう！」

『ソノ心ハヨシ。サア、貴様ノ力見セテミロ!!』

「言われなくてもオオ!!」

シユピーゲルブレードとビームサーベルがぶつかり合い、火花が飛び散った。

建物に衝突した際に意識を持ってかれかけたエリスだが、培われた

忍耐力で何とか保ち、目の前のデストロイガンダムの本体から分離した両腕部誘導式攻盾システム「シユトウルムファウスト」がエリスに向かって飛んでくるのを確認するとすぐさまその場から離脱する。

「大丈夫か、エリス！」

「何とか……。あれの弱点さえ突ければ倒せる！」

「アイツに弱点があるのか？」

「確かにあの機体のビームシールドは脅威よ。でも、あの機体はビームを一定の長さで発振させ続ける武器……。例えば、ビームサーベルとかに弱いわ。後、懐に入られると弱いのに」

言葉で言うのは容易だが、実際にやろうとすると困難であり、歴戦の戦士であるエリス達はまだしも、箒達にはキツすぎる。

「ガロードは彼女達と一緒に量産機の相手をして。デストロイは私がやるわ！」

「まあた、御守かよ」

「押し付ける様でゴメンね。貴女達はガロードと一緒に行動して」

エリスの言葉に思いの外素直に従う箒達。

エリスは先程イチカの過去を見せたことによって、彼女達の心境に変化が起きたと推察した。

「おう！任せておけ」

デストロイがガロード達を行かせまいと両腕を飛ばすが、エリスは瞬光式徹甲榴弾を放つと片方の腕に着弾し、閃光を放ち爆発した。

もう片方の腕が破壊されたデストロイは残った腕を戻し、MAからMSに変形すると先程よりも一回り程、大きくなる。

「ここから先は行かせないわ！」

デストロイは胸部の3連装大口径ビーム砲、スーパスキュラを放つが余裕のある回避行動をとるとデストロイに接近しようとするが、フライトユニット円周上に計20門内蔵されているビーム砲を放ち、近づけないようにする。

「迂闊に近よれない！」

背部フライトユニットに装備されたミサイルランチャーから追尾性の高いミサイルが放たれるとバンシイの頭部バルカンで撃ち落と

していく。

回避行動をしているとデストロイの後方から来たアビス、ガイアが攻撃を仕掛けてくる。

「邪魔をしないでー」

アビスは両肩部シールドに搭載された武器を惜しみなく使うが、アームド・アーマーDEを背部のアームド・アーマーXCにマウントし、バレルロールを描きながら接近する。

アビスは接近したバンシイに胸部内蔵の大出力ビーム砲のカリドウス複相ビーム砲で迎撃しようとするが、放たれるより前にアームド・アーマーDEを突きつける。

アビスを難なく撃破するが、MA形態のガイアが建物と建物の間を高速で移動しながらウイング前面に展開されるビームエッジでバンシイを攻撃しようとするがバンシイはビームトンファアを起動させ、受け止める。

「アンタに構ってる暇はないのよー」

瞬光式徹甲榴弾をガイアに向けて放つと閃光を放ち、爆発していくが、ガイアは寸前でビームライフルを放つが決定打とならず装甲に掠る程度だったが、出来た一瞬の隙をデストロイは見逃さず、腕部を飛ばしバンシイを建物に叩きつけた。

腹部から伝わってくる衝撃に徐々に意識が遠のきかける中、エリスは懐かしい声を聞いた。

ガロード達は迫りくる量産機を相手にしていたが、その圧倒的な数の差に押されていた。

「前に出過ぎるな！死にたいのか!!」

「だ、だが・・・」

「死にたいのなら死ねばいい。だがな、それによって多くの人が悲しむことになるんだぞ！」

前に出過ぎる筈に叱咤するマドカ。

「ええい……。このままではGNアームズの弾薬が底を尽きるぞ……」

「だがよ、こっちはルーキーの御守もしてるから動きたくても動けないしな。それによ」

弾薬が切れかけている事に嘆くマドカ。

それに対し、ガロードは簪の方を見る。

そこには身体を震わせ身動きが取れないでいる簪が居た。

まだ、自分の力に整理が付かない状態での実戦、死ぬかもしれないという重圧が簪を襲い、動けずにいた。

「兄さんが居れば説得することも出来たろうが……」

「今、居ない奴の事を言っても仕方のない話なんだからよ」

「最悪、サテライトキャノンを使う事になるな。ガロード、弾薬はどれ位ある？」

「全部合わせて6割だな」

「GNアームズの弾薬はもう、3割程度だな。増援が欲しいがそれは高望みか」

「!? どうやら、奴さん本格的に俺達を落としたいらしいぜ……」

マドカはガロードの見て居る方を見ると其処には敵の増援が100以上来ていた。

「少し、勿体ないが……」

マドカはGNアームズをパージするとそのままGNアームズを敵増援に向けて突進させる。

GNアームズはGNミサイル、GNキャノン、GNツインライフルを放ちながら突貫する。

敵の中央にGNアームズが着くとマドカはGNアームズに搭載せられていた太陽炉を狙撃し、GNアームズが大きな爆発を起こし、爆発に飲まれ周囲の敵を撃破していく。

「これで、8割削れば御の字なんだが……。半分しか削れなかったようだ」

「それくらい削れば結構だと思っぜ？」

「そうか。少し、簪の所に行つてくる」

「了解！」

マドカは簪の所に向かつて移動していくと簪の前に行く。

「マドカ…私…」

簪が何かを言いかけた時、パシッ！、と乾いた音が戦場に響くと同じ時に簪は頬に痛みを感じた。

何が起きたのか一瞬理解出来なかった簪だが、振り向かれた腕を見て平手打ちをされたのだと理解した。

「お前は何の為にここに来た。地獄絵図と化したドイツに観光に来たのか！」

「ち、違う…私は…」

「落ち着いてマドカちゃん。簪ちゃんも突然のことだらけで整理が付いていないんだと思うの。だから」

「お前は黙っている。このシスコンストーカ過保護残念生徒会長駄目無」

「ちよつと!？」

ここにきて、過保護気味の楯無にマドカは思いつく限りの悪口を言う。

それに抗議をする楯無を無視し、マドカは簪の説教を続ける。

「お前は家族を…仲間や大切な人を無駄死にさせるために来たのか？違うだろ！お前は助けるためにここに来たんじゃないのか!!自分の力が怖いか？自分に自信が無いか？誰だつて最初はそうだ。兄さんだつて——」

「私はイチカのように強くない！私をイチカと一緒にしないで!!」

「お仕置きが足りないか！」

マドカは握りこぶしを作った時、敵接近のアラームが鳴り、ガロードの攻撃を潜り抜けた敵がこちらに来たのだろう。

マドカはGNシールド、GNライフルビットを展開し、迎撃開始するのだった。

場所は変わって、イチカが眠っている病室に千冬の姿があった。

「お前はいつまで眠っているつもりなんだ。馬鹿者」

今の千冬という言葉にはいつもの気丈さは感じられず、悲しみを含んだ、今、出来る精一杯の強がりと言った。

「他の奴らは皆、戦いに行った。平和の為に多くの人を救う為に戦っている。お前もそうだったんだろう、一夏」

千冬はイチカの横に座り、手を握るとイチカの温もりを感じた。

「平和などあって当然、戦争など自分には関係ないと思っていたが…平和がどれだけ尊く、難しいのか分かった。それが、大切な弟がこんな状況になって初めて理解するとは…」

イチカの手を更に強く握るが何の反応を示さない。

「私はもう、お前と一緒に暮らすなどという高望みはしない。だから…眼を覚ましてくれ一夏!!これからはお前が何を言おうが隙にして良い、掃除も洗濯も全て出来る様になる、ビールの数も減らす、世界最強なんて称号なんか要らない…。お前さえ、お前さえ生きていればそれで…」

イチカの手に雫が落ちる。

それは千冬が泣いている証拠だった。

「お前は目を覚ませば戦うのだから。私はそれを止めない。お前が生きて、あの時の様に笑ってくればそれだけで私は…」

誰もいない病室で泣く千冬。それから、数分経つと千冬は席を立つ。

「私に何が出来るのか分からない。お前の様に特別な力が無い私に一体何が出来るか分からないが、私なりにやれることをやってみる」

千冬が病室から離れると待機状態のフェニックスが緑色に輝いてい

た。

「ガーくん達も苦戦しているみたいだし、ここは東さんお手製のこのGビットで助けるとしますか!」

GXの残骸から得たデータを基にコード・フェニックスから貰った資材で作っ為、従来のISの強度を超えるモノが出来た。

「でも、これもNTの力が必要なだよね。ティーちゃんのを借りるのが手っ取り早いけど、そうしたらガーくんに嫌われるだろうな」

悩んでいる束に予想外の事が起きる。

「あー!Gビットが勝手に起動した!?!しかもこれNTによって動いている!!それに目的地がドイツだ。でも、誰が動かしているんだろう?」
束は可能性として一人の少年を思い浮かべたが、その少年はベッドの上で眠り続けている為、不可能だと結論を出す。

最近、束の周りでは予想外な事に頭を抱えた。

ガロードが増援のり・ガズイを撃破した時、普通の爆発とは違う緑色の光が輝くと戦域に異変が起きた。

「なんだ... この感じは...」

「すごく... 温かい...」

「何か... この戦域を...」

増援に苦戦しているガロード達の周辺に今まで感じていた緊迫感がまるで嘘の様に消えていた。

起きた異変に困惑しているとガロード達の頭に誰かの声が聞こえた。

『ガロード。あと少し、持ちこたえてくれ。そうすれば、助かる』

「この声… イチカなのか…。分かった、お前を信じるぜ。イチカ」

その声の主はここに居ないハズのイチカの声だった。ガロードは何故一夏の声が聞こえたのか分からなかったが、イチカの言っている事を信じてみようと思った。

『マドカ。お前は俺が倒れたことで、無茶な事をしている。お前はすぐ、無茶をする癖がある。俺の言えたことじゃないが、余り無茶をするな。困ったらみんなに頼ればいい』

「兄さん…。」

『箒。お前は過去に囚われ、依存している。お前に何があつたのかは俺は分からない。お前の周りに心を許せる人が居なかったのかもしれない。そんな中、お前は心の安らぎを求めた。けどな、行き過ぎた安らぎは依存に変わる。お前は自分にとって都合の良い存在に依存している。だけど、人は子供から大人に成長して、親から自立しないといけない。誰かに頼りぱっなしじゃなくて、自分の意思で、自分の足で歩けば周りの景色はきつと変わる』

「一夏…。私は…。」

『お前の歩んだ人生は確かに悲惨だ。家族を失い、他人の意思を押し付けられ、自分の意思で行動したことは少ないと思う。けどな、お前の人生は誰のモノでもない、お前の物だ。やりたいことがあるならすればいい。それを止める権利は誰にもない。それは親も例外じゃない。お前の人生なんだから、お前の生きたいように生きればいい。周りの事を気にする必要なんて無い』

「イチカ…。うん、そうだね。僕は僕の生きたいように生きるよ」

現れたイチカが精神体に驚くガロード達に対し、イチカは助言をしていく。

イチカの手が簪の肩に触れる。精神体である以上、温もりなどといったモノは感じることはできないが、イチカの手から確かな温もりを感じた。

『誰だって戦うのは怖いものだ、俺もそうだった。だけど、俺は戦う決心をした。家族や仲間を、大切な人を護りたかったからだ。お前は何の為に戦い、何の為に剣を取るんだ?』

「それは… お姉ちゃんの様になりたくって…」

『それもあるだろうが、お前の本心は違うはずだ。人は他人になる事は決してできない。お前の本心はきつと「姉の力になりたい」なんだよ。それに自分を過小評価するな。お前は自分が思っているより強いんだから。信じるんだ、可能性という内なる神を』

簪はイチカの言っていることに心当りがあつた。

確かに昔は楯無の力になりたいという一心で、鍛錬を積んできた。鍛錬を積んでいる時に楯無との大きな実力差があつても、力になりたいという気持ちで糧に続けてきたが、あの時に楯無に言われた「何もしなくていい」という言葉が今までの努力を否定されているような気がした。

何故、そんな事を言われたのか考えた時に優秀な姉との実力差だと気づき、何時しかそれがコンプレックスに変わり、何時しかあの時の思いを忘れてしまい、自分を過小評価するようになったのだと思ひ出した。

「皆の足手纏いにはなりたくない…。もう、弱い自分に負けない！」
弱い自分とはこれで決別することを決めた簪の言葉にイチカは微笑んだ。

シュピーゲルとの戦闘で、装甲の一部が破壊され、武器の殆どを破壊されてしまい、残ったのはビームサーベル一つだけだった。

「このまま終わるわけには…。やってみるか」

『チエストオツ!!』

シュピーゲルがステップを踏みながら接近し、シュピーゲルブレイ

ドで攻撃するがマークはそれを受けると逃さないように腕を掴む。

「グツ……。肉を切らせて骨を断つとは意外にキツイものだな」

『貴様、ワザト受ケタトイウノカ』

「貴様の様に神出鬼没な奴が相手ならこういった、捨て身戦法が効果的な事が多いのでね。私の技ではないが受けてみる!!」

ハルフアスの拳が青紫に輝き始める。

「バアアニングフィンガア!!」

それは今も目を覚まさない家族の技はシュピーゲルの顔半分を破壊する。

『中々、イイ拳ダ……。ナラバ、私モ全身全霊ノ技ヲ持ツテ貴様ヲ倒ソウ!』

シュピーゲルブレードを展開しながら高速回転するシュピーゲルガンダム。

『シュツルウウム・ウント・ドウウラアアンクツ!!』

「アレを避けるのは不可能だ……。なら、真っ正面から叩くまで!!」

ハルフアスは一度上空に飛ぶとバード形態に移行し、ナノマシンを展開し青紫の炎を纏う。

バーニングファイヤの上位版であるバーニング・フレアを放ち、シュツルム・ウント・ドラंकとぶつかり合う。

力は拮抗していたが、徐々にハルフアスがシュピーゲルを押し始める。

「貫けエエエエ!!」

『ココマデカ……。』

シュピーゲルブレードを破壊し、シュピーゲル本体を貫くハルフアス。

『イイファイトダツタ……。イズレドコカデ、マタアオウ!』

負けたのにも関わらず、一切の憎しみや怒りの感情を出さずにコピーシュバルツは爆炎に飲まれ消滅した。

シュバルツとの戦闘が終わり、一息つくが、まだ戦闘は終わっていない。

「早く合流せねば……」

先程、シュピーゲルに斬られた所を押さえるマーク。

生身では無いとはいえ、装甲を切り裂き、身体まで斬られたとは予想だにできなかった。

「少し、切り傷が出来た程度…。」

痛む身体に鞭を打ち、動こうとするマークにイチカの声が耳に入った。

『無茶をしないでくれマーク兄。俺が言えたことじゃないがマーク兄まで無理をして倒れたら、皆悲しむ…。あの時の様に』

「だが、そうも言つてられないのが今なのでね」

『大丈夫。マーク兄がそこまで無理をする必要はないよ。後は任せて』

イチカの声が聞こえなくなった次の瞬間、GXを簡略化したような姿をした機体が二機降り立つとその内の一機がマークに手を指し延ばした。

「フツ、お前はあの状況下でも私達の為に戦うのか…。お前らしいな」

マークは差し伸ばされた手を掴み、移動を開始した。

意識が遠のく中、エリスは自分に手を差し伸べるイチカの姿を見た。

エリスはその手を掴んだ時、何かが爆発する音が聞こえ、何かと周りを見渡すと先程まで自分を圧迫していたデストロイの腕が粉々に爆発し、掴んだはずの手には引き金を引いたビームマグナムが握られていた。

今のは幻影なのかと思った時、エリスの目の前にイチカが現れる。

『エリス』

「イチカ…。」

『エリス。諦めるのにはまだ早い』

「ごめんなさい…。イチカ…。私のせいで貴方は…」

イチカに対して謝り始めるエリス。

『謝る必要なんてないよ。エリスやマーク兄が語り掛けてくれたから、皆が俺を人として繋ぎとめてくれた』

「私が操られていたから、あんなことに」

『そんな事ない。アレはいずれ起きるであろう事象なんだ。俺がサイコマシーンに乗って、何かを成し遂げたいと思ってる限り、いずれ起きる事なんだ。それが少し、早くなっただけ』

「でも…。そのせいで、眠りについたままなのよ！」

『確かに俺は目覚めないままだ。そのせいで、皆に心配させて、苦勞させて、悲しい思いさせてしまった。その事に対する、罪悪感もある。だけど、眠りについた俺は刻を視た』

NTは時として、認識力の拡大から刻、すなわち時間を事象として認識する者がいる。

例として、アムロやララアが挙げられ、イチカもその領域に至ったのだ。

『それにな、エリス。俺は偶に思うんだ。もしも、お前の俺に対する思いに応えていけば、こんな事にはならなかったのかなって』

「知っていたの…」

『…。気づいてた。だけど、気づかぬふりをした。俺は怖かったんだ…。この手を血に染めた俺がお前の思いに應えるのか、例え応えたとしてもあの時の様に俺の目の前から消えるんじゃないかって…。あの時助けられなかった少女の様に突然消えるんじゃないかって、ずっと…。怖かった。だけど、俺はもう、目に見えないものに怯えない。だから、エリスも自分の過去に怯えないでくれ』

「私は…。貴方の傍にいながら、気づいてあげれなかった…。イチカの思いに…」

『今だから思える。俺は少しずつでいいから、お前とちゃんと向き合って、一緒に歩みたい。そして、今度はお前の思いに応えたいと思う。だから、エリスも最後まであきらめないで、俺はまだお前の思い

に応えていない』

バツ悪そうに言うイチカ言葉にエリスは言葉が詰まった。

今まで届いていないと思ってた思いが実は届いていたことに、届いていてもなお、応えなかったその真意を始めて知った。

「煩わしいのよ……。今まで、どれだけ、私が苦勞したのか……。どれだけその言葉を待っていたと思ってるのよ……。だけど、こんな形で、その言葉を聞きたくなかった！」

『俺もこんな形で言いたくなかった。だけど、今だからこそできる事や見えるモノもあつた。俺が言えたことじゃないけど、無事に帰って来て。それが俺の望みだ』

命をかけた戦いをしてきた彼らにとって、一番難しいであろう願望。

大切な人達と笑って過ごしたい。それがどんなに難しいか分かっているからこそ彼らは望むのだ。

「ええ、約束するわ。必ず、イチカの所に帰るわ。そして、ちゃんと私の思いに伝えてもらうんだから」

『忘れないで、俺はどんな状況だろうと、どんな時だって、皆の傍にいる。例え、肉体が使い物ならなくなっても、皆を護るから』

エリスを背後から抱きしめるイチカに確かな温もりと安らぎを感じながら、目の前の敵を見据える。

「バンシィー！何かを壊す為じゃなくて、護る為に力を貸して！」

エリスの思いに伝えるように背後から鬣状に展開・変形すると続く様にバンシィも展開し、『ガンダム』になるが、バンシィの金色のサイコフレームからは嘗ての様な荒々しさは感じられなかった。

バックパックにあるビームサーベルを抜き、ビーム刃を発生させた状態で放ち、即席のビームブーメランとして、デストロイに投げつけると高速回転しながら、デストロイの脚部に損傷を与え、フライトユニット先端にある陽電子リフレクタービームシールド発生器を破壊するとアームド・アーマーDEに内蔵されているメガ・キャノンを放ち、無力化していく。

「これで……。終わり！」

ビームトンファを起動させ、コックピット貫き、破壊するとエリスはガロード達の所に向かい合流するのだった。

「お願い。フアンネルミサイル!!」

「シールドビット、アサルトモード!」

「敵の増援が多いすぎる...」

ガロード達が敵増援と交戦し、一夏の助言によって、今まで抱えていたモノが無くなった簪は自分のやるべき事の為に自分の力を使っていた。

一機のヅダが特攻を仕掛けてくるとガロード達は撃ち落とそうと攻撃を当てるが、その勢いは止まらず、自分達の近くまで来た時、ツダの背後から青白い閃光が放たれ、爆炎に飲まれるとガチャ、と何かを取りかえる音が聞こえ、爆炎が晴れるとそこにはNT-Dを発動させたバンシイの姿があった。

「皆、大丈夫?」

「エリス... だよな?」

「大丈夫よ。もう、私は自分を見失ったりはしない!」

メガ・キャノンで周囲の敵を薙ぎ倒しながら言うエリス。

「隊長! 此方に接近する敵影あり。総数、九機です」

「イチカ?... 待て、今から来るのは敵じゃない! 見方だ!!」

途中から合流したシュヴァルツェ・ハーゼの生き残りである、クラリツサとその部下たちが増援に来たのだが、クラリツサがセンサーに複数の未確認反応が接近している事を知らせると、ガロードが敵じゃないと言う。

先程、センサーに反応があった機体の内、七機がエリス達を護るように配置する。

「これは... Gビット? でも、なんでこんな所に」

「分からねえ。でも、イチカが助かるって言った理由がこれかもしれない」

「まさか、一夏がこれを操っているとでもいうのか？あいつは…今はベッドの上なんだぞ」

「フラッシュシステムも謂わば、サイコミュと似た性質だから、イチカが来た時にGXに搭載されているフラッシュシステムを起動させたのかも」

「どうやら、全員無事の様だな」

「マーク！」

声のした方を見るとGビットの肩を借りながら、マークが現れた。

Gビットはマークをマドカに預けると他の七機のように、移動する。

『ガロード、お前に俺の力を貸す。だけど、引き金を引くのはお前の意思だ。俺はお前の意思に従うだけ』

「ああ、やってみるよ。イチカ」

ガロードは意識を集中する。

「見えたッー」

自分に力を貸してくるイチカを感じ取ると、一筋の光が見えるとGビットがガロードの思うように動き出し始める。

「すげえ…、これがNTの力なのか…」

「あれほどの数を一度に操るなんて…」

搭載されてるビームサーベルやビームライフルを駆使し、次々と敵を落としていくGビット。

前方からデストロイが二機接近してるのに気づく。

「やるか？いや、やるしかないー」

『ガロード、お前に力を』

GXの周辺にGビットが集まるとGXは照準用ガイドレーザーを胸で受けるとすぐにスーパーマイクロウエーブが照射され、リフレクターが輝き始め、エネルギーが溜まっていくと周囲のGビットのリフレクターも輝き始める。

「これで、終わりだア！」

GXとGビットのサテライトキャノンが接近していたデストロイに襲い掛かると何もさせる暇も無く、塵一つ残さず、消えていくと後方にあった山の形を変えた。

『ガロード、後は頼んだ』

「分かってるよ、イチカ。俺達の未来にこんな、戦争の道具は必要ないだッ！」

「待て、何をするつもりだ！」

箒の抑止の声に耳を貸さずにGビットをビームライフルで撃ち落としていく。

「俺達が望んでいるのは戦争じゃない。平和を望んでるんだ！平和な世界に武器なんか必要ないんだッ！」

「ガロード……」

最後のGビットを撃ち落とした時にガロードが言った言葉の意味を理解しているようでしていなかった箒達は言葉が出なかった。

「戦いも終わったし、帰りましょ。イチカに無事だという事を教えましょー！」

「そうだな」

「だけどよ、エネルギーが残り僅かなんだぜ。どうやって帰るよ？」

「だったら、我がシユヴァルツェ・ハーゼの移動用ヘリを貸そう。祖国と市民を護ってくれたお礼だ。いいな、お前ら！」

「ハイー！」

エリス達はラウラの言ったヘリに乗り日本へ帰国した。

「皆に迷惑をかけた……。ごめん」

「気にする事ないわよ。そんな小さい事気にする事ないわ」

「兄さんの顔を見てから、今後について話そう」

「そうね」

エリス達一行はイチカの居る病室のドアを開けると一筋の風がエリス達の頬を撫で、風が止むと一同は病室の一ヶ所に釘付けになった。

「お、お前……、やっと……」

「どれだけ、私達を心配したことか……」

誰もが声を詰まらせる中で、ガロードとマークがようやく口から出た事を言う。

「……う……うう……」

「厳しい戦いだったね。でも、皆が無事に帰って来て嬉しいよ」

「奇跡、ですね」

余りの事態に、涙を流している人もいる程の出来事。

つい先ほど眠っていた人物が目を覚まし、話しかけてきただけで、自然と涙が出て来た。

「お帰り、皆。そして、ただいま」

『イチカアア！』

イチカが目を覚まし、笑顔で語りかけてきたその瞬間、誰もが喜び、笑い、そして、思いを寄せる人物たちはイチカに抱き付いた。

39話

イチカが目覚めてから一週間が経ち、敵の襲撃もなく、束の間の休息を堪能していた。

そんな日常を堪能する一組の男女がいた。

「い、イチカ…、クッキー作ったんだけど… 食べる？」

「お、おう…。有り難くもらうよ」

そう、イチカとエリスだ。

イチカがエリスの好意と向き合った結果、二人は晴れて恋人同士になったのだが、どう接すればいいのか分からないイチカの様子は少し、ぎこちない。

その様子を遠目で見ているグループがあった。

「ふむ、やっとあの二人は恋人になったか。長い道のりだったな…」

「本当にな、エリスがどんなにアプローチしてもあいつは気づかなかったからな」

「イチカは、少し距離をおいて接していました…。それさえ無ければあの二人はいつ結ばれてもおかしくありません」

「まあ、何はともあれ、これでイチカの奴もこれで少しは、自分の幸せを実感できるだろうよ」

彼らの事を知っているマーク達はエリスと一夏が結ばれたことに心の底から祝福した。

そんな中、コード・フェニックスは大人しいマドカに疑問を浮かべていた。

「イチカが取られたのに大人しいマドカ」

「何、恋にライバルがいた方が対抗心ができると思っただけの行動だが、どうやら問題なさそうだな」

「お前…」

まさかそんな考えの元行動していたとは予想しなかったコード・フェニックス。

「エリスは兄さんの本妻！　そして、私は兄さんの愛人枠で兄さんと熱い人生を送る!!　これが私の考えた計画だ!!」

「前言撤回だ。こいつはもう駄目だ...」

一瞬でもマドカを見直した自分が馬鹿だったと思うと同時にマドカらしいなと思ったコード・フェニックスであった。

その様子をマーク達とは別の方向から窺っていた人物がいた。

「はあ〜」

「どうした鈴？　そんなため息について」

「予想はしていたけど、こうもあっさり終わるとね」

「なんだ、諦めるのか？」

「諦めるも何も、あの二人に入り込む余地はないわよ。あんな、心から楽しそうないチカ、居なくなる前もそして、戻ってきた後も見たことないわよ」

「む、だが...」

「諦めの悪い女は嫌われるわよ」

鈴音はいチカとエリスの様子を見て、いままで一夏に対しての恋が終わり、どこか心に穴が開いたような気分になっていた。

何人かは諦めた人もいるが、箒の様にまだあきらめていない人もいる。

初恋は実らなかったが、なら、親友として彼らの恋路を見守っていいと思うと同時にいい相手を見つけて、見返してやると考えていた。

そんな事を考えているとシャルロットが何か真剣な顔つきで考え事をしていたのが気になり、親友として相談に乗ってあげようとした時だった。

「ねえ、鈴…。」

「何よ?。」

「略奪愛ってありかな?。」

「あるわけないでしょ。何考えてるのよ。」

何考えているんだ、と思った矢先に学園内に警告音が鳴り響いた。

警告音が鳴ると同時にイチカ達はすぐさま行動を開始した。

「アプロディア! 敵はどこに出た!!」

『未確認反応が一つ、第三アリーナです』

「了解!」

イチカ達が第三アリーナに着くと一夏以外は展開し、武器を構える。

目の前にいる機体に対して、並みならない警戒心と敵意を向けていた。

何故なら、目の前にいるの白い髭に蝶の様な羽根を広げた機体——
—黒歴史がそこにいたのだから。

そんな彼らに対して、イチカは両手を広げ、待ったを掛ける。

「皆、待ってくれ! 銃を下してくれ!!」

「何故だ、イチカ! こいつは幾度となく文明を滅ぼし、剩えお前に危害を与えた機体だぞ!」

「それでもだ! 今の黒歴史からは敵意も悪意も何も感じない、むしろ懐かしく感じるんだ…。」

「懐かしいだと…。」

イチカの行動に抗議を掛けるが、イチカの懐かしいという自分たちが感じれなかったモノを感じたイチカ。

マークは銃を下すと、周りにも下すように言うと、納得していないようだが、渋々銃を下す。

それを見たイチカは安堵すると、黒歴史と向き合う。

「答えてくれ黒歴史。お前は何をしにここまで来たんだ？ 頼む、無用な争いと血を流したくないんだ」

『…優しく、芯の通った逞しい子に育ちましたねイチカ』

「黒歴史が…。」

「…喋った!？」

イチカの頬に優しく触れながら黒歴史から女性の声が発せられた。

「やはりお前には意思があったのか…。」

「知っていたの?。」

「薄々な…。」 思い当たる節があるんだ。一つは初めて俺たちと会った時、二つはアクシズを攻撃した時、三つ目をはこの世界に来た時に黒歴史が俺を千冬姉に引き渡した時だ」

思い出してみると決められた行動にしろ、黒歴史の行動には不可解な点が多い。

それにまるで自分を守っているような、そんな気がイチカにはしてならないのだ。

『ええ、私には確固とした意志も記憶もありますよ。何せ、私は——』

—— 一夏と千冬の母親なのですから』

「『えええええ!!?』」

第三アリーナにイチカ以外の絶叫が響いた。

『落ち着きましたか?』

「なんとかな…。。だが、信じられん。黒歴史がイチカの母親だということが」

『私は元は人の身体を持っていましたが、わけ合っただけで今はこの姿です
が』

「百歩譲ってお前が私と一夏の母親だとして、なにをここに来た
?」

『知ると時が来たのです。二つの世界の真実を知る時が』

そう言っただけ、黒歴史は真実を語り始める。

『私達の住む二つの世界はある関わりがあります。それは遙か昔、今
よりも栄えた古代文明がありました』

「ちよつと待ったー!」

『いきなり出てきて、人の話を折らないでくれますか?』

「おうおう、いきなり語りだしたと思えば、今より繁栄した文明だつて
? そんなのあるわけないだろ常識的に考えろよ」

『その常識がすべてではないのです。貴女の常識で一夏達に起きた非
常識的なことが説明できますか? 出来ないのなら、口を慎んでくだ
さい』

「クツ…」

黒歴史の話を折った束だが、黒歴史の語ろうとしていることを聞か
ずに否定するが、黒歴史に反論され、現状、説明できない為、引き下
がるしかなかった。

『今よりも繁栄していた古代文明達は争いもなく、平和に過ごしてい

ました。そんなある時、未知の流行り病が流行し、ワクチンなどの特効薬が存在せず、多くの人命が失われました。多くの命が失われることを忌避した一人の科学者とその部下はナノマシン技術を作り出し、ナノマシンを駆使した治療の元、多くの命が救われました。ですが、そのナノマシン技術を戦術的に使い、世界をわが手中に収めようとした一つの国が全世界に対して、戦争を仕掛けました』

「その戦争で古代人たちが滅んだと言うことか？」

『確かに甚大な被害が出ました。現存する医療では不可能でしたがある科学者がナノマシン技術を開発し、その流行り病に対する対抗策を手に入れました。そのナノマシンをより改良し、自分たちの生活をより良いものにしようと考えました。いい方向に進んでいく傍らで、その技術を自らの私利私欲のために使う者が現れました。多くの可能性を持つナノマシンを軍事目的で使い、世界を我が物にしようと欲望のまま、破壊と殺戮を繰り返す者が現れ、既存の兵器では対抗出来ず、支配下に置いた地域から徴兵し、日を追うごとに拡大していく戦力に世界が支配される日は目の前まで迫っていました。自分の開発した技術が人々を苦しめることに罪悪感を感じた彼は嘗てともにナノマシンを研究し開発した同士を集め対抗策を考えました』

「何だろような既視感を感じるな。束」

「… うん」

黒歴史の話聞く中、既視感を感じる束と千冬。

束もまた、宇宙に行くという文明発展の技術が今では戦争の道具になりかけているのだから、妙うな既視感を感じられずにはいられなかった。

『自分が持てる技術を以って一つの機械仕掛けの巨人を作りました。その背に羽ばたく七色に輝く蝶の羽根で戦場を駆け巡り、人工物を砂状に分解する機能の前に戦争を仕掛けた集団も抗いはするものの全て返り討ちにし、打ち取ることが出来ました。ですが、世界規模の戦いの終わりに待っていたものは荒れ果てた大地と見る影もなくなっ

た人工物のみでした』

「それが、黒歴史が生まれた理由か…。」

『ええ。そして、何とか元の文明に戻す事は出来ないかと模索しますが、残っていた記録のその殆どが失われ、不可能だという結論が出ました。そして、彼らはある選択を迫られました。新たな世界で一からやり直すのか、戻るのが絶望的な母星に残るか』

「それは… 苦しい選択だな…。」

『そして、生き残った人たちは二つに分かれました。黒歴史を使い異世界へ飛んだ一行は過ちを繰り返さないためにあるシステムを作りました。争いのない世界をどうしたら作るのか繰り返し検証するために、月にそのシステムのプロトタイプを作りました』

「それが月のジェネレーションシステムのできた理由か、そして私たちの世界がある理由がわかったが…。試験管の上で躍らせてる気分だ」

マークは行き場のない怒りを感じた。

古代人たちの平和の為の実験、そのために多くの命を奪い、失った等と考えたくなかった。

『異世界に渡った人たちは、過ちを繰り返させない為に、平和を望む一心でシステムを構築していきましたが、あれほどの膨大なシステムを作るのに長い年月が必要でした。システムの構築と同時に一機の巨人を作り上げました。自らの再生と平和の象徴として、この宇宙^{ソラ}を鳥のように自由に羽ばたけると信じて』

「その機体は… まさか…。」

『その機械人形は、とある神話に記された不死鳥をモチーフに作られ、不死鳥に相応しい再生能力を持った機体フェニックスガンダムを作り上げました』

「フェニックス…。」

イチカは、待機状態のフェニックスを見る一夏。

自分の愛機であるフェニックスの誕生経緯に一夏はフェニックスは争うための『力』ではなく、平和への『祈り』なんだと確信した。ならば、今の運用は古人にとっても、フェニックスにとっても本末転倒なのだろう。

『そして、フェニックスの姿は今とは違うものでした』

「経年劣化で改修したからか？」

『いいえ。フェニックスはこの機体^{黒歴史}をベースに、一種のアンチテーゼとしてある三大理論を基に作られました。ナノマシン搭載機は基本黒歴史がベースと考えていいでしょう』

「三大理論か……。デビルガンダムを思い出すな。その三大理論はなんなのさ？」

『その三つの内容は〈再生、再構築、再現〉。嘗て持っていた力です』
「持っていた、か……。今はその能力は使えないのか？」

今のフェニックスは仮初の姿だという黒歴史は、フェニックスの本来の能力を伝える。

どうゆう理屈か、その能力は今使えないのか気になったガロード。

『限定的でいいのでしたら二回、正確には三回能力を使っています』

『サイコフレームの搭載、フェニックスに加えられた別の機体の姿、……。そしてISの形態移行ですね』

『その通りです。本来、フェニックスにはサイコフレームは搭載されていません。ですが、あのアクシズショックの時、一夏の思いと、周囲の意思によってその能力を一時的に開放しました』

「私もかつて、フェニックスに乗っていたが、そのような能力を体験した覚えはない。フェニックス掛けられていた制限が解除されたくらいだ」

『その理由についても話します。月のジェネレーションシステムが完成し、十分なデータが取れたのを機に自分たちが生まれた母星と同じ

星の内部にメインとなるシステムを構築しました。メインシステムが完成したのをきっかけに過去の災厄の象徴ともいえる黒歴史は、時代の流れ共にその恐ろしさを忘れ、世界のどこかで眠りにつきました。フェニックスを再生の象徴として祀られ、時代が進みある日を境にその力を二つに分け、封印しました。一つはシステム最奥部で深い眠りに、もう一つは現在のフェニックスガンダムとなりました」

「時代の流れによって、認識が薄くなり忘れ去られるか……。宇宙世紀にもあったな」

「シーブツクの時がそうよね。ニュータイプと言う言葉は存在しても、その存在は本質とは別のモノとして扱われていた……。そんな感じなんでしょうね」

確かに存在したものであっても、確認できなければ、体感しなければ、認められなければその認識は次第に薄れていき、同じ過ちを繰り返すのだろう。

『フェニックスの能力もまた同じでした。心悪しきものがその能力を使って嘗ての様な過ちを犯すことを恐れた、古代人は能力や機体性能を封印し、正しくその力を使うものにその力を解放するよう設定され、黒歴史とは別の世界に封印しました』

「なるほどな、私は完全には認めてもらえなかった。だが、力を扱うに値する存在として能力の一部を解放したのか」

『そして、稼働したシステムのチェックと権限、生まれた世界の行く末を見定めていく存在を作りました』

「それが俺たちコードを持つ者として、アビーが存在する理由か……。決められたルールを走り続けているのか俺たちコード持ちは……」

言いようもない感情がコード・フェニックスを襲う。

自分達の出自は分かったが、それは決められたことを永遠と繰り返す機会と変わらないと思ってしまうた。

『こうして多くの世界が生まれ、また争いを繰り返していく…。まだ見ぬ平和を求めて』

「そんなんじや、平和は訪れない…。ただ哀しみが広がっていくだけだ。互いに手を取り合って、分かち合って、話し合い互いに平和を共有しなちやダメなんだよ。それが平和への模索だとしても、ただの悲しい歴史の再現でしかないんだ」

「イチカ…。大丈夫だよ！ 私達だって分かり合えたんだから、きつとできるよ！」

『そして同じく、残った人たちは自分達の母星をどうにか元に戻せないか模索し始めました。ナノマシンの汚染の影響で、食物が育ちにくい。まず土壌を調べ、ナノマシンの影響を受けずに済む食物を作り、自然を蘇らせました』

「結果的には成功したのだろう。でなければ私達がここに居るのは不自然だ」

「前にコード・フェニックスが黒歴史が描かれた壁画を見つけたが、それはきつと同じ過ちを繰り返させない為に、そして忘れないために書いたんだろうな」

「だが、この世界でも人は懲りずに争い続けている」
「つくづく人間は学習能力のない種族だね、兄さん」

フロスト兄弟の言うように人は懲りず争い続けているのだからそういういわれても仕方のない事なのだろう。先の出来事を後世に伝えられていたのなら同じ事を繰り返してはいないのだろう。

『歴史の真実を伝える事。そして、フェニックス掛けられた封印を解く時が来たのです』

「封印を解く、そんなことが出来るのか？ フェニックスはパイロットを選ぶのなら一夏が選ばない可能性もあるのではないか？」

『その可能性は低いでしょう。今までフェニックスが一夏に取った行動を顧みるに、フェニックスは一夏を概ね認めていると考えていいでしょう。フェニックスガンダムとしての本来の力を発揮できるか、そ

れは一夏自身に委ねられます。私に出来るのは扉に掛かった鍵を開けるだけ』

「お願いできるか黒歴史：．．いや、母さん。俺はコード・アメリカスを止めたい」

『フェニックスを起動させてください。こちらで封印解除用のコードを送り、後は貴女の覚悟次第です』

「俺の覚悟次第：．．」

イチカはフェニックスを起動させると黒歴史がフェニックスの手を優しく握る。

『目を瞑り、意識を集中してください。そして、感じるのです。フェニックスの奥に眠る意思を』

黒歴史に言うようにイチカは意識をフェニックスに向けるのだった。

気が付くとそこは古い神殿の様な場所に居た。その外観は月のジェネレーションシステムを新しくしたような場所にイチカはいた。

「ここは、月のジェネレーションシステム：．．。にししては、新しく見えるな」

【数多の戦いを乗り越え、不死鳥に魅入られし者よ】

「誰だ！」

一夏は、当たりを見回すと中央にそびえ立つ塔に一つの球体が降り

立つ。

【私は嘗て、不死鳥の担ぎ手として共にあつた者だ。汝に問う。何故、力を求める】

この時、NT故か一夏は、本能的に理解した。目の前に居る光はフェニックスに宿る残留思念の様なものだ。言動から、嘗て自分と同じようにフェニックスに乗っていたという事を理解するのに時間はかからなかった。

「俺は、あんな悲劇を繰り返したくない。俺は嫌なんだ……。人と人がいがみ合い、傷つけ合うのも、目の前に起きた突然の死で、悲しみを生み出したくないんだ！」

【人の在り方とは謂わば、光と闇そのものだ。それが人の性故に、お前が味わったものは必然とも言える】

「なら、教えてくれ……。俺はあと何回戦争を体験すればいい？俺はあと何回戦えばあの子の手を握れるんだ……。！」

【その問いに關して言える明確な答えは、私にはない。だが、一つだけいえる事がある。NTが人の革新であり、可能性の象徴だとするのなら、それは人の数だけ存在することになる】

親が子を論するような温もりを感じるような声で一夏に答える。人の数だけ平和があり、その可能性も多岐にわたる、その意味をイチカは理解している。

【お前もまた、その可能性を示してきた。ならばその可能性を示すがいい！この試練で証明してみせよ！己が可能性を！】
「クツ……。！」

眩い光が辺りを覆うと目の前には無数の機体が現れる。一夏の知っている世界の量産機がざつと数えただけで、300は超えていた。自身が、いつのまにかフェニックスを纏っていたことに驚きなが

ら、ビームライフルを構える。

「この程度の程度の敵どうってことはないが…。」

イチカはフェニックスの持てる武装を使い次々と撃破していくが、無尽蔵に湧いてくる敵と、試練の内容に疑問を持ち始めた。

（本当にこれでいいのか？ これじゃ今までと変わらない…。敵を倒して、悲劇が生まれ、新しい戦いが始まるだけで、何も変わらないじゃないか！ アイツの言う可能性は、力で相手をねじ伏せる事なのか!!）

イチカはハイザックのコックピットに突き刺したビームサーベルを引き抜き、爆発するハイザックをみながら、あの光の意図を考えていた。

「出てくる敵を倒して、それに何の意味がある。お前の言い可能性は力で相手をねじ伏せる事なのか」

『…この試練の内容に疑問を抱いているようだな。何かを為すために敵を討つ覚悟が必要だ。すでに貴様にはある事を理解した。ならば、これが最後の試練だ。今から現れる奴との戦いで倒すこと以外の可能性を示して見せろ!』

「なに?。」

光の言った最後の言葉に疑問を浮かべるイチカの前に黄金に輝くユニコーンガンダムが腕を広げながら降り立ってきた。

「此奴が、試練の相手…。」

目の前のユニコーンの同型機に向け、にビームライフルを構えているイチカは知らないが、その機体はRX-0シリーズの3号機、ユニコーンやバンシイの兄弟機であり、地球連邦がビスと財団の干渉を受けずに作り上げた機体であり、同じく不死鳥の名を冠するMSである。

「簡単にはいかないだろう、な！」

イチカはフェネクスに向け、ビームライフルを放つが機体の装甲から溢れる青いサイコフレームの輝きと同じ光を纏いながら可憐に避けていく。

「舐められている…。俺にその試練をクリアできないとでも言いたいのか!!」

ファンネルを射出し、ビームライフルで牽制しながら、ファンネルで攻撃するがその全てを躲していく。イチカはフェネクスに接敵しようとする、フェネクスは逃げる様に、その場から飛び去る。青と赤が不規則な軌道を描きながら、飛んでいく様何処か幻想的にも見える。

「そこだつ！ ファンネル!!」

進路上に配置したファンネルを放ち、危険だと判断したのか急停止から急加速するフェネクスだが、その一瞬は接近するには十分だった。

「貫った!! ……チィ」

接敵したイチカは、ビームサーベルを振りかざすも、ユニコーン同様に搭載されていたビームトンファアで防がれる。

「防がれた…。ならー。なッ!?!」

背後からファンネルで攻撃しようとした瞬間、虹色の光が開いている手から放たれ、その輝きに触れたファンネルは崩壊して行く。

「サイコ・フィールド…。ファンネルを破壊した…。? いや、時を巻き戻したような…。!」

起こったことを分析しようとしていた時、先ほどまでファンネルに向けていた虹色の光を自分に向けている事に気が付いたイチカは、咄嗟に避けるも左肩に接触する。

「グワアアアアアア!! ……グッ!」

虹色の光から逃げる様に飛び回るフェニックスに、虹色の光で攻撃こそすれど、他の武装で攻撃してこない事に違和感を覚え始める。

「奴の動きに殺意がないッ！ コピーニューロとも違う、殺意や敵意と言ったものが一切ない。ビームトンファーやサイコ・フィールドだって、防衛の時だけで、自分から攻撃してきていない」

試されている、イチカはそう感じた。自分がフェネクスをどう対処するのか、それによってこの試練で認められるのか決まる。

「人が持つ可能性は人それぞれ…。なら、俺は…！」

覚悟を決めたイチカに答えるかの様に、フェニックスのサイコフレームが緑色に変わっていく。持っていた全ての武器を放棄し、フェネクスに近づいていく。

「あの時、可能性は人の数だけ存在すると言ったな。なら、これが俺の…！」

両手を広げ、敵意はないと意思を証明するかのようにイチカは一切攻撃せず、ゆっくりとフェネクスに向かって、進んでいく。そして、目前まで迫った時、フェネクスはビームトンファーで、フェニックスの頭部に向かって、突き出す。

「…」

だが、寸前でフェネクスが軌道を逸らしたことで、直撃は避けられ、V字アンテナの一部が融解している。フェネクスはビームトンファーを仕舞うとイチカを見つめ続け、そのままどこかへ飛んで行った。

「それがお前の覚悟か…！」

「ああ、そうだ。今は戦う事しかできないかもしれない。でも、いつかは銃を向ける事なく、戦争と言う言葉自体が存在しない世界が訪れると俺は信じている。互いに分かり合うのに武器は必要ないんだ」

「その偽りなきその思い…。貴様であれば、フェニックスの全てを託

すことが出来るだろう。フェニックスが覚醒したこの瞬間を持って、封印されていた守護獣が目覚める。『フェニックス本体』、『パイロット担ぎ手』、そして核である『守護獣』が揃いつつある。フェニックスが本来の姿に戻る日も近い』

「うっ…！ 辺りが眩しい…！」

【貴様の覚悟しかと見届けた。此度の試練で見せたその思い、決して忘れるな】

辺りが、一層眩く輝く中、イチカの意識が遠のいていくのだった。

「うわっ!? フェニックスが燃え始めたぞ!!」

「きさ… 母さん！ 本当に一夏は大丈夫なのか!!」

『大丈夫ですよ千冬。試練が始まっただけのこと。一夏が心配なのは分かりませんが、私達がない間、一夏をあなた一人の手で育ててきたのは分かっています。それ故、一夏に並みならぬ愛情を持っているのは理解しますが、少しは弟離れしたらどうですか?』

「誰のせいで、私達が苦勞を…、私のことはどうでもいい。だが、一番親の愛情を注ぐべき時に自らの研究の為に、一夏を孤独にさせた貴女には言われたくない!」

「ちーちゃん…」

『元々一か月程度で済むはずでしたが、私達は一夏達が呑みこまれた異世界通じる穴と同じものに呑みこまれ、あちらの世界を彷徨いました。我が子を残して平然とする親がいると思いますか? 私達は戻る為の手段を探し、行くことが出来るのなら戻ることが出来ると考え、研究中に見つけた黒歴史であれば戻れると考えにたどり着き、探し続けました。ですが、夫は流行り病に倒れ、命を落とし、同じよう

に私も感染し身体もボロボロで余命も残り僅かであることを感じ取りながら、藁にもすがる思いで探し続けました』

「イチカの母親だと言うには、何故機械の体… 黒歴史なんだ？」

『ボロボロの身体で残りの命も風前の灯火も同然でしたが、我が子を残して死ぬわけにはいかない。夫との約束を護る為、必死に探し続け、ようやく見つけましたが、肉体はすでに限界で、戻る事は出来ないと判断した私は、黒歴史に私の記憶と人格をコピーし、私の脳髓を使用した電腦を黒歴史に搭載して、死にました』

何故、黒歴史の姿でここに居るのか。誰もが抱いた疑問を黒歴史は自分に起きた事を包み隠さず話していく。その事実、誰もが絶句するしかなかった。

『大切な我が子を置いて死ぬなんて認められない。例え肉体が死んだとしても、記憶と人格が残っていれば新たな肉体を用意し、貴方たちの元に戻ることが出来る。そう思い行動しました』

「なら、何故あの時イチカを攻撃した？ 息子だと判断できなかった言われればそれまでだが…」

『記憶と人格の移植は成功し、電腦も問題なく起動していました。これで帰れる、そう思い黒歴史を起動させたその時でした。膨大なデータが嵐となって私を呑みこみ始め、私と言う存在は電子の海に沈みましました。そこからは朧げな意識の中、黒歴史の行動見る事しかできませんでした。あの時までは…』

「あの時って、イチカ撃った時？」

『ええ、あの時コックピットの中にいた一夏の顔を黒歴史のツインアイ越しで見た時、私の意識は電子の海から這い上がり、黒歴史を完全に掌握し、これ以上一夏を傷つけまいと撤退しました。というか、私が耐えられませんでした。実の息子を傷つける等…！』

あの時、止めを刺さずに撤退したのはそういうことか、とあの場で戦っていた全員が黒歴史の不可解な行動の意味を理解した。子を思う母親の思いが起こした奇跡と言えるかもしれない。

『成長した一夏の姿は、若い頃の夫にそっくりで、あの時の覚悟を決めたような表情は瓜二つよ。この身体で親の本能というのは些か違和感を感じるけど、本能的に目の前に居る少年が一夏だと理解したわ。罪滅ぼしなんて言うつもりはない、夫に続いて一夏まで、失う訳にはいかなかった。だから、遠くから一夏達の様子を見守り、危険だと判断した時だけ介入する方針で行動して、今の至るということになるかしら』

「約束とは何だ、母さん？」

『それは言えないわ千冬。ただ親として当然のものだけど、私達にはその資格がないのよ。意図せずだとしても、貴女達を置き去りにした私達に……』

黒歴史から哀愁を感じる。きつと後悔しているのだろう、大切な子供を孤独にさせた自分に。

「イチカ大丈夫かな？」

「その試練の内容は分からないのか？」

『試練の内容までは分からない。ただ、一夏なら出来ると確信しているわ』

「様子も分からないのになぜそこまで言い切れる」

『子供はね、千冬。いつまでも雛鳥のままじゃない、いつかは大人になる。親の予想を遥かに超える速度で手から離れていく。そんな子供を親は信じて見舞う事しかできないの』

「私は信じるよ。イチカが試練を乗り越えて、戻ってくるって」

黒歴史は自らの手の感触を確かめる様に握る。イチカもまた、自分の手を離れ、自分だけが持つ翼で、羽ばたいていく。確証は無くても、必ず成功させると信じていた。

『これから大きな戦いが起きます。二つの世界の命運をかけた戦いが……。その時あなた方は何を感じますか？ 戦争の無意味さ？ 命の大切さ？ 命の輝き？ 未知の現象に対する恐怖？ それとも何も感じませんか』

「それは一体どういうことだ、母さん！」

『これから起きる事の本質を見極めることが出来なければ、同じ悲劇を繰り返す』

「ほんの小さなきっかけで戦いが起きる。見ているものも、感じている物も人それぞれ違う。ほんの少しのすれ違いで悲劇が起きる。だけれどその根底にあるモノは同じなんだ」

黒歴史の突然の言葉を疑問に思う中、黒歴史は今後、確実に起きる戦いで起きていることを理解できなければ、この世界の人類が古代文明と同じ過ちを繰り返すことになる、その言葉に続くように今は試練を受けている人の声が聞こえた。

「兄さん！」

『試練は成功の様ね』

「ああ、あいつはフェニックスの全てを託すことが出来る、と言っていた」

「イチカなら成功できるって信じてたよ!!」

試練を乗り越えたイチカの周りに人だかりができる。そして、まず目に入ったのはフェニックス外観だった。

「なんていうか、フェニックスの姿がより人型に近づいたな」

「俺のマスターフェニックスにそっくりだぜ」

「クロスバインダーソードのあった場所に赤い鞘が左右に二本、肩にあった翼は完全に背部に固定されてるな。至る所に金色の鎧の様なパーツの様なもの、クロスバインダーソードは翼部の邪魔にならないようにマウントされているか」

『フェニックスがマスターフェニックスに近づいたのではなく、マスターフェニックスがフェニックスに似せて作られたのです。ハルファス、マスターフェニックスといった、不死鳥の名を冠したナノマシン搭載機はのフェニックスが元になっているから似ているのは当

然よ』

「これがフェニックスの真の姿なのか？」

今までのフェニックスと異なり、限りなく人型に近い造形になっており、その姿を見たコード・フェニックスが自分の愛機であるマスターフェニックスにそっくりだと思いう中、黒歴史が似ている理由を話す。

「これで、フェニックスはかつての力を取り戻したの？」

「いや、3割程度だ。大本の力はあつちの世界に別の姿で眠っている、守護獣とあいつは言っていた。この言葉に聞き覚えはないか？ アプロディア」

『いいえ。ですが、私ですら立ち入ることが出来ない区画があります。可能性があるとしたらそこかと』

「え？ それじゃ、フェニックスが真の力を解放するのは無理なの…」

「いいや、あいつはフェニックスの力が覚醒したことによって守護獣が目覚め、近いうちに真の姿に戻ると言っていた。その近いうちがいつまでなのかはわからないけど、そう遠くない気がする…」

イチカはフェニックスの現状を伝え、試練で起きた事を説明する。

「アプロディア、ユニコーンガンダムにバンシイ以外に兄弟機はいるか？」

『確かにいますが…、何か気になることでも？』

「試練の時に対峙したユニコーンガンダムの同型機は、サイコフィールドを放ち、触れた機体の装甲を『時間を巻き戻した』ように崩壊した。俺が知っている限り、そんなこと出来るのは機体に魂が宿った時か、人の意識が集中した時だ」

『人は死ぬと魂となり、認識の及ばない高次元にある魂が集うフィールドに行くと考えているわ。NTは生きたまま、魂から発する未知の

エネルギーを操って現実に働きかけ、サイコミュは時に魂のエネルギーを集め物理的なエネルギーに変換してモビルスーツに作用させる装置だとすれば、NTが起こしてきた数々の超常的な出来事も説明がつくわ』

イチカの疑問に仮説で答える黒歴史だが、あまりのも突拍子もない事を言い始め、困惑するものが出始めた

「えーと、つまりどういことだ？ NTはサイキッカーみたいな感じなのか？」

「それとも違うだろう。だが、アクシズを押し返した時、イチカが上空からの攻撃を受け止めた時、その中心にはサイコマシーンが存在した。サイコマシーンとNTのこの二つは私達の思っていたよりも密接な関係にあるようだ」

「サイコフレイムだけでこうなんだから、フルサイコフレイムだともっとすごいことになるって事？」

「それこそ、イチカがユニコーンガンダムに乗った時のようなことが起きるかもしれん」

マーク達は自分達NTやサイコミュといった身近なものであっても、理解できてい居ないところが多い事を再認識した。

『ISでは、彼女の軍勢に太刀打ちするのは困難でしょう。ですから、あなた方にこれを渡しておきます』

「これは？」

『あなた方が使っていたフェニックス・ゼロの強化案、フェニックス・ゼロワンです』

フェニックス・ゼロは嘗て、エリスや一部のクルーが乗っていた機体。フェニックスの完全再現を目指して開発されたが、フェニックスが持つ複数のブラックボックスを解析出来なかったため、フェザー

ファンネルやナノスキン装甲などの特殊技術を実装する事が出来なかったがビームサーベル、バルカン、ビームライフル、メガビームキャノンと一通り揃える事に成功している。他にも機体のカラーリングやツインアイがゴーグル状など違うところなどがある。

「フェニックス・ゼロの強化機ということは、差し詰め指揮官機と言った所か」

「なら、この機体をI.S学園の教師陣にフェニックス・ゼロとトルネードガンダムを渡して、部隊のリーダー格にフェニックス・ゼロワンの強化機を渡すというのはどう?」

「確かに、それなら戦力としては申し分ないだろう。今後の戦いの規模を考えれば妥当か」

「私達に貴様たちの世界の機体に関する情報は渡すつもりはないのはなかったのか?」

「戦況が変わった。私達だけではこれから起きる戦火を全て消すことは不可能に近い。ましてやコピーニューロが操る機体ともなれば一層厳しいものになるだろう。織斑千冬と同等の敵が20人嘗ての機体に乗って出てきたらどうだ。対処できるか?」

「無理に決まってるじゃない。織斑先生が20とか太刀打ちできないわよ」

自分達だけでどうにかできる状態ではない事はマーク達は理解している。今後は世界を股にかけて戦うとなれば彼女たちを護ることは出来ないし、同行させれば守りが薄くなる。今は少しでも協力者が欲しい。その為なら、多少の流出程度些細なことだ。でなければこの世界はコード・アメリカスに支配されることになると理解しているからだ。

「君たちにはそれぞれ、今の機体に近く、スタイルに合った機体を用意しよう。新しい機体に乗った際に少しでも今まで乗ってきた愛機に近ければ、乗りこなしやすいだろ」

「そんな都合のいい機体があるのか？」

「もし無かったとしても、選んだ機体をベースに改造するという手もある」

『ISの技術はほぼほぼ使えないと考えてください。絶対防御然り、拡張領域なんてありませんから』

「寧ろあるとやりづらいな私達は。これに関しては私達にはどうにもできないからその天災に頼るしかないだろう」

「このまま行くとちーちゃんも箒ちゃんも居なくなっちゃう可能性があるし、仕方ないから協力してあげるよ」

このまま行けば戦力的にも、技術的にも上である敵に自分の最高傑作であるISが無残にやられていく姿を見てきた以上、目の前の事実を認めるしかなかった。自分ではもうどうにもできないのだと。

「機体のデータはアプロディアが持っている。彼女から自分に合った機体を選んで、より使いやすい様に改造してくれて構わない」

『よろしいですね。イチカ』

「これ以上意地を張ったところで、なにも好転はしない。ならば、少しでも好転出来る道を選択した方がいい。それに近いうちにIS委員会は消滅する」

「どういう事だイチカ？」

「試練の終わり際にあいつは『刻』を見せた。その中に、コード・アメリカスの宣誓布告、IS委員会の消滅があったんだ」

イチカは試練が終わり、光に吞まれた際に刻を見ており、これから起きる事を言うマークが思案を巡らせる。

「なるほど、この世界の基幹を為すIS、それらの情報を統括、管理。今の世界において重要な拠点の一つだ。その委員会が敵の手に落ちたとなれば、自分達の信用するISでは、戦っても勝ち目がないと現実を押し付け、反攻に意思をへし折ることで、相手を服従させること

が出来る」

「恐怖による抑圧か。確かにそれならば戦う事の出来ない民間人は効果はあるだろう」

「そして、湧き出てきた反攻勢力を潰せば、なお効果があるだろうしね。なんなら見せしめにブリュンヒルデを公開処刑するという方法もあるよ。そこまですれば後は圧政を引くだけということだね兄さん」

「何処までするか分からない以上、こっちは出来る限りの対策を討つしかないんだ」

彼女が本気なら、完全な統治の為に何処までやるだろう。そういった執念を幾度となく刃を交えてきたイチカはそう感じていた。

『生身の肉体を持たない私に出来る事は少ないです。ですので、今回の事態に対処するのは今を生きる貴方たちだけです』

「そこまで強力な機体なのに戦わないのか？」

『生きている人が起こした問題は、生きている人が解決しなければなりません。私の様に機械の身体に記憶と人格があるだけの様に、魂だけの存在にその権利はありません。出来る事なら、協力したいですが、それは・・・人の摂理に反します』

「分かっている。この問題は俺達だけの手で解決しなければならぬ。例え、どんなに厳しい戦いでも俺達は乗り越えなければならぬ」

『見守ることしかできないけど、祈ることはできます。貴方たちの勝利があらん事を願っています』

人が起こした問題は人が解決しなければならぬ、と言い聞かせた黒歴史はその場から文字通り姿を消した。

『ISに乗り皆さんはこちらに。貴女方にあつた機体を選んでください』

「選び終わった後の慣らしなら手伝おう。MSに乗るわけではないから、すぐ感はつかめるだろう」

「セシリアに関しては私が面倒を見よう。あの体たらくファンネルを鍛えて真面に使える様にしてやる。私の訓練は厳しいから覚悟しておけ」

「絶対防御がないのに心理的に絶対防御に頼るとかも直すか」

「それなら、イチカとマークのファンネルとか、取りあえず回避するもしくは防ぐという手段が取れる様に鍛え直すか」

「俺達が可能な限り、バックアップするから。みんなは乗り熟せるように集中してほしい。俺とフェニックスも手を貸すから」

彼らは反撃への一步を踏み出した。これから一緒に戦う彼女たちにイチカは不安を感じさせない笑みを浮かべながら手を差し伸べるのだった。

そして、世界の真実を知ってから、数日後にコード・アメリカスによる宣誓布告によって世界中には戦火が勃発し、人々は戦いの渦に取り込まれるのだった。

そんな中、もう一つの世界で動きがあった。

「クソ、イチカだけじゃない、マークやラナロウ、エリスまでも消息を絶つとは…。」

ネエル・アーガマ、ブリッジでゼノンが行方不明になっている六人とアプロディアの行方を探していた。

「未だに有益な情報も入ってこない…。あつたのは…。」

格納庫に安置されている黄金に輝くフェニックスを沸騰させるMAがあった。行方不明になった奴らを探し周辺各地や最初にイチカが行方不明になった月のジェネレーションシステムを探した際に、一際古く、警備が厳重だった場所に眠る様に厳重に封印されていたのを見つけ、何かの手がかりがあるかもしてないと回収したのだ。

「解析を進める上で分かったの、ジェネレーションシステムと同レベルで古く、ナノマシンを含めフェニックスとの類似性が90%を超えている。恐らく、随伴機なのだろうが、コックピットが何処にもない完全な無人機。機体名称が『バーニングホルス』…。」

解析を進める上で分かったことが纏められた資料に目を通すゼノン。ゼノンはイチカ達は死亡なんてせず、どこか別の場所に飛ばされた…。それこそ嘗てイチカやマドカが自分たちの所に来たように、

その逆もあり得るのではないかと考えていた。

「これだけ古い機体なら、何かしら異世界に関する情報があるかもしれない。あの時観測情報はイチカがこっちに来たものと同じだった。なら掛けるしかないその可能性に……その為に今は解析と搜索に集中する。幸いに今の所、敵は出ていない今の内に進めなければ」

資料に目を通していたゼノンは気づかなかった。バーニングホルスのツインアイが一瞬輝いたことに。—— 覚醒の時は近い。

40話

黒歴史から世界の真実を伝えられてから数日後世界は大きな争いに呑まれていった。コード・アメリカスによる世界に対する宣誓布告がなされた際、当初はただの悪趣味な悪戯だと思った。

「ひれ伏せ人間ども！貴様らのI Sという愚かな偶像が見るも無残に破れていく姿を!!このコード・アメリカスが貴様らを統治する!!」

I S委員会本部に突如現れたインプルス・コルニグスを中心にアマクサ、バタラによる一個中隊、サイコ・ザク、ドム、高機動型ザクによる一個小隊によって襲撃され、迎撃に出たI S委員会直属の部隊は瞬く間に殲滅された。絶対防御を、I Sを過信し、実戦系経験の皆無だった部隊は初めて直面する明確な『死』に恐怖し、怯えただ逃げの事しかできないI Sを絶対防御ごと切り裂き、一方的な蹂躪と云う形で蹂躪され、交渉の余地すら与えられず上空から放たれた一撃によりI S委員会は岸から消滅した。たちの悪いジョークだと誰もが思った。だが世界各国のトップに修復不可能なレベルで破壊され動かなくなった血の付いたI Sコアが送られそれが現実に起きたものだと理解した。そして、世界は圧倒的な力を持つコード・アメリカスによって徐々に支配されていった。

「イチカの言う通り、I S委員会が滅び、I Sでは到底敵わない敵が現れた」

「だけど、希望の芽が潰えたわけじゃない。私達はまだ、負けてはいない」

コード・アメリカスによって、支配されていく中でそれに抗うようにレジスタンスがいくつも現れ、場所構わず戦闘が起き安全な場所は徐々に無くなっていき、今ではI S学園は難民を受け入れる避難施設兼レジスタンスの拠点として活動していた。I S学園以外でも複数

の国がコード・アメリカスの支配を否定し、今もなお反抗しているが徐々に押され始めている。

「I S学園にいる教師陣が周辺の警護あたっていているが、攻めに回れないのがつらい所だな」

「彼女達も戦場で戦えるように訓練はしているけど…。」

「まあ、いままで碌な戦闘をしたことの無いひよっこ同然だからな。イチカも指導に力が入るが…。」

マークとエリスは、今も模擬戦が行われている第二アリーナに目を向ける。

「無駄玉を使うな！」

「そんなこと言っただって!？」

「無駄口もだツ!!」

「キヤアアアアアアアアアア??！」

第二アリーナで行われた実践形式の模擬戦なのだが、機体が未完成の楯無の機体に覚醒したフェニックスがファンネルを駆使し、翻弄された所を接近戦を行い止めに踵落として地面に落としたのだ。

「う〜！またお姉さんが負けた…。」

「そのエクシアはGN粒子制御が未完成だから改良が必要なのは知っているが、それでも戦いようはある」

「いやいや、手加減と言うモノが無すぎなのよ。あんな猛烈なアタックされたらお姉さん惚れちゃうかも」

「ファンネルの使用数を四分の一以下にしてるんだがな…。減らず口が叩けるという事はまだまだいけると言う事だな。よし、もう一戦逝くか？」

「いえ、結構厳しいので少しお休みを…。」

地面に出来た大きなクレータから、よろよろと覚束ない足取りで歩く楯無。その姿は嘗てのISでミストリアス・レディとは異なり、全身装甲のガンダムタイプで、背部から絶え間なくGN粒子が放出されている。

「俺が使っていたエクシアをベースにミストリアス・レディに使われていたナノマシン技術を搭載した機体だが、ISの技術をそのまま載せた事による弊害か、粒子制御能力に難がある様に見える。本来のエクシアであれば高速近接戦闘が可能はずだ。後は、重心がやや右に寄るから気をつける事だな」

「調整もせずにそのまま載せるとダメか」

「一番手っ取り早いのはOライザーの様な支援機を新しく設計して、安定させるだろうな。制御だけじゃなくて、武装面や機動力などの強化も視野に入れるといいだろう」

「んー、確かにそれは名案ね。ちよつと、アプロディアさんの所に行つて、相談してみるわ。ありがとうね一夏君！後でお礼に、とびつきりのお礼をしてあげるわ」

性能評価試験を終え、嘗て搭乘していたイチカだからこそ理解している機体の癖をいながら改善案を楯無に言う、それを参考にアプロディアの所に向かい、再調整をしてくるようだ。

「エクシアにナノマシン技術を使用した近、中距離から戦闘を視野に入れた高速戦闘、ナノマシンの使用により攻撃だけではなく、防御面での向上も可能か。カタログスペックだけなら原型機であるエクシアを超えているな」

「機体名は『アメイジングエクシア』ね。確かに元々のエクシアに比べたら、驚くような仕組みが組み込まれているわよね」

「完成したら中々、手強い期待になりそうだな。切った部分を凍らせるや、水のヴェールを相手の攻撃によって形状や性質を変える事で、相手の攻撃を柔軟に防ぐことも受け流すことも可能。トランザムの

使用も可能ときたものだ」

「二部技術はこちらの方が進んでいる。現にナノマシン技術は俺達の居た世界より進んでいると考えていいだろうな」

エクシアの新しい姿である「アメイジングエクシア」がその秘めた性能を発揮するのはまだ先だろう、と考えながら完成した際のカタログスペックをマークとエリスで見ている。ナノマシン技術がこちらの世界の方が進んでいるのは間違いないのだろうが、全体的に見るとやはり自分たちの居た世界の方が進んでいえるな、と感じた。いいものは取り入れなければ、どんなに優れた技術でもそれ以上の向上は図れない。今回のエクシアはその一例でもある考えていいだろう。

「イチカの訓練は少し厳しくない？ 戦士として未熟だけど、別に弱いわけじゃないからさ。そういうえば、マドカは？」

「厳しくしなければ、競技感覚が残って、いぎと言う時に冷静な判断が出来なくなるかもしれない。アイツらは模擬戦はあつても実戦経験のない訓練生だ。なら、今のうちに厳しくしなければ生き残れない。俺たちの面倒ごとを俺達の都合で巻き込んだに等しい。なら、可能な限りのバックアップ、そして生き残れるように鍛えることしかできない。マドカならセシリアの相手をしているぞ、ほら」

「… うん。そうだね、私達がここに来なかったら、こんな事にならなかったんだもんね」

その通りだ。本来なら、ISの世界大会というものこそあれど、血を洗うような戦争に関わることは無かったかもしれない。こちら側に引き込んだ以上、自分たちに来る事をしようと思うイチカの考えは理解できた。気になっていたマドカの居場所をイチカが指差すとそこには二機のガンダムが先ほどのイチカのように模擬戦をしていた。

「立ち止まるな！ 動け！ そしてドラグーン使いながら自身で攻撃して

「うー」

「いままで出来なかったことを急にやれなんて無理ですわ！」

「なら、出来る様になるまで追いかけて回す！行け、ライフルビツト!!」

「いやああああああああああ!!殺されるううう!!」

「殺しはしない！殺すつもり追いかけて回すがな!!死ぬ気でやって見せろ!!」

「鬼！悪魔！人でなし！鬼教官!! きゃあ!?!」

上空では、セシリアの新しい、搭乗機であるストライクフリーダムだが、スーパードラゴンと機体制御の同時操作の訓練なのだが、いまだ上手くいかないセシリアに業を煮やしたマドカが新たな愛機であるサバーニャのライフルビツトIIと自身の射撃で追い詰めていく。訓練と言うより追いかけてっこである。

「女みたいな悲鳴を出すなツ!!」

「ヒイ！ キチンとしたとした女性で、一人前のレディですわ!!」

「口を動かす暇があったら、思考と身体を同時に動かせイ!!身についているのは無駄な脂肪の塊だけかアアアア！」

「キャアアアアアアア!!?」

分離したホルスタービツトがストライクフリーダムの横腹に命中、体勢を崩したところをさらに上空からライダーキックをかまし、地面と熱いキスを交わすセシリアであった。

「スーパードラゴンは間に機械が入ることで、より扱いやすくなったものだ。なのになんだその体たらくは！兄さんやマーク、私だつて間に機械など入っていないぞ」

「お三方が規格外なだけですわ...」

「あ？ いいだろう、私が満足するレベルまで扱えるようになるまで休憩なしでみっちりシゴいてやる。覚悟しろ！」

「ヒエエエエエエ！お、お助けえええ...」

土煙から出てきたセシリアだが、自分には出来ない、周りが可笑しいと弱音を吐いたのが運の尽きだった。それを聞いたマドカの堪忍袋の緒が切れ、出来る様になるまで休みなしで訓練すると宣言。ストライクフリーダムを驚掴みすると、そのまま引きずりながら別のアリーナに向かった。

「セシリア適性を考えて、ストライクフリーダムを選ぶも、スーパードラグーンは大気圏内では動かないから、ブルーティアーズのビットを改良する形で使用することで地上でも運用できるようにしたんだよね」

「運用できるようになっただけで、ドラグーンと機体制御の同時操作ができないからな。マドカが中々上達しないからつてあそこまでスパルタにならなくてもね…」

「俺でもあそこまで厳しい訓練しないな」
「え？」

ちよつと厳しすぎないかと思いつつながら、訓練の一部始終を見ていたエリスは苦笑いする中、先ほどまで、使用できるファンネルの四分の一と言っているが、数が少ないせいか精度が上がっており、時折GNファンングの様に刺突したり、バーニングフィンガーを飛ばしたり、果ては超級霸王電影弾をしたりとエリス達のいない時にやりたい放題していたので、やっていることはどっちもどっちである。

「他の皆はどうなの？うまくいっている？」

「ラウラは達は自分が持つ部隊全員が新しい機体になっているから、連携がうまく取れる様に訓練しているな」

「確かラウラはセラヴィーとフルアーマーガンダムで迷っていたけど、どっちになったの？」

「F90だ」

「あ、そっち」

ラウラはF90を選択した。理由としては、装備を換装する事で、機体特性を大きく変えられるというISに似た特性と幅広い戦術が

取れると言う事だった。

「クラリツサに関しては俺達の知っているフルアーマーガンダムとは少し違うの選んだな。なんでも「ムーア同胞団」が使用した機体で、ロールアウトした時点でFSSWS計画は発展途上であつた事に由来し、様々な武装や機能が試験的に装備されているらしい。それに合わせて、部下はジム・カスタムを使っているぞ」

「あれ？そうになるとカタログスペック的にジム・カスタムの方が強くない？」

「赤い人も「機体の性能が戦力の決定的な差ではない」って言っているし問題ないんじゃない？」

IS組の専用機をそれぞれの戦闘スタイルに合わせて選び、場合よつては改造を施すなどしているが、中には一部の人は今だに決まっていない。先ほどまでのラウラ然り、シャルロットそして千冬は今だに迷っている。シャルロットに関しては戦闘スタイルが多彩な武器を使うことに特化している事だろう。MSにはISの様な拡張領域は存在せず、搭載出来る武器に限りがある。射撃武器などを多く搭載し、中、遠距離で対応させようとする彼女が持つ「砂漠の呼び水」という技能が生かしくくなる。それ故、シャルロットは悩んでいた。

「千冬さんが選んだのつて、エピオンだよね」

「だが、精神的にもろい所があり、ヒイロの様な強靱な精神の持ち主じゃない以上、システムに呑まれる可能性が大きい。だから、他の機体を選んでもらっているが中々決まらないらしい」

「レッドフレームは筈が選んだもんね。しかも改」

「まあ、レッドフレーム改に関しては束さんが絢爛舞踏を積んで、とか言っていたが」

「あれ？あの全部乗せ機体のエネルギー問題が解決してないそれ」

千冬が選んだエピオンはゼロシステムと同様のモノを積んでおり、使用者に超高度な情報分析と状況予測を行い、毎秒毎瞬無数に計測さ

れる予測結果をコクピットの搭乗者の脳に直接伝達するのだが、とてつもないほどの情報量は、精神力の弱い者には、時に現実なのかシステムの予測なのかわからなくなるほどのものとなり、パイロットの精神的負荷は計り知れない。そのため、ゼロシステムに精神が負けてしまふとシステムが提示した行動のまま暴走を始めるか、耐え切れずに精神を破壊され、最悪死に至る可能性まである危険な代物である。イチカは千冬の精神面の脆さに気づいており、使用した場合、最悪の未来を辿ると予想し別の機体を選ぶよう進言している。箒は赤椿との多様な装備を持つレッドフレーム改を選択し、この機体の問題点である乗せるだけ乗せても、主にエネルギー不足が原因で使えない物や、空間認識能力が低いなどの理由により使えないものが多く、エネルギー問題に関しては赤椿に搭載された絢爛舞踏を搭載することではいまいかなると束により改善されたが、空間認識に関してはどうしようもなかったのと、武人肌な箒はミラーージュコロイドウィルスを使う気になれないなど一部機能は使えないもしくは使わないようである。

「鈴はアルトロンだっけ？」

「そうそう。で、箒はメガンダムを選んだぞ」

鈴が選んだアルトロンはシエンロンガンダムを五人のガンダム開発者が修復・強化した機体であり、鈴の愛機が「甲龍」と「二頭龍」と龍が関連するところが気に入ったようだ。甲龍の代名詞ともいえる龍砲は出力の低下させることで、肩部前面に搭載することに成功し、ビームトライデントの形状を、使い慣れた青龍刀と同じ形状となっている。箒は自身のNTとしての力とマルチロックオンと近い運用が出来るメガンダムを選択し、ファンネルミサイルのと言うよりミサイル全般の搭載量が増えていい以外は特に変更はない。

「イチカって新しいフェニックスの武器ってあんまり使わないよね」

「ん？左右の腰部マウントされている赤い鞘ごとなら使っているが…」

「じゃ、言い方を変えよう。剣を抜かなくなったのは何故だ？」

「剣を抜かない、か。相手に無用な傷を付けたくないという気持ちの表れなのかもしれない。今のフェニックスだと武器が異なるところが多いが、ちゃんと違いも把握している。戦闘には問題ない」

「ならいいが。そういえば、変形機構がオミットされたが、バーニングファイヤはどうなったんだ？使用できないのか」

エリスの言う通り、ここ最近のイチカは鞘に収まった剣で攻撃することはあれど、鞘から剣を抜くと言う行動を一度も取っていない。別にイチカは慢心などしていないが、心のどこかで傷つけないという思いが芽生え、それが訓練の時に現れていたようだ。戦闘の際、「可能な限り傷つけない」というキラ・ヤマトの「可能な限り命を奪わない戦い方」似た考え方を持ち始めた、否、試練を通して自覚したというのが正しいのかもしれない。

「バーニングファイヤは問題なく使用できるよ。ただその為のやり方が異なるだけで」

「具体的なやり方は？」

「全身から放出したナノマシンを両腕に集めて放つ」

「突撃はしないのか。そのやり方なら、私にもできるか？」

「いや、他の機体ではフレームとかいろいろところがボロボロになって最悪、肘から碎けるそうさ。今のフェニックスしかこのやり方ではないんだって」

黒歴史由来の機体のせい、機体の強度は全体的にかなり固い部類の為、問題なく使用できるバーニングファイヤだが、他の機体と同じ感覚でやった場合、戦闘に支障をきたすと忠告を受けていることを説明するイチカ。

「それにアップロディアに頼んであるものを作って貰っているんだ」

「あるモノ？」

「MSのシュミュレーターだよ。この戦いが終わったら俺達はあの世界に戻ることになる。戻って、MSに乗ったらISを長い間動かしてせいで、腕が落ちていたなんて笑えないからな」

「…イチカ。お前は私達の居た世界の住人じゃない。この戦いが終わった後、ここに残るといふ選択肢もあるのではないか？」

「マーク…！それは…」

「…残らないよ、俺は。確かにこの世界に俺は戻ることが出来た。だけど、俺はあの場所で、ネエルアーガマの格納庫で見つけられて、過ごしている時に決めたんだ。例え戻れることが出来たとしても俺は平和の為に戦い続けるって、織斑を捨てて、ギルオードと名乗って、MSに乗ったあの瞬間に決めたんだ…。もう、後戻りはできない」

元いた場所に戻った際に、少しでもMSの腕を戻しておこうと考えたイチカは、アプロディアに実際コックピットと同じMSのシユミュレータを作ってもらっていることをマーク達に話す。だが、マークはこの世界に来てから考えていたことを口にした…。それは、この世界に残るか自分達の世界に一緒に戻るのかという、今後二度と会えなくなる可能性の秘めた質問だった。それに対しイチカは一緒に行くと言った。その答えを聞いたエリスはまた一緒に居れると嬉しく思うのと同時に千冬や周囲の人たちはまたイチカを失うという悲しみを背負うことになる事に気づき、どちらが正しい選択なのか分からなくなっていた。

「それに母さんと父さんを見つけてあげたい。遺体が見つからなくてもせめて遺品位は見つけてあげたいんだ」

「…そう…だね。うん、家族はちゃんと吊ってあげないとね《ガシヤン！》誰!？」

あの世界のどこかで二人は死んだ。ならせめて、親としての記憶は無くても、二人が実の両親だと言う事は変わらない。なら、生まれた星の大地で一緒に眠らせてあげたい、それが自分に出来る最初で最後の親孝行だと考えているのだ。その事に気づいたエリスは自分の中に先ほど生まれた迷いを胸の中に仕舞い込み、賛同すると物陰から音が聞こえ、警戒心を上げると力ない足取りで、イチカの近くに歩いて

いくシャルロットがおり、まるでこの世の終わりでも見たかのような表情をしていた。

「シャル！何でここに…。」

「まだ、僕の機体が決まらないから、イチカに相談しようと思って…さつきまで模擬戦をしていた楯無さんがここに居るって言うから来たら…。イチカ達が真剣な話をしている、少し様子を見て話そうって…。そしたら、イチカが僕の達の前から居なくなるって…。ねえ…。！嘘だよね！僕たちの前から居なくなったりしないよね!!」シャルロットはイチカの着ていた襟を掴みながら、何処か必死な表情で訴える姿にイチカは何を言っているのかわからなかった。

「お願いだよイチカ！嘘だって…。嘘だって言ってよ…。無言のままだと本当だって聞こえるからさ…。」

「シャルロット…。俺は…。」

意を決して何かを言おうとした瞬間、ものすごい勢い形相で千冬が走ってきた。

「大変だ一夏！フランスにアメリカスの軍勢が…。すまん修羅場中だったか」

「え？あ…。ダイジョーブ、フランスガドウシタノ？」

全然大丈夫じゃないぞ、一部（シャルロット）を除いて全員がそう思った。何せイチカの目が泳いでいる上に、片言になっている辺り間違いない。最近の出来事の中でナニカがヤバイ、シャルロットへの答えを間違えると中が起きる。具体的に言うシステムに呑まれたエリス並みにやばい事が起きそう、とイチカのNTとしての勘がそう知らせていた。

「あ、ああ…。フランスにコード・アメリカスの軍勢が攻め込んでくる。恐らく、IS関連の施設や会社破壊しているようで、このままだと民間人にも被害が出る可能性がある」

「分かった。直ちに出撃の準備をする。出撃メンバーは四人フォーマンセル一組を二つで行こう。ラナロウ、マーク、簪、鈴の第一部隊、俺、エリス、コード・フェニックスそれと——」

「… 僕も行くよ。フランスは僕の生まれた国で、あんまりいい思い出はないけど、それでも自分の母国が滅ぼされるのを見つめるだけなんて嫌だから…」

「だが、機体が…」

「格納庫に赤い重火器の機体があつたでしょ。あれを使わせて」

「ヘビーアームズか。だが、使用したことは無いんだろ？何かあつたら…」

「大丈夫、イチカが守ってくれるんでしょ？」

「勿論だ。大切な仲間だからな」

この時イチカはシャルロットから危ういものを感じた。容易く折れてしまう小枝の様に今のシャルロット危険だが、ここで残れと言つても、付いてくるだろうと考えたイチカはフォローを忘れずに行動しようと思うのだった。そしてイチカ達は各々出撃の準備を済ませる。

「やっぱ、母艦が欲しいよね。移動まで、ゲタがあるから推進剤に関してはいいけど、補給とかもしたいから母艦は必要だによね」

「言いたいことは分かるが、ないもの強請りをしたって意味がないだろう。なら、今ある戦力でどう動くか考えるべきだ」

「ドイツの時は海中からの攻撃が無かったが、今回も起きないとは考えにくい。用心するに越したことは無い」

「水中戦の時の心がけとかあるの？」

「水中ではビームの威力や射程が激減する。バズーカや大型実弾兵器の方がより高い成果を得やすいな。ビームライフルの場合、進行方向に沿って水蒸気爆発が連続的に生じ、海流を乱すから行動が阻害されるから気をつける。ビームサーベルを使う場合、柄だけ出して相手に押し当ててから刃を発振させる位かな」

89式ベースジャバーに乗り込み、フランスに向かおうとするイチカ達にマークが道中の遭遇する可能性がある事を言うと、鈴が水中戦における注意点を聞いてくるとイチカがそれに対しての答えを言う。

『一番隊、発進どうぞ』

「ラナロウ・シェイド……。トールギスⅢ、出るぜ！」

「マーク・ギルダ……。ハルフアスガンダム、出るッ！」

「更識簪……。Eガンダム、行きますッ！」

「凰鈴音、アルトロンガンダム……。行くわよ!!」

ベースジャバーに乗り飛び立っていく四人の後に続くように、イチカ達もベースジャバーに乗り込み発進の準備をする。

『続いて、第二部隊発進どうぞ』

「イチカ・ギルオード……。フェニックス……。飛翔する！」

「エリス・クロード、バンシイ・ノルン。行くわ！」

「コード・フェニックス、マスターフェニックス……。行くぜ!!」

「シャルロット・デユノア、ヘビーアームズ……。行くよッ！」

フランスに向け、二部隊が出撃する姿を千冬は格納庫で見送る。自分も弟の力になる為に、今は力が必要だと考えていた。

「アプロディア、少し相談があるんだが……」

『私でよろしければ』

「実は——」

「ねえ、イチカ。ちよつといい?」

「どうしたエリス?」

「今のフェニックスって、手持ち火器ってないの?」

「いや、あるにはあるんだが…。この鞘に入った剣の柄頭の部分を連結させると弓の形状になるんだ。これで遠距離戦をすることになるな。ナノマシンをエネルギー弾として放つ幹事になるかな。一応、両剣としても…。!」

北太平洋を渡っている時、エリスがフェニックスの手持ち火器がない事に気づき、イチカが遠距離の場合どうなるのか、実際に連結させて答える。その時だった、頭の中で何かが閃くと味方に注意を促す。

「何か…。来る…。各機、周囲の警戒を怠るな!」

「どこから来るっていうの!キヤア!!」

「チツ、水中か…。!俺が潜航して——2時と10時の方角から敵!」

周囲を警戒している時、水中から顔を出したズゴックが頭頂部に搭載した頭部6連装ミサイルランチャーをアルトロンの乗ったベースジャバーに放つが咄嗟に回避する鈴。潜航して水中にいる敵を叩こうとしたイチカに同じく、ベースジャバーに乗った敵機が接近していることに気づき、両剣を構える。

「そこだッ!行くぞ、エリス!!」

「分かったわ、イチカ!」

ベースジャバーで接近し、ザクキャノンと陸戦高機動型ザクが乗るベースジャバーに飛び乗ると両剣でザクキャノンの腕を切り落とすと、砲身が自身を狙っている事に気づき、咄嗟に砲身を蹴り上げ、大空に放たれる。出来た隙を見逃さず、ナノマシンが燃焼し、火炎を纏った両剣でコックピットごと真つ二つにする。対するエリスはヒートホークで攻撃しようとする陸戦型高機動ザクをビームトンファーで防ぐと瞬光式徹甲榴弾をコックピットに向け放ち、アームド・アーマーD Eで頭部に突き刺し、ベースジャバーから落とすと瞬光式徹甲榴弾が炸裂し、跡形もなく吹き飛び二人は何事も無かったようにベースジャバーに戻ってきた。

「いやいや、接敵後の行動速すぎない？なんでゲタから飛び乗って倒せるの？ちよっとおかしくない？」

「そうか？私達はよくやるがな。エースと呼ばれる奴らはよくやる行動だ」

「熟練のパイロットはよくやるな。まあ、空中で燃料を消費しながら戦うのと、飛び乗る時だけ使うだと節約にもなるからな」

「それにゲタが無人機なら、それを奪って使用も可能だから最悪壊されても、乗り換えが可能だしね」

イチカ達の咄嗟の行動に思わず手を振り、驚きを隠せない鈴に宇宙世紀の世界ではよくある事だ、と何気なく言うMS乗りに15の機械に乗り込んであれが出来るのか…。と自分たちの常識が通用しない連中だなど再確認したのだった。

「で、水中の敵はどうするの？」

「俺が潜航する。みんなは空域の警戒に当たってくれ。多分、さつきとの二機は周囲の哨戒をしていたと思うから」

「反応が無くなったことで、途絶えた場所に増援が来るか…。水中の敵を撃破次第速やかに離れた方が良さそうだな」

「じゃ、行ってくる」

増援が来る前に水中の敵を撃破すべく、水中戦の経験があるイチカがベースジャバーから飛び降り潜航した。

「水中でのビームは減衰が激しいし、水蒸気爆発のこともあるから必殺以外では使わない方がいいな」

剣の連結を解除し、片方だけサイドアーマーに戻すと鞘から剣を抜く。その刀身は刀と言うより、西洋剣に近い両刃であり、この時イチカは初めて、鞘から剣を抜いたのだ。遠くからミサイルが自分に向かって直進するのを確認するとタイミングを見計らい、回避すると先ほどと同じようにミサイルを発射しながら向かってくるズゴック。

「特攻か……。いや、後方から反応……。挟み撃ちか！」

真つ二つにしようと構えた時、レーダーに反応が現れ、挟み撃ちだと気づきいた時には目前までズゴックが接近し、アイアンクローで胸部を貫こうとした。

「チー！」

咄嗟に鞘で受け止め、コックピットを剣で貫くとそのまま切り上げるが、目の前の敵に集中しすぎたイチカは後方から接近し、突撃しようとするアツガイに背後を取られる。

「なんととおおおー！」

ズゴックのアイアンクロー受け止めた鞘を思いつきり後ろに突き出す。すると、鞘の先端がアツガイの頭部に刺さり、刺さった鞘を支点に回避し、そのままアツガイの頭上に行くと、フェニックスの左手

が白熱化する。

「左手でも出来るんだよオ！バーニングフィンガアア!!」

バーニングフィンガーでアツガイの頭部を融解させながら、エネルギーを照射し機体は爆破。爆発の拍子に飛んだ鞘を回収し、水中から上昇する。

「ふうー。疲れた」

「お疲れイチカ。戻ってきて早速だけど、敵の増援がこっちに来てるけど、どうする?」

「可能な限り戦闘は避けよう。フランスには万全の状態で行きたいから、アメリカに今は使われていない施設がある。そこで一度補給してから行こう」

「前方から敵増援、数四十…!」

海中の敵を倒し、浮上したイチカは待機させておいたベースジャバーに乗ると敵が接近している知らせ、どうするのか聞くエリス。それに対しイチカは今後の作戦の為に可能な限り戦闘を避けたいと考えていた。

「高機動型ザク10、ザクI・スナイパータイプ3、ゲルググ13、ゲルググキャノン2、グフ15、ドム・フュンフ7」

「ジオンばっかじゃねーか！一年戦争の再現でもしたいのかよ!!各機、作戦変更だ。目の前の敵を叩くぞ!!あのドダイを残せば海上でベースジャバーの補給が出来るな」

「機体の性能はこっちの方が上。一人当たり5機倒せば問題ないわね!!」

「え?」

「おう、任せな!」

可能であれば戦闘を避けると言ったが、相手の戦力を考え戦う方がこちらに対するメリットがあると判断したイチカ。数の不利？あつちの世界ではいつもの事の為、いつもに比べて少ないな、と思ったりしていたイチカ達であった。実戦経験の少ないシヤルロット達はいつの間にか撃破ノルマまで課せられ、機体性能で勝つていても数で苦戦するだろう。最初に先陣を切ったのはやはり、イチカであった。

「バーニングファイヤー！」

両腕に赤く燃えるナノマシンを纏うとそのまま突き出すと、赤い不死鳥が高機動型ザクに向かって飛び出す。高機動型ザクはドダイから飛び降りる。

「そうすることは読んでいた!!」

フェニックスの腕から赤い布状のモノが高機動型ザクの左肩に直撃するとそのまま切断する。マスターガンダムが扱う「マスタークロス」をイチカなりに再現したものである。ナノマシンによって作り出したそれは伸縮・硬軟自在の武器である。高機動型ザクはザク・バズーカを放つが、その放たれた弾丸を掴むとそのままザク・バズーカに押し込む。押し込まれた弾丸と放とうとしていた弾丸が内部で接触。爆発を起こす。

「うっそーん…」

「ほら鈴！よそ見をしない!!」

「あんなの見たら誰だって、手が止まるわよ！後助かったわ！」

イチカに続くようにエリス達も進み、接敵する。鈴はドラゴンハングでグフのコックピットをつぶしているとイチカの間離れした動きが目に入り開いた口が塞がらないでいた。そんな隙だらけの鈴にゲルググがビームナギタで切りつけようとしたが鈴のカバーに入ったエリスがアームド・アーマーDEで突き刺し、ビーム・マグナムで

止めを刺す。隙が出来てる事に叱咤を入れる。鈴は好きで隙を作ったんじゃないと言いながら、先程カバーしてくれたことに感謝する。

「おりやああああああ!!」

布を高機動型ザクの頭部に巻き付けるとそのままブンブン回転させ、ジャイアントスイングすると近くに居た高機動型ザクに向け放す。高機動型ザクが僚機を受け止めた隙を見逃さず、サイドアーマーにある剣を連結させ弓にすると二機同時に撃ち抜く。

「ハアッ！」

ドダイから飛び降り、ヒートソードで攻撃してきたグフに再度、布で薙ぎ倒すとすかさずエネルギーを照射し撃破する。

「この機体、左腕の武器のせいでバランスがとりにくい…！それにしても…」

「行って…！ファンネルミサイル!!」

「模擬戦を行う数があつちの方が多いつてもあるけど、簪がNTつていうのも大きいのかな…」

「NTは力じゃない。相互理解し合うためのものであつて戦う為に使つていいものじゃない。だから私達は間違つた使い方をしているのよ」

初めて扱うヘビーアームズに戸惑いながらもホーミングミサイルや腕部ガトリングでグフを二基落としていくが、NTとして開花した簪はメガガンダムのファンネルミサイルを巧みに操り、ドム・フェンユ、高機動型ザク、グフの計四基を落としている。今の自分と簪との差は機体性能もさることながら、NTか否かだと考えたシャルロット。だが、それは誤りであり、NT戦う為の力ではなく、分かり合うための

力だと語るエリスは、自分達はそのNTとしての本質から離れた使い方をしているとどこ自嘲気味に言う。

「じゃ、あの二人の強さはどうなの？」

「あの二人？」

「ふっ……！沈めッ!!」

「超級ウ霸王ツ電影弾!!」

イチカとマークは二人分以上の働きをしており、ビームライフル、メガビームキャノン、ファンネルを展開し、ハイマツトフルバーストで8機落とす、イチカは超級霸王電影弾で辺りの敵を一掃している。「……まあ、あの二人が特別可笑しいだけだな。普通あそこまで行くのに相当な場数とセンスが問われるな」

「そうねー。マークはまだしも、昔のイチカと比べたら大分成長したよね」

「確かにな」

何処か納得いかないシャルロットは敵を次々倒していく二人はとうなのか聞く。エース級の腕前を持つ二人が可笑いなんだ、と長年一緒に戦ってきたラナロウはヒートロットでゲルググキャノンのキャノン部分を融解させ、メガキャノンでコックピットを撃ち抜いていた。それなりの場数を踏み、高いセンスを持つマークと多くの戦場を潜り抜け、シミュレーターや模擬戦を繰り返し熟してきた努力の天才であるイチカ。二人の実力は決してNTや純粹種だからと一言で片づけられるものではない。その実力に合った場数を熟してきたからこそあの様な戦闘が出来るのだ。

「決して諦めず努力を絶えず行い、その結果があれなんだよ。NTや純粹種ってのはスキルみたいなもんだ。パイロットの強さは技量と咄嗟の判断力、後はセンスが問われるからな」

「だから、自分にはNTみたいー、とか思わない事だな。戦っていれば

おのずと力はつく。まあ、人の命を奪う力なんてつけて欲しくないけどな」

「同感ね」

NTのは力だけが全てではない。確かに、NTが戦場に居ると言うだけで敵に与える精神的なものこそあれで、NTは無敵と言う訳では無い為、名だたるNT達も悪戦苦闘を強いられ、それを数多く乗り越え名実共にエースと呼ばれるような存在になったのだから。それを知っているからこそ、ラナロウやコード・フェニックスはNTだからと特別視もしなければ、危険存在という捉え方をしておらず、シャルロットにもそのことを理解してほしいとフォローを入れる。

「敵は粗方倒してな」

「残ったドダイから燃料を映してアメリカに今は使われていない軍事施設で補給をしてフランスへ向かおう」

「場所は分かるの？」

「予め、アプロディアに調べてもらったからな」

「戦いにおいて情報は大切だからね」

周囲への警戒をしつつ海上で補給を行い、アメリカで補給を行いフランスへ向かう事を伝えるイチカ。

「心配かシャルロット？」

「心配？僕があいつ等のことを？まさか…いままで僕を道具としか思っていなかった連中なんて知ったことか!!」

イチカは父親がいるデュノア社も狙われていると考え心配なのか聞かすが、家庭事情が複雑なシャルロット心配よりも今まで積もってきた怒りの方が大きいよう。

「そうか…。だが、これだけは覚えていてくれシャルロット」

「え？」

「命は、何だつてひとつだ。一度失えば二度と戻ってくることは無い……。お前が、親に対してどう思うかは自由だ……。親を親として接することが出来るのは生きている間だけ、どんなに複雑で遇つても、死んでしまつたらそこまでなんだ」

シャルロットの複雑な家庭環境はイチカも知っている。だが、イチカは幼少期に親を失い、親の愛情と言うモノを知らない。だからか、親が生きているシャルロットに少しでも親子と言うモノを経験してほしいと思つてしまうのだ。

「お前は、家族を救うことだけ考えてくれ。言いたいこと言つた上で話し合つて、決めればいい。もし話し合いの中で合わないようなら一発殴つてやればいいさ」

「ふっ……。話し合いをしようつて言つてるのに殴るのは可笑しいよイチカ。でも、そうしたら少しはすつきりするのかな」

「すつきりするか分からないけど、まずは助けないと。話はそこからよ」

「うん、そうだ」

「行こう、フランスへ！」

イチカ達は戦火に吞まれたフランスへ、少しでも多くの命を救うために、自分自身の為に、彼らは進み続けるのだった。

41話

イチカ達はアメリカで補給を済ませフランスへと向かった。そして、彼が目にしたのは荒れ果てた街並みだった。

「ここが… フランス…」

「酷い…」

「こんなものって… 襲撃があつてから半日も経ってないんだよ！」

「シャルロット… まずは、現状の把握を… なんだ… この音！」

荒れ果てた市街の状況を確認し探索しているとイチカの頭の中に音が響く。

「頭の中に音が…！」

「なんだ、これ…。 鈴の音…」

「聞き覚えがある…。 ウツソたちと戦った時の…」

「鈴の音…。 そんな音聞こえないけど…」

「確か聞こえる…。 鈴の音が…。 敵意…！」

NTである、イチカ、エリス、マーク、簪は頭の中に響く、鈴の音に困惑しているとイチカの頭の中で光が弾けると抜刀した剣を縦に振るうと小さな物体が接触し、左右に割れる。

「なに…。 狙撃…！」

「物陰に隠れて俺達を狙っていやがる！」

「チイ…！ 今度はビームか…！ 海上の時より、センサーの反応が弱い…。 ミノフスキー粒子か！」

「ミノフスキー粒子？」

「電波障害を起こして無線機やレーダー等の電子機器を無力化する粒子よ。 長距離への索敵はできないからこうやってワイヤーを介すか、直接触れ合つて通信するの」

今間での戦闘ではミノフスキー粒子が散布されていなかったせい

か、突然のミノフスキー粒子に焦るイチカ。ミノフスキー粒子について知らない簪は疑問に思っているとエリスがミノフスキー粒子について簡単に説明する。

「今後の通信は有視界による光通信にする！」

「今まで以上に神経を尖らせろ！」

「こうも遮蔽物が多いと戦闘がしにくい……！……生体反応はない……。なら、街を少し破壊してもッ！」

「何をやる気なの、一夏！」

ミノフスキー粒子による障害により、センサー等に制限がかかった状態での戦闘や見えない敵からの狙撃に今まで以上に厳しい戦いになると考えたマークは注意を呼びかけ、遮蔽物が多く狙撃ポイントを絞り込めないイチカはゲタから飛び降りると荒ぶる鷹の様なポーズを取る。

「超級ウ霸王ツ電撃弾ツツ!!」

超級霸王電撃弾で周囲の建物を螺旋を描きながら建物を破壊していく。

「見晴らしをよくすつもりか……」

「見てあそこー！」

見晴らしが良くなったことで戦いやすくなったマーク達は遠くの建物の陰に隠れながら狙いを定めた敵影を見つける。

「ジム・スナイパーIIか……」

「待って！……駆動音……ゆっくり、何か近づいてくる！」

「この音は、ビーム・ローターか……！」

「何あれ……戦闘機……」

ジム・スナイパーIIを落とそうとした時、簪が低速ながら何か近づいてくることに気が付くとその音の正体に気が付くラナロウ。

「戦闘機じゃない。あれもMSだ」

「あれは変形・合体機構を持った機体よ」

「シャルロットは制圧射撃を、エリス、コード・フェニックスはシャルロットのカバーを頼む。俺は遊撃に当たる!!」

「四人一組フォーマンセルから、私と鳳、ラナロウと更識ツーマンセルの二人一組に変更。警戒を怠るなよ!」

「了解!」

各々戦闘態勢に入るとイチカはジム・スナイパーIIの狙撃を掻い潜りながら進む。

「ゲタにはこういう使い方もあるんだよッ!」

89式ベースジャバーをジム・スナイパーIIに向け射出するとジム・スナイパーIIはベースジャバーを狙い撃つと放った弾丸は命中し、燃料に引火し爆発を起こす。

「そこだあ!」

爆炎によって遮られた視界をビームサーベルで払うが、そこにはフェニックスの姿は無く、上へと飛んだフェニックスが布状のものを叩き付けると、頭部を破壊し、バーニングフィンガーで胸部を握りつぶし止めを刺す。

「この布、使いやすいな。マスタークロスに倣って『バーニングクロス』と名づけよう——邪気!」

ジム・スナイパーIIを倒し、今まで使用してきた布を『バーニングクロス』と名づけようとしたイチカだが、自分に向かって邪気が近づいていることに気づき咄嗟に腕を振るう。

「サイコフィールドがバリアに...」

「イチカ...今の...」

「分からない...。ただ、出来る気がしたんだ。それにあの出力の攻撃を喰らえばひとたまりもない...!」

遙か上空からの高出力攻撃に咄嗟にサイコフィールドを展開したイチカ。

「上空からの攻撃はこれで防げる…けど…。いつまでも立ち往生なんてできないぞー!」

「あのシールド、僕の攻撃を悉く防いでいくんだけど!」

「ビームシールドはビーム、実弾も防ぐ。ビームシールドを発振させるところを破壊すれば使い物にならない!」

そういうと鈴がドラゴンハングで牽制し、マークがビームサーベルを左腕に突き刺しビーム・ローターを破壊するとゾロの頭部を蹴りで破壊すると鈴がドラゴンハングで止めを刺す。

「イチカ! 上空の敵はどうする?」

「センサー外…恐らく成層圏かそれ以上…。そして、そいつがこの鈴の音の持ち主」

「大気圏突破、突入を考えるのなら私のハルファスかフェニックスだろう。ナノマシンによる大気圏の摩擦熱の減衰は理論上は可能だ」

「いままで試したことが無いんでしょ! そんなぶっつけ本番で危険だよ!」

「危険なんていつものことだ! 安全な戦いなんてこの世に存在しない!! 機動力と防御はフェニックスの方が上…。俺が行く」

遙か上空からの攻撃をどうするか悩んでいるコード・フェニックスに、マークは高高度からの狙撃であること、実行している機体に心当たりがあった。

「あの鈴の音はザンスカール帝国との戦いの時に聞いた事がある」

「やっぱりあれはギロチンの…」

「鈴の音が何でギロチンと関わりがあるの?」

「ギロチンの家系の者は腰に鈴をつけるんだ。それは死刑執行人の象徴でもある」

「宇宙世紀の中にはギロチンを行うところもあったのよ。それがザンスカール帝国……。私達はレジスタンスとして活動しているリガ・ミリティアに協力したわ」

「これは、イチカと出会う前の話だ。イチカはデータベース上に残っている情報でしか知らない」

イチカと出会う前に話をするエリスとマーク。この戦いで、敵味方問わず多くの死者が出た。その中にマーク達の部隊の者も含まれている。

「恐らく機体は、ザンネック……。当時のMSのサイズの中では大きい部類だ。ビーム・フィールドと長距離射撃が脅威だが、規格外の機動力を持った機体であれば……」

「ザンネック……。首を斬る……。ギロチン……！」

「イチカ、これを……。！ 手数は多い方がいい」

マークはこれから戦うであろう機体の情報をイチカに渡すとマークは持っていたビームライフルを渡す。

「分かった。マーク達は地上の敵をお願い」

「まかせろ！ この程度の敵、慣れっこだぜ！」

「イチカ、気をつけて！」

「行ってくる……。！」

そういうとイチカはその場から飛び立つと翼部のスラスターから放出された余剰分のナノマシンが燃え盛る炎の様に揺らぎ、翼のような形状になる。

「フェニックスの……。翼……」

「あれはスラスターだけの光じゃない……。ナノマシンも放出して、推進力を挙げているのか……」

「不死鳥が……。天に昇ってるみたい」

「感動するのはいいが、敵のお出ましだ！」

「一夏の心配するよりも僕たち自身の心配しないと！」

イチカが飛び立つのを見計らったように敵の増援が現れ、地上では再び戦いが行われようとしていた時だった。

『どうやら、遅かったようだな』

「貴様は……！」

マーク達が声のした方を見るとそこには武神を思わせる一機のガンダムがビルの上で腕を組みながら、飛翔していくフェニックスを見ている。

（放出されたナノマシンが翼になってる……。これを曲げてマントの様に纏った上で、前面にナノマシンの壁を作れば……！）

イチカは初めて行う単機による大気圏突破に胆を冷やししながら、慎重に行っていた。

「大気圏突破……出来た……！——鈴の音……来るッ!?」

大気圏突破できたことを喜ぶイチカだが、それもつかの間に長距離狙撃が襲うがサイコフィールドを展開し、防ぐ。

「敵は……。見えた、ファンネル！」

ベスパ特有のツインアイ、左右の肩部にある三日月パーツ、円盤の上に乗る、ビームキャノンを構える機体を視認するとファンネルを射出すると乗っている円盤に向けて攻撃するが弾かれる。

「円盤にもビームシールドがあるのか！ クツ……!! 地上に居るエンジニア達に当たらないように防ぎながら動いているから俺が避けられないのを知って……!!」

円盤に攻撃しても意味がない事を理解したイチカに、両肩部の三日

月が満月に変わりビームキャノンの攻撃が迫る。サイコフィールドを展開しながらスラストを吹かし、ビームキャノンのチャージ時間がある事は知っているイチカはビームライフルで攻撃するもザンネック・ベースによって防がれていた。

「フェニックスの翼をV2の様に使って… チィ…！」

距離を縮めようにも機動性もあるザンネックは距離を維持しながら放つ強力なビームキャノンとビームシールドによって、苦戦を強いられているイチカ。

「少しでも、あいつの攻撃を地上から逸らさないと、攻めれない！

… あの三日月を狙えば… ファンネルツ！」

思考を巡らせ、どうすれば勝てるのか考えるイチカ。肩部の粒子加速器内蔵ビーム砲が粒子の縮退・収束の役割を知っているイチカはそこを狙えば突破口が見えると踏み、ファンネルを展開するが――

「クソツッ！ 死角はないのか…!!」

粒子加速器内蔵ビーム砲が展開したファンネルを破壊したのを確認したイチカは、思わず舌打ちをする。周囲を飛び回りながらビームライフルで応戦するイチカだが、時間だけがいたらずらに過ぎていき突破口が見えずに焦っていた。

「どうするどうする、どうする！ … 焦るな!! 焦ったら死ぬぞ!!」

高威力のビームを回避しながら、ファンネルとビームライフルで少しでも自分に気が向くように攻撃するイチカは近くにあったデブリに身を隠すと背部に収納されているビームサーベルを発振させ、放り投げる。するとザンネックはイチカではなく発振させたビームサーベルを撃つのを確認する。

「隙が見えた!!」

次射までの隙を見逃さず、デブリから飛び出し、背部のウイングバ

インダーから炎の翼を大きく羽ばたき、全身にナノマシンを纏い急接近するその姿はさながら、燃え盛る不死鳥を沸騰させる。だが、ザンネックのビームキャノンのチャージが終了しており、フェニックスに向けて放たれる。

「今だ…！ 飛べ、フェニックス!!」

接近していた、突如フェニックスは途中で一回転し、上に飛ぶ。すると、纏っていたナノマシンはフェニックスから剥がれ、炎の残像はそのまま直進するとザンネックのビームとぶつかり合う。

「そこだ!!」

もう一度炎の翼を羽ばたかせ、ザンネックに接近すると左手で右腰に帯刀していた剣を抜刀し、串刺しにするように振り下ろすがザンネックは咄嗟に、ザンネック・ベースから飛び降りることで直撃を避けるもザンネック・ベースはイチカによって一刀両断される。

「まだ終わらねえ!!」

すかさず、白熱化した右手を突き出すとザンネックは自衛用に装備していたビームサーベルを振るうが、イチカはビームサーベルのビーム刃を掴むとそのまま近くのデブリに向け投げつける。投げられたザンネックは勢いよく回転するのを見たイチカは炎の翼を羽ばたかせ接近する。

「これ以上、鈴を鳴らすなア!!」

ザンネックが体勢を立て直した時には、直前にまで迫ったフェニックスが、白熱化した右手でビームキャノンを持っていた右腕を手刀で切り裂き、すかさずザンネックの胸部を掴むとスラスタを吹かし、デブリにぶつけながら進んでいく。

「この俺の手が白銀と輝くツ！ 明日を掴めと轟き唸るウ!!
しやあああくうねつつう… バーニングウウ…… フィン

ガアアアアツ!!」

技の発動までの掛け声が師匠であるドモンの爆熱ゴツドフィンガーと似ているのはイチカが師匠であるドモンを尊敬と憧れの表れなのだろう。掴まれたザンネックの胸部が融解し、力を振り絞りビームサーベルでイチカを貫こうとした時だった。

「ビィィイト・エンドッー」

掛け声と同時に胸部を爆砕し、ザンネックがビームサーベルを落とし、活動を停止させる。

「ハア…ハア…、終わった…のか。周囲の反応も、邪気も感じられない。鈴は…落ちたか」

戦いに一区切りがついたことで、先ほどまで張り巡っていた緊張が解かれるイチカだが、問題が残っており、先ほどまでの戦闘でエネルギーを多く使ったことにより、安定して大気圏突入を行うほど残っていないことだった。

「どうしたものか…。強硬策に出ても、最悪大気圏突入中にナノマシンが切れて、大気圏の摩擦熱を減衰ができずに、途中で燃え尽きちゃう…。ここまでなのか…。フェニックス…」

諦めかけていた時、イチカの脳裏に大切な仲間たちの姿が映し出される。

「まだまだ、まだ俺は明日を掴んでいないッ！ その先にみんなと一緒に行っていない！ お前も一緒に行きたいだろう…。フェニックス!! ——え?」

諦めかけたイチカの心が、再び燃え上がる。イチカの言葉に反応するかのようにツインアイが光ると、モニターに映し出された情報にイチカは思わず、声が漏れる。

「確かに、この方法なら使用するナノマシン量が少ない状態で大気圏

突入が出来る……」

ふつうはそんな出鱈目な大気圏突入は存在しないだろう。だが、緊急事態の為、仕方ないといえようがこんなダイナミックな方法で本当出来るのか不安なイチカだが、現状これ以外策が無いので決行するしかなかった。

「ねえ、あのガンダム……。さつきから上を向いたまま微動だにしないんだけど……」

「あれはゴッドガンダム……。イチカの師匠である流派東方不敗の伝承者であり、キング・オブ・ハートの男だ。彼のコピーニューロだとなると私達でも苦戦は免れない……。最悪、犠牲者が出るだろう。奴らの戦闘力は色々おかしい」

「そこまでのなの……。一夏の師匠って……、まあ、一夏のあの戦闘力を考えると想像つくけどさ」

『来るな……』

「え?」

ビルの上で腕を組んだまま微動だにしないゴッドガンダムに警戒を怠らないマーク達。ゴッドガンダムのガンダムファイターである

ドモンについての情報を軽く話すとゴッドガンダムは何かが来ることを示唆すると大気圏から何かが下りてくるのが見えた。

「あれはイチカ…！　って…ええー…」

「あのような大気圏突入は初めて見たな」

大気圏の摩擦熱を撃破したザンネツクを盾にしながら自身は大気圏の摩擦熱から逃れているフェニックスの姿があった。その姿はさながらサーフィンである。

「ねえ、あんな方法で大気圏って突入できるの？」

「普通は無理だと思う…。専用の装備とかオプシオンとかでやるから」

「まあ、機体に穴が開いた上、片腕を失った状態でビームシールドを使って大気圏突入をやったのけた奴がいたな」

「キンケドウのことだな。私もあれを見た時は度肝を抜いたものだ」

「あれは奇跡よねー」

イチカの大気圏突入方法にどこか現実逃避気味に語るエリス達。この方法は後に出会う同じソロモン72柱がモチーフのガンダムである鉄華団の少年がやった方法なのだが、この時イチカは自分以外にもあんな方法でやる奴いるんだな、と思う日が遠くないうちに来るだろうがそれは別の話である。大気圏突入を終え、役目を終えたザンネツクから飛び降りたイチカはエリス達の近くに降りるが、着地した瞬間そのまま倒れ込む。

「大丈夫、イチカ!!」

「大丈夫…。無事に地球に降りれたせいかな、疲れが一気に…」

『どうやら、全力で戦うことも出来なさそうだな』

倒れ込んだイチカを咄嗟に支えるエリス。イチカは倒れ込んだ理由を話す中、突如聞こえた聞きなれた声のした方を向くとビルの上からゴッドガンダムが飛び降りてきたのだ。

「この声……。師匠……！」

予想だにしていなかった人物の登場に驚くイチカ。

『答えるイチカ！ 流派ッ！ 東方不敗は——』

「王者の風！」

『全新！』

「系列！」

『天破！』

「狭乱！」

『見よ、東方は、赤く燃えている!!』

互いに声を挙げ、残像が残る速さで拳を繰り出しながら接近し、最後は同じポーズの状態で拳を突き合わせる二人。

『イチカ！ お前にガンダムファイトを申し込むッ！』

「なっ！」

「そんな無茶よ！ 今のイチカが真面にガンダムツファイト出来るよ
うな状態じゃないのよ!!」

「ファイトを申し込まれた以上…… 受けるしか…… ないッ！」

ガンダムファイトを申し込まれた以上、受けるしかない。そう考えたイチカはどこか動きが鈍いながらも構える。

『だがッ!!』

「ウッウッウッ……！」

「イチカ!!」

目にもとまらぬ速さで立ち向かおうとしたイチカにの懐に潜り込み、強烈なアツパーお見舞いするゴッドガンダム。その一撃で膝を屈してしまいうイチカにエリスが庇うように前に出る。

『今の貴様では、俺に傷一つつける事は出来ん!!』

「ゲホッ……」

『故に貴様に猶予を与える。一週間後の正午にギアナ高地に来いッ』

！』

「そんな、こつちにはそんなことしている猶予はないのに！」

『それまでに腕を磨き、可能な限り英気を養う事だないチカ』

「待ってくれ師匠ツ!!」

『お前と全力ファイトが出来る時を待っているぞ!! 来いッ！ 風雲再起!!』

「う、馬…!?!」

ゴッドガンダムはイチカにファイトまでの猶予を与え、日時を伝える。だが、自分達にそんな猶予はないと非難じみた声を挙げるシャルロットの声を無視し、言うべき事を言ったゴッドガンダムは何処からともなく現れた風雲再起に乗りそのまま姿を消した。

「今、コピーニューロを自由にできるのはコード・アメリカスただ一人。コピーであつてもアレはお前の知っているドモンだ」

「コピーとはいえ、師匠であるドモンが敵になるなんて…」

「一週間後に師匠と…」

何処かつらそうな声でゴッドガンダムが姿を消した方を見つめるイチカ。

「今のままじゃ、あの人に勝てない…」

「今より強くなるにもここを生き残らないとできない。なら、今は出来る事をするんだ」

「そうだな。コード・フェニックス、まずはフランスに居る敵を倒しつつ生き残った人がいないか探そう」

「それならデュノア社は、有事の際は避難所としての役割もあるから…。もしかしたら…」

「当てがない以上、デュノア社に行くのが賢明か」

一週間後のガンダムファイトのことを考えた際、イチカは勝てるヴィジョンが見えなかった。今の自分では実力不足なのだ、先程の一撃で理解した。だが、今は目の前のことに集中すべきだ、とコード・フェニックスは言う。イチカはその通りだと理解し、まずは生存者の

確認と敵の殲滅を第一に行動することになった。そして、生き残った人はデュノア社に非難しているかもしれないという情報を頼りの行動するのだった。

「此処がデュノア社か…。」

「建物自体は街よりも原形を保っているが…。」

「地面には爆発によるクレータと金属片が多数…。戦闘があつたと考えて間違いないだろうな」

「シャルロット、建物の案内を頼む」

「全員で中に入らず二つに分かれよう。私達第一部隊は周囲の警戒及び人命救助としよう」

「なら、俺達第二部隊が建物の中を探すとするよ」

デュノア社の周囲を見渡しながら、なにがあつたのか推察するイチカ達。効率を考え第一、第二部隊に分かれ行動することになった。周囲に散開する第一部隊を見送ったイチカは、扉を見つめる。

「建物の案内を頼みたいが、まずは…。」

「剣を抜いてどうしたの？」

「侵入者トラップが仕掛けられている可能性がある」

そういうとイチカは剣で扉を切り裂くと、切り裂かれた扉とは別に張っていた細い何かが切れる音をフェニックスが拾うと同時に爆発が起きる。

「ば、爆発…！」

「な、なんでイチカは分かったの？」

「なんで分かったか…。もし俺が同じように立て籠もるとしたらト

ラップを設置して迎撃する。相手と同じ立場でどう行動するか考えたんだ」

「なるほどな。なら、次はどう行動するんだ？」

突然の爆発に驚くシャルロットとトラップが設置されているのが分かったのか質問するエリス。イチカは自分ならどうするか考えて行動したと答える。

「そうだな、生き残った連中を一掃する為、制圧射撃をする」

「ゲツ?! 地面から大量の機関銃が!!」

「行け、ファンネル」

コード・フェニックスが次はどう行動するのかという質問を答えると同時に地面に穴が開き、そこから大量の機関銃が姿を現すと轟音を轟かせながら撃ってくるが、イチカは冷静な対応でファンネルを射出し、四角形を描きながらビームシールドを発生させ、機関銃の攻撃を防ぐと残りのファンネルで機関銃を破壊していく。

「何処から攻撃が来るか分からないから、警戒を怠らないよ」

「一番怪しいのは社長室だが、風潰しにするか？」

「いや、あまり猶予が無い。社長室に直行だ」

「社長室はこつちだよ」

警戒を怠らない要注意すると風潰しに探るか、怪しい場所だけを探すべきか迷っているコード・フェニックスにイチカはあまり時間が無いので時間がかからない方を選び、シャルロットの案内で二階に進む一同。

「この曲がり角を行って中央の部屋が…イチカ？」

「シー。物音が聞こえた」

「え? …うーん、タイヤの音？」

「あ、見てアレ!!」

「アレは…自走砲？」

社長室までもう少しの所でイチカは僅かの物音を聞き足を止める

と、反対側からジオン系統に見られるモノアイ、下半身が三つの車輻を有したホイールユニットに腕部にはクレーンアームとガトリング、頭部には一門のキャノンが付いていた。

「あれは・・・ギガンか」

「知っているのかコード・フェニックス？」

「あれはジオンが開発した中・遠距離支援機だ突出した戦闘力は無いが、生産に必要な資材はザクⅡの半分で済むらしいぜ」

「そうか」

機体のことを知っているコード・フェニックスに解説を聞いたイチカは剣をナイフのように投げ、ギガンの頭部に刺さり、機能停止する。

「俺の解説必要だったか？」

「特に危険度はないようだから手っ取り早く片付けた。今の物音で敵が集まればある意味楽なんだが・・・」

「そういうのシャレにならないからやめて。流れ弾で周りの民間人にもまで危害が及んだらどうするの？」

「ふむ、それもそうか・・・」

「取りあえず、社長室に行こう」

戦闘を手早く終わらせておけば、人命救助がしやすいと考えたイチカだが、狭い場所での戦闘はどんな予想外な事態が起きるか分からないから勘弁してほしいエリスの考えに、それも一理あると判断しながら社長室に向かう。

「誰か生存者はいるか！」

「騒がしいな・・・。少しは静かに入ったらどうだ？」

「お前は・・・」

「おとう——デユノア社長、無事だったんですね」

扉を思いつきり開け、中に誰かいないか確認するイチカに、何処か疲れ気味の声が返ってきた。如何にも高そうな机な椅子にもたれかかる顎髭を生やした厳格な風貌の男がいた。その男性を見たシャル

ロットがお父さんと言いかけるも途中で社長に訂正し、それを聞いた男性が一瞬だけ、悲しそうな表情になるがすぐさま厳つい表情になる。

「俺はイチカ・ギルオー、救援依頼を聞きここまで来た。あなた以外に生存者は？」

「そうか……君が……。ダメ元で待つてみるものだな。ここに来た生存者は地下の避難所に退避させている」

「出来れば一度に避難させたい。何か大型の輸送機はあるか？」

「鹵獲した見た事もない輸送機がある。これならば、一度に全員を乗せる事も、この資材を持つていくことも出来るだろう」

生存者の確認をしたイチカは自分達では連れていける人数に限界があり、ここまで往復するにも自分達にもそして避難した人にもリスクがあると考え、何か輸送船はないか確認する。すると、空中モニターに一隻の大型輸送機を映し出す。

「アウドムラか」

「アウドムラ？」

「あの超大型輸送機の名称だ。確かにこれなら多くの避難民を収容できる。操縦は……コード・フェニックス、お願いできるか？」

「おう、任せな！」

「地下避難所の隣が、地下格納庫だ。場所の案内は此処に来る時に上った階段にある掛け軸の裏に地下への入り口がある。暗証番号を入力すれば開く様になっている番号は42865だ」

赤い超大型輸送機に見覚えのあった。ネエルアーガマのデータベースに残っていた資料で見たイチカはその輸送船の名称を言い、これなら一度に多くの人をここから逃すことが出来ると確信した。コードフェニックスにアウドムラの確認をお願いする。

「遠路はるばるよく来た。お茶でも出してあげたい所だが、ここに来るまでにロゼンタを見なかったか？」

「え？ 夫人がいないんですか？」

「ああ、前日に急な休みを取ったきり、連絡がないんだ」

「いいや、見ていない。最悪な事態を想定してもいいかもしれない」

全日から姿を消したデュノア夫人が此処に非難しておらず、不安そうな顔で聞いてくるデュノア社長。それを聞いたイチカは最悪の事態が起きた可能性を示唆した時だった。

「戻ったわ。アルベール」

「ロゼンタ！ この非常事態に連絡の一つも寄越さないとは……！
どれほど心配したか!!」

「あら、ごめんなさい。安全の確保に手間取ってね」

「安全の確保？ それなら、其処の彼らがいま最も安全なIS学園への誘導と護衛をしてくれる」

「違う、違うのよ……。あそこは安全じゃないわ。だって——」

背後の扉から入ってきた女性は何事も無かったように部屋に入ると、デュノア社長の前まで歩くと、近況を報告するもどこか様子がおかしい事に首をかしげるデュノア社長。

「私が滅ぼすから!!」

「ロゼンタ……！ 気が狂ったか!!」

「この世界で一番力がある人の方が安全、そして、それは……コードアメリアスに他ならない。貴方を殺せば、私の身の安全は保証されるのよ!!」

「グアアア……!!?」

「社長!!」

何処か狂い始めた彼女は懐から拳銃を取り出すと、デュノア社長に銃口を向けると発砲する。突然の事態に頭の整理が追いつかないイチカ達。

「さよなら、貴方！ 私は……私の自由のために生きるのよ!!」

「クソ……煙幕か！」

逃走用に用意していたであろう発煙筒を放り投げ、煙幕で視界を遮ると何処かに逃走する。煙幕が晴れると、血の海の中に沈むデユノア社長の姿があった。

「しつかりしろ！ クソツ、どれも急所を貫いていやがる!!」

「ねえ、イチカ助からなの!?!」

「今の手持ちだと、応急処置が出来たとしてもIS学園に着くころには...」

「そんな...」

倒れるデユノア社長に駆け寄り容態を確認するイチカだが、もう助からない事を確信する。そんな中デユノア社長が重い口を開ける。

「自分の身体の事は... 自分が... 理解している。最後のお願いだ、娘と... シャルロットと二人つきりにさせてくれないか？ 最後位... 親子として... 話がしたいんだ」

「... 分かった。何かあったらエリスを呼んでくれ。俺はあの女を追う」

「... うん。私は扉の奥に居るから何かあったら呼んでね」

最後の望みを聞き入れたイチカは退出するとフェニックスを纏い、逃げた社長夫人を探し、続くようにエリスも社長室から退出する。

「... こうして、二人で話すのは何年ぶりか」

「僕がここに初めて呼ばれたときです」

「そうか...。シャルロット... 学園生活はどうだった？」

「今はこんな世界になったけど、それまでは楽しかったですよ」

デユノア社長の言葉をどこか冷たく返すシャルロット。

「そうだ。今まで聞きたいことがあったんだ。なんで、母さんと付き合って、僕を生んで... 見捨てたんだ!」

「アンナは... お前をISに関わらせたくなくて私の元から離れた。彼女は私の秘書だった...。不妊体質のロゼンタの事、デユノア

社の事色んな事に相談に乗ってくれた。そんな彼女の優しさが心地よくって、私はロゼンタが居ながら一晩の過ちを犯した。すぐだったよ、彼女にお前がお腹の中に居る事が分かった。その事に気づいたアンナは私に『この子はISと関係のない所で生きて欲しい』と、そういうと私に何の相談もなく、私の元から離れて行った」

「貴方のやったことは母さんの意思に反した裏切りだ。母さんのことを少しでも思うなら...！ 病気で苦しんでる母さんのお見舞い位出来た筈だ！ なのに一度も来なかった!!」

「私もそうしたかった...。だが、何処から漏れたのかアンナの子供が私の子供だと言う事がバレ、会社が停滞期に入る中、社長の不倫が世間に公表させれてしまえば、会社の面目は潰れ、倒産の可能性があった。それを阻止するために、アンナとシャルロットを排除する事を企てようとする一派に住所まで特定されて、いつ消されるか分からない状態だった。どうにか阻止できないか考えていた時にアンナがその一派に毒を盛られ、倒れた」

「じゃ、あれは... 病気じゃなく...」

「そうだ...。あれは偶然ではない。その事を知った時には、すでに毒が全身に回り余命三年と診断されていた。私は可能な限り彼女に何かしてあげようとした。そんな時彼女は私にこう言った。『シャルロットと二人きりで過ごしたい』彼女は自分の身体よりもお前との思いを何よりも優先したんだ」

デュノア社長から語られる事実にはただ黙って聞くことしかできないシャルロット。

「私は彼女の意思を尊重し、出来る限り二人で過ごせるように周りの邪魔者を法的処罰を与え、生活費を送り、お前たちの安全を確保することに尽力した。最後に私が彼女の葬儀に参列したのはせめてと、思ってたことだった」

「なら、なんで僕を引き取ったのさ!」

「アンナだけで終わらなかった。次は... お前が狙われたんだシャルロット」

「え？」

「お前たち二人を消し去り、少しでも不安を解消したかったのだろうな。お前が死ねば、全て解決すると考え作戦が練られ始めた。それを極秘ルートで入手した私は、お前を引き取ることで身の安全を確保しようとした。私の近くに置いていけばそう易々と行動できないと思いい、さらに手が出しにくくする為に、アンナの意思に背いてお前をテストパイロットに仕立て上げた。だが、諦めの悪い奴らは試作品の実験中の不慮の事故と言う形でお前を消せば、周りから怪しまれないと考えた」

「そんな…！」

時間が経つ事に、言葉を話すことに重くなっていく身体に鞭を打ちながら、出来る限り話そうとするデュノア社長。

「いつのタイミングで行われるか分からず、手をこまねいていた時だった。あの発表があったのは…。」

「男性操縦者…。」

「そうだ。この騒動を利用し、お前をIS学園に送れば彼らは最低でも手を出すことが出来ない。三年もあれば奴らを裁く為の証拠をそろえることが出来る…。フツ、最初からバレずに事が進むなど思っていないさ。戻ってきた時には社長と部下ではなく、親子としてきちんと受け入れようと思った…のだから…。」

「貴方は僕のことを嫌いじゃないんですか…。僕が居なかったら母さんと離れ離れになることは無かったんだから」

「そんな事は…一度も…思っていない！ 例え、その生まれが忌み嫌われるようなものであっても、お前は私の大切な、私の娘だ…！」

自分のことをどう思っているのか気になったシャルロットの手を掴みその言葉を全力で否定するデュノア社長。

「おとう…さん…」

「…泣くな、笑え。お前にそんな表情は似合わない…。ゲホッ」

「しつかりして、お父さん!!」

「お前は… 何にも縛られず、自由に生きろ…！」

「そんな、急に言われたって…」

「自分の心を、偽るな。それは、ここが知っている…：…：自分で自分を決められるたった一つの部品だ。無くすなよ」

死期が近いのか、口から血を吐くデュノア社長に寄りかかるシャルロット。自由に生きて欲しいという言葉に戸惑うシャルロットに、彼女の胸を指さしの心の大切さを語った後、それまで見せることのない柔らかな表情を浮かべる。そして、眠る様に目をつむると、シャルロットの手を掴んでいた手が零れ落ちる。

「お父さん？ お父さん、目を開けて！ お父さん!!」

「いつまでこんな悲劇が続くのかな…」

扉越しに聞こえる泣き声に、どの世界でも起きる悲劇が、どうしようもない現実がそこにはあった。

逃げた夫人を探すイチカは、裏庭にで追跡目標を見つけた。

「ロゼンダ夫人。アルベール社長の件、コード・アメリカスについて話してもらおう」

「話す？ 貴方に？ そんなこと貴方に出来ない!!」

「グツ、光が：：！」

裏庭に逃げたロゼンタがピンク色のネックレスを掲げると眩い光を放つ。

「私は手に入れたんだ：：！ 自分の望みを叶える力を：：!!」

「あれはベスパの：：！」

ピンクを基調としたネコ目の機体。背部にあるキャノンと鶏の頭部のような形状が特徴の機体が立っていた。

「ゴトラタン：：！」

「私の手に入れた力にひれ伏せえ!!」

「グツ：：！」

ゴトラタンがビームライフルを放つのをみると左右の剣を連結させ、刀身にナノマシンを纏わせると高速で回転させ、ビームを霧散させる。

「此処じゃ、デユノア社に当たる!!」

「私と追いかけてっここがしたいのかい？ 坊や!!」

「周りを気にせずに、バカスカ撃ちやがる！」

上空でビームライフルを互いに打ち合う二人だが、ゴトラタンにはビームシールドがあり、フェニックスが放つ攻撃は悉く防がれていた。

「ビームシールドの前じゃ、そんな攻撃聞かないんだよ!!」

「戦い方は…いくらでもあるんだよ!!」

「ウウ…！」

ナノマシンを纏ったが炎の様に燃え、切りかかるもビームシールドで防がれる。だが、咄嗟に左足で蹴りを叩き込み、体勢を崩させると両腕を前に突き出す。

「バーニングファイヤ!!」

「このツ…！」

「接触したビームが拡散して…!?!」

両腕からバーニングファイヤを放つも、ゴトラタンもメガ・ビーム・キャノン放つが、ぶつかったビームが拡散し、炎の翼を折りたたみ難を凌ぐ。

「クツ！ 速い…!!」

「なんで、コード・アメリカスに力を貸す!!」

「あの人は、私の身の安全と地位を、そして長年の願いを叶えてくれるって言ったんだよ!!」

「そんな、自分勝手な望みの為に家族を撃つたのか!」

メガ・ビーム・キャノンを背部に折りたたみ邪魔にならないようにすると、フェニックスのビームサーベルとゴトラタンのビームトンファーがぶつかり合い鏢迫り合いが起きる。

「そうか、坊や…。アンタは私の長年の夢そのものだったんだ」

「何を言って…。増援…！」

何度か鏢迫り合いが起きる中、新たな増援としてゲドラフ二機とブルツケングが立ちはだかる。

「ええい！ ここはヴィクトリーの世界か!!」

ベスパの来たとの連戦に思わず本音が漏れるイチカは、ブルツケングのビームライフルを躲し攻撃するとブルツケングのインラッドが分離し、フェニックスを拘束しようと動き始める。

「この程度、大量のファンネルに比べれば!!」

ビームサーベルを両腕に持つとそのまま回転し、ビームの竜巻を起こし、その余波で分離したインラッドを破壊する。

「トドメッー!」

白熱化した右手を手刀にし、ブルツケングの胸部を貫く。だが、その一瞬の隙を突き、ゲドラフが左右からフェニックスを挟む。

「ガッ!? 挟まれた…。だけどオ!!」

「私の夢ならもう少し抗ったらどうなんだい、坊や」

「俺があんたの夢? 何を言ってる…。!」

「私は私の夢を叶える! 誰の命令でもない、自分の意思で一生懸命に頑張る坊やは純粋なもの…。私の夢なんだよ!!」

「迷惑だ!!」

左右から拘束されたフェニックスの前で語るデュノア夫人の夢を押し付けられたイチカは拒絶し、フェニックス全身からナノマシンが燃えるように放出される。放出されたナノマシンがゲドラフを焼き尽くす。

「流石だね坊や。それでこそ私の夢だ! さあ、私の腕の中で眠りなさい!!」

「アンタには血が繋がっていなくても、シャルロットという娘がいるだろう!!」

「あいつは私の娘じゃない! 子どもを産めない私が後悔している中、あいつは子供の生めない私からアルベルの子供を奪っていったあの憎たらしい女の娘なんか男共の欲望のはけ口にもなっていればいいのよ!!」

「それが大人のいう事かアアア!!」

「だけど、アンタは私が望んだ理想の子供そのもの…。戦闘不能にして、私の子供にしてあげる!!」

狂っている、この問答の中でイチカはそう感じたと同時に宇宙世紀の世界で感じてきた感覚と似たものを感じていた。それNTとは似て異なる人工的に開花させられた人達、強化人間と似た気配を感じ、コード・アメリカスによって何らかの強化処置を施されていると感じると同時、彼女の中にある歪んだ思想がどれほど危険か分かった。

「楽しいね坊や！ もっと、私を楽しませておくれ!! 増援?」

「アレはラファール・リヴアイヴ。。。こっちは危険だ!!」

「ロゼンタ夫人！ これ以上、自分を陥れるような真似はやめてください!!」

「女が。。。私と坊やの邪魔をするなア!!」

「ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア!!?」

暴走するロゼンタを止めようと、デヌノア社の関係者がラファール・リヴアイヴで前にもメガ・ビーム・キャノンのバレル部の大質量と旋回スラストを利用して遠心力と共に叩きつけると頭部ビーム・カッターで絶対防御ごと焼き貫かれる。

「だから、言わんこつちやない。。。!」

「トチ狂ったお友達になりに来たかい、アハッ！ さあ、続きをしようか坊や!!」

「もう倒すしかない。そうしないと皆が危険だ!」

「私の子にならないのなら、坊やの周りの女どもをこの機体で消す炭にしてあげる。泥棒娘もIS学園に居る女どもも、家族も、恋人もね!!」

「。。。そんな事やらせるかよ!!」

何処かに予備を前もって用意していたのかメガ・ビーム・キャノン
を新たに装着すると発射の準備をする。

「私のいう事を聞かないのなら、お仕置が必要だね!!」

「ガンダムウウ!!」

メガ・ビーム・キャノンが発射される前に、全身からナノマシンを

放出し、翼部のナノマシンと同調させ、炎のマントを身に包む。

「防いだ!?」

「歪んだ心に兵器は危険なんだ!!」

「ボウがああ!!」

メガ・ビーム・キャノンを防ぎきると炎の翼を羽ばたかせ、接近すると発射されるよりも速くメガ・ビーム・キャノンのバレルを切り裂くとビームサーベルでビームシールド発信機を破壊する。

「俺はアンタ夢でもなければ、アンタの子供でもない…。自分が味わった絶望を、押し付けられちゃ困る!!」

取り出した二つのビームサーベルを収束させ、特大のロングビームサーベルでゴトラタンに向ける振りかざす。

「アアアア!? 私の夢が…。助けて、アルベ——」

ビームサーベルによって撃ち抜かれたゴトラタンは爆炎に吞まれ、消滅した。

「もう、これは機械と人間の戦いじゃない…。人間同士の戦いなんだ…。いつもの戦争なんだ…。」

「イチカ、大丈夫?」

「ああ、この世界にきて初めて人を撃った。これが本来の戦争なんだって…。」

「そう…。大丈夫、イチカは一人じゃない。イチカが背負ってきた業を私も背負うから…。一緒に生き抜こう」

「ああ、そうだな…。」

イチカの様子を見に来たエリスは金属片が散らばるところを見つめるイチカの側に降りる。イチカは本来の戦争に戻ったことを実感

し、どこか悲痛な声を挙げるイチカにエリスはそつと寄り添い支えるのだった。

その後、コード・フェニックスから、アウドムラに避難民と物資の収容を終え、何時でも発進出来る事を伝えたと裏庭が開き、地下から伸びる滑走路が姿を現す。

『第一部隊の収容は終わってるから、後はお前たち二人だけだ』

「俺達は途中までの警護に当たるから発進してくれ」

『了解！』

そういうと滑走路からアウドムラが姿を現し、大空を飛んでいく。それに続くようにイチカ達も飛んでいくのだった。

42話

フランスでの一戦を終え、一度收容した5千人以上に及ぶ避難民の全員をIS学園に連れていくのは困難であり、長期化する可能性のある今回の戦いで避難民全員を受け入れようモノなら、居住区や食糧が不足し、現在保っている一定の生活翠重が大きく下がってしまう可能性もある。

また、けが人や病人などに使う医療系のモノが足りなくなるのには目に見えている。故に、子ども老人を優先的にIS学園へ受け入れ、他の避難民は途中で補給したアメリカの使われていない施設に避難してもらったことになった。

「幸いにも、あそこは食料や電気といったものはまだ生きている。生活するだけなら何とかなるだろう」

「そうだね。後は自給自足をすれば一か月以上は何とかなる見通しね」

可能であれば、全員を受け入れたいが、それが出来ない自分にやりきれない気持ちになるイチカとエリス。そんな二人はアウドムラの両翼を下から支えながら飛んでいた。避難民を降ろし、IS学園への帰路に就こうとした時だった。エンジントラブルにより、高度が徐々に下がり始める中、イチカとエリスの二人が故障したエンジンの代わり兼固定武装として行動し、襲撃も無くIS学園に着くのがだった。

「お疲れ兄さん。首尾はどうだった？」

「あまりよくないな。フランスの首都機能もそう長く持たないだろう。なるべく早めにケリをつけないとその後の復興が過酷なものになるだろうな。それに…」

「兄さん？」

戻ってきたイチカにねぎらいの言葉をを掛けるマドカだが、イチカの顔はどこか優れない事に疑問を持つマドカ。

「人を撃った……。この世界で初めて……」

「兄さん……」

「コピーニューヨークとの戦いが長くなりすぎて忘れていた……。俺達のやっていることが戦争で、人殺しなんだって……。心のどこかで安心していたんだ……。人を撃たなくて済むって」

「うん……」

「だけど、そんなのは幻想だった。クソツ……。俺はあと何回人を撃てばいいんだ……。後、何回戦えば平和は訪れるんだ……」

「分からないよ兄さん。でも、分からないからこそ私達は戦うんだ。何が良くて何が悪いか分からない……。自分たちの信じる平和を模索して行くしかないんだ。それが、正解だと信じて……。歩み続けるんだ」

平和への思い人類共通なのになぜこうも交差するのか、ほんの少し互いに寄り添うことで人は分かりあえるのに、なぜ出来ないのか。人類の永遠の課題にイチカは悩んでいた。

「そうだ兄さん。今、各地でレジスタンスが活発化しているのは知ってるよね」

「ああ、アメリカ、イギリス、中東……。いろんな所で、活発になっていく一方、自身の保身のためにコード・アメリカスに与する者もいる事もな」

「調べたところ、今勢いのあるレジスタンス『リガ・ミリティア』『イーリアス』『ロイヤル』『ヴァルキリア』『ナンバーズ』だな」

「んー、ほぼ全滅しそうな部隊名が聞こえたぞお……」

コード・アメリカスの統治を良しとしないのはイチカだけではなく、他にも多くのレジスタンスが存在する中、マドカは指をひとつつ折りながらレジスタンスを挙げていく。

「アプロディアはこのレジスタンスとの共闘を提案している」

「確かに、戦える人数が増えれば行動の幅が広がるが、量人材が増えても

質が落ちたら意味がない」

「多くの功績を挙げているリガ・ミリティアとの共闘が一番いいのではないか、という話だ」

「うーん、一度会ってみない事には分からないな」

「ああ、だからマークやフロスト兄弟に交渉を頼もうと思っっている。あの人たちは私達より修羅場を多く潜り抜けているからな」

レジスタンスに共闘を持ち込み、共同戦線を張ることで今後のコード・アメリカスの襲撃に対処しやすくなるだろう。そういったことを考えている中、マドカはチラチラとイチカの後ろを見ていた。

「シャルロットの奴、落ち込んでるように見えるが…」

「目の前で家族が死んで、な…」

「なら、そういう事なら兄さんが適任だ」

「なに、今のシャルロットに一番声が届くのは兄さんだ。なら、兄さんが対処するのが妥当だと思うが？」

「…なんでそう思うんだよ」

「女の勘だ」

マドカの根拠のない溜息を吐きながら向かう。例えエリスと相思相愛になっても女心を今一つ理解できていないイチカであった。

「あー、その…シャルロット…」

「イチカ…！」

「うおっ！」

つらそうな表情をしていたシャルロットはイチカの顔を見るなり、思いっきり抱き着き、突然の事態に焦るイチカ。

「イチカ…。僕、愛されていたんだ…お父さんとお母さんに…」

「…そうか」

「…一言言ってくれれば、あんな関係にならなかったのに!! 本当のことを喋ってくれれば、僕だって少し歩み寄れたのに!!」

「例え親が子供をどんなに思おうと、それ言葉に、行動にしないと分か

らない。お前のお父さんは、きつと不器用なんだよ。シャルロットへの愛情を上手く伝えることが出来なかった不器用な人だったんだ」

「こんな終わり方したくなかった！ 代表候補生なんて地位なんていない!! 僕は、お父さんとお母さんと平凡でも、一緒に暮らせれば・・・それでよかった!!」

「・・・ そうだな、それが一番だ。特別なものなんて必要ない、大切な人と一緒に居られれば・・・ 人はそれだけで幸せなんだ」

「グスツ・・・ うう・・・」

イチカの胸に顔を沈ませ、涙を浮かべるシャルロットに優しく抱き返し、子供をあやすように頭をなでる。

「天国できつと、お前の幸せを望んでいるよ。だから、一生懸命生きて幸せになるんだ」

「僕の・・・ 幸せ・・・」

「ああ、そうだ。自分の心に素直になるんだ。楽しいときは笑って、悲しいときは泣けばいいさ。そうやって生身の感情を整理せずに、自分の中に押し込んだって、自分がつらくなるだけだ」

「うう・・・ グスツ・・・。うええええーん!!」

「それでいいんだ。楽しいときは笑って、悲しいときは泣けばいい」

イチカが多くくの悲しみを乗り越えて、今の自分がある様にシャルロットにもこの悲しいを乗り越えて幸せになってほしい。そう思いながら、イチカはシャルロットの優しく抱きしめ、泣き止むまで傍にいた。

「やはり、兄さんは女たらしだな」

ひとしきり泣いたシャルロットだが、心の整理がついておらず、一人になりたいと言い自室に向かうのを見届けたイチカは第二整備室に向かっていた。

「よお、イチカ。こんな所で何してるんだ？」

「ガロード。ああ、新しいフェニックスのオリジナルのモーシオンパターンを作っていたんだ。だけど、MSが無いから実際にうまくいつているのか判別が出来ないがな」

「へえー、そういうのも作れるんだイチカ」

「そういうガロードは何していたんだ？」

今回の戦闘で得た経験を早速モーシオンパターン反映させようとフェニックスの傍らでコンソールを弄るイチカ。奇遇にも同じ整備室に居たガロードがイチカに声をかけた。そして、イチカは自分が何をしていたか答えると同じ質問を投げ返す。

「なんか一緒に戦う奴らが増えるみたいだし、ひと目で判別できるようにエンブレムを作ってみるかと思ってよ。で、完成したのがこれよ！」

「不死鳥…フェニックスか…。ああ、良いデザインだな。正式に採用されたら使わせてもらうよ」

「シャギア達にもエンブレムの話をしたんだけどよ。『そこまでなれ合うつもりはない』って一蹴されてよ…。前は敵同士だったけどよ、今は仲間なんだから少し位付き合い良くてもいいじゃねーかよ」

「アハハ……。互いに分かり合うのは難しいな」

過去の因縁はそう簡単に消えないな、つと思いつながら作業を進める。そんな中、鳥の形をしたロボットが姿を現した。

『ここに居たのですねイチカ』

「その声……。アプロディアか」

『はい。施設内を移動できるように用に用意した端末です』

「コード・フェニックスと一緒に俺達の所に来た時もその姿だったな」「特別必要性を感じなかったのですが、突然出てきて驚く、心臓に悪いと避難された方から言われまして……」

いつもモニター越しで話しかけてくるアプロディアだが、その方法は慣れたイチカ達は特段驚いたりしないが、何も知らない人からの驚きの声が多く、不要な事態を避けるために急遽用意したという事実苦笑いをするしかないイチカだった。

「それで、俺に何か用なのか？」

『はい。世界各国の有力なIS操縦者など一部の人間が行方不明になっっています』

「俺はフランスで、コード・アメリカスに協力する人物と交戦した。もしかしたらコード・アメリカスの勢力下にいるか、誘拐された可能性もある」

「つまり……。人間同士の戦いになるって事か？」

「ああ、現に俺はフランスで一人殺している。今後はそういった機会が増えると考えていいだろう。この事を他の奴らにも周知した方がいいだろうな」

アプロディアの言葉にイチカは、心当たりを言う。人との戦いが、血で血を洗う戦いが起きる。人を撃つという行為は人が想像するよりも精神的に堪えるのもあるが、簪がNTとして覚醒した今、NTとしての強さにもよるが、仲間だけではなく敵の思念まで聞こえるとなれば、強靱な精神を持っていない彼女では、近い将来精神崩壊する可能性があるからだ。

「にしても、腹が減ったな。ガロードは何か食ったのか？」

「いいや、まだけど…」

「なら、食堂に喰いに行く。スタミナのあるものを食いたいんだ」

「戦った後って腹減るよな。神経と集中力使うからよ」

腹が減っては戦はできない。空腹の状態では、いい考えも出ないし、いぎという時に力が出ない。そんな状態で、戦いに行くなど、死に行くようなものである。空腹を訴えたイチカはガロードと一緒に食堂に向かい、その後をアップディアが付いて行く。

「さて、何を——」

「何だと、もう一回言ってみろお！」

「何だ、喧嘩か？」

食堂に付いたイチカ達に聞こえた怒声に、イチカはやや困惑しながらその声のした方を見る。

「だから、今家に向かうのは危険なんだって、何回言えば分かるんだよ！」

「家具然り、道具然り、思い出然り、家には大切なものが沢山あるんだよ!! それを全部見捨てろってか!!」

「物と命どっちが大切なんだよオ！」

「少し、様子を見るだけだ！ すぐに戻る!!」

「こういう時位聞き分けろや！ このクソジジイ!!」

「親に向かって何だその口の利き方！ このバカ弾!!」

「おじいちゃんもお兄ちゃんもやめてよ!!」

ついこの間非難してきた弾の家族が、どうやら言い争っているようだ。それを聞いた、イチカは頭を少し掻くと二人が言い争っている場所に向かう。

「ここは食堂だ。少し静かにしてくれないか？」

「悪い一夏……。だけどじいさんが、家の様子を見に行くって言う事聞

かなくて…つい熱くなっちゃった」

「敵さん。気持ちには分かるけど、今は非常事態なんだ。貴方の行動の為に人員を裂くほどこっちは余裕がない以上、そういった独断行為は慎んでほしい」

「一夏！ お前まで弾と同じことを言うのか!!」

「同じ事を何度でもいいますよ。今は非常事態なんだから、少しは大人しくしてくれと。食堂を営んでいる貴方が食事場でのマナーが成っていないんじゃないんですか？ 人一倍マナーに厳しい貴方が聞き分けが無いのなら実力行使に出ますよ?」

「このお、言いたいことを言わせておけばあ!!」

仲裁に入ったイチカだが、最初こそ場を治めようと丁寧に説明していたが、次第に棘を含んだ発言になり始め、仕舞には煽りが含まれ始める始末。

「遅い」

「グウツ…!?!」

「安心しな手加減してある」

「いや、もう少し穏便な方法があっただろう…」

「この手に限る」

「この手しか知らないだろう…」

堪忍袋の緒が切れた敵は、イチカの顔面に目掛け拳を振るうも、ガンダム・ザ・ガンダムの称号を持つドモン・カッシュ直々鍛えられたイチカに当てる事は出来ず、余裕のある回避をすると懐に潜りこみ、鳩尾を殴る。その際、筋骨隆々の敵の身体が地面から浮いたのは気のせいではない。最終的に肉体言語で黙らせるとはこれいかに。

「俺達もこの戦いを終わらせるために、文字通り命がけで取り組んでますから、もう少し我慢してください」

「ごめんなさい一夏さん。おじいちゃんが迷惑を掛けて」

「すまねえ、一夏。俺たち家族の問題に巻き込んで…」

「気にするな。困ったときはお互い様だ」

「まあ、だからって殴るのはどうかと思うがな」

「うっ、今後はなるべく穏便な方法で済むよう努力しよう」

「俺は家族のことを思って…」

わだかまりを残しつつ、(一方を)静かにしたイチカは当初の目的通りご飯を食べる事に専念できる。鳩尾を殴られた敵は足を引きずりながらイチカ達とは別の席に妻である蓮と一緒に座った。

「にしても、お前強くなったよな。流派ナントカは俺も学べば強くなるのかな」

「流派東方不敗は一子相伝だからな、そう易々とは教えられないかな。そもそも俺はまだまだ半人前だから誰かに教えるなんて恥ずかしくてできないな」

「あれで半人前…」

「師匠の背中は今だ遠いし、最終秘伝も身に着けていないからな。超えるべき壁は大きいよ」

流派東方不敗に少し関心があつた弾は自分も取得できるか聞くが、イチカは一子相伝であり、未熟な自分が教えることが出来ないことと頼んだスタミナ定食を口に運んでいく。一武闘家として、尊敬している師匠の背中が大きく同じ場所に立っていない事を再度自覚しながら、いつか必ず超えてみせると闘志を燃やすイチカだった。

ご飯を食べ終え、フェニックスのメンテナンスをするイチカは一通りの作業を終え、隣に置いていた端末を開き、新しい機体の設計をしていた。

「シャルロットの戦い方は、距離を選ばず多彩な武器で戦う…か。MSに多くの武装を取り付けても火力が上がっても、機動力が落ちてしまう。だからと言って、火力を下げても機動力を下げても本末転倒だし… あー、もう！ 多彩な武装じゃなくて、幅広い戦術が取れる機

体ならシャルロットの戦い方を崩さずに済むか？」

イチカはシャルロットの新しい機体を考えていたが、シャルロットの戦い方、砂漠の呼び水を始めと高速切替はイチカの知っている限り実現できる機体が無い。見当たらないなら一から作ってしまえばいい、と考える事を放棄したような答えにたどり着き、コンセプトを考え、それに合った機体を選んでいたので中々見つからず、困っていた。そんなイチカの下に必死の形相で、弾が駆け寄ってきた。

「大変だ一夏！　じいさんが、じいさんが!!」

「落ち着け、厳さんがどうしたんだ？」

「姿が何処にもねえんだ！　様子を見におふくろの元に向かったらトイレに行つたきり戻ってきてないって、IS学園をくまなく探したけど影も形もないんだ!!」

「なんだと？　厳さんが行きそうな場所に心当たりはあるか」

落ち着きがない弾に落ち着くよう指示すると、なにがあったのか耳を傾けると厳の姿が何処にもなく、嫌な予感が出た弾はイチカの元を訪ねたのだ。イチカは現がどこか行きそうな場所はないか聞いてみると弾はまさか、と頭を抱える。

「実家…。あのバカジジイ、性懲りもなく…!」

「まずは、空いている奴で部隊を組んで捜索をする。弾お前もついてきてくれ」

「ああ、分かっている。あのバカ親父一発殴ってやらないと気がすまねえ！　お袋や蘭を心配させやがって!!」

「アプロディア、今開いている奴を第二ゲート集めてくれ」

『分かりました。招集を掛けます』

「集まったのは弾、マドカ、ガロード、楯無の四人か」

「何処に向かったか見当がついているなら、少人数で向かうのがいい

と思うわ」

「だが、楯無。お前のエクシアはまだ80%しか完成していないのだらう?」

「大丈夫よ、足りない分は技量腕で補うわ。これでも国家代表だからね!」

「すみません。祖父の為に、集まってもらって...」

「気にするな。言っただろ? 困ったときはお互いさまだって」

「よし、いっちょ人助けしますか!」

第二ゲートに集まった四人に頭を下げる弾。それを、イチカは気にした素振りを見せずに弾の肩に手を置く。

『発進準備が整った方からどうぞ』

「イチカ・ギルオード、フェニックス... 飛翔する!」

「更識楯無、アメイジングエクシア... 飛翔するわ!」

「マドカ・ギルオード、ガンダムサバーニャ... 狙い撃つ!」

「ガロード・ラン、ガンダムX... 出るぜ!」

「五反田 弾、クロスボーンX1改・改... 出る!」

出撃した5人は、カタパルトか発進していき姿が見えなくなった減の捜索に当たるのだった。

「それがお前の新しいガンダムなのか?」

「ん? そういえば弾には見せてなかったな。これがフェニックスガンダムの新しい姿だ」

「だがよ、前の状態との判別が難しいからよ。名称を少し変えてみたらどうだ?」

「名称を変える?」

「前の状態を能力解放で、今の状態を能力覚醒と後ろに付けて分かりやすくすればいい」

「確かに、フェニックスの力が解放された経緯を考えれば、そういう言

「の方が妥当なのかな？」

人型に近づき、さらなる力を解放したフェニックスを始めてみる弾。よりわかりやすくフェニックスガンダムの後ろに能力覚醒を入れれば分かりやすいと進言するマドカ。他愛もない会話をしていいると見慣れた街並みの荒れた姿が見えてくる。

「思ってたより被害が少ない」

「俺が来る前は何機かうついていたんだがな…」

「五反田食堂周辺と経路を探そう」

ビル等の建物は、半壊している物が多いが全壊している物は少なく、全体的に壊れていないほうが多い。恐らく戦闘によって破壊された物だろうと推察するイチカ。

「待てセンサーに熱源反応…。敵の可能性があるな」

「目視で確認した。前に戦ったアマクサと前にデータベースで見た黒いクアバーゼだ。数はクアバーゼ8、アマクサ12」

「一人4機で終わるな」

「まだ実践慣れしていな俺にその数はきついぜ」

「死にたくなかったら手を動かすことだ。それに戦いに勝つんじゃない、生き残ることを考えて行動しろ。勝利など後からついてくる!!」

フェニックスのセンサーに反応があり、一端動きを止め物陰に隠れ様子を窺い、マドカが目視で木製帝国の機体と数を確認すると何をすべきか確認し、行動を開始する。

「各自散開！ 敵性勢力を各個撃破せよ！ 行け、ファンネル！」

イチカが先行し、縦横無尽に飛び交うファンネルで牽制しながら鞘から抜刀し、アマクサの右肩を切り裂くとガロードがビームサーベルで切り裂きバスターライフルで止めを刺す。

「ランダムシユートツ！」

「エクシアの機動力なら！」

X1改・改がピーコックスマツシヤーを構え、側転しながら放たれたビームは不規則な軌道を描き、2機のアマクサに被弾しシールドや脚部を破壊する。そして、出来たすきを逃さず、エクシアの機動力を生かし二機のアマクサを切り刻んでいく。

「一気に殲滅させる！」

ライフルビットを全基前方に展開し、放たれたビームによる制圧射撃はクアバーゼ2、アマクサ4機を一気に戦闘不能に陥れた。

「やっば、戦い慣れしてるな一夏」

「ッ！ 弾、後ろだ!!」

「しまっ…！」

次々落としていくイチカの姿に夢中になった弾に出来た隙を見逃さず、一機のカバーゼが弾の背後を取り、頭部に内蔵されたメガ粒子砲を突きつけていた。

「待っている！ 今助ける!!」

「ここぞとばかりに連携が良くなってる！」

「邪魔をするなッ!!」

弾の危機に救援に向かおうとするイチカ達だが、敵も行かせはしないと言わんばかりに攻撃が激しくなり、連携が良くなったことよって苦戦を強いられ始めていた。

「ここまでなのか…!?!」

「チィ…！ 弾！ 上のスラスターを落とすんだ!!」

「上のスラスター？ こういう事かッ」

例え駆けつけることが出来なくても、アドバイスを送ることはできる。イチカはX1改・改のスラスターを落とすように指示すると、イチカの言った意味を理解した弾はX1改・改のスラスターを落とすとカバーゼの頭部メガ粒子砲に衝突し砲身が下向き、地面に向かって放たれる事で間一髪直撃を避けることが出来た。

「このツツ！ ブランドマーカー!!」

イチカはX1改・改の四角錐状のビーム刃を形成したブランド・マーカーを拳に移動させ、の頭部を殴りつけるとX型の傷痕を残し、機能停止する。

「今は戦闘中だ。目の前の戦闘に集中してくれ！ そんなんじや、大切な人の所に帰れないぞ!!」

「大切なひと？ …… ああ、そうだ俺達には帰るべき場所も、守るべき人もいるんだ！ こんなところで死んでたまるか!!」

ビームザンバーをクアバーゼに投げつけるが当たらず、ビルに刺さるが、シザーアンカーでビームザンバーを回収し、チエーンを掴むとそのまま周る様に動き攻撃範囲が伸びたビームザンバーで周囲の敵を切り裂いていく。

「敵の数が減った！ 一気に攻めるツ」

クアバーゼ3、アマクサ3と残る敵の数を確認し、フェニックスが荒ぶる不死鳥の様なポーズを取ると全身を気弾で渦巻き状に包み込む。

「超級ウ霸王ツ電影弾ツツ!!」

敵陣に向かい超級霸王電影弾を撃ちこみ、アマクサを三機仕留める。

「酔舞・再現江湖デッドリーウェイブ!」

相手を惑わせる舞の動きを取りつつ気を練り上げた後、その気を発しながら相手に突撃し、1機のクアバーゼとすれ違うと同時に相手に気を流し込む。

「爆発!」

イチカの掛け声とともに流し込んだ気を爆発させて相手を粉碎す

る。飛び道具を使いながら戦うのがメインなIS組とガロードは「こいつ…素手の方が強いんじゃないか?」と思いが一つになっていた。

「兄さんの異質さに驚いている暇があったら手を動かせ」

「そうだ! 残りの敵…」

「残りは私が仕留めた。私が居なかったら不意打ちを喰らっていたぞ」

弾達が呆けている間に残りのクアバーゼを仕留めていたマドカ。戦場では気の緩みによって悲惨な結果になるのはよくある事だが、それを身内で起きて欲しくないマドカは注意を促すのだった。

「食堂までに生体反応も死体も見つかっていない…。あるのは大きめのタイヤ痕だけか」

「今の所、血痕も見つかってないか…。つい先日、襲撃があったにしては静かすぎるな」

「残党が居ない事がおかしいって事?」

「あまりにも静かすぎる…。まるで嵐の前の静けさの様な…」

敵に発見されるリスクを下げるべく低空飛行をするイチカ達は地面に着地し、周囲の状況を確認しながらに問を浮かべる。

「それにこのタイヤ痕、一般車両にしては大きい。トラックかと思っただが、線は一本だけだ。恐らく、バイクの類だろうがそれにしても大きい」

「敵の可能性があるって事か?」

「大いにな」

———
ウワアアアアアアアアアア!!?

状況推察をしていたイチカ達の耳に成人男性の悲鳴が届いた。

「あの声、じいさん!」

「急ぐぞ!!」

「声は食堂のある方だ!」

声の主が弾の父、敵のものであると認識した弾はスラストターを吹かしながら急行し、そのあとをイチカ達が急いで追いかける。

「あれは、ゴツドガンダム!」

「師匠!」

「てめえ、じいさんから離れやがれッ!」

「弾、前方に熱源接近!」

「あれは…バイク?」

食堂前の道路で震える敵とゴツドガンダムの姿があり、その周囲にはナニカの金属片が散らばっていた。敵を襲撃しているのがゴツドガンダムだと思った弾は、ビームザンバーを構え、前に出ようとした瞬間だった。弾達がいる方とは逆の方からセンサーが何かが接近していることを知らせる。そして、飛び上がる様に出てきた装甲車両に近いバイクのような物体が敵を轢き殺そうとしていた。

『タアアッ!!』

「なっ!」

「じいさんを…守った?」

だが、敵が轢かれる前にゴツドガンダムが敵の前に出ると拳一つで粉々に粉碎する。そして、その光景に驚く一同。

「今のは、ベスパのガリクソンだった…。じゃ、さつき見たタイヤ痕は奴の?」

「師匠…」

先程のタイヤ痕がベスパのガリクソンのものだったと考えるマドカだが、イチカはただゴッドガンダムを見つめる事しかできなかった。

『答えろイチカ！ 流派ッ！ 東方不敗は——』

『王者の風！』

『全新！』

『系列！』

『天破！』

『侠乱！』

『見よ、東方は、赤く燃えている!!』

互いに声を挙げ、残像が残る速さで拳を繰り出しながら接近し、最後は同じポーズの状態で拳を突き合わせた二人は次第に距離を取る。

「兄さん！ さっきのガリクソンの反応が、さっき私達が来た方からこっちに向かってる!!」

「何っ！」

ゴッドガンダムを警戒するイチカだが、マドカは大量のガリクソンが向かっていることを知らせる。

『イチカ、前にもこんな事があったな。そして、あの時も流派東方不敗最終奥義を放ったはず。その名は——』

「あ、あれは……！」

『石破天驚拳!!』

ゴッドガンダムの拳に光が集まり、巨大な拳の形の気弾を放ち、イチカの後方から現れた大量のガリクソンを一網打尽にする。

「覚えている、覚えているぞ。あの時もそうだ……。俺はこの人に助けられたんだ……」

そしてイチカは過去を思いだすように語り始める。

「修行の最中に師匠とはぐれた俺は、獰猛な猛獣たちに囲まれてしまった……。あの時の俺は猛獣の群れに恐怖し、身動きが取れなかった。その時に師匠がさっきの技、石破天驚拳で俺を助けてくれたんだ」

『この技だけはお前に伝えることが出来なかった。あの頃から、何も変わっていない。目先のことに捕らわれ、一番大切なことを見失う』
「師匠……。アンタは……。敵なのか……」

『お前の問いに対して、語る口は持っていない。知りたければ拳で語れ』

イチカはゴッドガンダムの、師匠であるドモンが理解できずにいた。コピーニューロである以上、本物のドモンではない事は理解している。だが、自分を試すような行動の真意が分からず、漏れた言葉に語ることは無いと腕を組み立ち尽くすのみだった。

「イチカ君、複数の熱源接近！」

「増援！ またベスパか……！」

「生体反応……。人が乗っているのか!!」

迫りくる機体に人が乗っている事に、今までの様にニューロやコピーニューロだと思っていた弾や楯無は驚きを隠せずにいた。

「アイツから悪意を感じる……。恐らく、敵だ」

「敵？ 同じ人間が敵になるっていうのか!!」

「寧ろ今までが可笑しかったんだ。戦争は人間同士の手によって起きるものだろう」

「そ、それは……」

「何だい？ まだ、野蛮な男どもがいたのか」

人と機械の戦いではなく、人と人の戦いになりつつあるということを理解し、その事を聞いていたマドカは驚く素振りを見せずにいた。そして、目の前にいるゲドラフ率いるリグ・シャツコーから悪意のある人の声が聞こえた。

「発砲した？ やはり敵!!」

「今ので死んでれば、苦しまずに死ねたモノを!!」

「お前もコード・アメリカスの配下かッ!」

先制攻撃だと言わんばかりに攻撃してきたリグ・シャッコーにイチカは抜刀し、接近戦を仕掛ける。

「じいさん、ここはもう危険だ! 早くIS学園に戻れ!!」

「弾ッ!? オメエはどうするつもりだ!!」

「俺は此処で、敵を食い止める!!」

「馬鹿ヤロウ! 子供が危険な目に合ってる中でおめおめ逃げられるか!! 俺も手伝う!!」

戦場が変わったことを理解している弾は、敵に逃げる様に促すが、まるで現実が見えていないのか生身で加勢すると言い始めてきた。そんな、敵に対してゲドラフが乗るアインラッドに搭載された2門のビームキャノンが放たれる。

「ヒイ!」

「じいさん!」

だが、ビームが敵を焼き尽くす前にX1改・改が、身を挺して護り、ビームシールドによって防がれる。

「とつとと逃げろクソじい! 今のを見ただろ生身で喰らったらどうなるかなんて言わなくても分かるだろ!!」

「ウツ...!」

「大人の尊厳、意地? そんなもん、現実を理解できていない大人がいたって邪魔になるだけだ!!」

「ゲホッゴホツ...」

敵の胸ぐらを掴み、怒りの籠った声で話す。そして、言いたいことを言った弾は突き放すように敵を解放する。解放され咳き込んだ敵は、何処か納得のいかない顔をしながら敵は立ち去って行く。

「あのタイヤビームを弾くぞ！」

「あのタイヤはビームライフル程度なら防ぐ。ゲドラフ自体もビームシールドを装備している以上全方位からの攻撃に高い防御性を持っている。かなりの高出力のビームなら効くがな」

「そんな敵にどうしろっていうんだよ!!」

「タイヤはサバーニヤのシールドビットで止める。お前たちはゲドラフの両腕にあるビームシールド発振器を破壊すればいい。そうすれば、左右からの攻撃が有効になるだろ?」

「分かったわ。その作戦で行きましょう！」

ゲドラフとアインラッドの堅牢性に苦戦する弾達だが、その対抗策を言うと、現状それ以外の策が無い為、マドカの作戦で行く事になった。

「行け! シールドビット!!」

ゲドラフが押し潰さんと迫りくるが、その攻撃を待っていたマドカはシールドビットを展開し、物理的に動きを止める。

「うおおおおお!」

「ハアアア!!」

動きの止まったゲドラフを左右からビームシールド発振器をビームザンバーとアメイジングGNソードで破壊する。

「そっこだあ!!」

ビームシールドが使用出来なくなったゲドラフのトドメをガロードがバスターライフルで射す。

「確かにこれなら、倒せるが...」

「敵の数に対して時間が掛かりすぎるわね」

「なら二人一組で戦うのがいいだろう。私と楯無、弾とガロードの組み分けていいな?」

「了解!」

時間がかかりすぎると言う懸念を抱き、即時に新しく組み分けを行い行動するように指示をするマドカ。そして三人はその案に賛成し、行動を開始するのだった。そして、少し離れたところでは――

「何故、コード・アメリカスに協力する！ 奴のどんな甘言を聞けば協力しようなんて考えが出来る!!」

「私はね、この汚染された地球を浄化したんのよ!」

「地球の・・・浄化?」

「そうよ、地球は度重なる人間の身勝手な環境破壊に滅びの危機に瀕してるわ。それを回避するために協力してるのよ!」

「どんな大義名分があっても、大量虐殺をしていい理由にはならないだろ!」

「むしろそれが目的なのよ!」

「何だとツ・・・!」

ビームファンとビームサーベルが幾度となくぶつかり合う。そして同じように言葉もまた弾丸となってぶつかり合っていく。イチカはコード・アメリカスに協力する心情が理解できず、なぜ協力するのか聞くと地球のためだと返ってきた。地球が滅びから護る為に戦っているという彼女だが、コード・アメリカスによって多くの命が奪われている事実がある以上、それが正当だと思えなかった。だが、人々が死んでいくのは計画の内だと言う彼女にイチカは疑問を浮かべた。

「地球に住む人間が、地球を我が物顔で食い潰しているなら、その人間の数が減れば地球は守れるのよ!」

「そんな理屈でっ!」

「人間が地球にしてきたことを思い出しなさい! 私達は今こそ、地球をありのままの姿に戻すべきなのよ! あのタイヤは火薬を使わずに有害な人を轢き殺すには持って来いだった!」

「その為に、火薬を使わずに人を殺して家を壊すと言うのか!! それが人のやることかよツ!!」

ハンドビームガンとビームファンの攻撃を回避しながら、鞘に納め

られた剣を連結させ、弓にして攻撃したり、両剣のように扱いながら応戦していた。

「腐らせるものは腐らせ、焼く物は焼く！　それが私の考えた地球クリーン作戦よ！」

「そんな作戦が認められと思うのかッ！」

「認められないなら強行するまで!!　地球に住む子供たちが、いつまでも自然豊かな地球で暮らせるように、肥やしにするのよ!!　例え批判されようと、いずれ評価される日が来る！」

「嘘を言うなっああ!!」

両剣状態の剣をブーメランのように投げるもビームファンによって弾かれるが、それを見通していたイチカは炎の翼を展開し、急接近すると回し蹴りを繰り出す。

「ウワアアアアア!?」

「どんな大義名分があろうが、アンタのやっている事は人殺しに過ぎない！」

「グッ…！　何も知らない子供が減らず口を!!」

「戦争に参加してる時点で、破壊してることに変わりないんだよ！」

「私のやっていることは慈善活動よ！　貴方達男どもがくだらない争いばかり起こすから、自分の生活の為に木を斬り、山を拓いて自然を破壊してるばっかのくせに!!」

「その破壊と言う名の恩恵に預かっているのはお前も同じだろう！　自分だけ善人ぶるなっ!!」

回し蹴りの衝撃で地面に墜落したリグ・シャッコーに近寄ると、リグ・シャッコーは手に持っていたビームサーベルで何度も突くがイチカはそれを難なく躲し、リグ・シャッコーの肩を掴むと顔を何度も殴り、最後に思いつき振りかぶり殴りつける。

「この野蛮人が!!　アンタみたいなのがいるから、地球は…！」

「地球、地球…。地球を免罪符に何をしてもいいわけないだろ！　地

球の為なら殺人が許されるわけないだろうがアア!!」

自分勝手な大人に怒りを覚えながら、イチカはバーニングクロスでリグ・シャツコーを薙ぎ払う。

「グッ……。確かにお前は強い。だけどね、地球クリーン作戦の要はゲドラフだけじゃないんだよ」

「なんだと?」

リグ・シャツコーの至る所から放電される中、追い詰められた彼女は鋼鉄の仮面の下で、不敵に笑う。そして、それがどういう意味か理解するのに時間はかからなかった。

「あれは…。アドラストエア!?」

「そうさ、あれが作戦の要。あの戦艦でIS学園を、地球の不要なものを踏みつぶす! 既にいくつかは地球の肥やし済みよ!!」

「あんなもんIS学園に向かったら…。!」

「サテライトキャノンで…。!」

「待て、ガロード! サテライトキャノンじゃ、被害が大きくなる!

何をするつもりだ!! 兄さん!!」

「タイヤ付きを止める!!」

周囲の建物を踏みつぶしながら進む40mあるであろう大型のバイクが近寄ってくる。彼女がいう地球クリーン作戦の要であるアドラストエアが進路方向にはIS学園が危険だと理解したイチカは炎を纏った両腕を突き出し、燃え盛る不死鳥がアドラストエアの前輪部分に向け飛んでいくが、その進行を止める事は出来なかった。アドラストエアから無数のミサイルが飛び交うが特大の気が行け手を阻む。

「お見事…。」

ゴッドガンダムの超級霸王電撃弾がミサイルからイチカを護る。真意が理解できずに内心困惑することしかできないでいた。

『気を抜くなイチカ! む? そっちに行つたぞ!!』

「何？ ウワアアアア!!」

アドラステアを止める事をに集中していたイチカに2機のゲドラフが進行し、咄嗟に構えようとするもインラッドに衝突され、飛ばされるイチカ。

『イチカ！ 今こそ石破天驚拳、撃ってみせろ！』

「なにっ？ クツ…！」

ゲドラフ衝突から体勢を立て直すとゴツドガンダムが石破天驚拳を打てと言ってきた。自分が持つ武装ではアドラステアを止める事を出来ないと理解したイチカは一度上昇し、高度を取ると目を瞑り集中し、イメージするのは武闘家として、弟子として追い越すべき人の背中を、両脇を閉め、右手を突き出す。フェニックスの右手に光が集まる。

「ハアアアア…！ 流派東方不敗が最終奥義ツ石破天驚拳ツツ!!」

フェニックスの拳から拳の形の気功弾が放たれると、フェニックスを追尾していたゲドラフ諸共アドラステア消滅させる。

「う、撃てた…。流派東方不敗最終奥義を俺が…！」

『イチカ、流派東方不敗最終奥義石破天驚拳、確かに伝授したぞ。その技があれば、コード・アメリアスにも後れを取らないだろう』

「待ってくれ師匠！」

『この瞬間をしかと胸に刻み込め。そして、七日後のガンダムファイト楽しみにしているぞ。来い、風雲再起!!』

イチカが石破天驚拳を習得した姿をどこか満足そうに見つめたゴツドガンダムは呼び出した風雲再起と共に何処へと去って行った。

「私の… 私のアドラステアが…」

「投降しろ。命まで取るつもりはない」

「ここで私が、投降したら…。地球はこいつらに破壊されてしまう!？」

「何？ グツ…!？」

最早真面に戦うことが出来ないリグ・シャッコーのパイロットに投降を呼びかけるイチカだが、ふらつきながら立ち上がるとそのままラストを吹かし、目の前に居たイチカは思わぬ行動に受け身が取れず、尻もちを着く。そして、リグ・シャッコーはマドカ、楯無を、そして弾を過ぎ去っていく。

「アイツ、逃走するつもりか？」

「見て、リグ・シャッコーの進路方向から車が来るわ！」

「アレに乗っているのは……!?!」

逃走しようとしたリグ・シャッコーを追いかけようとしたイチカ達だったが、一台の車が逃げようとするリグ・シャッコーに向かって猛スピードで直進していた。

「一体何を……。まさか、特攻でもしようと言うのか!?!」

「ガキどもだけに危険な目に合わせられるかよ!!」

「よせ、じいさん!!」

猛スピードで直進する車がしようとしている事に気づいたイチカ達は、止めようと急いで行動する。だが、車がリグ・シャッコーと衝突する寸前に飛び降りた敵は燃え盛る炎を見て不敵に笑う。

「ハハッ……。ISが無くたってやれば出来るじゃないか」

「よくも邪魔をしたわね……」

「ハッ……」

燃え盛る炎を見て、仕留めたと思った敵だが、炎の中から女性の声が聞こえ、先ほどまでの笑いも止まり、言いようもない恐怖が押し寄せてきた。そして、炎の中から装甲の一部がへこんだリグ・シャッコーがビームファンを構えながら、敵に近寄る。

「無粋な野蛮人が私の邪魔をするなッ！」

「アア……。ア……。アア……」

「死ねッ！」

「じいちゃあああん!!」

怒りを露わにしながらビームファンを振り下ろすリグ・シャッコ
ー、直前に迫る死に身動きが取れず、怯える事しかできない敵に一つ
の影が近寄って来た。

「アアアアアアアアアアアア!!!」

「だ、弾……。お、前……」

X1改・改が、身を挺して敵をビームファンから護るも、弾の
右腕ごと切りおとされてしまう。壮絶な痛みに気を失う事すら許さ
れず、悲痛な悲鳴を上げる弾。

「弾ッ！ 気をしっかり持つて!!」

「クッ……。！ もう追いついて……。なら、この機体ごと自爆してやる
!!」

「自爆だとオ!? グッ!!」

追い詰められた女は自からの死さえ厭わない行動に出た。自爆と
言う方法で道ずれにしようとした考えたのだ。女は近くにいたX1
改・改抱き着くとするも弾は無事な左腕で必死に抵抗するが抵抗空し
く、拘束されてしまう。

「直径1キロはこのリグ・シャッコーに積まれた爆弾で吹き飛ばす！
後3分、恐怖に怯えるがいい野蛮人共!!」

「クソッ……。！ ビームサーベルじゃ、弾まで傷つける！ それに爆
弾が誘爆しちまう!!」

「このッ……。離れやがれえ!!」

「ハハッ！ 梃子でも動く訳にはいかない!!」

「覚悟を決めるか……」

X1改・改に取りつき離れないリグ・シャッコーをどうしよか悩ん
でいた時、X1改・改スラスターを全開にし、イチ力達から離れてい
く。

「弾？ 何をする気だ……。よせっ！」

「何をするつもりだつて？ 此奴と一緒に地獄に落ちるのは俺一人で十分だ!!」

「まだ、何か方法があるはずだ…！ だから、生きることが諦めるなアア!!!」

「ありがとよ、イチカ。最後まで助けようとしてくれてさ…。家族の事、虚さんのこと頼んだ」

「ダアアアアッツツ!!」

弾が自分一人だけ犠牲になる道を選んだことに気が付いたイチカは、生きることが諦めるなど叫びながら追いかけるも、追いつく前に光が二人を呑みこんだ。

「兄さん！」

「凄い爆発…！」

「ああ…弾…！」

爆発から身を守る様にシールドビットを展開するマドカ。機体を通して伝わってくる衝撃と轟音からかなりの火薬が積まれていることが理解できる。

「なんて爆発力だ…。辺りが一面吹き飛んでやがる…。」

「この爆発じゃ、生存なんて…。」

「兄さん！ 気をしっかりして、兄さん!!」

余りの惨状に絶句するガロード、そしてその爆発から生存は極めて厳しいと思つた楯無。マドカは膝立ちのまま爆発地点を見つめたまま動かないイチカに呼びかけながら駆け寄る。イチカの戦意が消沈している為か、フェニックスのサイコフレームがグレーに変わっている。

「要救助者の確保次第、戦線を離脱する！ 楯無、トランザムで要救助者を連れていってくれ。ガロードは落とされないように私に掴まってくれ。私は兄さんを運ぶ」

「了解！」

これ以上長居するのは良くないと考えたマドカは、戦線の離脱を決定し、爆発の衝撃で頭を打ち気絶した敵を担いだ楯無と一緒にトランザムを使い、IS学園に戻るのであった。

「どうだった一夏！ 敵さんは見つかった？」

「鈴…。」

「救助者は無事保護した…。だがな…。」

IS学園に戻ったイチカ達は機体を解除し、歩いていると鈴が心配そうに駆け寄ってくるが、何処か元気がないイチカ、作戦の成功を言い淀むマドカ。

「鈴…。弾が…。」

「え？」

「おじいちゃん!!」

イチカが悔しそうな表情をしながら、重い口を開けようとした帰ってくるのを待っていた蘭が気絶していた敵に駆け寄る。

「おじいちゃん大丈夫！ おじいちゃん！」

「うう…。蘭…。」

「おじいちゃん！」

気絶していた敵の体を揺する蘭は、意識が覚醒した敵の姿を見て笑顔になる。

「一夏さん、おじいちゃんを見つけてくれてありがとうございます!!」

所で、お兄の姿が見えないようなんですけど…。」

「蘭…。弾は…」

「いててて、此処は…、そうだ！ 弾、弾は何処だ!!」

目を覚ました巖から離れた蘭は戻ってきた人の中に弾の姿がない事に疑問に思案中、後頭部を抑えながら巖は、状況の整理をするといチカに駆け寄る。

「頼むイチカ！ 弾の、弾の搜索を頼む！ きつと、きつと生きているはずだ!! だから、頼む」

「おじいちゃん、それどういうこと？」

イチカに弾の搜索をお願いする巖、自分の兄の搜索をお願いする祖父の姿に困惑する蘭。そして、そんな巖の姿を見たイチカの何かが切れた。

「巖さん…。歯ア食いしばれえ!!」

「うがつ…!!」

「イチカ君!!」

「一夏さん!」

イチカは、頼み込んでくる巖の顔面を目掛け思いつきり殴る。突然の事態に理解が追いつかない巖、いきなり怒りの表情で巖を殴ったことに驚く楯無と蘭。そんな周りのことを気に留めずイチカは、地面に倒れた巖に近寄ると両手で胸ぐらを掴み、引き寄せる。

「搜索隊を編成しろだど？ 自分がどれだけ都合のいいこと言っているのか理解できているのかア!!」

「何って… 孫を、弾を心配して…」

「それが都合いいって言ってるんだよッ！ 一体何のために救助隊を編成したと思ってるんだ!! アンタが身勝手なことをするから、余計な真似をするからだろ!!」

血気迫る勢いで叫ぶイチカに巖は今までの様な威勢のよさは消し飛び、目だけで人を殺せるなら今のイチカなら可能だろう。それほど

までにイチカの目には殺意が宿っていた。

「アンタの身勝手な行動で、どれだけ周りに迷惑をかけるつもりだ！
勝手に外に出歩いて…、アンタが余計なことしなければなア!!

弾は出撃する事も無かった!! アンタのせいで出撃することになつた弾は… 弾は!!」

「一夏… 弾がどうなったの?」

「こいつを護る為に右腕を失い、敵の自爆から俺達を護る為に一人で…」

「嘘でしょ…」

敵を掴む力が強くなってくイチカ、恐る恐る弾がどうなったのか聞く鈴に、イチカは簡潔ながら弾の身に起きた事を説明した。イチカの言葉の意味を理解した鈴はその場にへたり込む。

「アンタが思っている以上に俺達に余裕はないし、俺達はいつ自分が死ぬか分からない中で命を削りながら戦っているんだよ!! いいかよく聞け!!」

「ウツ…」

「命は何にだって一つだ! 失ったら二度と戻ってくることは無いんだ!!」

イチカは敵を無理やり立たせるとそのまま三歩ほど下がる。

「自分のせいで搜索隊出させておいて、自分の都合で搜索隊を出せだど? そんな自分勝手な大人、修正してやるう!!」

自分の都合しか考えない身勝手な大人に鉄拳制裁を下し、その様子を誰も止める者は居なかった。

「搜索隊は言わずとも出すさ。だがな、生きているあいつが見つからなかったら…。それは、リグ・シャッコーのパイロットが殺されたんじゃない。アンタの軽率な行動があいつを殺したんだ!!」

「おじいちゃんは… 私達よりも、お店の方が大切なの?」

「ち、ちがう……。俺はお前達を……」

「お兄たちが何の為に戦っているのか分かってるの！ 私達を護る為なんだよ！ なのに、周りを危険に巻き込んで、お兄が……！ そんなに、お店が大事ならお店と一緒に勝手に死んじやえばいいんだよ！

この人殺し!!」

「待ってくれ蘭！」

「自分のことしか考えないから、周りが見えないんだ！ こんな自分勝手な人、家族だと思いたくない!! 私の前に出てこないで!!」

「俺は、俺は……！ ウワアアアア!!」

イチカ言葉をよくやく理解した敵はイチカ言葉攻めと蘭の拒絶によって、自分を取り返しのつかない事をしてしまった事に気づくもすでに遅く、自分のやったことに頭を抱え叫ぶことしかできなかった。

43話

弾がM I Aになったという情報は瞬く間に広がり、その事実はI S学園に居た関係者の心に衝撃を残した。その中で一際、その衝撃が大きかった人物が二人いる。

「今から虚さんの所に行くんだよね、お姉ちゃん…」

「そうよ。虚ちゃんにこの事実を伝えないと…」

「でも、M I Aだから…。もしかしたら」

「もしかしたら生きているのかもしれない…。けど、もしそうじゃなかったら？ 『もしも』の時、虚ちゃんが前に進める様にしないといけないのよ」

「お姉ちゃん…」

今も彼の無事を信じて待つ彼女に残酷なことを言うのだと。いままで受けてきた任務のどれよりもつらい内容だと楯無は感じ、虚がいる部屋に向かった。

「虚ちゃんいる？」

「あ、お嬢様。任務から戻ってきたんですね」

「ええ、すこし話があるの」

「そうなんですか？ でしたら、この作りたてのパンを彼に、弾君に上げてからでよろしいでしょうか？」

「それは…」

部屋に入った楯無と簪は、部屋の中で待っていた虚に意を決し、話そうとした時だった。虚がパンが入ったバスケットを取り出し、それを弾に届けると言った虚の顔を見た楯無は、決意が揺らぐ。幸せそうな表情だった。弾がM I Aになっていなければ…。と心の中に思いながら楯無は虚の肩を力強くつかむ。

「お、お嬢様？ そんな急に掴まれたら、せつかく作ったパンを落とすてしまいます…」

「いい虚ちゃん。今から私は残酷なことを言うけど、気をしっかり

持ってちやんと聞いて。これは貴女の為でもあるの」

「ど、どうしたんですか？ そんな怖い顔で」

「実は――」

覚悟を決め、虚に今日起きた事を包み隠さずに全て話した。自分たちのこと、敵のこと、そして弾がM I Aになったことを全て話した時には、手に持っていたバスケットを落とし、膝から崩れ落ち、目には大粒の涙を浮かべ虚の嗚咽が静かに響く。

「そんな…。戻ってくるって信じて、彼の好きなパンを作ったのに…。なのに…。彼は戻ってこないなんて…。！」

「ごめんなさい虚ちゃん…。私達が居ながら彼を助けることが出来なくて……………」

「搜索任務に行くときに、『必ずじいちゃん連れて戻ってくる』って、言ったから、信じて…。たのに…。なんで、なんで」

ただ泣き崩れる虚を見つめる事しかできない自分が、幸せな人たちを一瞬で絶望の淵に追い込む戦争が憎いと思った。それはきつと、イチカがあの際に体験したものと同じであり、彼が戦う決心をした時の気持ちか簪には理解できた。何故なら、自分も同じ気持ちになったからだ。

「あのね、虚さん。慰めにならないかもしれないけど、あの戦場に居たイチカは弾君の最後の言葉を聞いていないって言っていたから。だから、きつと生きていると思う」

「簪お嬢様……………」

「あの時、目の前に起きた出来事で気が動転していたけど、戦場で聞いていた最後の遺言を聞いていないって、きつとマシントラブルか負傷して動きが取れないのか分からないけど、きつと……………」

「そうね…………。まだ、死体が上がった訳じゃないから絶望するには、まだ早いかもしれないわね。でもね、最悪の事態は想定してほしいの」

簪の生存しているかもしれないという一抹の希望を抱いた虚。楯

無も、生存しているかもしれないと言うと同時に最悪の事態は想定してほしい、念を押す。虚は涙を拭き、まっすぐ二人を見つめる。

「私、信じます…。彼が戻ってくると信じて、待ち続けます！」

「そう、なら私達も一緒に待ち続けるわ。今まで支え合ってきたんだから、これからも互いに支え続けましょ」

「私も、お姉ちゃんと一緒に待つから。みんなで待ち続けよう」

「ハイ…！」

二人は虚を優しく抱きしめ、一緒に待ち続けることを誓う中、楯無は心の中で『これ以上、虚ちゃん悲しませない為に必ず戻ってきてね』と彼の生存を願うのだった。

そして、もうひとり大きく運命が変わろうとしていた人物がいた。

「お願いです一夏さん！ 私に戦うための力を下さい!!」

「それは出来ない」

整備室の一角で、イチカと赤毛の少女がそれは、MIAになった五反田 弾の妹である、五反田 蘭が志願兵として戦いたいと部隊の中心的人物であるイチカに抗議しているのだ。そしてこのやり取りは、四日経っても未だ繰り広げられている。

「どうしてですか！ 今は猫の手も借りたい時なんですよね？ I Sの簡易判定でAだったんですよ！ 任せて下さい！ ……って言えるようになるまでは時間がかかりますけど…。それでも、必ず力になって見せますから!!」

「俺だけでは決めることが出来ない。周りの人から許可はもらえたのか？ 話はその許可をもらってからだ」

このやり取りは何回目だろうな…。とイチカは考えながら目の前

のコンソールを弄りながら、新しい機体の設計図を描いていた。シャルロットからベースとなる機体、使うに当たつてのリクエストを聞き入れながら機体設計を書き上げ、おおよそ90%まで完成しており、本日中には開発に取り掛かれる予定である。それと並行して、バンスィの強化プランをデータベース上で予定している装備と組み合わせ、問題ないか確認していた。

「その話も何でも聞きました！ 皆さんに話をして、首を縦に振ってくださいませ…！」

「ならそれが答えだ。俺達は碌に動くことが出来ない新兵のお守をしながら戦えるほど余裕がないんだ。もう、諦めたらどうだ？」

こうなる事を懸念したイチカは、前もって周囲の人に話を通しており、主要で戦っている人たちは何が何でも首を縦に振らないようになっていいる。それは、MIAになった弾の思いを無駄にしない為に、彼が戻ってきたときに誰一人欠ける事なく再会できるようにしたいというイチカなりのせめてのも償いである。

「私は、居なくなつたお兄の代わりに皆を護りたいんです!!」

「これ以上、言わせないでくれ！ 俺達はお前も戦わせるつもりは無い!! ……頼むから…、これ以上俺から大切な人を…失いたくないんだ」

「イチカさん…」

イチカの怒声に一瞬肩を震わせる蘭に、イチカは先ほどの怒声から一変し、どこか悲痛な声で心の底で思っていることを打ち明ける。

「イチカさんの言いたいことは分かります…。でも！ 私は決めたいんです、ガンダムに乗つてお兄の代わりに戦うって！ また時間を改めて来ますから」

「蘭…」

決意の固い蘭にイチカの言葉は届かなかつたようで、その言葉を聞いたイチカはどこか悲しい表情で遠ざかつていく背中を見つめることしか出来なかつた。

「イチカも大変だね。二人の思いが板挟みになっさ」

「シャルロット…、もう部屋から出て大丈夫なのか？」

「三日もあれば心の整理には十分だよ。それで、あの子が来るまでイチカ何をしていたの？」

「お前の新しい機体の機体設計をやっていたんだ。お前が選んだ試作可変MSリ・ガズイを原型を留めないレベルで徹底改造した機体だ」

先ほどのまでのやり取りを陰で見ていたシャルロットは頃合いを見て、イチカの近くに歩み寄る。ここ数日部屋に引きこもっていたことを知っているイチカ大丈夫なのか確認を取るとシャルロットは笑顔で大丈夫だと返す。その笑顔が作りものではないことを見抜いたイチカはシャルロットに完成した機体設計を見せる。

「機体名称ライトニングガンダム。武装は牽制目的の頭部バルカン砲、ビームライフルはノーマルタイプのビームライフルでも狙撃時に十分な命中精度を発揮するが、バレルを変更しサブグリッパ付きのセンサーユニットを追加する事でより狙撃に適したロングバレルタイプに換装可能で、近接武器のビームサーベルだがバックパックにサーベルを収納していたのに対してサイドスカート内側に収納されているから間違えないように」

「う、うん」

「話をつづけるぞ。リ・ガズイの特徴であるバックウエポンシステムに着目し、改造したライトニングバックウエポンシステムだ。バックウエポンシステム自体を支援機・サブライトシステムとして使用でき、戦闘支援や偵察に使用できるよう設計されている。武装として機首にビームガンが内蔵されており、またミサイルランチャーとビームキャノンを状況に応じて換装し、使用してくれ。ライトニングガンダムと合体する事によって、ライトニングガンダムに変形機構を付与することもできる」

ライトニングガンダムの説明を続けるイチカを尻目にシャルロッ

トは『イチカつて作りこんだらやばいタイプ?』と、思っていたよりも完成度の高い機体が出てきて内心焦るシャルロットであった。

「要望通りシールドにパイルバンカーも搭載してある、シャルロットの多彩な武器を扱うことを考慮して、様々な武器を搭載出来る様に拡張性に優れる様にしておいた」

「ここまで凄い機体なら、完成するのに時間がかかるんじゃないの?」
「開発はハロに任せて、プログラミング関連はアプロディアに任せてある。緊急事態でもない限り、早ければ明日、遅くても三日と言った所か……。状況によるとしか言いようがないな」
「普通は半年以上かかるんだけどな」

ちよつと開発までの時間短くない? 完成した機体に欠陥があつて動いている最中に空中分解するとかないよね? とある種の不安を抱いていたシャルロットだが、イチカの近くに白い武装が複数ある事に気が付いた。

「イチカ、その近くにある武器は何なの?」

「ん? これは、バンシイの強化用に作ったアームド・アーマーシリーズだな。取りあえず、マッチングに問題が無いようならここにあるアームド・アーマーを全載せする予定だ」
「えー」

何その超強化? と壁に掛けられているバンシイ・ノルンが使っていたアームド・アーマーDEに尾が付いたものが二つ、背中に付いていたアームド・アーマーXC、最初に対面した時に使っていたアームド・アーマーVNとアームド・アーマーBS、追加でハイパー・ビームジャベリンに標準装備のビームマグナムとどうあがいても過剰な火力であるが状況が状況だけにこの火力も致し方ないのか、と強引に納得するシャルロット。

「まあ、元々ユニコーン用に用意していたものだから兄弟機のバンシイにも問題なく使用できるはずなんだよな」

「え？ それっていつ頃使う予定だったの…」

「キャノンボール・ファスト」

「あれ、妨害ありの競争だけど、あんな過剰な火力積まないからね!!
てか、どっちを使われても僕たちトラウマじゃない?!!」

悲鳴にも似た叫び挙げながら起きえたかもしれない大惨事に身体を震わせるシャルロット。そんな彼女を気に留めず握りこぶしを作りイチカ。

「マッチングに問題ないから、後は実際に搭載してみてどうかだな。
今エリスは暇だし、さっそく呼んで試してみるか」

「大丈夫かなあ、エリス…」

マッチングに問題ない事が分かったイチカは喜ぶ傍らでシャルロットは、エリスがマシンに呑まれるんじゃないか一抹の不安を感じるのであった。

「どうだエリス？」

「軽く動かしただけ、特に問題ないかな」

とあるアリーナでは、アームド・アーマー全載せという暴挙に出たイチカは、早速エリスを呼ぶと事情を話し、了承を得るなりすぐさまバンシイの強化を始めたのだ。

「色とかもバンシイに合わせて変えておいたから見た目も問題ないはずだ」

「サイコフレームが多くなったせいかな？ 少し動かしやすい気がする」

る」

「アームド・アーマー全載せにしたことで、全性能を大きく向上を確認、各システムに問題なし。これなら実戦に出しても問題なさそうだな。もう、戻っていいぞ」

「はい」

アリーナで完成したバンシイの試験運転をしながら、問題ないか確認確認するイチカ。試験項目をすべてクリアし、実践に出しても問題がないと判断したイチカは、エリスを帰投させる。

「お疲れエリス。バンシイの強化は問題なく終了したよ」

「そう？ 所で、今のバンシイって何て呼ぶつもりなの」

「んー、特に考えてなかったが。。。ペルフエクティビリティなんてどうだ？」

『完璧なものになれる素質』ね。。。なんだか、荷が重いなー」

「そうか？ エリスなら大丈夫だよ」

バンシイ・ノルン改めバンシイ・ペルフエクティビリティの試運転は上々な結果だが、その名称にこめられ意味に少し、不安そうな表情をするエリスだが、イチカはそんな彼女の背中を叩き、大丈夫だと鼓舞する。そんな、エリスは壁際に鎮座する一機のガンダムがある事に気が付く。

「ねえ、あそこにある機体って。。。」

「ビギナ・ギナIIだ。もし、機体が何かしらの理由で使えないときの為の予備機だ」

「じゃ、使えるようにはしてあるの？」

「各武装とシステムは問題ない。すぐ使えるぜ」

サムズアップしながら答えるイチカ。

「なら、あそこのハンガーでハロ達がかみ上げてるのは？」

「あれはリ・ガズイを徹底改造して作り上げた機体、ライトニングガンダムだ。射撃よりの万能機で、バックウエポンシステムに着目して

色々設計して作った機体だ。他にも設計図だけなら後二機出来ている」

「ライトニングガンダムが射撃なら、他は接近戦特化と支援機かな？」

「格闘機に関しては、プロセスは固まって機体名も決まっている。ビルドバーニングガンダムだ」

「見た感じ、ゴッドガンダムみたいな徒手空拳を主軸に戦う機体だね」

長年多くのMSを見てきただけのことにはあり、イチカが見せた機体設計図を見ただけで、その機体の性質を理解していた。

「ああ、そうだ。俺は、この戦いが終わったら一人のガンダムファイターとして、師匠と戦いたい。その為だけの機体と言ってもいい」「ガンダムファイトに出場するつもりなの？」

「今まで積み上げてきた修行の成果を確かめたいし、師匠を超えたい……。その為には、目の前の戦いを終わらせないといけない」

「そうだね。後は、ドモンのコピーニューロに勝たないとね」
「例えコピーニューロとしても、師匠は師匠だ。手を抜けないし、コピーニューロに負けるようなら本物の師匠になんか手も足も出ないだろうな」

先を見つめるイチカの横顔は期待に満ちており、そんなイチカの横顔を見たエリスはクスツと笑みを零す。

「作業尽くめなんだし、少しは休憩したら？」

「そうだな。少し、小腹がすいたからなにか食べに行くか」

「あ、そういえば生チョコ作ってあるんだけど…。食べる？」

「疲れた時には甘いものはいって言うし、エリスの物なら何でも歓迎だぜ」

そんな二人は、熱い雰囲気を出しながら整備室を後にする。2人がいなくなった整備室にあるビギナ・ギナIIを見つめる一人の少女がいた事に気が付いていなかった。

「そういえば、マーク達そろそろ戻ってくるのよね？」

「リガ・ミリティアとの交渉はうまくいったんだってな」

「腕に覚えのあるIS操縦者が多く在籍していて、戦力としては申し分ないけど、部隊の人全員女性なんだって」

「この世界でIS操縦者なんて俺以外なかったから、女性だけって言われてもおかしくはないな」

IS学園の中には、生チョコを口に運びながら優雅に紅茶を飲むイチカとエリスの姿があった。話の話題は、交渉に言ったマーク達のモノだった。

「リガ・ミリティアの実働部隊は「シユラク隊」で、使用モビルスーツはガンイージーと黒いVガンダムなんだって」

「シユラク隊でガンイージーとか、あんまいい印象ないな…」

「リーダーはジュンコ・ジエンコで、他には…」

「おっと、幸先が不安になってきたぞ」

同姓同名の人が記録にある同じ機体に乗るとか、悲劇が繰り返される未来が見えると内心思いながら紅茶を啜る。

「シユラク隊はイチカに預けるとか言ってたけど」

「ふあっ!? 俺隊長とか荷が重いつて！ てか、いきなり知らない男が隊長って納得するのかよ」

「まあ、イチカなら大丈夫だって。あっちも、『中々腕の立つ奴だね』って戦闘面における信頼を得るために過去の戦闘記録を見せたら、感心していたって」

「えー…」

いきなり隊長とかきついんですけど…、と内心思いながら生チョコを口に運ぶ。程よい甘さが口の中に溶け、女性だらけの隊の隊長を

やることにエリスはどう思ってたんだろう？　と思いいリスの顔を見るイチカ。

「何、私の顔見つめて？」

「いや、俺が女性だらけの隊の隊長をやることにエリスはどう思ってたんだろう？　って思ってたな……」

「んー、イチカって昔から好意を持たれやすいからねー。まあ、美人だらけの場所において鼻の下を伸ばすような人じゃないのは分かってるつもりだし、逆にあつちがイチカに好意を持ったらそれだけ、イチカが魅力的な人だって証明になるしね。まあ、そうなったら全力で対抗するとけどね」

思ってたよりも涼しい顔をしているな……。これが(将来の)嫁さんの余裕か、とイチカの懸念をまで感じさせない表情には「私がイチカが一番」という自信に満ち溢れていた。

「お、そうか……」

「何、私が嫉妬でもすると思った？」

「したら、したらで可愛いところあるなーと思う反面、新しい仲間とギクシヤクするのはちよつと……ね」

女性は色々デリケートだからな、と以前にエリスと敵対した際に、身をもって経験したイチカ。体を休めながら一息つくイチカ達だが、IS学園に警報が鳴り響く。

「敵襲！」

「場所は市街地よ！　今出れる人は、発進の準備をして!!」

突然の警報に慌ただしくなる中、イチカ達はハッチへ急ぎ移動する。

「今出れるのは「シュヴァルツェ・ハーゼ」のみんなね」

「敵の正確な規模は不明だが、確認できるだけで100はいるぞ」

「より強くなった我がシュヴァルツェ・ハーゼの敵ではない。行くぞ、お前たち!!」

「「ハイツ！」」

各々、機体呼び出し、カタパルトに乗り出す中、エリスはクラリツサの機体が別の者に代わっている事に気が付いた。

「あれ？ クラリツサの機体がフルアーマーガンダムから、ガンダム7号機に変わっている？」

「あの機体もよかったですけど、こちらの方が私の性に合うの變更ました」

「しかもフルアーマーだね」

先日まで使って機体がフルアーマーガンダム（サンダーボルト仕様）を使っていたのだが、より部隊の連携向上を目指し、機体を変え続けた結果この機体に落ち着いたようだ。

「クラリツサ。。。話す暇があったら、さっさと出撃しろ馬鹿者!!」

「被害を抑えるために、悠長に反している暇はない」

「すみません。。。」

さっさと出撃しろ、と叱咤するラウラとイチカを前に、申し訳なさそうにするクラリツサとエリスであった。

出撃前にちよつとした叱咤を受けながらも各々出撃し、敵が現われたポイントに向かって移動していた。

「そういうえば、エリスのバンシイは装備が増えたな」

「ふふーん。イチカが考案して実装した新しいバンシイよ。いいでしょ」

移動中、バンシイの姿が変わっている事に気が付いたラウラにエリスは、腰に手を当てどこか嬉しそうに語る。

「そこまで装備が変われば、機体の性能もおおきく向上しているのだ

シュヴァルツェ・ハーゼの一人がセンサーに反応があり、反応があった場所みるとそこには身の丈ある大きなシールドを持った機体とその後方にはピエロの様な機体が後続にいた。

「アレはジム・ガードカスタムか…」

「アレはどういう機体のですか？」

「見た目通り防御力を重視した機体だ。軍事拠点の防衛、艦隊の護衛によく使われるな」

イチカは目の前の盾持ち機体を軽く説明をする。ジム・ガードカスタムは、ジム・スナイパーカスタムをベースに開発された、防衛任務向けのジムである。その手に持っているガーディアン・シールドは、4種の合金の5層構造に対ビームコーティングを施され、その上前面にバルカン砲を2門備えており、機体が盾に隠れた状態でシールド・バルカンによる攻撃が可能なのだ。三機のジム・ガードカスタムは互いにカバーしあう様に配置され、回り込みながらジムライフルを撃つもその堅牢さとバルカン砲による迎撃で、思っていた以上のもので、シュヴァルツェ・ハーゼは有効打を与えられていなかった。

「隊長！ 敵の防御が固すぎて突破できません!!」

「なら、私のF90Lタイプで突破口を——何をするつもりだエリス!!」

敵の防御を突破するためにF90Lが持っていたロング・ライフルを構えると、割り込むようにバンシイが前に出る。その光景に思わず叫ぶラウラに、エリスはバレルロール描きにバルカン砲を躲しながら接近する。

「突っ込みが足りないのよッ!」

「お前たち、エリスの援護しろ!!」

他の機体がエリスの方を攻撃しないよう注意を惹くシュヴァルツェ・ハーゼ。エリスは、ジム・ガードカスタムの近くまで接近するとスラスターを吹かし、アームド・アーマーVNでガーディアン・シー

ルドを思いつきり殴る。推進力を大幅に強化された一撃は身の丈あるシールドを大きく凹ませ、シールドを蹴りバク転の要領で距離を取ると瞬光式徹甲榴弾を凹んだガーディアン・シールドに撃ちこむと眩い光を放つ。

「邪魔を…するなッ!!」

ガーディアン・シールドを破壊されたジム・ガードカスタムはビーム・サーベル・ユニットで突き刺そうとするがビームジュツテで防ぐと身体を回転させアームド・アーマーDEを衝突させ、のけ反らせる。と、左足による蹴りを数発放ち、ビームマグナムを腰部にマウントするとアームド・アーマーDEをバックパック用シールド接続フレームから取り外すと、そのままアームド・アーマーDEで胸部をシールド突きする。

「エリス、後ろだ!! チィ…、射線上のエリスに当たる!」

「見えているから、こっちで対処するわ!!」

エリスの背後を背後を取ったピエロ様な機体を撃とうとするも射線上のエリスまで巻き込むことを危惧したイチカだが、エリスはは自分で対処すると言い背後を振り向き、アームド・アーマーDEに搭載されているメガキャノンを放つも球に乗ったピエロは機体を後ろ倒し、球で防ぐ。

「攻撃を防いだ?」

「あの球体、ビームコーティングが施されているのか?」

「機体照合… 検索結果に該当有り。サウザンド・カスタムが運用した一騎当千の機体、機体名ラロだ!」

「ラロ… そんな機体知らないわよ! この外観、木星帝国、それともザンスカール?」

「木星帝国だ…! 後ろ!!」

エリスはアームド・アーマーDEのメガキャノンが防がれたことに驚き、ラウラは球体に施されたビームコーティングによるものだと考

える中、イチカはフェニックスのDBから該当する機体を検索する。そして、その特徴的な外見から、開発したのが何処か予想する。それに答えるイチカだが、背後に現れた気配に鞘から剣を抜き、振り向かずに刀身を背後に持つていくと金属がぶつかる音が響く。

「これもサウザンド・カスタム、『サーカス』の機体か!!」

「隊長！ 機体の様子が!!」

「アレは… 変形した？ まるで、ライオンの様だ」

「機体照合… サーカスのキルジャルグ…」

見覚えのない機体に先ほどのラロと同じく、サーカスの機体だと予想する中、クラリツサがキルジャルグの変化に気が付く。二足歩行から四足歩行に代わり、その姿は獅子を沸騰させる。ライオンの鬣に相当する部分に搭載された10本のビームサーベルを収束させフェニックスに突進するとイチカは、刀身にナノマシンを纏わせ迎撃する。

「こいつじゃ抜けないか！」

拮抗した剣を横に流し相手の攻撃を躲すと、キルジャルグは方向転換すると倒壊したビルを足場にイチカを翻弄するように駆け回る。

「ええい！ 俺を翻弄して、生まれた隙を突くとは… 小癩なア！」

「イチカ！ 右から来るぞ!!」

「チイイ!!」

上空から様子を窺っていたラウラが指示を送るが、ビームサーベルを10本も収束させた一撃は、拮抗するのがやつとで防戦を強いられていた。

「うおおおおお！ バーニングファイヤツ!!」

「よせいチカ！ そんな無暗に攻撃しても、エネルギーを無駄に消耗するだけだ!! 今援護を…！」

キルジャルグの攻撃を躲しては、剣やバーニングファイヤで建物を

壊すイチカの姿は、どこか自棄になっているように感じたラウラはロング・ライフルを構える。

「クツ…！ あのような軌道ではライフル弾に予め弾頭の記憶チップに進路を入力していたものが無意味だ！」

「いや、必要ない!!」

イチカの援護をしようとしたラウラはロング・ライフルにライフル弾を装填し、構えるがこのライフル弾の特性である弾の周囲と尾部のバーニア・ペレットを発射後に爆発させることにより、限定された角度内で1回だけ方向転換させることが可能な半誘導式で、ラウラが語った通り、予め弾頭の記憶チップに進路を入力する方式なのだが、崩壊した建物を足場に不規則に動くキルジャルグには効果がない事に焦るが、イチカはそんなラウラに援護の必要性は無いと言い張る。そして、イチカの背後からキルジャルグが襲いかかる。

「悪いがそう動くことは想定通りだ!!」

背後から襲いかかるキルジャルグだが、咄嗟にイチカは後ろに倒れ込む。

「お前は俺を追い詰めたつもりだが、逆に追い詰められたのはお前だっ！」

倒れた事により、真上を通り過ぎていくキルジャルグを見つめながらイチカは白銀と輝く手刀でキルジャルグを貫く。

「俺だって、無暗に攻撃していたわけじゃない。地形を利用するならこの角度しかない」と形を整えただけに過ぎない！」

「防戦から一転して、勝機を掴むとは…。あの状況で無謀のような考えが出来る…。口で言うのは簡単ですが、防戦しつつ、相手の攻撃を読みながら、地形を整える。突拍子のない考えを可能にする行動力が彼の強みなのですね、隊長」

「そうだ。だが、奴はそれと同時に危ない側面がある」

「危ない側面ですか？」

キルジヤルグをその並外れた行動で、撃破する。その光景を見ていたクラリツサは軍人として、人として異常と感じると同時に心の中でその行動力に称賛を送った。その言葉にうなづくラウラだが、そのイチカには危ない側面がある事をクラリツサに語る。

「これは以前、聞いた話だがイチカは人が長い時間かけて、導き出す考えを直感で見極められるのが得意だと言っていた」

「直感で、ですか…」

「だが、それ故に、自分にとって『自分にとって一番大切なモノ』を見つけたのなら、『他』の『全て』を『犠牲』にすることも躊躇しない… そんな危うさだ」

これは、長年イチカ共に過ごしたマーク達がイチカを見てきたうえでの感想だ。他の全てを犠牲にするだろうという考えは間違っていないだろう。何故なら、イチカは過去に今まで歩んできた『織斑一夏』という人生を全て捨てているのだから。自分にとって大切な家族とも言える仲間たちの為に、悲劇を繰り返さないという覚悟の為に『織斑一夏』を捨てる。それは並大抵のことではない。

「私も同じことが出来るかといえば出来るだろう。それに対する抵抗や後悔が無いわけではない。だが、イチカはそんなものは度外視して行動する。危なっかしい奴だとそれがともに叩かーちゆてきた者感想だった」

「危なっかしい…。だからこそ、ここに居る皆はそんな彼を少しでも支えたいと思うのですね。なるほど、保護欲を刺激することが得意なんですか。以前に参考書二次元に関する本で見ました」

「それは違うと思うぞ、クラリツサ」

イチカの持つ危うさを説明するがクラリツサの頓珍漢返しを否定するラウラ。胸部を貫かれたキルジヤルグを除け、起き上がるフェニックス。

「こっちは何とかなったが、エリスの方は…」

「バンシイ！」

キルジャルグを倒し終えたイチカは、エリスの方がどうなったのか気になる。反応が消えていない為、無事なのは分かっているがそれでも気になるイチカ。そんな時、エリスの叫び声が聞こえた。

「隙あり!!」

バンシイの機動力で、バレルロールを描きながら、ハイパー・ビームジャベリンを右手に持ち、ラロの球を切り付ける。ラロは手持ちの上下対照形状のビームライフルを上下に分割させビームサーベルにし、応戦しようとする。

「敵は…倒すっ！」

ラロに急接近するバンシイは、アクティブ状態になったアームド・アーマーVNで掴み、そのまま前進し、倒壊したビルに押し付けるとラロの脚部を踏み碎き、掴んでいたラロを離し、アームド・アーマーVNで挟み砕く。その際、飛び散ったオイルが振り返り血に見えた。

「うわぁ…」

「人が乗っていたら大惨事だな」

「隊長！ 周辺をを散開していた敵機が集まってきました!!」

戦闘に気が付いた周囲を散開していた敵が集まっていることに気が付いたイチカ達、それを聞いたラウラはシユヴァルツェ・ハーゼに指示を出す。

「私とクラリツサで遠距離から相手を撃ち落とす。お前たちは、機動力あしを無くした敵を、叩け！ 決して一人で対応しないで、複数人で対応しろ!!」

「はい!!」

「エリス、俺達も遊撃に当たるぞ！」

「ええ！」

ラウラの指示を受けたシュヴァルツェ・ハーゼが動き出し、イチカ達も加勢する。

「敵の数を減らすわ!」

「そこっ!」

「撃ち落とす!!」

エリスやラウラ、クラリツサがバンシイのアームド・アーマーBSやアームド・アーマーDE、F90のロングライフル、フルアーマーガンダム7号機の背部長距離ビームキャノンとビームライフルによる遠距離からの攻撃を仕掛ける。

「ジオン…! こいつら、一年戦争の機体か!! にしては…性能が良すぎるなっ!!」

「この機体…。ただのザクじゃない! これはRFシリーズよ!!」

「RF…。リファインか!!」

「外見は一年戦争時のジオンMSだけど中身はF90の世代の技術で出来ているわ!!」

遠距離で戦うエリス達が戦いやすい様に射線の邪魔にならないように遊撃に当たるイチカは、両手に持つ剣で、切り裂きながら感じた違和感を口に出す。それに対し、視認した機体が一年戦争時のよりも高性能な理由を答える。

「クソツ… 数が多い! こいつら、IS学園に向かおうとしている!!」

「クツ…、ここで食い止めるぞ!」

「隊長! 残弾がっ!!」

「武器が使えないなら、敵の武器を奪ってでも戦え!」

戦いは泥沼の戦いへと直面していた。

「ねえ、アプロディアさん！ ライトニングガンダムは出れないの!!」
『機体の完成度は72%、合体・分離機構が完成していません』

「このままじゃ、イチカ達が危険だよ！ …… あれは」

整備室では、シャルロットが前線に出る為、ライトニングガンダムを使用しようとするも、機体はまだ完成しておらず合体・分離機構や腕部や脚部など一部の装甲が付いておらず、フレームが露出していた。

「確か… M I Aになったイチカの親友の弾の妹」

「この機体使えるんですよね！」

「待って！ その機体を使って何をするつも！」

「イチカさん達を助けるんですよ！」

赤毛の少女、蘭がハンガーに掛けられたビギナ・ギナIIに向かって走っていくのを見つけたシャルロットは声をかける。そして、蘭は自分が何をしに来たのか答えるとビギナ・ギナIIを装着する。

「救援だんて… 動かしたことはあるの？ 武器の特性は把握しているの！」

「ぶっつけ本番でやって見せます!!」

「そんな、無茶だよ!!」

「ちゃんと動く… ああ?!」

練習も無しに、戦場に出る蘭。初めて実機を動かす蘭は、戦火の中心に向かって飛び出すが、螺旋を描き、危なっかしい挙動を取りながら飛行していく。

「アプロディアさん、ライトニングガンダムは戦えるの！」

『戦闘自体は問題ありませんが、機体スペックは本来の70%程になります』

「飛んで戦えるなら十分だよ」

このまま行けば、蘭は碌に自分を護ることが出来ずに死んでしまう事を危惧したシャルロットは未完成のライトニングガンダムに乗り、蘭を連れ戻すために出撃するのだった。

「ああ?!」

「大丈夫か!」

「シールドとライフルがやられました!!」

「なら、こいつを使え!」

シユヴァルツェ・ハーゼの一人に攻撃が命中したの見たイチカは安否を確認し、RFザクから奪ったビームバズーカを渡す。

「何機の敵が攻め込んできているんだ!!」

「恐らく、隊長機からの命令がある限り攻めてくるぞ!」

「隊長機つたつて。。。なんだ、IS学園の方から何かが来る?」

敵の構成が緩まず、終わりが見えない戦いで、疲労が積もり、集中力が欠けてく中、各々の機体に確実にダメージ蓄積されていく。そんな、中IS学園から二機の機体がこつちに向かつて来ている事に気が付く。

「ライトニングとビギナ・ギナIIだと。。。ライトニングはシャルロットだとして、ビギナ・ギナIIには誰が乗っている。。。!」

「これが戦場。。。!」

「その声。。。蘭?!」

ビギナ・ギナIIから聞こえた声に驚くイチカ。

「なんでこんなところに。。。!」

「皆が危ないから。。。助けに!」

「だったら残っている他の連中に頼んだらういいだろう!」

「ごめんイチカ! 戦場に出る前に連れ戻そうとしたんだけど、出来

なかった!？」

予想外の援軍に動揺するイチカ。RFザクやグフがイチカを、そしてエリス達を抜けて眼前の障害であるシャルロット達を排除しようとした。

「僕はその時、誓ったんだ…。」

RFドムのビームバズーカを躲し、狙いを定める。

「あの頃の弱い僕とは… サヨナラをしたんだっ!!」

ライトニングガンダムの一撃は的確にコックピットを撃ち抜いていた。

「す… すごい…。」

「ぼーっとしていないで動いて! 撃ち落とされるよ!!」

「う、動かないと…。 ああ!？」

目の前で戦うシャルロットの姿に釘付けになっていた蘭だが、シャルロットの声で我に帰るが、目前まで迫っていたRFザクがビームアックスを振り下ろそうとしていた。

「キヤアアアア!？」

「蘭!？」

死ぬ、そう思った蘭は咄嗟にビームシールドで防ぐと、無我夢中でショートランサーでRFザクを突き刺す。

「やっ、やったの…。これで私も…!!」

「一機倒したからって、気を抜くな! 死にたいのか!!」

「い、イチカさん!」

初の実戦で我武者羅で無我夢中で倒したとはいえ、倒したという事実に歓喜する蘭。だが、そんな隙だらけの機体を見流すほど敵は優しくなく、側面から回り込んだRFゲルググがビームサーブルを振り下

ろすよりも早く、バーニングクロスで叩き落とすイチカは、蘭に注意を呼びかける。

「くそっ、こんなんじや弾に顔向けできないな」

「でも、私敵を倒せてんですよ！」

「マグレで倒して、天狗になるな！　そうやって、調子に乗っていると…死ぬぞ」

刀身のナノマシンを巨大化させ、敵を一網打尽にするイチカ。RFシリーズと戦っている中、IS学園とは別方向から服う数の機体が隊列を組んで接近してくるのを確認した。その中には見知った機体があった。

「あれは…友軍？」

「ああ、マーク達が帰ってきたのよ！」

『こちら、シユラク隊援護するよ！』

ハルファスを筆頭にグリーン系の機体が10数機、援軍として来ていた。グリーン系の機体、ガンイーザーがRFシリーズの迎撃に当たり始めた。

「助かったよ。マーク兄、この数を相手にしようにも、一般人が戦闘に紛れ込むとは予想外の事態が起こって…」

「それは苦勞したな…む、来るぞ！」

「右は頼んだ！」

「左は任せるぞ！」

援軍のハルファスと背中合わせになりながら、軽く状況を話すと左右から攻めてきた敵を、ビームライフル、バーニングフィンガー（遠）で落としていく。

「質よりも量で攻めてきたか…」

「そういえば、フロスト兄弟は？」

「別方向にいる敵を担当してもらっている」

「そうか…む？」

友軍の状況確認している最中、フロスト兄弟の反応が無いとに気が付いたイチカだが、マークから別行動中だと知らされたイチカ、ある方向に居るガンイージーが押されていることに気が付く。

「このっ…！」

「流石にこの数はきついね…。」

「あの人たちが同盟を結びたがる訳だよ。敵の数も質も、あっちとは段違いだからね！」

「ペギー！ 右!!」

「クツ…！」

二機のガンイージーが戦闘する中、なぜ自分達と同盟を結びたくなつたのか理解した彼女達だが、右に回り込んだRFグフのヒート・ロッドがガンイージーのビームライフルに纏まりつくと溶断し、咄嗟に下がるガンイージーにヒート・ロッドの襲う。

「やらせはしない!!」

だが、周りの状況を確認していたイチカは、フェニックスの翼を羽ばたかせ、一気に距離を縮めると、バーニングクロスでヒート・ロッドを操る右腕に絡みつかせ軌道を変える。

「大丈夫か！」

「はい… なんとか」

「そうか、なら問題ない!! 少し離れている!!」

安否を確認したイチカは、空いた手でバーニングクロスを掴みそのまま自身を中心に、回転する。

「どりゃああああ!!」

ジャイアンシングを繰り出し、RFグフを倒壊した建物に投げつける。

「あ、ありがとう…。」

「礼なら後にしてくれ。　　どんだけの敵が攻め込んできているんだ…。」

「数えるのが億劫になる位倒したわよっ！」

「文句の一つや二つ言いたくなる数だ…。。グッ…!!」

余りの敵の数に珍しく弱音を吐くイチカ。そんなイチカにRFザクが散弾式のバズーカを受ける。

「散弾ではなあー！」

散弾の直撃を受けたフェニックスだが、装甲の至る所が凹み、ツインアイに罅が入っていた。だが、そんなことに気にせずバーニングクロスをRFザクの胴体に巻き付けるとそのまま引き寄せ、白銀と輝く右手で頭部を砕く。

「大丈夫イチカ…。」

「この程度、ナノマシンですぐ修復する。それに…。」

直撃を受け、心配したエリスがイチカに駆け寄るが、大丈夫だと手を伸ばし待ったをかける。自分の被弾よりもイチカは気になるモノがあった。

「なんだ、この純粋な悪意と殺意…。」

「見て遠方に、いままでの機体とは、別の機体が…！」

「なんだいありやー！」

「何だいあのゲテモノ機体は…。」

薄いグリーン系の連邦のジム系列ともジオン系列の機体とも違う。薄いグリーン系なら先ほど戦った木製系の機体が一機殺意をばら撒きながら近づいていた。

「先手必勝ってねー！」

一機のガンイーザーがビームライフルを放つがビームライフルを放つが、本機よりもさらに二回り巨大な左腕によって弾かれる。

「あの巨大な腕……ビームを弾いた！」

「Iフィールドか！」

「此処が楽しいゲームの会場かい！」

「何っ！」

薄いグリーン機の機体から突然発せられた声から女性が乗っていることが分かった。

「私のガラハドで遊んであげる坊や!! アハッ！」

「何が楽しい！」

「ゲームだよ、ゲーム。人殺しっていう楽しいゲームを私達はやってるんだ！」

「人殺しが楽しいだっ!?」

「お前たちだっって人を殺すのが楽しいから戦ってるんだろ!!」

「ん、なわけあるかああああ!!!」

持っていた剣を投擲し、ビームサーベルで斬りかかるも持っていたチェーンソー・ガンで斬り払われる。

「次はこっちの番さ!!」

「あいつ、味方を掴んで……振り回して……！」

「各機散開……ッ！」

ガラハドは周りに居たRFドムをその巨大な左腕で掴むと勢いよく振り回すと、イチカ達目掛け投げつける。それを見たマークは各機散開するよう指示を出す。

「奴め……。味方を一つの質量弾として投げてきやがった！」

「しかも後続の機体内部には火薬を仕込んでいたのだろうな。中々の爆発力だ」

「次が来るぞ!!」

「チィィ！」

ガラハドは味方を質量弾として投げしてきた。咄嗟に避ける一同だが、次の質量弾がガンイージに迫るとビームライフルで撃ち落とす

も爆炎が視界をふさぐ。そして、その爆炎の中からガラハドの巨大な腕がガンイージーを掴む。

「アハハハハハッ!! 地獄のメリーゴーランドに一名ご案内つてね!!」

「皆、避ける!!」

「第二シユラク隊がつ」

ガラハドはガンイージー掴むと建物や味方であるはずのRFシリーズにぶつけながら高速で振り回す。

「こいつは『腕』だ。だからこういうこういう使い方も出来るんだよ!!」

「こ、のお...! そいつを離しな」

「できるものなら、やってみな!!」

リーダー機であるガンイージーがビームライフルを構えるが第二シユラク隊が乗ったボロボロのガンイージーを盾にする。

「クツ... 外道が!」

「だが、あの遠心力で振り回され続けられれば、もう...」

「さっそくシユラク隊の一人がやられたぞ!!」

「そんな、死んだんですか...」

力なくぶら下がるガンイージーから赤黒い液体が零れ落ちていた。その光景に足を止め、恐怖する蘭。

「あーあ、もう壊れちまったか...」

「蘭、足を止めるな! 動け!!」

「じゃ、次の地獄のメリーゴーランドは——」

「あっ!?!」

「そこの赤いのだ!!」

最早動くことの無いガンイージーをイチカ達の前に放り投げると次の標的を定める。それは恐怖で動きが止まったビギナ・ギナIIだっ

た。

「ゴメン、お兄…私…」

「間に合ええええ!!」

目前まで迫った腕に躲せないと思った蘭は自分達を護る為に居なくなつた兄を思いながら目を閉じるが衝撃波はいつまで経つても来なかった。

「何が…イチカさん！」

「何とか…間に合った…」

蘭の目に入ったのは自分の為に、盾になつたフェニックスの姿があつた。

「俺は…約束したんだ。アイツが戻ってくるまでお前たちを誰一人欠けさせないって…。だから…」

「イチカさん…」

「感動のセリフは…地獄で再開してからにしな！」

「ぬわああああああ!!!」

蘭の代わりにガラハドの左腕に拘束されたフェニックスを先程のガンイージーの様に高速で振り回す。

「待ってな、今すぐ援護を！」

「よしな、マヘリア！ 下手をしたらあの坊やに当たるよ!!」

「だったら、どうしたらいいの!!」

「私達に彼を助ける事は出来ないの!?!」

ガラハドの地獄のメリーゴーランドを喰らい、身体が押し潰されていくような感覚と意識が遠ざかっていくイチカ。

「アンタら纏めて潰して、このゲーム私の勝利さ！」

「死んだら…みんなが…」

薄れゆく意識の中、聞こえた言葉にイチカはそれだけは嫌だ、と力

を振り絞り自信を拘束しているガラハドの腕を掴む。

「何、まだ意識が…」

「こんなところで… 死んで た ま る かあ!!」

「なに、あああああああつあああ!」

フェニックスの炎の翼を展開し、膨大な推進力を使い逆に振り回すフェニックス。そのまま、近くの建物にぶつけると地面に着地する。

「イチカ、大丈夫!」

「大丈夫…。うっ!」

ふらつきながらも立ち上がるうとするフェニックスを支えるバンシイ。エリスは心配そうな表情で声をかけるとイチカは大丈夫だと答えるが、込み上げてくるモノを必死にこらえる。

「この私が、ここまで…!」

「あいつ、まだ! うわっ!」

「イチカ!」

まだ倒し切れていないガラハドは逆恨みともいえる憎しみの籠った声を出し、拘束したフェニックスを引き戻す。

「このっ…! 相打ち覚悟か!!」

「お前も道連れにしてやるよ!」

チエンソー・ガンに小型のビーム刃が無数に発生し、高速で回転する様子を見て、相打ち覚悟だと悟ったイチカはビームサーベルを取り出す。その時、フェニックスのセンサーに反応があった。

「そのままじっとしている!」

「何? 誰だツ…」

「命がけの一発勝負と行こうか!!」

突然の通信に驚く中、ガラハドとの距離が縮んでいく。ビーム刃を形成して構えようとした時、一つの人影が間に入る。

「うおおおおお！」

「何、ワイヤーを…！」

「その機体…」

ガラハドのワイヤーをビーム刃で切り裂いた機体は、イチカ達が良く知っているモノで、最後にM I Aになった彼が乗っていたその機体は――

「クロスボーン！ 生きていたんだな、弾!!」

「ああ、お前たちが心配だから地獄から舞い戻ってきたぜ」

右肩から下や胸部など一部がX1のパーツとは別の同型機のモノと思われるもの代わり、肩部に関して黒ではなく、青くなっており、何処か継ぎはぎと言う印象を持つ。

「馬鹿ヤロウ…！ 人を心配させて、カッコつけるな！」

「イテッ！」

立ち上がったフェニックスはあの絶望的な状況からの生存に感極まりながらX1を小突くと痛がる弾。

「イテテ…。そういうのはよしてくれ…。生き返ったばかりなんだからさ」

「それは…。どういう…。」

「今は、目の前の奴は俺が倒す！」

「貴様、よくもジョマヲオオ!!」

フェニックスとの戦いを邪魔されたことに激昂するガラハドはチェンソー・ガンかビームをマシンガンの様に放つが、X1は右腕を前に突き出す。

「Iフィールドハンドオ！」

「こいつ、Iフィールドが使えるのか！」

「うおおおおお！」

ガラハドのビームをIフィールドハンドで無力化しながら、距離を

詰めるとバルカン砲で右手を撃ち抜くと、チェンソー・ガンを落とす。

「投降しろ。命までは取りはしない！」

「舐めやがって…！」

弾はガラハドの搭乗者に投降するように呼びかけるが、その呼びかけを無視する。

「負けなんか認めない！ 自爆して諸共吹き飛ばしてやる!! そうすれば私は負けにならない!!」

「させるかあ!!」

まるで子供の様な事を言いながら自爆をしようとするガラハドにビームザンバーで唐竹切りする。

「アツガ…」

「悪いが生き返って早々死ぬのはごめんなんぞな。悪いが落とさせてもらう」

唐竹切りされたガラハドはそのまま小さく爆発し、弾は空を見上げる。

「生き返って早々悪いが少し手を貸してくれ。人手が足りない」

「ああ、問題ない」

こうして、イチカは残存勢力の掃討戦に取り掛かった。

掃討作戦が終わり、IS学園に戻ったイチカ達の視線は目の前のX1に注がれていた。

「そんなに見つめられても困るんだがな…」
「お兄…！」

XIを解除し、姿を現したのはMIAになった弾その人であった。弾の姿を見た蘭は弾の胸にとびかかる。

「蘭…。何で戦場に…」

「お兄がいなくなつて…、お兄の代わりに戦おうとして…」

「馬鹿ヤロウ…。戦争は遊びじゃない… お前が思っているよりも危険なんだ。もう、あんな無茶はしないでくれ」

「うん…。うん」

弾が後半戦闘に参加している最中、思わぬ人物の声が聞こえ、戻ってきたらなぜそこに居たのか聞こうと思つていたので。その答えに、何処か困つたような表情をしながら、真剣な声で来れ胃所危険な真似はしないでくれと説く弾。

「弾、俺達はお前がいなくなつた四日間何があつたのか説明してくれないか？ その右腕も含めてな」

「そうだ、お兄その右腕…」

イチカは弾に何があつたのか説明を求め、その視線は彼の機械の腕に向けられていた。

「ああ、まずはあの爆発からの生還からだな。死を覚悟した俺だが、死にきれなくてな。咄嗟に、バルカンやらビームガンやらをしこたま撃ちこんだら命中してな、拘束が外れた隙に左腕のビームシールドを発生させて爆発から身を護つたんだ」

「咄嗟の行動が生存に繋がつたのか」

生きることを諦められなかつた弾の精一杯の足掻きが生存への道を開いたのだと感じたイチカ。弾はその後について話していく。

「それでも、出血多量で意識を手放した俺が気づいたのは何処かの施設だった。そこには、金髪と茶髪の二人の女性がいた。アイツらは自分のことを『亡霊』^{フアントム}と名乗つていたな」

「『亡霊』ね……。聞き覚えは無いわね」

「アイツらは俺の腕を確かエピテーゼ手術で取り戻し、ボロボロのクロスボーンを使える様に改修するって言っていたな。そこで、俺の意識は一回途切れた」

「さつき見た限り、同型機のX3のパーツで回収したんだらうな。似たような機体を見た事がある」

弾の腕が、機械化している理由が分かったイチカ達。そして、マークは嘗て鋼鉄の7人作戦に参加した一人の少年が急ごしらえで使った機体を思い出した。

「そして、もう一度気が付いた時にはあの二人は居なくなっていた。ハンガーに掛けられていたX1に乗って、皆に合流しようかと急いできたってわけだ」

「そうか。みんなを心配させたんだちゃんと顔を出してやれ」

「ああ、もちろんだ」

「心配させるな！　つと殴られても受け止めるよ？」

「お、おう……」

事情を聞いたイチカは、皆を安心させてやれと言い、元から弾もそのつもりで様で走ってその場から去っていった。

「正式な例はまだだったな。先の戦い、此方の被害を最小限に留めることが出来た。感謝する」

「気にかけることは無いさ。困ったときはお互いさまだらう？」

「ああ、そういつてもらえると助かる」

そして、イチカは代表として協力してくれたシユラク隊に礼を言う。

「おっと、紹介がだったね。私はジュンコ・ジエンコ、よろしくね坊や」

「ヘレン・ジャクソンよ」

「マヘリア・メリル。マヘリアで構わないよ」

「ケイト・ブツシュ。よろしくね」

「私はペギー・リー。 さつきは助けてくれてありがとうね」

「ゴニー・フランシス。これから、よろしく」

「ユカ・マイラス。軍上がりだから、腕には自信があるよ」

「フランチェスカ・オハラ。これからよろしく頼むよ！」

「ミリエラ・カタンだ。私達の隊長になるフェニックスの搭乗者は誰
だい？」

シユラク隊の面々が軽く自己紹介していく中、イチカは『生まれ変わり？ まんまそつくりと言うか若い』と思うと同時にいい様もない不安を感じた。

「フェニックスの搭乗者は俺だ。お前たちシユラク隊を預かることになったイチカ・ギルオードだ」

「へえ、アンタがああの機体のパイロットかい。見た目によらずいい腕をしてるね」

「それなりに修羅場を潜ってきたんでね。これから一緒に戦う仲間であり、家族だ。困った事があつたら俺達に声をかけてくれ」

MIAになった弾、新しい仲間のシユラク隊の面々と共に今後激化していく戦いに挑むのであった。